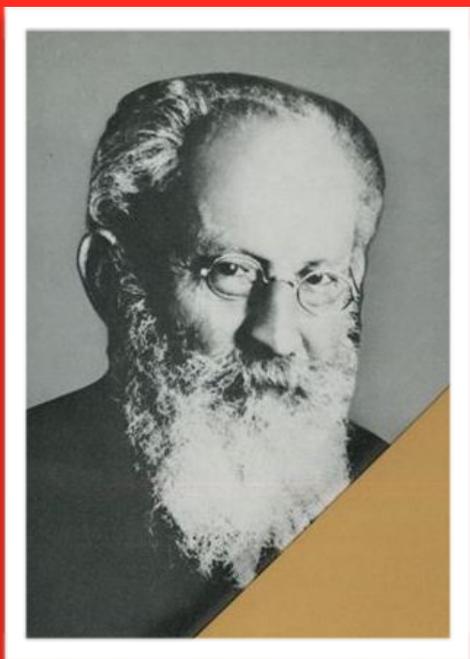


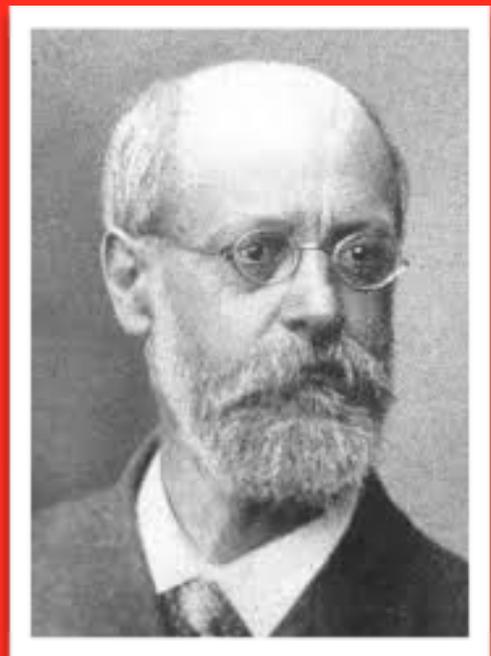
マルクス主義の普及史

—ドイツ編—

2019.11 南雲



ベルンシュタイン



カウツキー



ローザ・ルクセンブルク

SPD

マルクス主義理解の再検証のために

〈A〉ドイツ

1) エンゲルス問題	1
2) 1860～70年代	2
3) 1880年代	6
4) エルフルト党大会	10
5) カウツキーによるエルフルト綱領解説	14
6) 修正主義論争（その1）	28
7) エンゲルス晩年のドイツ革命構想	
i) エンゲルスのビスマルク帝国論	33
ii) 農民問題について	36
iii) 戦術について	39
8) SPDのマルクス主義者たち	47
9) 修正主義論争（その2）――ベルンシュタイン論争	
i) イギリス時代のベルンシュタイン	61
①イギリスでの生活そのもの	
――「自由と民主主義」、イギリス文化、「大衆社会化」	61
②フェビアン協会との関係	63
③ラサール著作集の編集	64
④ランゲの研究	64
⑤メンデルゾンとの親交	65
⑥ゲヴァーニッツおよびヴォルフの著書に対する批判	65
⑦『資本論』第3巻の出版	66
⑧17世紀のイギリス革命史研究	67
ii) ベルンシュタインの連続論文	70
iii) パルヴスによる批判	77
iv) シュツットガルト党大会	82
v) ベルンシュタイン『諸前提』	89
《第1章について》	89

《第2章について》	92
《第3章について》	94
《第4章について》	97
《終章について》	105
vi) ローザによる批判——『社会改良か革命か?』	106
vii) 『社会改良か革命か?』の特徴——ローザの階級意識論	124
viii) カウツキーによる批判	129
《第1章について》	131
《第2章の(A)について》	132
《第2章の(B)について》	134
《第2章の(C)～(E)について》	135
《第2章の(F)について》	138
《第2章の(G)について》	140
《第2章の(H)について》	142
《第2章の(I)について》	144
《第3章について》	144
《小括》	149
ix) ハノーファー党大会	152
10) ベルンシュタインの帰国	157
i) 1900年	157
ii) ベルンシュタインの講演	158
(a) エンゲルスからの引用——剰余価値論について	159
(b) カントと社会主義	161
【補論】 久松俊一のベルンシュタイン論	162
(c) ユートピア社会主義とマルクス主義	165
(d) 科学と社会主義	167
【補論】	175
iii) パルヴスの論文	176
iv) リューベック党大会	180
11) 修正主義論争の決着	

i) ミュンヘン党大会	182
ii) ドレスデン党大会	183
12) その後のSPDとカウツキー	189
i) 集権的官僚制の確立	189
ii) マッセンスト論争 (その1)	191
iii) マッセンスト論争 (その2)	195
iv) SPDの右傾化	200
v) カウツキー『権力への道』	207
vi) 「中央派」の出現	220
vii) SPDの体制党化	238
13) SPDはいかなる意味でマルクス主義政党だったのか	
i) マルクス主義の受容	260
ii) 理論と実践	264
iii) カウツキーとローザ	268
14) おわりに	273

《参考文献》

- カーヴァー＝テレル 『マルクスとエンゲルスの知的関係』 世界書院 1995/11
メーリング 『ドイツ社会民主主義史』 ミネルヴァ書房 1976
亀嶋庸一 『ベルンシュタイン』 みすず書房 1995/2
カウツキー 『カール・マルクスの経済学説』 丘書房 1999/3
保住敏彦 『社会民主主義の源流』 世界書院 1992/7
マティアス 『なぜヒトラーを阻止できなかったか』 岩波現代選書 1984/10
山本佐門 『ドイツ社会民主党日常活動史』 北海道大学図書刊行会 1995/2
山本佐門 『ドイツ社会民主党とカウツキー』 北海道大学出版 1981/5
安世舟 『ドイツ社会民主党史序説』 御茶の水書房 1990/11
アーベントロート 『ドイツ社会民主党小史』 ミネルヴァ書房 1969
スティーenson 『カール・カウツキー 1854-1938』 法政大学出版局 1990/2
相田慎一 『カウツキー研究』 昭和堂 1993
山口和男 『ドイツ社会思想史研究』 ミネルヴァ書房 1974
西川長夫 『フランスの近代とボナパルティズム』 岩波書店 1984/1
入江節次郎／星野中編著 『帝国主義研究Ⅱ』 御茶の水書房 1977
西川正雄 『第一次世界大戦と社会主義者たち』 岩波書店 2013/10
西川正雄 「ドイツ第2帝政における社会民主党」 日本政治学会 『年報政治学1966 西欧世界と社会主義』
ゼーマン／シャルラウ 『革命の商人』 風媒社 1971
シュタインベルク 『社会主義とドイツ社会民主党』 御茶の水書房 1983/10
田中良明 『パルヴスと先進国革命』 梓出版社 1989/4
ネトル 『ローザ・ルクセンブルク』 河出書房新社 1974
バロン 『プレハーノフ』 恒文社 1978
ピーター・ゲイ 『ベルンシュタイン 民主的社会主義のディレンマ』 木鐸社 1980
佐々木力 『科学革命の歴史構造』 岩波書店 1985 (講談社学術文庫 1995)
市野川容孝 『社会』 岩波書店 2006
久松俊一 「ベルンシュタイン社会経済思想の生成」 京大経済学会 『経済論叢』 第99巻第5号 1967
久松俊一 「ベルンシュタインの社会観」 京大経済学会 『経済論叢』 第100巻第1号 1967
ホブズボーム 「マルクス主義の普及」 『思想』 611号
針谷寛 「アントン・パンネクックとディーツゲン哲学」 『一橋論叢』 第91巻第5号

〈A〉 ドイツ

1) エンゲルス問題

前の手紙で「マルクス主義者」の中にレーニンが含まれるか、という問題について述べた。実は、より大きな問題がある。すなわち「マルクス主義者」の中にエンゲルスが含まれるのか、という問題である。『哲学ノート』には、次のような記述もある。

〈一つのを二つに分け、この一つのもの矛盾した二つの部分を認識すること（略）は、弁証法の核心（「本質」の一つ、唯一の根本的な特性あるいは特徴ではないまでも、根本的な特徴あるいは特徴の一つ）である。（略）

弁証法の内容のこの側面の正しさは、科学の歴史によって検証されなければならない。弁証法のこの側面には、通常（例えばプレハーノフの場合）十分な注意がはられていない：対立物の同一は実例の総和と解されて〔「例えば、種子」、「例えば、原始共産主義」。エンゲルスにあっても同じである。しかしこれは「通俗化のため」である…〕、認識の法則（および客観的世界の法則）とは解されていない。

数学では、+と-。微分と積分

力学では、作用と反作用。

物理学では、陽電気と陰電気。

化学では、原子の結合と解離。

社会科学では、階級闘争。〉

つまりエンゲルスは、弁証法を「通俗化」した、ないし「通俗的」に説明した、とレーニンは述べているのである（その限りにおいて、エンゲルス≒プレハーノフという把握）。ここでレーニンのこの見解の当否、さらには、いわゆるマルクスとエンゲルスの異同問題について述べることはできない。しかし、一つの参考として、カーヴァー『マルクスとエンゲルスの知的関係』の指摘を紹介しておく。

同書は、マルクスのエンゲルスの解説を批判したものであるが、カーヴァーはエンゲルスの解説の基点を、1859年の『経済学批判』書評（MEW、Bd.13）としている。カーヴァーによれば〈エンゲルスはそのとき初めて唯物史観という言葉を用いた〉。エンゲルスは「『経済学批判』序文」を唯物史観の「綱要」とし、その「実践的帰結」を次のように述べている。

〈我々の唯物論的テーゼを一層追求してそれを現代に適用すれば、我々の前には直ちに、一つの巨大な革命への、あらゆる時代で最も巨大な革命への展望が開かれる〉（書評）

エンゲルスは〈人間の意識がかれらの存在を規定するのではなく、かれらの社会的存在が彼らの意識を規定する〉（『ドイツイデオロギー』では、「存在」ではなく「生活」）という一文を引用し、「唯物論的見方」をまず強調した。しかし、「物質的生活の生産様式」を「物質的生活諸条件」に置き換え、さらに「物質的諸条件」に置き換えている。それは、「物質」と「意識」の二分法へと進む（正確には存在から独立した意識が仮定された時代への逆行）であろう。

次いでエンゲルスは、方法を強調した。〈ヘーゲル研究をつうじてマルクスの著作を研究すること

をエンゲルスはこの書評ではじめて樹立したのである〉（カーヴァー）。エンゲルスはヘーゲルを「歴史のうちに発展を、内的連関を示そうとした最初の人」とし、次のように述べている。

〈マルクスは、ヘーゲルの論理学から、この領域におけるヘーゲルの真の諸発見を含む確信を取り出し、弁証法的方法からその観念論的外皮を剥ぎ取って、それを思想[思惟]展開の唯一の正しい形式となりうるような簡明な形につくりあげるといふ仕事を引き受けることのできた唯一の人であったし、今もそうである〉（書評）。

確かにマルクスは、〈編纂の方法では、…ヘーゲルの論理学にもう一度目を通したことが大いに役に立った。もし、もう一度こういう仕事をやるときが来たら、ヘーゲルが発見はしたが同時に神秘化してしまった方法における合理的なものを、印刷ボーゲンの二枚か三枚で普通の人間の頭にかかるようにしたいものだ〉（1858年1月14日付、エンゲルスへの手紙）と述べたが、実現しなかった。マルクスは、〈資本主義社会についての厳密な著作の実質的内容で着実に仕事を進めることに、はるかに関心があったのである〉（カーヴァー）

ちなみにカーヴァーは「『資本論』第2版の後書き」について次のように説明している（少し変だが）。

〈マルクスは、自分の弁証法について説明したとき、「現存する事物の状態」すなわち資本主義社会---エンゲルスの「すべて」よりかなり限定された研究対象---の「肯定的なもの」と「否定」と「不可避的な崩壊」を、弁証法は識別すると注記した〉。

後にエンゲルスは、『反デューリング論』『空想より科学へ』『フォイエルバッハ論』を著した。カーヴァーほど断定しなくとも、それらが、哲学を「構成部分」とするマルクス主義理解、社会主義の「自然史的必然性」の学説として受け取られたということは、否定しえないであろう。エンゲルスは晩年には、経済決定論的理解を批判し、上部構造の「反作用」を強調したが、それが今度はベルンシュタイン的見解をもたらすであろう。

2) 1860～70年代

ラサールは、ブレスラウ・ベルリン大学で法律と哲学を学び、ヘーゲル哲学の影響を受けた。3月革命に参加し、マルクスと知り合う。その後、「賃金鉄則」（賃金は最低限まで引き下げられるという法則）を唱え、国家を通じての社会主義を目指す（ビスマルクと密談もした）。また、小ドイツ主義を支持した。

1863年5月23日、ラサールはライプツィヒにおいて、全ドイツ労働者協会（ADAV）を創立する。それはラサールを頂点とする権威主義的・中央集権的組織であった。ラサールが決闘に斃れた後は、シュヴァイツァー（1833-1875）が継ぐ。

W・リープクネヒトは、大学で神学・哲学・文献学を学び、3月革命に参加してロンドンに亡命、マルクス・エンゲルスの指導下に入る（どのような学習をしたかは不明）。帰国後ADAVに参加していたが、プロイセンから追放され、ADAVに参加しなかった労働者協会によって創立（1863年6月7日）されたドイツ労働者協会連盟（VDAV）のベーベルをオルグする。

ベーベルはろくろ工で、ラサールの著作を通じて社会主義を勉強中であった。1868年9月、ベーベ

ルはVDAV大会に第1インター綱領の採用を提案し、可決された。1869年8月、ベーベルとリープクネヒトは、ブラッケ（1842-1880）ADAV内の反シュヴァイツァー勢力とともに、社会民主労働者党（SDAP）を結成する（いわゆるアイゼナッハ派）。

その綱領第1条は、目標として「自由な人民国家の樹立」掲げた。第2条第3項は〈労働者の資本家に対する経済的な従属は、あらゆる形態の隷属の根底をなしている〉という第1インター規約に則る一文がある一方、〈すべての労働収益をそれぞれの労働者のものにする〉というラサール主義的フレーズもある。ベーベルらによれば、「自由な人民国家」とは民主主義国家のことであり、機関誌名も『フォルクスシュタート（人民国家）』であった。SDAPは、実践綱領においてはADAVと大差なかったが、組織的には民主主義的地方分権的であり、かつ反プロイセンを特徴としている。

プロイセンによるドイツ統一によって、親プロイセンと反プロイセンという争点は解消した。1874年6月、プロイセンで両派が禁止されたが、これは、プロイセンを基盤とするADAVにとって打撃がより大きかった。ADAVの側から接近が始まり、1875年5月、ゴータにおいて両派が合同し、ドイツ社会主義労働者党（SAPD）が結成される。

マルクス、エンゲルスが綱領草案を激しく批判したことは、周知の通りである。両人は、合同交渉の具体的経過を知らされていなかった。その点では、ブラッケ、ベーベルも同じであった。

ブラッケはいち早くラサール主義から脱却していた。1873年初め、綱領第3条第10項（国家補助による生産者協同組合）をめぐる、ブラッケと『フォルクスシュタート』との論争がおこる。ブラッケは『ラサール派の提案』を出版し、同項を批判するとともに、ラサール主義を「いたずらに宮廷に伺候しようとする王政プロイセンの政府社会主義」と特徴づけた。マルクスが『ゴータ綱領批判』（「ドイツ労働者党綱領評註」）をブラッケに送った（1875年5月付---マルクスの誕生日!）のは、上記のブラッケの姿勢を評価してのことと思われる（ベーベルは出獄したばかり）。

一方、1873年5月19日付のエンゲルスへの手紙で、ベーベルは次のように述べている。〈あなたはお忘れになってはなりません。ラサールの著作は、実際---このことは等閑に付してはならないことです---民衆にわかりやすい言葉で書かれていますので、大衆の社会主義的見解の基礎をなしているのです〉、〈ラサール崇拜は根絶されるべきです。…またラサールの誤った見解も論駁されるべきです。しかし慎重にやるべきです〉。

〈マルクスは、綱領草案が両派の理論的見解を忠実に反映していることを誤認していた。アイゼナハ派は科学的共産主義をすでに首尾一貫してとらえているのに、ラサール派は時代遅れのセクトにすぎないから、歴史の発展にとりのこされ、アイゼナハ派に従わなければならない、とマルクスは信じていた。…理論的にアイゼナハ派を過大評価し、ラサール派を過小評価していた点で、マルクスはまちがっていた〉（メーリング『ドイツ社会民主主義史』）。

合同そのものに最大の価値をおくリープクネヒトは、『ゴータ綱領批判』を公表せず、ロンドンに送り返した（どのメンバーが『批判』に目を通したかは不明）。かくして、ブラッケ、ベーベルの反対にもかかわらず、折衷主義的綱領が採択され、中央指導部はラサール派が多数を占めた。以降、単一組織の統一維持が最高原則となる。

SDAPの理論的未熟性の一端を示したのが、デューリング熱の流行に他ならない。流行は、1873年から始まり、まず感染したのがベルンシュタインだという。ベルンシュタインは、ベーベル、ブラッケ、フリッチェ（1825-1905、煙草労働者）、モストにデューリングの社会主義理論を吹き込み、モストとフリッチェはデューリングの熱烈な崇拜者となった。ベーベルでさえ『フォルクスシュタート』（1874年3月）に寄稿した「新しい共産主義者」と題する論文で、〈マルクスの『資本論』以降ではデューリングの最新の著作は経済学の領域で最近出された最良のものの一つである〉と評した。

合同後のSDAP内においてもデューリング熱は衰えず、デューリングは、マルクス、ラサールと同格の人物として取り扱われた。マルクス・エンゲルスはこれを憂慮し、また、デューリングに批判的であったリークネヒトは、マルクス・エンゲルスにデューリング批判を要請する。かくしてエンゲルスは1877年1月～78年にかけて、『反デューリング論』を発表した。

ところが、1877年の党大会において、党中央機関紙に「反デューリング論」が掲載したことが非難され、モストらは〈大多数の読者にとって興味のない[エンゲルス論文を]今後中央機関紙に載せるべきではない〉という決議案を提出した。中央機関紙本誌上ではなくその付録において継続されるべきとのベーベルの妥協的動議によって、決議案は一応撤回されたのであった。

『反デューリング論』は1878年に単行本化され、多くのものがマルクス主義者へと転向するきっかけとなり、また、その抜粋としての『空想より科学へ』がマルクス主義の入門書として人口に膾炙したことは周知の通りである。

モスト（1846-1906）について少し述べておく。1871年春にSDAPに入党したモスト（渡り製本職人）は、1874年、労働者の間に『資本論』を普及しようとして、『資本と労働—カール・マルクス著『資本論』のやさしいダイジェスト—』を出版した。

リークネヒトはこの書を高く評価し、1875年夏、マルクスに改訂を依頼する。マルクスは依頼を引き受け、1876年に「改訂第2版」が刊行された。これが「マルクスによる『資本論』入門書」として最近も復刻された『資本と労働』である。

「改訂第2版」が刊行された時、モストは獄中であつたが、出獄して間もなく上記したようにデューリング熱に犯され、その後は無政府主義に接近していった。

1878年10月、ベルリンを追放されたモストはロンドンに逃れ、翌年1月、同地で『フライハイト（自由）』紙を創刊し、それを非合法的にドイツに持ち込むことによって、反ビスマルクを無政府主義との宣伝・扇動を開始する。

ほとんどの党機関紙が禁止され、党指導部と一般党員とのコミュニケーションが遮断され、また一般党員が社会主義者鎮圧法に脅かされているなかで、『フライハイト』と、ブリュッセルのヒルシュ（1841-1900）が発行する『ラテルネ（灯火）』が、一般党員の党議員団への不満を代弁するものであった。

閑話休題。話をゴータ綱領に戻す。

ゴータ大会での綱領討論に際し、リークネヒトは次のように述べた。〈科学は絶えず進歩する。したがって、われわれは決して完全で最終的な綱領を作ることはできない。---それ故に、党は誤謬の

ない綱領をこしらえて紙の法王を作り上げるべきではない」と。

『ゴータ綱領批判』の後史も紹介しておく。

新綱領作成の動きが始まった1891年1月、エンゲルスは強引に『ゴータ綱領批判』を『ノイエ・ツァイト（新時代）』（編集者カウツキー）に発表した。中央機関紙『フォルヴェルツ（前進）』（編集者リープクネヒト）は、『批判』に対する態度を表明している。それは、党がゴータ綱領を採択したのは正当であったと述べ、〈ドイツ社会民主主義者はマルクス主義者でもなければ、ラサール主義者でもない、社会民主主義者である〉と宣言した。

またエルフルト大会でリープクネヒトは、『批判』を公表しなかったことを釈明し、〈私にとってマルクスは高い存在であります、党はさらに高い存在であります〉と述べている。

しかし、カウツキーとて、ラサールを賞揚していた、「我々の教師であり先進的闘士であった」（「我々の綱領」『ノイエ・ツァイト』1891年2月）と。カウツキーにあっては、理論と実践は別物なのだろう。

なお、ゴータ大会への呼びかけ文の署名には、ベルンシュタインの名が連ねられている（代議員名簿には載っていない）。

ベーベルは1872年3月から75年4月まで獄中にあっただが、そこで猛烈に勉強したようだ。『資本論』第1巻、『イギリスにおける労働者階級の状態』を初め、ラサール、ミル、プラトン、モア、マキャベリ、シュタインなどの著作を読んでいる。これらが『女性と社会主義』の基礎となった。同書は、SPD（ドイツ社会民主党）最大のベストセラーであり、また、かつての民青（民主青年同盟=日本共産党系の青年組織）の入門書であった（内容については後述）。

理論的不統一性と結社法などの弾圧法は、SAPDの実践上の不統一をもたらさざるをえない。SAPDは帝国憲法第22条に依拠した、帝国議会を通しての宣伝・扇動と、議会報告という形でしか合法的には活動しえない状態にあった。中央指導部も「中央選挙委員会」と名のっている。

1876年の党大会では、ドイツ政治の方向転換の主要契機となった保護関税問題について意見が三つに分かれ、〈妥協が成立したが、それによれば、第一に、社会民主党[ママ]は有産階級の内部で起こっている自由貿易と保護関税のあいだの論争には無縁であるが、しかし第二に、自由貿易主義の通商条約はドイツ工業に不利であって修正を必要とするし、第三に、労働者には、保護貿易を要求することで国家援助を求めているブルジョアジーのために火中の栗を拾わないよう、警告がなされなければならない〉（メーリング前掲書）。大会直後の議会で党議員団は、保留、賛成、反対の三つに分かれたのであった。

ラサール派が優勢だったSAPDには、いわゆる「講壇社会主義者」（ワグナー、シュモラー、ブレンターノ）の国家社会主義論も浸透していた。それによって、議会戦術も三つに分かれた。①帝政との非妥協性を強める反議会主義、②ベーベルが主張した、帝政民主化の一手段としての議会の利用、③議会での立法活動を通じての労働者の状態の改善。これらは、その時その党内の勢力関係と妥協によって、どれかが前面化したのであった。

1878年10月21日、10月19日に帝国議会で承認された社会主義者鎮圧法（公安を害する恐れのある

る社会民主主義の活動鎮圧法)が發布された。後にビスマルクは、1871年5月に議会壇上でベーベルが行ったパリ・コミュン支持の演説が、社会主義運動を国家と社会の敵と見なし、それを絶滅しなくてはならないと彼に教示した「射光」であった、と告白している。

10月19日、SAPD中央選挙委員会はガイブ(1842-1879)主導で自発的な全党組織の解散を宣言し(ベーベルは反対)、21日には『フォルヴェルツ』をはじめとし、三つの主要機関誌が禁止され、SAPD党員の追放など、全国的な弾圧が開始されたのである。

文献学の学位をもち、ジャーナリストで民主主義者であったメーリング(1846-1919)は、社会主義者鎮圧法に憤激してマルクス主義者になることを決意し、その根本的研究に没頭したという。1891年の入党以来、一貫してSPD左派に位置し、後にローザ、K・リープクネヒトとともにKPD(ドイツ共産党)の創立者となった。ローザ、リープクネヒト虐殺の直後に憤死する。1898年初版の『ドイツ社会民主主義史』は、マルクス・エンゲルスとともにラサールをドイツ社会民主主義の創始者としている。また、出版の年から当然のごとく、後のSPDの日和見主義的性格を知りえず、社会主義者鎮圧法下のSAPDの活動を過大評価している。とはいえ同書は、ドイツ近代史の学習に役に立つ。

3) 1880年代

ベーベルは党の再建を、中央機関紙の発行から考え、1879年の中頃から、国外(チューリッヒ)での発行にとりかかっていた。ところが、ヘーヒベルク問題が生じる。

ヘーヒベルク(1853-1884or85)は博愛主義者であり、社会主義に同情し、SAPDに財政援助するとともに、同党の理論誌『ツークunft(未来)』の編集者であった。同誌では、「未来国家」について議論されたという。〈ベーベルも「未来国家論争」として知られる論争において、党の合法主義を強調した〉(西川正雄「ドイツ第2帝政における社会民主党」、日本政治学会『年報政治学1966 西欧世界と社会主義』)というのは、これを指すのか?

ヘーヒベルクは、1879年8月、チューリッヒで『社会科学および社会政策年報』を創刊する。同時に、新中央機関紙に協力し、資金援助を行うことになっていた。しかし、マルクス・エンゲルスは、ヘーヒベルクの関与に強く反対した。また、二人が推したヒルシュは党議員団の反対が強く、フォルマール(1850-1922)が編集者となった。かくして9月28日、『ゾツィアルデモクラート』がチューリッヒで創刊される。チューリッヒが選ばれたのは、スイスの労働者が独自の印刷所を所有していたことが大きい。

メーリングによれば、フォルマールは生粋のミュンヘン人で、晋仏戦争で重傷を負い、その後の学習で民主主義者、そして社会主義者になった。いわば実践の人で、〈外国での党機関紙の編集…にはあまり向かなかった〉(『ドイツ社会民主主義史』)。

ベーベルとロンドンとは決裂状態のままであったが、ベーベルは機関紙の指導権を握るため、国内に編集委員会を設置した。メンバーは、ベーベルの他に、リープクネヒト、クリツェである。リープクネヒトの影響力は低下していたし、フリツェは1881年に米国に移住した。ベーベルは、機関紙のドイツへの密送を指揮し、「赤色郵便隊長」と呼ばれていたモテラー(1836or38-1908)を通じて、指導権を確立したのである。

1880年8月、スイスのヴィーデン城において党大会が開かれた。①『ゾツィアルデモクラート』を中央機関紙とすること、②モスト、ハッセンマン（1844-?）の除名、③ゴータ綱領にあった目的達成のための「合法的手段」を「あらゆる手段をもって」と修正（『ゾツィアルデモクラート』の国内への持ち込みが非合法であったので、その承認）、④帝国議会、地方議会選挙への宣伝・扇動を目的とした参加、⑤党指導権を同党帝国議会議員団に委任すること----これらが大会で決められたことである。

1880年末、モストの影響を受けたフォルマールがベーベルと対立し、辞任した。『ゾツィアルデモクラート』の後任編集者となったのがベルンシュタインである。これを機会にロンドンとの関係を修復しようと考えたベーベルは、ベルンシュタインを伴ってロンドンに赴いた（後にベーベルは、これを「カノッサ行き」と呼んでいる）。

ベルンシュタインは、16才までギムナジウムで勉強したのち、銀行の見習いとなり、ついで銀行員として勤務した。この時期のことはよくわからないが、晋仏戦争直後の「会社設立者の時代」における取引所操作の腐敗した実態に対する道義的反感をいいていたという。1872年、エルザス・ロートリンゲン（アルザス・ロレーヌ）併合に反対するSDAPの活動に感激し入党、合同交渉の際のメンバーにもなっている。社会主義者鎮圧法の施行直前にチューリッヒに亡命、ヘービベルクの秘書となった。既述したように一時デューリング熱に感染したが、『反デューリング論』を学習してマルクス主義者となる。

エンゲルスが反ユダヤ主義運動を「保守派の選挙戦術」にすぎないと見たのに対し、ベルンシュタインは、それが一時的なものではなく、「全官吏層、高等学校教師、小市民、そして農民」の広い支持をえていると分析していた。

また、亀嶋庸一『ベルンシュタイン』によれば、チューリッヒへの移住は、ドイツとは異なった「市民的（ビュルガーリッヒ）自由主義」との遭遇であった。

編集者としてのベルンシュタインの最初の主要な課題となったのは、党内「穏健派」（旧ラサール派）の「国家社会主義」に対する批判である。彼は、ベーベルを筆頭とする「急進派」の論客であった。急進派を支えていたのは、資本主義の早期崩壊論である。ベーベルはエンゲルスに、〈不況が慢性化し、ただらと続いて、何らかの出来事が生じて、それによって全面的な崩壊が始まる〉（1881年2月11日付）との「確信」を述べている。

SAPD-SPDに理論的に貢献したのが、1883年1月に創刊された合法理論誌『ノイエ・ツァイト（新時代）』であった。その編集者がカウツキーである。

プラハに生まれたカウツキーは、9才の時ウィーンに移住、パリ・コミューンによって社会主義を知る。ジョルジュ・サンド、ルイ・ブランを読んだという。1874年にオーストリア社会民主党の『グライヒハイト（平等）』を読み、ラサールや経済学を学習した（同年ウィーン大学入学）。翌年入党。『資本論』には歯がたたず、ロツシャー、スミス、リカード、ミル、バククル、ケアリー、デューリング、シェクレ、ランゲなどを読む。しかし、最も心酔したのがダーウィン主義である。〈私の歴史理論は、…ダーウィニズムを適用しようとしたものであった〉（『自伝』）。

『フォルヴェルツ』などに寄稿したことにより、カウツキーはリープクネヒトの知己をえ、リープ

クネヒトの紹介でヘーベルクとともに働くことになる。1880年にチューリッヒに移り、そこで〈教師と指導者とをえた〉(同上)。エンゲルス(『反デューリング論』)とベルンシュタインである。カウツキーとベルンシュタインは〈一致してマルクス主義の文献を熱心に研究した〉(同上)。

ヘーベルクの事業が立ちゆかなくなり、1882年、カウツキーはウィーンに帰る。論文「結婚と家族の発生」を学位取得のためイェーナ大学のヘッケル(ダーウィン主義者)に提出せんとしたが、行き違いで会えなかった。学位取得をあきらめ、1882年の残りは『ノイエ・ツァイト』の準備にあてる。その創刊号にカウツキーが載せたものの一つが「動物界における社会的本能」。

ロンドンに行くチャンスが訪れ、1885年1月から1888年6月まで滞在。エンゲルスの直接の指導をえ、大英博物館を利用することができ、カウツキーの理論的基盤が形成された。その具体的成果が『カール・マルクスの経済学説』に他ならない。

ベルンシュタイン、カウツキーという新しい世代が抬頭してきたが、その際注目すべきことが二つある。一つは、『反デューリング論』が決定的役割をはたしていることである。カウツキーは、次のように述べている。〈私に与えた影響から判断すれば、マルクス主義の理解のためにこれほど多くをはたした書物はない。マルクスの『資本論』の方が偉大ではある。しかし『反デューリング論』によって初めて、我々は『資本論』を正しく読みかつ理解することを学んだ〉(エンゲルスへの手紙)。『反デューリング論』第3部(II、理論)＝『空想より科学へ』第3章における、生産の社会化と取得の私的性格の矛盾→恐慌という図式、個人企業→株式会社→(トラスト)→国有という「社会化」形態の序列(ここでは指摘にとどめる)が、以降のマルクス主義理解に大きな影響を与えたと思われる。

もう一つは、ダーウィン主義の問題である。『ノイエ・ツァイト』には、ダーウィン主義についての論文が多かったという。エイヴリング(自然科学博士、マルクスの末娘と結婚)、ベルンシュタイン、ベーベル、カウツキーなどのほかに、「進化論への数学的寄与」を発表した数学者ピアソンも論文を寄せている。そもそもエンゲルスは、マルクスへの弔辞で、〈ダーウィンが生物界の発展[原語は不明だが、多分「進化」とも訳しうる]法則を発言したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見しました〉と述べていた。ベルンシュタインは、社会主義社会においては自然淘汰(最近は「自然選択」とされる)による進化が妥当だと述べている(後に自らの修正主義を「有機的進化主義」と特徴づけた)。カウツキーは、エンゲルスに近い。ベーベルは自然科学に興味がなかった(ダーウィン主義者の社会問題への無知を批判)。エイヴリングは、〈ダーウィンの学説を社会主義の最高の科学的支援とみなしている〉と述べている。¹

ダーウィン主義者による社会主義批判も多かったのであるが(従って『ノイエ・ツァイト』での論文も多かったと考えられる)、いずれにせよ進化・進歩への信仰が強烈だった。また、このような環境が、カウツキー以降のドイツ・マルクス主義をして、ヘーゲル哲学への関心を薄れさせた原因かとも思われる。

『カール・マルクスの経済学説』のさわりを紹介しておく。手元には二種の『資本論解説』、すな

¹ 1931年以来、マルクスが『資本論』の第1巻にダーウィンへの献辞を書くことを望み、ダーウィンがそれを断ったという伝説が流布し、その論拠として1880年10月13日づけのダーウィンのマルクス宛書簡が挙げられてきた。しかし、この書簡はマルクス宛ではなく、エイヴリング宛であることが判明した(保住敏彦『社会民主主義の源流』)。

わち高島素之訳（1927年）と佐藤栄訳（1946年、ただし序文の日付は1941年）である。前者の底本は第19版（1920年）、後者は底本を示していないが、第25版の序文（1930年）が収録されており、両者の大きな違いは、前者が『資本論』第1巻だけなのに対し、後者は第3巻までを扱っている点である。前者の「資本制生産方法の終末」、後者の「資本家的生産方法の終末」、つまり『資本論』第1巻第7編第24章の解説は、ともに最終章となっており、小見出しのあるなし以外、違いはない。引用は、比較的現代文に近い後者からとする。

〈支配的な生産方法と、支配的な占有方法とのあいだの矛盾〉を中心に説明され、「周期的な破局状態」、窮乏化、「資本家階級と労働者の衝突抗争」などを取り上げ、〈かくて、あらゆるものが、資本家的生産方法に体化されている矛盾〉=上記の矛盾の〈解決を迫る〉。〈社会の一段の進展のために残されている唯一の道〉=〈占有形態を生産方法に適応させ、生産手段の所有を社会によって占有せしめ、資本によって半分しか遂行されていない個別生産から社会的生産への生産の転化を徹底的に実行するということである。そして、これによって、人類のための新たな一時代が拓かれるのである〉。

『資本論』第1巻第7編第24章の内容が、『反デューリング論』第3部（Ⅱ、理論）=『空想より科学へ』第3章に依拠して解説されていることは明白であろう。この解説がさらに俗流化され、社会主義への転化の自然必然性として理解されたことも、想像に難くない。

このようなカウツキー流のマルクス主義が基調であったが故に、『ノイエ・ツァイト』が合法的に発行できたともいえる。

1883年コペンハーゲン党大会から1887年ザンクト・ガーレン党大会までの時期は、SAPDの急進化とベーベルの指導権確立の時期であった。急進化は、帝政の民主化が捨象され、議会において帝政を強めるとされる一切を否認する「原則的拒否主義」を議会活動の原則としたベーベルの路線が支配的になっていったことに示されている。繰り返すが、ベーベルの急進的路線を支えていたのは、崩壊=革命早期到来論であった。

この時期、選挙においてSAPDは躍進したが、それは、自由主義勢力がビスマルクに屈服したため、反政府的な中小市民がSAPDに投票したことが大きい。それにより当初は議員団穏健派が増加したが、かれらのあるものは死亡し、あるものは急進派に移行することによって、ベーベルの指導権が確立していった（ザンクト・ガーレン大会に関する官憲文書には、〈ベーベルはほとんど独裁者の地位についている〉と記されている）。同大会は、マルクス主義的社会主義の原理に基づいて党綱領を改定することを決議する。

1888年9月、ビスマルクの圧力により、『ゾツィアルデモクラート』のチューリッヒでの発行が不可能となり、発行地をロンドンに移した。

1880年代のSAPDの活動については、以下の点に留意しなければならない。

第一に、選挙・議会活動と傘下の自由労働組合の非政治的活動を二本柱とするSPDの活動の原型が、この時期に形成されたということである。それらは社会主義者鎮圧法によって強いられたものであったが、次第に定型化され、基盤たる組織の保持・拡大が自己目的化されていった。

この日本柱の活動は、社会主義者鎮圧法が廃止された1890年代においても、維持・強化された。結社法の廃止（1899年末）まで、政府が鎮圧法の再版を繰り返し企て、ウィルヘルム二世がSPDを「祖国なき輩」と読んだことに対して、「党という祖国（パルタイ・ファターラント）」という心情＝イデオロギーをもたらし、党の受動的性格を規定していったのである。また1890年代において、党と自由労働組合との力関係は、後者が強まる方向へと変動していった。

第二に、SAPDによるマルクス主義の受容が、人脈的要因と同時に、上記のような状況を大きな要因としていたことである。

〈迫害に対する憤激が全党員の間に拡がり、彼らの行動への衝動が強まってゆく中で、扇動に際しての党員の言葉も激しいものとなっていった。そして同時に、党が追い込まれていた例外的地位にふさわしく、かつ工業化の進展の中で強まってきた労働者階級の階級意識に照応しうる、より急進的な党イデオロギーへの欲求が生まれてきた。こうした事態の展開によって、ようやくドイツ労働運動の知的世界にマルクス主義的要素がより強く浸透して行く土台が用意されたのであった〉（マティアス『なぜヒトラーを阻止できなかったか』）。

このような状況下で、カウツキー流のマルクス主義はうってつけであった。貧富の格差の拡大＝プロレタリアートの窮乏化は資本主義のもとで不可避であるが、資本主義の崩壊＝社会主義への転化も自然必然的であるという理論は、待機主義的戦術を余儀なくされる事を慰撫し、さらには合理化する契機をはたしたのである。その際、ヘーゲル哲学についての論議が希薄だったことも、一般党員のマルクス主義受容にとって有利に作用したであろう。²

第三に、1890年（否、1874年）から死ぬまで党書記の地位にあったアウアー（1846—1907）のように、理論問題には口を出さず、ひたすら実務に専念するグループが形成されつつあったことである。第二帝政化において最も近代的政党に近かったのはSPDであったが、近代的政党に固有の官僚主義の芽がすでにSAPDの時代に育まれていたのであった。

以上、社会主義者鎮圧法期にSAPD（および自由労働組合）は一大政治勢力へと成長したのであるが、20世紀に入って表面化したSADの議会主義・組合主義・官僚主義を、SPDの“変質”とか“裏切り”とかで説明するのは、正鵠を射たものではない。

4) エルフルト党大会

社会主義者鎮圧法の延長が否決され、同法は1890年9月30日をもって廃止された。

1890年10月に開かれたハレ党大会は党大会は、まず、党名をSPDに改称し、中央機関紙を『フォルヴェルツ』（編集者リープクネヒト）に代えた。また、党幹部会（パルタイフォルシュタント）として、シンガー（1844—1911）、ゲーリッシュ（1857—1922）アウアー、フィッシャー、ベーベルを選任した（この陣容は、1893年にフィッシャーに代わってプファンクーフ（1841—1923）が入った以外、1904年まで変化がない）。さらに同大会は、合法性を基盤とし、選挙を通じた組織作

²『しくじり先生』でマルクスをレクチャーしたオリラジのアっちゃん（中田敦彦）は、『資本論』の内容を二行にまとめた。〈貧富の格差を無くそう〉、と。おそらく、SAPDの一般党員は、これと似たようなレベルで『資本論』を理解したのであろうし、しかも、それが早期に可能であるかに指導部から吹き込まれたのであった。

りと議会での宣伝・煽動という活動方法を再確認した。同時に、綱領改正案の作成を党幹部会に委任したのであった。

他方、自由労働組合も組織の再編成に着手し、1890年11月、中央指導機関としてレギー（1861—1920）を議長とする組合総委員会を創設した。

西川正雄は、SAPDを「ビスマルク体制から『排除された』存在、SPDを「ヴィルヘルム帝政内の『隔離された』存在」と呼んでいる（前掲論文）。確かにSPDは、帝政内で一つの世界を構築していくのである（山本佐門『ドイツ社会民主党日常活動史』参照）

1891年10月のエルフルト党大会に提出された綱領草案は、（1）党幹部会（＝公式）草案、（2）『ノイエ・ツァイト』編集部の草案、（3）マグデブルク・グループの草案、（4）シュテルンの草案、の4つであった。

党幹部会はず、リークネヒトが中心となって草案を執筆し、それをエンゲルス等に送付した。それに対しエンゲルスは、〈『フォルヴェルツ』の事なかれ主義的日和見主義 [「ゴータ綱領批判」公表への態度] と、古い汚物の「社会主義社会への」爽快・無邪気・愉快・自由な「成長移行」という代物とに、一太刀あびせる〉（1891年6月29日付カウツキーへの手紙）ことにし、いわゆる「エルフルト綱領批判」を送ったのである。エンゲルスによる批判をもとに書き直したものが、（1）に他ならない。それは、国民文庫『ゴータ綱領批判／エルフルト綱領批判』に、「修正草案」として示されている。

【注 〈リークネヒトは、この [エンゲルスの] 批判文をベーベルらの前で読み上げただけであった〉（西川正雄前掲論文）。その公表は、結社結社法廃止の1901年。】

〈カウツキーとベルンシュタインは、同年8月から9月にかけて『ノイエ・ツァイト』に長文の論文を発表し、公式草案に対して詳細な批判を展開した。

カウツキーは次のように述べる。「今日の社会の発展法則を認識するに至った者には、今日の社会がその『否定』である社会主義を理念の中だけでなく現実の中にも作る出すということがわかる。それは自然必然性をもってただ単に社会主義的傾向を生み出すのではなく、新しい、その傾向に対応した社会の基本要素をも生み出すのである」と。彼は社会主義社会の「自然必然性」(Naturnotwendigkeit) をしきりと強調するが、それは「慈恵的ブルジョアジー」による社会主義、「国家」(Staat) や「人民」(Volk) の啓蒙を通じての社会主義、蜂起による社会主義 [NB!] といった当時の様々な社会主義観をすべて「空想社会主義」として批判し、それらの理論を論破する根拠であった。同時に彼は、マルクス主義は運命論であるとの 非難に答えて、「発展の原動力は矛盾の闘争すなわち階級闘争であり」、資本性生産様式によって生み出され、その数を増し、産業の中核に集中的に組織されていくプロレタリア階級の闘争が社会主義をもたらす、と主張する。この理論から云わせれば、党幹部会草案の論理は社会主義を「今日の生産の性格からでなく、党の性格から導き出している」という欠陥を持つのであった〉（同上）。

かくしてカウツキーは、エンゲルスの指示を受けつつ対案を作成し、エンゲルスは、ベーベルがカウツキー案を大会で採択するよう提案することに指示を与えた。

綱領委員会は大会中に討議し、最終案を作成した。それは10のパラグラフから成る原則的（理論的）部分のうち、二つが党幹部会案から、五つがカウツキー（『ノイエ・ツァイト』）案から取り、二つが折衷された形で採用されているという。最終草案は、〈討論を経ずに満場一致で一括承認された[!]〉（同上）。エルフルト綱領は、「エンゲルスの作品」（同）と述べている。

ところで、新綱領の原則的（＝理論的）部分には、上記の九つ以外にも一つのパラグラフがある。それは第7パラグラフであるが、その末尾に、党幹部会案にもカウツキー案にも無かった³次の一文が挿入された。

〈労働者階級は政治権力を獲得することなしには、生産手段を全体[Gesamtheit]の所有に移すことはできない〉。⁴

マグデブルク・グループの草案には、〈この目的をプロレタリア的社会階級は政治権力の奪取によってのみ達成することができる〉というくだりがあった。メーリングは〈マグデブルク案は、部分的には幹部会のつくった案にまさる、すぐれた案であった〉（前掲書）と評している。

党幹部会の初期草案に対するエンゲルスの批判で注目すべきは、次の3点である。①〈「プロレタリアの数と貧困とはますます増大する」。こう絶対的に言ったのでは、正しくない。労働者の組織化、絶えず成長してゆくかれらの抵抗は、おそらく貧困の増大に対してある障壁をもうけるだろう。ところで確実に増大しているのは生活の不確かさである〉。②〈「資本主義的私的生産の本質に根ざす無計画性」は大いに改善する必要がある。…株式会社による資本主義的生産は、すでに私的生産ではなく、…もしまだ株式会社から進んで、いくたの産業部門を支配し独占するトラストに移るなら、そこでは私的生産がなくなるだけでなく無計画性もまたなくなる。「私的」という語を削除するがよい〉。③〈党は、何よりもまず、…封建制と絶対主義との多数の残存物を一掃しなければならない。…他の文化圏ではブルジョアジー自身によって実現済みとなっている諸要求をも、少なくとも今のところその綱領に含めなければならない〉。

①②は、資本主義の新たな現象の指摘である。そのことを理解した上でかどうかはともかく、①については草案の段階で受け入れられた。②については、幹部会案では「私的」の削除は取り入れられたが、カウツキー案は「無計画性」に言及しておらず、新綱領も同様である。また、カウツキー案および新綱領は、株式会社やトラストに言及していない（マグデブルク案、シュテルン案は言及しているという）。つまりエルフルト綱領は、資本主義一般の説明にとどまっているということである。

③は、「個別的な要求に移る橋わたし」として、第10パラグラフに入れるべきだとエンゲルスが主張

³ これは西川正雄前掲論文に依ったものであるが、スティーンソン『カール・カウツキー 1854-1938』に、カウツキー草案と思しきものが引用されており、それは以下のようなものである。

〈あらゆる階級闘争は政治闘争である。プロレタリアートは政治的権利なしには、経済闘争を戦うことができない。彼らは搾取者と戦うとき、つねに国家権力と衝突する。政治的権利を獲得して利用し、国家権力を自らの利益のために用いることは、プロレタリアートにとって必要部可決である。それゆえプロレタリアートは、自らを独立した党へと組織しなくてはならない。党の任務は、党の政治活動におけるプロレタリアートの利益を擁護することである。党は、国家を奪取するべく努力しなくてはならない。けだし国家は、生産手段を全体の所有に移すための唯一の最も強力な適切な手段なのである〉。

⁴ 信じられないことに、国民文庫（第14刷）に「付」として収録されているエルフルト綱領では、この一文が脱落している（確信犯か）！

したものである。エンゲルスは、政治的諸要求について、以下のように述べている。

〈本来言わなければならないことが、そこ〔草案〕には書かれていない〉。〈私がそれ〔民主的共和制、統一共和制など〕について述べるのも、このような状態から合法的な方法によって共産主義社会へ移ってゆこうとする自己欺瞞を特徴づけるためである。さらに、人民の立法や無料の裁判…のほかにも、まだ重要な政治問題があるということ、党の執行部に思いおこさせるためである〉。〈綱領に入れうるし、また口に出して言えない事柄をせめて間接に暗示するのに役立つものは、次の要求である。「普通選挙権によって選ばれた官吏による州、郡、市町村の完全な自治制。国家の任命にかかわるすべての地方および州官庁の廃止」〉。〈手遅れにならないうちに、これらの問題を党内で討論することが、望ましい〉。

これらのエンゲルスの指示は、幹部会の修正草案には取り入れられず、新綱領においても、上記したように第7条末尾への一文が入れられたただけであった。従って、原則的部分に対応して、実践的部分も社会主義政党の一般的要求の体裁をとっている。

〈「エルフルト綱領」には「国家」(Staat)という言葉が出てこない。それは、リープクネヒトの報告によれば、「その概念に議論の余地があり」、「目下のところ国家はわれわれにとり敵意を持って対立しているものとしてのみ関係がある」からであった〉。〈ドイツ社会民主党の受け容れたマルクス主義がこの「書かれていない」部分を含むものであるかどうかは、その後の諸条件にかかっていたのである〉(西川前掲論文)

大会で議論が過熱したのは、綱領問題ではなく戦術問題であった。社会主義鎮圧法の廃止という環境変化に伴い、以前の議会主義＝「原則的否定主義」への批判が出てきたのである。

一方には、議会主義を否定するグループが生まれた。ベルリン、マグデブルクなどの地方機関紙編集者を中心とする若手知識人などで、「ユンゲン」(青年派or若手組)と呼ばれた。マグデブルク綱領草案を提出したのがかれらである。

〈彼らは党の目的を達成する闘争方法としての議会主義に対して疑念を抱いており、平等を目指すはずのSPD内で、金がなければ議員に立候補できないし、いったん議員に当選すれば、無能な人でも一躍、党の指導者になれるばかりでなく、全国的な名士になれる同党の現実の「不平等」に憤激していた。その結果、彼らは1890年のハレ党大会で、議会重点主義的闘争方法が再確認されるや、それに反対し、議会主義は党の目的を達成する有効な闘争方法でないばかりか、党自体を腐敗堕落させるものであると主張し〉(安世舟『ドイツ社会民主党史序説』)た。

彼らは、エルフルト党大会においても、自らの主張を維持した。たとえば、〈その〔党の後退〕そして、またカウツキーのように「野心家の不満」としてのみとらえるわけにゆかない。その背後には鎮圧法下でのきびしい闘争を支えてきた大都市の古い党员層の不安、不満があったことは、見逃さない。執行部がとくに恐れたのは、この二つの部分(「ユンゲン」の「革命的言辞」と戦闘的な古参党员)が結びつき、指導部から離れることであった〉(山本佐門『ドイツ社会民主党とカウツキー』)

他方フォルマールは、大会前にミュンヘンの演説で、〈今日、我々の戦術は例外状況の時代と同じものではありません〉と述べていた。〈フォルマールは例外法の消滅をもって、党が戦術を転換す

べき画期と判断したのである。その判断の底には、「今日の国家・社会秩序の下で国民の状態を改善することが事実上可能」であり、そもそも社会は、「ゆっくりした有機的な発展」によって「新しい社会の中へ段々と成長して入って行く」ものだ、という認識があった（西川前掲論文）。

大会は、〈政治権力の獲得は、それに向かって階級意識を有するあらゆるプロレタリア運動が指向しなくてはならない第一の、かつ主要な目標である。…等の従来の政策を変更する何らかの理由もない〉云々という、いわばベーベル決議を採択した（フォルマルも賛成）。同決議は上記の両傾向を批判したものであったが、「批判のルール」などによって「ユンゲン」が除名者を出したのに対し、フォルマルの主張には“歯止め”をかけたにすぎない。

〈フォルマルの助命は分裂を覚悟しない限り不可能だ、というのがベーベルの判断だった。…リークネヒトも強調したように、1891年の段階において、例外法を生き抜いたドイツ社会民主党にとり「統一」は何よりも重要なことであった。…マルクス主義の立場から見て、「エルフルト綱領」は「ゴータ綱領」に比べ明らかに前進を示した。しかし、そのことは、党の思想・行動が同じように前進したことを直ちに意味してはいなかったのである〉（西川前掲論文）

【注 〈エレノア・マルクスはハレ党大会に出席して、フォルマルの危険性が認識されていない、と案じたが、エンゲルスに代わってエルフルト党大会に出席した際にも、フォルマルの方が「若手組」より遥かに危険だ、とエンゲルスに報告した〉（同上）。さすがマルクスの娘、といったところか。】

5) カウツキーによるエルフルト綱領解説

カウツキーは、エルフルト綱領の解説書を解説書を二冊著している。一つは、シェーンランク（1859—1901）との共著の『社会民主党の諸原則と諸要求』（1892年）であり、「党内向けの公式の解説書」らしいが、邦訳されておらず、内容も不明。もう一つが同年発行の『エルフルト綱領』（邦題『エルフルト綱領解説』）であり、河出書房『世界大思想全集 カウツキー/プレハーノフ』に収録されている。

〈本書 [『解説』] はまた、カウツキーが草稿段階でエンゲルスの批評を受けずに出版した最初の主著でもあった。そのかぎりでは本書は、カウツキーがエンゲルスの指導なしに自分のマルクス主義を提示した最初の著作である〉（ステーションソン前掲書）。

内容の紹介に入るが、一つだけ注意しておく必要がある。それは、邦訳の底本が第7版（1922年）だということである。つまり、初版に修正を加えた可能性がないわけではない。実際に、第5版（1904年）では修正がある（後述）。

『解説』は、初版序文によれば、「社会民主党的な考え方に親しもうとする人のための指針書、および他人をこういう考え方に引きこもうとするアヂテーターのための指針書」であり、「エルフルト綱領を手引として、社会民主党の理解のために大切な、本質的な、社会主義の思想体系の全面を、だれにでも分かる方法で、説明しようとしたもの」に他ならない。

【注 序文が次のように締めくくられているのは、後の歴史を知っている者にとって冗談のように聞こえる。

〈わたくしの親友であり同志であるエドゥアード・ベルンシュタイン君が、多くの他の拙書と同じように、この本にも忠告をしたり、草稿に目を通して批評したりして、私を力づけてくれた。これにたいして、ここであつく感謝する次第である〉。】

第1～3章は、「こんにちの社会とその発展過程の特徴づけ」であり、綱領の第1～4パラグラフの解説である。以下に小見出しを示しておく。

第1章 小経営の崩壊 1、小経営と私有制 2、商品と資本 3、資本主義的生産様式 4、小経営の断末魔

第2章 プロレタリアート 1、プロレタリアと手工業職人 2、労賃 3、プロレタリアの家族の解体 4、売淫 5、産業予備軍 6、プロレタリアートの一層の拡大 商人的プロレタリアートと「教養ある」プロレタリアート

第3章 資本家階級 1、商業と信用 2、分業と競争 3、利潤 4、地代 5、租税 6、利潤の低下 7、大経営の生長、カルテル 8、経済恐慌 9、慢性的過剰生産

カウツキーは、綱領冒頭の「経済的發展」の説明から論を始めている。経済は、従って社会は不変不易のものではないということであり、これが「社会民主党の思想の核心に、ふれさせる」というのである。

以降のカウツキーの解説の特徴は、その叙述が歴史的＝発生論的だという点にある。読者は、なぜ第1章が「小経営の没落」であり、その1が「小経営と私有制」なのか、と思ったに違いない（私も目次を見たときにそのような疑問をいただいた）。それはカウツキーが、資本主義社会の前史として、単純商品生産社会を考えているからなのである。だから、まず「自己の生産手段に対する労働者の私的所有を基礎とする小経営」（綱領）、すなわち「農民経営」と「手工業」が説明される。

続いて2で、商品＝価値の説明があり、その後で「資本」が出てくる。〈資本は、商品生産の一定の段階で、…形成される。…小経営の諸関係に相応する小市民的な私有とならんで、いまや資本家的な私有があらわれる〉。資本家的私有の特徴は、「不労所得」である。

3は、本源的蓄積の説明であり、ここで「労働力」が出てくる。

以上から、4、すなわち小経営の没落の「自然的必然性」（綱領）が言われている。

第2章は、あまり説明はいるまい。1で「剰余価値」と「搾取」が出てくる。3、4、は「家族の解体」と「婦人共有」という非難に対する『共産党宣言』と同様の同様の駁論である。5、では「失業」が説明されている。6、に以下のような（注）がある（後述するベルンシュタインも同様のことを述べているので、後の版の追記かもしれない）。

〈ドイツ語でBurgerという言葉は、一定の階級に、都市の有産階級に、属するものをいみするばかりでない。国家の全員、すなわち国民をもいみしている。フランス語では、これにたいして二つのいいかたがある。第一はbourgeoisであり、第二はCitoyenである。ブルジョアという言葉は、「ビュルガー」という言葉より明確から、ドイツでもそのまま使われている〉。

第3章が、「商業と信用」から始まっているのも、第1章と同様、資本の先行形態としての商人資本

と高利貸資本とから説明を始めているからである。2では「個々の資本家相互の依存度」は増大し、ここの経営内部での計画性は進行するが、個別経営相互の関係は自由競争に任せられていること、それは「生存競争」をもたらすこと、が述べられている。

3において、搾取によって利潤がもたらされるが、〈搾取した剰余価値を、地主と国家とに分けあたえねばならない〉ことが述べられ、4と5につながる。

6では利潤率の低下が説明され、それが資本家の「数を減らす」とされる。7では、株式会社、カルテル等が説明され、資本家階級においても「生存の不安は増大する」ことが述べられている。

8においては、〈世界市場を動揺させる近代的な大恐慌は、過剰生産より生まれるものだが、さらにこの過剰生産は、商品生産と必然的に結びついている無計画性の結果である〉こと、従って〈こんにちの生産力は商品生産とはますます調和しないものになっているということ〉が説かれる。9は、以下のように締めくくられている。

〈こんにち問題はもはや、生産手段の私有制を維持すべきか、否かということではない。その没落はきまりきったことである。だから問題はただこれだけだ。すなわち、社会が破滅にひきずりこまれるか、それとも発展の法則が法則がさし示す道に、自由な新しい力をもって転換できるように、その腐りきった重荷から自らを解放するか?〉。

「第4章 未来国家」は、「社会民主党の最終目標」の説明であり、綱領の第5パラグラフを解説したものである。構成は次のようになっている。

1、社会改良と革命 2、私有と共有 3、社会主義的生産 4、国家の経済的意義 5、国家社会主義と社会民主党 6、未来国家の建設 7、「家族の廃止」 8、財産の没収 9、「未来国家」における生産物の分配 10、社会主義と自由

1は、「社会発展の不可抗性、自然必然性」の問題をとりあげている。人間は〈一定の欲望と情熱とをもち、人間の最善のために使おうと思っている一定の肉体的な、精神的な力をもっている人間である。表面的にみると避けがたいことになにもしないで諦観するということは、社会の発展をその赴くままに任せるということにはならず、発展を停滞させてしまうことになる〉。人間一般をまずもつてくるところが苦しいが、ここでは大目に見よう。

〈われわれは、こんにちの社会の崩壊をさけ難いとおもっている。その理由は、経済の発展によって、被搾取者がこの私有制と闘わざるを得ないような状態が必然的に生みだされるということを知っているからである〉。〈こういう変革〔既存の所有制の転覆〕は、変革が行われる事情によって、色々の形態をとるものである。必ずしも暴力や流血と結びつくとはきまっていない〉。〈社会改良によって現在の状態が被搾取者に満足いくようなものになると信じてはいけない〉。

〈人を苦しめ、人を反抗させる資本主義的生産様式のあらゆる影響が、たえず増大している。これは現在の所有制に基づいた改良ではけっして阻止できない〉。

こうして改良主義が批判されるわけであるが、〈現在のあれこれの弊害を多少ともとり除くのに実際に役だつような手段は、経済の発展の流れを促進する〉とも述べられている。

とりあえずここでは、「こんにちの社会の崩壊」の不可避性が、人（被搾取者）の反抗の必然性から説明されていることが重要である。

2では、〈生産手段の私有制は小経営に根ざしている。…逆に、大経営は、共同的、社会的生産である〉とし、近代の大工業では大経営があたりまえとなっていることから、次のように結論づけられる。〈生産手段の私有に、共有〔綱領では「社会的所有」〕がとってかわる。これこそ、経済の発展がますますさしせまって必然化しつつある事実なのである〉。さらに、協同組合企業を考察し、商品生産の支配下においてはそれも資本主義的なものでしかないと述べている。

3では、まず〈商品生産の廃止とは、販売のための生産を自家需要のための生産にきりかえることである〉と述べられる。ついで、カウツキーは次のように言う。〈商品生産がまだ発展しなかった間は、自家消費のための協同的生産が、生産の支配的な形態であった。…人間の性質〔!〕にはどのような生産様式がとくにむいているかと考えてみると、この形態の生産こそ自然的なものだと言わなければならない〉。これは「原始共産主義」である。〈自家需要のためのこういう共同体的生産は、共産主義的生産、あるいはこんにちの言葉でいえば、社会主義的生産にほかならない〉。

〈来るべき社会主義的生産様式は、原始共産主義とは結びつかず、資本主義的生産と結びついている。そして資本主義的生産そのもののなかに、その後継者となる要素が発展しているのである。…社会主義的生産様式が要求することは、一方では、ここの資本主義的企業を協同組合的企業に転換することである。…他方では、…生産の一定の段階において、社会の重要な需要を充足するに必要な経営をすべて、唯一の大きな協同組合に総括することを望んでいる〉。

ここまでで綱領第5パラグラフの解説は基本的に終わっている（なお、綱領には「協同組合」という言葉はない）。以下は、追加的説明。

では、〈こういうふうには自給自足できる協同組合は、どの位の大きさがなければならぬか？ 社会主義的協同組合が発展するための範囲として利用しうるのに十分な大きさをもつものは、現在ある社会組織のなかでは、ただひとつしかない。それは近代国家である〉。

〈近代国家はすべて自国を拡大しようという要求をもっている〉。しかしヨーロッパ大陸では、〈諸国は互にくっつきあい入りこんでいるので、同等の力をもつ隣国を粉砕しないことには、その領土を拓げることはできなかった。…この耐えがたい状態から抜けでて、経済生活の拡大欲をみだすことができる道は二つある。一つは世界戦争である。…もう一つは、…国家連合への統一である〉。カウツキーは「世界共和国」の「固い信念」まで語っている。

4の内容は小見出し通りで、〈こんにちの社会においては、経済の仕組みを統制し秩序づけるように干渉する使用は、ますます国家にあたえられるようになり、またこのために国家が用いる手段はいよいよ力強くなっている〉ことの説明。

5でカウツキーは、まず国家社会主義を批判している。〈現代の国家の経済活動は、社会主義的共同体にいたる発展の、自然的な出発点である。しかしそれだからといって、経済的機能ないし経済的企業の国有化がすべて、社会主義的協同組合への一歩になるとはいえない〉。〈国家の本質は少しも変革しないでも、全経済機構を全般的に国有化すれば、社会主義的協同組合が生まれる…こういう見解---いわゆる国家社会主義者の見解---は、国家というものの誤解にもとづいている。…近代国家もま

た、ますなによりも、支配階級全体の利益をまもる道具である〉。

〈労働階級が国家のなかで〔！〕支配的な階級になったときはじめて、国家は資本主義的な企業でなくなるだろう。またそのときはじめて、国家を社会主義的協同組合に変革することができるようになるだろう。…社会民主党は、労働階級が政権を奪取し、同時にこの助けによって国家を変革して、本質的に完全に自給自足する一大経済共同組合にすることを、意図している〉。

〈社会民主党は、希望や約束の上には立っていない。経済発展のさけがたい必然性の上にはたっている〉。だから〈社会民主党には定った目標がない〉等々と非難する者は、〈経済の発展に関するわれわれの理論が誤っていることを証明しなければならない〉。

【注 エルフルト党大会に提出された党幹部会の公式草案に対するカウツキーの（社会主義を「今日の生産の性格からでなく、党の性格から導き出している」という欠陥をもつ）という批判は、上記の「必然性」の論理を欠くということである。】

以下は、SPDに対する非難への反駁である。

6は、未来国家建設の計画を示せ、という非難を扱っている。

〈社会の進歩〔！〕の…方向は経済の発展によってあたえられる。思想家はこの方向を認識することはできる〉。〈こと進歩という点では、新社会にいたる方向をつかんで、かれら〔革命的党派〕の政治活動が本能的なものであるだけでなく、意識的なものになることさえ成功すれば、もはや上出来である〉。〈経済発展の傾向が、資本主義的な地盤から社会主義的な地盤へ向いたばあいには、どういう方向をとるだろうかということについての研究…で大切なことは…一定の事実の究明から明らかにされた成果を科学的に仕上げることである。…われわれがはっきりと未来をみればみるほど、それだけわれわれの力は現在合目的的に利用される〉。

〈われわれの目標がいろいろの目に映る姿はどんなにちがっても、みている方向さへ同じなら、---これが肝心なのだが、---われわれの目標は同じであり、正しいのである〉（この一文は、当時の党内状況を反映している）。

要するに、未来国家建設計画の提示は、無用であり、かつ、非科学的なのである。この節で留意すべきは、次のくだりである。〈資本主義文明の持続は不可能である。ということは、社会主義への前進か、それとも野蛮への後退か、いずれかひとつであるということだ〉。先にも類似した表現が出てきたが、カウツキーが資本主義崩壊の「必然性」という場合、社会主義への転化だけでなく、〈約二千年前のローマ帝国と社会とおなじように、没落し、結局野蛮状態に帰してしまう〉可能性も考えているのである。

なお、革命階級の「独裁権」という言葉が過去の歴史の説明の中に出てくる。

7は第2章の3と重複しているが、ここでは『家族、私有財産、国家の起源』に依拠して、家族の将来についても説明している。

8でカウツキーは、以下のように書いている。

〈この〔大経営の社会的所有への〕移行がどういう風に行われるか、さけがたい収奪が没収になるか、それとも賠償になるか、またこれが平和的に行われるか、それとも暴力的に行われるか、こういうことは誰にも答えられない問題である〉。

〈経済の発展は既成財産の一部分の収用しか必然化しない…。経済発展の要求するものは、生産手段の共有である。個人的消費のための私有には、これに絶対に手を触れない〉。

〈資本と縁のない独立小経営は、救いがたい没落に瀕する。しかし社会民主党のみは、農民と手工業者を、全体として大経営の労働者にして、しかもプロレタリアートに沈めないことができる。農民的農業と手工業の解体は避けがたいとしても、これが社会主義社会においてだけは、農民と手工業者との地位の向上になる〉。

また9で、カウツキーは以下のように言う。

〈分配、これは小経営の社会主義であり、「保守的な」「国体護持的な」国民層の社会主義であって、大工業のプロレタリアートの社会主義ではない。

こんにち大工業企業において、生産と賃金支払が、慎重に計画的に統制されているように、唯一の巨大な工業経営にほかならない社会主義社会においても、この点はまったく同様であるにちがいない〉。〈社会主義社会における財の分配は、当面の間は、こんにちある賃金形態の発展線上で見られる形態でしか行われたいとおもわれる〉。

〈こんにちでは、人民大衆の収入の平均化は、ヨリ高い収入がヨリ低い段階に押し下げられるということによってすすんでいる。社会主義社会では、この平均化は当然、ヨリ低い収入が高められ、ヨリ高いものに等しくされるといふやりかたによってなされるだろう〉。

「生産力の完全な展開への障害」が除去される社会主義社会では、「一般的な福祉の増大」と「生活の安定」とが保証される。

10は、〈社会主義は経済的自由、労働の自由を否する〉という非難への反駁である。

〈労働している間の自由が奪われたとおなじように、働き口の選択の自由が奪われたのは、社会民主党のせいではない、経済の発展である。…社会民主党は、労働者がその歯車になっている経済の仕組みへの、その従属性を、とり除くことはできない。けれども、その利害が労働者とは敵対的である資本化への従属を、労働者じしんがその成員である社会、おなじ利害をもつ平等な組合員の社会への従属におきかえることはできる〉。

〈機械は労働から、あらゆる精神的内容をうばった。…労働の単調さと無内容さが、プロレタリアにもたらず最初の効果は、その精神が圧殺されたかにみえることである。けれども第二の効果は、労働者が労働の過度の延長にたいして、反発せずにはいられないように感ずることである。…かれにとっては生活は、労働がおわったときに、はじまるのである〉→時短闘争＝「生活のための闘争」。

さらに「別の効果」も生まれる。労働者は、「生活」の時間（労働以外の時間）を、「知識にたいする熱望」のために使う。〈知識を所有することではなく、知識をえようと努力することが、哲学者をつくる〉。

〈労働の自由ではなくて、社会主義社会の機械制によって高度に可能になるような労働からの解放こそ、人類に、生活の自由、芸術的な科学的な仕事にたずさわる自由、高貴な享楽の自由、をもたすだろう。世界史においてただ一度だけ、一握りの選ばれた貴族の特権としてあらわれたあの幸福な調和のとれた教養〔古代ギリシャ〕が、あらゆる文明国民の共有財産となるだろう〉。

「第5章 階級闘争」は、社会民主党の最終目標を実現するための「手段」「方法」についての解

説で、その対象は、綱領の第6～10パラグラフ（及び実践的部分）である。構成は次の通り。

1、社会主義と有産階級 2、僕婢と従僕 3、ルンペンプロレタリアート 4、賃金プロレタリアートのはじめ 5、賃金プロレタリアートの上昇 6、プロレタリアートを高めようとする傾向と抑圧しようとする傾向との衝突 7、慈善と労働者保護立法 8、労働組合運動 9、政治闘争 10、労働者党 11、労働運動と社会主義 12、社会民主主義---労働運動と社会主義との統一 13、社会民主党の国際性 14、社会民主党と国民

社会主義的生産への転換は〈全人類の解放を意味する〉が、その主体は〈労働者階級…でしかありえない〉とした綱領第6パラグラフの解説が、1～6である。

まず1で第6パラグラフの後段（労働者階級以外の諸階級の規定）を説明し、次のように述べている。

〈当然、…金持は、生産手段の私有制を廃止することによって、直接にはなにひとつ得ることはできない〉。〈小市民、あるいは小農民のかぎられた立場からは、その影響をじぶんの肉体に実際感じてはいても、資本主義的生産様式を理解することはできない。まして近代的な社会主義は、かれらには分からない。それに反して、たちどころにかれらの理解できることは、生産手段の私有制がその経営様式にとって必要だということである〉。だから、「小市民」「小農民」が転換の意義を理解するには〈かれらが属している階級の視野以上に、みずからぬけでなければならない〉。

2～6は、第2章で述べられた「プロレタリアートの自然史」の補足であり、プロレタリアートの諸層の地位を説明している。ここでも発生論的説明が特徴であり、カウツキーは「賃金プロレタリアートのはじめ」は「ルンペンプロレタリアートそのものの大部分」であったという（4）。

〈ルンペンプロレタリアートと資本主義的生産の労働プロレタリアートとの間には、とりわけ大きな根本的な相違がある。前者は寄生者であり、後者は社会の根の一つである。…労働プロレタリアートは…社会から養われているところではない、かれがその労働によって社会を養っているのだ〉。

〈資本主義的生産の初期においては、労働プロレタリアは…自分を搾取する資本家を、労働やそれ同時にパンを与えてくる慈善家…とみていた〉。しかし、家父長的關係が崩れるに従い、労働プロレタリアは覚醒する。〈[前資本主義時代の貧民とは異なり]労働プロレタリアは…金持を憎悪し、軽蔑する。…はじめの間は、かれはじぶんと関係のある資本家だけを憎む。だがやがて、資本家全部あるいは大部分が、かれに対して、同じような態度でのぞむものだということが分かってくる、そうすると最初の個人的な憎悪は、資本家階級全体にたいする意識的な対立に発展する〉。

〈賃金労働者階級のばあいには、かれらが、その仲間を支配する利益共同の意識、連帯の意識にたっしたときはじめて、自己の力の自覚、抵抗の精神は発展するのである。連帯感に目覚めるとともに、プロレタリアートの道徳的復活がはじまり、労働プロレタリアートは、ルンペンプロレタリアートの泥沼から這いあがるのである。〉

資本主義的生産の労働条件は、プロレタリアに、固い団結と、全体にたいする個人の服従の必要性[NB]を、ひとりでに教える〉。

〈こんにちのプロレタリアートは、感情においても、行動においても、完全に国際的である〉。〈近

代的プロレタリアートの連帯意識が国際的なものになれば、連帯意識は全労働階級の上にもおよんでゆく（以上5）。

〈人類社会のヨリ一層の発展にとって幸いなことには、プロレタリア層の大部分において、おそかれはやかれ、上昇的な傾向が決定的に優勢になる瞬間があらわれる〉。「階級意識」が生まれる時である。〈あるプロレタリア層に、いったん階級意識が根を張ったら、再びこれを根こそぎにすることは、ほとんど不可能である。そうすると、たとえ資本主義的生産様式の抑圧的傾向が、未だ重くのかかっている、それは、これらのプロレタリア層を経済的に下落させても、道徳的に下落させることはできない〉（6）

7と8は、綱領第6パラグラフと第7パラグラフとをつなぐものである。

〈こんにちブルジョア政治家が標準労働日に賛成するとしても、それは人類愛からではない、かれらの選挙民たる労働者から圧力を受けるからなのである。労働者保護のための闘争は、ますます、プロレタリアートとブルジョアジーとの純粋な階級闘争になる〉（7）。

〈たとえ闘争が、労働者の経済的向上にはなにも役立たず、むしろ、おそらく結果的には、経済的に悪化させても、プロレタリアの道徳的、社会的復活は、促進するのである〉（8）

9は、綱領第7パラグラフの解説である。

〈純粋に組合的な闘争の要求でも、労働者にとっては、政治的要求としてもちださざるをえなくなる。…プロレタリアートが発展すればするほど、結社の自由、団結の自由がますます必要になる〉。

〈こういう〔個人的接触が少ない〕大衆を相互に結びつけ、かれらのうちに広汎な利益共通性の意識を喚起し、その利益をまもるのに役立つ組織をつくるためには、大衆に自由に話せる機会が必要であり、また集会と出版の自由が必要である〉。

〈労働者階級にとくに直接関係ある法律ばかりでなく、他の大多数の法律も、多かれ少なかれ、労働者の利害にふれている。だから労働者階級も、あらゆる他の階級とおなじように、政治的な影響力、政治的な権力を得ようとしなければならないし、国家権力をじぶん達にさえさせるように努力しなければならない〉。

〈これ〔絶対主義の擁護者〕以外の階級の国民はすべて、近代的な大国家においては、自分たちの選挙した議会を通じてのみ、国家行政に影響を与えることができる〉。〈近代国家が存続するかぎりには、政治活動の重点は、常に、その議会にある〉。

〈プロレタリアートが、自覚した階級として議会のための闘争（とりわけ選挙戦）にのぞみ、議会で議席をかち取るならば、議会主義もこれまでの本質を変えはじめる。…これら闘争こそ、プロレタリアートの中でいまなお無関心である諸層を奮起させ、かれらに確心と希望の喜びを吹きこむには、もっとも力強い方法だということがわかる。また種々のプロレタリア諸層を、統一的な労働者階級にますます固く融合させるのに、もっとも強力だ手段だということが分る。そして最後に、国家権力をプロレタリアに都合のよいように左右するのに、…当面プロレタリアに自由になる手段のなかでいちばん有力なものだということも分る〉。

〈団結権と出版の自由とともに、一般、平素、直接、無記名投票権は、プロレタリアートの健全な発展のための生活条件である〉

10は、綱領第7パラグラフの最後の一文の説明であるとともに、第8パラグラフへの媒介をなしている。

〈各政党は、国家権力を、…それが代表している階級のために、役立たせるよう努力し、その国における支配的な政党になるように努力するにちがいない。労働者階級も独立の党派としてみずからを組織するには、必然的にこういう目的をもたなければならないし、同様に、経済の発展は必然的にその目的を達成させるような働きをするのである〉。

〈プロレタリアートは、…獲得した支配権を…かれらにたいする搾取、だがまたそれとともにブルジョア社会におけるあらゆる搾取を、根絶することに役だてねばならない〉。

11と12は、綱領第8パラグラフ、すなわち〈この労働者階級の闘争を一つの意識的な単一の闘争に形づくり、この闘争の、自然必然性にもとづく目標を示すこと、---これが社会民主党の任務である〉の解説である。

11は、社会民主党の前史であり、これも発生論的説明に他ならない。一言で言うならば、19世紀半ばまでは、社会主義と労働運動とは分離・対立していたということである。

12はいわば本論であって、「労働運動と社会主義の統一」という社会民主主義の定式を説明している。

〈社会主義運動と労働運動とが互いに和解しあって、統一的な運動に融合するようになれば、社会主義は、当然、空想主義の思想圏をのりこえてしまうにちがいない。これをやりとげたのが、マルクスとエンゲルスの世界史的な事業であって、かれらは、1847年に書いた『共産党宣言』のなかで、新しい近代的な社会主義、あるいは、こんにちの言葉でいえば社会民主主義の、科学的な基礎づけを行なったのである〉。

〈社会主義者には、いまや、新しい社会を勝手に作りあげるといった任務はもはやない。新しい社会の要素を、既存の社会のなかに、みつけださねばならないのだ〉。〈プロレタリアートの階級闘争をできるだけ、目的意識的に、合目的なものにしあげること、これが社会民主党の使命である〉。

〈階級闘争によっておこる労働者階級の向上は、経済的なというよりか、むしろ道徳的な向上である。…プロレタリアートの道徳的向上とは、…かれらの「欲望」をめざすということであり、その欲望を増大させるということにほかならない〔?!〕。この道徳的向上は、こんにちの搾取方法とは矛盾しないようなプロレタリアートの経済状態の改善が、進んでゆく速度よりも、もっとはやくすすんでゆく。…だから、階級闘争の結果は、いつもプロレタリアートがじぶんの宿命にたいして不満をつのらせるということにしかならない〉。

〈不満、渴望は、被搾取者がじぶんたちは搾取者と道徳的に同じ値打があるものだとか、むしろそれよりも優れていると感じている所で、階級対立と搾取から、必然的に生じる。被搾取者がいったんそう感じるようになると、かれらの「渴望」は、搾取がなくなってしまうまでは、けっして癒されるものではない。

だから、プロレタリアートの階級闘争が社会主義と対立しているかぎり、また、階級闘争の目標が、ただ現在の社会の枠内で、譲歩によって、プロレタリアートの満足する地位をうるということだけにおかれているかぎり、階級闘争は、その目標を、到底達成できない。それは、終わりのないネジ

のようなものである。社会主義運動が労働運動と融合してから、事態は一変した。いまや労働運動はひとつの目標をもち、明らかにその目標に近づいている。…今後は、プロレタリアートのことを年頭においてだされた敬愛的政治的対策…がプロレタリアートにたいして、敵対的傾向をすすめてゆくものでも、友好的傾向をすすめてゆくものでも、あるいはまた、それが成功しても、失敗しても、その政策がプロレタリアートの奮気と道徳的向上に役立ちさえすれば、やはりかれらに有利な結果を生むことになる）。

13は綱領第9パラグラフの解説であり、カウツキーは次のように述べている。

〈こんにちの生産様式は、生産者を大きな団体に集中することによって共同活動をさせる傾向と、万人（生産者）の万人にたいする激しい闘争をさせる傾向を、同時に生みだす。だがプロレタリアートには、この第二の傾向は影響しなくなる。…この「一面性」の当然の結果として、明らかに、緊密な国際的結束への傾向だけが、種々の文明国のプロレタリアにますますつよく影響し、かれらの陣営においては国民間の遮断、国民間の戦争への傾向は、その作用を及ぼさなくなってしまう）。

14は、綱領第10パラグラフおよび実践的部分の解説である。

〈社会民主党は、本来、その本質全体からいって、ひとつの国際的な党である。だが同時に、それは、ヨリ以上に国民的な党たる傾向をもっている）。

〈社会民主党は、プロレタリアートを侵害しないで、むしろこれを同時に助長しながら、小農民と小市民のためにいちじるしい改善と便宜とをもたらすような、一連の政策をとることを、断固として保証するものである。

この点は、社会民主党が、直接に実現できることとして、現在の国家にたいしてだした要求から、明確にわかる）。

このように述べてカウツキーは、綱領の実践的部分を紹介している。そして言う。

〈手工業者や農民を、その時代おくれの経営様式を存続させながら、生産者として救うことは、経済発展の足どりと矛盾するし、またできない相談である。…ただこれらの「小企業者」大衆は、消費者としては、未だ幾分か救うことができる）。〈小市民、小農民を消費者として向上させることは、経済の発展と矛盾しないばかりでなく、この発展を促進する手段である）。

〈小市民階級および農民階級は、近代国家が存在するかぎり、他の階級にたいして、かれらの利益を、じぶんたちだけで主張するなどということは、とてもできない）。

〈消費者としては、独立小経営の労働者は、プロレタリアと共通の利害を持っている。だからして、かれらがプロレタリアと連携して、つまり社会民主党に加入して、かれらの利益の擁護にはたらくあらゆる理由がある）。

「第5版への序文」（1904年）で、カウツキーは以下のように述べている。

〈「窮乏化論」「崩壊論」にたいするどんな批判も、この本を微塵もあらためるきっかけにはならなかった。というのは、わたくしの本にはもともと、こういう「理論」のどれひとつも述べてはいないからである）。

まず崩壊論について、カウツキーは言う。

〈ちょうどエルフルト綱領の成立した時代には、プロレタリアートは、資本主義の崩壊をまたない

で、多くの国々で、たとえばイギリスでこんにちより強大な政治権力をにぎる見通しがあった。マルクス自身も、イギリスについては、平和的発展の可能性をみとめていた。かれはヨーロッパ大陸の強国については、こういう可能性を信じなかったが、それはなにも特別な崩壊論によったからではなくて、ヨーロッパ大陸の国家権力の特殊な性格をみぬいたからである。…わたくしの本は、社会民主党の見解の原理的な基本だけをのべたもので、一定の局面にたいする戦術の基本をのべたものではない。だから、ここでなんらかの崩壊論を打ちたてたり、弁護したりする理由はまったくない〉。

次に窮乏化論について、次のように述べている。

〈エルフルト綱領の起草された時代にはすでに、徹底したマルクシストたち〔！〕のあいだでは、プロレタリアートの解放が、増大する窮乏によってではなくて、激化する階級対立と、それから生じるプロレタリアートの階級闘争によってもたらされるものだという点について、早くから意見は一致していた。むしろ、マルクス以前の社会主義のものである大衆の窮乏化論を階級闘争の理論で、このように克服することこそ、マルクシズムのもっとも大きな功績のひとつだということが、当時、すでにわかっていた。資本に自然必然的に内在している…窮乏、抑圧、搾取の度をますます激しくする傾向を、認識することは、われわれの立場からも重要であった。というのはこういう傾向が、階級闘争のたえざる拡大と深化の必然性を理解させることになるからである〉。

確かに、カウツキーは窮乏化革命論を「原始的な労働者的社会主義」の特徴としていた（第5章の11）

また恐慌論についても、次のように言う。

〈恐慌論は、〔マルクスにより〕半世紀の経験をもとにしてたてられたものである。…この理論は、1898年に突然、誤りだと、宣告された。それは、当時、三年間…繁栄がおとずれたからである。当時、ドイツ社会民主党がこの批判におそれをなして、エルフルト綱領の恐慌をとりあつかった文句を、それにあわせて修正していたとしたら、二年後にはまたまたこの文句を修正しなおすという醜態をえんじていただろう〉。

さらに、以下のように述べている。

〈ただ一点、旧版でいったことを、幾分制限しなければならない所があった。それは農業における小経営の衰退についての見通しである。農民的小経営の解体は、最近20年間は、以前ほど急速にはすすまない。むしろばあいによっては、小経営は強固にさえなった〉。

従って第5版では、1895年の統計資料に依拠した叙述になった。カウツキーは、資本の集中が、一方では古い小経営を駆逐し、他方では新しい小経営を生み出す、ということで、論を進めている。エルフルト綱領で述べているのは、古い小経営＝「自己の生産手段にたいする労働者の私的所有を基礎とする小経営」の没落の自然的必然性なのである。〈最も重要な生産手段を資本に所有されてるようなあたらしい小経営については、これはあてはまらない〉。

カウツキーは、あたらしい小経営が産業予備軍の供給源となることを強調している。

最後にカウツキーは、〈綱領の総論そのものは、『資本論』の「資本主義的蓄積の歴史的傾向」に

ついで有名な節を解釈したものすぎない)。と締めくくった。⁵

以上、カウツキーのマルクス主義解説が、一定の通俗化・俗流化を伴っていることは否めない。しかしここでは、以下の指摘にとどめておく。

〈「資本主義的蓄積の歴史的傾向」についての有名な節〉の「解釈」が宿命論的であったことは、カウツキーだけではなく、スターリン主義においてもそうであった。カウツキーの宿命論的傾向の特徴は、その階級闘争論にある。

「留意すべき」点として指摘しておいたように、カウツキーは、生産手段の私有制の没落は〈まきりきったことである〉とか、こんにちの社会の崩壊は〈さけ難い〉とか、資本主義文明の持続は〈不可能である〉とか述べつつ、それを、人（被搾取者）の反抗の「必然性」から説明している。つまり、人間の特性を始元とし⁶、「欲望」概念をも用いつつ⁷プロレタリアートの階級意識の発展＝プロレタリアートの変革主体への成長を自然必然的な過程として考えているのである。だから、最終目標を確認していれば、改良闘争に邁進していても改良主義には転落しないことになる。

アーベントロートは、エルフルト綱領の原則的部分（理論的部分）と実践的部分とに内的な関連がない、あるいは対立しているという批判に対して、綱領を擁護して次のように述べている。

〈綱領の理論的部分は、全綱領の統一の中で、綱領が党員の精神的教育を導くことを通じて、かれらにその政治活動全体への意識を与える平衡錘であった。綱領の理論的部分は、一方では社会の階級的な性格を除去することなく、既存社会での単なる量的変革に自らを限定しようとすることに警告を発するものであった。しかも他方では、この部分はまさにそうすることによって、また政治権力獲得による状態の質的变化に先だって、直接的革命行動の客観的可能性の現れるに先だって、日常的諸要求のための闘争を精力的に遂行する力を、党員達に与えるものであった。これに対して逆に綱領の実践的部分は、直接に大衆に定式化することによって、理論的部分が単なる期待の抽象的宣言に墮さぬように、政治的信仰団の日曜礼拝の告白に墮さぬように保証する機能を持っていた〉。

〈労働者階級による政治権力の奪取が経済機構の生産手段の社会化の前提である、という接続作用をもつ思想が、内的必然性をもって、第二部における民主主義への現実的諸要求、すなわち、経済的にまだ抑圧されている階級（そして婦人たち）による、民主的自由権使用のための前提の確保の要求へと導いているのである。この場合、全ドイツの民主主義共和国の要求〔エンゲルスの指示〕が、合法性の考慮から率直に表明されていないことは、すでにしばしば論じられている所である。それに実質的には、綱領第二部において完全に限定づきで婉曲に書かれていたのである〉（以上『ドイツ社会民主党小史』）。

⁵ 上記のことに直接関係はないが、『剰余価値学説史』第18章に、次のような記述がある。〈一方の側の労働者と他方の側の資本家および地主との中間にあつて、つねに増大する規模で大部分収入によって直接に扶養されている中間的諸階級、すなわち、労働している下積み層のうえに重荷となつてのしかかり、上流社会の社会的な安全と権力をを増加させる中間的諸階級が、不断增加している〉。

⁶ 人間は〈一定の欲望と情熱とをもち、人間の最善のために使おうと思つて一定の肉体的な、精神的な力をもっている人間である。〉（『エルフルト綱領解説』カウツキー）

⁷ 〈…プロレタリアートの道徳的向上とは、…かれらの「欲望」をめざすということであり、その欲望を増大させるということにほかならない〉（『エルフルト綱領解説』カウツキー）

これほどエルフルト綱領を賛美する論者は珍しいが、原則的部分と実践的部分とが相互補完的關係にあるとは、私も思う。それ故、綱領およびカウツキーの解説は、党員が日常的諸要求のための闘争を終局的目標の実現のための一環であるとみなす機能をはたしたのであった。

すでに見たように、綱領第8パラグラフは、〈労働者階級の闘争…の、自然的必然性にもとづく目標を示すこと〉をSPDの任務としていた。問題は、これを紙の上や決まり文句ではなく、どのような方法で遂行するかということであった。初めての大衆的労働者党・社会主義政党といってよいSPDは、この課題に答えることができなかったのである。

SPDに要求されたのは、綱領を指針とした⁸宣伝・扇動を恒常的・系統的に遂行しうる党組織とその活動方法を確立することであった。しかし、SPDがそれに成功しなかったことは、歴史が証明している。エンゲルスにしても、大衆的労働者等の活動は未経験であり、その指導は個別的なものになりがちであった。

参考のために記しておく、カウツキーはプロイセン邦議会選挙参加をめぐる、政治家とアジテーターを対比して、次のように述べているという。

〈政治家のそれ〔立場〕は、彼らの政党をできるだけ合目的な方向へ向けようとしており、少ない犠牲もしくは力の行使で最大限の成果をあげようとするものであり、彼らは自派だけで政策達成が困難なとき、「他党との協力でそれを達成しようとする」。これに対してアジテーターの立場は自派を他派から区別し、他党を支持する大衆を自派に引き入れることを目標としている〉。

〈勢力拡大を主目標にする「アジテーター政党」的要素とともに、政策実現を主に考える「政治家政党」的要素も生じてきた…。そして「SPDを大きく強くしたのは、政治家よりアジテーターである。そして、いまや党内で、アジテーターの見地やわれわれの党の伝統とまったく違った、単純ではない政治家の見地から選挙戦術をとる論議が生じてきたのである」と考える〉（以上、山本左門前掲書）

これは、プレハーノフ＝レーニンの煽動家規定とかなり異なる。

なお、SDAPは「信任者」を媒介とする組織方式をとっていた。〈この信任者（Vertrauensmann）という言葉は、ここで用いられている意味では、事実上翻訳不可能である。…それは、他の何人かの隠れた社会主義者に対する連絡員として、彼らに党の動向を伝え、非合法文書の配布を手助けする人々のことを指していた。明らかにこれらの人々は、党関係者のあいだでは非常に尊敬され信頼されていた〉（スティーンソン前掲書）

ロシアの「アーгент」（エージェント、「受任者」と訳される）に似ているではないか。

〈近代社会における諸階級の存在も、それら相互間の闘争も、その発見は僕の功績ではない。…僕があらたにやったのは、つぎのことの論証だ。①諸階級の存在はただ生産の特定の歴史的諸発展段階に結びつけられているにすぎないこと。②階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁にいたらしめること。③この独裁そのものは、ただ、すべての階級の廃止と無階級社会への過渡をなすにすぎないこと〉（マルクスからヴァイデマイアーへの手紙、1852年3月5日）。

⁸ 「社会民主党的な考え方に親しもうとする人のための指針書、および他人をこういう考え方に引きこもうとするアジテーターのための指針書」（『エルフルト綱領解説』カウツキー）

「必然性」が好きなカウツキーは、なぜ、プロレタリアートの独裁に言及していないのか？

上の手紙は知らなかった可能性があるが、「ゴータ綱領批判」と『フランスの内乱』ドイツ語第3版のためのエンゲルスの序文は、ほぼ同時に『ノイエ・ツァイト』に発表されていた。

【注 エンゲルスの序文は、つぎのようなパラグラフで終わっている。

〈ドイツの俗物は、近ごろプロレタリアートの独裁ということばを聞いて、またもや彼らにとって薬になる恐怖におちいつている。よろしい、諸君、この独裁がどんなものかを諸君は知りたいのか？ パリ・コミューンを見たまえ。あれがプロレタリアートの独裁だったのだ〉(MEW、Bd.22)。訳注によれば、〈同誌 [『ノイエ・ツァイト』] 編集部は、最後の段落のテキストを無断で修正した。すなわち、編集部は手稿で用いられた「社会民主党の俗物」という定式を、「ドイツの俗物」ということばに置きかえたのである〉。】

「党内や政府からの圧力 [党内右派への配慮と弾圧恐怖症]」（スティーンソン前掲書）も一つの要因であろうし、パリ・コミューンを支持したことによって弾圧された経験がり、また、SPD内にはブランキ主義への拒否感もあったようである。しかし、根本的要因は、カウツキーの政治理論にあった。

国家（権力）の超階級的理解、議会主義への偏重はすでに見た。また、「革命」を「原始的な労働者社会主義」の特徴としている。ここでは、1893年に発表・公刊されたカウツキーの二つの著作をも紹介しておこう。

『ノイエ・ツァイト』に発表された「社会民主党教義問答書」は、『権力への道』（河出書房前掲書所収）に引用されている。その論文でカウツキーは、以下のように述べた。

〈われわれはわれわれの目標が革命によってのみ達成されるということ知っている。だがまたこの革命を製造することはわれわれの力のままになるものでない、ということも知っている。…だから革命を企てまたは準備せんとすることはわれわれには全く思いもよらぬことなのだ。また、…そこでは物的暴力が重要な役割を演ずるか、または、革命が最後には経済的立法的道徳的な圧力手段をもって決着づけられるか、ということももちろん同様に言えないのである。

だが、たしかにこう言える、プロレタリアートの革命闘争においては、軍事的方法が用いられたブルジョア革命闘争の場合とくらべて、経済的立法的及び道徳的圧力の方法が…軍事的方法に勝るであろう、ということは全くありうるべきことだ [!] と〉。

〈プロレタリアートの政治的地位からして、プロレタリアートができるだけ上に述べた「合法的」方法だけを用いて済ませようと努めるであろう、ということが期待される [!]。この努力が妨げられる危険があるのはとりわけ支配階級の神経質的な気分が起こる場合である。…かれらは革命がおそろしいから内乱を誘発しようと考えている〉。

〈今日では一つの要素だけが、プロレタリア大衆をさきに説明した闘争の「平和的」方法から自発的に去らしめうる、と言いうるだろう。わが党の革命的な性格への信念を失うこと、これである。われわれが、あまりに平和に重きをおきすぎれば、それは平和的発展を危険にさらすだけなのだ〉。

〈今日の情勢は、われわれが実際よりも「一層穏健に」見えやすい、という危険を伴っている。…その [運動を拡大する] 際、正当な限度を守ること、将来を見失うことなしに現在の当然性に譲歩す

ること、プロレタリアの立場を放棄することなしに農民と小市民との思考過程に同意すること、あらゆる挑発をできるだけ避けること、しかもわれわれが、闘争の党、現存全社会秩序に対する融和することのない闘争の党であるということを、一般の意識に上せること、これが非常に重要なことなのである）。

コメントは不要だろう。

もう一つの著作、すなわち『議会主義、人民立法、社会民主主義』は、邦訳されていない。亀嶋庸一「世紀転換期の大衆社会化状況と社会主義」（『思想』1985年6月号所収）によれば、カウツキーは、〈真の議会主義は、ブルジョアジーの独裁の道具であると同時に、プロレタリアートの独裁の道具にもなりうる〉と述べているという。

これらは、後述する晩年のエンゲルスが闘争方法について述べてことの、カウツキー流の解釈に基づいていると思われる。

『エルフルト綱領解説』が版を重ねたことが示すように、カウツキーのマルクス主義理解はその後にも変わらなかった。

6) 修正主義論争（その1）

SPDの基本戦術への修正要求は、フォルマルに代表される南ドイツから出された。

〈南ドイツは1890年代を通じて、ドイツの他の先進工業地帯に比べてはるかに遅れた農業地帯であった。…SPDは、小ブルジョアジーが圧倒的に多いこの南ドイツにおいては、自由主義政党から離反し始めた小ブルジョアジーを組織化することによって、その党勢を拡大していったために、北ドイツのSPDと違って、農民、手工業者、手工業労働者などを主たる組織基盤としていた。…南ドイツでは、1848年の革命と反革命に続く反動化の趨勢がプロイセンほど強くはなかったために、北ドイツと比べて自由主義の雰囲気強く残っており、政治活動の自由も相対的に大きかった。こうした状態を背景にして、南ドイツではSPDが、邦国会議において支配的な政党である中央党〔キリスト教民主同盟の前身〕と自由主義諸党との対立を巧みに利用して、政府の政策決定に、ある程度参与することができたので、南ドイツの各邦国のSPDの指導者たちは、労働者階級を中心とする反政府勢力を結集し、その影響力の行使によって、議会を通じて国家を変革することが可能であるという考えを抱くようになった〉（安世舟前掲書）

また、リッター『ディ・アルバイターベヴェーグング・イム・ヴィルヘルミニシエン・ライヒ〔ウィルヘルム帝国における労働運動〕』は、次のように述べている。

〈バイエルン邦議会の〔SPD〕代表団は、南ドイツ諸邦国を帝国の民主化の梃として、また社会進歩のパイオニアとして利用しようと望んだ。各邦国の邦議会という周辺部から帝国の構造を解体してゆこうとするこのような先鋭な反プロイセン的イデーは、フランスを模範にして各邦国の廃棄と立憲議会の制定を志向するベーベルの見解とひとときわ際立って対峙していた〉（相田慎一『カウツキー研究』から重引）。

〈カウツキーは、修正主義を「闘争をさげ、平和的、合法的な道をできるだけ進むことを求める潮流」と規定し、これを「実戦上の修正主義」と「理論上の修正主義」に分けた。Protokoll SPD

1903…〉（山本左門前掲書）ということからすれば、フォルマールは「実戦上の修正主義（者）」といえるが、厳密にはフォルマールは改良主義者である。

フォルマールは、1880年代には急進派であった。既述したように、当時党内では急進的傾向が増長しており、また、急進的＝マルクス主義的という観念が形成されていた。しかし〈この急進主義の諸要素は、…反君主制的、反キリスト教的要素、およびビスマルクと彼によって代表される国家権力とにたいするファナティックな憎悪から成っていた〉（シュタインベルク『社会主義とドイツ社会民主党』）。フォルマールは、このような「革命的気質の代表者」（同）の一人だったのである。

〈急進主義からのフォルマールの後年の離反は、現実的改良主義者（ポシビリスト）マロンと親密な関係を持つようになったパリ滞在中に用意されたものであった〉（同）。海外では、フォルマールに関する著作が多数出版されているようであるが、まったく邦訳されていない。したがって、フォルマールとマロンとの関係等については不明。⁹

1892年7月、フォルマールは『ミュンヘン新聞』に「国家社会主義論」を発表する。

〈彼は、この論文の中で、まず、ドイツ経済の高度資本主義段階への移行とともに、国家によって企てられた一部の企業や産業部分の国営化を社会主義現象の生成とみなし、これを国家社会主義として規定した。次に、SPDが政治闘争を通して帝政国家から戦いとった社会立法を社会主義的内容の実現と皆した。そして、ウィルヘルム体制による国家社会主義的方策の拡大と社会改良の積み重ねによって、一部分づつ、次から次へと政治権力を略取し、社会主義へ成長移行することが期待できると主張した〉（安世舟前掲書）。

『フォルヴェルツ』は直ちにこのフォルマール論文を批判し、同年11月のベルリン党大会において、次のような「国家社会主義非難決議」が、リープクネヒトとフォルマールの連名で出され、採択された。

〈いわゆる国家社会主義は、国庫目的のために国有化を求めている限り、私的資本家に代わって国家を置き、それに権力を与え、労働大衆に経済的搾取と政治的隷属化の二つをもたらすものである。…国家社会主義者は小規模な譲歩とあらゆる一時しのぎのやり方で社会民主党と労働者階級を引き離し、これによって社会民主党を麻痺させようとしている。…社会民主党と国家社会主義者は和解しがたい対立物である〉。

91年、92年と敗北したフォルマールは、自らの支持基盤を確保するために組織活動に専念した。まず、バイエルンSPD独自の党大会を開催（92年）して指導権を確立し、さらにそれを、南ドイツ各邦のSPDへと拡大した。そして1894年、バイエルンSPDは、邦国予算案に賛成投票するに至る。

この問題は、同年10月のフランクフルト党大会で議論された。ベーベルは、国家予算案への賛成投票は帝政国家への信任投票であるが故に、国家予算案には断固として反対投票しなければならないというエルフルト党大会の確認に基づき、バイエルンSPDを非難する決議案を提出した。これに対しフォルマールは、帝国議会においては原則が決定的であるが、行政上の政策が遂行される邦国議会に

⁹ マロン（1941～1893）はパリ・コミューン議員であったが、後にポシビリストの指導者となった。現実的に実現可能な要求を掲げるのがポシビリストであり、ポールとラウラ（マルクスの娘）のラファルグ夫妻が批判した。

においては「合目的性」が重要なのだと主張した。両者の決議案はともに否決され、ベーベル決議案の〈総予算の協賛が信任投票とみなされるがゆえに、総括的評決に際しては予算案に反対投票を行わなくてはならない〉の下線部を「かぎり」と修正した決議案が可決された。このことは、改良主義の伸長を示している。

さらに同大会においてフォルマールは、シェーンランク（1859～1901）と共同で、「農民保護」を要求した。すなわち、農民と農業労働者の窮状を「徹底的な改良活動によって緩和」する農業綱領を作成し、エルフルト綱領の当面の要求を「補完」すること、農業綱領作成のための農業委員会を設置すること、という決議案の共同提案であり、これは圧倒的多数で可決された。また、帝国議会のSPDフラクションに農業労働者保護のための立法活動を要求する提案も承認された。

ただし、フォルマールとシェーンランクの理論的認識が一致していたわけではない。〈シェーンランクが農村の階級対立を強調し政策的には農村労働者保護と農民中立化を主張するに留まる…のに対して、フォルマールは農民層分解を事実の上で否定し農民一般の「保護」を要求した〉（高野政子「マルクス主義者の農民観—ドイツ社会民主党の農業綱領論争によせて」、『一橋論叢』第67巻第1号所収）。なおシェーンランクは、報告の最後で次のように述べている。〈我々は単なる灰色の理論ではなく、結局は実践的なアジテーションを追求しなければならない〉。

【注 フランクフルト党大会におけるシェーンランクの主張について、もう少し詳しい内容がわかった。〈シェーンランクは…小農層が小所有地をもっている限り、社会民主党は彼らを獲得することはできないという結論は正しくないとして次のように言う。「幾百幾千の農民は隠蔽された無所有の農村労働者にすぎない。彼らは資本、高利、ラティフィンディア経営によって、すでに絞首刑に処せられているので、政治的にも社会的にも、われわれに親しみ易いものとなっているのだ」。このようにして崩壊に瀕しつつある小農民に手をさしのべ、彼らを中立化するために農民獲得のための農業綱領を要求する〉（原田溥『ドイツ社会民主党と農業問題』）。

農民票を獲得する活動は、SPDが合法化されてから続けられていた。ハレ党大会では、組織的な農村アジテーションの開始が決議されている。エルフルト綱領は、それに理論的基礎を与えるものであった。〈1890年の末には、日曜になると大勢の労働者党員が都市近傍の農村に出かけてゆき、道端や食堂であるいは各戸にパンフレットを配布し、また随所でアジテーション集会を開くという光景が見られるようになった。彼らは社会化、地代、剰余価値等々、マルクス主義の理論を抽象的にならべたことで農民に没落の不可避性を認識させ、「社会主義」の未来に希望をつながせようとした。しかし彼らが農民の中に見出したものは、一般に当惑と不信感であり、ときには敵意ですらあった〉（同）。〈当時のSPDは、農民に対する宣伝と農村労働者に対するそれとを明確に区別していなかった。保守党〔ユンカーを代表〕や中央党はこうした点を捕えて、農民にSPDは「宗教、所有、家族、習慣の敵」であると宣伝した〉（高野政子前掲論文）。

おりしも当時は、「農業聞き」のまっただ中であつた。新宰相カプリヴィは、いわゆる「新航路（ノイエ・クルズ）」政策（対内的には労働者への緩和の意味をもつ）を遂行したが、それは一言で言う

ならば、農業を犠牲にしての工業の発展を図るものである。政策の目玉の一つである農業関税の引き下げは、ヨーロッパの凶作により穀物価格が暴騰した1891年には抵抗がなかったが、直後の世界市場における穀物価格の暴落によりドイツでも農産物価格が暴落し、農業者はその原因を関税引き下げにあると捉えた。かくして憤激したユンカーは、農業者同盟を設立する（1893年）。農業者同盟は自由労働組合に次ぐ大衆団体となり、保守党も近代的大衆政党へと脱皮することとなる。

SPDにしてみれば、「農業聞き」は農民の没落というテーゼが証明されたと思われ、農村アジティションを促進することになったが、それは、クライマックスとともに危機を迎えた。1893年のケルン党大会は、同年に実施された帝国議会選挙での結果が目標に遠く及ばなかったことによって、農村アジティションが失敗に終わったことを認めざるをえなかった。注目する必要があるのは、農産物価格の下落が、労働者と農民とでは対立する意味をもつということである。

フランクフルト党大会後のベーベルの態度はジグザグしている（確固たる農業政策が無いのだから当然であるが）。大会直後、ベーベルはフランクフルト決議を、「水割り」「日和見主義への傾斜」として公然と非難した（ベルンシュタインも同決議を批判する論文を書いている）。「農民保護」を理論的に基礎づけるべく、論文を発表したのがダーフィット（ダーフィットとも。1863～1930）である。彼の主張は、次のようなものであった。

機械生産による工業の発展法則と有機的生産である農業の発展総則とはまったく異なる。小農経営が存在すること自体がすでにその生存能力を示すものであり、大農経営より現在の経済的条件によりよく適合するものである、と（彼の論拠はかなりいかがわしいが、修正主義の“はしり”といえよう）。

これに対してカウツキーが批判にたち、『ノイエ・ツァイト』誌上で論争が繰り広げられた（カウツキーはすでに、フォルマールらと手を切るべきであると、ベルンシュタインやエンゲルスに述べていた）。しかしながら両者ともに農村の窮状にほとんど触れず、大経営と小経営との競争力の問題や、農民層分解に関するマルクス理論の正当性の問題に終始したのであった。

【注　ダーフィットは次のように述べているという。〈カウツキーの言う精神を革命化するというようなやり方では、われわれは大衆の共鳴を得られなかった。…精神の革命化なるものによっては、われわれはとるに足りない数の弟子を得るにすぎないであろう。大衆の中に未来への希望を喚び覚すことや、彼らにとてあまり理解しやすすくない理念によるのでは、われわれは彼らの共鳴を得ることはできない。大衆の革命化は、精神から始まるのではなく、胃袋から始まるのである。精神の革命によって、我々は学問的社會主義者の一派にすぎなくなり、大衆運動をもち得ない〉（ブレスラウ党大会議事録）。これは、ロシアの経済主義者の思想に類似している。

さらに、ブレスラウ党大会におけるクララ・ツェトキン（1857～1933）の発言も注目しに値する。〈ツェトキンは、原則の立場ではカウツキーを支持して、農業委員会草案をきびしく非難したが、ダーヴィドにみられる行動意欲と善意を認めようとしている。「この問題（農業問題）に対するわれわれの態度を理論と実践において確立するために、批判的にこれ

を研究しなければならない。しかしそれを解決する目的で実験することは許されない。ここでは良き意志だけが問題ではないのだ。同志ダーヴィドは、社会民主党は知識の党ではなくて、意欲の党であるという。私の意見では、社会民主党は目的意識的知識の党であるがゆえに、目的意識的意欲の党であるのだ。かの女は、草案が非難されるのは、「その良き心情」のゆえにではなく、それがもつ「階級闘争への影響」だともいう。そしてその発言をつぎのごとくむすんでいる。「われわれの党の革命的な性格を固守しよう。それが損なわれぬ限り、いつでもどこでもわれわれは、改良家・実務家になろう。われわれは、一にも二にも三にも革命的でなければならない」と（山口和男『ドイツ社会思想史研究』）】

1895年7月、農業委員会は農業綱領草案を発表した。（それらは形式的には、私的所有の廃絶を謳うエルフルト綱領の原則部分にも続きながら、…事実上は現存国家に所有者としての農民の「保護」を要求するものであり、しかも大規模経営農民をより利するものであった）（高野政子前掲論文）。要するに、国家社会主義的なものだったということである。

草案が発表されてから、各地の党員集会では激しい批判が展開された。約8割の集会が草案を拒否したという。その批判は、労働者当院の「所有者」に対する感覚的反発に基づくものであった。このような雰囲気の中で、カウツキーは、〈社会民主党的農業綱領は資本主義的生産様式の下では不可能である〉と断定するに至る。¹⁰

1895年10月のプレスラウ党大会では、シェーンランクやベーベルなどが、農業綱領草案を擁護した（フォルマールは病欠）。激しい論戦の末、大会は、草案の拒否のみを内容とするか鬱キーの決議案を圧倒的多数で採択することになる。かくしてSPDの農業政策は袋小路に陥ってしまった。（農業政策が党にとって重要性を喪失したことは、既に1896年の党大会が1890年以降始めてそれを単に副次的に取扱ったに過ぎなかった点に端的に示されよう。農業問題に対する党の姿勢にこのような変化をもたらした原因としては、…ドイツを中心にヨーロッパ農業の経済的状態が90年代の半ばから好転し、国家的農業保護の具体化〔カプリヴィの失脚と政策転換〕も手伝って農業危機の状態を脱しつつあったことが第一に上げられる。）（河西勝「ドイツ社会民主党の『農業論争』に関する若干の考察」、北大『経済学研究』第23巻第1号所収）。

「農業危機」は、「農業構造の永続的危機を呼び起こした『工業革命』の進展」（同）という内的要因と、「世界市場の価格形成」（同）という外的要因とによってもたらされた。この点を指摘しながら河西は、農業論争を以下のように総括している。

〈19世紀末、特に90年代前半のドイツにおいて顕著に現れたごとき農業と工業の経済的対立関係——農民と労働者の利害対立はその一環をなすに過ぎないだろう——は国家として政治的に解決せざるを得ない体制的問題をなしたのであるが、その国難性は、まさにこの対立関係のひとつの本質的根拠をなす「農業危機」が「内的原因」のみならず「外的原因」をもっていたことから容易に推測されるであろう。世界市場構造およびそこにおけるドイツの位置を少なくともひとつの根本的要因とし

¹⁰ 論争中にレーデブーア（1850～1947）が、〈司祭のように行動し、社会主義理論の法王になろうとしている〉とカウツキーを批判したことがあったらしい。

て惹き起こされたドイツ国内のこのような経済的分裂をいわば一國資本主義的に解決することは全く弥縫策に留まるだろうし、またこれが国家による経済への介入の全面化の傾向をもたらすことは当然である）（同）。

これがフォルマルらの親農民的＝反労働者的な国家社会主義的農業政策の客観的背景なのであったが、カウツキーのみならず、次に扱うエンゲルスも見落とした。〈「農業論争」は主に「農業危機」や実践的要求とはほとんど切断された観念的なモデルの設定のなかで、マルクス農業理論の当否を穿さくしたに過ぎず、その意義は本質的にはむしろ当時の一般的な農工対立内での農民と労働者の対立関係をイデオロギー的に反映したに留まる。そしてこの無内容な「農業論争」における農民層分解論を帝国主義段階論をもって止揚しようとするわが国の論者〔大内力、渡辺寛〕も、「改良主義的農業政策」をほとんど問題とすることなく、また農業問題は「農業危機」とは分離しえない関係にあることを曖昧にし、「農業問題とは何かということは抽象的にはいろいろ議論できよう」といいつつ、それを「中農標準化傾向」なる帝国主義段階一般の問題に解消してしまうのである）（同）。

以上、参考までに紹介した。なお、カウツキーの現状認識が抽象的なのは、農業問題に限ったことではない。周知のように、ドイツは「農業危機」をいわば帝国主義的に“解決”した。

7) エンゲルス晩年のドイツ革命構想

i) エンゲルスのビスマルク帝国論

エンゲルスは、ビスマルク帝国を「ボナパルティズム」と呼んでいた。これが、まず確認すべきことである。例えば、次のように述べている。

〈外見的立憲制は古い絶対君主制の今日における解体形態であるとともに、ボナパルティズム君主制の存在形態でもある。プロイセンでは1848年〔3月革命〕から1866年〔普墮戦争〕までの外見的立憲制は絶対君主制の緩慢な腐朽を隠蔽し媒介したにすぎない。しかし1870年〔普仏戦争〕以来とくに社会状態の変革が、そしてそれとともに古い国家の解体が万人の見るなかでますます大規模に進んでいる。…一口でいえば古い国家の分解、絶対君主制からボナパルティズム君主制への移行がさかんに進行しているのである）（「住宅問題」MEW,Bd.18）。

エンゲルスはこの「移行」の要因を、ドイツの工業化とそれに伴う階級構造の変化に見た。

〈1866年の大国事劇よりもはるかに重要なのは、1848年以来のドイツの商工業、鉄道、電信、大洋汽船交通の進歩である。…今はじめてドイツは本格的に、きっぱりと世界貿易に引き入れられた。産業家の資本は急速にふえ、ブルジョアジーの社会的地位はそれに応じてたかまった）（「『ドイツ農民戦争』第2版への序文 MEW,Bd.16）。

〈プロイセンには今なお強大な大土地所有貴族のほかに、比較的若くて、しかもことのほかに臆病なブルジョアジーがいる。…だが以上二階級のほかに急速にその数を増やしつつあり、いちじるしく知的発達をとげ、日々ますます組織性を加えつつあるプロレタリアートが存在する。したがって、ここには古い絶対君主制の基本的条件である土地貴族とブルジョアジーの均衡とならんで、現代ボナパルティズムの基本的条件であるブルジョアジーとプロレタリアートの均衡も見いだされるのである）（「住宅問題」）。

〈もはやひしひしと迫ってくる労働者階級から有産階級全体を守ることが必要となったその瞬間から、旧絶対君主制はわざわざその目的のために作りだされた国家形態であるボナパルティズム君主制に完全に移行しなければならなかった〉（「『ドイツ農民戦争』1870年版序文への追記」 MEW,Bd.18）。

経済的には没落しつつも政治的支配にしがみつくとンカー、経済的支配を確立しつつも政治的には臆病なブルジョアジー、経済的にも政治的にも台頭するプロレタリアート—これらがエンゲルスによれば、ビスマルク政権の土台たる階級関係であった。しかしこれだけではボナパルティズムと呼ぶことはできない。国家権力の相対的自律性が必要なのであり、エンゲルスは次のように述べている。

〈古い絶対君主制の下でも、現在のボナパルティズム君主制の下でも、現実の政治権力は将校と官吏の特殊なカストの手ににぎられている。プロイセンではこのカストは一部は彼ら自身の中から、一部は小世襲貴族の中から、もっとまれには大貴族の中から、またその極小部分はブルジョアジーの中から補充されている。社会の外部に、いわば社会の上に立っているように見えるこのカストの独立性が社会から独立しているという外見をこの国家に与えている〉（「住宅問題」）。

ビスマルクが推し進めたのは、“上からのブルジョア革命”であった。

〈旧プロイセンにとっては必要物であったンカー階級が、「帝国」にとっては障害物となった。さきにビスマルクが自分の以前の見解に反して、営業の自由、各邦間の移動の自由およびその他のブルジョアの諸改革を…実現せざるをえなかったように、歴史の皮肉がついに、このうえもないンカーである彼に、郡条令によってンカー階級に斧をくわえるという運命を背負わせたのである〉（「プロイセンにおける『危機』」 MEW,Bd.18）〈この法律〔郡条令〕は個々のンカーから封建的特権のおかげで彼に属している権力を奪いとるものではあるが、その目的とする所は郡の自治の形でこの権力をンカーなる階級に返すことなのだ。…このンカーはふつうの現代的地主の水準までひきおろされ、そしてまさにそのことによってンカーたることをやめる〉（同）。

また、ンカー経営のブルジョア化の指摘もある。

〈全ンカー層はいつも破滅の淵に立っているのである。…そこで彼らはたっぷり100年以来、あらゆる国家扶助によってのみ没落から救済されてきたこと、そして実際に国家の扶助によってのみ存続していることは、少しも不思議でない。ただ人為的に維持されているこの階級は没落のさだめにある〉（「歴史における暴力の役割」 MEW,Bd.21）。

〈一方で政府は、カタツムリの駆け足でブルジョアジーの利益になるように法律を改革し、産業にたいする封建的な障害や小邦分立に基づく障害を取り除き、幣制と度量衡の統一、営業の自由などをつくりだし、移動の自由によって労働力を資本の無制限な自由仕様に委ね、商業と思惑を奨励する。他方でブルジョアジーは、実際の政治権力はそっくり政府にまかせ、租税や公債や軍備に賛成投票し、そして新しい改革法の作成にあたっては、いつもこのましからぬ人物にたいして旧来の警察権力がそのまま維持されるような仕方で、それを作成するのを助ける。ブルジョアは、自分の政治権力を今すぐ断念することによって、自分の徐々の社会的解放を買いとるのである。ブルジョアジーがこういう契約を受け入れる気になった根本の動機は政府ではなくプロレタリアートに対する恐怖だということはもちろんである〉（「『ドイツ農民戦争』1870年版序文への追記」 MEW,Bd.18）。

〈ブルジョアジーの自由主義的な要求は、今後長期にわたって葬り去られていたが、彼らの民族的要求は日をおってますますみだされていった。彼ら自身が驚くほどの速さときちようめんさで、ビスマルクは彼らの民族的綱領を実行した〉（「歴史における暴力の役割」MEW,Bd.21）。

〈どんなテンポであろうと、この〔ビスマルクの〕政策が意識的に断固として究極的なブルジョア支配をめざしてすすむならば、それは、有産階級の立場からおよそ可能であったかぎりでの歴史的発展と一致していた。この政策が旧プロイセン国家の維持、ドイツの漸次的プロイセン化をめざしてすすむならば、それは反動的であり、結局は挫折する運命にあった。この政策がビスマルクの支配の単なる維持を目ざしてすすむならば、それはボナパルティズム的であり、あらゆるボナパルティズムと同様の終りを告げざるを得なかった〉（同）。

第一の道だけが、帝国を「確実に存続する見込みがある」ものだったが、ビスマルクはそれを選ばず、政権は崩壊した。ブルジョアジーは依然として臆病である。これが、エンゲルスの見た1890年代に入ってからドイツの政治状況であった。

【注 上の引用はいずれもかなり有名なものであるが、その表示にとどまることは一定のリスクを負う。なぜなら、この領域については様々な長い歴史的論争があるからである。しかし、ここではエンゲルスの主張が確認されればいい。テキスト・クリティークについては、とりあえず、西川長夫「ボナパルティズム概念の再検討」（『思想』583号所収、後に『フランスの近代とボナパルティズム』に収録）などを参照】

次に確認すべきは、エンゲルスがドイツの当面の目標として「民主的共和制」を掲げていたことである。その際エンゲルスは、二つの論拠を示しているように思われる。

一つは、歴史で発展との一致、「その政治状態をその産業状態に適応させること」が、「究極的なブルジョア支配」、「近代的ブルジョア国家」に導くという観点である。もう一つは、〈マルクスと私とは、40年も前から、われわれにとって民主的共和制は、労働者階級と資本家階級との闘争が、まず一般化し、ついでプロレタリアートの決定的な勝利によって、その終末に到達することのできる唯一の政治形態であるということを、あきあきするほど繰り返してきている〉（「尊敬するジョヴァンニ・ボーヴィオへの回答」MEW,Bd.22）という観点、つまりプロレタリアートの歴史的使命からの観点に他ならない。

〈もしこの世に、なにか確かなことがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級とが、ただ民主的共和制の形態のもとでのみ支配権に到達することができるということである。この民主的共和制は、すでにフランスの大革命がしめしたように、プロレタリアートの独裁のための特有の形態でさえある〉（「エルフルト綱領批判」）

エンゲルスの場合、ブルジョア共和制からプロレタリア共和制への移行は、連続的なものと考えられていた。

〈我国でも革命の第一の直接の結果は形式上はブルジョア共和制以外のなにものでもありえないし、またあってはならない。しかし我国ではそれはただ短い過渡の一刹那にすぎない。ここには幸い純共和主義的ブルジョア党がないからである。おそらく進歩党を頭にいただくことになるブルジョア

共和制は、さしあたっては我々が労働者大衆を革命的社会主義に獲得するのに役立つ、それが、1、2年のうちに清算され、我々以外になお存在しうるすべての中間諸政党は完全に消耗して自滅の途をたどるだろう。そのときはじめて我々の番がやってきて、成功をおさめることができるのである）（1883年8月27日付ベルンシュタインへの手紙）。

〈ドイツでは、ブルジョア諸政党は完全に破綻してしまっているの、我々は、君主制から直接に社会的共和制に移行しなければならないでしょう。そうなれば諸君〔フランス人〕は、諸君のブルジョア共和制を、他の諸国民にとっての努力目標として、もろもろの君主国に対置することは、もはやできなくなるでしょう〉（1893年6月27日付ポール・ラファルグへの手紙）

今日から見れば、エンゲルスの予測は楽観的にすぎた。しかし、決定的な問題は、カウツキーをはじめとして、SPD指導者のだれも、国家権力の問題について考察しなかったことである。そうであるが故に、エンゲルスは次のように警告した。

〈こういう状態では、決定的な瞬間になって党が突然途方にくれてしまうという結果しか、また一度もそれについて討議したことがなかったために、もっとも決定的な諸点について不明瞭と不一致がみなぎっているという結果にしか、なりようがないではないか〉（「エルフルト綱領批判」）。¹¹

ii) 農民問題について

ここで検討するのは、エンゲルスの「フランスとドイツにおける農民問題」（MEW, Bd.22）であり、様々な解釈と論争がある論文である。この論文は、フランクフルト党大会においてフォルマルが、フランス社会党ナント大会の決議にエンゲルスが承認を与えたという“フェイク・ニュース”を論拠に、農民保護の必要性を主張したことに対する反駁を目的としていた。エンゲルスは1894年に執筆している。まず内容を紹介しよう。エンゲルスは冒頭で、次のように述べている。

〈アイルランドからシチリアまで、アンダルシアからロシアとブルガリアまで、農民は、人口、生産、政治権力の非常に重要な要因となっている。ただ西ヨーロッパの二つの地域だけが、例外をなしている。すなわち、イギリス本土では、大土地所有と大規模農業が自営農民を完全に駆逐してしまった。また、エルベ以东のプロイセンでも同じ過程が数世紀このかた進行中で、ここでは農民はますます「追いたて」られるか、あるいはそうならないまでも経済的に、政治的に後景へと追いやられている〉。

〈資本主義的生産形態の発展は、農業における小規模経営の命脈を断ち切った。…大土地所有者と小農は、どちらも同じように没落を目前に見ている。…社会主義党による政権の獲得は、まぢかい将来に迫っている。しかし、政権を獲得するためには、この党は、前もって都市から農村に出てゆき、農村で一つの力とならなければならない。…経済的要因と政治的結果との関連をはっきりと見ぬいている点で他のあらゆる党にまさり、それ故に、農民のおしかけ友人たる大地主の羊の皮の下にある狼

¹¹ テーマからは外れるが、一応記しておく。1890年以降、シュミット、ブロッホなどにあてた唯物史観についての一連の手紙（マルクス主義史上では「老人書簡」と呼ぶらしい）がある。単純な経済決定論をいましめたものに他ならない。また、1892年出版の『空想より科学へ』英語版の序文で、エンゲルスはカッコ付きながら「史的唯物論」という用語を用いた。これがこの用語の公式文献での初出という（序文の独訳のタイトルは「史的唯物論について」）。しかし、私信ではすでに1890年9月21日付ブロッホあての手紙で用いている。

の姿をもとくに見やぶっているこの党…が、没落の運命にある農民をその偽りの保護者の手中にまかせておき、ついには農民が工業労働者の消極的な敵から積極的な敵に変わるのをそのまま放っておいてもよいものだろうか？）。

続いてエンゲルスは、農村住民は雑多な構成部分からなっていることを指摘し、〈農村住民のこれらの小区分のうちで、どれどれを社会民主党に獲得できるだろうか？〉と問題を立て、小農の分析に移っている。

〈小農は、一般に西ヨーロッパにとってすべての農民のうちで一番重要であるばかりか、この問題全体にとって決定的な場合である〉。それ故、小農についての叙述が、論文全体の過半を占めている。エンゲルスは、以下のように論を進めた。

〈わが小農は、過去の生産様式のあらゆる遺物と同じように、救いようもなく没落の道をたどっている。彼は未来のプロレタリアである。

そういうものとして、彼は社会主義の宣伝に喜んで耳を傾けるはずである。しかし、今のところはまだ彼は、その血肉にしみこんだ所有意識に妨げられて、そうできずにいる。…社会民主党は、…自分自身の主張を裏切ることなしに、没落してゆく小農に何を提供することができるか？

この点で我々は、フランスのマルクス主義派の社会主義者の農業綱領に実践上の手がかりを見いだすのである。この綱領は、典型的な小農民経済の国からでたものであるだけに、なおさら注目する値うちがある〉。

エンゲルスによれば、フランスの農業綱領の誤りは次の点にあった。①「救いようもなく没落する運命にあると自分で言明しているその状態を維持するつもりだという約束」に示される自己矛盾、②「社会主義的労働者等が、農村プロレタリアや小農以外に、中農や大農をも、それどころか大領地の借地農や資本主義的牧畜業者やその他の国民の土地の資本主義的利用者たちまでも、自分のふところにだきとる任務をもっている」と曲解されかねないくだり。小農についての結論部分で、エンゲルスは次のようにいう。

〈それでは、小農に対する我々の態度はどういうものか？ また、国家権力が我々の手に入った時、我々は小農をどのように取り扱うべきであろうか？

第一に、フランスの綱領の命題、我々は小農の没落が避けられないことを予見しはするが、我々の介入によってこの没落を速めることは決して我々の使命ではない、という命題は無条件に正しい。

また第二に、我々が国家権力を握った時に、…小農をも力づくで収奪する…などということは、とうてい考えられないことも、同様にはっきりしている。小農に対する我々の任務は、何よりも、力づくではなく、実例とそのための社会的援助の提供とによって、小農の私的経営と私的所有を協同組合的なものに移行させることである〉。

〈公権力がだまし取る側〔資本家と大土地所有者〕の味方をするか、それともだまし取られる側の味方をするかは、常に大きな違いであろう。我々は、むろん、断固として小農の味方をする。…我々がそうするのは、自分で働く小農を我々の潜在的な味方と見ているからだけではなく、またそれが直接に党の利益となるからである。我々のおかげでプロレタリアートのなかへ現実おちこまずにすみ、すでに農民のままで我々の味方に獲得できる農民の数が増えれば増えるほど、社会の改造はそれだけ

速やかに、容易に行われるようになる〉。

〈資本主義が支配している限り農民の状態は絶対に望みがないということ、かれらの分割地所有をそのまま維持するのは絶対に不可能だということ、また資本主義的大規模生産がかれらの無力な古臭い小経営を押しつぶすのは、汽車が手押し車を押しつぶすのと同じように絶対に確かだということ、農民にくりかえしくりかえし説明することこそ、わが党の任務なのである。そうすれば、我々は、不可避的な経済的発展の趣旨で行動することになる。また、この発展が確かに小農の頭を、我々の言葉を受け入れられるようにしてくれるだろう〉。

次に、中農と大農について。

〈大農と中農も、やはり資本主義的経営が海外の安い穀物生産の競争に必ず敗れるのは、経済学上確かなことであって、…この衰退を防ぐために我々にできることは、ここでもその農場と一緒にまとめて協同組合経営にするよう勧めることだけである〉。

最後に、大土地所有について。

〈これは、あからさまな資本主義的経営であって、そこではどんな遠慮も必要でない。ここで我々が当面するのは、農村プロレタリアの大衆であって、我々の任務は明瞭である。わが党が国家権力を握るや否や、党は大土地所有者をあっさり収奪しなければならないことは、工業における工場主の場合とまったく同じである。…このようにして全社会に返還された大農場は、現在すでにそれを耕している農業労働者を協同組合に組織した上、かれらに引き渡して、全社会の管理のもとで用益させなければならないだろう〉。

以上は、西欧において一般的に適用しうる宣伝内容といってよい。だがエンゲルスはさらに、大土地所有について述べているなかに、個別ドイツの問題に言及している。

〈我々が東エルベの農業労働者を獲得するなら、たちまち全ドイツで風向きが変わる。東エルベの農業労働者の事実上の半農奴制は、プロイセンのユンカー支配の、それとともにまたドイツにおけるプロイセンの独得の覇権の、主要な基礎である。負債、貧困化、国費と私費をつぎこんでの寄生生活にますます深くおちこみ、それだけにますます必死で自分の支配権にしがみついている東エルベのユンカーこそが、官僚および軍隊将校団のプロイセン独得の性格をつくりだし、また維持しているものである。…これらのユンカーの力は、かれらが旧プロイセン七州というまとまった地域---つまり、帝国全領域のおよそ三分の一---で土地所有をその手におさめていること。---ここでは、土地所有は社会的および政治的権力を伴うのだ---、また土地所有ばかりか、テンサイ糖工場と火酒蒸溜所とを手段としてこの領域の最も重要な諸工業をもその手におさめていることに基づいている。…だが、プロイセンのユンカーのこの権勢は、その経済的な基盤をますます失いつつある。…立法と慣習によって承認された事実上の半農奴制と、そのおかげで可能となっている農業労働者の際限のない搾取とだけが、沈みゆくユンカーをまだやっと水面に浮かせているのである。社会民主主義の種子をこれらの労働者の間に播き、かれらに自分の権利を主張する勇気と団結を与えるがよい。そうすれば、ユンカーの栄華はおしまいになる。…プロイセン軍隊の「精鋭連隊」は社会民主主義化してしまい、それとともに、一大変革をはらむ権力の移動がなしとげられる。だから、東エルベの農業プロレタリアを

獲得することは、西ドイツの小農や、いわんや南ドイツの中農を獲得することよりも、格段に重要である。ここエルベ以東のプロイセンに、我々の決戦場がある）。

エンゲルスは、SPDによる権力奪取の展望との関係で、東エルベにおける農業プロレタリアの獲得の重要性を訴えている。この問題こそ、SPDの農業論争が無視ないし軽視したものであった。

エンゲルス論文は、フォルマールの農民迎合論を批判するものであると同時に、カウツキーの農業綱領不要論を先取的に批判している。両者はともに、農民を獲得するためには農民の即時的要求を支持しなければならないという点で、共通していた。フォルマールはそれに肯定的に応え、農民一般の保護を主張したとすれば、カウツキーはそれをエルフルト綱領からの逸脱だとみなし、農業綱領そのものを否定したのである。これに対しエンゲルスは、小農の意識変革の可能性を指摘した。（例えば、「この〔資本主義的〕発展が確かに小農の頭を、我々の言葉を受け入れられるようにしてくれるだろう」）

この点について高野政子前掲論文は、〈だがそもそもエンゲルスにとって問題の出発点は「経済発展」が必ずしも小農の頭を変えなかったところにあったのではなかったか?〉と疑問を呈している。二点だけ述べておきたい。①エンゲルスは小農に対する宣伝の柱として協同組合論を提起していること、しかしそれは協同組合論の提起にとどまっているともいえること、②この問題は、党の活動としては煽動の領域にあること（SPDの「農村アジテーション」は、その実、煽動とはいえなかった）、例えば、先に指摘した農業論争の背景となった「農業危機」についての原因、意味などを暴露すること。

エンゲルス論文についての最大の論争点は、労農同盟論であるが、これについては割愛（私は、労農同盟論なるものが規範的概念として成立しうるかどうか、疑問に思っている）。

iii) 戦術について

エンゲルスの楽観の見通しは、1890年代に入って一段と強まった。その論拠となったのが、帝国議会選挙でのSPDの躍進である（常にエンゲルスの予想を下回ってはいたが）。最も特徴的な部分を引用しよう。エンゲルスは1871～1890年のSPDの得票数の増加を示して、次のように述べている。

〈ビスマルクを倒した社会主義党、11年の闘争ののち、社会主義取締法を粉砕した党、上げ潮のようにあらゆる堤防を溢れ出て、都市も農村も、どんな反動的なヴァンデ〔フランス革命時に「反革命蜂起」に走った農村〕にも進出している党——この党は今日では、ほとんど数学的な計算で、その権力達成を定めうる地点に到達したのである〉。〈1895年の選挙では、我々は少なくとも250万票をあてにすることができるし、この数字は1900年頃には登録選挙人1000万のうち350万から400万に達するであろう〉。〈平和は10年ほどでドイツ社会民主党の勝利を保障する〉（「ドイツにおける社会主義」MEW,Bd.22）。

エンゲルスの見通しは、SPD指導者のそれと次の三点において区別される。第一は、全ヨーロッパ的視点からの考察だということである（後述）。第二に、いわゆる議会革命を否定していることである。エンゲルスは、リープクネヒトらの〈古い汚物の「社会主義社会への」爽快・無邪気・愉快・自

由な「成長移行」という代物〉（1891年6月29日付カウツキーへの手紙）を批判し、〈ドイツでは、この社会はそのうえにまだ半絶対主義的な、おまけに言いようのないほど混乱した政治的秩序のかせを打ち砕かなければならない〉（「エルフルト綱領批判」）と述べている。

第三は、プロイセン軍の重視に他ならない。資本主義の発展は、軍隊を強化した（武器の発達等）。軍隊との戦闘を考えるのは常軌を逸している。だから〈バリケードと市街戦の時代は永久に過ぎ去りました〉（1892年11月3日付ラファルグへの手紙）とエンゲルスは言う。エンゲルスが考えるのは、プロイセン軍の獲得である。

〈選挙報告の示すところによれば、社会主義者は農村地区にいてすら急激な進歩を示し、他方、大都市はほとんどかれらのものである。そして健康な若者のだれもが兵士である国においては、このことは、軍隊の社会主義への漸次的移行を意味する〉（「ロシア・ツァーリズムの対外政策」『タイム』版 MEW,Bd.22）。

〈今日、我々は5人に1人の割で兵士を味方に行っているが、数年のうちには3人に1人の割となり、1900年頃には、かつてはドイツのうちとりわけプロイセン的な要素だった軍隊は、その多数が社会主義的になるだろう〉（「ドイツにおける社会主義」）。（「ii」農民問題について」での引用「…プロイセン軍隊の「精鋭連隊」は社会民主主義化して…」も参照）

エンゲルスは、次のようにも述べている。

〈軍隊が3分の1ないし5分の2まで社会主義的になって、寝返りの機会を与えさえよいようになれば、バリケードは再び有用になりうる〉（1893年11月3日付カウツキーへの手紙）。

以上見たような見通しを阻害する要因は、エンゲルスによれば次の二つであった。すなわちSPDの側からの挑発とヨーロッパ戦争である。

〈2月20日〔投票日〕はドイツにおける革命の開始の日です。だから我々には、時期の到来しないうちに粉碎されないようにする義務がある。…我々は、現在、合法活動を宣言しなければならないのであり、我々にあびせかけられる挑発にのってはいけません〉（1890年3月7日付ラファルグへの手紙）。

先に暴力的・非合法的攻撃をしかけるのは政府側であると、エンゲルスは見ていた。その時どうするか？

〈この場合のためにとっておかれる昔の機構〔非合法的機関紙や非合法的組織など〕は、さらに改善され、拡張され、新たに油をさされて、再び活動に入る。そしてこれだけは確実である、二度目にはドイツ帝国はとて12年間持たないということは〉（『ゾツィアールデモクラート』読者への告別状」MEW,Bd.22）。

他方、エンゲルスは、ヨーロッパ戦争の危険を、ロシア・ツァーリズムに命令されたフランスとドイツとの対立のなかに捉えていた。

〈社会主義ドイツは、国際労働者運動において、最も進んだ最も名誉ある、最も責任ある地位を占めている。それはこの地位を、あらゆる攻撃者に対して維持する義務をもっている〉。〈もしもツァーリの征服欲とフランス・ブルジョアジーの排外主義的な短気が、ドイツ社会主義者の勝利の、だが平和的前進をさえぎるならば、ドイツの社会主義者は、確実なことだが、今日のドイツ・プロレタリア

が100年前のフランスのサン・キュロットに劣らぬものであり、1893年が1793年にひけをとらぬことを実証する用意がある。そして、ドイツの領内に足を踏み入れたコンスタン〔フランスの政治家〕の兵隊は、次の歌で迎えられるだろう。「どうして外国の兵隊に、わが故国を踏みじらせようか？」〔ラ・マルセイエーズ〕（「ドイツにおける社会主義」）。

このくだりは、SPDが第一次世界大戦に際して「祖国防衛」を掲げた時の論拠とされたものである。しかし、戦争が革命を早めるか遅らせるかはバクチであり、SPDはこれに賭けるわけにはいかない。国際平和こそがSPDの勝利を保障する。これがエンゲルスの考えであった。

1895年の「『フランスにおける階級闘争』への序文」（MEW,Bd.22、以下「序文」と略）は、上で見たエンゲルスのドイツ革命構想を総括したものである。「政治的遺書」（執筆5ヵ月後にエンゲルス死去）と呼ばれる「序文」は最初、エンゲルスに無断で抜粋が『フォルヴェルツ』に掲載されたが、それはエンゲルスを「穏やかな、無条件的合法性の崇拜者」（1895年4月1日付エンゲルスからカウツキーへの手紙）に仕立てるものであった。エンゲルスはこれに激怒し、『ノイエツァイト』に全文を掲載するよう要求したが、発表されたものにおいても、当時の政治状況に鑑み、エンゲルスも同意した削除がなされた。完全なテキストが発表されたのは、1930年である（ソ連で）。このような経過を見ても、「序文」についての様々な解釈と論争があることは想像できよう。内容は以下のようになっている。

第一、『フランスにおける階級闘争』本文の紹介（第1～7パラグラフ）。

マルクスは「1848年から1849年まで」というタイトルの論文を、『新ライン新聞』第1～第3号に連載した。エンゲルスは1895年に単行本化する際、連載論文をK1～K3とし、『新ライン新聞』第5・6合併号（最終号）に掲載されたマルクス論文「1850年5月から10月まで」のなかからフランスに関する諸章をとってK4としてつけ加え、『1848年～1850年のフランスにおける階級闘争』とのタイトルで刊行した。

「序文」によれば、マルクスの考えは〈政治上の事件を究極において経済的な原因の作用に還元することであった〉。エンゲルスは、K4の冒頭に次のような前書き（『新ライン新聞』掲載時のフランス以外の叙述の紹介）を置いている。

〈ここでは最初に、1847年イギリスにおこった大商業恐慌が述べられ、この恐慌のヨーロッパ大陸に及ぼした反作用によって、大陸の政治的紛糾が先鋭化されて1848年2月と3月の革命になったことが説明され、ついで、1848年のうちに再びあらわれ、1849年にはさらに上昇した商工業の好況が、革命の高揚を麻痺させ、同時に反動の勝利を可能にしたのだということが述べられている〉。

そしてK4では、次のように述べられた。

〈全般的な好況の場合には、ブルジョア社会の生産力がおよそブルジョアの諸関係内で発達しうる限りの旺盛な発達をとげつつあるのだから、本当の革命は問題にならない。こうした革命は、この二要因、つまり近代的生産力とブルジョア的生産形態が、互いに矛盾に陥る時期にだけ、おこりうる。…新しい革命は新しい恐慌に続いてのみおこりうる。しかしまた革命は恐慌が確実なように確実である〉（最後の2センテンスは「序文」に引用されている）。

エンゲルスは、〈これ [K4] がなかったら、この冊子は断片的な性質のものになったろう〉(1895年2月13日付フィッシャーへの手紙)と述べているが、「序文」もこの思想を土台としている。¹²

第2、2月革命時の革命観(第8～13パラグラフ)。

6月事件＝「プロレタリアートとブルジョアジーの間の支配権争奪の最初の大戦闘」の際、マルクス、エンゲルスは次のことを確信していた。〈偉大な決戦が始まったこと、この決戦はただ一つの長期の、変転に満ちた革命期を通じて闘い抜かれなければならないこと、しかしそれはプロレタリアートの究極の勝利をもってのみ終わりうるものであること〉。また、1849年の敗北後は〈「人民」のなかに隠れている対立的要求の間の長期の闘争を予想していた〉。

このような見通しの土台にあったのは、〈1789～1830年のお手本の記憶に強く色取られていた〉革命観であった。

民衆決起→新政府形成→中途半端な政策→より急進的要求を掲げた民衆決起→新政府形成…という繰り返りで近代の革命は起こっている。これをエンゲルスは理論的に掘り下げ、次のように述べている。

これまでの革命の勝利者は、〈経済的発達の状態によって支配しうる能力を得、支配の使命をもたされた少数者の集団であった。…それらの革命の共通の形式は、みな少数者の革命であった〉。

〈最初の勝利で獲得された成果は、より急進的な党派の第二回の勝利によって初めて確立されたのであり、それが確立され、目前の必要事が達成されると、急進派とかれらの成果は再び舞台から姿を消したのである〉。

このような「近代のあらゆる革命」の特徴が、〈プロレタリアートの自己解放のための闘争にもあてはまるようにみえた〉。〈少数者に指導されてはいるものの、今度はその少数者の利益のためではなくて多数者の革命に転化させる見通しがことごとく備わっていたではないか?〉。

第3、1848年後の情勢の変化(第14～17パラグラフ)

〈歴史は、我々および我々と同じように考えたすべての人々の考えを誤りとした。歴史は、大陸における経済発展の水準が、当時まだ到底資本主義的生産を廃止しうるほどに成熟していなかったことを明白にした。歴史は、これを1848年以来全大陸をまきこんだ経済革命によって証明した。…まさにこの産業革命こそ、いたるところで階級関係を初めてはっきりさせ、マニュファクチャ時代から、そして東ヨーロッパでは同職組合手工業時代からさえ、ひきついで多くの中間的存在を除去して、本当のブルジョアジーと本当の大工業プロレタリアートを生み出し、かれらを社会発達の前面に押し出したのである〉。

ルイ・ボナパルトは、〈ヨーロッパに国内的安寧を確保したが、その代わりに戦争の新時代をもたらした。下からの革命は一先ず終わって、上からの革命の時期が始まった〉。ビスマルクも同様の道を選んだ。¹³

¹² マルクスのいわゆる「恐慌革命論」は、その後転回をみせるのであるが、ここでは割愛。なおベーベルなどは「恐慌革命論」の信奉者だったように思えるし、エルフルト綱領における恐慌の強調もそのようなものとして受容されたと思われる。

¹³ この時期に、第1インターが結成され(1864年)、『資本論』が出版されている(1867年)に注意

〈ところがヨーロッパは二人のボナパルトのためには狭すぎた〉。普仏戦争は、小ドイツ帝国（ドイツ統一）とフランスの第3共和制をもたらした。

〈その総体的な結果は、ヨーロッパで、ポーランドを除いては、大きな民族の独立と国内的統一が事実となったことである。もちろんまだこれは比較的狭い範囲内のことではあったが、ともかく民族的な紛争がもはや労働者階級の発展過程にとって本質的な障害にならない程度にはなっていた〉。

このエンゲルスの時代認識は重要！ ヨーロッパ規模でのプロレタリア革命の条件が整ったとみていたのである。

〈当時「1848年」はそれぞれの万病特効薬を説くあいまいな宗派的福音がたくさんあったが、今日では一般に承認された、東鉄明晰な、闘争の究極目的をはっきり定式化しているただ一つのマルクスの理論がある。当時は地域と民族によって区別されていて、共通の苦しみの感情だけで結びついている、未発達な、感激と絶望の間を途方に暮れてさまよっている大衆がいたが、今日では、休みなく前進し、日ごとに数と組織と規律と洞察と勝利の確信を高めつつある、一つの社会主義者の大国際軍がある。この強力なプロレタリアート軍さえも、未だにその目標を達成していない。しかも今かれらが一度の打撃で勝利を獲得することは思いもよらず厳しい、ねばり強い闘争によって一陣地より一陣地へと徐々に前進しなければならないとすれば、そのことは、1848年に単なる奇襲によって社会改造に成功することがいかに不可能であったかを、決定的に証明するものである〉。

以上の総括に基づき、以下は、1870年代以降の労働運動の新段階について述べられている。

第4、ドイツ労働者の躍進と普通選挙権（第18～21パラグラフ）。

〈1870～71年の戦争とコミュン敗北は、…ヨーロッパの労働運動の重点を、しばらくの間フランスからドイツへ移した。…ドイツの労働者が1866年に実施された普通選挙権を賢明に利用したおかげで、党の驚くべき成長は争う余地のない数字となって公然と全世界に示された〉。

〈ドイツの労働者は、普通選挙権はどう使われるのかを、万国の同志に示して、かれらに一つの新しい武器を、最も鋭い武器の一つを、供給したのである〉。〈これまでは欺瞞的手段であったものを、解放の道具に変えてしまった〉。

普通選挙権の意義は、次の諸点にある。

〈我々が三年ごとに味方の人数を数えられるようにしてくれたこと、得票数の増加を定期的に確かめ、しかも予想外に急速な増加を知って、労働者が勝利の確信を高めるとともに敵の恐怖をも強め、我々の最良の宣伝手段となったこと、我々自身の人数もすべての反対党の人数も正確に知らせてくれ、それによって我々の行動の釣合を保つうえでまたとない基準を与え、我々の時宜をえない躊躇逡巡と、同じく時宜をえない蛮勇から守ってくれたこと〉。

加えて、〈それは選挙の煽動という形で、人民大衆がまだ我々より遠ざかっている場所ではかれらと接触する絶好の手段を与え、またすべての党派が、我々の攻撃に対して全人民の前でかれらの意見と行動とを弁護せざるをえないようにする、またとない手段を与えてくれた。さらにその上普通選挙権は、国会内の我々の代表者に、新聞や集会で行うのとはまったく別の権威と自由をもって、議会内の敵や議会外の大衆に話しかけることができる演壇をひらいてくれた〉。

第5、バリケード（第22～31パラグラフ）

まずエンゲルスは、普通選挙権の利用とともに、「プロレタリアートのまったく新しい闘争方法」を用いることについて述べている。国家機関を利用した国家機関との闘争である（邦議会、市町村議会への参加等）。

〈ブルジョアジーと政府は、労働者等の非合法活動よりも合法活動をはるかに恐れ、反乱の結果よりも選挙の結果をはるかに多く恐れるようになった。

そのわけは、この点でも闘争の条件が根本的に変わってしまったからである。…1848年まではどこでも最後の勝敗を決めたバリケードによる市街戦は、はなはだしく時代遅れとなっていた〉。

〈市街戦の古典時代においてさえ、バリケードは、その物質的效果よりも、精神的効果の方が大きかった。バリケードは軍隊の堅固さをゆすぶる手段であった。これが成功するまでバリケードをもちこたえれば、勝利が得られたが、そうでない場合は敗北した〉。

一言でいえば、1848年以来の変化は、すべて〈軍隊に有利だった〉。従って今、軍隊との正面戦においては勝利の見込みがない。だから支配者は挑発するのである。

第30パラグラフは、まるまる削除された部分であり、全文を引用しておく。

〈では、将来においては、市街戦はもう何の役割も演じないというのか？ 断じてそうではない。それはただ、1848年以来色々な条件が市民の戦士にとってずっと不利になり、軍隊にとってずっと有利になった、というだけの意味である。だから、市街戦は、こうした不利な状況を別の諸契機で埋め合わせた場合のみ勝つことができる。だから、市街戦は、大革命の初めに起こることは比較的にまれで、むしろ、そのような革命のその後の経過中に起こることの方が多く、以前よりももっと強大な兵力をもって企てられなければならないだろう。だが、そのような大きな兵力があれば、あのフランス大革命の全体を通じてそうであったように、また1870年9月4日や10月31日にパリでなされたように、きっと受動的なバリケード戦術よりも公然たる攻撃を選ぶであろう〉。

【注 エンゲルスは、次のようにも述べている。〈それ [バリケード] は、軍隊の三分の一ないし五分の二が社会主義者となり、かれらに転覆のきっかけを与えるやいなや再び有用になるだろう〉（1893年11月3日付カウツキーへの手紙）。】

第6、古い戦術の修正（第32～34パラグラフ）

〈奇襲の時代、無自覚な大衆の先頭に立った自覚した少数者が遂行した革命の時代は過ぎ去った。社会組織の完全な改造ということになれば、大衆自身がそれに参加し、かれら自身が、何が問題になっているか、何のためにかれらは肉体と生命を捧げて行動するのかを、すでに理解していなければならない。…大衆が何をなすべきかを理解するため…には、長い間の根気強い仕事が必要である。そして、この仕事をこといま我々が行なっており、しかも敵を絶望におとしいれるところの成功を収めつつあるのだ〉（下線部分は削除された）。

【注 「長い間の根気強い仕事」のベスト・テキストは、レーニン『何をなすべきか』だと、私は思っている。】

〈ラテン系諸国でも、古い戦術が修正されなければならぬことを、ますます悟ってきている。…フランスにおいてさえも、…宣伝と議会活動という気長な仕事が、…党の当面の任務として認められて

いる〉。

【注 ただし、1889年にエンゲルスは、次のように述べている。6月事件やパリ・コミューンに示されているように、フランスのブルジョアジーは“なんでもアリ”で プロレタリアートを弾圧するから、〈暴力革命以外には勝利の手段がほとんど残されていない〉（「ブルジョアジーの辞職」MEW,Bd.21）。】

古い戦術を修正したからといって、社会主義者が革命権を放棄したわけではない。〈革命の権利は、すべての近代国家が例外なしにそれに基づいている唯一の真の「歴史的権利」である。革命によって支配者の地位についたブルジョアジーが、プロレタリアートの革命を非難するのは笑止である。〉

第7、SPDの任務（第35～40パラグラフ）

〈ドイツ社会民主党は一つの特別な立場をもち、従って少なくとも当面また特別な任務をもっている。同党が投票所におくる200万の有権者とかれらの後ろに従っている選挙権のない青年や女性〔当時は、25歳以上男子のみの普通選挙権〕は、国際プロレタリア軍の最も多数の、最も密集した集団であって、決定的な「ゲヴァルト部隊」である。この集団は、今でもすでにそう投票数の四分の一以上の票を占めている。…その成長は、まるで自然過程のように、自然発生的に、恒常的に、制止しがたく、同時に極めて穏やかに進んでいる。…この勢いで進めば、我々は、今世紀の終わりまでには、社会の中間層、小ブルジョアや小農の大多数を獲得して、国内の決定的な勢力に成長し、他のすべての勢力は、欲すると欲しないにかかわらず、これに屈しなければならなくなる。この成長を不断に進行させて、ついにはおのずから今日の統治制度の手におえないまでにすること、この日々増強するゲヴァルト部隊を前哨戦で消耗させないで決戦の日まで無傷のまま保っておくこと、これが我々の主要任務である。そしてドイツの社会主義的戦闘力のこの普段の成長を、一時抑え止め、しばらくでも退却させることのできる手段は一つしかない。それは軍隊との大規模な衝突であり、1871年のパリにおけるような出血である。…その時は、正常な発達は妨げられ、おそらく危機的な瞬間にゲヴァルト部隊を使用できず、決戦はおくらされ延期されて、より重大な犠牲を伴うだろう（下線部分は削除された）。

〈我々「革命家」、「転覆者」は非合法手段や転覆によるよりも、むしろ合法手段を用いるときに、はるかに威勢よく栄えるのである。みずから秩序党〔フランス第2共和制期の王党派・反共和主義派〕と名のっている諸党は、かれら自身がつくりだした法治状態のために滅んでゆく。かれらは絶望的にオディロン・バロの言葉で叫ぶ。合法性が我々を殺す、と。ところが我々は、この合法性のもとで、筋肉ははりきり、頬は赤く、まるで永遠の生命の観を呈している〉。

〈今は法律を守ることによって生きている社会民主党の転覆活動を取り押さえるには、法律を破らざるには生きられない秩序党的な転覆をやるほかはない〉。

【注 当時、政府は「転覆法案」を画策していた。】

〈一方の側で契約を破れば、その契約は全部解消し、他方の側でもそれに拘束されない。それは1866年にビスマルクがみごとに我々に見せてくれた通りだ〔普墺戦争?〕。だから、諸君がドイツ国憲法を破棄すれば、社会民主党も自由になって、諸君に対して好きな行動をとることができる。し

かし、そのとき党が何をやるか——そいつはいま諸君に漏らすわけにはいかない)。

最後にエンゲルスは、古代ローマ帝国における「転覆党」だった原始キリスト教団の勝利の過程を述べ、「序文」を終えている。¹⁴

「序文」が修正主義者や日和見主義者に利用されたことは、周知の通りである。エンゲルスによる選挙結果の過大評価・SPDの過大評価については言うまい。「戦術の修正」について理解する際に注意すべきは、バリケード戦と選挙戦とを単純に対比してはいけないということである。選挙戦は、「当面の任務」であり、いわば“平時”における宣伝・煽動の手段である。これに対してバリケード戦は、「決戦の日」の戦術に他ならない。ブランキ(1805~1881)などの「古い」革命家は、地道な宣伝・煽動をおこなってはいない(はずである)。

また、エンゲルスにしても、バリケードの「精神的効果」については認め、〈[軍事的に]不利な状況を別の契機で埋め合わせた場合にのみ勝つことができる〉と述べている。

問題は、エンゲルスが「決戦の日」の戦術をどのようなものとして考えていたかにある。〈そいつは今…漏らすわけにはいかない〉というのは、一種のレトリックであろう。1892年にエンゲルスは、次のように述べている。

〈バリケードと市街戦の時代は永久に過ぎ去りました。…そこで新しい戦術を見いだす義務がある。僕はしばらく前からこのことについて考えていますが、まだまとまっていません〉(11月3日付ラファルグへの手紙)

この手紙の丁度一年後に、〈それ[バリケード]は、軍隊の三分の一ないし五分の二が社会主義者となり、かれらに転覆のきっかけを与えるやいなや再び有用になるだろう〉と記したカウツキーへの手紙がある。軍隊の獲得を重視していたことは間違いない。また、これはフランスについてのことであるが、普通選挙権を使いこなせれば、〈武器による革命への呼びかけをしなければならない日が、この上なく完璧な正確さでわかる〉とし、〈支配層が合法性を覆す、つまり我々が革命をやるのにこの上なく有利な状況におかれることは、10対1でさえあります〉(1892年11月12日付ラファルグへの手紙)と述べている。敵が先に手を出すまで待つということか？

結局のところ、エンゲルスは〈新しい革命の戦術を見いだす〉ことに成功しなかったのではなからうか？ いずれにせよ「序文」は、一方では待機主義的に理解され(カウツキー)、他方では“合法性一本やり”に曲解された(ベルンシュタイン)。

【注 ちなみにローザは、「綱領について」(スパルタクス・ブント創立大会での演説1918年12月30日)で、エンゲルスの「序文」を全面的に批判している。

〈ドイツ社会民主党内部に生きていた見解——というよりもむしろ、ドイツ社会民主党を死物として見解——を要約する古典的文書[「序文」]がここにある…。この[街頭革命への]エンゲルスの批判は、二つの結論をみちびきだす結果となった。第一に、議会闘争がプロレタリアートの直接の革命的行動の対立物であり、そしてとりもなおさず、階級闘争の唯一の手段である、と見なされるようになった。…第二に、…階級国家のまさに最強の組織で

¹⁴ エンゲルスの叙述は正確さを欠く。コンスタンティヌスがキリスト教を容認したのが313年(ミラノ勅令)。392年、テオドシウスがキリスト教を国教化。

ある軍が、つまり官給の服を着せられたプロレタリア大衆が、社会主義のあらゆる影響力に対して先天的に不感症であり拒否的であるときめられてしまった）。ローザによれば、このような「誤謬」が生まれた原因は、〈エンゲルスは、当時の国会フラクション〔中心はベーベル〕の直接の圧力のもとで、この序文を書いた〕ことにある。】

8) SPDのマルクス主義者たち

〈ドイツ・マルクス主義派を広義に定義すれば、ローザやパプヴスらの「オスロ・トイテ〔東方の人々〕グループはもとより、ベーベルに指導された党中央＝ベルリン派の左翼集団全体をも含むものとなる。しかし、こうした広義の定義は、絶えずSPDの内部での「孤立感」を嘆いていたカウツキーらのドイツ・マルクス主義派の中心人物の認識とかなり隔たりがあるように思われる。したがって、ドイツ・マルクス主義派を狭義に定義する必要が生まれる。その場合の条件は、以下の3点である。第1にエンゲルスの指導を直接にあるいは間接に受けたことがあること。第2に『ノイエ・ツァイト』誌の常連寄稿者として絶えずマルクス主義の立場から論文を執筆していること。第3にドイツの知的・文化的伝統を共有していること。この3つの条件をすべて満たすものを「狭義のドイツ・マルクス主義派」と定義する。こうした3つの条件を充足するのは、ベーベル、W・リープクネヒト、カウツキー、クノー、メーリング、シェーンランク、SPD黨員時代のヒルファデーング、レンシュ、エクシュタイン、クララ・ツェトキンらのきわめて少数の知識人中心のグループでしかない〉（相田慎一前掲書）。

「3つの条件」には疑問があるが、とりあえずこれを参考に考察してみよう。転向前のベルンシュタインもこの条件を満たすことは間違いない。

まず、よくわからない人物を整理しておく。

〈『ノイエ・ツァイト』をはじめとする理論機関誌において、戦前期にはレンシュ、ラデック、パンネクックなどの急進左派とカウツキーなどの中央派との間で論争がなされ、大戦勃発後は一点右派に転じたレンシュ、クノーらと、カウツキー、ヒルファデーングとの間において、帝国主義の必然性と帝国主義に対する態度をめぐる論争がなされた〉（入江節次郎／星野中編著『帝国主義研究Ⅱ』）。

レンシュ（1873～1926）は年齢からみて20世紀になってから活躍したと思われるが、本稿では帝国主義論争は扱わない。

〈カウツキーは、「マルクス主義中央派」の代表者としては、ベーベル、エクシュタイン、クノー、ヒルファデーング、そして自分自身の名を挙げていた（1913年6月26日付のカウツキーのV・アードラー宛の手紙…）〉（シュタインベルク前掲書）

エクシュタイン（1875～1916）はオーストリア人で、おそらくヒルファデーングと同じ頃にドイツに来て、『ノイエ・ツァイト』の編集に参加した。〈新ラマルクス主義と唯物史観とを緊密に関連づけようとする試みは、とりわけ、カウツキーと親しかったグスタフ・エクシュタインによって企図された〉（同）。例としてあげられている論文は1925年のものであるが。

こんな叙述もある。〈エクシュタインは、「大逆事件」に関する片山潜の「悲痛な叫び」を逸早く

ヨーロッパに伝えた人物）（西川正雄『第一次世界大戦と社会主義者たち』）である。

クーノー（1862～1936）は、経済史家であり、『ノイエ・ツァイト』の編集秘書であった（1917年にカウツキーが解任された後の編集者）。相田慎一前掲書によれば、クーノーは、ベルンシュタインの修正主義を逸早く批判した人物の一人である。相田は、クーノー論文「崩壊理論によせて」（1898年）の特徴を次の三点にまとめ、その意義を認めている。

〈第1に、生産の社会化論に主軸産業論という視点を持ち込んだこと、第2に世界市場の狭隘化ということから資本主義の崩壊の必然性を説くドイツ・マルクス主義派の崩壊理論擁護の姿勢に先鞭をつけたこと、第3にマルクス経済学の中にいち早く段階論の問題を提起したこと〉。

ヒルファディング（1877～1941）がSPDの等学校の講師として来独したのは1906年であるから、本稿の対象外。

シェーンランクについてはすでに触れたが追加しておく。

〈1882年以来フィーアエック [1851～1921] は、バイエルンの首都をドイツ国内における社会民主党の出版活動の中心にしようと努力していた。『ジュートドイチェ・ポスト（南ドイツ新聞）』およびラインからプレーゲルにいたる各地で発行されている一連の系列紙で、かれは小さな新聞の森を作り出した。…この企ての精神的指導者は、チューリングンの青年ブルーノ・シェーンランクであった。かれは、ドイツ各地の大学で、大学が教えうるかぎりのものを学んだほか、教えないものも多く学んだ、物分かりの早い活発な労働者で、かれの見事な文才と豊かな教養は、ゲリラ的なジャーナリズムを浅薄化させることはなかった〉（メーリング前掲書）

〈ライブチヒを根城としてシェーンランクはジャーナリズム革命をおこしていた。かれは『ライブチヒ民衆新聞』を社会主義者のアジテーションのための重苦しい伝達手段から、現代的な日刊紙に変えようとした。それは読者の興味をとらえ、時事問題を敏速かつ明快に報道するような新聞だった。そのような実験…を、党は啞然として見守った。何年かたってライブチヒの実験が成功と見なされるようになったときにはじめて、他のドイツ社会民主党の新聞はシェーンランクの先駆的なやり方に従った〉（ゼーマン/シャルラウ『革命の商人』）。

〈シェーンランクは、1885年のカウツキーあての手紙の中で、マルクス主義への信条に関連して、「固い結束、すなわち、いっさいのロートベルトウスの・俗物的社会主義者に反対するあなたとエーデ [エドゥアート・ベルンシュタイン] と私とのそれ」のことを語っている〉（シュタインベルク前掲書）。¹⁵

〈社会主義者取締法の前夜には、ヴィルヘルム・リープクネヒトが、党の理論家そのものであり「カール・マルクスの科学と世界観との偉大なる仲介者」である、と考えられていた。…若いカウツキーがドイツ社会民主党を知ったとき、彼が見たのは、「リープクネヒトがマルクス主義的科学の告知者であり、マルクスがあら一、リープクネヒトがその予言者 [ママ] である」という信仰が一般に通用していた、ということであった。だが、リープクネヒトともっとも親しい関係を持つようになった人は誰でも、まもなく、この実用主義者（プラグマティスト）であり闘士である彼には、生まれながらの理論家に特徴のないいっさいのものが欠けている、ということ認めないわけにはいかなかった

¹⁵ 相田慎一前掲書は、旧来のSPD内の思想勢力図に、集権派・分権派という新たな座標軸を加えることを意図したものであり、シェーンランクは反プロイセン分権派に分類されている。

た) (シュタインベルク前掲書)。

リープクネヒト自身が、次のように述べている。

〈私はエンゲルスのような教育課程を受けてきませんでした。理論に通じる以前に、私は実践のなかにとびこみ、22歳のときから、ずっと休みのない、いっさいの余暇を投げすてた生活を送ってきました。このような事情のもとで、私がエンゲルスのようにヘーゲルを根本的に研究してこなかったということは、当然のことですが、しかしけっして私の恥だとは思っておりません。そして、もしそのうえに、私がこのような研究を少しばかり軽蔑したとしましても、エンゲルスは私のこのような私的な考えを認めてくれるにちがいないでしょう) (1870年5月13日付マルクスへの手紙)。

〈社会主義者取締法のもとにあった時期に、もっと若い世代がマルクス主義の学説に没頭し、科学的基礎と、その理論から当然に出てくる政治的結論とを共に自分のものとするようになり、マルクス主義が、たとえただわずかにすぎず、しかものちに言及するような制限をもってではあるにしても、初めて本格的に受容されるようになると、リープクネヒトの理論家としての声望は、ドイツのこの政党内では急速に消滅していった。指導者としても、彼は、90年代の初頭以来、ますます、辛らつな批判の対象、あるいは人々が「老人」にたいして感じる一種の同情の対象となっていった) (シュタインベルク前掲書)。

ちなみにリープクネヒトは、1894年に次のように書いている。

〈資本主義がそれに従っているところの発展の鉄則は、古代ギリシャ人の宿命のような厳格さをもって、資本主義に、その宿敵であり墓掘り人であるわれわれのために、勝利への道をひらくように余儀なくさせるのである)。

シュタインベルクは、社会主義者取締法下のドイツの党がマルクス主義を受容した要因を、次の4点に求めている。

〈①マルクス・エンゲルスの思想的財産の支持者たちがもっていた使命感、エネルギー、無条件の一貫性、および、ある種の非常性。②これらのマルクス主義者たちが、遅くとも1883年からあとは、彼らの理論的見解の有効な宣伝に必要な決定的なキー・ポジションを党内で占拠し保持していた、という事実。③社会主義者取締法によって著しく促進された、活動的な一部党員の急進主義。④社会主義者取締法時代の末期に、党の活動を包括的に基礎づけることができるような、そして新綱領の作成のさいにマルクス主義に代わるものとして考慮に入れられるような理論は提供されなかった、という事実) (同)。

以下の諸人は、その著作が邦訳されており、それに基づいて検討することができる。

〈ベーベルの「マルクス主義」を本質的に規定していたのは、資本主義的な社会秩序と経済秩序との崩壊への期待であり、党は本質的にそのプロレタリア的な階級性格を刻みこまれている、という硬い確信であった。…ベーベルとエンゲルスとの往復書簡は、ベーベルが経済不況の徴候にどれほど大いに注目していたか、そして、目前に迫った「大騒動」に関する諸結論を、どのようにそれから直ちに引きだしたか、また、そのさい彼がその「素朴な楽観主義」をもって発展のテンポをどんなに過大評価していたか、ということを示している) (同)

【注 ベルンシュタインは後に、こう語っている。〈入党式のあと [1872年?] 私の面前で一人の青年ブルジョア民主主義者が個人的にベーベルに向かって、目ざす革命はいつごろ生じるのかとベーベルの見解を訊ねたところ、彼一流の楽観論がほとぼしり出たのであった。彼はこう答えたのだ。「そうだね。私の考えでは、遅くともほぼ20年のうちには」〉。〈「大義が正しいなら、私はこの方法で奏でる」。ベーベルは、『フォルクスシュタート』紙でデューリング讃歌を歌おうとしているヴィウヘルム・リープクネヒトの反対にあったとき、私にそう書き送ってきた。リープクネヒトは、デューリングとマルクスの方法に大きな違いがあることを指摘して、その反対論の根拠としていたのであった〉（『一社会主義者の発展のあゆみ』1924年）】

〈社会主義取締法の失効と1890年の選挙の勝利とののち押さえ難い上昇発展の意識が浸透した党指導部は思い上がって、最終勝利の時点を精確に計算できるといったような観念をますます強めた。このときに発展の自然発生製のイデオロギーに関して一つの注目すべき転位が現れている。経済的好況の時期には、ベーベルについてはっきりさせることができるように、ブルジョア的・資本主義社会の迫りくる崩壊の指標としての経済恐慌が背後に退き、それに代わって、得票数の増加が発展の速度と方向との尺度とされたのである〉（シュタインベルク前掲書）。

ベーベルの主著たる『女性と社会主義』（邦題『婦人論』）は1879年に出版されたが、その後、83年、95年、1902年、1909年に改定されている（改定の中身は不明）。手元にあるテキスト（岩波文庫）の底本は、1909年の第5版である（以下、訳文これに従う）。

「第1編 過去の婦人」と「第2編 現代の婦人」は、エンゲルス『家族、私有財産、国家の起源』の当該部分をふくらませたもので、次の一点を除けば、とりたてて紹介するまでもない。ベーベルは、第2編の「第14章 教養のための婦人の戦い」の「3 ダーウィン説と社会状態」で、次のように述べている。

〈生存競争はあらゆる有機体の間で行われる。…この生存競争は人間社会においてもまた、団結を失ったあるいはなおそれをもたないあらゆる社会の成員の間に存在する。進行行程における人間相互の社会関係が取るところの形態に応じて、この生存競争は変化する。それは階級闘争の性質をとり、その階級戦は順を追って登ってゆく段階を形づくって演出される。しかしそのような闘争は、社会の本質に関するますます高い洞察に導き、最後にその発展を支配し制約するところの法則の認識にまで到達する…要するに人間はこの認識を彼らの政治的・社会的制度に応用し、これに応じてそれらを改造すればそれでよいのである〉。

このくだりは、ベーベルのマルクス主義解釈の特徴を顕著に示している。ベーベルは、1899年のハノーファ党大会において、次のように述べた。

〈ダーウィンが博物学に関して、つまりダーウィンが生物の発展を支配している法則に関して確立したところのもの、それをマルクスは人間社会とその制度とについて創造したのである。…社会発展の法則は彼によって発見されたのである。だが、そのことは、彼の出発点とした見解が、ことによると、恣意的な革命によって何かある社会的発展段階を飛び越えることができるとするものだったかもしれない、ということを除くものである〉。

この発言が、ベルンシュタインによるブランキ主義＝「恣意的な革命」論批判への反論としてなされていることに、注意されたい。「社会発展」は、飛躍なしに、自然成長的に進むものとして捉えられている。¹⁶

ベーベルの著作にもどろう。「第3編 国家と社会」と「第4編 社会の社会化」では、一転して、資本主義社会論と未来社会論が叙述される。第3編は、次のような小見出しから成っている。

第16章 階級国家と近代の無産階級 1.現代の公的生活 2.階級対立の激化

第17章 資本主義的産業における集中の過程 1.工業による農業の駆逐 2.無産化の増進、大工業の優勢 3.富の集中

第18章 恐慌と競争 1.恐慌の原因と結果 2.仲介職業と生活資料の騰貴

第19章 農業における革命 1.海外競争と地方人の出郷 2.農民と大地主 3.都市と田舎の対立

第16章の1は、次のように始まる。

〈最近数十年間に世界のあらゆる文明国で、社会の発展は非常に早い歩調をとった。…そのためにわれわれの社会関係は、曾て無かったような不安、動揺、崩壊の状態に陥っている。支配階級はその足の下にもはや何らの堅固な地盤を感じない。…不快、不安定、不満の感情は、最上層から最下層まですべての範囲の人々を捕える。社会のからだに膏藥治療をほどこして、彼等の堪えがたく感ずるこの状態を終わらせようとする支配階級の痙攣的努力も、不十分なるが故に無効だ、ということがわかって来る〉。

続けてベーベルは、支配階級相互の対立の指摘をはさみ、以下のように述べている。

〈国家権力も、現在の国家秩序の維持を利益とするすべての人々も、もしも大衆がこの現在の秩序の真の性格を認識するに至るならば、この秩序になんの利益も持たぬ大衆に対抗して、それをながく維持することは不可能だろう。そこで、あらゆる代価を払ってこの民衆の覚醒を防止しなければならぬ〉。→愚民化政策、宗教

〈だが、新しい支配階級はそれまでに既にその社会的在り方の特質をを全社会に印象づけているので、彼等の権力と富とを増大するには、ぜひともその文化的成果の一部を、彼等が圧迫し搾取する階級にも分け与えねばならず、その結果、被圧階級はその能力と見識とを高めることになる。こうして新しい階級は被圧階級にみずから武器をあたえて、自己の滅亡を招くのである。そこで今や大衆闘争は、その存在形態のいかに問わず、すべての支配階級に対して闘われることになる。この最後の階級は近代の無産階級である〉（説明不足！）。

〈階級国家はその性質上当然、被圧階級をなるだけ無権利状態にとどめて置こうとするばかりでなく、また国家の維持に必要な経費や負担をまず第一に彼等の肩に担わせようとする〉→間接税

〈大資本主義的企業組織はリング〔ほぼトラストと同じ〕やトラストやシンジケートなどの力をもって、そのような〔搾取目的の〕物価の騰貴をはかり、国家はその経済政策でもってそれを促進する〉。

¹⁶ カウツキーのダーウィンへの態度は微妙な揺れがあるが、1908年に彼は、次のように述べている。〈そのときどきの破局がなければ、運動も発展しない。この破局は発展の必然的な一段階を形成するのであり、進化は、そのときどきの革命なしにはありえない〉（「カール・マルクスの歴史的成果」）。ちなみに、狭義の「社会ダーウィン主義」とは、「社会発展」に進化概念を利用すること一般ではなく、「淘汰」の原理を利用する説を指す。

国際交通が発展し、〈世界郵便連盟—第一等の文化的進歩—が設けられ、あらゆる実際的ならびに科学的目的のために国際大会が開かれ、各国民の優れた精神的産物はおもな文明民族の国語に翻訳せられて伝播され、これらすべてのものによって諸民族の世界共和、四海同胞の精神はますます強くつちかわれていく。ところがヨーロッパその他の文明諸国の政治的および軍事的状態は、この発展とはきみよな対照をなしている。国際的な敵愾心と排外思想とが至る所で人為的に育成される〉。→軍備増強、軍事費膨張。

〈ヨーロッパの政治的および軍事的状態は、市民的社会を一举に滅ぼす大波瀾をもって終わりがねないような一大発展に到達した。この社会は、その発展の頂上において、自分の存在を否定するような状態を生んだのだ。すなわち市民的社会は、今までに存在していたどの社会よりも革命的な社会として以前に自分で作り出したその諸々の手段でもって、自分自身の没落を準備しつつあるのである〉。

最後にベーベルは、自治体に言及し、次のように述べた。

〈国家生活におけると同じく、自治体の領域でも、根本的改革の必要が明るみに出てくる。…しかしながら、今日のように私利が一切を支配して公共の利益はあとまわしにされる時、どうして十分な改革が行われようか〉。

第16章の2は、階級闘争を生存競争として説明し、次の言葉で終わっている。

〈すべての文明国を通じて、近時の最も注目すべき現象は資本家の大合同であって、その社会的・政治的影響はますます決定的となりつつある〉。

第17章は、20世紀に入ってから、植民地論争、帝国主義論争の成果を取り入れていると思われる。1では、資料をもとに、〈大資本による小資本併合の過程は、自然法則の冷酷と力とをもって、…現れてくる〉こと、〈工業（鉱山業、建築業を含む）、商業および運輸業で生活する人口は、農業人口を犠牲にして増加した〉ことが述べられ、次のように結論づけられている。

〈この結果は、農業者人口、すなわち古い秩序のおもな支柱となっている、国民の中の本来の保守的分子が、商工業に従事する人口によって次第に駆逐され、ますます早い速度で追い越されることである〉。

2では、「資本集中の姿」が、種々の資料を示して説明される。

3では、〈事業の集中と生産力の増進にともなって、労働者の数が相対的に減少し、一方、富はそう人口に比例してますます少数者のふところに集まっていくことは、一つの経済的法則である〉ことを資料によって示し、次のような次章への移行規定でしめくられている。

〈すべての文明国でなしとげられたこの資本主義的發展と集中との過程は、また、これまでどんなトラストや企業連合が成立してもそれを阻止しえなかったような無政府的生産方法とあいまって、必然的に生産過剰と売捌きの困難とを促すに至る。そこでわれわれは恐慌について論じなければならない〉。

第18章の1では、生産の無政府性→過剰生産→恐慌の過程が説明され、恐慌中に生産方法が改良されるが、それは〈新たな恐慌の原因をそのなかに宿している〉こと、〈生産過剰と価格の下落とを避けるために…全産業部門の独占化が実現された〉が、恐慌を回避できなかったことが述べられている。

る。自由競争の独占への天下をふまえ、ベーベルは次のように述べた。

〈一握り独占資本家が社会の主人となり、彼等によって商品の価格も、労働者の賃金や生活条件も決定される。この発展は、個人的企業家が余計なものになったこと、そして国内的・並びに国際的規模において経営される生産こそが、社会の追求してやまぬ目標であることを示している〉。

続いて新しい需要のための植民地獲得競争に触れ、次のように述べた。

〈世界市場の支配権のために闘争は、世界政治、即ち、あらゆる重大な国際的事件に関する妖怪をさそい、且つこの干渉を有効にするために特に海軍軍備は前代未聞の発展をとげ、しかもその結果、政治的大破局の危険が新しく喚び起こされるのである。このように、経済的競争の範囲とともに政治的競争の範囲もまた拡大する〉。

2は、「生産物の分配方法」についてである。

〈資本主義的生産の著しい特徴は、生産手段がますます大工場へ集中することである。分配においてはこれと反対の動きが見られる。弱者を滅ぼす競争の結果、独立者の列から追い出された生産者は、自分の生存を維持するために、十人のうち九人までが取次業者として生産者と消費者との間に割り込もうとする。前に統計的に確かめられたように、商人、小売商、行商人、周旋業者、仲買人、代理商、飲食店など、仲介職業者の夥しい増加はこの理由によるものである〉。

〈仲介職業者の数の増加は、その結果として多くの害悪をもたらす。…生活必需品の騰貴は中間取引の必然の結果である〉。

またベーベルは、消費組合に言及し、次のように述べている。

〈常にそして到る所で、民衆に最も大きな損害を与えるかのような取引上の弊害をとり除くために、ひとは消費組合を設立した。…労働者の消費組合もまた最近十年間に著しい発達をとげ、一部ではある種の消費物品の製造さえ始めている。…これらの組合はこうして、小さく分れた中間取引が無用の長物であることを立証する。このことが真正な物品を供給するという長所とともに、消費組合の持つ最も大きな利益である。…社会は最後には、もはや商業を不要とするような一つの組織に到達するであろう。というのは、そこでは運搬と分配のために社会に奉仕する人たち以外の中間者なしに、生産物は消費者の手許に届くからである。食料品の共同購入に次ぐ大切な要求は、大規模に営まれる共同の食卓の準備であり、これもまた労力、場所、材料、あらゆる種類の費用の大きな節減をもたらすだろう〉。

第19章の1では、当時のドイツ農業の特徴（構造変化）が示されている。すなわち、①小農の兼業化と大農による農産物加工業の創設、②農村への都市文化の流入、③国外農産物との競争、④「小農や田舎の労働者の出郷」である。ここでは、③と④が重要である。この両者は、1890年代の「農業危機」の要因ないし要素として注目されていたのであった。

③についていえば、ロシアさらには米国の農産物の流入により、ドイツ農業は英国市場を失ったばかりか、農産物輸入国に転落した。④は、東エルベの農業労働者の工業地域への移住のことであり、当時、「農業労働者問題」は、ユンカー経営の危機の問題として、ドイツ社会政策学会でも重視されていた。M・ウェーバーは社会政策学会の依頼に応え、レポートを発表している（フランクフルト党大会のシェーンランク報告はこのレポートに依拠していた）。ナショナリストたるウェーバーは、ユ

ンカーがポーランド労働者を雇うことがドイツの「国家理念」を危うくすることをうれえ、東部国境の閉鎖と、上からの農民的土地所有の創設とを提言したのであった。

第19章の2では、「農作の方法を資本主義的に組織するという必要」が「小地所有を駆逐する」こと、3では、非農業者と農業者との利害の対立が説明される。

本書の最大の特徴は、第4編にある。草間平作は「訳者序」において次のように述べている。

〈近代の社会主義学者たちが将来の新社会の問題に一切論及せず、それをもってむしろ自己の思想の科学的なるゆえんとしているのに反して、ベーベルはあえてその事をしている〉。

しかしながら、「新社会」へと到る過程の叙述は極めてあいまいであること、ここに問題がある。第4編の構成を示しておこう。

第20章 社会革命 1.社会の変革 2.徴収物の徴収

第21章 社会主義的社会の根本法則 1.労働能力者全員の労働負担 2.利害の調和 3.労働の組織 4.労働の生産性の増進 5.精神労働と筋肉労働との対立の廃止 6.消費能力の増加 7.万人の労働義務の平等 8.商業の廃止。運輸交通の変化

第22章 社会主義と農業 1.土地私有の廃止 2.土地の改良 3.農法の変化 4.大農法と小農法。電気農法の発達 5.将来の葡萄の栽培 6.地味涸瘦の防止策 7.都市と田舎との対立の消滅

第23章 国家の廃止

第24章 宗教の将来

第25章 社会主義的教育制度

第26章 社会主義的社会における芸術と文学

第27章 人格の自由な発展 1.生活の安定 2.食料の変化 3.共産主義的炊事場 4.過程生活の変化

第28章 将来の婦人

第29章 国際関係

第30章 人口問題と社会主義 1.人口過多の恐怖 2.人口過多の製造 3.貧困と生産力 4.人間の欠乏と食料の潤沢 5.社会関係と生殖力

第20章の1でベーベルは、以下のように述べている。

〈支配階級というものは、情勢の圧力が分別と服従を強くないかぎり道理によっては決して説服されない〉。〈大衆の間に現存状態の維持不能の洞察と、その根本的改造の必要の認識とが高まるにつれて、被圧・日擄取階級の無智と無見識とにその力の基礎をおく支配階級の抵抗力は減退する〉。

〈それぞれの発展段階においてどんな方策をとったらよいか、その時の事情による。…手段の問題は、戦争における戦術の問題である。戦術は相手により、さらにまた敵と味方の両方に許された手段によって決まる。…必要なのは、時と事情とが許す限り最も実際的な、最も有効な手段を取らねばならぬということである。それ故、将来の姿をえがく場合は、ただ仮設的にそれをなし得るだけである。つまり事情を実際に起こったものとして仮定せねばならないのである。

この見地からしてわれわれは、或る一定の時期に上述の一切の弊害はその頂点に達し、国民の大多数にとってそれが堪えがたいものに思われるほどに顕著となり、痛切となること、そして彼等は根本的改革に対する共通の、やみがたい要求をいだくに至り、しかも最も迅速な救済を最も目的に適ったものと認めるようになるということを、前提とするのである。

見られるように、いわゆる政治革命についての説明はまったくない。大衆の意識の発展が「前提」され、支配階級の敗北を「実際に起こったものとして仮定」した上で、未来社会が描写される。まさに自然成長的革命論＝待機主義に他ならない。

〈すでに80年代には革命という概念は資本主義社会の崩壊と同一視されていた〉。〈ここでは、革命は自然のできごととして現れており、そのできごとを利用することこそが肝要なのであって、それを利用することができるのは、ただ、プロレタリアートが組織されている場合だけである。ここに、ドイツの党内における組織にたいする物神崇拜主義の根源の一つがある〉（シュタインベルク前掲書）

1881年、ベーベルは次のように書いている。

〈もし事態が、まったく疑いのないことですが、ずっと先に発展すれば、ある特定の瞬間に、支配階級がある種の催眠状態に陥って、どんなことでもほとんど抵抗なしに甘受するようになるということ、私はありうるのだと考えています。…条件は、発展がすっかり成熟することができて、不慮の偶発事件によって妨害させられたり早まって爆発させられたりしない、ということです〉（3月28日付エンゲルスへの手紙）。

この自然成長的革命論は、発展過程を促進することもできないという命題を含んでおり、それ故、待機主義を必然とするのである。これがSPD主流派に共通の思想であった。

【注 〈こうした〔発展を促進させるわけにはいかないという〕確信の最も奇妙な表現は、1894年のフランクフルト党大会で党機関紙の編集者の高給が論議されたさいに、レギーエン [1861～1920 組合指導者] がその高給に反対した論拠であって、そのとき彼は、「社会主義が一つの自然必然的なものだというのは、われわれは個々の人物を頼りにしてはいないからです」と述べたのであった〉（シュタインベルク前掲書）。ここでやり玉に上がったのは、リープクネヒトである。】

第21章～30章の内容については、検討する必要がない。マルクスは1881年2月22日付のニーヴェンホイス宛の手紙で、次のように述べている。

〈将来の革命の行動綱領の純理論的な必然的に空想的な予想は、ただ現在の闘争からのみ出てくるものです。世界の没落が間近に迫りつつあるという夢は原始キリスト教徒をローマの世界帝国にたいする戦いにおいて彼らを奮い立たせて、彼らに勝利の確信を与えました。支配的な社会秩序が不可避免的に絶えず我々の眼前で分解しつつあるということの科学的な認識、古い政府の亡霊そのものによってますます激情を掻き立てられる大衆、同時に巨人の歩みをもって確実に発達する生産手段——これは、現実のプロレタリア革命の突発の瞬間にその（たとえおそらく牧歌的ではないであろうとはいえ）直接的な差し当たりの行動方式の諸条件も与えられているであろう、ということの保証として十分なのです〉。〈かの問題〔社会主義者が権力を掌握した場合に、まず第一に行わなければならない

立法措置]は…五里霧中であり、したがって実際には空想問題を述べているのであって、それにたいする答えはただ一つ一問題そのものの批判でなければならないのです)。

確かに『女性と社会主義』は、党員に「夢」と「確信」を与え、その未来社会論は党内に広く行き渡ったのである。

【注 既述したように、本稿では帝国主義論争には立ち入らないが、次のことだけは述べておきた。資本の集中=社会化という視角から独占を捉えるのが、SPD「正統派」の特徴だということである(レーニンもこの系譜に連なる)。】

〈メーリング、レーデブーア、パルヴス、ローザ・ルクセンブルク、クララ・ツェトキンら、筆者が「批判派」と呼ぶ人々に対し、ベーベル、カウツキー、アードラー [1852~1918 オーストリア社会民主党創立者]らがすでにこの時期 [ベルンシュタイン論争時]に異質なものを感じていたことは注目に値する) (西川正雄前掲論文)。

パルヴストローザは、いわゆる「オスト・ロイテ」(東方の人々)であって、ロシアやポーランドで革命闘争に参加してきたかれらが、自然成長的革命論=待機主義になじむはずがない。かれらにあっては、革命は闘い取るものであった。ツェトキンもまた、元ナロードニキの社会主義者から影響を受けて入党し、その後その社会主義者と結婚してともに活動したことからして、「オスト・ロイテ」に準ずる人物と考えてよい。

パルヴス(1867~1924)は、ロシア出国後バーゼル大学で学んで1891年に学位を取得し、同年ドイツに移住してSPDに入党した。彼は、1896年に注目すべき論文「クーデターと政治的大衆ストライキ」を發表している。なぜ注目すべきか? それはこの論文が、エンゲルスの「政治的遺書」で明示しきれなかった決戦時の戦術に、一つの回答を与えているからである。幸いにもこの論文には抄訳がある(山本統敏編『第2インターの革命論争』所収)。

ゼネラルストライキについては、第2インターの創立大会以来、論争が続けられてきた。その基調は、フランス・サンディカリストとSPDとの対立であり、抽象的レベルの問題であった。それが実践的論争となったきっかけは、1890年代に入ってからベルギーで闘われた普通選挙権を求める大規模なゼネラルストライキである。¹⁷

エンゲルスは、ゼネラルストライキに反対であった。例えば、次のように述べている。

〈ゼネストはバクーニン主義者の綱領では、社会革命を導入するために用いられるべきである。…1873年9月1日のジュネーブの同盟派 [バクーニン派] の大会でも、ゼネストは大きな役割を演じ、ただそのためには、労働者階級の完全な組織化と充実した金庫とが必要であることが、各方面からつけくわえられたただけであった。そしてこの点にこそ困難があるのである。一方では、政府は、特にそれが政治不参加によって勇気づけられているときには、労働者の組織率にしても金庫にしても、そこまで発展することを許さないであろう。また他方では、プロレタリアートがこの理想的な組織率と、この巨大な準備金とを手に入れるところまですすむはるか前に、政治的な諸事件と支配階級の侵害行為とが、労働者の解放を成就させることであろう。だがまた、プロレタリアートがそれらのものを

¹⁷ 〈第2インターナショナルの時代には、大衆ストライキとゼネラルストライキという用語は、一般にほとんど区別されずにもちいられている) (田中良明『パルヴスと先進国革命』)。

もっているとしたら、目標を達するためにゼネストなどという回り道を必要としないであろう（1873年「バクーニン主義者の活動」）。

〈私は、そのような〔政治的闘争手段としてのストライキに関する〕論文は今こそきわめて有害に働くにちがいないと確信している。…君は自分の口で、バリケードは時代遅れであると言っている（だがそれは、軍隊の3分の1ないし5分の2が社会主義者となり、彼らに転覆のきっかけを与えるやいなや再び有用になるだろう）、だが、政治的ストライキは、――（軍隊が非常に動揺していたベルギーのように）たんなる威嚇によって――すぐさま勝利となるか、遂にひどい恥さらしに終わるか、あるいは結局は直接にバリケードに至るにちがいない）（1893年11月3日付カウツキーへの手紙）。

【注 エンゲルスは、次のようにも述べている。〈3年たてば、われわれは農村労働者を獲得することができ、そのときにはプロイセン軍の精鋭部隊はわれわれのものになる〉（1890年3月9日付リープクネヒトへの手紙）。〈1900年ごろには、かつてはドイツのうち最もプロイセン的な要素だった軍隊は、その多数が社会主義的になるだろう。これは宿命のように免れがたいものである〉（「ドイツにおける社会主義」）。】

バルヴスは、前掲論文の序論の冒頭で、〈ドイツの国家擁護派諸政党の「国内の敵」に対する闘争は休止期に入った。…ストライキが大臣によって認可されるということが可能になった〉ことを確認し、ついで、クーデターを公然と宣言した退役軍人ボグスラウスキーのパンフレットの発行など、執筆の動機を示しながら、次の言葉で序論を締めくくっている。

〈われわれはこの論文で、しばしばフリードリヒ・エンゲルスに言及する。この点自体に関しては特別な説明を必要としない。しかしこれにはなお一つの特異な理由がある。つまり、フリードリヒ・エンゲルスが昨年、K・マルクスの『フランスにおける階級闘争』の新版への序文で展開した労働者運動の戦術についての最後の論述が様々に誤解されているという理由である〉。

要するに、バルヴスは、SPDの影響力を排除するにはクーデターしかないと主張する。この際、この情勢分析が正しいか否かについては、問題にしない。つまり、クーデターへの対処策にテーマを絞る。何れにせよ、本稿「7）エンゲルス晩年のドイツ革命構想 iii）戦術について」で示したエンゲルスの問題意識（1892年11月12日付ラファルグへの手紙）を継承していることを確認されたい。

バルヴスはまず、〈人民と政府との間の抗争において一般的に妥当する諸力や諸作用についての表象をえるために、バリケード革命について若干の考察を行な）う。

〈バリケード革命は、歴史が示しているように、とりわけいま述べたような政治的表現〔人民大衆の憤激の爆発〕の一連の結果であり、同時にこれらの発展の結合、そしてその力と影響の最高度の増大であるように映ずる。しかしバリケード革命はこれ以上のものであった。これは社会の解体作業であった〉。経済活動は休止し、政府機構はマヒする。〈政府機構は、…以前には人民の保護者だと自称していたのに、今や彼らは人民に対して保護を必要と必要とするものになった。…政府の努力はとりわけ、秩序を再び再建する方向に、つまり人民に対して社会の各々の立場に従って相も変わらず単調な仕事を再び繰り返すよう暴力でもって強制し、暴力的に旧習墨守を強制するという方向に向いていた。警察だけが〔？〕群衆の波の中で消え失せ、無力となった。したがって信頼できるのは唯一

つ——軍隊だけ——となった。…しかし、この方向に対して人民自身が反抗した。このようにしてバリケードが登場した）。

パルヴスは、バリケードの意義を二つあげている。

〈第一に、バリケードは結集点であり、組織的手段であった。まさに、歴史上有名な某量革命がそうであったように、そもそも未組織の大衆が問題となったところでは、この点が非常に重要であった。大衆集会はこのバリケードによって目標と結束手段を獲得した。…彼ら〔小売商人、手工業者、家内工業者等〕すべてにとってバリケードは徹頭徹尾革命の宣言、つまり革命の公然たる告知と主張であり、革命勢力結集のために高く掲げられた旗であった。…すべての革命は展開するために時を必要とした。そしてこの拡大能力が持続する限り、勝利は人民の側にあった〉。

〈第二に、バリケードは防壁となる。つまり人民の側にとっては擁護物、軍隊の側にとっては障害物であった。このバリケードが軍隊を妨害する力は単に物質的作用によるものではなく、むしろそれ以上にモラル的な作用による〉。

かくしてパルヴスは、〈一方には人民の集会・組織・革命的昂揚、他方には軍隊の解体と士気阻喪、ここにこそバリケードの本質が存在していた〉と述べ、結論を三点にまとめている。

① 〈現在の武器技術の高度の発達という状況で軍隊に対して何らかの暴力的抵抗を敢行しようと欲するのは〉論外である。

② 〈政治革命の本質は決してバリケード戦だけにあるのではなく、他の表現形態をも持っているこれらはひっくるめて社会の解体作業と特徴づけることができる〉。

③ 〈軍隊が法律や憲法に違反するクーデターという行為に至るかどうかは、常に軍隊の雰囲気と軍隊を従属させることのできるモラルの影響とにかかっている〉。

続いてパルヴスは、国民皆兵と兵役期間の短縮とによって軍隊と民衆との隔絶を弱めること（民兵制に近づくこと）を述べ、しかしながら、〈軍隊においては、心の奥底におそらく存在している反対派気分をたいして、組織、規律、指導によって計画的にもたらされる兵士の意志活動の絶滅と、号令に本能的に従属する部隊総体における兵士の個性の解体とが立ちはだかっている〉ことを指摘し、〈この呪縛力を粉砕すること…がバリケードに課せられた役割であった〉とした。

しからは、バリケードが論外となった今、クーデターにいかに対抗すべきか？

〈規律とそ行きの力はなるほど巨大ではある。しかし人民と抗争している時、長期にわたってこの力を維持することはできない。兵士のモラル的な抵抗の努力は短期間であれば抑圧することができる。しかしこの抑圧が長期にわたるならば、緊張はゆるみ、抑圧の影響力はわずかとなり、他方同時に抵抗は増大する。だから軍隊はそのまま静かに放置しておけば十分であろう。そうすれば組織と規律は自然に消耗してゆく〉。

〈バリケードの戦術的有用性は人民にとって、軍隊の指導者にとってよりはるかに小さい。バリケードは人民にとって非常に脆弱な防御物であるにすぎない。しかしそれは、軍隊の指導者にとって非常に好都合な攻撃の足がかりとなる。巨大な政治的激動期において軍隊が非武装の人間集団と対立する場合、事情は全く異なる。この場合、軍事的に掌握可能なものは何も存在しない。革命軍と闘うかわりに、今や兵士は警察が行う全く日常的な監視という職務に用いられる〉。

〈バリケードは破壊することができる。しかし人民が呼びかけ、プラカードやパンフレットによって軍隊に影響を及ぼすことをなにもものも妨げることができない〉。

〈公けの街頭に自由に集まった人民は、…軍隊に対してバリケードの背後から鉛弾で脅しをかける人民の集団よりも、はるかに大きなモラル的抵抗力を軍隊に対して示す〉。

かくてパルヴスは、「受動的抵抗」を提起する。

〈クーデターに際して武装勢力に対抗する人民の行動スローガンは次のようになる。『バリケード戦ではないのだ！ 暴力的抵抗ではないのだ！ 挑発にのってはいけない！ 必ず登場する道徳的な解体が、乱暴狼藉行為をそそのかす者たちを混乱に陥れ、彼らに退却を迫るまで、静かにもちこたえよう』〉。

〈革命は無意識的な結束手段を持っていた。これがバリケードだった。今やバリケードは破壊された。…小ブルジョアその役割もその意義を減じた。ところが、一つの社会階級は、最初から組織されており、既に述べたように受動的抵抗という形で持ちこたえることができるだろう。いいかえるならば、ひっぱりだされた大砲や小口径銃はブルジョア革命の終末を準備したが、プロレタリアートの政治的抵抗力を完全には破壊しえなかったということである。

無意識的な結束手段がない場合でも、労働者がどのようにしたら結合しうるかということを示している。…今や組織のためのこのような残虐の補助手段〔資本家への暴行や機械の破壊〕は、階級意識によって置きかえられた。ストライキにおけるスローガンは今やまさに逆である。「決して暴力行為を行なってはならない！」…ストライキによって今や初めて大衆的発展が可能となった〉。

プロレタリアートが「組織されて」いるとは、政党や労働組合を指す。パルヴスは特に、後者を重視している。

〈政治組織はもろく、政治的雰囲気依存している。しかし労働組合組織は堅固であり、労働者とその経済的地位という基盤、つまり搾取という基盤と結びついている〉。〈労働者階級の組織は破壊されても即座に不死鳥のごとく立ち上がる。その保証は、経済的諸関係から生じ、今や歴史の発展によって強固となったプロレタリアートの階級意識にある〉。¹⁸

またパルヴスは、労働者自治という注目すべき主張をしている。

〈何が重要なのか？ 人民が持ちこたえ、恐れることなく、しかしまた軽率へとそそのかされないことである。このために人民は、みずから官吏、警官、および秩序を維持する役人を選ばねばならない。…階級意識あるプロレタリアートは、資本主義社会内の他の階級に不可能なことを行うことができる。つまり彼らは自己自身を統治することができる。そしてアナキズムの大言壮語や熱中とは異なった、この強力な組織の静かな秩序が、その打ち勝ち難い政治的抵抗力を作り出す〉。

以下パルヴスはまとめに入る。

〈クーデターにさいしての人民の行動は、政治的大衆ストライキ以外のなにもものでもない〉。〈政治的大衆ストライキは、その目的がより良い労働条件の獲得ではなくて一定の政治的変化の達成であること、従って個々の資本家に対してではなく、政府に対して向けられているという点で他のストラ

¹⁸ 同じ時期にパルヴスは、党と労働組合の強化のために、8時間労働闘争を提起している。

イキから区別される）。〈このストライキは、社会の経済秩序を混乱させることによって政府と闘う。…この秩序解体の基礎は疑いもなく労働停止である〉。

パルヴスは、「政治的大衆ストライキが有効となりうるための条件」として、①労働者階級の組織＝労働組合、②ストライキ基金、③パンヤと小売商人の信用、④消費協同組合を列記している。また、〈大衆ストライキは一つの重要な政治的要因である。しかし救いを保障する唯一の政治闘争手段ではない〉と釘をさすことを忘れてはいない。さらに、〈最も重きがおかれ、政治的ストライキにおいて全く特殊な位置をもつのは、交通手段である。もしも巨大な交通手段が経営できなくなれば、全社会の生産機構、さらには政治機構が停止する〉。

〈バリケード革命の闘争の場はもっぱら首都であった。…しかし政治的大衆ストライキには首都という限界はない。むしろ政治的大衆ストライキの前提は全国への拡大である〉。バリケード戦の時代とは異なり、〈地方における政治運動はこれまで知られなかったほどの力で生ずるだろう〉。特に、「歴史的に群小国家から形成されたという事情によって条件づけられているドイツ」では、人民の側に立つ邦国や都市が出現する可能性があり、政府を解体へ導くことを可能にし、政治的大衆ストライキを一層有効にする。

〈クーデターが意味するもの…は、帝国の崩壊と国家の解体である。では、クーデターへの回答として遅から早かれ不可避免的に登場する政治的大衆ストライキは何を意味しているのだろうか？ …政治的大衆ストライキはプロレタリアートによる政治権力の獲得を意味している！ なぜなら次のことがいうまでもなく真理だからである。つまり、階級意識あるプロレタリアートだけが政治的自由や憲法を暴力に対して守ることができるのである。そしてもしも憲法違反の政府の暴力が打ち破られたならば、戦場で確保し、政治指導を引き受けるのはプロレタリアートであろう〉。

以上がパルヴス論文の概要である。種々の限界や問題点があるにしても、その意義を確認しておこう。

第一に、クーデターへの対処策としてではあるが、決戦時の戦術として政治的大衆ストライキを提起し、大衆ストライキ論の先駆をなしたことである。社会の解体＝暴力革命の手段として、政治的大衆ストライキは構想されていた。

その際、革命の焦点となる軍隊の解体・獲得という視角をエンゲルスから継承し、政治的大衆ストライキがその機能をもつと主張したこと、これが第二である。

第三に、パルヴスがこの論文の構想をトロツキーとともに、1905年にペテルブルクで実践したことである。これはある意味で、ロシアでの革命方式を形づくることになった。

【注 残念ながら、20世紀に入ってからの大衆ストライキ論争には立ち入れない。〈なおかれ [パルヴス] は、1908年3月のこの [マルクス死後25年記念の] 論文において、マルクス主義の思想的源泉を、ヘーゲル哲学、イギリス古典派経済学そしてフランス社会主義の三つに求めて、「これら三つの最も重要な文化国における政治的経験と社会的発展の哲学的統一」においてマルクスを把えているのは注目に値する〉（山口和男前掲書）。レーニン「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」は1913年。】

レーデブーアは、植民地論争・帝国主義論争の中に、あるいは戦時公債反対者の中に名前が出てくるが、資料がなくて、よくわからない。

メーリングも謎の人である（ベーベルは彼を「心理学的謎」と呼んだという）。わからないのは、なぜメーリングが急進派の立場を貫くことができたのかということに他ならない。メーリングは思想的格闘を経て、1891年、45歳にして入党した。マルクス主義の研究を始めてから、十数年が経過している。鍵は、この過程にあると思う。推測になるが、以下、二点を指摘しておきたい。

一つは、いわゆる初期マルクスとの関係である。メーリングは、1892年にエンゲルスに認められた。メーリングは、1893年に発表した論文で次のように述べている。

〈それ〔資本主義的生産様式の内的メカニズム〕は、ブルジョア社会の完全なる崩壊を、たとえ特定の日とか特定の時間のできごとではなくても、非常に近いうちのできごととするような確実性をもって、動いている〉。〈これまでの支配階級の破産を清算するという、そのときのために戦備を整えておくこと、…重要な任務である〉。

これは、当時のSPDにあって、極めてオーソドックスな主張である。しかし同じ年、メーリングはカウツキーと論争している。〈カウツキーが「ドイツの道は議会主義への道である」とのべたののに対し、メーリングは議会主義の幻想をいましめ、議会主義によるプロレタリアートの権力奪取は不可能であると説いている〉（平井俊彦「ルカーチのメーリング像」、『ドイツ社会民主主義史（下）しおり』所収）。

『ドイツ社会民主主義史』を読むと、例えば『資本論』の解説は当時のトップ・レベルにあると思われるが、より目を引くのは、マルクス・エンゲルスの思想成長過程を丁寧に叙述してあることである。おそらくこれは、他の当時のマルクス主義者にはないメーリングの特徴であろう。メーリングは、思想格闘機に、マルクス・エンゲルスの思想を追体験的に吸収したのではないか。それがまた、メーリングをして、カウツキーのような硬直した「マルクス説教者」から自らを区別し、初期マルクスの革命的パトスを堅持することになったと思う。

1895年、エンゲルスは、『ライン新聞』に掲載されたマルクスの初期の論文集を刊行することについて、フィッシャー（1855～1926）およびメーリングと文通している。メーリングは、1902年に『マルクス、エンゲルス、ラサール遺稿集』を刊行して、エンゲルスの遺志を実現した。それに収められたのは、『ライン新聞』、『独仏年誌』、『新ライン新聞』、『新ライン評論』の諸論文、および『神聖家族』などである（この『遺稿集』はレーニンのマルクス主義受容に大きな意味をもった）。

もう一つは、ラサールとの関係である。これは、メーリングの行き方の問題になる。メーリングは、次のように述べている。

〈観念論はラサールの弱点であったが、またその強みでもあった。観念論は、ラサールの理念の力にたいするあの強い確信を与え、それによってかれは、偉大なことをなしとげたのである〉（『ドイツ社会民主主義史』）。

メーリングは、「理念の力にたいする強い確信」をラサールと共有していたように思われる。それは一種のロマン主義であり、「観念論的審美主義」（ルカーチ『メーリング評伝』）と呼ぶことがで

きようが、革命は闘い取るものだと考えるローザとメーリングを結びつけるものだったに違いない。

9) 修正主義論争（その2）――ベルンシュタイン論争

i) イギリス時代のベルンシュタイン

ベルンシュタインは、カウツキーと並ぶマルクス主義的イデオログであり、二人は親友でもあった。そのベルンシュタインが転向したことは、当時のマルクス主義者に衝撃を与え、マルクス主義史においても一つの論争点となっている。

【注 〈エンゲルスは1886年ころでさえ、ベルンシュタインの方が優れた政治的論客だと感じていた。なぜならば、ベルンシュタインは「大学出」ではなく「実務家であり、また重要なことに、ユダヤ人であり、… [ママ] しかも闘争というものは、闘争のなかでしか学べない… [同] からだった〉（スティーenson前掲書）。スティーensonによれば、1890年頃のカウツキーの離婚問題以降、カウツキーに対するエンゲルスの個人的感情が悪化したという。カウツキーは、エンゲルスの遺稿管理に指名されなかった。指名されたのは、マルクスの娘およびベーベルとベルンシュタイン。】

ベルンシュタインの転向について、イギリスでの亡命生活が決定的だったということは、衆目の一致するところである。種々の論者が指摘している点を、以下に列記しよう。

①イギリスでの生活そのもの――「自由と民主主義」、イギリス文化、「大衆社会化」

〈ベルンシュタインが1888年にロンドンに移住して以来自己の新たな思想形成を遂げていった時期は、イギリス労働運動および社会主義運動の昂揚と再編の時期でもあった。すなわち、それは「社会主義の復活」、「新組合主義」の発生、そして独立労働党運動をへて労働代表委員会の発足にいたるイギリス労働党の形成期と一致していたのである〉（亀嶋庸一『ベルンシュタイン』）。

まず「自由と民主主義」に関していえば、ロンドンのストライキ中にベルンシュタインが演説したことがある。〈この演説の間幾人かの警官が傍に居たが、動めいている群衆を平穩の内に監視し、無秩序になるのを防いでいるだけであった。警官はベルンシュタインの演説に干渉するでもなく、聴衆に攻撃を加えるでもなかった〉（ゲイ『ベルンシュタイン』）。

またこれは1880年のロンドン旅行の際の話であるが、ベーベルとベルンシュタインがパリ・コミューン戦士の遺族のためのチャリティ招待会の夕べに出かけ、寄付名簿を見たところ、冒頭に「第一位女王陛下10ポンド」とあって驚いたという。

これらのことは、否応なくイギリスとドイツとを比較させたし、ドイツもいずれはイギリスのようになるだろう、あるいはならなければならないと思ったにしても不思議ではない。

次にイギリス文化について。〈彼 [ベルンシュタイン] の自伝『私の亡命時代から』によれば、ベルンシュタインは在英中イギリス人との日常的接触を通して相互信頼と個人的自己責任の習慣に感銘を受けた。とりわけ彼の興味を引いたのは、こうした監修の背景となっていたイギリスの宗教的伝統であり、その伝統と労働運動との結びつきであった。…さらに、宗教的伝統と労働運動との関連についてのベルンシュタインの関心によって一層決定的な契機となったのは、彼が実際に接したイギリス

労働運動の指導者たちのもつ特性であった。…彼は、イギリスでは労働者階級出身の社会主義者の多くが厳格な禁酒主義者であり、その点でブルジョア階級出身の社会主義者と際立った対照をなしていることを知ることになった〉（亀嶋庸一前掲書）。

「慣習」については、同じ自伝で、イギリス庶民の市民社会的モラルの高さについて述べているという。例えば、水泳禁止の禁令があっても、自分で生命の危険を冒して泳ぐものは自由に泳げることとか、駅で荷物を預けて受取証をくれないことに示されるように、社会が信頼関係に基づいていることなど。

「大衆社会化」について。〈ベルンシュタインが亡命した当時、イギリスはすでに「大衆」の出現という大きな社会的・政治的変動を経験しつつあった。それは、1867年の第二次選挙法改正を決定的な契機とし、政党組織の「名望家政党」から「大衆政党」への移行を伴いながら進行してきた。政治の舞台におけるイギリス労働者「大衆」の出現は、経済的發展によって作りだされた、一定程度均質な存在様式をもつ「プロレタリアート」の大量発生を背景としていた。…けれども、この過程は、他方で、労働者階級内部の利害関係の多様化、新たな階層化という現象を生み出した〉（同）。

1890年頃のベルンシュタインは、1884年の選挙法改正を、選挙人の重心を「階級」から「大衆」（小ブルジョアと労働者）に移し、労働者間への社会主義の浸透を促進したと評価していた。従って、その先に政党の階級的再編成を期待することができた（自由党の「混合政策」化→労働者政党の創出）。間もなく、この認識は変化する。〈ベルンシュタインは「混合政策」の現象を、以前のように過渡期的なものとしてではなく、大衆民主化に伴う普遍的・必然的な現象として捉えるにいたった。彼にとって、選挙権の拡大は政党の純粋な階級政党化ではなく多様な階級利害の混在化をもたらし、しかもそれは政党の弱体化ではなく政党指導者の権力的地位の強化を帰結させるものとなったのである〉（同）。

独立労働党の完敗に終わった1895年のイギリス総選挙を評し、ベルンシュタインは次のように述べた。〈われわれは、産業プロレタリアートのうちに…生まれつきの革命的階級を見出すのであるが、しかし、この階級が最も強力で最も発展している国では、彼らは自らを…保守的要素として示そうとしているようにみえる。われわれの理論は誤っているのであろうか〉。

かくしてベルンシュタインは、SPDに支配的な「階級闘争に関する極めて形式主義的な解釈」を批判するに至った。つまり、イギリスの現象を普遍的傾向と捉えたということである。

②フェビアン協会との関係

ベルンシュタインは、シドニー（1859～1947）およびビアトリス（1858～1943）のウェブ夫妻、バーナード・ショー（1856～1950）などのフェビアン協会指導者と交際した。フェビアン協会を「自由党の書店」（『ザ・デイリー・クロニクル』紙特派員とのインタビュー）MEW,Bd.22）と考えるエンゲルスは、ベルンシュタインの「フェビアン心酔」を快く思わなかった。ベルンシュタインは、自らの転向へのフェビアン協会の影響を繰り返し否定しているが、実際には、ウェブ夫妻やショーの見解を支持している。

〈ベルンシュタインのフェビアン協会への共感の増大は、急進的—マルクス主義的に行動する社会

民主連盟にたいする厳しい批判と一致するものであった〉（シュタインベルク前掲書）。

【注 社会民主連盟については、エンゲルスも「小さなセクト」と捉えていた（前掲インタビュー）。】

また、フェビアン協会への共感は、ウェップ夫妻の『労働組合運動史』の独語版に付されたベルンシュタインの「後書き」に示されている。産業の不平等発展に由来する「労働組合タイプの多様性」という事実が、単純な階級社会観の「本質的な訂正」を迫っており、労働組合観も転換せざるをえない。

〈労働組合運動は、本質的に労働者階級の貴族層と呼ばれる層に大体限られているか、あるいは彼らの中にその主要な拠点を見出す。…著者が本書を書き終えて以来、いわゆる新組合のいくつかは一層後退していったように見えるのに対して、旧組合の若干は常に前進し発展した〉。

これは、イギリスの工業独占の崩壊とともに労働貴族の組合は地位を喪失し、不熟練労働者を中心とする新しい組合が労働運動の指導権を握るというエンゲルスの見立て（「『イギリスにおける労働者階級の状態』イギリス版（1892年）への序文」）とは対立するものである。ベルンシュタインにとっては、労働組合そのものが重要なのであった。

〈未来の奇跡…への信仰に耽らないものは、労働組合を発展的な民主主義的自治の初等教育としてのみならず、社会民主主義によって求められる経済的改造の重要な梃子の一つとして歓迎するであろう〉。

後にベルンシュタインは、次のようにベーベルに書き送っている。

フェビアン協会向けの講演で、〈私はマルクスを救おうと苦慮し、…無理矢理こじつけた講演ノートを読み上げている内、次のような思いが脳裏をかすめました。「お前はマルクスを曲解している。お前がしゃべっていることはマルクスのものではない」と。その上講演の後…二、三の何でもない質問に対し、私が旧来の方法で答えたことをも私をうちのめす原因となりました。これ以上の続行は不可能だ――私はこう自分にいい聞かせました。調整できないことを調整しようとしても甲斐のないことです。必要なのはマルクスの正しい部分と正しくない部分との区別を明確にすることです〉（1898年10月20日付の手紙）。

③ラサール著作集の編集

〈ベルンシュタインも党によって与えられたラサール全集の編集の仕事を通じて、ラサールの政治的民主主義論と人間関係における倫理性を強調する主張に深い感銘を受け〉（安世舟前掲書）たというが、詳細不明。

ベルンシュタインは1904年、ラサール没後40年を記念して『フェルディナント・ラサールと労働者階級にとっての彼の意義』を刊行したが、その序文で次のように述べている。

〈本書で明らかにしているラサール評は、かつてラサール選集序文〔1891年〕で私がとった見解とは幾つかの点で相違している。…それは私の理論的発展が、私をラサールに精神的に近づけた結果であると同時に、ラサール研究が一層全面化した結果でもある〉。

④ランゲの研究

ベルンシュタインは、1891～92年にランゲ（1828～1875 新カント派マルブルク学派）を研究し、『ノイエ・ツァイト』にエリセン著ランゲ伝の書評を兼ねたランゲに関する論説を発表しているが、内容不明。フォアレンダー（1860～1928 新カント派哲学者、第1次世界大戦後にSPDに入党）は『カントとマルクス』の中で、次のように述べている。

〈ベルンシュタイン自身も、私にあてたある手紙のなかで、彼を「一步一步カント主義へと導いた」「一連の影響について語っている…。このようなものとして、彼がまず第一に挙げているのは、フリードリヒ・アルベルト・ランゲの研究であって、彼はとりわけエリセンのすぐれた伝記によって、ランゲ研究を刺激されたのである〉。

【注 〈ランゲの理想主義的な、ヒューマンに根ざしている社会主義は、彼の著書『労働問題』において社会ダーウィン主義と融合され粗悪なものにつくり変えられてしまったとしても、やはり彼は、まさにこの著書と、新カント主義に重大なる衝撃を与えた彼の著書『唯物論史』とによって、社会問題を、新カント主義哲学の中での哲学的考察の対象として確立させた人物だったのである。とりわけエリセンによる伝記によって助長された90年代初めのランゲ・ルネサンスは、修正主義と新カント主義とを相互に接近させることに、本質的に加担するものであった〉（シュタインベルク前掲書）。本稿「3）1880年代」で言及したヘーヒベルクは、ランゲの弟子にあたる。】

⑤メンデルゾンの親交

PPS(ポーランド社会党)の創立者の一人であるメンデルゾン（1857～1919）は、ロンドンで亡命生活を送っていた。ベルンシュタインは、1893年以来、メンデルゾンと親密な関係にあったという。

〈メンデルゾンは、1893年に社会主義運動から離れ、とりわけ1895年以降は、最も鋭い調子でドイツの党を攻撃していた。彼の駁論は、「今日ではもはや誰も信じていない古くさい調子や古くさい決まり文句」に向けられていた。彼は、社会民主党が、たとえばイギリスの労働組合主義者やフランスの現実的改革主義者（ポシビリスト）とは対照的に、なんら積極的な改良活動を行っていないにもかかわらず、思い上がってインターナショナルを支配しているということで、この党を非難していた。…メンデルゾンは、ドイツの党とブルジョア民主主義との提携が必要だと考え、社会民主党の一見急進的な外面を批判の対象とすることになった。「『非和解的な階級闘争』とか階級対立などといったおしゃべりはいったい、何を言おうとしているのか？」ベルンシュタインの議論は、多くの点でメンデルゾンのそれと似ていたのであって、当然、このポーランド人の側からの影響に深く影響されていたということを排除するものではない〉（同）。

この指摘は、いわば“状況証拠”だけに基づくもの、ないしは結果解釈であろう。管見の限り、ベルンシュタインはメンデルゾンに言及していない。

⑥ゲヴァーニッツおよびヴォルフの著書に対する批判

ベルンシュタインは、ゲヴァーニッツ（1964～1943）の著書『社会平和のために』および『大経営——経済的・社会的進歩』、ヴォルフ（1862～1937）の著書『社会主義と資本主義的社会秩序』を批判する論説を『ノイエ・ツァイト』に発表した。このことに関してベルンシュタインは、後に次の用に述懐している。

〈この三著はいずれも、当時の社会民主党内で広く普及していた、マルクスの諸命題に依拠する見解を正しくないとして論駁するものである。すなわち、資本主義的生産は民衆の貧困の増大を導くものであり、資本主義経済は、それがはらむ矛盾のゆえに滅びなければならず、経済的崩壊に向かって進みつつある、というような理解は正しくない、というのであった。…その〔ベルンシュタインによる書評〕主たる狙いは、このふたりの大学教授がマルクスに対して加えている批判を挫くことにあった。私はまた、ふたりの批判の誤りを立証することにも成功した。けれども、これらの著作中でこの両人が提出している異議が、これで一切合切片付いたわけではないということを、私は当時、すでに自分に隠しはしなかった。彼らの意義のいくつかは、真剣に再検討されてしかるべきである、と私は自分にいきかせた。だから、さしあたっては、弁証法を援用して彼らの批判には根拠がないと断言したりはしないで、むしろ黙ってそれらを素通りする道を選んだのである。私の内心はそれに強く抵抗したのではあったが、しかし、それまでは反論の余地なしと考えられてきたいくつかの命題に対する疑念が、私のうちに頭をもたげてきた〉（『一社会主義者の発展の歩み』1924年）。

また、後に検討する『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』では、ゲヴァーニッツによって「目を開かせられた」、ヴォルフから「いくつかのものを学んだ」ことを「告白して、それを恥だとは思わない」と述べている。

【注 ベルンシュタインは、1891年6月25日付のカウツキーへの手紙でカウツキーの綱領草案に触れ、次のように書いていた。〈しかし、もう一つ別の欠陥に、あなたは気づかなかつたし、私もまたそうでしたが、将軍〔エンゲルス〕は、…われわれが「貧困」という言葉を乱用しすぎて、歴史によって反駁されるという危険に自分たちをさらしている、ということに注意してくれました。】

⑦『資本論』第3巻の出版

上の『一社会主義者の発展の歩み』の引用部分は、次のように続く。

〈その後の数年には、この疑念を一層強めるものがいくつか生まれてきた。なかでも特に言及する必要があるのは、1894年にドイツ社会民主党内で燃え上がった農業問題論争であろう。…さらに、1894年に出版されるに至ったマルクス『資本論』第3巻は、われわれマルクス学徒が第1巻に依拠して行っていたさまざまな推論に疑問符をつけさせることになった。利潤率の問題について、つまり、異なる生産諸部門では剰余価値率に不同性がみられるのに、利潤率…が平均化するということがどうして起こるのかという問題について、そこで与えられている答えは、私にとり——他の社会主義者にとってもそうであったが——価値論の価値評価という点で、冷水を浴びたような効果を持ったのである。さらにまた、資本の運動の全過程を取扱っているこの巻の展開が、第1巻の截然たる断定に較べると、まるで竜頭蛇尾と思えるような全体像を、つまり、ドラスティックに表現すれば、なし崩

しとでもいべき印象をのこす全体像を提供していたことも、間違いなかった。それはなぜかという
と、この巻の展開が、資本の必然的機能ははなはだしく剰余価値に依拠せざるを得ないものだという
ことを、示しているからである）。

〈1880年代となると、そしてまた1890年代初頭にもそうだが、好況期はなるほど短期でしかなか
ったが、不況期までもが同じように短期であった。恐慌の立現われかたは、「ますます破壊的」[エ
ルフルト綱領]ではなかった。それでフリードリヒ・エンゲルスは、彼の手で刊行された『資本論』
第3巻中の恐慌を扱った章において、仮説を立てる必要があると感じた。彼は、…こう書いたのであ
る。…「このように、旧来の恐慌の反復を妨げようとする諸要素はそれぞれ、はるかに激烈な将来の
恐慌の萌芽を宿しているのである」。けれども、当時も、それ以降にも、このような大恐慌はやはり
生じなかった。…このような諸事実が与える印象を避けて通ることは、できなかった。ただでさえイ
ギリスでは、スイスのそれとはまったく違う近代社会の経済活動の姿が私の眼前に展開されていたの
であるが、私はまた、近代社会の経済が持つ諸関係とその拡大力についても、まったく一変した概念
を得たのである。ヘーヒベルクという言葉が改めて私の脳裏に浮かんだ）。

【注 「ヘーヒベルクという言葉」とは、〈ブルジョア経済は、君が考えているよりはるかに大
きな適応能力を持っている〉というもの。】

⑧17世紀のイギリス革命史研究

1895年、ベルンシュタインは、「17世紀のイギリス革命における共産主義的および民主主義的・
社会主義的潮流」と題する研究を発表した（1908年の第2版では、『イギリス大革命における社会主
義と民主主義』に改題）。ベルンシュタイン自身、後に、〈唯物史観に立脚して歴史事象を取り扱っ
た、かなり大部の自著として、これは唯一のものである。そのかぎり下同論文は、私の理論的發展過
程を特徴づける一つの記録である〉（同）と回想している。

また、亀嶋庸一前掲書は、「亡命時代におけるベルンシュタインの知的闘争の結晶」と極めて重視
しており、以下、同書に依拠して内容を紹介しておく（断りのない引用は亀嶋前掲書）。

〈イギリスで…実際にえた体験 [①参照] は、イギリス労働運動の歴史的・宗教的源流へと、すな
わち17世紀革命における社会主義の先駆者と宗教へと、彼 [ベルンシュタイン] の関心を向けさせず
にはおかなかった）。

〈イギリス革命史に関するベルンシュタイン論文の特徴の一つは、1648年革命の急進派、とりわ
け彼らとその晩年に示した思想形態に対する彼の強い共感がみられる、ということにある）。

〈1648年の革命については、ベルンシュタインは「大反乱」の近代的性格と、社会主義の歴史と
理論とに対してそれがもたらした、1789年の革命に匹敵する貢献とを強調した。…ベルンシュタイ
ンによれば、レヴェラーズ [水平派] は、必要な政治的手段を知悉し状況を把握することによって、
革命にとってまさに決定的な時期にクロムウェルを凌駕しえた。

「彼らは、革命が国王の無責任な立場を許容し、彼を国事犯としてではなく捕虜として扱う限り、
革命によってなされたいかなる前進も脅かされる、ということを理解した最初の人たちであった」。
けれども、レヴェラーズやその指導者リルバーンに対するベルンシュタインの共感を呼び起こしたの

は、革命への彼らの貢献だけではなかった。彼は、政治的挫折以降の彼らの運命についても共感に満ちた描写を与えていたからである。この側面に関する彼の関心は、もっぱらリルバーンの思想的変容に注がれていた。…従来の闘争手段や、望みの目標を達成する上で政治革命がもつ効果への増大する疑念は、闘争を今までのやり方で続けていくことを批判する方向にリルバーンを導いていったのである。

…17世紀の思想潮流の変化に関する彼 [ベルンシュタイン] の叙述には、図らずも彼自身の時代の思想的変化についての彼の見方が吐露されているようにみえるのである。

「1648年と49年には、… [ママ] 民主的革命を実現できると信じることが可能であった。しかし、1688年、とりわけ95年には、そのように期待することができなくなってしまった」。

〈彼 [ベルンシュタイン] は、カウツキー宛の1893年11月4日付の手紙の中で、急進派の資料に接した興奮を次のように述べている。「『レヴェラーズ』は、当初考えていたよりもはるかに重要である。彼らは、17世紀のチャーチストである」。前述との関連で興味深いのは、彼がこの時すでに彼らの晩年への関心を示していたことである。「レヴェラーズ運動が終わるとともに、ユートピア主義と『プラクティカルなキリスト教』との混合であるクエーカー派が登場する（リルバーン自身、半ば打ちひしがれ、クエーカーとして死んだ）。そして、その時まで革命的であった再洗礼派は平和的な洗礼派となるのである」〉。

〈ベルンシュタインは、1895年の作品の中で、初期クエーカーを革命の第二期の、すなわち「幻滅の時代の子」…として特徴づけていた。…ベルンシュタインによれば、政治的敗北以後に革命の急進派が以前の戦術を批判したが、それは彼らの共産主義的目標の放棄を決して伴うものではなかった。「そのような敗北の場合によくありがちなように、彼らは、政治が大衆を覚醒させる適切な手段でない以上、新たな出発はモラルの領域でなされねばならないこと、すなわち新しいモラルが教えられなければならないということに気づいた」。彼は、共感を込めて、彼らを、社会改良を説き暴力的戦術を非難した「この時代の『倫理的』社会主義者」と名づけた〉。

〈17世紀革命史研究に深く関わっていくにつれて、ベルンシュタインは、レヴェラーズから真正レヴェラーズ [ディッカーズ] の指導者ウィンスタンリーや、さらにハリントンへと関心の対象を広げていった。しかし、これらとならんで、彼の興味を強く引くことになったものに、ある明確な宗教性を備えた急進的な民衆運動がある。研究の終盤にいたって、彼はこの新たな関心に基づいて全体を再検討する必要性を認識し、リルバーンやベラーズのような思想家をより広い宗教的・民主主義的運動の潮流の中に位置付けるよう余儀なくされた。この関心の焦点となり、そしてベルンシュタインのより重要な、しかもより理論的な次元での共感の対象となったのは、フェーカーに他ならなかったのである。…彼 [ベルンシュタイン] はイギリスの運動に対するオランダから移住した再洗礼派の影響を調べようと試みたり、ロラード派 [カトリック教会を批判し、聖書主義を説くキリスト教の一派。14世紀末イギリスを中心に起り、15世紀初頭に反乱を起こすが弾圧される] やケットの反乱 [ケットを指導者とするエンクロージャー反対の農民反乱、1549年] について理解を深めようとした。こうした探求は、これらの運動の多くの側面が「急進的再洗礼派の末裔」であるクエーカーによって引き継がれていたことを、ベルンシュタインに確信させることになった。彼は、この洞察をえることによっ

て、イギリスの宗教改革運動の歴史的意義を改めて検討し、それを17世紀の近代的潮流に繋がるものとして位置付けた)。

〈クエーカーの当初の理念とその後の彼らの富裕化とのパラドクスを、運動がしばしばその創始者の精神とは反対の方向に図らずも進んでしまう典型的な事例として紹介することによって、ベルンシュタインはウェーバーのかのテーゼを、すなわち禁欲的倫理のパラドクスを先取りしていた。クエーカーの変容について、ベルンシュタインは次のように述べる。

「彼の禁欲的節制と分別、彼らのフリーメイスンの結束は、クエーカーをきわめて成功した実業家へと発展させる原因となった。… [ママ] 禁欲は市民的特性…であり、新たな資本が事実上しばしば節制によってつくられる真の大産業発生以前の時期ではとりわけそうなのである」。

ウェーバーは、ベルンシュタインによるこの指摘を「およそこの重要な関連について示唆した最初のものである。」と評価すると同時に、次のような批判的コメントを加えていた。「ただ、この関連は彼が推測しているよりもはるかに広範囲にわたっている。なぜなら、決定的な点は単なる資本蓄積ではなく、職業生活全体の禁欲的合理化にあったからである」 [『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1920年] 〉。

〈ベルンシュタインは、この年 [1695年] を政治的幻滅を象徴する年としてばかりではなく、その他方で、ブルジョア社会に対するより鋭く攻撃的な批判が開始された記念碑的な年として記していた。それを開始した者こそ、クエーカーでもあったジョン・ベラーズに他ならない。…ベルンシュタインによれば、ベラーズは当時の最も深刻な社会問題であった貧困の問題に取り組み、社会のより良い組織化を実現しようと目指した。…彼は、事業が経済的合理性への配慮を怠るべきではないとする一方で、社会問題を解決する上で貧困階級のモラルの向上が必要なことを、そしてこの点での「産業学校 [オーウェンの労働協同体] の貢献を強調した。さらに、ベルンシュタインによれば、ベラーズ思想には、17世紀に登場したイギリスのユートピア主義的・民衆的運動から、革命後の、一方では無神論に行き、他方では反儀式主義的な宗教であるクエーカーを生んだ反教會的・反ドグマ的傾向にいたるまで、当時の思想潮流のあらゆる側面が流れ込んでいた。…このように、ベラーズ思想は、…「ユートピア的共産主義から近代協同組合思想への転換」の結晶として描かれていた。社会の経済的構造への彼の洞察は、ベルンシュタインによればウィンスタンリーのそれをはるかに超えていたが、それは1648年からその世紀の終わりまでに遂げられた社会経済の発達を反映するものであった [この辺りが唯物史観に基づく叙述と評される]。彼は、社会主義の歴史に対するベラーズの功績を、「クロノロジカルな意味ばかりでなく理論的にも、彼は17世紀の共産主義と18世紀の改良運動との間に立つ里程碑である」と評価していた…。イギリス革命史研究の最終章となったベラーズに関する草稿を送付した直後に、ベルンシュタインはカウツキーに宛て次のように述べていた。

「…われわれが今日大いに自慢している英知の多くは、実際にはすでにずっと古くからあったのだ。われわれは二百年以上前にいわれたのと同じことを随分偉そうにいつているにすぎないのに、それをわれわれは今日『科学的社会主義』と呼んでいる)。

〈17世紀研究の意義は、たんに従来からあった傾向を強めただけでなく、社会主義をより広い歴史的文脈の中で再考し、社会主義と民主主義との関係をマルクス主義者とは異なった視点から捉える

ことをベルンシュタインに可能にさせた点にある。このことは、当時計画されたが実現されなかった彼の作品の英訳版のために書かれた「英語版への序文」（1897年）での次のような指摘に見ることができる。

「ユートピア社会主義が近代の科学的社会主義の先駆者であったのとちょうど同じように、民衆の急進的民主主義はプロレタリアの社会民主主義の先駆者である。それだけではなく、本書で扱われた時期においては、いかに二つの基本的形態、すなわち民衆の社会主義とユートピア社会主義とがほとんどあらゆるところで結びついているかが分かるであろう」¹⁹。

以上から、少なくとも二つのことがわかる。

一つは、1648年と1848年、1695年と1895年がアナロジーされていることである。後に見るように、エンゲルスの「政治的遺書」もこの文脈で利用される。

もう一つは、革命ないし共産主義から社会改良への移行が、前進と捉えられていることである。ベラーズは、「社会改良家」と規定されている。

従って、革命史研究はベルンシュタインの転向の大きな要因だったのであるが、また、転向を正当化する論理を伴っていたことがわかる。

ベルンシュタインには、1848年革命についての論説もある。フランス2月革命に関するエリティエールの著作のドイツ語版に寄せた「後書き」（1896年？）が、それである（修正主義の最初の「マニフェスト」と呼ばれているらしい）。

ベルンシュタインは、1648年の急進派には共感を示したが、〈この点では、1848年のフランス革命の急進派に対して彼がとった態度…は、極めて対照的である。…ベルンシュタインの「後書き」には、ブラキストに対する痛烈な批判が込められている。彼は、1848年の革命それ自体の意義については高く評価していた。彼によれば、パリ・コミューンが19世紀のたんなる一つのエピソードにすぎないのに対して、1848年の革命は公的世界での一大変化を、すなわちヨーロッパにおける民主主義の時代の始まりを告げるものであったからである。それゆえにこと、彼には、革命が辿った悲惨な運命の原因を追求する必要がある。その原因は、彼によれば、マルクスによってフランス・プロレタリアートの真の代表と呼ばれたブランキストがとった戦術にあったのである〉（亀嶋庸一前掲書）。

ii) ベルンシュタインの連続論文

ベルンシュタインは1896年10月～1898年6月にわたって、「社会主義の諸問題」と題する連続論文を『ノイエ・ツァイト』に発表した。これがベルンシュタイン論争の発端となる。

第1論文「ユートピア主義と折衷主義についての総論 [Allgemeines]」（別訳アリ）において、ベルンシュタインは連続論文の目的を、次のように述べている。

〈この事実 [各国での社会民主主義の前進] から、ここで、われわれがすでに社会主義の最後の勝利の前夜に立っている、と結論することはまったく軽卒であるとしても、しかし、社会主義的思想の

¹⁹「計画された」英訳版のタイトルは、“English Social Reformers [イギリスの社会改良家たち] of the Seventeenth Century. A Chapter of the History of Socialism”。

広範な普及および生産、商業、流通、職業生活、労働運動における相照応する諸現象から、つぎの結論を引きだすことはさしつかえない。すなわち、われわれは、社会民主党が賃金・労働者保護および類似の諸要求の領域をこえて積極的な改良的提案をもってあらわれなければならないという意味において、党がその今日のまだ本質的に批判的な立脚点を修正しなければならない時期に大またに近づいている、という結論である。われわれは、もっとも進んだ諸国で「独裁」の前夜ではないにしても、労働者階級およびそれを代表する政党のまったく決定的な影響力の前夜に立っている。そして、それゆえに、いま一度、われわれがそれを手にしてこの時代に立ちむかうところの精神的武器を検査することは無駄なことではない。

現在が「社会主義の最後の勝利の前夜」、「『独裁』の前夜」であることを否認しているが、その「前夜」の到来自体を否定してはいないことに注意されたし。続いてベルンシュタインは、ユートピア主義を批判する。

〈それ〔近代社会主義はユートピア主義を克服したことを誇りにしている〕にもかかわらず、残念ながら克服されていない一つの別種のユートピア主義が存在する。これは古いユートピア主義の対極に位置する。将来の社会組織をとりあげることをビクビクとしてすべて避け、それなのに、資本主義社会から社会主義社会への急激な飛躍を想定している。…一本の太い線が引かれる。こちらは資本主義社会、あちらは社会主義社会。前者での体系的な活動は問題にならず、その日暮らしをし、なりゆきにまかせられる。まったく一面的に考えられた階級闘争と経済的發展への言及が、必ずすべての理論的困難を免れさせる〉。

〈すべての解決をいわゆる「社会主義の最後の勝利」の日まで延期することは、…マルクスとエンゲルスの著作の武器庫からのスローガンで飾りたてたとしても、そのユートピア的性格を脱するものではない。科学的理論は、その結論がドグマ的に適用される場合には、ユートピア主義になりうる。例えば、『資本論』第1巻のよく引用される「資本制蓄積の歴史的傾向」の章をとりあげてみよう。すでに、タイトルの傾向という言葉が、そこに書かれている所説がその諸関連から引きぬかれ、字面によって解釈されることに警告を与えている。それにもかかわらず、くりかえし、「収奪者の収奪」ということで、カタストローフェとともに必然的に生じ、同時に全線において演じられる行為が問題となっているという観念が育てられている。それはしかし、まったくユートピア的な考えである。というのは、疑いもなく、社会的カタストローフェが發展の歩みを非常に促進することができ、おそらくそうなるであろうとしても、それは、しかし、経済様式の同時的変革のために必要で今日いずれにせよまだ存在していない諸関係の同質性を一夜で創り出すことはできない。…カタストローフェのちに属している諸問題を日程にのせることが不可避になっている〉。

SPD「正統派」の理論における教条主義＝ユートピア主義、実践における待機主義への鋭い批判といえよう。カタストローフェは社会主義経済を瞬時にもたらずものではないこと、従って、そのための理論的準備が不可欠であること。

他方、ベルンシュタインは、フェビアン主義の折衷主義＝経験主義も批判している。

〈経済的制度を、実際に生じている社会的發展におけるその位置と意義に基づいてではなく、観念的に表象された社会状態に基づいて評価するならば、その必然的な結果は、所与の場合に社会改良の

テコがどこにあてられるかは、恣意的な判断、気まぐれごとになり、――まさに政党としての社会民主党の使命であるところの――社会的変革過程の陣痛を短縮し緩和するために、テコが正しい位置にあてられるかどうかは、純粹の偶然事になるような実践である）。

この論文でのベルンシュタインは、一応「科学的科学的社会主義」の見地に立っている。

第2論文「集産主義の領域と限界についての理論」、第3論文「ドイツの産業的発展の現在」、サイ4論文「イギリスにおける農業関係の新展開」については省略。

第5論文「空間と数の社会政策的意義」において、ベルンシュタインは社会主義社会論を展開している。それは、第1論文で指摘した理論的準備に対応するものといえよう。

ベルンシュタインは、まず国家の問題を取り上げる。〈一定の原則に従って、所与の国家を改造し、これを社会改造のテコとし、ついにはそれが完全に社会主義的な性格を持つようにするよう努める〉という社会民主主義の立場は、エンゲルス『反デューリング論』の国家死滅論以来変化し、今では〈社会主義の勝利とともに国家は終わってしまい、社会主義的な――社会が始まる〉とみなされるようになった。しかしベルンシュタインは、国家死滅論を、今日の国家機能の民主的自主管理機関による漸次的解消を目指すものという意味で評価する。彼は、階級抑圧の機関という国家の規定は今日では狭すぎるとし、国民全体を包含する存在として国家をみる。

他方、ベルンシュタインは、社会を「共同生活の一定の形態ないし状態」と規定した。〈生産における共同性が、すべての人間のなかに共産主義社会にとって望ましい性質、つまり全体社会の要求への自発的従属、連帯意識、義務感情などを発達させた〉が、これとは逆に働く要因もある。その一つが、空間および人口の増大の影響に他ならない。

現代の資本主義国家は大領域・大人口国家であり、社会主義国家もこれを引き継ぐしかない。しかし、大領域・大人口国家には次の問題があると、ベルンシュタインは言う。すなわち、ここの成員が全体を見渡せなくなることから生じる孤立化、連帯感の喪失であり、そこでは、たとえ完全な選挙権があってもそれはある個人の意思を他の個人の意思が打ち消すことにしかならず、事実上は官僚が支配者となり、民主主義の空洞化が進行する。社会主義社会は、ブルジョア社会の「社会的思考様式」をひきずった人間が建設する以外にない。

〈まったく条件付きで道徳的な力をあてにすることができる社会主義共同社会は、その成員が市民的義務を充足し、さしあたりかれらに割り当てられた労働を遂行するようにさせるために、どのような手段をもっているか〉。この問題に対し、ベルンシュタインは以下のように答える。

〈現代社会における社会経済的原則は経済的自己責任の原則であり、この原則を本当に動揺させるようないかなる福祉政策も既存の社会秩序の立場からは、非社会的あるいは反社会的とみなされるべきであろう〉。〈自己責任の止揚という考えは、きわめて反社会主義的である〉。〈労働義務は、…労働するつもりのない者は、食うべきではないという規則に基づいてのみ、つまり経済的自己責任という、今日も妥当する原則に依拠してのみ、維持されうる〉。〈きたるべき社会体制が、経済的自己責任の義務を世界からなくすとは、決して期待できない。社会主義はただその義務の遂行を容易にす

ることができるだけである)。

〈近い将来の行政組織は、現在の国家とは程度の差でしか区別できない〉(ある意味、ベーベルとは対極的)。〈社会主義的変革が、国家を自動的な扶養機構に変化しうるかのような思想は、まったく空想的なものとして拒否されるべきである)。

〈現代国家の大規模な領土的拡張と、それらの領域に住む住民の膨大な数のために、個々人が国家行政の活動能力を概観することは、ますます困難になる。…かくして、中間的な組織が重要になり、また不可避になる)。

この中間組織としてベルンシュタインが提示するのが、経済的利益代表組織たる労働組合・協同組合と、地方自治体に他ならない。労働組合・協同組合は〈労働者の間に連帯感と相互責任の感情とを呼び起こすこと以外に何の目的も持たないとしても歓迎されるべき〉ものとして評価されている。また〈今日、国家によってみだされている機能の大部分を、民主主義的な自治体によって交代させることは、無条件に堅持されねばならない〉。「民主的自主管理機関」の借りてのみ〈社会主義的改良という社会政策の領域で、空間と数に対処するという困難を解決できる)。

以上、ベルンシュタインの考えは〈大領域・大人口国家の枠組のなかでの可能な限りの分権化と、個々人の社会的責任の自覚と自助の精神の発揮による国家の負担と干渉の可能な限りの縮小〉(田中良明『パルヴスと先進国革命』)とまとめることができる。

しかし、〈ベルンシュタインは(明言はしていないが)、社会的責任の自覚と自助の精神の涵養には「外部注入」が必要であると見なしていたようであり〉(同)というのはどうか？！

確かにベルンシュタインは、そのような自覚と精神が資本主義のメカニズムによって自動的に形成されるとか、労働者が権力を取ればおのずからわがものにするとかの考えを拒否する。また、〈大規模な領域体で連帯感が個別的利害を自発的に放棄させるほど強力であるのは、一定の圧力の下においてだけである〉と述べている。しかしながら、ベルンシュタインは、結局のところ、労働組合の改良的活動がそのような自覚と精神を形成すると考えていたのではないか。

いずれにせよ、ベルンシュタインが、社会主義運動における倫理あるいはエートスの問題を重視していたのは間違いない。

第6論文「社会主義と青少年の職業労働」は省略。

第7論文「社会民主主義の闘争と社会の革命」(1998年1月)で、ベルンシュタインの主張は劇的に転回する。このことは、連続論文そのものが転向の過程であったことを示している(だから、第7論文発表まで転向が見すごされていたという理解は、必ずしも正しくはない)。

この論文は、形式的にはバックス(1854~1926 イギリスの社会主義者)の植民地政策論に対する批判であり、二つの部分からなっている。それまでも、両者の論争は、イギリスの雑誌や『ノイエ・ツァイト』でも続けられていた。バックスの主張は、次のようなものであったらしい(田中良明前掲書による)。

① いわゆる文明化の使命の全面否定。近代文明の後進地域への拡張は、最も粗野な形態での資本主

義的生産形態の侵入と、それによる自然農業経済の排除である。賃金奴隷制は最良の場合でも古い奴隷制よりも悪い。

② 後進地域は資本主義を経ずして社会主義へ移行しうる（したがって、植民地化による資本主義の移植の必要はない）。

③ 植民地政策は資本主義の延命策であり、資本主義の崩壊を促進する立場からは、植民地政策と闘わねばならない。

④ 植民地支配は文化的支配をも意味する。したがって、植民地の容認はアングロ・サクソンの文化的世界支配を結果する。一種族の文化が世界を支配するのは好ましくない。

ベルンシュタインは、1「論争」において、①と④に反論した。

〈①にたいして、ベルンシュタインは、いわゆる文明化の使命…を認めたいうえで、原住民にたいするヨーロッパの支配は、これまでいかに野蛮、卑劣なものであったとしても、それは原住民に平和と法の保護および給養の可能性の増大をもたらした、として過去の植民地政策を基本的に容認する。ついで、近代民主制の成長によって、原住民にたいする処遇もしだいに人道化してきていると主張する。ベルンシュタインの議論は、植民地政策を基本的に容認したいうえで、植民地管理の人道化を要求するいわゆる社会主義的植民地政策論の立場である。④にたいしては、ベルンシュタインは、世界の文化のアングロ・サクソン化というのは杞憂であり、そのようなことをいいたてるのは、アングロ・サクソン民族の独立心と自由な制度にたいする否認をもくろむものであり、また、イギリス化の脅威の喧伝は、実践的には、ドイツの植民地排外主義の支持を意味する、と反論する〉（田中良明前掲書）。

社会主義的植民地主義をしっかりと見ておくことは、ベルンシュタイン弁護論者が触れない点であるが故に、重要。

③への反論は2「崩壊理論と植民地政策」で行われており、崩壊論批判が第7論文の主題に他ならない。

ベルンシュタインは、最初に崩壊論を次のように図式化した。経営の集中（→恐慌）、労働者階級の増大、階級対立の激化→資本主義経済の崩壊（大恐慌）→社会主義的な社会改造。

〈社会民主党の内部では、すべてを包みこむ大経済恐慌は社会主義社会への不可避な道であり、そのような発展過程は避けがたい自然法則であるという認識が市民権を獲得しており、そのうえそれは、[社会主義社会への]最も確実な、そして最短の道と理解されている〉。

ベルンシュタインはまず、経済集中論を批判する。彼は、1882年と1895年の統計を用いて、次のように言う。工業においては、大経営が著しく増加しているが、中経営も増加している。商業・運輸・農業においては「中経営の大経営に対する割合は、工業におけるよりもはるかに強大」である。かくして、全体として見るならば、中小経営を犠牲とした大経営の増大という経営集中論は事実とそぐわない、と。²⁰

ついでベルンシュタインは、強硬論に批判に移る。彼は『資本論』第3巻第5編第30章の「注8」を次のように紹介する。

²⁰ ベルンシュタインは、中小経営について、資本家的経営と非資本家的経営を区別していない。

〈フリードリヒ・エンゲルスは『資本論』第3巻の出版の際、従来、彼とマルクスとがいただいていた、10年周期の考えを古くさくなくなったものとするをためらわなかった。「除去されるか、または弱められた、たいていの古い恐慌発生源と恐慌形成機会」の要因として、彼は「交通手段の異常な拡張」——大洋汽船、鉄道、電信、スエズ運河——と、「ヨーロッパの過剰資本に世界の全大陸で無限により大きいより多様な領域を開いた」状況とを描写している。つづいてエンゲルスは、循環の周期がたんに伸びたのみならず、さらに古い恐慌の反復を阻止しようとするカルテル、保護関税、トラスト等の要素のそれぞれが、「将来のより強力な恐慌の胚珠を蔵している」と予測している〉。

これについてベルンシュタインは、以下のように述べた。

〈これらの見解のうちの後者については、少なくともカルテル、トラストに関する限り、多くの問題点があるように思われる。種々雑多な形式と適応能力が存在するので、少なくともこの作用のみが唯一のものであるとする根拠はない〉。

〈全くの異常事態がすべての国の産業を恐慌にまきこみ、いたるところで、同様に信用を麻痺させるようなことでもない限り、産業と市場の範囲はあまりにも巨大なので、すべての拠点において同時かつ同程度に恐慌に見舞われることはありえないだろう〉。

〈巨大にふくれ上がる膨大な資本量のもとにある、現代の信用制度の弾力性、およびすべての資本の分枝間の交通の完全な機能——郵便、通信、人的・物的交通、商業統計と情報活動の形成、産業組織の拡大、これらは現実の事態である。これらが、生産活動と市場状況に重大な影響を及ぼさないと、まったく考えられない〉。

〈我々は、経済の進展とともに、一般的には、もはや従来の様式の産業恐慌にかかざらわってはいならないし、また産業恐慌を一大社会的転覆の案内人とするすべての思考を放棄しなければならない〉。

さらにベルンシュタインは、恐慌→崩壊の図式のみならず、崩壊そのものを否定する。いわく、社会の発展は、諸産業の「適応能力」と産業間の「差異」を増大させるが故に、社会発展の過程において現行生産制度の「ほぼ同時的完全崩壊」ということは、ありえない、と。

これはまた、SPDによる権力獲得の否定につながる。勝利の諸条件の一挙的形成はありえないからである。

〈人は、封建的土地所有を解体し、分割地として譲渡することはできるが、近代的工場については、そうはいかない。コミュニンの精神に従って近代工場が収奪されればされるほど、革命的高揚時に工場運転を維持する困難はますます加重される。諸関係の純外部的緊張は、産業の内部的発展過程の加速化とはまったく調和せず、反対に何倍もそれに対して阻止的に作用する〉。

〈社会民主党は、資本主義に退場を命じることも、それどころか資本主義なしですますこともできず、他方では、社会民主党は、資本主義がその諸機能のために必要とする安全を資本主義に保障することができない。この矛盾で社会民主党は救いがたく消耗し、結果は巨大な敗北でしかありえない〉。

かくてベルンシュタインは、“新しい”社会主義観を呈示した。

〈社会主義の実現を、すべての点において厳密に共産主義的に形成された社会の建設と理解すれ

は、…それはまだ相当に遠くにあると思われる…。しかしながら、…今日の世代は、…事実において、非常に多くの社会主義の実現を経験するであろう…。社会的義務、すなわち個人の社会に対する義務とそれに対応する権利および社会の個人に対する責任の範囲の着実な拡大、民族あるいは国家に組織された社会の経済生活に対する監督権の拡張、市町村・郡・州の民主的自治の形成およびこれらの団体の任務の拡大――すべてこれらは、私にとっては、社会主義への発展、あるいは、あえていえば、段階的に達成される社会主義の実現である。経済的経営の私的管理から公的管理への移行がこの発展におのずから伴うであろう。しかし、それはゆっくりとしか進行しえない。…社会が経済関係の統制の権利を適切に行使するならば、経済的事業の公的経営への実際の移行は、通常信じられているように基本的な意義を持つものではない。立派な一つの工場法には、一グループの工場全体の国営化によりも、多くの社会主義がひそむことが可能である〉。

〈一般に「社会主義の最終目標」のもとに理解されていることに対して、極度にわずかの意義と関心しか認めていない、ということを私は告白する。このような目標は、それが何であろうとも、私には全くの無であり、運動がすべてである。運動ということで私は、社会の一般的運動、すなわち社会的発展、ならびにこの発展の実現のための政治的・経済的煽動と組織を考えている〉。

〈破滅的な一大経済恐慌の結果として考えられる、現存経済制度の間近い崩壊を期待すべきでも、また願望すべきでも、また願望すべきでもない。社会民主党のなすべき、かつ、なお長期にわたってなすべきことは、労働者階級を政治的に組織し、民主主義に向かって教育すること、そして労働者階級を向上させ、国家制度を民主主義の精神で改造するのに適したような、国家内でのあらゆる改良のために闘うことである〉。

最後にベルンシュタインは、植民地政策の問題に筆をもどし、次のように述べた。

〈[社会民主党は] 野蛮蒙昧な諸民族の抑圧や欺瞞的収奪には反対するが、しかし、かれらを文明的諸制度の適用範囲に引き入れることにことごとく反対する一切の抵抗を非合理的なものとして放棄し、かつまた市場拡大に対する一切の原則的反対を空想的であるとして、それを断念するであろう〉。

〈市場と国際貿易関係の拡大は、社会発展の最も強力なテコの一つで [あり] …かつそれは、生産関係の発展を極度に推進し、諸国民の富の増大の要因である。…社会が富めば富むほど、かずかずの社会主義実現はより容易に、より確実になる〉。

第7論文の2は論争を惹起したのであるが、第8論文「社会主義における現実的モメントとイデオロギー的モメント」は、論争の第一幕が一応終息した時点の1898年6月に発表された。この論文についてコメントしている著作は少ない。

〈カウツキーによれば、近代的工場制の発達には労働者の「平準化」および「同質化」を推し進め、そしてこの傾向は彼らの規律と連帯感を育むのであった。これに対して、ベルンシュタインは近代工場における「平準化」が予想されたほどに進行してはいないと反論する。「反対に、まさに最新の工場制工業ではしばしば細分化された労働者のヒエラルヒーがみられ、それに対応して多様な労働者集団の間にはほんのささやかな連帯感しか見られない」のである。…彼 [ベルンシュタイン] によれば、労働者の思考様式は彼らの労働条件によってのみ決定されるのではなく、むしろ工場外での生活

関係が及ぼす影響は増大している。…「イギリスの労働者の党組織と社会的思考様式に影響を及ぼしている多くの『量ることのできない』しかしだからといって重要でないとは決していえない事情の一つに、イギリスにおけるスポーツの驚くべき普及と民主化がある」。なぜなら、クリケットやフットボールは「国民的かつ民主的な性格を帯び、その前では政党および階級の対立がずっと後退させられてしまう」からであった。

こうして、ベルンシュタインによれば、労働者「大衆」は、工場の内においても外においても、階級意識を希薄化させるような要因に囲まれていることになる。こうした指摘において意図されているのが、マルクス主義的労働者像の神話性を暴くことにあったのはいうまでもない（亀嶋庸一前掲書）。

結論的主張は、次のようなものになる。

〈将来の発展に関する理論は必然的にイデオロギー的に染色される。マルクス主義イデオロギー自由ではなく、イデオロギー自由性をもってマルクス主義の特徴とすることはできない。マルクス、エンゲルスは、当時の道徳の過剰に対する反発から、道徳的側面の過小評価におちいつている。道徳の役割は軽視しえないもので、経済的改良の完徹と同様、道徳的法的観念の継続的形成を、たんに将来にゆだねてしまうということがあってはならない〉（田中良明前掲書）。

iii) パルヴスによる批判

いち早くベルンシュタインの批判に立ったのが、パルヴスであった。彼は、『ゼクスイッシャー・アルバイターツァイトゥク（ザクセン労働者新聞）』に10回にわたって（1898年1月28日号～3月6日号）、「E、ベルンシュタインによる社会主義の転覆」と題する論文を発表した。ベルンシュタイン第7論文の2の発表が1月19日（メーリングの巻頭論文の日付）であるから、読んですぐに筆をとったと思われる。²¹

パルヴス論文は、（1）ベルンシュタインの経営集中否定論に対する批判（第1論文～第3論文）、（2）革命陣営と反革命陣営の勢力比較（第3論文後半～第7論文）、（3）社会革命論（第8論文～第10論文）の三つの内容から成っている。ベルンシュタインの主張は、単純化すれば、恐慌＝崩壊否定論と権力掌握＝敗北論とを柱とするものであるが、パルヴスは崩壊論の立場には立っていないため、批判は後者をめぐるものとなった。

（1）について。

パルヴスは第1論文においてまず、〈我々の綱領の基礎は、我々が政治権力を獲得し、かくしてその助けをかりて資本家を収奪し、生産手段の私的所有を除去し、生産の社会的組織を樹立することにある。このことが今日まで全党活動の基点である〉ことを確認する。しかるにベルンシュタインは、これを否定した。パルヴスは、社会革命の信念を支えるものは、一つには資本の集中と大衆のプロレタリア化の増大であり、もう一つは商業恐慌の広さと深さの増大であると述べ、批判に入る。ベルンシュタインの経営集中論が大経営のみの増加＝他のすべての経営の減少という理解に基づいている

²¹ パルヴス論文のタイトルは、エンゲルス「オイゲン・デューリング氏による科学の転覆」（『反デューリング論』の正式タイトル）をもじったもの。

が、パルヴスは、経営集中を全体的傾向において捉えるべきと言う。

〈各国は多彩な生産編成を示し、そのなかで特定の諸産業が指導的役割をはたし、それらの産業の世界市場に対する関係を介して、それらの産業の特質をその国の生産面の性格に貼り付けている。周知のように、イギリスにとって麵工業の意義がこれに関連している。ドイツにとっては鉄工業が決定的な意義を有している。これらの産業においてこそ、資本主義的生産発展の傾向が最もよく観察されねばならない〉。²²

かくして、〈ドイツにおいては工業の強力な集中が生じたという事実がある〉。また、小経営は、労働者と同一の利害を有していることが指摘された。

第2論文では、工業以外の産業を考察している。

農業については、規模別統計からはつかみえない農業危機の存在を指摘するとともに、農村住民の獲得の問題の検討を予告した（これは第5論文でなされている）。

商業・運輸業においては、〈経営集積という意味での正規の発展は、見間違いようがない〉。

さらにパルヴスは、ベルンシュタインの統計の利用法について批判した。

〈社会発展を洞察するために、職業統計を用いようと思う場合、それがそのままでは生の資料であることを考慮しなければならない。確かにそれは価値ある資料であるが、いずれにせよ他の事実によって補完され修正されて初めて、またとりわけ、すでに得られた社会的関連の認識に基づいて、ないしはここで取り扱っている事例については資本主義発展の法則に基づいて、初めて把握され、関連性のある像にまで織り上げることができるものなのである〉。

第3論文では、上の主張をうけて、ドイツの資本主義的発展が概観される。

第一に、職業統計からは理解しえない、工業＝都市による政治的・経済的・文化的支配が指摘された。第二に、工業の世界市場に対する関係から、生産力が既存の「社会的経済形態」を超えた超えたことを指摘し、この事実は、個々の生産部門における経営集中の進展度よりもはるかに重要な社会革命の指標であり、社会化が生産上の必然になっていることを意味していると主張した。

第3論文の発表は2月6日号であったが、ベルンシュタインは2月8日の『フォルヴェルツ』に「声明」を発表する。パルヴスは、翌日、これを批判した。さらにベルンシュタインは、『ノイエ・ツァイト』（3月2日）に「批判的問奏」を発表してパルヴスらに反論したが、パルヴスはこれに対して3回にわたって再反論している。

【注 「批判的問奏」への編集者の注記でカウツキーは、〈ベルンシュタインの意図を曲解していることにもとづいているがために、発表をことわらなければならなかった、ベルンシュタイン論文にたいする多数の批評論文〉を受けとったと書いた（ネトル『ローザ・ルクセンブルク』）。この事実は、ベルンシュタイン第7論文への反響の大きさと、当時のカウツキーの立場とを物語っている。】

²² これを読むと、本稿「8）SPDのマルクス主義者たち」で引用したクーノーの“意義”なるものがあやしくなってくる。なお、クーノーによるベルンシュタイン批判を取り上げているのは、管見の限り、相田慎一前掲書だけであるが、同書はパルヴスによる批判を取り上げていない（不可思議）。ただし、クーノー論文の発表は、『ノイエ・ツァイト』16,Bd.1とあるから、これも相当に早い。

ベルンシュタインは「声明」において、「社会主義運動の最終目的に関わり合うこと拒否したこと」から「この運動のそれぞれの特定の目的を一般的に否認していると結論づけるのは誤解であるとして、次のように述べた。

〈目的をもたない運動は、方向をもたない運動だから、混乱した活動であるだろう。社会主義運動は、目的なしに、コンパスなしに、ある方向を追求すべきでないとするれば、それは当然にも、意識すべき目標をもたねばならない。しかしこの目的は、社会的計画の実現ではなく、むしろある社会原理の貫徹なのである。社会民主党の課題が、政治的・経済的解放のための労働者の闘争のその場その場で支えられる必要から生じるのではない限り、人々は、空想家に陥りたくない場合には、実際、社会主義運動の目的を、ただ原理としてのみ、つまり「協同性 [ゲノッセンシャフトリッヒカイト] の全面的な貫徹」としてのみ、定式化することができよう。政治的あるいは経済的要求が問題になっているとしても、私はこの言葉 [協同性] と同じように社会主義的指向の全体を包括する言葉を知らない。…しかし、その言葉は目的を示すとしても、方法・手段については何も語っていない。方法・手段は、所与の条件からのみ発見されうるものであり、運動のその時々状況と釣り合ったものでなければならない。それ故に、一般的目的が与えられるならば、運動そのものと、この目的に向かっての進歩が主要関心事であり、他方、どのようにこの発展の最終目的を描き出すかは、まったくどうでもよいことである。…運動の一般的歩みについてはっきりさせ、運動のために考慮すべき諸要素を詳しく吟味することが、価値あることなのである。それを行うなら、我々は最終目的について心配しなくてもすませることができる〉。

ベルンシュタインは最後に、〈最終目的は無であり、運動がすべてである〉という命題は、〈運動は私にとってすべてである。というのは、運動はその目的をみずからの身にまとっているからである〉と言い換えうると述べている。

好意的に読めば、未来図たる「最終目的」ではなく、運動の方向性を示す「一般的目的」が重要だという主張だが、抽象的な「協同性 (の原理)」を持ちだしての自己弁明、論争回避でしかない。

「批判的間奏」においてベルンシュタインは、一層後退する。

最終目的は生産手段の社会的所有への転化ではないのかという批判に対して、ベルンシュタインはそれを一つ的手段にすぎないと反論した。そして、エルフルト綱領第5パラグラフから、「最高の福祉と全面的な調和ある改善」こそ最終目的であると主張する。しかしながら綱領の当該部分では、生産手段の社会的所有への転化と、「最高の福祉と全面的な調和ある改善」は不可分のものとして説明されている。

さらにベルンシュタインは、『共産党宣言』第2章末尾の文言を取り上げ、そこではアゾツィアツィオンの実現を「最終目的」にしており、アゾツィアツィオン=ゲノッセンシャフトであって、それは、ゲノッセンシャフトリッヒカイトの原理、言い換えればゲノッセンシャフトプリンツィプに基づく共同社会であると主張した。

かくしてベルンシュタインは、「声明」の主張をみずから否定し、未来社会図たる「最終目的」を肯定するに至るのである。

またベルンシュタインの権力掌握=敗北論においても、変化している。連続論文では、それが経済

的條件から主張されていたのに対し、ここでは政治的條件がもち出されている。いわく〈革命が、社会の奥深くまどろんでいるすべての力をやり起こすとき、同時にまた革命は愚か者どもをもやり起こす。残念ながら、愚か者どもがかなり大きなチャンスをもつのである〉。〈全事業が行詰り、恐慌に陥れば、その時、人々の問題にするのは、社会主義的であるか否かではなく、人々に仕事とパンを与えるか否かである〉、と。

しかもこの議論の際にベルンシュタインは、「正統派」と同じ社会主義像（生産の社会化）を前提としている！

パルヴスの連載に戻る。（2）について。

第7論文での結論だけを示す。

資本家の陣営			
	資本家階級		416,000人 2%
	資本家の従僕		
		管理職 650,000人	970,000人 4.8%
		官僚・将校 320,000人	
	手工業者		250,000人
	計		1,636,000人 8%
プロレタリアートの陣営			
	賃金労働者および彼らと連帯する手工業者		15,000,000人 73.5%
	資本によって没落させられるが、賃金労働者にならない階層		
	小農		2,200,000人 10.7%
	商業・運輸の小経営		760,000人 3.7%
	資本から最大限の独立性を保持しているが、社会革命によって初めて完全に能力を発揮しうる中間層		
	自由業		200,000人
	教員		220,000人
	近代的手工業者		400,000人
	計		820,000人 4.1%

【注 「資本家階級」は、「農業（大経営）」と「レントナー」を含む。「農業（大経営）」（100ヘクタール以上）と「大農」（20～100ヘクタール）は区別されているが、後者は見落とされている（約280,000人）。】

（3）について。

第8論文では、社会革命の条件が検討されている。上で見たように客観的條件は成熟しているにもかかわらず、既存の社会秩序が維持されているのはなぜか？ これに答えることが、マルクスの「予言」の誤りという誹謗や条件の未成熟という主張に対する反論になる、とパルヴスは言う。そして、社会主義実現のための前提条件として、次の三つをあげた。

① 〈生産の社会化が遂行できるだけでなく、すべての社会成員の十分な生存を保障するまでも、生産の発展が成されねばならない〉。この条件は、18世紀末には達成された。その論拠は、ユートピア的

社会主義者の出現である。

②〈社会革命が住民の大多数にとって利益をもたらすと思われるまで、社会の解体が進展していなければならない〉。この条件も達成されている。プロレタリアートが社会の大多数を占め、中間層も貧困に沈んでいるからである。

③〈社会革命を行う階級つまりプロレタリアートが政治権力を奪取しなければならない〉。この条件だけが、達成されていない。しかも、パルヴスによれば、プロレタリアートの政治的経験（賃金闘争、援護協会、消費協同組合、生産協同組合、仲裁裁判所、ストライキ、暴動、政治革命、議会闘争）はすでに充分であり、残るは、政治情勢の展開と指導の問題だけなのである。

先に、パルヴスは崩壊論の立場に立っていないと書いたが、当時のSPD内において、パルヴスは際立って政治主義的であった。

経済的發展と政治的結果との間にギャップが生まれるのは、その間に政治闘争の世界があるからだ、と、パルヴスは言う。〈科学的社会主義の創設者たちは、経済發展が決して政治のリズムや人間の知性を歴史から取り除くものではないことを、よく知っていたのであり、それ故、かれらは取り乱すことなく、出現した政治的变化のあらゆる個別的な事例を詳細に吟味した〉。

パルヴスは、経済的發展と政治的变化との間に働く諸要因として、次のものをあげている。

〈一般的な資本主義的生産發展と混同されるべきではなく、絶えず変化するこのコンピネーションや相互作用において絶えず新たに研究されなければならない世界市場の發展、世界市場發展の内部でのこの国の位置、生産の發展と社会的編成の到達水準、その国の政治組織、その歴史的伝統ないしそれがひきずる政治的遅れ、その地理的な位置、その大きさ、人口数、および民族構成、その国際政治上の立場、既存の政府形態、政府のとり政策、諸政党の發展、プロレタリアートの組織と政治的認識の發展水準、労働運動の指導者たちの経験、精力、…機転〉等。

第9論文でパルヴスは、社会主義の前提として社会革命と認めるか否かがベルンシュタインとの論争の核心であると主張し、第10論文で結論を述べた。

まずパルヴスは、ベルンシュタインの社会主義社会像を否定する。第一に、「協同性の貫徹」は、協同組合の創設、共同体所有の拡大、労働組合や労働者委員会による資本主義的所有権の漸次的吸収のいずれかの方法をとるにせよ、〈生産手段の私的所有と資本の政治的支配の存続する限り、空想にみえる〉。第二に、〈協同組合の合計はまだ社会主義社会ではない〉。ベルンシュタインの考え方は「理論的無政府主義の考え方」であり、その社会主義は〈中央管理と生産の社会的組織のための個別経営の集約を欠いている〉。

個別企業の集团的な所有と管理は資本主義のもとでも行われている。生産の中央管理のモデルとしては国有鉄道がある。従ってパルヴスによれば、生産の社会化＝社会的生産管理の萌芽はすでに存在しており、それに悩む必要はない。

社会革命政府の任務は、新たな社会秩序を決定することではなく、資本主義的秩序をうけつぎ、資本主義的政府にとってかわり、すでに永らく生産の付属物になっている資本家を取り除くことであるとして、パルヴスは、次のように主張した。

社会革命政府は〈さしあたり生産の一般的管理を引き受ける以外のことはできない〉が、〈社会革

命は同時に社会の政治組織の民主主義的な改造をもたらすものであるから、こうした発展と個別経営の組織との間の交互作用から始めて、紛争と権限争いの永い道を経て、時とともに、社会主義と特徴づけねばならないような、生産の社会的組織の完成した形態が形成されるだろう。

最後にパルヴスは、“過渡期の政府”と呼んでいい社会革命政府の政策を8項目列挙し、次の宣言を持って論文を締めくくった。

〈我々に半年間政府権力を与えよ。さすれば、資本主義は歴史になるであろう〉。²³

iv) シュツットガルト党大会

〈たとえベルンシュタインの思想が部分的には「誤解」を生じたにしても、『フォーアヴェルツ』紙もまたマルクス主義理論を原則にたちかえて批判的に再検討することに歓迎の意を表した。口うるさい『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』[ライプチヒ人民新聞]紙でさえ最初は「結局まちがった結論になるかもしれないがおもしろい観察、とくに鋭敏な批判的な人にいつもおこりがちなこと、それ以上のものではない」という以上にきびしいことは言わなかった〉(ネトル前掲書)。

〈その[1898年の]夏のおわりごろまでにはもう党内では手におえない雰囲気は明白になりつつあった。…これは、ベルンシュタインのせいというよりもむしろパルヴスに起因していた。指導部は優しげな無関心をよそおおう[ママ]としていたが、これは『ゼクシッシェ・アルバイターツァイトゥグ』紙の論調のために妨げられていた。それにもかかわらず、論調の中身はさておき、ドレスデンの機関紙[『ゼクシッシェ・アルバイターツァイトゥグ』]の反撃は、ベルンシュタインの具体的提案にたいする、純粋な、おそらく広汎に感じられている憤りを代表していた〉。〈その年の党大会ごろには人びとはすでに「『ゼクシッシェ・アルバイターツァイトゥグ』紙の線をとる」かどうかを話題にしていた〉(同)。

パルヴスが口火を切ったベルンシュタイン批判にローザが参加することによって次の局面を迎えるが、これについては後述。

ベルンシュタインとは「刎頸の交り」であったカウツキーは、ベルンシュタインに対して好意的であった。1898年1月28日にカウツキーは、ベルンシュタインに次のような手紙を送っている。

〈ところで、この命題[最終目標は無で、運動がすべて]は、次のような場合には確かに正当なものでしょう。すなわち、遠い将来に運動が終結するというような意味では目標はただ一つの曖昧なユートピアにしかすぎないというようにその命題を理解する場合、あるいは、この命題を、マルクスが語ったように、現実の運動の一步こそがダーズの綱領よりも価値があるのだというような意味に

²³ 〈レーマン [Die Agrarfrage in der Theorie und Praxis der deutschen und internationalen Sozialdemokratie. 『ドイツおよび国際社会民主主義の理論と実践における農業問題』か?] は、ニコラエフスキーに依拠して、1895年8月はじめより9月半ばまでベルリンにあったレーニンが、ドイツ社会民主党の農業綱領論争の進行を目撃し、とりわけパルヴスに注目しており、その労農同盟論の影響をつよくうけたと推定している〉(山口和男前掲書)。〈1899年3月に、彼[レーニン]は、ロシア語に翻訳された農業恐慌に関するパルヴスの評論集の書評を書いていた。その中で、彼は著者を「有能なドイツの政治評論家」と評していた。2、3ヵ月後レーニンはシベリアから彼の母にヘルファント[パルヴスの本名]の修正主義批判論文を送ってくれるよう頼んでいる〉(ゼーマン/シャルラウ『革命の商人』)。なお、レーニンは『イスクラ』発刊のため、1900年8月～1902年4月にミュンヘンに居り、パルヴスと初めて会った(ローザとも?)。ベルンシュタイン論争を目撃したことになる。ちなみに、『何をなすべきか』はこの時期に執筆されたし、プレハーノフとの綱領論争もまた然り。

解釈する場合、どちらかの場合がそれです)。

カウツキーは、〈自分の立場とベルンシュタインのそれとの相違を、結論とか観点とかのうちにはなく、ただ「論調(トーン)」のうちのみ、すなわち、ベルンシュタインの論述のうちにかもしだされる悲観論(ペシミズム)のうちのみ、認めていた〉(シュタインベルク前掲書)

また、2月の両者のやりとりも興味深い。

〈もちろん我々は、革命なしに、我々の目標に到達することを望んでおります。問題は、それがうまくいくかどうか、ということです。イギリスではイエスでしょう。ドイツでもまたそうでしょうか? もちろんこれは革命と言っているのが何のことか、ということによって左右されます。…私はここでは、この言葉を、それが意味をもちうるただ一つ意味でだけ、つまり暴力的な政治的変革という意味でだけ、使っています。「社会革命」というのは、社会主義的諸結果をもたらす政治革命のことであるか、それとも、空虚なスローガンであるか、そのどちらかです。ところで、イギリスでは革命なしに社会主義社会への発展の道が開かれているという点では、私は、あなたに完全に同意します。…ドイツでは事情は別です。ドイツでは、イギリス人たちの現在の状況に到達するために、政治革命を必要としているのです〉。〈我々は、唯一の野党として、未来国家を樹立するために、プロレタリアートではなくブルジョアジーの歴史的任務を遂行するところにさしかかっているのです。これは、一つの困難な立場でしょう。それがどんな結果となるか、党が破滅するか、党が—ありうることです—分裂するか、予想できません。…我々が革命を望もうと望むまいと、革命が我々に勝利をもたらそうと敗北をもたらそうと、革命は、ドイツでは、我々の歴史的任務であり、我々は、この任務のためにおそらく没落するでしょうが、しかし我々は、この任務を遂行しなければならないのです〉。〈それともあなたは、…もしも帝国議会で200人の社会主義者が座席を占めるようになれば、我々は社会主義的な内閣を手に入れて、そのときには平和な社会主義的発展を開始するのだ、と考えているのでしょうか? 我々がさらに100人の代議士をもつようになる前に、我々に対する闘争が起こることでしょう—社会主義をめぐる闘争ではなく、民主主義をめぐるそれが。そのときにクーデターや選挙権の廃止や例外法が、それ以前にはなかったとすれば、現れてくるのです〉(2月18日、カウツキーからベルンシュタインへ)。

〈我々が今日ドイツで持っているような労働運動は、組織された労働者民主主義として、私には…「プロレタリアートの革命的独裁」よりもはるかに希望にみちているように思えるということについては、何一つ変更するわけにはいきません。私にとっては、後者はアナーキーのことであり、しかもその最悪の形態、すなわちジャコバンのアナーキーのことに他なりません〉。〈社会主義は私にとっては、結局のところ、民主主義、自己管理を意味しています〉(2月20日、ベルンシュタインからカウツキーへ)。

〈私の志向は、幻想的な諸教義(ドグマ)や諸前提が間違った戦術や重要な諸任務の軽視へ誘導してゆくのに役立つ限りで、それらに反対するということです〉(2月28日、ベルンシュタインからカウツキーへ)。

5月20日、プレハーノフはカウツキーに次のように書き送った。

〈『ノイエ・ツァイト』最新号にベルンシュタインは社会主義の二つの「契機」に関する論文を発

表しました。この論文は彼が先に1月号で発表したものの続編になっています。1月の論文で彼は「破局説」を批判していました。ベルンシュタインは、今度はかつて経済的側面においてなしたと考えていることを哲学的側面においてなそうとしているのです。…なぜあなたは反論しないのですか。攻撃されているのはあなたであり、これらの紳士諸君がその「批判」の的としているのはあなたのエルフルト綱領なのです。24

これに対するカウツキーの回答は、次のようなものである。

〈率直に打ち明けなくてはならないのは、私が新カント主義に煩わされることはほとんどない、ということです。哲学は、まったく私の得手ではありませんでしたし、また、例えば私が全面的に弁証法的唯物論の観点に立っているとしましても、それでも私は、必要とあれば、マルクスとエンゲルスとの経済的かつ歴史的な観点は新カント主義とも結合しうるものだ、と考えております〉（5月22日付）。

5月28/30日付の手紙で、ベルンシュタインは、〈わが大衆は、価値論を、例えばガリレオの落下の法則のような客観的で科学的な学説として理解しているのではなく、この学説に道徳的な意義を添えている〉（カウツキーへ）と述べている。これは、事実の指摘としては、あたっていた。

カウツキーはベルンシュタインにあてて次のように書いた。

〈君がそこで我々に向かって講演していることは、一つの新しい学説です。というよりはむしろ、新しい一学説の準備です。それは、社会主義の新しい一解釈のための序論であり、それを君は、我々にそこで与えているのであって、もし君が序論だけに、旧学説に対する疑念だけにとどまっているとしたら、君は、我々をひどくがっかりさせることになるでしょう。君は、我々の戦術、我々の価値学説、我々の哲学を覆してしまいました。今や肝心なことは、ただ、君が古いものを新しいものに置き換える、ということだけです〉（6月10日付）

実際、カウツキーは次のように公言している（『ノイエ・ツァイト』XV II,1）。

〈ここ20年間における我々の経済的・政治的生活が、我々の基本文献、とりわけ『共産党宣言』と『資本論』とが書かれた当時には未だ隠されていた兆候を発展させてきていることはほとんど疑いない。我々の観念を改めて検討し修正することは、これらの新しい事実によってもはや必然となっている。このことは、すでに何人かの我々の同志が強調してきたことであるが、ベルンシュタインほど印象的にそれを我々に自覚させたものはいなかった。そこに私は彼の最大の功績をみとめるのである〉（“In eigener Sache”、訳せない！）。

〈ベーベルが党大会の任務とは何かについて言明したことは、大会は「党活動」を促進するためにだけ存在し「諸問題」に手を出す権利がない、というこれまでの考え方からすれば確かに若干の進歩です〉というツェトキンの手紙（9月29日付、カウツキー宛）を見れば、ベルンシュタイン問題が大会の議題になったように思える。

24 プレハーノフ（1856～1918）は、ヘーゲル死後60年を記念する論文（1891年）で初めて「弁証法的唯物論」という表現を用い、ラブリオーラ（1843～1904、イタリア）と並んで当時の第2インターにおける哲学の第一人者であった。プレハーノフは8月からベルンシュタイン批判の論文を発表するが、彼はSPD黨員ではないので、本稿では原則として取り上げない。

〈ベルンシュタインとその見解をきびしく非難するパルヴスの決議案は、ドレスデンの第6選挙区を代表するパルヴスの仲間たちによって提出されたが、党執行部はこの決議案を支持しなかった。ベーベルは9月3日付でカウツキーに手紙を書いてこうのべている。「パルヴスの決議案は気の利かぬものである。あの人物は個人的な野心を疾駆させて夢中になっているが、かれの決議案はわれわれがおかれた情勢をかれが全然理解していないことを示している。革命に賛成すると党大会に厳粛に宣言させること、そのことこそ、実際われわれが必要とするすべてである！なるほどわれわれは戦術についていつかは激論しなければならないだろうが、シュツットガルトでやるのは時期尚早である… [ママ] 〉 (ネトル前掲書)。

党大会で「社会主義の諸問題」についての決議がなされるかもしれないと思ったベルンシュタインは、大会に向けて声明を送った(9月29日付)。それには以下のように書かれている。

〈私の諸論文からでてくる実践的結論は、政治的および経済的に組織されたプロレタリアートによる政治権力の奪取を断念することだ〉というの、正しくない。〈私が反対したのは、我々は程なく期待されるブルジョア社会の崩壊を前にしており、社会民主党はその戦術をこのように切迫している社会的大破局への展望によって決定すべきであるとか、この展望に従わせるべきであるとかいうような見解に対してなのであった。…破局論の信奉者たちは、主として『共産党宣言』の論述をよりどころにしている。…不当にも…。社会的情勢の先鋭化は、『宣言』が描写したようなしかたでは実現しなかった。…工業での生産の集積は、今日にいたてもまだ、いたるところで同じ力と速度とをもって行われるにはいたっていない。…政治的には我々は、すべての先進諸国で資本主義的ブルジョアジーの特権が民主的諸制度に一步一步と道をゆずりつつあるのを見ている。…近代諸国民の政治的諸制度が民主化されればされるほど、政治的大破局の必然性と機会とはますます小さくなってゆく〉。

〈1872年にマルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』新版によせた序文中でこう述べた。パリ・コミューンは、「労働者階級はできあいの国家機構をそのまま占取して、それをかれら自身の目的のために動かすことはできない」 [ベルンシュタインはこれを、プロレタリアートによる国家権力の排他的占取と利用の不可能性と解釈する!] ということをおいても証明したのである、と。そして1895年、フリードリヒ・エンゲルスは『 [フランスにおける] 階級闘争』への序文中で、次のことを詳述したのである。すなわち、政治的奇襲の時代…は、今日では過ぎ去ってしまい、…社会民主党は「非合法的手段や転覆によるよりも、合法的手段を政治的に組織し、民主主義へむけて教育すること、さらに、労働者を向上させ、国家制度を民主主義の精神で改造するに適した、国家内でのあらゆる改良のために闘うこと」を社会民主党の任務とした。〈拙稿中で私が述べたのは、まさにこのことなのであり、…当面の問題については、エンゲルスの文言と同じことに帰着する。なぜかといって、民主主義とは、いつの場合でも、労働者階級がそもそもその知的成熟と、経済的発展の高度とに応じて行使しうる限りでの、労働者階級による支配をいうからである〉。

〈私がかつて、私にとっては運動がすべてであって、概して社会主義の最終目標と呼ばれているものは無である、という文章を書いたのは、…ことを最終的に形成するうえでの「どのように」という問題についての…無頓着のみを表現するものであった…。労働者階級による政治的権力の奪取や資本家の収奪は、それ自体では最終目標ではなく、特定の目標や努力を実現するための手段であるにすぎ

ない。そういうものであるがために、それらは社会民主党の綱領の要求事項となっているのであり、なんぴともこれに異議を唱えていない。…政治的権力の奪取ということのうちには政治的権利も含まれている。…ドイツ社会民主党が目下解決しなければならない最重要な戦術問題とは、ドイツの労働者の政治的、産業的諸権利を拡大する最良の道を問うことである〉。

シュツットガルト党大会は、10月3～8日に開催された。

大会でベーベルはベルンシュタインの声明を読み上げたが、その主張に同意することはできないと宣言した。またカウツキーは、以下のように発言している。

〈ベルンシュタインは我々に再考を強いたのである。この点で我々は彼に感謝しなければならない〉。

〈ベルンシュタインの見解は極めて確実な事実に基づいている。それがまったく誤謬なのは、この事実がドイツにおいて見出されるのではなく、英国において見出されるところにある。それが我々の不運なのである。…今ドイツで何から話すのか、人民の権利の拡大について話すのか、団結権の拡大について語るのか、いや、国家のクーデターについて、選挙権の廃止、監獄について語らねばならない。これが我々に開かれている立場である。この立場においては、ベルンシュタインが主張した道は考えられない。ベルンシュタインがもし我々の中にいたら、彼はこの道を批判した一人であつたらう〉。

〈もしベルンシュタインが、我々は最初に民主主義を手に入れ、それから次に、プロレタリアートを一步一步勝利に導いてゆかなければならないと考えているのであれば、私はこう言おう、事情は我々の場合には逆であり、我々の場合には民主主義の勝利はプロレタリアートの勝利によって可能にされるのだ、と。…イギリス・プロレタリアートが進撃している道は、より良い道であり、より少ない犠牲ですむ。従って我々は、同じ道を進撃することができるよう望まねばならない、ということをも認める。だが歴史の歩みは、あだな願望によって規定されるのではなく、事実によって規定されるのであり、こうした事実は、我々に語りかける。イギリスの道はわが国にとっては通用せず、民主主義の勝利はプロレタリアートの勝利によってのみ起こりうるのである、と〉。²⁵

さらにツェトキンは、ベルンシュタイン理論を批判するとともに、それに対して『ノイエ・ツァイト』が何の批判も行わなかったことをも非難した。

ローバは二度演説している。ローザの批判の矛先は、ベルンシュタインの支持者たるハイネ(1861～1944)の議会主義に向けられた。彼女は、選挙戦において党綱領の革命的見地を強調することが必要である、と主張し、次のように述べている。

〈わがこの任務を理解することは、我々が資本主義をどう理解しているかということに密接に関連しています。すなわち、資本主義社会が解決不可能な矛盾をみずから発展させ終局的には爆発するという確固たる見通しと、その破産の時には我々こそが破産した社会を生産する執行者となるであろう、ということです〉。〈究極目標を顧慮しない運動それ自体は無であり、我々にとっては究極目標

²⁵ 来賓として大会に出席していたプレハーノフは、上の最初に引用したカウツキー発言に激怒した。〈プレハーノフは…ライプツィヒとドレスデンの機関紙に「何のために我々は彼に感謝するのか」と題するカウツキー宛ての厳しい公開書簡を発表した〉(バロン『プレハーノフ』)。

こそすべてです）。

なお、ローザによる改良主義批判に反論して、フォルマルは次のように述べている。

〈当面の目標を追求することによって、「最終目標を遅らせている」という考えはすべて、どんな考えにもまして非社会主義的であり、とりわけ非マルクス主義的です。というのは、近代の社会主義が出発点としている思想は、我々の煽動活動の成果は我々自身の意向によって左右されるという思想ではなく、我々の意図している解決は内的必然性をもって進行するに違いないという思想だからです。労働する民衆の状態を経済的に、政治的に、精神的に、要するに文化的に高揚させる人は、民衆に闘いを続けてゆくための能力を与え、かれらの力を強化し、政治権力の最終的な掌握へ通じている道を確実な足どりで歩んでいるのです〉。

パルヴスは代議員権を持っていなかった（出席したかどうか不明）。

大会では、パルヴス、ローザの批判の方法に非難が集中した。マルクス、エンゲルスの言葉を一言一句たりとも修正すべきではないとし、パルヴスの事実列挙に同意したリーブクネヒトさえ、そうであった。〈党の同志よりも学校の先生むきの論調…明らかに人を見下したような態度〉云々、と。

〈だが、パルヴスとローザ・ルクセンブルクにたいする攻撃に主として先頭に立ったのは、ハイネやフォルマルのような修正主義的知識人ではなくて、南ドイツの指導者や労働組合主義者からなる奇襲部隊であった〉（ネトル前掲書）。大会議事録には、次のような発言が記されている。

〈パルヴスとルクセンブルク…が、最良の、最も著名な、最も分別あるわが同志たちを何週間もいやらしく攻撃したことについては、弁解の余地がないものです。ルクセンブル博士は天国から神の声のように我々に話しかけます。この二人が演壇に立つ自由だけは許してもよろしい。だが、戦術については、現実の闘争をしなければならず闘争に対する責任があり、今の世代に対しても将来の世代に対しても責任のある我々に、まかせてもらいたい〉。

指導部は、〈議論全体を「たんなる」理論のルール上に転轍しようとし〉（ネトル前掲書）た。〈大会は、もちろんベルンシュタインの論文を日和見主義として否定した〉（ゼーマン／シャルラウ前掲書）というが、決議のようなものは見当たらない。指導部は、ベルンシュタイン問題の裁定について、一年の猶予を得たのであった。

大会後、論争に指導部が介入すべきとの圧力が強まる。ベーベルは、〈「古参」の一人である私が、なぜそれほど火中に飛び込もうとしなかったかという疑問に答えましょう〉（10月12日付、カウツキー宛）と、立場を明らかにする決心を述べた。カウツキーも、ベルンシュタインを批判する論文を発表する。〈カウツキーの印刷物による最初のベルンシュタイン批判は、次のような表題の短い論説だった。“Taktik und Grundsatzze [戦術と原則] ”、Vorwärts、13 October 1898〉（ステーションソン前掲書）、ただし内容不明。

10月16日から22日にかけて、ベーベルとベルンシュタインは、理論と戦術の関係についてやりとりをしている。ベーベルは、〈思い違いから救い出したい〉として、〈戦術は常に党の基本原則と目的を顧慮して立てるべきものだ。この点で君と党の99%以上の人間との間には原則的な見解の開きがある〉（10月16日付）と書き送った。

〈これに対してベルンシュタインは返信 [10月20日付] の中で云う。「必要なのは、どの点でマルクスが今でも正しく、どの点でそうでないかをはっきりさせることだ」と。『資本論』はあらゆるか学生にも拘わらず結局のところは傾向的な作品であって、それが未完に終わったのは科学性と傾向との矛盾の故にマルクスにとって仕事が困難になる一方だったからである。ドイツ社会民主党の理論的諸前提と現実との間には乖離がある。「生産手段の社会による占有といったフランス革命の手段を現代に転用し、今日ひとまとめに『プロレタリアート』なる統一的集団と見做されているものの真の性質を誤認している、と云うよりむしろ忘れている」所が誤りのもとである。プロレタリアートは決して統一的存在でなく、その行動は様々である。「イギリスでは迫り来る大革命などおしゃべりする事はただ笑草なだけだが、ドイツのあまつさえ緊張した状況にあっては有害でしかない。いずれの場合でも、ともかくそれは非理性的である」。ドイツ以外の「先進諸国」では誰も「崩壊」など信じてはいないのだ。ドイツの党の状態は、「革命の太鼓をひっきりなしにたたく」ことでは改善できぬ。「何が可能であり、何が可能でないかについて冷静に申し開きすること」によってのみ改善される〉（西川正雄前掲論文）。

〈これに対してベーベルは、「私にとって肝心なのは、君がもはや社会民主主義の立場に立っていないという意見を今のところ抱いていることです。この結論は君が公に書いたものからも出てきますが、私的な手紙や発言で知らせてくれたことの方から出した面が遥かに大きいのです」と書き送り、ベルンシュタインに考えを一冊の本にまとめ、その際論争の形をとらないではっきりと正確に書くよう忠告した [10月22日付] 〉（同）

カウツキーもまた、ベルンシュタインに強硬な手紙を送っている。

〈「マルクス主義の克服」とは君の現在の立場を指すには弱すぎる言葉だ。それは君の中のマルクス主義の崩壊を意味する。マルクス主義を一層高い形へ引き続き発展させることではなくて、批判者に対する君の降伏のことなのだ。つまりマルクス主義と自由主義の妥協を意味する〉（10月23日付）。

そして、『ノイエ・ツァイト』から手を引くよう申し入れ、〈イギリスの運動の中に場所を見つけ、イギリス社会主義の代表となり、その資格で国際社会民主主義に語りかける〉ように勧めた。要するに、“イギリス人になっちまえ！”ということである。

アドラーからベーベルへの手紙（11月1日付）は興味深い。〈我々の前にある戦術上の実際問題で、エデ [ベルンシュタイン] が我々と意見を異にするものは何もない。特に誰よりも君と意見を異にするものは何もない〉。そしてアドラーは、次のように述べている。

〈私は、あらゆることのなかに、ただ、エンゲルスが死んだことによって我々に残された困難、つまり、この老人は、我々に対して、必要な限りで「修正」することを容易にしてくれていたのだということ、そのことだけは認めます。それだから我々は、自分たちで、そのことのために苦勞しなければならないのです〉。

これは、エンゲルスの晩年の諸主張が「修正」であり、その「修正」はエンゲルスというネームバリューによって容易だったという理解を示している。

この時点のベーベルは、分裂したとしても、ベルンシュタインに〈非常に大勢がついて行くという

心配はまったく持っていません）（11月4日付、アドラー宛）と述べていた。

カウツキーもアドラーも、ベルンシュタインに対し、書物による立場の公表を勧めた。それに従ってベルンシュタインが著したのが、『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』（以下『諸前提』取り略す）に他ならない。

v) ベルンシュタイン『諸前提』

『諸前提』は、1899年3月に刊行された（序文の日付は「1月」）。その構成は以下のようになっている。

第1章 マルクス主義的社会主義の基本的命題

- a. マルクス主義の科学的要素
- b. 唯物史観と歴史的必然性
- c. 階級闘争と資本の発展とに関するマルクス主義理論

第2章 マルクス主義とヘーゲルの弁証法

- a. ヘーゲル弁証法的方法の陥穽
- b. マルクス主義とブランキ主義

第3章 近代社会の経済的発展

- a. マルクス価値論の意義についての若干の考察
- b. 近代社会における所得の運動
- c. 生産面での経営階層と社会的富の普及
- d. 恐慌と近代経済の適応能力

第4章 社会民主党の任務と可能性

- a. 社会主義の政治的および経済的前提条件
- b. 経済協同組合の実行能力
- c. 民主主義と社会主義
- d. 社会民主党の当面の任務

終章 最終目標と運動

見られるように、ベルンシュタインの主張は体系的である。ただし、その内容は、俗流的マルクス主義批判のレベルを超えるものではない。どこまで詳しく紹介すべきか迷うところであるが、内容の検討に移る。

ベルンシュタインは序文で、「本書の主要目的」を次のように述べている。

〈社会主義理論にみられるユートピア主義的思考の残滓を克服することによって、社会主義運動のなかで現実主義的要素と理想主義的要素とを均等に強めること〉と。

以下、訳文はダイヤモンド社版（佐瀬昌盛訳）による。

《第1章について》

a.においてベルンシュタインは、まず、科学の定義から説明を始めている。

〈すべての科学について、純粋理論と応用理論とを区別することができる。前者は、当該の問題に関係する経験の総体から抽出され、したがってまた普遍妥当とみなされる認識命題から成立している。これらの命題は、理論の中で普遍的要素を形づくっている。つまり、この応用から得られて、理論命題に要約される認識が、応用科学の命題である。これらの命題は、理論体系のなかで可変的要素を形づくっている。

しかし、普遍的とか可変的とかは、ここでは条件つきでしか理解できない…。かつては絶対的妥当性が認められていた命題は、認識が進歩するにつれて、条件つきのものであることが認識され、新しい認識命題によって補足される〔例えば「原子論」〕。この後者は、前者の妥当性を制限はするが、しかし同時に、純粋科学の領域をひろげる〉。

ベルンシュタインは、〈マルクス主義的社会主義の純粋科学をその応用部分から体系的に抽出することは、これまでのところ、まだ試みられていない〉とした上で、次のように述べた。

〈マルクス主義のうちで、純粋科学体系を形成しているものの主要部分とは…先述した史的唯物論のプログラム〔『経済学批判』序文および『空想より科学へ』第3章〕、階級闘争一般、なかんずくブルジョアジーとプロレタリアートとの階級闘争の理論（この階級闘争理論は、史的唯物論のプログラム中にすでに萌芽として含まれている）、ならびに—ブルジョア社会の生産様式およびそれを基礎とするこの社会の発展傾向に関する理論を含めて—剰余価値理論…である〉。

〈マルクス主義の全体系を貫く基本法則となっている、唯物史観という名の、その特殊な歴史理論が、マルクス主義の基礎のなかでの最重要部分である…。原理的には、その全体系は、それが成立するも崩壊するも、この唯物史観とともどもなのである。…したがって、その全体系の正しさの検討はすべて、この歴史理解が妥当性をもつか、あるいは、どの程度まで妥当性をもつかという問題から出発しなければならない〉。

かくて、b.に移る。ベルンシュタインは冒頭で、次のように述べている。

〈唯物史観の正しさを問うことは、歴史的必然性の程度を問うことである。唯物論者であるということは、さしあたり、すべての事象を物質の必然的運動に還元することをいう。唯物論によれば、物質の運動はひとつの機械的な過程として必然性をもって生じるものである。そこでは、いかなる事象も、あらかじめ必然的である作用をもたないものではなく、いかなる現象も、その物質的原因をもたないものはない。それゆえ、理念や意思方向がどのように構成されるかを規定するのは、物質の運動なのであり、だからまた、理念や意思方向、したがってまた人間世界のすべての事象は、物質的に必然なのである。…

したがって、唯物論を歴史の説明におし及ぼすということは、最初から、すべての歴史的な事象と発展が必然性をもつと主張することである。唯物論者にとっての問題は、ただつぎの問いだけである。すなわち、人間の歴史では、どのようなしかたで必然性が貫徹されるか。そこでは、どのような力の要素、または、力の要因が決定的な言葉を語るか。さまざまな力の諸要因相互間の関係は、どのようなものであるか。自然、経済、法制、理念には歴史中でどのような役割が割りあてられているか。

先掲の箇所 [『経済学批判』序文] で、マルクスはその回答を与え、人間のそれぞれの時代の物質的精算書力と精算書関係とが規定的要因であるむねを述べている。²⁶

ベルンシュタインは続ける。

〈初期 [いわゆる「初期」とは異なる] のマルクスとエンゲルスが、彼らの後年の著作にくらべると、社会発展に及ぼす非経済的要因の共同作用力をいちじるしく劣小なものとして認め、また、生産関係に及ぼす反作用力をいちじるしく劣小なものとして認めていたということは、まったく争う余地がない〉。

しかし、「後年の著作」=『資本論』、『反デューリング論』、エンゲルスの晩年の書簡では、「生産諸関係の規定力」は制限されている。つまり、マルクス・エンゲルスは“修正”している。

〈今日、唯物史観を応用するひとは、最初の形態のそれではなく、もっとも完成された形態のそれを義務がある。換言すれば、生産力および生産関係の発展と影響はもとより、法的小および道徳的諸概念、あらゆる時代の歴史的・宗教的伝統、地理的自然の影響およびその他の自然的影響——人間自身およびその精神的性向という自然もやはり、その一部である——などに完全に考慮を払う義務がある〉。

経済的要因のみならず、非経済的要因をも考慮しなければならないと主張するベルンシュタインは、「折衷主義」を説く。

〈折衷主義は、思想に「足かせをかける」ような、あらゆる教条がひめる傾向に対抗する、冷静な悟性の反逆である〉。

【注 「悟性」を掲げての唯物論批判は、非唯物論者の常道。】

〈純粋に経済的な諸力とならんで、その他の諸力が社会生活に影響を及ぼす度合いが高まれば高まるほど、それだけ、史的唯物論と呼ばれるものの支配にも変化が生じる。…一面では、発展の法則・とくに経済発展の法則に対する洞察の成長がみられる。この認識と手をたずさえて、一部はその原因として、だが一部はまたその結果として、経済発展を先導する能力が高まってゆく。物理的自然力と同じように、経済的自然力もまた、その本質が認識されるにつれて、人間の支配者から人間の従者となってゆく。すると社会は、経済的推進力との関係では、理論的にはいままでより自由な立場に立つ。そして、社会の構成諸要素間の利害対立——私利と集団利害の力——だけが、この理論的自由の実際的自由への完全な移転を妨げる。けれども、ここでもまた、私利にくらべて一般的利害が獲得する力はますます大きくなってゆく。そして、そうやってゆくにつれて、また、そうやってゆく全ての領域において、経済的諸力の本質的支配は衰えてゆく。経済的諸力の発展は先取りされるようになり、したがって、その遂行はそれだけより急速、より容易になる。こうして、個人や国民は、その生活のますます大きな部分を、彼らの意思を無視し、ないしは彼らの意思に反して貫徹してきた必然の影響から脱却させてゆく〉。

〈今日到達されている経済発展水準がイデオロギー的要因、とくに倫理的要因に与えている独立的

²⁶ 上の引用の最初の一文は、1万部の版では、〈唯物論的世界観とその他の世界観のちがいを、当初の字句で企てたよりもいちだんと正確に規定する表現をとった〉との説明をもって、次のように変更されている。〈唯物史観の正しさを問うことは、歴史的必然性とその原因とを問うことである〉。さらに1万3千部の版では、〈唯物史観の正しさを問うことは、歴史的必然性の規定的要因を問うことである〉と変更された。

活動余地は、以前にはなかったほど大きくなっている。その結果、技術的・経済的發展とその他の社会的諸制度の発展のあいだの因果関係は、ますます間接的な関係になってゆく。したがって、前者の自然必然性が後者の形成にとって決定的である程度は、ますます低下してゆく。

「鉄則の歴史」は、このようにして、ひとつの制限をこうむる。先取りしていえば、この制限は、社会民主党の実践にとって、社会政策的任務の軽減を意味するのではなく、その増大と適質性を意味するのである。

〈今日、社会主義理論の科学的基礎としては、唯物史観は、先述したような拡大した形でしか妥当しえない〉。

以上から、ベルンシュタインは、唯物史観を「経済史観」という呼称に変えるべきだと主張した。

〈経済史観とは、経済的諸力だけとか経済的動機だけとかが承認されることを意味するには及ばず、経済が歴史における決定的な力、歴史における大運動の要点を形成するということの意味するだけでよいのである。唯物史観という言葉には、そもそも唯物論という概念にからむいっさいの誤解が、最初からまといついている。哲学上ないしは自然科学上の唯物論は、厳格に決定論的である。しかし、マルクス主義史観は、諸国民の生活の経済的基礎が、その構成を無条件に規定するほどの影響力をもつものだと認めないのである〉。

とりあえず、ベルンシュタインにあっては、唯物論は「予決論」（宿命論）と同義であったことを確認されたし。科学論については後述。

c.においては、「マルクス主義のうちで純粋科学体系を形成しているものの主要部分」の、唯物史観（史的唯物論）以外——すなわち「階級闘争の理論」と「剰余価値論」とについて言及している。ただし、自らの主張を展開しているわけではない。「最重要な諸命題を、できるかぎり簡潔に示」した上で、以下のように述べている。

〈唯物史観のばあいにもまして、ここでは、当初は不可抗的な力をもって定立された命題が——主要視点を堅持しながらも——制限されてゆくという形をとって、理論が発展していったあとを論証することができる。理論がこのように変更されたことは、一部はマルクスとエンゲルス自身によって認められた。『資本論』序文（1867年）、『共産党宣言』新版への序文（1872年）、『哲学の貧困』新版への序文と一つの注（1884年）、および『フランス革命 [ベルンシュタインによる誤記] における階級闘争』への序文（1895年）には、変化のいくつかが示されている〉。

〈マルクスとエンゲルスは、彼らが事実について認めた変化と、よりよい事実認識とが、理論の完成と応用に対して及ぼさざるを得ない反作用 [「を」が欠落]、一部はただ暗示するだけにとどめ、一部は個別点について確認するだけにとどめた。そして、後者のばあいに、そこに矛盾なしとはしない。理論にふたたび統一を与え、理論と実践の統一を生み出すという課題を、彼らはその後継者たちに残したのである。〉

だが、この課題は、理論がもつ欠陥と矛盾とが忌憚なく明みに出されるばあいにのみ、解決されるものである。換言すれば、マルクス主義理論の発展と完成は、その批判とともに始まるのでなければならない。

《第二章について》

〈マルクス主義に対する彼〔ベルンシュタイン〕の哲学的批判は実は結果的な現象であって、経験的根拠からマルクス理論を論破せんとする試みに付随して生じたものである〉（ゲイ前掲書）

ここでは、ベルンシュタインの経験主義、懐疑論という特徴を見ることができる。

a.において彼は言う。

〈現実における事物の関連がどうであろうとも、われわれが経験的に確認可能な事実の地平をはなれ、そして、事実をこえる思考をおこなうやいなや、われわれは演繹された概念の世界に踏みいるのである。そしてそこでは、ヘーゲルが立てた弁証法の法則に従うならば、それとは気づかないで、われわれはやはりまた「概念の自己展開」という陥穽におちこむのである〉。

『共産党宣言』は、ドイツのブルジョア革命は〈プロレタリア革命の直接の序幕となるほかない〉と宣言した。ベルンシュタインによれば、これは「ヘーゲル矛盾弁証法の残滓の産物」でしかない。

〈それを実現するためには数世代を要するはずのものが、対立による、対立のなかでの発展という哲学の光を浴びると、ブルジョア階級によろしくその発育の場をつくりだすはずであった政治的変革の直接的結果である、とみなされてしまった〉。

また、エンゲルスはSPD議員団を「小市民的社会主義」と批判していたが、「青年派」が議員団を非難した際、エンゲルスは「青年派」の方を断罪した。議員団の問題は瑣末事であるのに対して、「青年派」の政策は危険だと判断したからであった。

〈エンゲルスの性格にははなはだふさわしくないこの二義性〔両義性〕は、結局はヘーゲルから受継いだ弁証法にその根を持つのである「しかし、しかり—否、否」ではなくて、ヘーゲル弁証法の「しかり、否—否、しかり」とか、諸対立のからみ合いとか、量から質への転化とか、要するに弁証法的華麗さを誇るあれこれの事柄がさまげとなって、認識された諸変化の影響範囲を完全に考慮することが妨げられたのである〉。

かくしてベルンシュタインは結論づける。

〈ヘーゲル弁証法こそは、マルクス理論における反逆要素なのであり、あらゆる首尾一貫した考察をさまたげる陥穽なのである〉。

さらにベルンシュタインによれば、マルクス主義にひそむブランキ主義的要素もヘーゲル弁証法に基づいている。その説明が、b.である。

〈ドイツでは、その急進的なヘーゲル弁証法にもとづいて、マルクスとエンゲルスがブランキ主義ときわめて近親的な理論に到達した。ブルジョアジーの相続人たりうるのは、そのもっとも急進的な対立物であるプロレタリア〔？〕、すなわち、ブルジョア経済の生粋の社会的産物であるプロレタリアしかないとされたのである。…部分的革命などは、ユートピアであり、プロレタリア革命のみがなお可能である、とマルクスは『独仏年誌』…で推論している（論文『ヘーゲル法哲学批判』を参照）。この見解は、直接にブランキ主義につながるものであった〉。

〈この〔ブランキ主義の〕政治理論は、全く単純に、革命的な政治的暴力とその発現たる革命的収奪とがはかり知れないほどの創造力をもつという理論なのである〉。

〈ブランキ主義的精神が先鋭かつ奔放な表現をえているという点では、1850年3月の共産主義者同

盟の回状にまさるものはない)。

〈この〔回状における現実と綱領との間の〕矛盾は、…彼等〔マルクス・エンゲルス〕の理論のなかにある二元論の所産なのである。

近代の社会主義運動には二大潮流を区別することができ…。そのひとつは、社会主義思想家たちにより作成される改革提案と結びつくものであって、主として建設を志向する。もうひとつの潮流は、革命的民衆蜂起にそのインスピレーションを得ていて、主として破壊を目指している。その時代状況のなかに根ざす可能性しだいで、一方は、空想的、宗派的、平和的、進化的なものとして立現れ、他方は、陰謀的、煽動的、暴力主義的なものとして出現する。そして、現代に近づくにつれて、両者のスローガンはますます決然たる響きを帯びる。すなわち、前者は、経済的組織を通じての解放を、と唱え、後者は、政治的収奪を通じての解放を、と唱える。…

マルクス理論は、両潮流の核心を総合しようとした。それは、革命派からは、労働者の解放闘争をひとつの政治的階級闘争とみなす解釈を、社会主義派からは、労働者解放の経済的社会的前提条件に向けて突進するという態度を、それぞれ継承していた。しかし、その総合はまだ矛盾の止揚ではなく、たぶんに妥協であり、それも、エンゲルスがその著『〔イギリスにおける〕労働者階級の状態』のなかで、イギリスの社会主義者たちに提案した、つぎのような妥協であった。いわく、特殊的・社会主義的要素は政治的・急進的・社会革命的要素の背後に後退せよ、と。マルクス理論…は、このような妥協ないしは二元論という性格を持ちつづけたのである。ごく短い間隔において、マルクス主義が全く差異のある相貌を繰返してきていることの説明を、われわれはこの性格のうちに求めなければならない)。

ベルンシュタインはまた、2月革命の展望において、マルクス、エンゲルスよりもプルドンの方が正しかったと評価している。

〈経済こそが社会発展の基礎をなすという考えから出発する理論が、暴力革命をその極致まで推し進める理論の前に降伏するありさまをみせつけられるたびごとに、われわれはひとつのヘーゲルの命題に出会うことであろう)。

〈マルクスとエンゲルスの偉業は、ヘーゲル弁証法の恩を受けて成就されたものではなく、ヘーゲル弁証法にもかかわらず成就されたのである。他面、彼らがブランキ主義の重大きわまりない欠陥に気づくことなく通りすぎていたとすれば、それは何よりもまず、彼ら自身の理論のうちに含まれるヘーゲルの添加物のせいなのである)。

暴力革命を嫌悪するベルンシュタインにとっては、その根源たるヘーゲル弁証法は排斥すべきもの以外の何物でもなかった。しかし、ヘーゲル弁証法とマルクス主義に含まれるブランキ主義との関連は明確ではない。ちなみに、当時のSPD内に、ヘーゲル弁証法を称揚する者も、暴力革命を唱える者も、ともにほとんどいなかった。

《第3章について》

この章は、マルクス主義の「主要部分」の一つ、「剰余価値理論」＝経済理論を扱っている。

a.は価値論であるが、ベルンシュタインはマルクス価値理論を否定しているわけではない。

ベルンシュタインはまず、いわゆる資本論第1巻と第3巻との“矛盾”（労働価値論と生産価格論との“矛盾”）を指摘した上で、労働価値説も限界効用価値説もともに「純粹に思考上の事実」＝「抽象」の上に築かれたものにすぎず、〈このような抽象にもとづいて発見された命題は、一定の限度内では、その妥当性を主張することができない〉と論じた。

そして、次のような結論に至る。

〈生産的に労働する部分の剰余労働は、ひとつの経験的な事実、つまり経験から証明できる事実なのであって、これは何らの演繹的証明をも必要としないのである。マルクスの価値理論が正しいか正しくないかは、剰余労働の証明にとっては、まったくどうでもよいのである。この点でマルクス価値理論は、論証命題ではなく、分析と視角的説明の手段であるにすぎない〉。

懐疑論、経験論といえよう。

なお、ベルンシュタインは、唯物論を「事物の究極かつ唯一の根拠は物質である、とする説」とし、エンゲルス『フォイエルバッハ論』が唯物論の定義を広げすぎたと主張している。

b.以下は、マルクスが共産主義的諸要求の基礎をすえた「資本主義的生産様式の必然的崩壊」（『哲学の貧困』エンゲルス序文）の検討である。すなわちエルフルト綱領の命題への批判に他ならない。

b.でまずベルンシュタインは、マルクスがいう「資本主義的生産様式の…内在的矛盾」を説明し、「利潤率の低下」、「過剰生産と恐慌の登場」などはすべて「事実」であるとした上で、次のように言う。

「さきに描写した矛盾に対して緩和的作用をもつ諸要素」をマルクスは無視・軽視した。

〈その結果、矛盾対立の社会的作用が、現実のそれよりもはるかに強烈かつ直接的に現れてしまう〉と。

ついでベルンシュタインは、英独の統計資料を分析して、次の結論を下す。

〈現在の発展は有産者数の相対的減少を、あるいは絶対的減少さえも示していると考えたりするのは、まったくの誤りである。有産者の数は、「多少とも」ではなく、ただ単にいっそう多く、すなわち絶対的かつ相対的に増加しているのである〉（その論拠は株式制度の普及）。

〈大資本家やその銃車窓が使い切れない商品量は、どこにとどまるのであろうか。…資本家の数の相対的減少の進行とプロレタリアートの福祉の上昇か、それとも多数の中間階級か、——これだけが、生産の継続的増大をわれわれに許す唯一のオルタナティブである〉。

c.は経営の集積・集中の問題を扱っている。各国の統計から、ベルンシュタインは次のように結論づけた。

〈工業部門の数がふえていくなかで、技術と経営集中がたえまなく進展するというのが真実である…とすれば、一連の工業部門で中小経営が大経営とならんで十分に生存能力を立証しているということも、これに劣らず確かな真実なのである〉。

〈商業においても、事情は工業と同じである〉。

〈工業と商業とは、大経営への上昇運動が想像以上に緩慢であることを示したにすぎない。だが農業が示しているのは、経営規模の停滞か、さもなくばその直接の後退か、のいずれかなのである〉。

〈農業の小・中経営がいたるところで増加しつつあり、大経営または巨大経営が減少しつつあるこ

とには、なんの疑いもありえない)。

d.は恐慌論である。

ベルンシュタインは『資本論』第2巻を重視した。(第2巻はそもそも、マルクスの研究活動のもっとも晩年の、もっとも円熟した成果を含む)からである。なかでも、第20章の「第11節 国家資本の補填」に注目している。そこでマルクスは、〈[外国貿易は]ただ諸矛盾を拡大された局面へと押し移したにすぎず、それら諸矛盾のためにいっそう大きな活動の場をひらくだけである〉と述べていた。これを念頭に、ベルンシュタインは、次のように主張している。

〈市場の拡大は資本主義経済の諸矛盾を一段と拡大された局面へと押し移すものであり、したがって諸矛盾をつのらせるものであるという考えは、さまざまな機会にエンゲルによって『資本論』第3巻中で、最近の諸現象のうえに適用されることになった)。

ベルンシュタインが取り上げるのは、第30章でのエンゲルスによる「注8」「注100」である。ベルンシュタインはこれを、次のように解釈した。

〈マルクスの執筆時期以降に交通手段が経験した巨大な拡張、そして世界市場を初めて真に創り出した巨大な拡張――すなわち、ますます新しい工業諸国がイギリスとの競争舞台に登場してきたこと、また、過剰なヨーロッパ資本の投下領域が無限に広がったこと――が、…「ほとんどの旧来の恐慌のカマドと恐慌形成にとっての機会とを除去するか、または顕著に弱めるかした」ところの要因である、と述べられている。しかし、カルテルとトラストが国内市場での競争を制限するための手段であると記述され、またイギリス以外の世界によりはりめぐらされている保護関税が、「世界市場での支配権を決定すべき終局的な一般的産業戦のための武装」であると述べられたあと、最後につぎのように書かれている。「旧来の恐慌の再現を阻もうとする要素のどれもが、このように、はるかに激しい将来の恐慌の胚種を内蔵しているのである」〔㉔〕、と。エンゲルスは、つぎの問題を投げかける。つまり、世界貿易の幼少期(1815~47年)にはほぼ5年、1847年から1867年までは10年の期間にわたった産業循環が、新しい膨張を経験したのではないか、そして、われわれは「未曾有の激しさをもつひとつの新しい世界恐慌の準備期のなかにいる」〔㉕〕のではないか、というのである。しかし、彼はまた、つぎのような選択の余地をも残している。つまり、それまでの10年の循環をもった周期的過程という緊迫した形態が、「相対的に短くて微弱な景気好転と、相対的に長くて決定性に欠ける不況との、むしろ慢性的な、異なる時期に異なる国ぐにのうえに割りふられる交替に道を譲った」〔㉖〕のかも知れない、というのである。

この箇所が執筆されてから経過した時間は、この問題を決定するにはいたっていない) (〔㉔〕〔㉕〕〔㉖〕は、便宜上引用者が加筆した)。

ベルンシュタインは、エンゲルスの論旨を歪曲している。ベルンシュタインは、エンゲルスは㉕と㉖の選択肢を提起したとし、この問題は未解決であるという。だがエンゲルスは、㉔の「ように見える」と述べ、問題としているのは㉕であり、㉔が結論なのである。ベルンシュタインの主張の核心は、次の一文に他ならない。「第三の難問」としていう。

〈世界市場の巨大な空間的拡大は、通信および運輸面での所要時間の極度の短縮とあいまって、攪乱調整の可能性をおおいに高めたし、また、近代的信用制度の弾力性や産業カルテルの出現などと

あいまって進んだヨーロッパ工業諸国の富の途方もない増大は、地域的または特殊的攪乱が一般的景気状態に及ぼすはずの反作用力をいちじるしく弱めさせた、その結果、少なくともかなり長期については、従来のような種類での一般的営業恐慌は、全然ありそうにもないと思なすべきではないか、という疑問…である）。

ローザによる批判への反論が、これに続く。

例えば、ローザは「信用制度の二面的性格」を無視している。つまり「信用制度のもつ破壊的側面」についてだけ論及し、その「生産的・創造的能力」＝「ひとつの新しい生産様式への過渡形態を形成する」（『資本論』第3巻）信用の機能には触れない。

企業家連合（カルテル、シンジケート、トラスト）についても同様に、「市場の運動に生産を適応させるための一手段」であると同時に、「独占的搾取の手段」でもあるのである。

かくて、ベルンシュタインは次のように述べる。

〈カルテルやトラストの「不能（インポテンツ）」を予言したりすることよりも、それらがもつ可能性をわきまえておくことの方が、労働者の立場よりすれば、はるかに重要であると私には思われる。それらがもっと上位の目的――恐慌の防止――を長期にわたって達成しうるかどうかは、それ自体としては、労働者階級にとって二次的な問題なのである。しかし、労働者階級の解放運動のため、われわれが一般的恐慌になんらかの種類期待をつなぐようなことがあれば、たちどころにそれは、きわめて重要な問題と化する。なぜかといって、そのばあい、カルテルは恐慌に対してなんらなすべを知らないと考えることは、きわめて宿命的な怠慢の原因となりかねないからである〉。

〈予見されない外的事件が一般的恐慌をひき起こす…というのでないならば、この種の一般的恐慌がほどなく発生するということを推論させるだけの不可抗な根拠は、なんら存在しない〉。²⁷

《第4章について》

この章こそベルンシュタインが最も主張したかったことであり、ページ数も他の賞に比べて圧倒的に多い。

a.ではまず、社会主義が定義される。

〈社会主義の最も正確な特徴記述は、…協同組合性（Genossenschaftlichkeit）という思想と結びつくそれであろう。なぜなら、それをもってすれば、経済的関係と法的関係とが同時に表現されることになるからである〉。

かくて社会主義は、〈協同組合的社会秩序への運動、または協同組合的社会秩序の状態〉を指すことになる。

続いてベルンシュタインは、通説を検討する。

〈これ〔史的唯物論〕によると、社会主義の普遍的実現のための第一に前提条件は、資本主義の発展が一定の水準に達していることであり、第二の前提条件は、労働者の階級政党により政治的支配権を行使することである。マルクスによると、この権力の行使形態は、過渡期においてはプロレタリ

²⁷ ベルンシュタイン・アーカイヴには、次のような走り書きのある封筒があるという。〈小農は消滅しない。中間階級も同様である。恐慌がいよいよ激化することはない。窮乏化と隷属は進行しない。現実に存在するものは不安定、従属、社会的貧富の差、生産の社会的性格、有産者の寄生化である〉。

アートの独裁である〉。

しかしながら、第一の条件についてベルンシュタインは、次のように結論づけた。

〈集中化された経営形態が生産と分配の社会化のための前提条件をなすのであるかぎり、ヨーロッパの最先進諸国においてさえ、この前提条件はようやく部分的事実となったばかりである〉。

また、言う。

〈第二の前提条件は、マルクスの説によれば、プロレタリアートによる政治的権力の奪取である。この奪取には、いろいろな考えかたが可能である。すなわち、選挙権の活用という手段や、その他あらゆる合法的手法を利用しての議会的闘争を通じてとか、あるいは革命という手段により暴力を通じてとかである〉。

【注 このくだりに、次のような注記がある。〈革命という語は、この語の政治的意味において、つまり、蜂起ないしは非合法的暴力と同義のものとして用いられる。これに反して、社会秩序の原理的変革に対しては、「社会的変容」という語が用いられるであろう。この語は、方法の問題を問わない〉。】

〈こういう想定〔革命という方法〕に導くのは、わけでも、労働者階級こそが最大多数の階級であり、また、無産階級として社会のもっともエネルギーな階級でもある、とする考えである〉。

〈だが、近代プロレタリアートとは、何者なのか。

すべての無産者、すなわち、財産または特権的地位からの所得をもたないすべての人間をそれとして加算すると、それは、先進諸国の人口の絶対過半数にはなる。ただ、そうだとすると、この「プロレタリアート」なるものは、極端に異質な諸要素の混合物、1789年の「人民」よりはるかに相互に差異のある混合物だというまでである。これら諸階層は、現在の所有関係が存続するかぎりには、なるほど対立的利害よりは共通の利害、あるいは少なくとも同質的利害を持つことの方が多いだろうが、しかし、現在の所有者ないし支配者が排除されたり、その地位を奪われたりするやいなや、すぐさま各個の欲求や利害の異質性を意識するにいたるだろう〉。

しかも〈工場労働者はどの国でも住民中の少数派なのである〉。

さらに〈社会民主党が他のどの国よりも強いドイツにおいては、工業での青年労働者が450万、加えてなお商業および交通業での成年男子被用者が50万を数えるというのに、社会主義的投票数はようやく210万でしかない。…こういう状態のもとでは、社会主義に投じられる一票は、当面、明確な意図の表現というよりはむしろ、不明確な要求の表現なのである〉。

だからして、パルヴスのように「社会革命は近い」と結論づけることはできない。

〈よしんば、これら〔パルヴスが算定した〕すべての分子が、社会主義者を権力の座につかせる革命を歓声とともに迎え入れると仮定してみても、だからといって、解決を要する主要問題のため何ほどの成果があったことには全然ならないのである〉。

〈国家が生産物の生産および分配の全体をただちに引受けるということは、まったく問題になりえない〉。〈問題は実際のところ協同組合の経済的能力いかんという問題に解消されるのである〉。

b.においてベルンシュタインは、生産協同組合よりも消費協同組合の方を重視している。

〈1860年代に創立された生産協同組合こそは、ほとんどいたるところで失敗に帰した〉。

〈財政的に挫折したわけではない生産協同組合にとっては、その発展とは排他性と特権を意味する…。この種の生産協同組合は、[マルクスが言ったような]今日の経済制度の基礎に手をつけるどころではなく、むしろ、この制度の相対的強固さの証明を提供したにすぎない〉。

〈雇用労働者たち自身に属する協同組合は社会主義的であったり民主主義的であったりするのではなく、「個人主義的」なのである。…それは、労働者たちが排他的所有者であるというまさにその点で、制度的にそれ自体として生ける矛盾である。それは、作業場での平等、完全な民主主義、共和制を想定している。しかし、それが…一定の大きさに達するやいなや、平等は損なわれる。なぜなら、諸機能の分化が、したがってまた従属が必然となるからである。…分解が、つまり、普通の事業経営への変形がはじまる。だが、平等への固執があると、拡張の可能性が断ち切れ、零細形態が持続される。…それら[純粋な生産協同組合]は、近代的大規模生産に合致しつつ、しかも経営から資本家を除去しているという形式であるどころではなく、むしろ、前資本主義的生産への復帰なのである〉。〈たとえ工場の工学的発展は集産主義的生産のための肉体を生みだしてくれたとしても、それが、同じ程度だけその精神を協同組合的経営に近づけたわけではけっしてない〉。

〈資本主義的な所有者を、または所有者たちを排除すれば、すでに資本主義的諸企業を生存能力ある社会主義的組織に変革するための最重要作業は済んだことになるなどと想定するのは、外面的標識のみに頼っての判断という考察方法をとらぬかぎり、できないことなのである。…これら諸企業は複雑きわまりない有機体なのであり、他のすべての器官が合流する中枢の排除は、それが組織の完全な改造を伴うのでなければ、これら諸企業にとって即刻の解体を意味するのである〉。

〈1860年代の社会主義者たちがはなはだ軽視してきた消費組合は、時が経過するにつれて、真にひとつの経済力であり、実行能力と高度の発展能力とを備えた組織であることを示した〉。

〈すべての純粋な購買協同組合は本質的に民主主義できな性質をもち、すべての純粋な販売協同組合は寡頭支配へ向かおうとする性質をもつ〉。

〈たとえ消費組合が、中間商業での利潤率を低めることにより、自分自身の地盤をもしだいに掘りくずすより以外になにもないとしても、消費組合は国民経済にとり非常に有益な仕事を果たすことになる。…労働者階級がもろもろの生存を直接に破壊したり、暴力に走ったり…することなく、社会的富の巨大な部分を自分たちのために押収する手段が、ここにある〉。

〈もし形式に拘泥するならば、たとえば国民学校などは消費組合よりはるかに社会主義的な機関である。しかし、公的事業の育成にはそれなりの限界があり、また、時間もかかる。そしてその間は、消費組合こそが労働者階級にとって最も近づきやすい協同組合形態なのである。なぜなら、それがきわめて「ブルジョア的」だからにほかならない〉。〈そこでは職員は俸給を得て、労働者は賃金を得て雇われており、利潤が生みだされ、利子が支払われ、配当の高さが議論される〉。

〈工業労働者にとって協同組合というものは、一面で商業による搾取に対抗する可能性を与え、多面では、そのほかさまざまな関係で彼らの解放事業を容易にする可能性を提供している〉。

〈協同組合作業は、他の諸前提を別にしてみても、それ自体の組織とそれ自体の指導者とを必要とする。そしてこの両者は、即席でつくりだせるものではない。両者は精選され、吟味されなければな

らない。したがって、全員の気持ちが灼熱し、全員の情熱が張りつめているような時点——たとえば革命時がそれである——が、平時にすら至難であることの判明しているこの問題を解決するうえで、なんらかの促進剤となりうるのかどうかは、疑わしいところではない)。

〈もっともよく成功していた〔生産〕協同組合というのは、労働組合あるいは消費組合による融資を受け、特にその従業員の利潤と眼目とするのではなく、より大きな一般の利潤を眼目としての生産を行ってきて、しかも、このより大きな一般のうちには従業員も組合員として含まれていたか、それとも、希望しだいで含まれることができたような種類のものであった)。

〈生産協同組合が生存能力を証明してきたのは、これまでのところ、それが消費協同組合を支柱としてきたか、それとも、それ自身の組織がこの形態に近づくかした場合に限られている。このことは、労働者協同組合を育成し、その成功の公算を最も大きくするためには、われわれが近い将来、どの方向に進むべきであるかについて、示唆を与えるものである)。

まず“消費者として組織せよ！”か。

c.が本著のキモである。1921年版は、この項を「Ⅰ.民主主義と国民経済」「Ⅱ.民主主義の連邦主義的原理」という二つの小見出しに分けているが、なかでもⅠに核心がある。

〈労働組合もしくは職工組合(ゲヴェルクフェアライネ)は、その社会政策上の地位からすれば、産業における民主的要素である。それらがもつ傾向は、資本の絶対主義を打破し、産業の管理に対する直接の影響を労働者に得させることである)。

〈国家、地方自治体、資本家のうちのいずれが企業者であるかにはかかわりなく、特定産業に雇用されている者全員の組織としての労働組合は、それが部分関与者たるをもって満足するかぎりでのみ、組合員利益の擁護と一般福祉の増進のふたつを同時にはたすことができるのである。この限度をこえると、労働組合は、独占体があつて悪しき特性のすべてを備えた閉鎖的団体に墮す危険を冒すことになる。ここでも、協同組合の場合と同じことである。…全体にそむく同志共同体(ゲノッセンシャフトリッヒカイト)というものが社会主義でないことは、寡頭支配的社会での国営が社会主義でないのと同じである)。

“労働者の利益だけでなく「一般福祉」(国民経済)も考慮せよ！”という思想は、労使協調主義に帰着することを指摘しておく。

ここでベルンシュタインは、〈民主主義とはなにか〉という問いを立て、以下のように答える。

〈問題の核心により肉迫するためには、否定語をもって表現して、民主主義を階級支配の不在と翻訳し[!]、いかなる階級にも全体に対する政治的特権が帰属しないような社会状態の表示だとしてみることである。…民主主義という概念中には、まさに今日の理解にとって、社会の全成員の同権という法的観念が包括されている。そして、ここにこそ、多数による支配——人民の支配とは、どのような具体例の場合でもこれに帰着する——はその限界を持つのである。この法的観念が定着すればするほど、また、それが一般の意識を支配すればするほど、ますます民主主義は、万人にとっての最高度に可能な自由というのと同じ意味になってゆく)。

〈民主主義とは、手段であると同時に目的でもある。それは、社会主義をかちとるための手段であ

る。また、それは社会主義実現の形態である〉。

〈民主主義とは、階級の事實的止揚ではまだないにしても、原理的には階級支配の止揚である。…民主主義においては、諸党派やその背後に立つ階級は、やがて自分たちの力の限界を知るようになり、いつの場合にも、事態に照らしてその貫徹が理性的に期待できることだけを企てるようになる。…民主主義の選挙権は、その有権者を潜勢的に共同体への関与者とするし、その潜勢的関与は、結局においては事實的関与へと導かずにはおかない〉。

〈普通選挙権は民主主義の一断片に過ぎない。…その進行は、多くの人びとが希望するよりも緩慢であろう。しかし、それにしてもそれは進行中である。そして、社会民主党が何の保留なく、その理論においても普通選挙権の基盤、すなわち民主主義の基盤のうえに立ち、そこから党の戦術にとって生まれてくるいっさいの帰結を認めようとする場合、この党は、この作業をいっそうよく促進することができるのである。結局のところ、社会民主党はその実践において、つまり、その行動において、つねにそうしてきたのである〉。

〈ありとあらゆる場所で社会民主党の代表者たちが実際には議会活動、比例代表制、国民立法というような、すべて独裁とは矛盾するものをふまえて立っているような時代に、たとえばプロレタリアートの独裁という常套句に固執することに、なにか意味があるのか。この常套句は今日、あまりに古くさくなってしまっているので、それを現実と一致させるためには、独裁という言葉からその事実上の意味を剥奪して、これになんらかの薄められた意味をつけるよりほかに方法がない。社会民主党のすべての実践的活動が目ざしているのは、痙攣的な爆発を知らずに近代の社会秩序から一層高度の社会秩序への移行を可能にし保証するような状態と前提条件とを生み出すことなのである。より高度の文化の先駆者でありたいという意識こそが、社会民主党の信奉者たちにとってつねに新たな感激と激励の源泉をなすものなのであり、また、彼らが思考する社会的収奪の権利名義も、結局のところはこの意識のうちに存するのである〉。

〈ドイツ語には、特権的市民という概念からは区別される、社会の同権的市民という概念を指すに適切な言葉がない。…特権的市民及びこれとの関連事項のためにはブルジョアという外国語を使用するほうが、…まだしもよい〉。

〈社会民主党は、労働者をプロレタリアの社会的地位から市民のそれへと引き上げ [!]、そうすることによって市民層あるいは市民的存在を一般化するため [!]、わきめもふらず活動しているのである。社会民主党は、市民（ビュルガーリッヒな）社会にかえてプロレタリア社会を据えようとしているのではなく、資本主義社会秩序にかえて社会主義社会秩序を据えようとするのである〉。階級概念の解体！

民主主義を救ったベルンシュタインは、自由主義の救済にも向かう。

〈世界史的運動としての自由主義についていうならば、社会主義は単にその時間的順序からだけではなく、その精神的內容よりしても、自由主義の正統の相続人なのである〉。

〈民主主義とは自由主義の政治的形態であるにすぎない〉。

〈責任なくして自由はない。理論的には、われわれは人間の行動の自由について、思うがままにどのようにも考えることができよう。が、実際には、われわれは道德律の基礎としての行動の自由から

出発しなければならない。なぜなら、社会的道徳が可能なのは、この条件のもとでだけだからである。それと同じように、交易の時代にあつて、人口いく百万をかぞえる現代の国家では、労働能力をもつ人間すべての経済的自己責任を想定してかかるのでなければ、健全な社会生活などは不可能である）。

〈歴史的にみると、自由主義は、中世の束縛的な経済とそれに対応する法的諸制度とが社会の発展に課してきた桎梏を爆破するという任務を帯びていた。当初はそれがブルジョア自由主義としてはっきりとした姿をとったからといって、それが実際にはもっと広大な一般的社会原理を表現するものであり、そして、その完成とは社会主義であるということが、妨げられるわけではない）。

〈社会主義を組織的自由主義と名づけることもできよう。…社会主義が欲する組織をそれと表面的類似性をもつ封建的諸制度からとくに区別するのは、まさにその自由主義、すなわち、その民主的構成、その親しみやすさなのである）。

II.においてベルンシュタインは、地方自治の意義を強調している。

〈官僚制の孵化という点で民主主義が中央集権的絶対主義をしのぐのであつてはならないのであれば、民主主義は、広く分岐した自治のうえに築かれなければならない、そのうえ、すべての行政単位および成年国民には相応の経済的自己責任が認められていなければならない）。

〈近代社会の一般的发展が自治都市の任務を不断に高め、自治都市の自由を拡大する方向に進んでいること、地方自治体（コミューン）が社会的解放のテコとしてますます重要となりつつあることもまた、まったく疑いがなく、これまでにすでにいくども証明されてきたところである）。他方、〈自治都市による管理、いや、地方や県による管理の手にさえおえなくなるほどその規模が大きくなってしまった制度があまりに多すぎるので、それらの組織を変革するよりまえに中央行政機関の管理を廃止する〔マルクス＝ブルードンの計画〕というのが、不可能であることは、近代の発展によって示されてきた）。だから、「連邦主義」になる。

〈市町村やその他の自治体の自由獲得が突発的であればあるほど、それだけ、それらが行わなければならない実験はますます多く、ますます激しいものとなるうし、他面、労働者民主主義が自治という学校でよく訓練されていればいるほど、それだけいっそう、それらの行動は思慮に富み、实际的となるだろうし、一般の福祉に留意するものとなるう）。

〈社会主義を実現するための不可欠の前提条件とは、民主主義を闘いとること、民主主義の政治的、経済的機関をかずかず完成させることである）と述べて、ベルンシュタインは最後に、他階級との同盟＝“統一戦線”について書いている。

〈市民階級と呼ばれる階級は、その組織がはなはだ複雑な階級であつて、きわめて雑多な利害、またはきわめて異なりあう利害をもつ、さまざまな層からなっている。これらの諸層は、それらが一様に抑圧感をもつか、それとも一様に脅威感を持つかする場合にのみ、長期にわたって結束を保つのである。現在…その構成分子のすべてが一様に社会民主党による脅威を受けていると感じている）。

〈社会民主党自身は、非プロレタリア的な世界の全体に対する暴力革命を夢みているのではけつしてない。なるべく明瞭にこのことを言明し、なるべく明瞭にその根拠を説明すればするほど、右に述べた統一的な恐怖というものはますます後退するであろう。なぜなら、市民階級の多くの構成分子

は、別の側面からの圧迫を感じているのであって、労働者に対抗して戦線を張る道よりも、むしろ、この側面——それはその圧力を労働者階級のうえにも及ぼしている——に対抗して戦線を結成する道のほうを選ぶであろうし、後者よりもむしろ前者の同盟軍となるだろうからである〉。

以上がベルンシュタインの民主主義論に他ならない。

〈かつては民主主義は経済的自由を脅かす勢力の台頭を促すという古代ギリシア以来の議論が支配的であった〉（亀嶋前掲書）つまり、資本主義＝民主主義・自由主義（社会主義＝非民主主義）という今日のイデオロギー状況とは異なる状況下で、ベルンシュタインは自らの民主主義論を著した。そうであっても、その主張は、民主主義への社会主義の溶解と言わざるをえない。

ベルンシュタインにとって民主主義とは、一つの資本主義的国家形態ではなく、普遍的価値を有する。〈近代諸国民の政治的諸制度が民主化されればされるほど、政治的大破局の必然性と機会とはますます小さくなってゆく〉という命題を土台とするベルンシュタインの構想は、次のように要約できる。協同組合、労働組合、地方自治体などは民主主義の学校、いわば“解放区”であり、それを拡大することによって社会変革を目指す一種の“陣地戦”であった。

「市民階級との同盟」について言えば、革命前には成功しなかったし、革命時には反革命として現出したことは、周知のことである。

d.は、1921年版によれば、「Ⅰ.防衛問題、対外政策、植民地問題」「Ⅱ.農業問題」「Ⅲ.協同組合政策」「Ⅳ.自治体政策」の四つからなる。

Ⅰ.の防衛問題について、ベルンシュタインは次のように述べている。

〈「常備軍か民兵か」という問題は、最近、活発な討議の対象となってきた〉が、〈問いは、政府軍か国民軍か、というべきであろう〉。

〈人口中の圧倒的大部分が政治的意思を欠く、きわめて無知な農民で構成されているような国〔ロシア〕は、その隣国〔ドイツ〕にとりつねに危険な存在となりかねない〉。

〈——一般に攻防両面の備えをもつ防衛力の維持という点を重視するかぎり——軍の政治的地位の変更が不可欠なのであるが、それとならんで第一の問題は、民兵か否かという問題なのではなくて、兵役期間のどのような短縮が、諸隣国にくらべてドイツを不利におとし入れることなしに、目下のところ、そしてまた——段階を追って——今後可能であるかどうかという問題なのである〉。

〈労働者は国家、地方自治体などで権利をもつ選挙人であり、そうであることによって国民の共有財産の共有者でもあるし、その子弟は共同社会によって教育され、その健康は共同社会によって守られるし、その損害に対しては共同社会による保証が与えられるのであって、このような労働者は祖国を持つのである〉。

〈社会民主党は、階級的利害と国民的利害とをひとしく断固として護りぬくという任務にたえる力を示さなければならず、そうすることによって、指導政党ないしは指導階級たる能力を強化してゆかなければならないだろう〉。

続いて対外政策について、次のように述べる。

〈すでに今日、民主的な国家の社会主義者たちは好んでナショナリストを自称しているし、社会化

という表現だけに捉われたりすることなく、農地や土地などの国有化（ナツィオナリジールンク）ということ平然と口にしている）。

〈ドイツの側で、…問題が実際に国民の重大な利益にかかわるようなばあいには、国際主義は、外国の利害関係者たちの要求に対して気弱な譲歩を行う根拠ではありえない）。

そして、当時問題となっていた膠州湾の租借につて、次のように言う。

〈膠州湾の獲得が、この〔外国列強の中国政策への〕異議申立ての権利をドイツに保証し強化するための手段であるかぎり—そして、膠州湾の獲得がそれに貢献するであろうことは、ほとんど議論の余地がない—、…社会民主党がこれに原理的に反対すべきではない理由が、そこにある〉。

〈問題は、既成事実の積み上げによって中国がますますロシアへの従属の度を強めてゆくのを、ドイツが静観すべきであるか、それとも、ドイツが、事後の抗議だけに甘んじるのではなく、正常状態〔!〕のもとでもつねに中国での事態の形成にその影響力を行使できるような地位を確保すべきであるか、ということだけだった〉。まさに、帝国主義者の論理!!

〈対外政策上の諸問題での態度決定についてここで開陳された原則とは、結局のところ、これまで社会民主党の実践に見られた態度にかなり近いところにゆきつく〉。

また、植民地問題については、次のように述べている。

〈植民地獲得を頭から避難すべきものとみなす理由は、見当たらない〉。〈ここで決定的なのは、ことの当否なのではなく、その方法なのである。ヨーロッパ人による熱帯諸国の領有が生活面で現地民に損害を与えることには必ずしもならないのだし、また、これまでもそういう事態が広くみられたわけでもない。そのうえ、未開人領有の土地については、未開人の権利は限定されたものとしてしか認めるわけにはゆかない。ここでは、もっとも極端なばあい、いっそう高度の文化がいっそう高度の権利をもつのである。その土地の利用に関する歴史的権利名義〔!〕を与えているのは、土地の征服ではなくて、その経営なのである〉。

以上、確認すべきは、ベルンシュタインのナショナルリストティックな主張が、先に見た民主主義論の階級協調主義、いわゆる一国主義・先進国主義と整合的なものだということに他ならない。民主的帝国主義! 民主的植民地主義!

ベルンシュタインは、〈党は、少なくとも大部分の農民の関心を自党候補者の勝利に向けさせるようくふうしなければならない。小農大衆のあいだでこれを企てようとするには、結局のところ、すぐ近い将来に彼らの状態が改善される見通しをあたえ、彼らに直接の緩和をもたらすような措置を支持してゆくという方法があるだけである〉と述べ、カウツキーの『農業問題』（同年出版）を検討している。

いわく〈カウツキーの綱領に私は原理的にはまったく同意する〉。なぜなら、〈それはまるで民主主義的改良の諸原則〉だから。

III.では次のように言う。

〈社会民主党の任務は、少なくとも、農村労働者たちが、彼らなりのやりかたで協同組合という手段を利用できるような方法を提示することである…。そのための最重要な必要事項は、十分な土地と販売可能性の開拓とである。…この農村労働者協同組合に販売可能性を提供できるのは、都市の労働

者消費協同組合ということになる〉。

〈社会民主党の任務は、労働者の協同組合運動を邪魔する法律上の障害物を取払い、そして、ときとしてこの運動を促進するに適当な行政機関を合目的的に改革するため闘うことである〉。

IV.では、自治体政策が列記されている。

自治体収容権の拡大、治安警察の独立、自治体経営の整備、地区疫病組合の設立、階級選挙制度の廃止、等々。

最後にベルンシュタインは、次のようにしめくくった。

〈もし社会民主党が、実際に時代遅れになっている空語から自己を解放して、今日の自分の真の姿を、つまり、民主的・社会主義的改良政党であることを白日のもとに曝そうという勇気をもつならば、右のような人びと〔敵対者のなかで、政治的権利の面の変化の必要性を認識している人びと〕の影響力は今日よりもはるかに大きくなるであろう〉。

〈社会民主党がそのありのままの姿を白日の下に曝すべく決意を固めれば固めるほど、政治的改良を貫徹するための党の展望もますます良くなるであろう〉。

《終章について》

本章冒頭には、〈カントは偽善句（カント）に反論する〉との一文が添えられている。しかし、ベルンシュタインはカント哲学を推奨したわけではない。カントのような人物を望んだのであった。すなわち、〈伝承されてきた教説を一度は批判のふるいにかけて容赦なく精査するような人物、そして、その教説に見られる外見的唯物論が至高のイデオロギー、したがって最もひとを惑わせやすいイデオロギーとなると、理想を蔑視して物質的要因を発展の全能の力まで祭りあげたりするのは自己欺瞞にほかならないと説き、これが自己欺瞞にほかならないことは、そのイデオロギーの布告者自身の行為によって機会あるごとに暴露されてきたし、今後もまたされてゆくであろうと説くような人物〉である。

〈マルクス主義がいまなお引きずっているユートピア主義のある種の残滓を排除すること〉、これがベルンシュタインの課題に他ならない。そして彼は言う。

〈労働者の政治的民主主義のための闘いも、彼の産業民主主義のための闘いも、…〔その〕見通しは、その数が減少しつつある富裕者の手中に資本が集積されてゆくという支柱に依存するのでもなければ、この支柱をもその一部とする弁証法という足場全体に依存するのでもない。そうではなくて、それは、一般的な社会的進歩、とりわけ労働者階級自身の知的・道徳的・成熟と結びついた社会的富ないしは社会的生産力の成長に依存しているのである〉。

「暴力革命」や「プロレタリアート独裁」という偽善句（cant）を排除せよ！ 市民（国民）政党たれ！

以上が『諸前提』の全体である。ベルンシュタインの主張を貫いているのは、「有機的発展（進化）史観」であり、それは、諸力の対立によって発展がなされるのではなく、「諸力の協調」のなかから、ある要因が漸次的に成長して新しいものを作り出すという歴史観であった。一言で言えば、資本主義

社会のあらゆる領域で民主主義が成長し（＝階級対立の緩和）、社会主義社会へと転化するという考え方である。プロレタリアートの運動も、この流れに棹さすものでなければならない。²⁸

マルクス主義を発展学説と捉えたベルンシュタインは、自らをマルクス主義者と考えていた要であるが、ベルンシュタインの思想はマルクス主義の“修正”にとどまらず、それを否定するものである。

vi) ローザによる批判——『社会改良か革命か？』

ローザがいつどこでマルクス主義を習得したのかは、よくわからない。チューリヒに亡命し（1889年、ローザ18才）、翌年、チューリヒ大学に入学してから、その条件が形成されたと考えうる。1897年、ローザは博士号をえて、翌年5月、ドイツに移住して、SPDに入党。

ローザは、帝国議会選挙の応援活動のために、早速、ポーランド人の多いシュレーゲンに派遣された。ベルリンに帰った6月末に、彼女は、ベルンシュタイン批判論文の構想を立てている。この論文は、シェーンランクが編集する『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』（ライプツィヒ民衆新聞）に、1898年9月21日から28日まで連載された。

さらに翌年、ベルンシュタインの『諸前提』が出版されるや、これに対する批判を同紙の4月4日号～4月8日号に連載。4月末、二つの連載論文は、パンフレット『社会改良家、革命か？』として発行され、党内外から注目されることとなる。

〈彼女〔ローザ〕は権力そのものを求めて権力に興味をもっていたのではなかった。ドイツ社会民主党で出世することは、彼女が正しいと考え重要だと考える思想を普及させる一手段であった。…彼女が興味をもっていたのは、権力ではなく、影響力であった〉（ネトル前掲書）。

1898年9月末、『ゼクスイッシャー・アルバイターツァイトゥング』（ザクセン労働者新聞）を編集していたパルヴスとマルフレツスキの二人がザクセン邦政府から追放され、そのお鉢がローザに回ってくる。ローザはチャンスをつかんだかに見えたが、〈党内の共同責任と連帯感、アウトサイダーにたいするヒエラルヒーの相互自己防衛〉（同上）が壁となり、一ヶ月で辞任を余儀なくされた。

〈シェーンランクの死後、彼女は『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』紙の共同編集をひきうけ、もう一度“一員として属する”試みをした〔1901年10月〕。この試みもまた失敗におわっている。以来ローザ・ルクセンブルクは自分の性格の意味するところを自覚し、影響力を求めて権力を軽蔑するアウトサイダーとしてとどまった〉（同上）。

上記のことは、ローザの論文を評価する際に、考慮しなければならない点であろう。単純に言えば、反対派的論法になりがちだ、ということである。

『社会改良か、革命か？』の内容紹介に移ろう。訳文は『ローザ・ルクセンブルク選集』による。パンフレット化に際して書かれたとおぼしき「まえがき」で、ローザは次のように述べている。

〈社会改良のための日常闘争、現在の体制のうえでの労働者大衆の状態改善や民主的諸制度のための日常闘争は、社会民主党にとって、かえってプロレタリアートの階級闘争を導き、政治権力の奪取

²⁸ 「発展」も「進化」もevolution。ベルンシュタインは自ら「有機的発展史観」を唱えたというが、その出処は見つからなかった。

と賃金制度の廃絶という終局の目的にむかって努力するための唯一の道 [NB] をなす。社会改良のための闘争は社会民主党の手段であり社会革命はその目的であるから、社会民主党にとって社会改良と社会革命は不可分の関係にあるのだ。

労働運動におけるこの二つの要因を対立させる見解を、われわれはまず…ベルンシュタインの理論のなかにみいだす。…この理論のすべては実際のところ、社会民主党の終局の目的である社会変革を放棄し、社会改良を階級闘争の一つの手段からその目的へと転じてしまおうという提案以外のなにもないのでない。

〈社会主義の終局の目的は、社会民主党の運動をブルジョア民主主義やブルジョア急進主義から区別し、労働運動全体を資本主義制度の救済のための無意味なつぎはぎ細工から、この制度を廃止することを目的とした、この制度に対立する階級闘争へと変化させるただ一つの、決定的な要因である。だからベルンシュタインが主張する意味での「社会改良か革命か」という問題は、社会民主党にとってはとりもなおさず、存在か無か、と問われていることである。ベルンシュタインおよびその一派との論争においては、あれこれの闘争方法、あれこれの戦術が問題になっているのではなく、社会民主主義運動の全存在が問題になっているのである〉。

〈社会改良と革命についての問題、終局の目的と運動についての問題は、他の側面からみれば、労働運動の性格がプチブルジョア的かプロレタリア的かという問題である〉。

ここには結論めいたものが示されており、そのポイントは、社会民主党にとって社会改良のための闘争は手段であり（社会）革命は目的であるという命題にある。とりあえずは、ローザがどのようにベルンシュタインを批判したかを見ていく。²⁹

第1部（1898年9月連載分）は、「Ⅰ 日和見主義の方法」「Ⅱ 資本主義の適応」「Ⅲ 社会改良による社会主義の導入」「Ⅳ 関税政策と軍国主義」「Ⅴ 修正主義の実践的帰結と一般的性格」から成っている。

Iにおいてローザは、社会主義理論の根本思想は〈資本主義制度はその固有の矛盾によって支離滅裂となり、全くどうにもならなくなるような時期をおのずからつくりだしていくであろうという前提のうえに立っている〉が、その時期が恐慌という形をとるかどうかは、〈非本質的で副次的なことである〉と前置きした上で、次のように述べた。

〈社会主義の科学的基礎づけは資本主義発展の三つの結果に基づくものである。つまりなによりもまず [①]、資本主義の死滅を不可避的な結果たらしめる資本主義経済の増大する無政府性に、第二 [②] には未来の社会制度の実際的な萌芽をつくり出す生産過程の社会化の進展に、第三 [③] には迫りくる革命の積極的要因をなす成長しつつある組織と階級意識にもとづくものである〉。

しかるにベルンシュタインは、①を否定するがために、〈社会主義は客観的必然的存在たることをやめる〉。また、カルテル、信用制度などを資本主義の「適応手段」とすることによって、②も否定する。かくてベルンシュタインに残るのは③の階級意識だけであるが、「物質的社会的発展の過程による基礎づけ」を欠く階級意識は、「純粋な理想」でしかない。〈社会主義的変革は一つの空想になっ

²⁹ ついでに述べておくと、このローザ論文を読み返してみると、全国委員会時代の民主主義闘争論は、かなりローザ的であると思った。

てしまう〉。

II でローザは、ベルンシュタインが崩壊論を否定した論拠の否定に移る。まず「適応手段」の一つとされた信用について。

〈信用は資本主義経済において多様な機能をもっているが、そのもっとも重要なものは、…生産の拡大能力を増大させ、交換を媒介し容易にすることにある。…生産の拡大能力、拡大傾向と、限られた消費能力とのあいだの矛盾から恐慌が発生するとき、…信用こそまさにこの矛盾を機会あるごとにしばしば爆発へと持っていく特別の媒介をなす〉。

〈信用は生産を最高度に緊張させ、逆に交換をわずかの原因で麻痺させ、このことによって生産様式と交換様式のあいだの矛盾を増大させる。また信用は生産を所有から分離させることにより、また生産における資本を社会的なものに変化させることにより、また利潤の一部分を資本利子の形態に、したがって純然たる財産権利証書に変化させることにより、生産様式と獲得様式のあいだの矛盾を増大させる。また信用は多くの小資本家を収用することをつうじて、巨大な生産力を少数者の手に集中せしめることにより、所有関係と生産関係のあいだの矛盾を増大させる。また信用は生産に対する国家の干渉（株式会社）を必然たらしめることにより、生産の社会的性格と資本主義的私的所有とのあいだの矛盾を増大させる。

要するに信用は、資本主義世界のあらゆる根本的な矛盾を再生産し、それを最高度に激化させ、歩調を速め、その歩調により矛盾はそれ自身の絶滅——すなわち崩壊——の一路を急ぐ。…それは適応手段ではなくて最も革命的な作用を持った破壊手段である〉。

もう一つの「適応手段」とされた企業家連合（カルテル・トラストなど）について。

① 〈企業家カルテルによって資本主義の無政府性を抑制することは、カルテルやトラストなどが一般的なまた支配的な生産形態になるような…状態においてのみ問題になりうることだろう。ところが、まさに、こういう状態はカルテルの性格自体によって実現不可能である。…この組織は一つの産業無門において、他の産業部門の犠（いけにえ）のうえにたつてのみ利潤率を高めることができるのであり、まさにそのゆえにこの組織は全般にひろまることはありえない〉。

② 〈カルテルは普通次のような方法によって、利潤率の顕著な増大を国内市場において得ようとつとめる。すなわち、追加的な資本部分を国内の需要のために使用しえない場合には、…その商品を国外において、国内におけるよりずっと低い価格で売却するという方法によって。この結果、国外における競争の激化がおこり世界市場において無政府性がひろがる〉。

③ 〈世界市場が最高度の発達をとげ、相互に対立する諸国によって開拓されつくす——おそかれはやかれこのような時期がやってくることは否定できない——ことによって、販売市場が縮小しはじめると、部分的に遊休化を強いられた資本が私的資本へと逆転するほどになる。…そうなると諸組織はシャボン玉のように破裂し、強められたかたちでふたたび自由競争に席をゆずらねばならない〉。

④ 〈カルテルはその随伴現象として一般的な関税競争をとめない、そこでおのおのの資本主義国家のあいだの対立を極度にたかめ、かくて資本主義世界経済の国際的性格と資本主義国家の民族的性格との間の矛盾を増大させる。さらにこれに加えて、生産の集中、技術の高度化などにあたえる、直接的で、いたって革命的なカルテルの影響力ということをあげうる〉。

Ⓔ 〈かくて、資本主義経済におよぼす究極的な作用という点においては、カルテルやトラストは矛盾を消滅させる「適応手段」ではまったくないばかりでなく、まさにそれは、資本主義に固有の無政府性を拡大させ、それに内在する矛盾を表面化させ、その没落をはやめるために、資本主義みずからが作りだした手段の一つなのだ〉。

続けてローザは、ユニークな恐慌論を開陳している。彼女は〈1873年以来の20年間に、われわれが一度も全般的な商業恐慌を経験していないということは、どのような原因によるのだろうか〉と問い、次のように述べた。

〈従来のすべての国際的な規模の大恐慌…は資本主義経済の老衰を表現するものではまったくなく、その幼年期の表現にすぎなかった〉。〈今まで商業恐慌の原因となったものは、いつも資本主義経済の領域の突然の拡大であり、その活動範囲の狭隘化やその衰退ではなかった。このような国際的な恐慌が、丁度10年ごとにくり返されるということは、それ自体、全く外面的偶然的な現象なのだ〉。

〈エンゲルスが『反デューリング論』であたえ、マルクスが『資本論』の第1巻と第3巻であたえた、恐慌の成立に関する図式は、…世界市場がすでに与えられた現実として前提されているような、完全に発達した資本主義経済にあてはまるものだ。そのときはじめて、マルクスの分析によって認められるように、恐慌は、生産関係および市場関係における突発的な混乱という外的な原因なしに、生産過程および交換過程の内部の固有な運動から、あの機械的な方法でくり返されることになる。ここで現在の経済の状態を考えてみるならば、…マルクスの図式のしめす恐慌の周期性を前提とするような、完全な資本主義的成熟の段階に、われわれはいまだ足をふみいれてはいない…。世界市場はいまだなお完成の途上にある〉。

〈われわれは、恐慌がもはや資本主義の成長にともなうものではないが、その没落にともなうものでもないという段階にいる〉。

〈ひとたび世界市場が一般に完成され、もはやいかなる急激な膨張によってもこれ以上に拡大さえなくなり、それと同時に労働の生産性が絶え間なく増大すると、おそかれはやかれ、生産諸力と市場の限界との衝突がはじまる〉。つまり、〈真の資本主義的な循環性恐慌がひきおこされる〉。〈われわれをこのような時期に接近させ、世界市場をすみやかに完成させ、またそれをすみやかにゆきづまらせるのに有効な特別のものがあるとすれば、それこそまさに、ベルンシュタインが資本主義の「適応手段」としてたよりにしている諸現象、すなわち信用制度と企業家組織である〉。

この部分は、〈マルクスにとっては、恐慌図式はなんら未来像ではなくて、現在像だった〉（『諸前提』）というベルンシュタインの反論を意識してか、1908年の第2版においては大幅に削除された。とはいえ、ここにはローザのいわゆる世界資本主義論的視覚（世界市場完成＝崩壊）が示されている。

この章の最後にローザは、崩壊論否定のもう一つの論拠たる集中化論の問題に言及した。

「資本主義的中小経営の運動の法則」についてである。

〈資本主義的発展の一般的な過程において、小資本は技術革命の先駆者の役割をはたす。…旧来のすでに確立している、しっかり根をおろした部門の新しい生産方法に関するばあいと、同時に大資本によってまだまったく浸透されていない新たな生産部門の創出に関するばあいに…。資本主義的中小

経営の歴史は直線的に一歩一歩その没落の下降線をたどるものだという考えは、まったくまちがっている。…資本主義的な中間層は労働者階級とまったく同じように、一つは中間層を上昇させようとする、一つはそれを没落させようとする二つの対立した傾向のもとにある。没落させる傾向とは、あるばあいには生産規模のたえざる上昇であり、それは周期的に中小資本の能力をこえて上昇し、中小資本を再三にわたり競争の場から追い出してしまう。上昇させようとする傾向とは、一つは現存する資本の価値の周期的な低落であり、これは資本の規模を、必要最小限どの資本の価値にむかって、一定期間にわたりたえず縮小させる。それと一つは資本主義生産の新しい領域への侵入である。中小経営の大資本との戦いは、弱い側の部隊がそのまま量的に次第に減少していくといった…ものではなく、むしろ一度なぎ倒された小資本が再三にわたってすぐさま勢いをもり返し、あらためて大産業の大鎌によってなぎ倒されていくという、小資本の周期的なぎ倒しと考えられるべきである。…この二つの傾向のうち、中間層を没落させようとする傾向が――反対に労働者階級は発展するが――勝利をしめる。しかしこの傾向は、必ずしも中小経営の数のうえでの絶対的減少となってあらわれる必要はなく、第一に旧来の部門で経営が成り立っていくのに必要な資本の最小限度が次第に大きくなっていくことのなかに、第二に、小資本が新しい部門の搾取を自分自身で享受する期間がますます短くなることのなかに現れる）。

〈小資本が確かに技術的進歩の先頭をきるものであり、技術的進歩が資本主義経済の生命の鼓動であるとする、小資本は明らかに資本主義の発展に不可分の随伴現象をなすものだ。この小資本は資本主義の発展がとまと共に消滅していくといえよう。…抽象経営の漸次的な没落はベルンシュタインが考えたように資本主義の革命的発展の過程を意味するのではなく、まったくその逆に資本主義の停滞、睡りこみを意味するものであろう。「利潤率、すなわち資本増殖率は、自立して群生するすべての新たな小資本にとってはなによりも重要である。そして、資本形成がもっぱら僅かな少数の既成大資本… [ママ] の手に帰するや否や、総じて生産の活気は消滅するであろう。生産は睡りこむであろう」 [資本論第3巻] 〉。

以上に見られるように、ローザはマルクス主義経済理論の単なる防衛にとどまらず、崩壊論の理論的精緻化、社会主義の必然性についての理論的深化に勢力を傾けた。このことのローザにとっての重要性は、後に明らかになる。

Ⅲでローザは、「社会主義社会の実現へとむかう道」の説明において、「ベルンシュタインの意味するところをもっと詳細に明らかにしようと試みた」コンラート・シュミット（1863～1932）を主に批判の対象にしている。批判の矛先は、労働組合、社会改良、国家の民主化による「社会主義の漸次的導入」という理論・思想に向けられた。

労働組合について。〈労働組合…のもっとも重要な機能は…、資本主義的な賃金法則の実現のための、すなわち、そのときどきの価格どおりに労働力の販売を実現するための、労働者の側よりする手段であるということにある。…一面では生産の状態によって規定された労働力にたいする需要と、多面では中間層のプロレタリア化と労働者階級の自然増によってつくりだされる労働力の供給とは、労働組合の影響のおよぶ範囲外のことである。したがって労働組合は賃金法則を打破することはできない。…搾取自体を漸進的に廃止していくことはまったくできない〉。〈シュミットは…労働組合組

織が生産の調整そのものにしだいに大きな影響力を持ちうるようになる将来に期待をかけている〉。

しかしながら、「生産の調整」を、「生産過程の技術的側面への干渉」という意味にとれば、その直接の影響を受けて状態が悪化する労働者は技術革新に反対することになる。〈この場合、労働組合は労働者階級全体や労働者階級の解放のために行動しているのではなく…反対に、反動的な意味をもった行動をしているのだ〉。

また、「生産の調整」を「生産量そのものの決定」という意味にとれば、〈それは根本において、労働と資本の闘争ではまったくなく、消費社会にたいする資本と労働力の統一闘争であると考えられる。社会的な意義からするとそれは反動的な企図であり、むしろ階級闘争の完全な対立物を意味するものである〉。

〈労働組合の活動は、賃金闘争と労働時間の短縮の問題に、すなわち、たんに資本主義の収奪を市場関係に応じて抑制するということだけに限定される〉。〈労働組合運動は無制限に拡大していくものではない〉。

労働組合については、後でもう一度言及する。

社会改良について。〈シュミットは…社会改良に期待をかけて、「それは労働組合のような労働者組織と提携して、社会改良のみが労働力を活用しうるような条件を、資本家階級に強制する」とのべている。…シュミットは、かれが国家による労働者保護についてのべたところではどこでも、「社会的統制」ということに言及しており、またいともたやすくこの国家を社会とあらためてしまったうえで、さらに敢然として「すなわち労働者階級の状態の向上」とつけ加えるのである。そしてこのような操作をつうじて、…労働者保護立法がドイツ・プロレタリアートの社会主義的な過渡的方策ということにされてしまう。

ここでのごまかしは明白である。現在の国家は「労働者階級の状態の向上」を意味する「社会」ではまったくなく資本主義社会の代表者、すなわち階級国家なのである。したがってまた、かれのふりまわす社会改良とは、「社会的統制」を、すなわち自由な労働集団が自分自身の労働過程にたいして統制を実行することではなく、資本の階級組織が資本の生産過程にたいして統制をおこなうことなのだ。したがってまた、…資本の利益ということが、社会改良の自然的限界なのだ〉。

〈生産手段をいっきよに収奪することは不可能にみえることから、…シュミットは漸次的収奪の理論をととのえたのであった。このためにかれは、必要な前提として、所有権の「上級所有権」と「用益権」への分割を考え、前者はこれを「社会」に帰せしめ、それがしだいに拡大されていくことをのぞみ、後者は資本家の手にありながら、しだいにたんなる企業の管理ということに退化していくのをのぞむのである〉。

〈所有権に内在する異なった権能の分割化は、封建的自然経済の社会に特徴的なことである。…商品生産の移行、および生産過程へ関与する人々の間のすべての人的紐帯にともなって、逆に人と物との関係、すなわち私的所有権が確立した。…生産過程がますます社会化されるにつれて、分配過程はますます純粋な交換にもとづくようになり、資本主義的私的所有はいよいよ不可侵にして排他的なものになっていき、資本の所有権は自分自身の労働の成果にたいする権利から、他人の労働にたいするたんなる取得権へと、ますます変化していった。資本家自身が直接に工場を経営するあいだは、分配

はなおある程度まで生産過程へ個人的に関与することと結びつけるられている。工場主の経営指導が必要なくなるのに応じて、そうしてこれはこれは株式会社においてはまったく必要なくなるが、そうなるにしたがって、資本の所有権は分配における請求権として、生産にたいする個人的関係から完全に分離し、そのもっとも純粋な濃縮された形態となって現れる〉。

〈「所有者からたんなる管理者へ」というような…シュミットが示した資本家の発展の歴史的図式は、それゆえ、逆に所有者であり管理者であるものをたんなる所有者へと導いていくという現実の発展を倒立させたものとして現れる。…かれの歴史的図式は、経済的には、近代株式会社から工場制手工業へ、あるいはまったく手工業仕事場へとさかのぼっていくのと同様に、法的には、それは資本主義世界を封建的自然経済の卵の殻のなかへおしもどそうとする〉。

〈労働者保護、株式会社の監督など、現在「社会的統制」として機能しているものは、…資本主義的所有権の制限としてではなく、その保障としての作用をなしている。あるいはまた経済的にいうなら、それは資本主義的搾取にたいする干渉をなすものではなく、搾取の基準設定でありその体系化である〉。

IVでは、残った国家の民主化、「国家の社会への発展」が批判される。

〈資本主義の発展自体が、国家の活動範囲をおしひろげ、国家にたえず新しい機能をわりあて、とくに経済生活に関しては資本主義の発展にたいする国家の干渉と統制を、たえずますます必要なものとすることによって、国家の性格を根本的に変えていく。その限りでは、将来における国家と社会の融合、いわば国家の機能の社会への復帰がしだいに準備される〉。

〈しかしながら他面において、このおなじ資本主義の発展によって国家の本質に別の変化が生ずる。…国家は社会発展のために一般の利益についてのさまざまな機能を引き受けるとしても、それはただ、これらの利益と社会発展とが支配階級の利益に一致するからであり、その限りにおいてである。…しかしこの調和は資本主義の発展の一定の時点までしか続かない。その発展がある一定の高さに達すると、階級としてのブルジョアジーの利益と経済的進歩の利益は資本主義的な意味においてもなお相互に離反しはじめる。…このような段階はすでに出現しはじめた…。そしてこのことは、現在の社会生活での二つのもっとも重要な現象のなかに、すなわち関税政策と軍国主義のなかに表現されている。関税政策も軍国主義も同様に、この二つは資本主義の歴史において必要不可欠な役割を、またその限りで進歩的で革命的な役割を果たしてきた。…しかし現在では事態は異なっている〉。

〈関税は、これから発展しようとしている資本主義生産が、高度に発展した資本主義生産に対抗するためにもちいる保護手段としては、もはや現在では役に立たなくなっており、一つの国の資本家グループが他の国の資本家グループに対抗するための闘争手段として役立っている。そのうえ関税は国内市場を形成し獲得するための、産業の保護手段としてはもはや必要ない。がしかし、産業のカルテル化のための、すなわち資本主義的生産者の消費社会との闘争のための不可欠の手段として必要である。最後に、現在の関税政策の特殊な性格をもっともはっきりと特徴づけるのは、現在いつでも関税政策のなかで決定的役割を果たしているのは、けっして工業ではなく農業であるという事実、すなわち、関税政策は実際には、封建的利益を資本主義的な型に鑄なおし、それを表明する手段になってしまっているという事実である〉。

〈国内の分裂や自然経済的な閉鎖性を克服しなければならない国々が存在していたあいだは、軍国主義はなお資本主義的な意味での革命的役割を演じた…。世界政策が切迫した闘争の舞台になると、資本主義のために新しい国々の門戸を開くことが問題であるよりも、世界の他の部分に伝わって行って、そこで突如として爆発する、ヨーロッパ諸国間のすでに存在している諸対立が問題となる。…かれら〔資本家階級〕にとってはこんにち軍国主義は三点において不可欠のものとなった。第一に、他の諸民族グループに対抗して競合している「民族的」諸利益のための闘争手段として、第二に、金融資本にとっての、また同様に産業資本にとってのもっとも重要な投資方法として。第三に、国内において労働者大衆に対する階級支配の道具として。しかもこれらすべての利益は、資本主義的生産方法の進歩自体と一致するところがまったくない。…軍国主義は資本主義の発展のひとつの原動力ではなくなり、資本主義の疾病となった〉。

かくしてローザは、以下のように総括する。

〈社会発展と支配階級の利益との分裂にさいしては、国家は後者の味方となる。ブルジョアジーと同様に国家は社会発展と対立し、かくしてますます全社会の代表者としての性格を失い、それにとまなつてますます純粹の階級国家となっていく。あるいはもっと正確にいうと、この国家の両面の性格は互に分裂して、国家の本質の内部の矛盾へと先鋭化する。しかもこのような矛盾は日ごとに鋭さをます。すなわち、一方では社会生活への干渉やそれへの「統制」といった一般的性格をもった国家の機能は増大する。しかし他方では、国家の階級的な性格は国家をますますその活動の重点と権力手段を、ブルジョアジーの階級利益にとってのみ有益であり、社会にとっては消極的な意味しかもたない領域に、すなわち軍国主義、関税政策、植民地政策などの領域に移すことを余儀なくさせる。ついでこのことによって、さらに国家による「社会的統制」もまたますます階級的な性格によって浸透され支配される。…

国家の本質のこのような変化は民主主義の完成と矛盾するものではなく、むしろ完全に一致する。…

たしかに形式の面からすると、議会制度は全社会の利益を国家機構のなかに表現するのに役立つものである。しかしながら他方において、ともあれ議会制度が表現するのは…資本主義的利益が支配的な社会であるに過ぎない。形式の面からすると民主主義的な制度も、内容からすると支配的な階級利害の道具となる。このことは、民主主義がその階級的な性格を否定し、現実の民衆の利益のために変化するような傾向をもつやいなや、民主主義的な形式そのものが、ブルジョアジーとその国家的代表によって犠牲に供せられるという事実のなかに、具体的な姿をとって現れている〉。

〈生産過程はますます社会化され、生産過程にたいする国家の干渉ないし統制はますます拡大される。しかし同時に私的所有は、ますます他人の労働の赤裸々な資本主義的搾取の形態となり、また国家の統制はますます排他的な階級利益によって浸透される。かくして、資本主義的政治機構である国家と資本主義の法的機構をなす所有関係は、事態の発展とともにますます資本主義的となり、ますます社会主義的ではなくなっていくことによって、社会主義の漸次的導入の理論に、二つの克服しがたい難点を提起するのである〉。

〈資本主義社会の生産関係が社会主義的なものにちかづけばちかづくほど、資本主義社会の政治的

また法的な諸関係は、その反対に、資本主義社会と社会主義社会のあいだにますます高い障壁をきづきあげる。この障壁は…ただ革命の鉄槌によってのみ、すなわち、プロレタリアートによる政治権力の奪取によってのみ破壊されうる）。

以上のように、ベルンシュタインの経済理論と政治理論とを批判したローザは、Vで以下のように結論づけた。

〈労働組合、社会改良や政治制度の民主化のための闘いなど、これらはまた、従来、社会民主党の党活動の形式的内容をなしているものだ。…従来の見解では、労働組合の闘争と政治闘争との意義は、社会主義革命の主体的要因であるプロレタリアートを革命の遂行にむかって準備するという点にあり、ベルンシュタインの見解では、その闘争の意義は、それが資本主義の搾取自体をしないで制限し、資本主義社会からますます資本主義的性格を奪い取って社会主義的性格を打刻するという、ひとことでは、社会主義を客観的に導入するものだという点にある。…党内の通常の見解では、労働組合の闘争と政治闘争とをつうじてプロレタリアートは、自己の状態をこれらの闘争によって根本的に変革することは不可能であり、政治権力の終局的な奪取が不可避であることを確信するにいたるとされる。ベルンシュタインの見解では、単なる労働組合の闘争と政治闘争によって社会主義制度を導入するために、政治権力の奪取が不可能であることを前提として議論がおこなわれることになる〉。

〈労働組合の闘争と政治闘争との社会主義的な意義は、これらの闘争がプロレタリアートの認識や意識を社会化し、プロレタリアートを階級として組織する点にある〉。

〈社会主義は労働者階級の日常の闘いから自然に、いかなる条件のもとでも生まれでてくるものでは決してない。それはただ、資本主義経済のますます先鋭化する矛盾と、社会変革によってその矛盾を止揚することが不可欠であることを労働者階級が認識することとから生まれでるものだ〉。

〈この点が結局、修正主義の核心であり、また社会民主党の従来からの通例の見解とことなる点なのだが、修正主義の理論は、その矛盾自体の必然的な発展によってそれを止揚することを基本としていない。…それは資本主義の矛盾が完全に成熟し、革命的な変動によってそれが頂点にまで高められることをのぞまないで、矛盾の頂点がうちくだかれ、鈍化されることをのぞむ〉。

〈通例の社会民主党の戦術は、資本主義の矛盾が最後の頂点まで発展することを、またそこではじめてその変革がおこることを、じっと待っているということではない。逆に、われわれは、ひとたび認識された発展の方向をたのみとしているだけであるが、ただそのばあい、政治闘争においてその結論を徹底的におしすすめるのだ。結局ここにすべての革命的戦術の本質がある〉。

〈ベルンシュタインは自己の戦術をたてるばあい、資本主義の矛盾のいっそうの発展や激化にではなく、その緩和をたのみとする。…現在の社会のすべての矛盾は資本主義的生産様式の単純な結果である。この生産様式がいままですすんできた方向にむかってさらに発展することを前提にすれば、その発展と不可分のうちに、この発展のあらゆる結果もまたさらに発展していくにちがいないし、矛盾は緩和せずに先鋭化するにちがいない。それゆえ、矛盾が緩和するというばあいには、逆に、資本主義的生産様式自体の発展が押しとどめられるということを前提にしているのである。ひとことで言うならば、資本主義的發展の停滞ということ、これがベルンシュタイン理論の最も一般的な前提なのだ。

しかしこのことによって、ベルンシュタインの理論はおのずから二つの方向にむかうことになる。すなわちまず第一に、すでに明らかなように資本主義の発展が停滞してはそれを社会主義革命へと導いていくことはできないのだから、ベルンシュタインの理論は社会主義の終局の目的について自分自身のもっている空想的な性格を暴露してしまう。そしてこれは、この理論の実践的帰結についてのわれわれの説明を確証するものである。第二に、この理論は事実上完成しつつある急速な資本主義の発展についての自分自身の反動的な性格を暴露してしまう〉。

〈この〔「適用」の〕理論は、論究の対象とされる経済生活の諸現象を、資本主義の発展全体と有機的に結びつけて、全経済機構との関連のうちに理解しようとせず、動かなくなった機械の断片的な部分のように、このような関連からきり離された独自の存在として理解する〉。

〈信用は貨幣や商品また資本と同様に資本主義発展の一定の段階における経済の有機的な部分であり、この段階においては、他のものとおなじく、まったく資本主義の機構に欠くことのできない媒介体であるが、同時に、その内在的矛盾を激化させる点からいって破壊装置でもあるのだ。

まったく同様のことが、カルテルや完成された交通手段についてもいいうる〉。

〈ベルンシュタインによると、恐慌はたんに経済機構の混乱なのであって、恐慌がおこらなければ経済機構は順調に機能していくことができることはあきらかだとされる。しかしながら現実には恐慌は本来の意味での「混乱」ではない。むしろ資本主義経済が全体としてそれなしにはまったくすまずことのできない混乱なのだ〉。

〈資本主義経済全体にとって恐慌そのものよりさらに危険なことは、むしろ資本主義生産が「混乱なしに」進展していくことである。すなわちそれは、生産と交換の矛盾からではなく、労働の生産性の発展そのものからもたらされた利潤率の不断の低下ということである。このことは、すべての中小資本の生産を不可能にし、そこで資本投下の新たな形成と進展とを制約するという、きわめて危険な傾向をもつものである。このおなじ過程からもたらされる他の結果としての恐慌こそ、資本を周期的の価値低下させ、生産手段の価格をきり下げ、資本の一部を遊休化させることなどによって、同時に利潤の上昇をもたらし、こうして生産における新たな投資とそれにとまなう新たな進展の領域をつくりだすものだ。かくして恐慌は、資本主義発展の焰をくり返しかき立て燃えあがらせるための手段として現れる〉。

「適応理論」は、「経済生活の事実を競争の法則のためにゆがんだかたちでしか認識できない、個々の資本家の観点」に似かよっている。〈個々の資本家は事実上、なによりもまず、経済全体のなかの有機的な部分をひとつの全体として、またそれ自身で独立したものとしてみるのであり、さらになお、それがかれら個々の資本家にどんな影響をおよぼすかという側面からのみ、それゆえ、たんなる「混乱」ないしたんなる「適応手段」としてみるのである〉。

〈ベルンシュタインの適応理論は、個々の資本家の思考方法を理論的に普遍化する以外のなにものでもない。しかし理論的表現をとったこの思考方法は、ブルジョア俗流経済学の本質的な点であり特徴的な点である以外のなんであろうか〉。

第1部は、次の文をもって結ばれている。

〈修正主義の理論は、墮落した資本主義の理論によって俗流経済学的に基礎付けられた、墮落した

社会主義の理論である〉。

いわゆる階級意識論については、後に改めて検討する。

『社会改良家、革命か?』の第2部（1899年4月連載分）は、「Ⅰ 経済的發展と社会主義」「Ⅱ 労働組合、協同組合、および政治的民主主義」「Ⅲ 政治権力の奪取」「Ⅳ 崩壊」「Ⅴ 日和見主義の理論と実践」の5章から成っている。

Ⅰは、次のように始まる。

〈プロレタリアートの階級闘争が発展していくなかで獲得された最大の成果は、社会主義実現のための端緒が資本主義社会の経済的諸関係のうちにみいだされたことである。これによって社会主義は、一千年このかた人類の念頭にうかんでいた一つの「理想」から、歴史的必然へと転化した〉。

上記の命題を確認したローザは、まず、ベルンシュタインの株式会社統計の利用の仕方を批判した。これは追加された論点である。ベルンシュタインは、株主数の増加をもって、資本家階級は減少しているのではなく増大している証拠だとした。これに対してローザは、以下のように批判している。

〈株式制度がさらに広汎に普及していくとは、…資本主義的な形態で生産の社会化が進展していることを、大規模生産のみでなく中規模生産や小規模生産にまでも社会化が進展していることを意味する〉。

〈株式会社の創立という経済的な現象の本質は…一面では、多くの小額の貨幣財産を一つの生産資本に結合するということにあり、多面では、資本の所有から生産を分離することにある。したがって、あくまでも資本主義の基礎のうえでの、資本家的生産様式の二重の意味での勝利ということがその本質である〉。

〈ベルンシュタインによって引用された統計数字は、…現在では、一つの資本主義的企業は以前のように、一人の資本所有者に対応しているのではなく、その数をいよいよ増大させつつある資本所有者の全体数に対応していることを、またかくて経済的意味の「資本家」はもはや個人のことではなく、現代の産業資本家は数百、数千の個人より構成される集団であることを、また「資本家」というカテゴリーが資本主義経済の枠のなかにおいてすら社会的になったこと、社会されたことを意味する〉。

〈ベルンシュタインは資本家の概念を生産関係から所有関係に移動させ、「企業家についてのかわりに人間についてかたる」…ことによって、また社会主義の問題を生産の分野から財産関係の分野に、資本と労働の関係から貧富の関係に移動させる〉。

またベルンシュタインは、工業労働者の絶対数が多くないことを論拠に、社会主義は期待できなとした。

〈その論証の根底には、社会的努力の結果を決定するのは逃走するものの数的なまた物理的な勢力関係、したがってたんなる暴力という要素だという理論が存在していることになる〉。

それは、「もっと粗雑なブランキ主義的な誤謬」ではないか（方向は逆だが）。

Ⅰの後半は、経済理論にあてられている。

〈社会民主党はその終局の目的の根拠を、…経済的な必然性にまたその必然性の洞察にもとめる。それは大衆による資本主義の廃止をもたらし、また、まず資本主義の無政府性のうちにあらわれてくるものである〉。

しかるにベルンシュタインは、「きわめて深刻な無政府性は否定」し、「ちょっとした程度の無政府性の存在」を認めるにすぎない。

〈ベルンシュタインが、同時に商品生産を維持しながら、なお、わずかの無政府性をしだいに秩序と調和のうちに解消せしめようとのぞむと、交換様式を生産様式から独立したものと考えることによって、かれはふたたびブルジョア的な俗流経済学の根本的誤謬におちこんでしまう〉。

〈ベルンシュタインはマルクスの労働価値法則はたんなる抽象であると説明し〉た。〈ベルンシュタインはそこで、マルクスの抽象は創作なのではなくて発見なのだということを、それはマルクスの頭脳に存在するのではなく商品経済のうちに存在するものだということを、また非実在的な存在をあつかうのではなく現実の社会的存在をあつかうものであること、まったく現実的な存在をとりあつかうものなのでマルクスの抽象は裁たしたり、槌でうちのばされたり、計量されたり、刻印されたりするほどのものだということを、すっかり忘れてしまったのだ。マルクスによって発見された抽象的人間労働はその展開された形態では、貨幣にほかならない〉。

〈商品と商品交換の本質にたいする理解なしには、全資本主義経済とその諸関連とは秘密のままにとどまらねばならぬ〉。〈すべての資本主義的現象のまさにもっとも重大な秘密をマルクスにあばいてみせ [た] …魔法の鍵は…資本主義経済をひとつの歴史的現象として理解すること以外の何物でもない。…マルクスの価値学説や貨幣の分析の、その資本の理論やその利潤率についての学説の、隠してその経済学の全体系によこたわる秘密の鍵は、資本主義経済のかと的性格、その崩壊ということだ。したがってまた——これは他の一面にすぎないが——それは社会主義の終局の目的ということである〉。

またベルンシュタインは、「マルクスの壮大な著作全体をつらぬく」「二元論」を批判した。すなわち「科学的研究」と「空想主義」とが並存している、と。これに対してローザは、次のように反駁した。

〈マルクスの「二元論」は、…社会主義の未来と資本主義の現在、資本と労働、ブルジョアジーとプロレタリアートという二元論にほかならない。それはブルジョア社会のなかに存在する二元論の、すなわちブルジョア社会の階級対立の、みごとな科学的反映なのだ〉。

〈「一元論」、すなわちベルンシュタインの統一性とは、永遠化された資本主義制度の統一性、つまり一定不変のブルジョア社会に人類発展の究極の到達点をみんながために、社会主義の終局の目的を放棄してしまった社会主義者の統一性である〉。

II でローザはまず、協同組合について検討した（これも付加された論点）。

〈生産協同組合は人為的に自由競争の法則を回避することによって、間接的にその内部にかくされている生産様式と交換様式のあいだの矛盾をとりのぞくときのみ、資本主義経済のまったなかでその存在を確保していくことができる…。このことは、生産協同組合がまえもって一定の販売市場

を、すなわち一定の固定的な消費者群を確保しているばあいにもみ可能なことだ。まさに消費組合はかかるばあいの補助手段として役に立つ）。

〈生産協同組合は、もっとも成功した場合でも、せまい地域的な市場と直接的な必需品の小規模な生産、なかんづく生活資料の生産に依存している…。生産協同組合の全面的な実施ということは、なによりもまず、世界市場の廃止や現在の世界経済の小規模な地域的な生産諸グループと交換諸グループへの解体を、それゆえ本質的には、商品経済が高度に資本主義的なものから中世的なものへと逆行することを前提としたうえでいいうることなのだ〉。

〈実現可能な範囲でも、現在の社会を基礎としていては、生産協同組合は必然的にたんなる消費組合の付属物になりさがる。そこで消費組合が社会主義的改良をめざす主体として前面にたちあらわれる。しかしこのことによって協同組合をつうじての社会主義的改良は全て、…小商人資本、仲買商人資本にたいする戦い、すなわちたんに資本主義の根幹から派生した小分派にたいする闘いへとなりさがってしまう〉。

労働組合については、ローザは次のように述べた。

〈この二つの主要な経済的機能〔①中間層のプロレタリア化=労働者階級の増大、②労働の生産性の向上〕の中で、労働組合の闘争は資本主義の客観的過程によって一種のむだ骨おりにされてしまう〉。〈もし労働組合を、労働賃金に有利に利潤を次第に縮小していくための手段にしようと考えればあいには〉、①②が進行しないこと、すなわち〈高度に発達した資本主義以前の状態に逆行することを前提としている〉。³⁰

要するに、ベルンシュタインは「正当な分配」を目指している。

〈社会民主党は社会主義的分配を資本主義生産様式の廃止によってうちたてようとするのだ。ところがベルンシュタインのやり方はそのまったく反対なのだ。すなわちかれは、資本主義的分配を克服しようとし、このような方法を通じてしだいに社会主義的生産様式をうちたてようとのぞむ〉。

〈資本主義生産の一定の傾向…を否定し、…望ましい生産の形態とは分配の原因となるものではなく、分配の結果なのだから〉、ベルンシュタインに残るのは、「正義の理念」だけとなる。

民主主義の問題では、ローザはベルンシュタインの主張を次のようにまとめ、それに批判を加えた。

〈かれ〔ベルンシュタイン〕にとって民主主義は、自由主義のブルジョア理論家たちにとってまったく同様に、そもそも歴史発展の根本的な大原則なのであって、政治活動におけるすべての行動的な勢力は、この民主主義の実現のために力をつくさねばならないのだ〉。

これに対してローザは、〈民主主義と現実の社会的発展とのあいだにはいかなる内的な客観的な関係が存在するかということが重大な問題なのだ〉という観点から、「歴史における民主主義の発展」と「資本主義の政治史」とを考察する。

前者を見るなら、様々な歴史的な社会構成体のうちに民主主義をみいだすことができる（同時に他の政治形態も）。他方、後者を見るなら、これまた種々の政治形態をみいだす。

〈資本主義の発展と民主主義のあいだに、全般的で無条件の関係をうちたてることはまったくでき

³⁰ 「むだ骨おり」は原文では「シシュフォスの苦労」らしい。この用語は組合指導者をいたく刺激した。

ない。政治形態は、それぞれのばあい、国内的また国際的な政治要因が総合的に作用することによってうみだされたものであり、その範囲に絶対王政から民主共和制にいたるまでのすべての段階をふくめることができる）。

そしてローザは、むしろ〈現段階の政治状態のなかに、…ブルジョアジーの側でこれまで獲得してきた成果の放棄をもたらすような諸要因をみいだす〉。

民主主義的諸制度は、〈小国家の統合や近代統一国家の建設にとって必要であったのであるが…現在ではなくてもかまわないものになっている。なんとなれば、そのあいだに経済的發展が小国家の内的有機的な統合をもたらしたからである〉。

〈半封建的、あるいは純封建的な機構から資本主義的な機構への、政治行政的な国家機構全体の転化…は歴史のうえでは民主主義と不可分のうちにおこなわれたが、現在ではそれはたいへん高度な性格をもつにいたっており、行政や信用制度や軍事制度などが三月前期〔三月革命前〕の形態に逆もどりすることなしに、国家制度の純民主主義的な要素（あるいは飾り物）である普通選挙権や共和主義的な国家形態を、それ自体としては廃棄してしまうことができるほどになっているのだ。/ こうして、このようなブルジョア社会にとって自由主義が本質的に余計なものとなると多面では、それは主要な諸関係のなかでただちに障害物となった。ここで現在の国家の政治活動全体を直接に支配する二つの要因が問題となる。すなわち世界政策と労働運動であって、この二つは資本主義發展の現段階の両側面をなすものだ。/ 世界經濟の形成と世界市場での競争戦の激化と一般化とは、世界政策の道具として軍国主義を大國の内外活動の指導的モメントにした。しかし世界政策と軍国主義が現段階の向上的傾向であるとすると、当然、ブルジョア民主主義は下降線をたどらざるをえない…。/ かくして、ブルジョアジーが対外政策を反動の腕のなかにおいやったとするなら、たちあがった労働者階級が対内政策を同様に反動の手中においこんだといえよう。…ベルンシュタインはプロレタリアートに、死ぬほどびっくりした自由主義をふたたび反動の隠れ家からおびきだすために、その社会主義の終局の目的を放棄するようにと勧告する。このようになれば現在、社会主義的労働運動の中止を、ブルジョア民主主義の生存条件また社会的前提とするのであるが、しかしこうすることをつうじてかれは、社会主義的労働運動が現在の社会の内的な發展傾向の直接の所産であるとおなじ程度にブルジョア民主主義が、この内的な發展傾向に対立するものであることを、自分みずからもっとも明確に証明してみせている〉。

〈ブルジョア自由主義が労働運動の發展とその終局の目的をまえにして驚きのあまり命を失ってしまったという事実からは、たんに社会主義的労働運動はまさに現在では民主主義の唯一の支柱であり、また支柱であることができるということと、社会主義運動の運命がブルジョア民主主義に結びつけられているのではなくて、その逆に、民主主義的發展の運命が社会主義運動に結びつけられているのだということが、結論されるだけである。すなわち民主主義は…世界政策やブルジョアジーの敗走によってもたらされた反動的諸結果に対抗して闘えるくらいに、社会主義運動が十分に強化されるのに応じて生氣をおびているのだということ、民主主義が強力になることをのぞむものは、また社会主義運動が弱体化することではなくて強力化することをのぞまねばならないこと、また社会主義の努力が断念されると同時に労働運動も民主主義も放棄されることになるということが結論される〉。

IIIでのローザは熱い！ここではテーマは、次のようなベルンシュタインの命題を批判することにある。

〈かれ [ベルンシュタイン] は発展の立法的な過程のなかに理性の作用を、革命的な過程のなかに感情の作用をみる。改良の仕事に歴史の進歩の緩慢な方法を、革命にその急速な方法を、また立法に計画的な強力（ゲヴァルト）を、革命に自然的な暴力（ゲヴァルト）をみる〉。

ローザは、「法律による改良」と「革命」との関係の考察から論を始めた。

〈法律による改良と革命とは、…意のままに選択できるような歴史を進歩させるそれぞれこととなった方法なのではなく、たがいに条件となり補足しあいながら、しかし同時に、南極と北極、ブルジョアジーとプロレタリアートといったようにたがいに排斥しあう、階級社会が発展していくうえのこととなった要因（モメント）なのだ。/ しかも、その時々法律制度は、まったく、革命の所産である。革命が階級の歴史のうえでの政治的な創造的行為であるとすると、立法は社会の政治上の植物的生長である。法律による改良の仕事は、…最近の革命がうみだした社会形態の範囲内においてのみ動いていくのだ。まさに問題の核心はこれだ。/ …社会革命と法律による改良とは継続の期間によって区別される要因（モメント）ではなく、その本質によって区別される要因（モメント）である。…/ そこで、政治権力の奪取や社会の変革のかわりに、またそれらに反対して、法律による改良の方法に賛成する人は、実際にはおなじ目的にむかっての、より温和で確実なよりゆるやかな道をとっているのではなく、他の目的を、すなわち新たな社会構成体をうちたてるかわりに、たんに古い社会構成体の内部でのとるにたりない改革のほうを選択しているのだ。…つまるところそれは、社会主義制度の実現をめざすものではなく、たんに資本主義制度の改良をめざしており、…資本主義の弊害の除去をめざし資本主義そのものの廃止を目的としていない、という結論にゆきつく〉。

ついでローザは、上記の革命の有効性は前ブルジョア社会に限られるのではないか、という疑問に答えた。

〈ブルジョア社会をそれ以前の階級社会…から区別するもの…は、まさに階級支配が、現在、「成功裡に獲得された諸権利」に立脚しているのではなく、現実の経済的諸関係に立脚しているという事実、また賃金制度は法的関係ではなく純粋に経済的関係であるという事実によって区別される。現在の全法律制度のなかには、現代の階級支配の法律的形式をみいだすことはできない〉。

〈資本主義的な階級支配の根本的な関係は、ブルジョア的な法律に起因するものでもなく、このような法律の形態をとっているものでもないから、ブルジョア的な基礎のうえでの法律による改良などで変革することなどはできない〉。

またローザは、〈資本主義のなかで発展しつつある未来の社会の要素のすべては、はじめは、社会主義に接近するのではなくそれから遠ざかるような形態をとる〉という論点を付加した。

生産の社会化は大経営・株式会社・カルテルという形態をとって、民兵制は軍国主義という形態をとって、民主主義の発展はブルジョア議会制度という形態をとって。

〈資本主義は社会主義の綱領を実現するにあたっての障害を与えるとともに、同時にまたその実現の可能性を与えるものでもある。民主主義についてもまったくおなじことがいえる。/ 民主主義がブ

ルジョアジーにとってなかば余計なものに、なかばじゃまなものになると、そのかわりに、労働者階級にとってそれは必要不可欠なものとなる。民主主義がまずもって必要であるというのは、それが、プロレタリアートがブルジョア社会を変革するにさいしての手がかりとして足場として役に立つ政治形式（自治行政や選挙権など）をつくりだすからである。しかし、第二に民主主義が不可欠のものであるというのは、…民主主義のための闘争や民主的諸権利の行使のなかでのみ、プロレタリアートは自己の階級的利害と歴史的使命を自覚することができるからである。/ 要するに民主主義はそれがプロレタリアートによる政治権力の奪取を不必要とするからではなく、逆に、権力奪取を不可避にすると同時に、とりわけ可能にするゆえに不可欠なものなのだ。

さらにローザは、〈プロレタリアートははやまって政治権力を掌握することのないように！〉というベルンシュタインの「懸念と警告」に答えた。

〈プロレタリアートによる、すなわち多数の人民階級による政治権力の奪取は、とりわけ、与えられた条件を考慮せずに実現させることのできないものである。…政治権力の奪取は、おのずから、経済的政治的状态の一定の成熟度を前提とする。ここに、…ブランキ主義者のクーデタと、それ自体始まりつあるブルジョア社会の崩壊の産物たるにすぎず、それゆえに、それ自身のなかにこの時宜にかなった現象の経済的政治的正当性が存在しているところの、多数の階級意識をもった人民大衆による国家権力の奪取とのあいだの主要な差異が存在する。/ かくて、労働者階級による政治権力の奪取は、社会的な前提という角度からすると、遂行されるのが「はやすぎ」他というようなことはありえないのであってみれば、他方、政治的効果、すなわち、権力をしっかり掌握してしまうという角度からすると、それは必然的に遂行されるのが「はやすぎ」なければならない〉。

〈第一に、…社会主義的変革は長期にわたるしつような闘争を前提とする。その闘争においてプロレタリアートは、おそらく一度ならず撃退される。それゆえ、全闘争の終局の結果ということからいえば、プロレタリアートは、最初から、必然的に「はやすぎ」で政治権力を握ることになるだろう。/ しかし第二に、プロレタリアートの権力奪取がひきつづいておこるだろうような政治的危機の過程のなかで、また長期にわたるしつような闘争の焰のなかで、初めてプロレタリアートは、自分自身が終局の大変革を遂行する能力の所有者となるのに必要な程度の政治的成熟に到達することができるのだから、プロレタリアートの時期の「はやすぎ」る攻撃は、実にそれ自身、終局の勝利の政治的条件をつくりだすひとつの、しかも非常に重要な要因なのだ。…/ プロレタリアートは、終局においては国家権力を永久に奪い取ってしまうために、一度ないしいくたびが、時期の「はやすぎ」る権力奪取を絶対にやらなければならない〉。³¹

ivの小見出し「崩壊」の意味するところは、「科学的社会主義の礎石」＝「資本主義崩壊の理論」の放棄は、〈ベルンシュタインの全社会主義理論の崩壊をもたらした、ということである。

① 〈資本主義の崩壊なくしては資本家階級の収奪は不可能である。――ベルンシュタインはこの収奪を断念して、労働運動の目的として「協同組合の原則」の漸次的実施を提案する〉。

② 〈しかし協同組合は資本主義生産のただなかでは実施しえない。――ベルンシュタインは生産の社

³¹ 軍国主義については、『社会改良か革命か？』第1部と第2部の間に発表された論文「ミリート [民兵 (制)] とミリタリズム」参照

会化を断念し、商業の改良また消費組合におもいいたる〉。

- ③ 〈だが消費組合とこれに力を合わせた労働組合によって社会を変革させることは、資本主義社会の現実の物質的發展と一致するものではない。――ベルンシュタインは唯物史観を放棄する〉。³²
- ④ 〈だが、経済発展の過程についてのかれの理解は、マルクスの剰余価値法則と一致しない。――ベルンシュタインは剰余価値法則と価値法則、またそれゆえカール・マルクスの全経済理論を放棄する〉。
- ⑤ 〈だが確固とした終局の目的もなく、現代社会のなかに経済的基盤を持たずして、プロレタリアートの階級闘争を指導することはできない。――ベルンシュタインは階級闘争を放棄し、ブルジョア自由主義との調停を宣言する〉。
- ⑥ 〈だが階級社会においては階級闘争はまったく自然的な、不可避的な現象である。――ベルンシュタインはさらに結局、今日の社会における階級の存在すらも否認する〉。

かくてローザは、次のように総括した。

〈かれは運動のために終局の目的を放棄することをもってはじめる。だが現実には、社会主義の終局の目的をもたない社会民主党の運動などありえないことだから、そこでかれは、必然的に、運動そのものを放棄してしまうということでおしまいとなる。/ こうしてベルンシュタインの社会主義的見解のすべては崩壊してしまった〉。

ベルンシュタインの「可能なかぎりさまざまな体系の破片を、見境もなくごた混ぜにした理論」は、「個々の事実と首尾一貫した世界観の有機的な全体へと結合させていく中心となる、精神的結晶軸」を失わせた。〈ベルンシュタインがその一般的人間的科学、民主主義、倫理と信じているものは、実はたんに現在支配的なもの、すなわちブルジョア的な科学であり、ブルジョア民主主義であり、ブルジョア倫理なのだ〉。

〈社会主義を自由主義の特殊なものとしてしまうとき、かれのやっていることは、…自由主義の歴史的担い手、すなわちブルジョアジーを一般的人間的利害の擁護者にしてしまうこと以外のなんたというのか〉。

〈かれが観念論や倫理を弁護し、しかしそれとともにプロレタリアートの倫理的再生のただひとつの源泉である革命的な階級闘争に激しく反対するとき、結局かれのやっていることは、ブルジョアジーの倫理の精髓を労働者階級に説教すること、すなわち現在の体制との和解や、道徳的観念世界という来世に希望をたくしてしまうことを説教すること以外のなんたというのか〉。

ベルンシュタインによる弁証法の否定は、〈この〔プロレタリアートの〕精神的武器にたいして戦いを挑んでいることを意味する〉。〈ベルンシュタインは弁証法に別れをつけ、一方では=他方では、だが=しかし、にもかかわらず=それでもなお、多かれ=少なかれ、などという思考の動揺をとり入れることによって、没落しつつあるブルジョアジーの歴史的に制約された思考様式に、…まったく

³² ローザの理解する唯物史観は、いわゆる経済決定論ではない。彼女は、後で見るカウツキーの著作の書評である論文「カウツキーのベルンシュタイン論駁書」で、次のように述べている。〈唯物史観は経済的強制とならんで、社会発展の別の要因を知っており、これはたしかに経済的に動機づけられているが、しかしさまざまな形で観念的および倫理的な性質をもっているものであり、われわれはそれを階級闘争という形において総括する。プロレタリアートの階級闘争は、資本主義的生産様式が腐敗する段階にはいる以前に、それを倒壊することができる〉。

完全におちこんでしまっている〉。

〈ベルンシュタインは「市民（ビュルガー）」をブルジョア、プロレタリアの区別に関係なく、ただちに人間と理解してしまうから、現実には、かれのいう人間とはただちにブルジョアのことになり、人間社会とはブルジョア社会とおなじことになる〉。

結論：〈ベルンシュタインとの論争は、二つの世界観、二つの階級、二つの社会形態のあいだの対決となってしまった。今やベルンシュタインと社会民主党はまったく異なった基盤の上になっ

Vでローザは、ドイツにおける日和見主義の歴史を概観した上で、次のように言う。

〈日和見主義の外見を特徴づけているものは…「理論」に敵対することである。なにしろわれわれの「理論」、すなわち科学的社会主義の原則は、獲得しようと努力している目的についてであれ適用すべき闘争手段についてであれ、最後にまた闘争方法そのものについてであれ、それらに関連する実践活動にきわめてはっきりした限定をおこなっているのであるから、…実際の効果のみをもとめようとするものにあっては、…われわれの実践を「理論」からひきはなし、それから独立させようとする努力が自然に発生してくる〉。

〈一方で日和見主義的潮流が、その実践の面では自然発生的で、われわれの闘争の条件や闘争の発展から説明することのできる現象であるとすれば、他方において、ベルンシュタインの理論は、これらの潮流をひとつの一般的理論的表現のかたち

に要約し、それ独特の理論的前提を考えだし、科学的社会主義と対決しようという、まったく自明の試みなのである〉。

〈ひとたび階級闘争そのものの発展とその歴史条件が、これらの〔マルクス以前の〕理論からの脱却と科学的社会主義の形式をもたらした後にあっては、少なくともドイツにおいては、マルクス主義以外の社会主義は存在せず、社会民主党の外部にはなんらの社会主義的階級闘争も存在しない。いまや社会主義とマルクス主義、プロレタリアートの解放闘争と社会民主党はおなじである〉。

〈ベルンシュタインの理論は日和見主義に理論的基礎を与えんとする最初の、そしてまた同時に最後の企てであった。…ベルンシュタインの体系にあっては、…あらゆる役にたつ理論をごたませにすることについては、もうなにもすることができない残っていないほどまで積極的だったからである。… / そしてマルクスの体系はそれを理論的に否定する力をもっているだけでなく、それだけが日和見主義を党の発展過程における歴史的現象として説明することができる立場にある〉。

上の引用に続く次のくぐり、後にレーニンを批判した論文「ロシア社会民主党の組織問題」にそっくりそのまま再現されているからして、重要な命題といえる。³³

〈プロレタリアートの勝利にむかっての世界史的な前進は現実には「決してそう簡単なことではない」。この運動の特殊性のすべては、この歴史上はじめてここで民衆自身がすべての支配階級に対立してその意思を貫徹すること、しかしこの意思を現在の社会の彼岸に、その社会をのりこえたところに立ち立てなければならないということにある。しかしそれとは反対に、このような意思を大衆は現存体制との不断の闘いのうちにのみ、その闘争の枠内においてのみきかえあげることができる。巨大

³³ ただし、『選集』においては両論文の訳者が違うため、訳文は少し異なる

な民衆と現存体制全体をのりこえてゆく目的との結合、日常闘争と偉大な世界改造との結合、これは、全体としての発展の途上において二つの絶壁のあいだを、すなわち大衆的性格の放棄と終局の目的の放棄とのあいだを、またセクトへの逆もどりとブルジョアの改良運動への転落とのあいだを、無政府主義と日和見主義とのあいだを作用しながら前進していく、社会民主主義運動の提起する大問題である〉。

ローザは次のようにしめくくった。

〈プロレタリアートの運動は…つねに、無政府主義的なものと日和見主義的なものとの極端な脱線——この二つは、社会民主主義を価値として理解したばあい、その運動のモメントをなすにすぎない——を克服するなかで、また克服することによって社会民主主義的になる〉。

〈現在の日和見主義の潮流を克服することは、それを拒否することである〉。

vii) 『社会改良か革命か?』の特徴——ローザの階級意識論

以上、ほとんどコメントをつけずに『社会改良か革命か?』の内容を紹介してきたが、ここで簡単に整理しておこう。

その特徴の第一は、ベルンシュタインの理論を、マルクス主義=科学的社会主義の全否定であり、ブルジョアジーの立場への移行・“転向”に他ならないと断定したことである。このことは、マルクス主義史上におけるローザの位置を明らかにしている。

ローザは、マルクス経済理論の本質を、資本主義を歴史的・過渡的なものとして把握する点に求め、①資本主義の無政府性、②生産過程の社会化、③組織・階級意識の成長という資本主義発展の結果を社会主義の科学的基礎づけとした。これは、社会主義（革命）の必然性論といってよい。

またローザは、革命の現実性を承認する実践的立場（これは「オスト・ロイテ」に共通する）から、資本主義崩壊論を肯定し、ベルンシュタインによる批判に真向から反撃したこと、これが第二である。ローザは、信用制度・企業連合などベルンシュタインの「適応能力」論を統一的に批判した。その際のキーワードが無政府性であった。無政府性→崩壊という体系は、世界市場完成→崩壊という系を内に含む。

第三に、社会主義（革命）の必然性を主張する際に、上記の③、すなわち主体的要因を強調していることである。その内容を検討し、レーニンと簡単に対比してみると、これが本項でのテーマに他ならない。

もう一点つけ加えるならば、事後評価ではあるが、帝国主義認識の萌芽が含まれていることがあげられよう。現在を世界市場完成への過渡期と見る視点、民主主義から政治的反動への転換に注目していることなど。

信用制度・企業連合等の歴史的意義を捉えきれていないこと、権力奪取やその後の「過渡的方策」が抽象レベルにとどまっていることなど、ローザの限界を指摘することはできるが、それらは本稿において重要ではない。

本題に入る。

エルフルト綱領の原則的部分（マルクス主義理論）と実践的部分（諸要求）とをどのように結合するかという問題において、SPD主流派（広義の「正統派」）は、イデオログと他の黨員との分業によって、あるいは、原則的部分を認識した黨員が日常的な要求を担うことによって、解決可能だと観念されていたと思われる。それは、組織温存主義=待機主義と党活動の不活発化をもたらした。

それに対し、原則的部分を「修正」して、党活動を100%実践的部分に移行させることを持って“結合”を実現しようとしたのが、ベルンシュタインであった。ローザは逆に、実践的部分を原則的部分に従属させる内容を示すことによって“結合”させることを目指したといえよう。

いかにしてか？ 繰り返しになるが、いくつか引用する（下線はすべて引用者）。

(a) 〈日常闘争は、社会民主党にとって、…プロレタリアートの階級闘争を導き、政治権力の奪取と賃金制度の廃絶という終局の目的にむかって努力するための唯一の道をなす。社会改良のための闘争は社会民主党の手段であり社会革命はその目的であるから、社会民主党にとって社会改良と社会革命は不可分の関係にある〉。

(b) 〈党内の通常の見解では、労働組合の闘争と政治闘争とをつうじてプロレタリアートは、自己の状態をこれらの闘争によって根本的に変革することは不可能であり、政治権力の終局的な奪取が不可避であることを確信するにいたるとされる。…労働組合の闘争と政治闘争との社会主義的な意義は、これらの闘争がプロレタリアートの認識や意識を社会化し、プロレタリアートを階級として組織化する点にある。これらの闘争を資本主義経済をただちに社会化するための手段と考えると、…これらの闘争は、プロレタリアートの権力奪取にむかって労働者階級を教育する手段たることをやめてしまふ〉。

(c) 〈社会主義は…ただ、資本主義経済のますます先鋭化する矛盾と、社会変革によってその矛盾を止揚することが不可欠であることを労働者階級が認識することとから生れでる〉。

(d) 〈われわれは、ひとたび認識された〔資本主義の矛盾の〕発展の方向をたのみとしているだけであるが、ただそのばあい、政治闘争においてその結論を徹底的におしすすめるのだ。結局ここにすべての革命的戦術の本質がある〉。

(e) 〈プロレタリアートの権力奪取がひきつづいておこるだろうような政治的危機の過程のなかで、はじめてプロレタリアートは、自分自身が終局の大変革を遂行する能力の所有者となるのに必要な程度の政治的成熟に到達することができる〉。

(f) 〈このような〔支配階級と対立し、現在の社会の彼岸にうち立てるべき〕意志を大衆は現存体制との不断の闘いのうちにのみ、その闘争の枠内においてのみきたえあげることができる〉。

ローザは階級意識を明確に規定しているわけではない。しかし、引用 (a) (b) (c) から、権力奪取と賃金制度の廃絶が不可避であり不可欠であるという認識に到達したプロレタリアートの意識、と規定して間違いはなかるう。このこと、および、そのようなレベルに到達するまでの教育手段として労働組合闘争を捉えることは、「党内の通常の見解」でもあった。この見解からでも、実践的部分（日常闘争）を原則的部分（究極目標）に従属させることはできる。しかしそれは抽象的・形式的であって、「党内の通常の見解」=主流派の立場にとどまるのであり、ローザはそれを越えようと試みたと思われる。

問題は、「日常闘争」あるいは「労働組合の闘争と政治闘争」を「つうじて（のみ）」、階級意識が形成されるという論点である。残念ながら『社会改良か革命か？』では明確でない。ローザにとって本意であるか否かはわからないが、これまで行くつかの階級意識論（階級形成論）が提出されてきた。例えばネトルは、次のように解釈している。

〈この文脈〔引用b〕のなかでこの言葉〔認識〕が使われているのは、明らかに、階級的利害の主体的要請をこれまでのところ感知することができず客観情勢によっておさえつけられているプロレタリアートの、空虚な精神の真空状態のなかに入りこんでいく過程の摩擦を表現しようと意図したものである〉。〈階級意識を育むのは、労働組合や政治的行動のなかの戦術的活動から生ずる社会との接触による摩擦である〉。〈日常のきまりきった活動が必然的にその効果を発揮し、問題がおのずと目的の問題に、すなわち戦術と究極目標との関係の問題、《いかにして》よりもむしろ《なぜ》の問題に転化する…。ただベルンシュタイン流に故意に戦術を曲解した場合だけ、偽りのブルジョア階級意識が創りあげられてしまう。（党の確立された原則に従って）本来あるがままであれば、日常活動は正しい階級価値を必ず生みだす〉（前掲書）。

ネトルの解釈は、「摩擦」を契機として、プロレタリアートの意識が、即自→対自→即且対自というようにラセン的に自己発展すると捉えても大過なかるう。しかしこれは、〈雇主と政府とに対する労働者の経済闘争は、その直接の革命的意義の他に、さらに労働者をたえず自分たちの政治的無権利の問題に突き当らせるという意義をもっている〉と主張したロシアの経済主義者の理論に似てはいないか？ ローザの主張は、このような解釈を許す可能性を有している。

また、引用（d）、さらには「はやすぎ」る権力奪取の不可避論からは、戦術の急進化によって資本主義の矛盾を拡大するという解釈が出てきても不思議ではない。必ずしもローザの名を冠したわけではないが、このような戦術観と、ネトルが解釈したような階級意識論とが結合され、戦術・闘争形態の急進化によって階級形成を推進するという考え方が生まれた（ローザにとっては迷惑だろうが）。いわゆる新左翼は、多かれ少なかれ、このような考え方に影響されていたと言いうる。

レーニンについては本稿「ロシア篇」で扱うつもりであった。しかしそれがいつになるかわからない事情になってきたので、ローザの階級意識論との対比の範囲で、『何をなすべきか』を検討しておく。『何をなすべきか』ほど誤解・曲解の多い著作は珍しいが、まず前提を確認しておこう。

レーニンが序文で述べているように、構成が当初の計画と変えられたのであるが、その変更の契機となったのが次の経済主義者の主張であった。

〈『イスクラ』の全紙面を一貫しており、同紙のその他の大小すべての欠陥の原因となっている基本的な欠陥は、『イスクラ』が運動のイデオログたちに、運動をあれこれの方向に動かす影響力をもっているという意味で、きわめて有力な地位を割り当てている点に、含まれている。それと同時に、『イスクラ』は、運動の物質的諸要素と物質的環境とをあまり考慮していないが、これらの両者の交互作用のうちから労働運動の一定の型が創り出され、その進むべき道が決まってくるのであって、たとえ最良の理論と綱領によって鼓舞された〔靈感を授けられた〕人であろうと、イデオログのどんな努力をもってしても、この道からそらすことはできないのである〉。

この手紙にレーニン (=「イスクラ」派) は激怒した。〈イデオログはこの道をそらすことができる〉という精神が、『何をなすべきか』を貫いている。³⁴

ちなみに先の手紙は、〈『イスクラ』が運動におけるイデオロギー…の役割を過大評価している〉。〈『イスクラ』は、絶対主義に対する闘争へ直ちに移るという任務を理論的運算によって解決したものの、…労働者がこの闘争のために必要な力を一層多くたくわえるまで待つ忍耐力をもたないので、自由主義者やインテリゲンツィアの隊列のなかに同盟者を求め始めている〉、これは〈階級意識をぼやかすことにしかなりえない〉、等とも述べていた。

「絶対主義に対する闘争へ直ちに移るという任務」、すなわち、直ちに革命闘争を始めよと提起したのは、第2インター内でレーニンだけではないだろうか。「正統派」マルクス主義者とは異なり、「人民の意志」派との継承関係にその秘密がある、というのが私の仮説である。

閑話休題。レーニンには、ネトルが言うような「真空状態」はない。存在するのはブルジョア・イデオロギーかプロレタリア・イデオロギーかであって、〈労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョア・イデオロギーに従属させる方向に進む〉。³⁵

レーニンは、階級意識とともに（それ以上に）政治意識を重視した（階級意識論はマルクスから導き出しようと思うが、政治意識論はできないのではないか）。

〈もし労働者が、どの階級に関係した事からであるかにかかわらず、ありとあらゆる専横と抑圧、暴力と不法の事例に反応することに、――しかも、他のどの見地からでもなくまさに社会民主主義的な見地から反応することに、なれていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし労働者が、具体的な、その上ぜひとも焦眉の（切実な）政治的事実や事件に基づいて、他のそれぞれの社会階級を、それらの階級の知的・精神的・政治的生活の一切の現れにわたって、観察することを学ばないなら――住民の全ての階級、層、集団の活動と生活のすべての方面の唯物論的分析と唯物論的評価を、実地に応用することを学ばないなら、労働者大衆の意識は真に階級的な意識ではありえない〉（下線引用者）。

“階級意識あるプロレタリアート”とは、抽象・理念でしかない。だから、階級意識論（階級形成論）に基づく労働者教育論は、しばしば次の二つの傾向に陥る。一方では、戦術・闘争形態を急進化していくという急進主義、他方では、労働者の実際の意識にあわせて要求を徐々に高度化していくという経済主義、いずれもレーニンが嫌った「段階理論」である。

このような欠陥は、政治意識論によって補正しうる。なぜなら、「反応する」という言い方に示されるように、労働者の政治的教育の目的は、「直ちに移る」べき「絶対主義に対する闘争」に物質力を結集することだからである。

〈この政治的教育は一体どういうものでなければならないか？ …労働者階級は専制政府に対して

³⁴ 〈「イデオログ」は、かれが自然発生的運動の先に立って進み、運動に道を指し示す時にだけ、運動の「物質的諸要素」が自然発生的に突きあたるあらゆる理論的・政治的・戦術的・組織的諸問題を、かれが他の者よりも早く解決することができるときにだけ、はじめてイデオログの名に値する〉（レーニン『経済主義の擁護者たちとの対話』）

³⁵ 公平を期するために述べておくと、ネトルによれば、〈真空という概念は、…ドイツにはあるがロシアではとうていありえない闘争の合法的側面から派生する自己教育の可能性を容認するものだった〉（前掲書）

敵対的な関係にあるという思想を宣伝するだけにとどめることができるであろうか？ もちろん、できない。労働者に対する政治的抑圧を説明するだけでは足りない…。さらに、この抑圧の一つ一つの具体的な現れを捉えて煽動することが必要なのだ。

「労働者の政治的教育」＝「わが厭うべき専制のあらゆる側面をかれらの前に暴きだすこと」、〈まさにこの仕事のためにこそ、「自由主義者やインテリゲンツィアの隊伍のなかに」、ゼムストヴォ活動家や、教師や、統計家や、学生その他に対する政治的討伐の暴露を我々とともにやる心がまえのある「同盟者」をもつことが、我々に必要である〉。

いわゆる「外部注入」論は、『何をなすべきか』に対する誤解・曲解のなかでも、最高峰に位置するであろう。レーニンは二種の「外部注入」を論じている（いずれも、ローザの引用（e）（f）と対立するものではない）。

一つは、カウツキーの主張をうけたものである。カウツキーは、科学の担い手がブルジョア・インテリゲンツィアであり、科学的社会主義もこの層が生み出した。〈だから、社会主義的意識は、プロレタリアートの階級闘争のなかに外部からもちこまれたあるものであって、この階級闘争のなかから原生的に生まれてきたものではない〉と述べていた。これは、社会民主主義の形成史であり、「社会民主主義＝社会主義と労働運動の結合」というカウツキーの定義と一体のものである。

もう一つは、次のくだりである。

〈階級的・政治的意義は、ただ外部からだけ、つまり経済闘争の外部から、労働者の雇主に対する関係の圏外からだけ、労働者にもたらすことができるのである。この知識を汲み取ってくることのできる唯一の領域は、すべての階級と層の国家および政府に対する関係の領域、すべての階級の相互関係の領域である〉。

「労働者の雇主に対する関係」は、労働者の生活の一部でしかない。だから、その関係の枠内での暴露に限定するのではなく、「すべての階級と層の国家および政府に対する関係」、「すべての階級の相互関係」を暴露しなければ、階級的・政治的意識を発展させることはできない、というのがレーニンの主張に他ならない。そのような暴露を行うのが煽動活動である。

ところが、この二種の「外部注入」論から、次のような図式を描く人がいるのだ。“レーニンの党は、インテリ出身の職業革命家集団で、その党が外部からプロレタリアートにイデオロギーを注入する”、と。どうしたらこのような誤解・曲解ができるのか不思議だが、これがかなり普及している。

蛇足ながら、党はプロレタリアートの外部にあるのではない。党は、いわばプロレタリアートの階級意識の物質化されたものであり、プロレタリアートの団結の最高形態である。

やや図式的に言えば、ローザは、「日常闘争」あるいは「労働組合の闘争と政治闘争」を、「労働者階級を教育する手段」と述べるにとどまり、日和見主義という障害がなければ階級意識が獲得しうるかに主張した。これに対してレーニンは、自然発生的な労働運動はブルジョア・イデオロギーに従属されると考え、政治的暴露・政治的煽動による労働者の政治的教育の必要性を示した。

ドイツとロシアの客観的状況の相違を別にすれば、ローザとレーニンとの違いをもたらした要因として、二つのことを考えている。

一つは、「人民の意志」派との関係である。ローザは、ポーランドの「プロレタリアート」党が「人

民の意志」派のテロリズムの影響を受けて瓦解したことを否定的に総括し、「人民の」派そのものを否定した。これに対しレーニンは、「人民の意志」派を高く評価している。『何をなすべきか』から一つだけ引用しよう。

〈[「人民の意志」派の] 巨匠たちのサークルにとっては、政治的任務というものは、この言葉の最も真実な、最も実践的な意味で、理解しやすいものである。それが理解されやすいのは、まさにかれらの熱烈な伝道で自然発生的に目覚めつつある大衆を呼び、かれらのたぎりたつ精力が革命的階級の精力によって受け応えられ、支えられるからであり、またその限りである。プレハーノフが、この革命的階級を示すだけにとどまらず、またこの階級の自然発生的な覚醒が不可避であり、必然的であることを証明するだけにとどまらず、「労働者サークル」に対してさえ、高く大きな政治的任務を提起したのは、重々正しかった〉。

「人民の意志」派とレーニンの継承関係は、プレハーノフを通してもあったと思われる。ちなみに、レーニンの宣伝家と煽動家の規定は、プレハーノフに依拠している（既述したように、カウツキーの規定は異なる）。この「伝道」への確信が、煽動への確信につながっているのではないか。

もう一つは、ローザとレーニンの組織的位置の違いである。ローザの組織的位置は既に述べたが、要するに、レーニンのように煽動（家）を組織しうる位置にいなかった。機関紙に書き、選挙闘争の際は地域をまわったが、ローザはそれ以上のことはできなかったのである。それに対してレーニンは、自らの機関紙『イスクラ』のアーгент（エージェント）網を形成し始めていた。計画的・系統的な宣伝・煽動を遂行するためには、それを保障する組織的基盤が不可欠なのである。³⁶

viii) カウツキーによる批判

『諸前提』の出版後、カウツキーとベルンシュタインは、予想される党内論争を穏健なものにするため、アードラーに最初に論評してほしいと依頼した。アードラーは、SPDの分裂を恐れ、しぶっていた。

1899年3月16日、カウツキーはベーベルらとの会合で、〈ベルンシュタインが去るか、私が去るか〉と発言している。同日、アードラーから『諸前提』に当惑したとの手紙を受け取ったが、彼は、ベルンシュタインに『ノイエ・ツァイト』との関係を絶つよう迫る一方、カウツキーには、プレハーノフやパルヴスに味方しないよう警告した。そして同日、カウツキーが初めて公然とベルンシュタインを批判した論文が発表された。連続した論文は、唯物史観、弁証法、価値論についてベルンシュタインを批判したものである。アードラーおよびベーベルの後押しをえたカウツキーは、『諸前提』を体系的に批判する『ベルンシュタインと社会民主党綱領』（邦題『マルキシズム修正の駁論』）を出版した。その構成は次のようになっている。

緒言

³⁶ 〈ローザ・ルクセンブルクの思想はSpontaneität-Theorieと呼ばれ、わが国では「自然発生論」あるいは「自然発生理論」と訳されてきた。しかし、ローザ・ルクセンブルクがこの言葉を用いた文脈から言えば、Spontaneitätというドイツ語を「自然発生性」と翻訳することは、「自然発生」という日本語の語感のために誤解を招きやすく、むしろ「自発性」と訳す方が原義に近いと私は考える〉（伊藤成彦『ローザ・ルクセンブルクの世界』）。ローザもまた様々な誤解・曲解を受けているが、レーニンとの比較においては、「自発性」と訳し直したところで、本質は変わらない。

第1章 方法論

- (A)唯物史観
- (B)弁証法
- (C)価値

第2章 綱領

- (A)崩壊説
- (B)大経営と小経営
- (C)有産者の増加
- (D)株式会社
- (E)剰余価値の利用
- (F)窮乏説
- (G)新中産階級
- (H)恐慌説
- (I)綱領の起草

第3章 戦術

- (A)政治と経済
- (B)独立的政策か非独立的政策か
- (C)われわれは勝ち得るか？

緒言ではいくつかの命題が示されている。列挙しておく（仮名遣い、送り仮名等については手を加えた）。

〈戦術の本質は、まさしく統一に存する。即ち、異なった諸勢力を共同の計画的な行動にまでまとめあげる統一にある〉。

〈戦術（タクティク）と煽動方法（アギタチオンスワイゼ）とは混同してはならない。…煽動の場合は個人化しなければならないが、われわれの戦術、われわれの政治的行動は、統一的でなければならない〉。

〈戦術の統一は、行動の統一である。それは思想の相違、理論的解釈の相違を排斥しはしない〉。

〈党の活動は、一切の社会的活動と同様、個人の独立性に一定の犠牲を制約する。…党の統一的性質と、党員がこれと同時に有する自立独立性とがその限界を超えると、ついに一致し得なくなるという限界を、あまり狭めすぎることのないように警戒しなければならない。/ この限界を正確に決定するということは、各党派の最も重大な任務の一つである。で、これがために、各党派は、党の目的を公式化し、これを綱領で基礎づけるのであるが、この綱領は、宣伝よりもむしろ組織に役立つものである。わが党の綱領は、単に当面の要求を確立するのみでなく、党の統一と党の闘争心とが、それを認めることによって確保されるところの、かの諸原則をも確立している。わが党綱領の結論たるべき部分は、…光輝ある実際上の任務を帯びている。即ち、われわれと、われわれの決定的な反対論者との間の限界のみでなく、時々悦んで行動を共にするが、いかなる事情があっても最後まで敢然われ

われと戦いを共にしようという気のない、柔弱な、信頼の置けない人間との間に限界を設けるという任務である〉。

〈時折、綱領を新しく検討することは、ただに許されているばかりでなく、義務として命令さえされていることである。しかし、綱領が党の全生命に対してもつ重大な意義を考えると、この検討には、以下のことが要求されねばならない。即ちこの検討は最大の良心を以って目論まれなくてはならない、またいやしくも、最初の一番いい思いつきや、人から聞いた最初の一番いい批評等を論拠にして、自党の綱領に疑問を起こしてはならない。さらにまた何等痛切な理由なしに、党という建築の土台をさもぐらぐらしているかのように疑わせたり、或はまた新しい立場を獲得してこれを強固にしないうちから、古い立場を動揺せしめるようなことはあってはならないのである〉。

〈ベルンシュタインが綱領の批評だけに甘んじないで、綱領とともに綱領の基礎となる方法論までも批評して根こそぎ破壊したということは、この任務をよりよく解決することに一向貢献しなかった〉。

注目すべきは、「党の統一的性質」と「党員の自主独立性」との関係という視角で、ベルンシュタイン問題を把握していることである。

《第1章について》

著作全体を通して、いわゆる“おかず”が多い。それを取り除くと、カウツキーはあまり大したことを言っていない。

カウツキーは以前、次のように述べていた。

〈しかし、いつかは唯物史観と、きたるべき社会革命の推進力としてプロレタリアートを認めることが克服されなければならないとしますと、私は、もちろん告白しなければならないでしょうが、そのときには私はおしまい、私の人生にはもはや少しも内容がなくなっていることでしょう〉
(1897年8月30日付、ベルンシュタイン宛の手紙)。

唯物史観にカウツキーの「人生」がかかっていた。しかるに、(A)で述べられていることは、ベルンシュタインは「決定論」(必然性論)を「運命論」(宿命論)と混同している、ということにつきる。

この項で興味深いのは、「理論の発達にとって…不利な状態」にあることの説明である。カウツキーは、次のように述べている。

〈社会主義が実際的な意義を増大するに比例して社会主義的「知識」階級に対する実際的要求も亦増加する、従って理論方面に利用し得る力が減じて行く。益々盛んになる日刊新聞の拡張、議会や市町村界における議席の増加、労働団体の書記職の増加などは、理論的仕事の能力があり且つそれに興味を有するすべての力を殆んど吸い取ってしまっている〉。

これは、実務的活動の増大によって、党内で理論軽視の風潮が広がっている兆候の記述として読まなければならない。³⁷

³⁷ 『マルキシズム修正の駁論』(世界大思想全集47 春秋社版 1928年)は、今日「市民社会」と訳されている用語(ビュルガーリッヘ・ゲゼルシャフト)を「ブルジョア社会」と訳している。戦前の方がイデオロギッシュだった？

(B)は、『資本論』は「二元論」であるというベルンシュタインの批判に対する反論である。

ベルンシュタインはまず次のように主張した。マルクス・エンゲルスの著作には、科学研究に基づく新しい見解と、それと矛盾する古い見解の固守とが併存しているという矛盾がある、科学研究を妨げ、古い見解の固守をもたらしている罪は弁証法にある、と。ベルンシュタインによるこの批判は、『資本論』にも及ぶ。彼は次のように言う。手工業的生産から資本主義的生産までの発展行程を描いた諸章は科学研究に依拠したものであるが、「資本制的蓄積の歴史的傾向」の一節はそうではない、それは「あらかじめ弁証法的に構成された型に事実を合致させるために、諸事実について不十分な、一方に偏したスケッチ」である（このような批判はすでに、デューリングやミハイロフスキーが行っていた）、上述の型には『共産党宣言』（否、『神聖家族』）にないような思想は少しも含まれておらず、〈マルクスが研究に入る前にとっくに出来上がっていたテーゼに帰着する〉、建物=科学的成果を守るためには足場=弁証法を〈倒さねばならぬ〉と。

カウツキーは、これに対して二つの視点から反論した。第一は、階級社会において、研究者は同時に〈闘士たることを意味し〉、〈党に加担しなければならなくなる〉こと。第二に、「古い」テーゼも研究の成果であり一旦は『共産党宣言』としてまとめられ、その後のさらなる研究によって『資本論』に表現されたということ。カウツキーは、その一貫したテーゼを、〈資本主義的生産方法それ自体が、資本の集積、大衆の増加、プロレタリアの闘争能力の増大、両階級間の対立の先鋭化によって、自らの克服手段をつくりつつあるという命題〉としている。その内容は、第2章で説明されるであろう。また、次のようにも述べている。

〈彼等〔マルクス、エンゲルス〕の実際的要求は、資本主義的社会の権力手段を征服する目的のために、プロレタリアートを組織し、訓練するという命題に包括することが出来る〉。

ところでカウツキーはここで、「理論の発達にとって不利な状態」に関する二つ目の説明をしている。すなわち、マルクス反対論者の攻撃が洪水のごとくあふれ、マルクス主義者の労力はその反駁についやされており、〈理論展開のために有する時間と機会を狭める〉ことになっている、というのがそれである。同様の指摘は、メーリングも行っていた（「Zwanzig Jahre [20年、かな?]」）。

(C)について

ベルンシュタインは、マルクス価値論も限界効用学説も抽象の産物という意味では変わらないと主張した。何を目的とした抽象なのかを問わないのはおかしい、また、マルクス価値論に疑義を唱えながらマルクス経済学を肯定するのは不合理である、――これが、カウツキーによる批判点である。カウツキーの主張を示しておく。

〈価値論の貢献すべき目的とは、…現代の生産方法を理解すべき鍵を提供するという目的以外にはない〉。〈価値論の目的は…交換ないし売買の価値を支配する根本法則の発見〉である。

〈例えば、貨幣の本質は、価値論からのみ説明され得るものであって、価格論からは決して説明されえない。これこそ事実上限界効用学説の最弱点となっているものである。それは、貨幣の機能を価値の尺度として説明することができないのである〉。

《第2章の(A)について》

ベルンシュタインは、マルクス主義に含まれるユートピア的あるいはブランキズム的要素の理論的基礎を「崩壊説」に見た。彼によれば、エルフルト綱領も「崩壊説」を土台としている。これに対してカウツキーは、まず次のように言う。

〈特殊な「崩壊説（ツーザムメンブルウス・テオリイ）なるものは、マルクス及びエンゲルスの手で樹立されたことはない。この言葉は、丁度「窮乏説（フェルエーレンドゥグス・テオリイ）」という言葉がマルクス主義反対論者から起こったように、ベルンシュタインから出てきている〉。

〈恐慌を論じている得るフルと綱領のうちには、崩壊説のことは一言もない〉。

続いてカウツキーは、『フォルヴェルツ』誌上でのベルンシュタインとの論争（1899年3月？）を紹介している。

〈ベルンシュタインの説明によると、マルクス及びエンゲルスは、社会主義的生産方法が資本主義的生産方法崩壊の結果であり、その崩壊は、資本の集積ならびに益々恐るべきものに悪化する恐慌から招来するであろうと期待していたと。この説明には、プロレタリアートの階級闘争のことは一言も述べられていない〉。

カウツキーは「プロレタリアートの成熟さと勢力の増進」を指摘したのであるが、それに対し、ベルンシュタインは次のように反論した。

〈マルクスが崩壊を論じている章〔「資本制的蓄積の歴史的傾向」〕…は増進するプロレタリアの成熟さと勢力とについて説かずしてプロレタリアートの増進する頹廢と屈従とを問題にしている〉。

〈カウツキーの〔マルクスの〕読み方…は、社会主義の勝利の純唯物論的基礎付けで〔は〕…ない。プロレタリアの成熟は、決して経済的因子ではなくて、倫理的因子であり、その勢力は、政治的もしくは社会政策的因子である〉。

これに対してカウツキーは、『資本論』当該章の引用をもって反証するとともに、〈ベルンシュタインが歴史的必然性と経済的強制とを同一視し、かつマルクス及びエンゲルスが社会主義の必然性をプロレタリアートの成熟と勢力の増進の上に築いたという事実を否定すること〉を再批判した。

カウツキーは、以下のように述べている。

〈プロレタリアートの成熟さと勢力の増進に関する命題は、マルクスの崩壊説の本質的構成部分であるばかりでなく、その特徴的構成部分でさえある。…独りマルクス及びエンゲルスのみの発見したことは、プロレタリアを圧迫する傾向とともに、プロレタリアを高揚する傾向であった。まさに彼等が傑出している所以のものは、単に彼等が、他の社会主義者達と同様に、プロレタリアートの隷属の増加を見たばかりでなく、プロレタリアートの叛逆の成長をも見、また単にその窮乏と壊頹の増加を見たばかりでなく、その訓練と組織、その成熟さと勢力の増加を見たことである〉。

〈この〔マルクス、エンゲルスの〕学説は、資本主義的生産方法のうちに、プロレタリアートを資本家階級に対する階級闘争に追い立て、プロレタリアートをして、益々その数において、団結において、知識において、自覚において、政治的成熟さにおいて増大せしめ、プロレタリアートの経済的 중요さを益々高め、政党としての組織とその勝利を避くべからざるものとなす因子を認めている〉。

マルクスの解釈としては、カウツキーの方が相対的に正しい。だが、ただそれだけである。

マルクスは、資本主義の秘密を暴き、それが“黄昏”にあることを宣言した。マルクスを継承すると

は、この宣言を出発点として、資本主義（的外被）を粉碎する具体的方策を明らかにすることだったはずである。「オスト・ロイテ」（パルヴス、ローザ、そしてレーニン）は、この道を選んだ（それ故に“異端”視されたのであるが）。

しかるにカウツキーは、マルクスの宣言を護教するにとどまった。カウツキーが「正統派」=俗流マルクス主義者たる所以である。

最後にカウツキーは、〈ベルンシュタインが、マルクスの資本主義的生産方法学説に反対する三つの異論がある。即ち第一、有産者の数は減少しないで増加すること。第二、小経営は衰退しないこと。第三、包括的なそして破壊的な恐慌は益々少なくなること〉とまとめ、ここの点の検討に移った。

第一および第二の点は、いわゆる集中論に関することである。ベルンシュタインはこれらの異論を当時の経済現象に依拠して唱え、「皮相的現象」（第一の点）から論を始めたのであるが、カウツキーはまず「現象の基礎」（第二の点）から検討を始めている。

《第2章の(B)について》

カウツキーはまず、〈収奪者が収奪される〉と結ばれる『資本論』の有名な一節を引用し、それについて次のように述べた。

〈資本主義的ヴェールの飛散、資本主義的私有財産の臨終を告げる時の鳴り物、これらは歴史的過程として解釈すべきもので、それらの到来することは避くべからざることではあるが、到来の携帯や速さは予測すべき筋合いのものではない〉。

そして、〈より重要な問題は、果たして資本の蓄積が事実上行われているかどうかということである〉として、本題に入っていく。³⁸

ベルンシュタインは、上の引用部分を「傾向」としては認めつつも、マルクスがその傾向と反対に作用する諸傾向を無視していると批判したのであった。

〈彼 [ベルンシュタイン] は、主要論拠を、ドイツの職業数からとってくる。もちろん彼は、こればかりでなく英、仏、奥、スイス、合衆国からも無数の数字を並べているが、これらの数字は、発達の傾向を少しも示さない。なぜなら、それは、一計算毎の数字にすぎないもので、数箇の連続した計算の数字でないから〉。

カウツキーは、改めて次の点を確認する。

〈資本の集積は、社会主義的社会秩序という歴史的任務を確定している。それは、その任務をはたすための力、すなわちプロレタリアを生産する。そしてプロレタリアは、任務をはたすための手段、すなわち社会的生産を創造するが、社会生産は、それ自ら直ちに任務の解決をもたらすわけではない。この解決は、プロレタリアートの自覚、意志、闘争からのみ可能である〉。

だから、〈まだ多数の小経営の存在を示すところの個々の数字をあげても、我々の研究に対しまったく何の意義をも有しない。それらの数字は、発達しつつある傾向について何ら言うところがなく、また社会主義に対して現社会が成熟する時点も、かような数字から知ることができない〉。

³⁸ 訳者（山川均）が、「集中」と「集積」とをきちんと訳し分けているかはわからない。

カウツキーは、1882～1895年のドイツの統計資料を示して、以下のように主張した。

- ① 〈小経営の数は、なるほど絶対的には増加しているが、相対的には減少している〉。
- ② 〈資本の集中は、すべての産業部門において、必ずしも同加速度で行われぬ〉。〈従業労働者の数を標準とするとき、経営の集中は、商業および運輸業よりも工業において、はるかに多く進んでいる〉。
- ③ ベルンシュタインは、今後なお私経済的に経営することのできる4百万人以上の労働者を擁する数十万の「企業」が残っている、と言った。しかし、その「企業」の多くは、果物売の女、間貸の女主人、裁縫女、洗濯女、等々である。〈中間商業および旅館、料理屋業における小経営の増加は、小経営の生活力の証拠でなくて、小経営分解の産物である。小売商人、小宿屋、間貸人などは、大部分、破産者の逃げ場であり、あるいは、夫の賃金労働と共に妻の労働力を金にする手段なのである。そのいずれの場合でも、かれらはプロレタリアの性質を帯びている〉。また、家内工業は大経営に従属し、搾取されている。
- ④ 農業については、カウツキーはかなりのページを割いた。〈農業にあつては、工業ほど事柄がハッキリしていない〉。〈なかんづく海外における生活資料競争と、農村労働者の一般的離村とは、土地所有の集中ならびに農業的経営の集中を阻止している。で農業問題は、簡単になるどころか、ますます複雑になり、社会民主党がそれらの解決に努力することをもって使命としているところの諸問題のうち、最も錯綜した、最も困難な問題になるであろう。/ だがしかし、以下のことはハッキリ主張し得ると、信じている。すなわち、農業上の諸関係がどのように進化するかもしれぬとしても、農民の数は相対的に減少し、時には絶対的さえ減少するという理由によって、農民というものは、ますます社会全体の進化に影響を及ぼすことが少なくなるということである。…全経済的進化は、農民から次から次へと職能を奪い、商品生産工業、特に大工業にあてがう傾向をもっている。大工業はまず、農民の自家消費に役立つ家内工業を破壊する。…自家消費のための農民の生産の次には、市場を目的とする生産がやってくる。…それに加えて、農業のなかに、工業から生まれた機械や、人造肥料や、排水や、その他のものが入ってくる。…すべてこうしたことから、近代国家においては、農民がますます減退するということが起こってくる〉。カウツキーは、ドイツの資料をもってこれらのことを論証した。
- ⑤ 〈生産から競争を排除すること、すなわち一切の経営を唯一の組織に包括することによって、全産業部門を独占化すること…この独占化は、マルクスの死後（1883年）始めて、経済的意義を持つに至った現象であるが、爾来進展して、ついに資本主義的諸国民の全経済生活および政治生活をもますます支配せんとするに至ったのである〉。

〈マルクスの集中説が単に一面的にばかり正しいのではなく、完全に正しいということ、すなわち、それは資本主義的現実の完全に忠実な描写であるということは、カルテルおよびトラストの最もよく証明するところである〉。

〈カルテルがマルクスに有利な証言をする場合は、彼〔ベルンシュタイン〕はこれを黙殺する。だが恐慌説を論ずるにあたって、カルテルがマルクスに不利な証言をなすものと信ずる場合になると、

彼は始めてカルテルを思い出すのである〉。

《第2章の(C)～(E)について》

この部分は、ベルンシュタインが指摘した「皮相的現象」、すなわち「有産者の増加」というテーゼへの批判にあたる。

(C)について。

〈有産者とは誰のことか？…何かを持っているものを「有産者」であるとするならば、賃金労働者もまた有産者である〉。ベルンシュタインは、「有産者」とは「かれらの財産によってより高い所得を得ている人々」だと言う。まずは資本家を念頭においている。〈しかし、資本家の数が増加することは、マルクスおよびエンゲルスも否定してはいない。この増加は、むしろ、資本主義的生産方法拡大の独立的結果である〉。〈これと同様に、プロレタリアの人口は、非常な勢いで増加している、総人口以上に。…資本家の増加は、プロレタリアートを犠牲にしてではなく、残余の国民層——すなわち小ブルジョアや農民——を犠牲にして行われざるを得ない〉。

また、ベルンシュタインは、「有産者」を中間層と解釈してもいる。さらに、ベルンシュタインに助け舟を出したオープンハイマーは、〈生産と分配の領域を厳重に区別しなければならぬ…。非独立的賃金労働者の数は増加するけれども、ますますかれらは被圧迫無産者でなくなってくる。有産者の増加に関するベルンシュタインの意見は、この意味に解すべきである〉と説いた。

要するに、「有産者」なるカテゴリーは、分配面での「皮相的現象」から生まれたものでしかないということである。

ベルンシュタインが自らの主張の論拠としたザクセンの資料から、カウツキーは、所得が最も急速に増加するのが大所得者層であり、これにつづくのが中位のプロレタリア層であるとの結論を示した。この結論は、マルクス学説に反するものではない。しかし、〈中位の有産者層が賃金労働者および大資本家の数よりも迅速に増加〔し〕…従って社会的対立は鋭くならないで和らいでくるという主張〉にとっては、〈ザクセンの数字は毫も彼の論拠とはならないだろう〉。

またカウツキーは、ベルンシュタインの示したイギリスの数字についても論及している。

〈イギリスは、ますます世界における一種のティールガルテン区〔ベルリンのブルジョア住宅地域〕になるうとしている〉。〈ベルンシュタインが、資本主義的生産方法における有産者増加の法則を、イギリスの統計的数字から引き出そうとするならば、彼は、この増加をば、イギリスばかりでなくイギリスの搾取範囲全体における、プロレタリアの増加と関連させなければならなかったはずである〉。

(D)について

ベルンシュタインは、株主数の増加と有産者増加の一証拠とし、株式会社は集中に対し反対作用を及ぼしていると主張した。カウツキーはこれに対し、以下のように反駁している。

〈株主数の増加は、有産者数の増加を少なくとも証明するものではない。その証明するところは、単に、資本主義社会においては、株式という形態がますます支配的所有形態になりつつあるということにすぎない〉。

〈確実に利回りのいい株式は、大資本家によって差押えられる。小資産者にとっては、非常に利回りのいい株式のうち不確実な証券が残るにすぎない。これらは無産者を有産者に転化さす手段ではなくて、小ブルジョアおよび上級プロレタリアの零碎な貯金を投機者のポケットにねじこむ手段である〉。

〈株式制度は、資本集中の作用を揚棄するどころか、むしろ、最極点まで押しつめる手段である。株式会社という形態こそ始めて、個人資本では堪え切れないような巨大な企業を可能とする。株式会社は、個々経営部門の独占化が行われる形態である〉。

〈株式制度によって明らかに増大されるものは、有産者の数ではなくて、この階級内部における有閑有産者の数である。それは、資本家から、経済活動上資本家の有する諸機能を奪い、そしてそれらの資本家を既に資本主義社会において無用なものにしてしまう〉。資本家階級は、〈ますます…社会体の寄生虫に成長しつつある〉。

〈株式会社の急激な増加によって証明されるものは、有産者の増加ではなくて、資本主義的生産がますます無用になってきたこと、社会主義的生産の可能性が増加してきたこと、否その必然性が増加してきたことである〉。

(E)について

〈ベルンシュタインは、どういう風に、また何故に、社会的富の増進が有産者数を増加せしめるかを示していない〉。それへの「解答」を与えたのが(E)である。

カウツキーはまず、「資本家豪族」（財閥）を取り上げ、〈彼らの間の奢侈や浪費が異常に増加しているという。〈個々の豪族の奢侈や浪費が増加していく一方に、かれらの数もまた急激に、人口あるいは労働者階級よりも急速に増加している〉〉。

〈だが、人民を何ら損なうことなく、ただ資本主義制度の下にある労働生産力の驚異すべき増加によって可能な浪費者の数や浪費程度が増加しているばかりではない。さらにまた、この制度と必然的に関連している非人格的とも言い得る浪費が増加しつつある〉。

「恐慌や軍隊その他の不生産的支出」は、ベルンシュタインも認めていた。〈しかし、軍国主義と恐慌とが、資本主義社会における浪費の唯一の原因ではない〉。カウツキーは「資本主義的生産方法における浪費」を示した。

〈浪費の主要な原因は流行である。流行（モード）の変化は、決して自然法則ではなくて、一定の社会状態の特性である〉。〈流行の急激な変遷がうかがわれる [のは、] …社会の性質が急激に変化する革命時代や、一方では支配階級が非常に多くの剰余価値あるいは剰余生産物を獲得する結果、それを再び手離すためには、少なくともその一部分を濫費しなければならぬところの、また他方では娼婦が社会的一勢力となるところの豪奢時代においてである〉。

また「大都会の増加によって喚起される浪費」がある。①都会を住居に適するような空間にするための土木工事（公園、下水道等は、都市と農村との対立がなければ不必要）。②荒廃した農村から都会への住民移動によって必要となる新住居建設。③農村での別荘建設。〈大都会の増加は、不完全にしか利用されない家屋の絶えざる増加を招く〉。④流通発展に伴う都会内の住居構造の改編、「建物

の絶えざる破壊と新築」。

さらに、失業の慢性化である。これは、「労働力浪費の絶えざる増加」をもたらす。

ベルンシュタインによれば、剰余生産物は有産者の胃袋を充たすことになっている。大富豪の胃袋であってもすべての剰余生産物を包容しうるわけではないから、剰余生産物の増加は新たな胃袋の持ち主、すなわち有産者が増加するという理屈になる。しかし、「普段に増加する過剰生産物の最も重要な放出口」は、資本への転化、つまり資本の蓄積に他ならない。

〈ベルンシュタインは、有産者の増加ということをも…資本家数の増加と解するか、一般人民の生活向上と解するか、あるいはまた没落しつつある旧中産階級に代わる新中産階級の発生と解するか、この点についてハッキリ認識していない。がこの三つの現象は甚だしく異ったもので、たがいに峻別しなければならない底のものである〉。

一つ目の解釈についてはすでに検討した。二つ目、三つ目の解釈の検討がそれぞれ(F)、(G)にあたる。

《第2章の(F)について》

〈「崩壊説」とか「破綻説(カタストロフィー)」とかいう言葉と同じように、「窮乏説」という言葉も、マルクスあるいはエンゲルスから伝わったものではなくて、かれらの思想の批評家から出たものである〉。これは正しい。しかしながら、往々にしてマルクス主義者も、その批判者を論駁する際に「窮乏論」という用語を使いがちであった。

それはともかく、マルクスは次のように述べていた。

〈こうした集中、または、少数の資本家による多数の資本家の収奪と会い並んで、ますます増大する規模での労働過程の協業的形態が、科学の意識的な技術的応用が、土地の計画的な利用が、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化が、結合された・社会的な・労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約が、世界市場の網へのすべての国民の編入が、したがってまた、資本制的体制の国際的性格が、発展する。この転化過程のあらゆる利益を横奪し独占する大資本家の数のたえざる減少につれて、貧困・抑圧・隷属・頹廢・搾取の程度が増大するが、しかしまた、たえず膨張するところの、そして資本制的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織されるところの、労働者階級の叛逆も増大する〉（『資本論』A.7,K.24,§.7）。

これに対しベルンシュタインは、次のように疑問を呈した。

〈マルクスの命題において、プロレタリアート数、結合および訓練の増加を論じている章句が、はたしてプロレタリアートの成熟さと勢力の増進ということに翻訳しうるやいなやということは、プロレタリアートの成熟さと勢力の増進ということが、同じプロレタリアートの壊敗と隷属の増加と合致しうるか、どうかということにかかっている…かような前提をなす場合、数、結合および訓練の増加…と、成熟さと勢力の増進との間には、なお一つの重大な区別、一時的勝利と永続的支配との区別に相応する一つの区別が存在している〉。

つまり、「プロレタリアートの成熟さと勢力の増進」（おそらく、当時のSPDでよく用いられた）というテーゼは、「プロレタリアートの壊敗と隷属の増加」というテーゼとは両立せず、前者を肯定

するのなら後者を否定すべきだ、あるいは、後者を肯定するのなら前者を否定すべきだ、ということである。

カウツキーは、〈「窮乏説」の説明の仕方には三つの仕方がありうる〉として論を進めた。

〈まず第一に、この命題を、互いに相対する二つの傾向——一つはプロの下落、一つはプロレタリアートの向上を指す傾向——を現わすものと解釈しうる。けれども、この二つの傾向の対立は、資本家と賃金労働者の対立自体にほかならない〉。これは〈だれでも知っている現象であ〉って、ベルンシュタインの疑問への解答にはならない。「下落」の傾向と「向上」の傾向との関連を説明していないからである。そこでカウツキーは、二つ目の解釈を提示した。

〈貧窮という言葉は、生理的窮乏を意味することができるが、なおまた社会的窮乏をも意味することができる。前者の意味での貧窮は、人間の生理的欲望によって計られるが、…到底社会的欲望ほどに大きな差異があるわけではないのであって、この社会的欲望の不充足が、社会的窮乏をつくり出すのである〉。

〈労働者階級が生理的窮乏から向上する行程が牛の歩みのように遅々たるものとすれば、すでにそのことからして、かれらの社会的貧窮の増加が絶えず増進する結果になる、なぜなら、労働の生産率は並々でなく急激に増進するものだからである。すなわち以上の事実は、労働者階級が己れ自ら創るところの文化の進歩からますます除外されること、ブルジョアの生活標準はプロレタリアートの生活標準よりも急速に向上すること、両者の社会的対立が増加するということを意味するにほかならない〉。

いわゆる相対的窮乏化論である。

〈決定的なことは、賃金労働者の諸欲望と、かれらの賃金によってそれらの欲望を満足しうる可能性との対立、従ってまた、賃金労働と資本との対立もますます増進するという事実である。この、関係上および精神上力強い労働者階級の貧窮の増加のうちに『資本論』の著者は、最も強力な社会主義への衝動力を認めたので、半獣化した瘰癧〔るいれき 首や脇の下のリンパ線がしこりとなり化膿する病気〕患者群の絶望のうちに認めたのではない〉。

賃金の問題に一面化されている点が残念だが、これはベルンシュタインの疑問への解答となっているだろうか？ 否である。「肉体上及び精神上力強い労働者階級」がどのようにして形成されるかを説明していないのであるから。〈婦人労働の増加は、貧窮の増加という確実な指標である〉等については略。

カウツキーは次の一節を引用し、第三の解釈を示す。

〈第4篇で相対的剰余価値の生産を分析したときに見たように、資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は個々の労働者を犠牲として行われるのであり、生産を発展させるすべての手段は生産者の支配=および搾取手段に転変し、労働者を部分人間に不備化させ、彼を機械の付属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的力能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的力能を彼から疎外するのであり、それらの方法・手段は、彼の労働条件をねじゆがめ、労働過程ではきわめて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服従させ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガーノートのもとに投げ入れる。ところ

が、剰余価値生産のすべての方法は、同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は、逆に、右の方法の発展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の給与がどうあろうと――高かろうと低かろうと――悪化せざるをえない、ということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりもいっそう固く、労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから、一方の極での富の蓄積は、その対極では、すなわち、自分じしんの生産物を資本として生産する階級のがわでは、同時に、貧困・労働苦・奴隷状態・無智・野生化・および道徳的墮落・の蓄積である（『資本論』A.7,K.23,§.4）。

この箇所では、「第4篇」の内容がポイントであり、「貧困・労働苦・奴隷状態・無智・野生化・道徳的墮落の蓄積」を“窮乏化”と概念化すべきではない。しかしながらカウツキーは、この一節をおかしな方向に解釈した。

〈我々は、いままで、賃金労働者階級を論じているにとどまっていたが、マルクスは、資本主義的蓄積の傾向に関するくんだり、国民のうちの別の諸階級についても述べている〉。〈国民中におけるプロレタリアの数の増加は、またそれ自体、窮乏増加の一徴候にほかならぬものであり、さらにまたもちろん、他の国民諸階級内の窮乏増加の一原因でもある〉。

かくしてカウツキーは、次のように結論づけた。

〈窮乏説から転じて、再び、資本主義社会の増進する富はどこにあるかという問題に向かうならば、今こそ我々は、こう答えることができる。いわく、窮乏説は決して、富増殖の一部が労働階級のなかに落ちこむことを妨げはしないと。全く資本主義的生産方法は、残余の国民大衆と等しく賃金労働者階級を低下せしめる傾向を常に帯びており、かつ該生産方法は右によっていよいよますます新しい窮乏をつくり出すのであるが、それはまた、この窮乏を制限しようとする傾向をもつくり出すものである。不斷に増進するものは、生理的窮乏でなくて社会的窮乏である。すなわち文化的諸欲望と、それらを満足すべき個々労働者の手段との間の対立である。換言すれば、労働者の頭に落ちてくる生産物の量は増加しうが、労働者によってつくられた生産物量に対する労働者の分け前は減少するのである〉。

結局カウツキーは、分配の領域、賃金の枠から出ることができなかった。「第4篇」と「第7篇」との関連を理解することができなかつたのである。上の引用からもわかるように、「第4篇」には、労働者階級の叛逆が増大する根拠についてのヒントが多い。

以上を総括するに、カウツキーは、「窮乏化」を否定するベルンシュタインを批判して、「窮乏化」現象を説明してはいるが、労働者階級の叛逆の増大についての説明はおざなりである（この点については、既述した『エルフルト綱領解説』も参照されたし）。静態的かつ理念的な労働者階級観を解体しようとしたベルンシュタインに対する批判に成功していない。

ただし、これはカウツキーの欠陥ではなく、当時のマルクス主義者のレベルを表現していると思われる。労働者は窮乏化すれば立ち上がる、という卑俗な理解も生まれた。

《第2章の(G)について》

すでに見たようにベルンシュタインは、有産者の増加を中間層の増加と考えているような主張もしていた。カウツキーはここで、その問題を取り上げている。カウツキーは次のように言う。

〈もしもベルンシュタインの言わんとしたことが、中産階級は死滅せず、ただ旧中産階級の代わりに新中産階級、すなわち独立的手工業者および小売商人の代わりに「インテリゲンツ」が現れてくるのみということにとどまっていたとすれば、我々は、彼に対して、猶予なくこのことを承認したであろう〉。

すでにカウツキーは、1895年に、「インテリゲンツと社会民主党」と題する論文を発表していた。この論文を踏まえ、カウツキーは以下のような述べている。

〈この人民層 [インテリゲンツ] 成長の主たる原因は、支配階級であり搾取階級であるものが、彼らの機能をますます多くの有給の知的労働者に譲渡し、かれら知的労働者は、彼らの仕事をば、医師や弁護士や芸術家のように、小刻みに売るか、あるいはあらゆる種類の役人のように固定的俸給によって売るかどっちかであるという事実に基づいている〉。

〈社会進化が国家や地方自治体や科学に置くところの任務が大きくなればなるほど、彼等（[忠誠の] 僧侶と貴族）から奪われた機能自体はますます拡大され、かつこれら进行处理する労働力の数は年々増加してゆく〉。

〈株式制度によって、資本家は全然無用になってしまった。実に株式制度というものは、企業の最高命令さえも、雇人に引渡すものである。株式制度が高級使用人の数を増やすことに力を添え、またこのようにして中産階級の形成を促進するということは、まったく疑う余地がない〉。

このように、カウツキーは「新中産階級」=知識人の増加を近代に固有のものとして見ていた。カウツキーは続けて、「新中産階級」の性格を論じる。

〈新中産階級は、旧中産階級と全然違った基礎の上に成長するものである。すなわち旧中産階級は、その生存基礎を生産手段の私有財産制度の上に置いていたのだから、強固な城壁をつくっていたのである。新中産階級は、まったく別な基礎の上に拠っている。生産手段の私有財産制度というようなものは、かれにとって、ほとんど何等の役割も演じていない。かれが独立的労働者としてその職能を果たす場合、生産手段はつねにほとんど最小限の価値しかない——例えば画家、医師、著述家のように。生産手段が資本としてその職能を果たす場合、「頭脳労働者」は全部賃金労働者として現れるもので、資本家としては現れはしない〉。

〈新中産階級は、ブルジョアジーから発生したもので、多種多様を極めた血縁的なおよび社会的な諸条件によってブルジョアジーと結合し、生活標準もブルジョアジーと同等である〉。

〈インテリゲンツィアとプロレタリアートとの間の最も広い範囲にわたる対立は、インテリゲンツィアが特権階級を形成しているという事実によってつくられている。彼らの特別待遇的地位は、教養という特権を基礎としている〉。より高い教養の一般化は、〈「頭脳労働者」をプロレタリアに落とすことになる〉。だから、インテリゲンツィアの一部は、教養の一般化に反対する。

〈あらゆる障害にかかわらず、民衆教育は拡がってゆく。だがこれと共に、インテリゲンツィアの層は相次いでプロレタリア化してゆく〉。一部は、プロレタリアートの側に立つようになる。

〈けれどもインテリゲンツィアの層のうち、…なお依然として、プロレタリア的な感情もまた資本

主義的な感情ももっておらず、かれらの見解に従えば階級対立の上に超然としているという広汎な層が残っているのである。この中産階級の間層は、社会的地位の曖昧な点で、昔の小ブルジョアと共通している。…しかし二つの要素が、この中間層と昔の小ブル階級とを区別している。…一方ではこの中間層は、その広汎な精神的水平線と訓練ある抽象的思考能力とによって、旧小ブルジョアと区別されている。…他方では、それは、闘争能力の欠乏によって、昔の小ブルジョアと区別される。…かれらは、階級闘争を嫌忌し、階級闘争の撤廃ないしその緩和をも説法する〉。

〈これらの僅かな暗示によってもすでに、増加しつつあるインテリゲンツィアは、闘争的プロレタリアートにとって重大な、かつ興味ある問題を自らのうちに包蔵している一階級であることがわかる。かれらを全部プロレタリアートに味方するよう求めることは、誇張であろうが、彼らを簡単に「有産者」のなかに勘定することは、なお一層誤りであろう。我々は、範囲の狭いこの層のなかに、資本主義社会全体を特徴づけるところの一切の社会対立が融合していることを、見出すのである。しかしまた我々は、社会全体におけると同様、この小宇宙においても、プロレタリア的要素が発展しつつあることを、発見する〉。

以上、カウツキーの議論は、「闘争的プロレタリアートにとって重大な、かつ興味ある問題」と言いつつ、伸中産階級=知識人が「有産者」ではないという論証に偏っている。その非実践性において、新中産階級を吸収すべきとするベルンシュタインと対照的であった。また、なぜ、ベルンシュタインこそ「階級闘争の撤廃ないしその緩和をも説法する」インテリゲンツィアの一人だということに思い至らないのか？

増加しつつある知識人については、フランスでも注目されていた。ポール・ラファルグ（1842～1911）は、「社会主義と知識人」と題する講演を行なっている。また、二極分解論をめぐってラファルグと仲たがいし、ベルンシュタインと親交があったジョルジュ・ソレル（1847～1922）は、カウツキーの言う「インテリゲンツ」が様々なカテゴリーをごっちゃにしたものであることを批判し、学校制度を通じて上昇してきた技術者、公務員、小学校教師など経済的に劣位にある層を議論の出発点にすえて、理論を深めていった。

ベルやソレルがいただいていた、知識人の増大による新たな階層制（知的エリートによる管理・支配）への危惧は、カウツキーにはない。

なお、1900～01年に、カウツキーは社会主義的知識人の役割について述べているが、これはまた別の問題である（周知のように、レーニンは『何をなすべきか』でその主張を引用した）。

《第2章の(H)について》

強硬論批判はベルンシュタインにとって、資本主義崩壊論批判の一つの要素であった。その際ベルンシュタインは、SPDの主張を、資本主義を崩壊せしめる最終恐慌が迫っていること、その恐慌後に社会主義が実現するというようにまとめていた。これに対しカウツキーは、SPDはそのような主張をしていないと反論する。

カウツキーはまず言う。〈資本集中説および社会対立激化の学説に比較しては、周期的経済恐慌説

は、第二義的性質のものにすぎない。経済的恐慌は、前述の進化の作用を強大にして、資本の集積行程を促進し、プロレタリアの数およびプロレタリアの地位の不安を増さしめるものである。しかしながら、この進化の究極の影響については、周期的恐慌の基礎を必ずしも資本主義的生産方法の本質のうちにおかない場合でも、何ら変わるところはないだろう。〈従って恐慌を、ベルンシュタインの研究にした社会主義の諸前提からまったく穏やかに分離することができる〉。

その上でカウツキーは、〈恐慌に関する章を設けるに至らしめたところの二、三の誤解を除くために、以下のように述べた。

〈10年毎の恐慌周期は断じてマルクスの学説ではなくて、経験的に確立された事実である〉。〈マルクスは、恐慌周期を発明したのではなく、観察し、説明したのである〉。

カウツキーは、恐慌の原因を商品生産の無政府性に求め、過剰生産として説明している。なぜ周期的恐慌は「第二義的性質のものにすぎない」のか？ それは、カウツキーが単に景気循環にすぎないと理解しているからに他ならない。

景気循環の運動に加え、生産および市場の不断の拡張というもう一つの運動がある。この二つの運動を〈混淆してはいけない〉。

〈この二つの運動——一方には産業周期、すなわち事業の繁栄、恐慌、停滞および再生の循環と、他方では生産およびその売捌市場の拡張に対する不断の衝動——は互いに交錯して、あたかも一箇の運動のような観を呈している。…けれども社会進化にとっては、この二つの運動は、同じことを意味しはしない。恐慌は、資本集積の促進およびプロレタリアの生活状態の不安増加によって、従ってプロレタリアを社会主義の両腕に追いこめる刺激の深刻化によって、社会主義の方向へ影響を及ぼすものである。これに反して市場拡張の絶えざる必要は、なお一つそれ以上の要素を含んでいる。すなわち資本主義的生産方法は、市場がもはや生産と同じテンポで拡張されえない、ということが判ってくる歴史的瞬間〔！〕以後、言いかえれば過剰生産が慢性的になるや否や、不可能になるということとは明白である〉。

二つの運動の関連は説明されていないが、カウツキーが第二の運動こそ社会主義の必然性を証明するものだと考えていることは明らかであろう。

〈不治の慢性的過剰生産、それは資本主義的支配が一般的に勢力を揮いうる最後の限界を意味するものであるが、必ずしも資本主義的支配の死因を意味するものではない。…唯物史観は経済的役割のほかに、なお社会進化の別の因子——なるほどそれは経済に動機づけられているが、それにもかかわらず様々な観念的倫理的性質を帯びたものであり、また我々が階級闘争の容姿のうちに内包している——を認める…。プロレタリアートの階級闘争は、資本主義的生産方法がまだ分解の段階にはいない前に、それを倒壊せしめることができる。慢性的過剰生産の論証が大世界恐慌の予言と同意義でないとすれば、一般的に言って、資本主義的生産没落の特殊様式の予言とも同意義ではない。慢性的過剰生産の論証の意義は、その論証が、現在社会の生存能力の最端限界を確定することによって、社会主義をば、今日非常に多くの社会主義者達がそこへ社会主義を追いやっているところのかの模糊としたとした世界から我々の方へ一層地下寄せられ、かくて社会主義が、恐らく500年後に実現せらるべき——またおそらく実現されないかもしれない——目的であることから、実際政策の見通しの利く

かつ必然的な一つの目的になるという点にあるのである)。

改めて指摘しておくが、カウツキーを経済決定論者とするのは正しくない。カウツキーの特徴は、自然成長的な階級闘争発展論にある。

最後にカウツキーはカルテルに言及した。

カルテルにあっては、〈供給だけが制限されるのであって、生産は制限されない。生産はできるだけ拡張されて、余剰は外国で売捌かれる〉。

保護関税に守られたカルテルが「恐慌の因子」となることは、ベルンシュタインも認めている。自由貿易は過去のものとなった。

カルテルやトラストは、世界経済における投資競争の刺激や陶器の刺激によって、〈恐慌を促進する作用を及ぼす〉。³⁹

《第2章の(I)について》

第2章のまとめにあたるのであるが、ベルンシュタインの主張していることはエルフルト綱領には書かれていない、つまり、ベルンシュタインの解釈が間違っている、という以上のことは述べられていない。エルフルト綱領を修正する必要はないということである。

〈これらの〔ベルンシュタインの〕意思および感情は、彼の説明のように、いまも昔も社会民主主義的である〔!〕〉。

《第3章のについて》

この章は「戦術」と題されているが、むしろ政治理論といった方がよい。しかも、〈これは、彼の著書では、最も広汎な部分を占めるが、我々にとっては、ごく簡単に片づけられるものなのである〉との言葉が示すように、原則の定時にとどまっている。

(A) について。

カウツキーは、ベルンシュタインの主張を次のようにまとめた。

〈社会民主党の胸の中には、革命的なものと改良的なものと、二つの魂がある。しかし革命的な魂はただ伝統的なものにすぎず、改良的なものこそ実際の現実から生まれてくる。革命的精神は、いまはまだ社会民主党の言葉を支配し、改良的精神はその行為を支配する。社会民主党が、そのあるがままの、すなわち民主的社會主義的改良党として現れるだけの勇気を持つ場合、社会民主党はすべての園内的矛盾から解放され、敵の恐るべき攻撃の鋒を挫くであろう〉。

ベルンシュタインが示した、協同組合、労働組合、自治体社会主義の意義一般に関しては、〈全然見解の相違などはない…。この相違は、これらの領域の一つ一つにおいて、プロレタリアートの解放闘争のために働きうるところの限界を確定することが問題となる場合に、初めて起こってくるのである。…協同組合や、労働組合や、自治体政策の実行能力（ライストウングフェーイヒカイト）に關す

³⁹ 山川均は、イギリスを扱った箇所、「合衆王国」という訳語を用いている。原語はフェアアイニグテス・ケークライヒ（United Kingdom）であろう。つまりunitedが「合衆」なのである。

る問題は、それらと国家政策との関係如何の問題と、最も密接に結びついている〉。

こう述べて、カウツキーは、経済闘争と政治闘争との関係の説明に移る。

ベルンシュタインの信奉者ウォルトマンは、次のように述べていた。〈政権を獲得せんとするプロレタリアートの努力は、その以前にそれが労働組合と協同組合の組織によって経済的勢力を獲得していない限り無駄である〉、〈労働者階級は、経済的組織なくしては、政治的権利と勢力とを闘い取ることは不可能だ〉。

これに対してカウツキーは、〈この経済的組織は、自らを發展させうるためには、「権利と勢力」とを必要としないだろうか？ 団結権と組合権がなくては、労働組合や協同組合はどうなるだろうか？〉と反駁し、「経済的努力と経済的組織との混同」を指摘して、次のように述べている。

〈プロレタリアートの根本的な経済的勢力とは、経済的発展によって自動的に生み出されるものである。しかし手最高の、それ以外のすべてに刻印を捺すところの階級闘争形態は、ここの経済的組織の闘争ではなくて、社会組織中最も力強い組織、すなわちxx [伏字、以下同] を目的とする全プロレタリアートの闘争である。従ってそれは政治闘争である。それは究極において決定的な闘争である〉。

また、次のように言う。

〈経済、政治両闘争の相対的意義においては、資本主義的産業の波動に似たところの、ある種の変動が生じうる。すなわち、資本主義的産業が好景気と教皇との間を変化しているのと同じように、我々は、政治上においてもまた、政治的領域における大闘争、急速な進出の時代——政治的「革命」の時代——と、経済的組織の発展、すなわち社会的「改革」が正面に現れるところの政治的沈滞時代とが、交替するのを見る。そうして…産業的波動と政治的波動の間には、単に似通っているということのみでなく、一つの連関が存在しているのである〉。

恐慌時には〈すべてのものは政治闘争へと突進する〉（1848年）が、好景気時代には経済闘争が前面に出る。

〈我々は、1850年と同じような環境、すなわち政治上の反動と経済上の飛躍という環境にある。しかしその間には、資本主義的発展とプロレタリアの階級闘争との半世紀、結社の自由が行われるようになった人間一代が横たわっている。1850年の環境が、ヨーロッパ大陸におけるあらゆる労働運動の完全な停止を意味していたとすれば、1899年のそれは、単に、経済闘争が正面に立ち、労働大衆が政治的活動によるよりも労働組合および協同組合の組織による方が、現在より多くを獲ることができるという見込みを立てていることを、意味するにすぎない〉。

ベルンシュタインの書物の「弱点」は、今日の環境から、〈今日の任務についてではなく、「社会民主党の任務」一般を論じている〉ことにある。

〈ベルンシュタインは、この目前の政治的および経済的状态を、社会の正常な状態だと説明し、この政治的沈滞をば、遅々たるものではあるが確実に民主主義と社会改革の道を歩んでいるものと説明し、今日の前代未聞の好景気をば無限に続くものと考え、かくて国家と社会の発展行程についての考え方において、一つの楽観論に到達する〉。

〈ベルンシュタインが、伝統的革命的文句と、現実的改革的見解との対立と考えているものは、一

部分は、これまでの現代生産方法の現象全体から創り出された見解と、現象中のほんの一つを考慮して持ち出された見解との対立に他ならぬ)。※

最後にカウツキーは、次のように述べている。

〈社会民主党の戦術は、まさにその理論的基礎によって、何よりも適応性をもっているのである。それは、どのような思いがけぬことに対しても用意があり、決して一本調子の発展に頼ってはいない。恐慌も好況も、反動も革命も、カストロフィーも、ゆっくりとおだやかな発展も、ともに考慮している。…社会民主党は、あらゆる情勢を利用するものであって、前以て自ら両手を縛るようなことはしない〉。

(B) について。

〈対立はこれ [上の※の引用] ばかりではなく、今一つ実際上ずっと重要な対立がある。ただし前者の対立は、主としてプロパガンダの方面に関係するものだが、後者の対立は、我々の実行運動にも関係があるのである〉。

つまり〈プロレタリアートは、独立せる階級党として組織するがいいか、それとも他の階級と合して大きな民主党をつくるがいいか〉、〈我々は社会民主党の綱領および戦術をすべての民主主義的階級ないし層に開放させるように作成すべきであるか〉、〈社会民主党は非プロレタリア階級の階級利益にも役立つように、つくらねばならぬかどうか〉が論じられる。

まず、労働者階級は均一ではなく、利害の対立があるという主張に対し、カウツキーは次のように反論している。

〈資本家の方では、労働者の教養、練達、組織などのあらゆる特権を抑圧し打破しようと試み、かつ早晩それに成功する。自分をプロレタリアよりいくらかましだと考えているような労働者の層は、順次に他との水平線に押し下げられて、全大衆との連帯意識を持つに至る〉。

〈プロレタリアートに対する資本家階級の強力な経済的圧迫、これこそは資本主義的搾取の生存条件ではないか？ このことからこそ、両者の間の階級対立が生ずるのではないか？〉。

次にカウツキーは、階級支配の撤廃を意味するというベルンシュタインの民主主義論を批判した。ベルンシュタインは、民主主義を「単なる支配形態というより以上のもの」と言う。〈単なる支配形態より以上のもの—だがやはりそれも支配形態である。…民主主義は…多数支配の形態である〉。

〈民主主義は、階級支配撤廃になくはならぬ前提条件ではあるが、その理由とするところは、民主主義というものがプロレタリアートの階級支配へ達しうる唯一の政治形態をなすものであり、プロレタリアートは最下層の階級として、一切の階級差別撤廃のために、必然的にそれを利用しなければならぬということである。プロレタリアートの階級支配なしには、階級の撤廃はありえない〉。

〈ベルンシュタインは、プロレタリア独裁の思想を憤然と拒否する。…私は、プロレタリアートの階級支配が階級独裁の形態を採らねばならぬとは誓うまい〉。〈問題となるのは、果して民主主義は経済的進化から必然的に起こってくる階級対立の先鋭化に対して、プロレタリアートの階級支配を無用ならしめるという風に、反作用を及ぼしうるかどうかということである。理論も実践も共にその反対を物語っている。プロレタリアの独裁の問題に関する決着は、我々はこれをまったく安んじて将来

の残しておいてさしつかえないだろう〉。

続いてカウツキーは、自由主義の問題について論じた。ベルンシュタインは、〈自由主義への宣戦布告は慎め〉と主張していた。

〈我々は、自由主義もまた同様に社会主義をも、一定の歴史的現象として把握しなければならぬのであって、…少なくとも社会民主党が、それに対して宣戦を布告したところの、かの自由主義は、非常に具体的な現象である、すなわちベルンシュタイン自身が「純然たる資本主義の防塞」であると成したところの自由主義政策である〉。

カウツキーは、1793年憲法および1795年憲法とバブーフの関係を説明しているが省略。

ベルンシュタインはチャーティストを例にとり、急進的ブルジョアとの結合を実現するために、「革命的振舞い」を批判している。これに対してカウツキーいわく、〈民主的集合党というものは、ブルジョア的指導によってのみ可能なものである。一般的民主党が、かような指導の下ではもはや不可能であるならば—そしていたるところにそれは崩壊しつつある—指導階級としてのプロレタリアートに取ってはますますもって不可能なわけである〉。

またカウツキーは、〈民主主義獲得のためにプロレタリアートと協力するものとしてどんな階級が考えられるであろうか〉と問い、小市民や小農は「資本家に、大農になることによって」「自己の境遇を改善せんとするが故に、一時的提携はありえても、〈決して引き続いて一つの組織の下に協力することはできない〉とした。〈インテリゲンツィアは、社会民主党を階級党たることから人民党へ押し広げることにも最も熱心な努力をなすものである〉。

カウツキーは言う。〈問題はこうである、果たしてプロレタリアートの解放戦が、非プロレタリア的階級利益のための闘争たりえないかどうかということである。この問題は、エルフルト綱領によって、決定的に否定されておる〉。

以下カウツキーは、社会民主党の最終目標について論じた。

〈社会民主党の性質が、プロレタリア党であるか、はたまた民衆党であるかによって、その終局目的も違ったものにならねばならない〉。

〈プロレタリアートが、意識的に階級闘争を闘うところの自主的政党として自らを組織する時、資本家の生産手段の私有財産制度および資本主義的指摘生産の揚棄が、その党の目的とならねばならない。その党は、社会主義をば、自由主義の完成としてではなく、自由主義の征服として、かれの軍旗にしなければならない。またその党は、民主主義的社会主義的改良に限定される党ではありえないので、よろしく社会××の党であらねばならない。/ いうまでもなくここでいう革命の概念は、警察的意味、すなわち武装せる暴動意味を言っているのではない。…革命的だという意味は、政権を手にした場合、社会民主党はこの政権を、現在の社会秩序の上に立てられている生産方法征服のため以外に全く用いえないことを、意識しているという意味である〉。

〈社会革命のみならず、政治革命をも暴動と一緒にたにはいけない。非警察的な用語法での政治××とは、国民の政治生活を促進し、最も力強く脈打たせるところのすべて大きな政治的××をいうのであって、政治機関を静止させるところの震動である反××と対立するものである〉。

〈我々の政策の終局目標の問題—××か、はたまた改良への限定かということは、現在の政党とし

てのプロレタリアートの組織と宣伝との問題に密接に結びついていることは、明らかである〉。

(C) について

カウツキーは、小見出しに次の一文を添えている。〈これこそ、真剣に、ベルンシュタインが提出し、しかも一一否定しているところの問題である〉。

ベルンシュタインは、〈我々はすでに、階級撤廃のために必要な生産力の発展程度に達しているだろうか?〉と問うた。これに対しカウツキーは、〈社会が社会主義のために成熟していると断言しうるような生産発展の一定段階を定めることの不可能さを示すことで片付けている。

かくしてこの項では、〈今日まだまだかれら〔労働者階級〕は政治的支配を引受けるほどまでに充分発達していない〉というベルンシュタインの主張への反駁が中心になる。ベルンシュタインは、〈プロレタリアートはまったく先進諸国の人民の絶対多数を占める…。ただその場合、この「プロレタリアート」はとてつもなく雑多な要素の混合であって、…欲求と利害とが多種多様に異なっている〉と述べていた。

これに対してカウツキーは言う。〈もしプロレタリアートが、その個々層の利害の相違のために、支配階級になりえないとすれば、どうしてブルジョアジーは支配するに至ったのだろうか?〉。〈ブルジョアジーだけでもすでにプロレタリアートよりより以上に分裂している〉。〈もしもプロレタリアート内部の相違がすでに、社会民主党を分裂に、その政治的支配を不可能ならしめる程度までに及んでいるとしたならば、社会民主党をプロレタリア党から人民党へ拡張することによって、かような対立にさらに他の対立を加えて、それで一体社会民主党はどうなるだろうか?〉。

〈かれら〔プロレタリア〕の間の差別は、アチテーションの場合にしばしば我々の感ずるところである。…工場労働者は先頭に立ち、商業労働者およびいうまでもなく農業労働者は後陣にとどまる。後の二つの層が完全に我々の手に入るまでにまだ多くの困難な仕事が我々に課せられていることは、一点の疑いもない。けれどもこのことは、社会民主党が、我々の間にいまだかつて何人も思いめぐらさなかったところの任務を果たすところまで、まだいってはいないのである。この際、経済的発展は、社会主義に一番速く接近しうべきプロレタリア層を、最も多く増加せしむることによって、我々の宣伝を非常に有効に支持してくれている〉。

またベルンシュタインは、〈ドイツには約450万の成年工業労働者があるが、そのうち社会主義的選挙人〔SPDへの投票者〕は僅か210万しかない〉と述べた。

これについてカウツキーは言う、〈ここでは非常に不可測な事物が互いに比較されている一一青年労働者と選挙人とが〉と。

青年工業労働者数から選挙権のない者（女性労働者、25歳以下の労働者）の数を除くと、〈僅か300万人の工業労働選挙人しかない〉。そして、棄権の割合が他の人民と同じだと仮定すると、〈ドイツ社会民主党の投票数〔ママ〕と選挙権を有する工業労働者の数とは、ほとんど完全に合致する〉。

〈30年のうちにまったくの無力から国内の最強力の党となり、その勢力範囲がすでに一国の4分の3を包容し、かつますます広がってゆくところの党、ただ一つの大きな階級によって支持される必要

がある結果として、他のいかなる党も不可能な団結と統一とを獲得し、またその宣伝と組織とにおいて最も力強く経済的發展によって支持されているところの党——かかる党 [SPD] は、支配の地位に達すべき時点を、実際測りえないような遠くへおいて考える必要は、毫もないのである。30年の間に最強の党となったところのものは、あとまた30年の間に支配的党となるだろう、恐らくもっと早いだろう）。

ここでカウツキーは、「時期尚早の勝利」しかない、と。〈我々に残された仕事は…眠っているばかりである。我々は、悲し必然によってまだまだ我々の勝利を体験しようという圧迫的意識を抱きながら、闘争を継続することを余儀なくされる〉。

ところで、プロレタリアートが未熟であるとすれば、小市民および小農はさらに未熟である。〈もしベルンシュタインの説が正しいとすれば、プロレタリアートの支配のみならず、普通選挙権の支配もすでに無意味である。そうだとすれば民主主義に用はない〉。

〈進歩的な民主主義は、現代の工業国家では、プロレタリア的民主主義としてのみまだ可能である。だから進歩的なブルジョア民主主義は没落することになる。ブルジョア民主主義者の間では、プロレタリアートの支配に対する恐怖観念が横溢すると、彼らは古い自由主義者となる。もしもかれらが進歩的民主主義を固執するならば、かれらはプロレタリアートの支配という思想を是認しなくてはならない。…プロレタリアートの支配の必然性と、プロレタリアートの政治的成熟に対する確信のみが、今日なお、民主主義的思想を普及させる力を与えることができるのである〉。

さらにベルンシュタインは、〈精鋭分子にあてはあることを、無批判的に大衆に…負わしてはならない〉と言う。これに答えてカウツキーは、次のように述べている。

〈いかなるところでも先陣を承るものは精鋭分子だけであって、かれらの政治的能力如何が、その階級の成熟さを決定するものである。…従ってプロレタリアートの政治的支配というものは、最初は事実上単にその精鋭分子の支配を意味しているだけである——ブルジョアジー支配の場合、貴族支配の場合、その他一切の支配階級に見ると同様に〉。

〈社会民主党が必然的にやり損わねばならないということは、全然根拠がない話である〉。また〈外見から見ると、ブルジョアジーの全進歩は失敗した革命の間に行われた〉。〈かような [やり損ないの] 革命は、民主主義的階級が政治的に成熟するまで、延期しておけると考えることが〉不合理ならば、〈プロレタリアートが政治的成熟さを欠いているという叫びには、一体どんな意味があるのか?〉。

最後にカウツキーは、原則を提起して筆を置いている。

〈我々の任務は、プロレタリアートの政治能力を何らの根拠もなく小さくいうことによって、プロレタリアートをその闘争の最中に落胆させることではなくて、プロレタリアートの政治能力にできるだけ沢山要求し、その政治無力をできるだけ高めるために全力をつくすことにある。かくて刻一刻プロレタリアートをその実行能力の最高点に達せしめようとするのである。/ だがこの任務に属することは、我々がプロレタリアートを組織し、かれを助けてよりよき生活条件および労働条件を戦いとらせることのみではない。それに加うるに我々が、プロレタリアートの眼界をその瞬間的、職業的な利害のほかまでおし広め、全プロレタリアの利害相互間の大きな関係および一般の社会的利害との大き

な関係を認識させることも任務である。またさらに、かれをしてより高い精神を生活に目覚め占める大きな目的を、かれに与え、かつ日常の瑣事…以上にかれを高めるということも、任務の一つである。我々は次のことを注意せねばならない。小事に拘泥することがプロレタリアートとその目的を墮落せしめぬよう、また遠大な根本政策の代わりに臨機応変の日和見的な拙いやり口がはいりこまないように、言い換えれば無趣味な平凡事が理想を蔽いかくさないように、また、プロレタリアートに与えられた偉大な歴史的使命の意識が失われないように――)。

《小括》

以上、『駁論』の中心は、その分量からいっても第2章にあり、次のように要約することができる。破局説・崩壊論のようなものはエルフルト綱領には記されておらず、そこに述べられている資本主義の矛盾の強まり（小経営の没落、窮乏化、階級対立の激化、恐慌）は、「傾向」として正しい、と。従って、SPDの性格も終局目標も変える必要がないとして（第3章）、カウツキーはエルフルト綱領を防衛した。

カウツキーによるベルンシュタイン批判の限界（というよりも罪だが）は、論争をマルクス経済理論の解釈問題に矮小化した点にある。後述するが、一般党員は修正主義論争をインテリ間の争いにすぎないと捉えていた。⁴⁰

ベルンシュタインの主張の核心は、それまでSPDがア・プリオリに抱いていたプロレタリアート概念を解体し、プロレタリア革命を否定したところにある（だから現代でも、プロレタリアートを革命主体としない思想はベルンシュタインに似てくる）。カウツキーは、このことの意味を見そこなった。プロレタリアート（の多数性）の「軽視」という批判にとどまっている。カウツキーのプロレタリアート認識は、それまでのSPDと変わりが無い。資本主義の発展（工業化）によってその勢力が伸張し、得票数がそれを示している、というものである。だが、それこそ綱領が依拠するいわば大状況のなかでの「傾向」でしかなく、戦術・政策・は小状況をも考慮しなければならない（さもなくば教条主義に陥る）。カウツキーはこの側面が弱い。

それを示しているのが第3章である。カウツキーは、「革命も、改良も」という原則を対置した。カウツキーは改良の「限界」は指摘するが、それと革命との関係は説明していない。つまり、改良闘争に原則のタガをはめるにとどまる。そればかりではない。好況期には改良闘争が前面に出るとして、当時の状況でのベルンシュタインの戦術を容認さえしているのである。改良闘争への専心がプロレタリアートにどのような精神的影響を及ぼすか、これこそベルンシュタインとの論争で説明すべき点であったが、カウツキーにはこの視点が欠落していた（この点を明確に意識していたローザが存在していたが故に、この批評は単なる後知恵ではない）。⁴¹

⁴⁰ ベルンシュタイン主義者までも〈政治的および経済的解放のためのプロレタリアートの階級闘争の基盤に立っている〉と評した経済主義者を嘲笑して、レーニンは次のように述べている。〈ベルンシュタイン主義がこんなにも急速に広まったのは、近年、社会主義運動に「学者」層が広く参加してきた、まさにそのことによって保証されたものだ〉（『何をなすべきか』）。

⁴¹ 第3章でのカウツキーの言辭に『何をなすべきか』との類似点を見た読者もいたであろう。然り、『何をなすべきか』はカウツキーを継承しているような形式をとりながら、内容においてはカウツキーをも批判しているのである（レーニンが自覚していたかいは別として）。

修正主義論争は帝国主義論形成の契機となったという議論がある（はなはだしいのになると、修正主義論争は帝国主義論によって止揚された、と主張される）。日本に多いように思われるが（といっても、外国の文献に詳しいわけではない）、宇野派の影響だろうか。

しかし、このような理解はベルンシュタインの美化であり、マルクス経済理論の解釈論争という把握の系譜につながるものでしかない。田中良明の次の主張は傾聴に値する。

〈ベルンシュタインの思想を規定していたのは、…最先進国であるイギリスを遅れたドイツは見習うべきである、という思考である。これは、歴史の単系発展論であり、…バックス批判、文明化使命論による植民地容認につながる思考である〉（前掲書）。

ベルンシュタインの評価に際して、彼の植民地容認論は決して見落としてはならない。仮にベルンシュタインが帝国主義論形成の契機になったとすれば、それは彼が、帝国主義的労働者の意識を先駆的に表現したからである。

なお、『論駁』の直前にカウツキーは、「新旧植民地政策」という論文を発表している。そこでは、ホブスンに先立って、植民地獲得が「大金融業者」の利益に結びつくことが述べられ、それが資本主義の寄生性・腐朽性をもたらすことが指摘されている。しかしカウツキーは、植民地政策が資本主義の発展阻害するという理由で、それに反対するにとどまった（ベルンシュタインへの批判はない）。

また、『論駁』の直後にカウツキーは、「恐慌諸理論」と題する論文を発表したが、テキストを入手できていない。

前ページの【注41】について少し補足しておく。「『何をなすべきか』との類似点」とは、〈どのような思いがけぬことに対しても用意があり〉や、〈プロレタリアートの限界をその瞬間的・職業的な利害のほかまでおし拡め〉などのくだりを指す。カウツキーにあっては、前者は、「革命も改良も」という原則の言い換えにすぎず、革命を将来の出来事とする場合、改良主義の容認を意味する。また後者について、カウツキーはその手段・方法を述べていない。

さらに、上記部分脱稿後に気づいた点を書いておく。「資本制的蓄積の歴史的傾向」についてのカウツキーの理解（エルフルト綱領1～5パラグラフ）は、『空想より科学へ』（『反デューリング論』）に示されたエンゲルスの「社会化」論に依拠したものではないか、ということである。恐慌論、資本家不要論もまた然り（慢性的過剰生産論は『資本論』Bd.3,A.5,k.27へのエンゲルスの書き込み）。

周知のように『空想より科学へ』第3章は、「社会的生産と資本主義的取得の不調和」を「根本矛盾」とし、それが一方では「プロレタリアートとブルジョアジーとの対立」として、他方では「個々の工場における生産の組織化と全社会における生産の無政府性との対立」として現れる、としている。ここでこの図式を検討する余裕はない（この図式からプロレタリアートを革命主体として措定できるか、という疑問がある）。以下の点の指摘にとどめる。

所有論においてマルクスの場合、労働と所有の結合→分離→結合という展開が軸とされていた。小経営の解体をもたらす本源的蓄積は、労働と所有との結合の否定であり、その暴力的性格が強調されている。これに対して『空想より科学へ』では、小経営の解体過程が手工業と工場制との商品経済的競争によるものとして描かれ、個人的取得という形態の維持として捉えられている。そして、生産の

「社会化」に対応する所有関係の「社会化」が展開の基調となっているのである。

一例をあげよう。エンゲルスは独語第4版（1891年）において、トラスト論をつけ加えた。第18パラグラフは次のように述べている。

〈トラストとなれば、自由競争は独占にかわるのであり資本主義社会の無計画的生産が迫りくる社会主義社会の計画的生産に降伏するのである〉。

「競争=無政府性=資本主義」と「組織性=計画性=社会主義」という対比は明白であろう。そしてエンゲルスは、個人企業→株式会社→トラスト→国有という具体的形態をもって「社会化」の進展を描写した。いわばエンゲルスは、マルクスの抽象的な「集中」論を実体化したのである。

社会主義の自然法則的必然性を求めるカウツキーにとって、この説明はありがたかったに違いない。資本主義から社会主義への転化の形態を棚上げすることができたのだから。

エンゲルスの「社会化」論は、カウツキー・第2インターの時代にとどまらず、スターリン時代まで支配的影響力をもった。おそらく今日の日本共産党の御用学者も、その影響下にあるはずである。

ix) ハノーファー党大会

ローザのパンフレットは、〈修正主義に反対する者の知的な結集点をつくりだした〉（ネトル前掲書）という。

〈彼ら [「修正主義のもっとも練達した実務家」とされた南ドイツのSPD指導者] の方は、ベルンシュタインを擁護するためではまったくなく、みずからを守るために反撃していた〉。〈かれらは、やかましい部外者に――外国人などもってのほかということ――反撃することに決めた。その結果かえって腰の重い指導部が、容易には表に出さなかった怒りを、すべて、かれらにたいして、向けることになった。なぜなら、修正主義のもっとも実践的な現れは、無規律や不服従であり、それは遠心力をもったブルジョア的影響にたいする門戸開放だったからである〉（同）。

1899年9月、ローザは「きたるべき党大会によせて」と題する論説を発表した。そこでローザは、「ベルンシュタイン、シッペルおよび日和見主義派の他の代表者との論争」が党大会の中心になるという前提のもとで、以下のように述べている。

ベルンシュタインらは、自らへの批判は「誤解」に基づいていると言う。〈しかし誤解は、彼の理論にひそむ秘密を暴露し、それを背信として糾弾する人の側にあるのではなく、逆に、彼の言葉、宣言を説得的なものとみなし、党原則の観点からみて彼の理論には「何ら新しいもの」はないと考える人の側にこそあるのである。このような誤解は、ことに労働者サークル出の多くの同志の内に見いだされる。かれらは事情によって、ベルンシュタインの見解のより発展した帰結を顧慮したり、彼が党と同じ言葉を使っているにもかかわらず、彼の発言の真意を全体から取り出すだけの時間と可能性を持っていないのである〉。

〈日和見主義的見解と他の黨員の見解との間の…対立の核心は、最終目的と実践闘争の対置の中に存在している。われわれが政治的自由あるいは社会改良のために闘っているのは、ただ国家権力の掌握と既存社会の止揚にいたる前段階としてであり、この闘争においては最終目標が支配的かつ規定的な契機なのである。それゆえ、すべての闘争は原則的で敵対的な性格をもつ。この闘争にさいして、

現存の社会に対するわれわれの非和解的立場に合致する手段だけが行使される。またさらには、闘争そのものを労働者階級の社会主義的啓蒙に利用するのである。/日和見主義の観点からは、すべてが逆転して見える。すべての政治的、社会的改良を社会主義の部分的な実現とみなし、したがって闘争の目的とみなすならば、このような目的をもたらすすべての手段も同様に有益なものに見える。…そのさい一方では、大衆の社会主義的啓蒙は全く余計なものとなされる。…/他方では、ブルジョアの改革にすべてを期待するがぎり、社会民主党の姿勢から従来の非和解性が失われる。…/以上のように労働者階級とブルジョワジーの同質性、共通の基盤を称揚すること、非和解的な階級対立を抑制することから、いわゆる国民的利害への理解が生じてくる。国民産業の保護…、国民的「防衛」…、三国同盟…、「理性的」植民政策…への理解がこれである）。

また、ベルンシュタイン擁護のために、「批判の自由」がもちだされている。しかし、〈われわれがどんなに自己批判の自由を行使し、許容範囲を最大限ひろげたとしても、最小限の原則というものが存在しなければならない。この最小限とは、われわれの本質や実存によって形成され、ある政党の党员としてわれわれの協同活動の根拠をなすものである。このような最小限の全般的原則について、われわれの隊列内部に「批判の自由」という原理を適用することはできない。…われわれは一つの自由を与えうるのみである。すなわち、わが党に所属するか、しないかの自由である〉。

〈党大会で論議の対象となるのは、科学的、理論的問題ではなく、党の原則、戦術に関わる極めて実践的な一連の問題であり〉、〈かれら [ベルンシュタイン、フォルマル、シッペル、ハイネ等] の戦術、国家、ブルジョアジーへの態度に関しては、党の指導部は決議することが許されるし、可能でもあり、それが義務でもある〉。

〈ベルンシュタイン一派の「批判」が、その内的本質と傾向を暴露する上で十分あますところなく展開された後では、今や、この批判の帰結に政治的総体として党が明確な態度を表明し、次のように宣言すべき時であろう。この批判は墮落の理論であり、わが陣営内にはこのようなものが入る余地はない、と〉（ローザは除名を念頭においている）。

日和見主義の危険性はどこにあるのか？

第一に、〈ベルンシュタインは決して孤立しているのではなく、党内のある傾向全体の理論的代言人であり、その歴史的発展の最後の一分枝を代表している〉こと。すなわち、エルフルト党大会以降、〈フォルマルのまいた種が草むらの中で繁茂した〉。

第二に、〈いわゆる「現実的政策」に熱中している同志が党の一連の重要ポストを占め、かれらの見解を実践に移し、拡大するのが保証されているということである。すなわち、かれらの編集者として多数の党機関紙を占有し、帝国議会、邦議会の議員としての多数の議会の演壇を牛耳っている〉。

第三に、〈「現実的政治家」の圧倒的多数が純粋な若い青年層であるということである。かれらはおもともと党の後継者であり、10年、15年後には編集者や代議士として運動を代表すべき運命を託されているのである〉。

最後にローザは言う。党の態度表明は大会議題の戦術および民兵制問題に関する決議でなされねばならないが、〈「従来の戦術から離れる根拠は見出しがたい」云々と言明する〉だけではベルンシュタインらも同意するであろう。〈ベルンシュタインおよびシッペルの見解は従来の活動とも党の原則

や戦術とも相容れないこと、また同大会はこれを毅然として拒否することをあからさまに宣言しなければならぬ。

またローザは、機関紙と議会活動についての措置を提案している。

①〈党大会は、すべての党機関紙、とりわけ第一に中央の機関紙に、党活動がもたらす実践的問題に関してすべて論評するのみならず、明確な態度を表明することを義務づける〉。

②〈党大会は、帝国議会議員団にたいして、議会活動の領域で生じた重大な意見の差異についてはすべてかれらなりに態度を表明し、その態度を公開して全党に知らせることを義務づける〉。

③〈次回党大会（1900年）の議題の内に邦議会選挙での社会民主党の戦術の論議をふくめることが実践的にきわめて重要である〉。

1899年10月9～14日、ハノーファーでSPD大会が開かれた。

〈執行部はただ、参加者に個人的な責めあいに陥らないように、人をではなく問題を論議するように、求めただけであった。ベーベルやアウアーにとって、理論は、依然、有用な安全弁であって、党の政治的統一をそこねるものではなかった〉（ネトル前掲書）。

この時点で、ローザが求めた日和見主義者の除名は不可能になっている。

戦術問題（ベルンシュタイン問題）を議題とする会議において、ベーベルが6時間の演説をおこなったというが、内容不明。3時間の弁説をふるったダーフィットをはじめとして、労働組合幹部らがベルンシュタインを擁護した。カウツキーは、次のように述べたらしい。

〈私は理由無しにベルンシュタインに反対する処置をとりたくない。なぜなら、われわれすべては、ベルンシュタインを、数十年間の長きにわたって、われわれの側に立って来た同志と認めており、彼が党を過ちに導く可能性のある見解を発表した時、彼に対して処置をとるべきであるが、必要もないのに彼を苦しめるべきではないと私が語るならば、それは党内にある一般的感情に表現を与えたことになるからである〉。

この「一般的感情」こそ、ローザが危惧したものであった。

〈公式の方針に対応して、ローザは演説の内容を主に理論問題にしぼった〉（ネトル前掲書）。彼女は〈労働者階級は、政治革命を成功させる以前に、まず今日の社会秩序の枠内で、経済的実権を獲得せねばならない〉という主張を批判して、次のように述べている。

〈新興階級はつねに新しい所有形態をつくりだし、その基礎の上に最終的に階級支配を打ち立てた〉というこれまでの階級闘争の公式を現在の状況に適用することは、〈現在の階級闘争と今日までのあらゆる階級闘争との間の大きな違いを見すごしている。…プロレタリアートは、私的所有の新しい形態をつくるのではなく、かえって、資本制経済によってうみだされた資本制的所有を完成し、それを社会の所有にゆだねるのである。だからプロレタリアートが、今日の市民社会の内部で、経済的実権を手中におさめることができるなどと考えるのは、まったくのイリュージョンにすぎない。プロレタリアートはまず政治権力を手中におさめ、その上で初めて、資本制的所有関係を廃止することができる〉。

〈これまでのあらゆる階級闘争は次のような経過をたどった――すなわち、新興階級は、旧社会の

胎内で、小規模な進歩や法の改正によって、しだいに自己の力をたくわえ、成長をとげ、ついには、社会的政治的破局を足がかりにして旧来の桎梏を粉碎できると感じるようになる。新興階級が、旧支配階級の胎内ですでに最大限の経済的実権を獲得している場合ですら、この最後の一撃が不可欠だった。まして我々の場合、それは十倍も必要であろう。…我々は我々を支配する資本主義的経済機構を根こそぎ転覆することをめざしており、それは国家権力の獲得を通じてのみ可能なので、今日の社会の胎内でいくら社会改良をつみ重ねても、それだけで達成できるものではない。

最後にローザは、「実践的な問題」について述べた。

〈我々の党には、彼ベルンシュタインと同じ立場に立つ同志たちが少なからず存在し、この意見の相違は、抽象的な理論の面だけにおこったのではなく、党の実践活動にも関係しているのだ。ほぼ十年來、われわれの陣営内に、ベルンシュタインの見解の線に沿って、我々が現在までに達成した事柄をそのまま社会主義であるかのようにみせかけ、そして——もちろん意識的にはないが——我々がめざしている真の社会主義を、スローガンや空想ではない唯一の社会主義を、革命的な空文句におわらせようとする、かなり強力な流派がうまれてきていることは、周知の事実である。…ここ十年來の党の歴史をおもいおこし、特に党大会議事録を詳細に検討すれば、ベルンシュタインの路線がしだいに勢力を増してきたこと、しかしまだ圧倒的な勢力にまでは成長していないことが、あなたがたにもはっきり見てとれるはずだ。…現在の段階では、かれらはまだ、かれらの路線の旗色を鮮明にうち出してはおらず、かれら自身の傾向を正確に表現する言葉を見出してもいない。ベルンシュタイン理論のあいまいさの原因はここにある〉。

ハノーファー党大会の陰の主演は、アウアーであった。彼は大会で、〈自分がこの学説を自分の理解力をもって受け入れようと努力してきたかぎりにおいて〉、マルクスの学説の支持者であることを認めたが、〈マルクス主義の教父たちによって、こんなふうになんかだんだんと作りだされてきたような意味でならば、私は、マルクス主義者ではありません〉と述べている。そして、〈ベルンシュタイン問題全体について、自分は一行といえども公にしたものを残していない〉と満足気に語ったという（アウアーについては後述）。

アウアーはベルンシュタインに、次のように書き送っている。

〈親愛なるエデ [ベルンシュタイン] よ、君が要求していることは人々が何か決議したり、しゃべったりするような事柄ではなく実行する事柄だ。われわれの全活動は——恥辱的法律下でのわれわれの全活動も——社会民主主義的改良党の活動であったのです。大衆を考慮する党は決して改良党以外になり得ないのです〉。

またアウアーは、大会前に決議案をベルンシュタインに送り、次のように書き添えていた。

〈いたるところ適度な小粒の塩が利いているので、われわれ全員——というのは君をも含めて——がこの文書に署名できないような理由は、私には見当らない。理論上の論争点……はすべて、触れられないままだし、したがって未解決である。戦術の点では、現行のままだ。ということは、ほとんどの場合、われわれの行動は、君の要求通りということだ。ただ、われわれは、君の要求するところではあるが、実際には党の自殺を意味するような行動は、やらない、というまでだ。——はっきりいって

しまえば、従来の慣行から目を転じて、新形式を適用するという事は、やらないのだ。戦術面で考慮を要するのは、われわれだけではなく、相手側の行動もまたそうなのだ。だが、とりわけ――私が君に書いたことでもあるように――行動はそうであっても、それを口に出すことはしないのだ。

ベーベル=カウツキーの本質は見抜かれていたのである。

他方、アウアーはベーベルに次のような手紙を送った。

〈エデの問題では、あなたの以前の欠陥が再び現れています。あなたの熱中のな面が、あなたを狭量にしているのです。結局のところ、「新しい戦術」はすべて、党の10分の9によって実際にはすでに行われていることでありながら、今まで公けには表明されていないことにほかならないのです。…もしあなたが目下のところ、あなたの報告において、およそ、あなたの決議案の線のところで自制して、攻撃的になりすぎるといえることがなければ、われわれは、その一件をやり過ぎしていたでしょう。…願わくは、ハノーファー後は、このエピソードには、その深刻な性格がなくなって欲しいものです。ただ、われわれの綱領には修正が必要だ、という認識だけは残しておくべきでしょう〉。

〈ハノーファーの党大会は、ベーベルの激しい攻撃のあとで論争が行われたにもかかわらず、アウアーの意向通りに進行した。というのは、採択された決議は、ベルンシュタインに、党内で引き続き活動することを可能にしたからである。それゆえアウアーもまた、正当な状況判断から、20ページにわたるベルンシュタインの根本方針宣言書〔不明〕を読みあげるのを中止した〉（シュタインベルグ前掲書）。

ただし、執行部選挙において、アウアーは得票数を落としている。「最終目標」をおちよくったことが原因らしい。

〈執行部を代表してベーベルが提出した案をより先鋭にする目的で彼女〔ローザ〕は決議案を提出した。…ほかならぬ老ヴィルヘルム・リープクネヒトが支持をあたえたということが主な理由で、大会は先鋭な方の決議案を採択した〉（ネットル前掲書）――検証不能。ローザとリープクネヒトとの“和解”は成ったが、リープクネヒトの余命は一年もなかった。

216対21で採択された決議は以下の通り（どこが「先鋭」なのか?）。

SPDハノーファー大会（1899年）

修正主義に対するベーベルの決議

ブルジョワ社会のこれまでの発展は、この発展にかんする党の基本見解の放棄ないし変更をせまるものではない。

党は以前と同様に階級闘争の基盤の上に立っている。すなわち、労働者階級の解放は、労働者階級自身の仕事としてのみ可能であり、したがって、政治権力を獲得し、この権力を用いた生産手段の社会化と社会主義的生産様式・交換様式の導入によって最大限の福祉を樹立するのが、労働者階級の歴史的任務であると考え。

この目標を達成すべく、党はその基本見解と一致し成功を約束するすべての手段を利用する。社会民主党は、ブルジョア政党の既存国家秩序・社会秩序の代表者・擁護者としての本質と性格について見誤ることはないが、次のような事柄が問題となっている限り、その場合

場合に応じてブルジョア政党との共同歩調を拒否しないこともある。その問題とは、選挙における党の強化、人民の政治的権利および自由の拡大、労働者階級の社会的状況およびその文化的任務の促進の点での真剣な改善、反労働者的かつ反人民的な傾向との闘争である。しかし党は、その行動のいかなる場合においても、完全な自律性と独自性を保持し、獲得した成果はその最終目標に接近する単なる一步としてしかみなさない。

党は経済協同組合の設立にたいしては中立である。党は、このような協同組合がその組合員の経済状況を改善するのに必要な前提条件を備えている場合には、その設立を適切なものとする。また党は、このような協同組合の設立が、労働者の利益の維持・促進を目的とするすべての労働者組織と同様に、労働者階級が自身の事柄を自律的に遂行しうるように教育するための適切な手段であるとする。しかし党は、この経済協同組合が、労働者階級の賃銀奴隷制の軛からの解放にとって何ら決定的な意義を持っていないと考える。

陸軍・海軍での軍国主義との闘争、植民政策との闘争において、党はこれまでの立脚点を堅持する。党は、国際政策においても、普遍的連合の基盤に立って共同の文化的任務を果たすべく、諸民族、まず第一に種々の文化諸国の労働者階級の協調と親睦をめざしたこれまでの政策を堅持する。

以上すべての観点からして、党には、その基本原則、基本要求、戦術の変更、更には党名の変更——すなわち、社会民主党から民主社会改良党へ——を行うべき理由は何ら存在しない。そして党は、既存国家秩序・社会秩序に対する党の立場をブルジョア政党に対して偽装し、あるいは変更するという事に帰着するようすすべての試みを断固として拒否する。

ローザが予想したように、原則、戦術、党名の変更を行うべき理由は存在しないとの言明には、改良主義者も同意したのである。

『フォアヴェルト』の編集員の募集に際して、志願者に対する質問事項は、次のようなものだったという。

〈ベルンシュタイン問題についてのあなたの立場はなんですか。ハノーファー大会のベーベル決議の立場と同じだという答えはしないでください。なぜなら、ご承知のように、ベルンシュタインもその決議を支持しているのですから、答えとしては不十分です…〉。

まるで笑い話ではないか！

後にベルンシュタインは、次のように書いている。

〈党大会が終了すると、逆にアウアーが二人の同志を伴ってオルデンツァール [ドイツとの国境線に密接するオランダの小都市] の私のもとへ出かけてきて、ベーベルや党の他の要人たちからよろしくとの伝言を取次いでくれ、私との間に一つの声明 [不明] を申合せた。それで私は、自分の立場を否定することなく党内にとどまれることになった〉（『一社会主義者の発展のあゆみ』）。

10) ベルンシュタインの帰国

1) 1900年

1900年には義和団事件が勃発し、ボーア戦争も続いていた。英独仏露日伊墺の8カ国が連合して中国に派兵し、事件後の不平等条約の調印国にはスペイン、ベルギー、オランダも加わった。これらの諸国（およびポルトガル）が世界を分割しており、帝国主義世界が現出していたのである。

同年9月にマインツで開かれたSPD大会では、ドイツの「世界政策」が議題の一つとなった。シェーンランクとレーデブーア（1850～1947、のちに独立社会民主党に参加）の論争が興味深い。シェーンランクは、ドイツの「世界政策」（帝国主義）の核心を、ヴィルヘルム二世の「個人的支配」＝「絶対主義」の政策と見た。これに対してレーデブーアは、帝国主義的政策が種々のブルジョア資本主義に共通していることを指摘し、「資本主義の最終段階における世界的現象」とみなしたのである。SPDの帝国主義認識としては、後者の見解が優勢となっていく。

またレーデブーアは、社会主義の隊列内においても「資本主義社会における帝国主義という害毒」にかかっている人が増大していることを指摘し、ベルンシュタインとシッペルを例としてあげている。『ノイエ・ツァイト』の通信員を解任されたベルンシュタインは、演壇を『ゾツィアリスティッセ・モーナーツヘフテ』（社会主義月報）に移した。『社会主義月報』は修正主義派の理論機関誌となっていく。同誌はブロッホ（1871～1936）が創刊し（1895年）、寄稿者はベルンシュタインの他に、カンブマイヤー（1864～1945）、グンプロヴィッツ（1838～1909）、オッペンハイマー（1864～1943）、ハイネ（1861～1944）、シュミット（1863～1932）、ダーフィット、シトロウスキー、ヴォルトマン（1871～1907）、コルプなど。

マインツ党大会は、世界政策に反対する決議とトランスヴァール戦争（ボーア戦争）に反対する決議を採択した。また同大会では、国内通商政策＝「鉄道の帝国移譲」問題をめぐる論争があったが、省略。

同大会においてベーベルは、アウアーの勢力を抑えるために党規約を改正している。それまで急進的なベルリン組織から派遣されていた二人の統制委員会メンバーに、党執行部候補委員を兼任させることにした。

なお、マインツ党大会の直後に開かれた第2インター・パリ大会においても、軍国主義・「世界政策」に反対する決議、植民地政策に反対する決議、ミルラン入閣問題に関する決議が採択されている。大会でのアウアーの次の発言は、記憶にとどめておきたい。

〈確かに、ミルラン事件のようなものは、我々のところではまだ起こっていません！ 我々は、まだそこまで進んでいないのです！ だが私は期待しています。我々も、できるだけ早くそこまで進むことを〉。

2) ベルンシュタインの講演

1901年2月、ベルンシュタインは22年ぶりに帰国した。アウアーらが政府に働きかけたことによるものであり、また、宰相ビューロー（1849～1929）は、ベルンシュタインの帰国を認めることでSPDの分裂を狙ったともいう。ベルンシュタインは自由主義者たちに注目されていた。

同年5月、ベルンシュタインはベルリンの社会科学学生連盟で、「科学的社会主義はいかにして可

能か」と題する講演を行なった。〈この講演には自分たちが精力的に擁護する人物ベルンシュタインの肉声をこれまで一度も耳にしたことがなかった多くの修正主義者に混って、アドルフ・ワグナー [1835～1917 講談社会主義右派] ら幾人かの著名人も出席した〉（ゲイ前掲書）。

ベルンシュタインは後に、次のように書いている。

〈この講演は、社会民主党の綱領や実践に批判を加えるようなくだりを全然含んでおらず、もっぱら理論的論究の領域だけで論旨を進めていた。また私は、社会民主党の闘争で窮極目標を特に強調することが是か非かをめぐってかつて論争があったことを考慮して、今回は自制に徹し、さらに、そのような窮極目標の協調を不可欠と考えている人びとに対してこの講演中で最大限の譲歩を示したのであった〉。

〈この講演は、経済の諸問題については結局のところ『社会主義の諸前提』ですでに触れられた以上のことを何も言っていない。けれども、社会主義理論の諸問題については、同講演は、『社会主義の諸前提』の中ではまだ発見されていなかったものをいくつか含んでいる〉（以上『一社会主義者の発展のあゆみ』）。

講演は同タイトルの小冊子にまとめられ、出版された。検討してみよう。

a) エンゲルスからの引用—剰余価値論について

〈エンゲルスは社会主義の科学性を二つの理論的主張から導きだした。そのひとつが剰余価値説である。… [『空想より科学へ』からの引用] この説明にもとづけば、剰余価値の科学的証明と社会主義とのあいだには、剰余価値という事実から社会主義の必然性が導き出されるという形で、ひとつの内的関連があるはずであろう。しかし、われわれは、このような推論を否定するたくさんの文章をマルクスとエンゲルスに見いだすのである〉。

ベルンシュタインは、まずこのように切り出す。そして、その典型的な文章として、エンゲルスによる『哲学の貧困』ドイツ語版序文（1884年）をあげた。以下、当該部分を引用する（㊦㊧㊨は便宜上引用者が付した）。

〈㊦労働者たちだけが真の生産者であるから、かれらの生産物たる社会的生産物はそっくり全部かれらのものであると教えるリカード理論の前述のような応用は、まっすぐに共産主義に通ずるものである。㊧しかし、マルクスが先に示唆しているように、これもまた経済学上からいえば形式的に間違っている。なぜなら、これはただ道徳を経済学に適用することにすぎないからである。ブルジョア経済の法則によれば、生産物の大部分はそれをつくりだした労働者たちのものにはならない。だからといって、そんなことは正しくない、そんなことがあってはならない、などと我々が言ったとしても、それは経済には無関係である。我々はただ、このような経済的事実は我々の道徳 [倫理] 感と矛盾している、と言っているにすぎない。であるからこそ、マルクスは決して彼の共産主義的諸要求の基礎を道徳 [倫理] 感においたためしはなく、我々の眼前で日ごとに実現の度をましつつあるところの資本制的生産様式の必然的崩壊の上においたのである。彼はただ、剰余価値は不払労働よりなる、と——これは純然たる事実だ——行っているだけである。㊨しかし、経済学的見地から見れば形式的に間違いでありうることも、世界史の見地から見ればやはり正しいことでありうる。大衆の道徳 [倫

理] 意識が一つの経済的事実を、昔なら奴隷制ないし農奴制を、正しくないものとみなす場合、これは、その事実そのものが一つの遺物であること、ほかの経済的諸事実が発生し、それらのために前の事実が耐えがたいもの、支持されがたいものになったことを証明する。故に、経済学上の形式的な誤りの背後に一つの極めて真実な経済的内容がかくれていることがありうる)。

ベルンシュタインは①の部分で、〈エンゲルスが、社会主義は剰余価値という事実から科学的に導き出されるとする理論に対して断固たる反論を加えている〉との“要約”をもって省略している。つまり、資本家と労働者の不等価交換を不正として「労働全収権」を主張したリカード派社会主義と、マルクスの剰余価値論とを区別していない。従って、②の最後の一文を、次のように説明するにとどまった。

〈人と人との関係を問題とするかぎり、搾取(アウスボイトゥンク)とは、つねに倫理的に排斥されるべき搾りあげ(アウスヌッツンク)なのであり、また一掠奪物(ボイテ)という語との言葉としてのつながりからしてもわかるように一偽装した形での盗取(ラウブ)なのである。だから、個々人としてではなく、社会的に眺めるならば、資本家たちは労働者階級の盗取者または掠奪者として立現われるのである)。

さても倫理主義的説明であることか。「12・18路線」の資本主義批判で強調されたことだが、マルクスは、直接的生産過程における不払労働の搾取そのものを批判対象としたのではない(その搾取の批判という枠内からは、経済主義的・組合主義的意識しか生まれない)。剰余価値の資本への転化が繰り返されれば、つまり資本蓄積が増進すれば、いつかは資本家が投下する資本のすべてが過去の不払労働の成果の蓄積になる。そうなれば、資本家の貨幣所有を正当化していた根拠は消滅し、他方、労働者にとって労働と所有の分離は永遠化し、それがさらなる搾取を可能とするシステムが、「賃金奴隷制」なのである。

〈奴隷と奴隷所有者との関係の連続性というのは、奴隷が直接的強制によって維持される、そのような関係のことである。これに反して、自由な労働者は自分で関係を維持しなければならない。というのは、労働者としての彼の存在は、彼が資本家への自分の労働能力の販売をたえず更新することにかかっているのだからである) (『経済学批判(1861~1863年草稿)』)。

①についてベルンシュタインは、次のように解釈した。

〈社会の社会主義的変革の必然性を証言するのは、剰余価値という事実そのものなのではなく、大衆による剰余価値非難なのである。剰余価値が搾取と判定されることは、所与の秩序が耐えがたいものであることの証拠なのであり、…所与の状態が維持されがたくなっていることの指標なのである。一ただ、このような維持不能性は剰余価値の占取のうちにはなく、他の経済的事実のうちに求められねばならないというまでのことである)。

「大衆による剰余価値非難」は「剰余価値に対する大衆の倫理的憤怒」ともいわれている。そして次のように続く。

〈もしこれが正しいとすれば、…それは、剰余価値の発見をもって社会主義は科学になったという命題を覆すものである。…ここで示された論議に従えば、それ[剰余価値の発見]は社会主義のため

の科学的能力を失うのである。いやそれどころか、…それは所与の社会に反論する科学的証明であることすらおぼつかない〉。

さらに、〈マルクスの企てる剰余価値の演繹があらゆる点で人々により承認されるか否かは、これに関するマルクスの研究の大部分がもつ認識価値にとってみれば、かなりな程度にどうでもよい〉とまで言う。もちろんこれは、ベルンシュタインが、マルクス剰余価値論を、自ら生産した生産物の価値を労働者は全額受け取ってはいないということの確認だと捉えているからにすぎない。ベルンシュタインは、自ら引用している『空想より科学へ』の次のくだりを理解できなかったのである。やや繰り返しになるが、引用しておく。

〈次のことが証明された。すなわち、不払労働の取得こそが資本主義的生産様式の、およびこれによって行われる労働者搾取の基本形態であるということ。資本家が労働者の労働力を、それが商品として商品市場で持っているその価値いっばいを買う場合ですら、なお資本家はそれから、自分がそれに支払ったよりも多くの価値をつかみ出すのだということ。そしてこの剰余価値によって形成される価値額が、結局、有産階級の手のなかに絶えず増大する資本量が積みあげられてゆく源泉なのだということ、である。資本主義的生産ならびに資本の生産の経路が解明されたのである〉。

さらにベルンシュタインは、八にある「ほかの経済的諸事実」を、「資本制的生産様式の必然的崩壊」を指すものとみた。そして「崩壊説」や「窮乏化理論」を批判しているのであるが、『諸前提』の繰り返しであるので省く。

⑧に似た内容を、マルクスも書き残していた。次に示すのは『経済学批判要綱（グルントリッセ）』の一節である。

〈労働能力が生産物を自分自身のものだと見抜くこと、そして自己の実現の諸条件からの分離を不埒な強制された分離だと判断すること、それは並外れた意識であり、それ自身が資本に基づく生産様式の産物である。そしてそれがこの生産様式の滅亡への前兆であるのは、ちょうど奴隷が、自分はだれか第三者の所有であるはずがないのだ、という意識をもち、自分が人間であるという意識を持つようになると、奴隷制はもはや、かるうじてその人為的な定在を維持することしかできず、生産の土台として存続することができなくなってしまったのと同じである〉。

とりあえず、不正意識（倫理感）も歴史的なものであることを確認されたい。なお、「並外れた意識」の成立過程を理論化したのが、階級意識論（階級形成論）だと言えよう。⁴²

(b) カントと社会主義

ベルンシュタインは、次のような現状認識を示した。

〈実際運動の面で社会主義がたえず興隆を遂げつつあり、…他方、科学としての領域では、社会主義は…理論の壊滅に向かっているように見え〉る。

だから、次のような問いが生まれる。〈社会主義と科学とのあいだには、そもそも内的関連が存在するのだろうか。科学的社会主義は可能なのであるか。そして…科学的社会主義はそもそも必要なの

⁴² 引用した『グルントリッセ』の一節については、マルクス・シンポジウムへの植村邦彦氏の報告原稿に教えられた。それを目にするのができたのは幸運であり、植村氏に感謝する。また、植村邦彦「労働と所有の不正義」（姜尚中／斎藤純一編『逆光の政治哲学』（法律文化社 2016）も参考にした。

か)。

これについては、カント『学として現れうるであろう将来の形而上学のためのプロローグメナ [序論]』に学ぶべきだ、とベルンシュタインは言う。カントは、①いかにして形而上学はそもそも可能か、②いかにして学としての形而上学は可能であるか、と問題を立てていた。

〈われわれは、カントと同じ批判的精神で問いを立てるのでなければならない。…社会主義と科学との関係を論じるのである以上、まずわれわれは、社会主義という語のもとにそもそも何を理解する必要があるのかを明らかにしなければならず、そののち、つぎの問いに移ってゆくのでなければならない。いわく、科学的社會主義は可能であるか。そしてそれは、いかにしてであるか〉。

まず、〈社会主義とは何か〉という問いに、ベルンシュタインは次のように答えている。

〈社会主義とは、ある特定の社会秩序についての像、表象、教義であるといえる。また、社会主義とは、ある特定の社会秩序に向かっての運動として把握することができる。しかし、…いずれとして把握するにしても、その場合、社会主義にはつねに、ある理想主義的要素が混和している。…だから社会主義は、…われわれが実証的経験をもつものの彼岸にある。それは、あるべきものなのである。あるいは、あるべきものに向かって運動するものなのである。…概念の混乱をすべて回避しようというのであれば、社会主義という言葉を極めて曖昧な観念であるsocietasすなわち、社会（ベゼルシャフト）から導きだすのではなく、はるかに規定性の強いsociusすなわち、同志（ゲノッセ）あるいは同志組織（ゲノッセシャフト）から導きだすのがよいであろう〉。

かくしてベルンシュタインは、かつてと同様、社会主義・「ゲノッセシャフトリッヒカイトへと向かう運動」という定義を確認した。そして、次のように述べて、第一部をしめくくっている。

〈科学的社會主義というものが語られるとすれば、それは、社会主義的志向の根拠づけ、社会主義的諸要求の根拠づけ、つまり、これら諸要求の根底にある理論でしかありえない。…科学としての社会主義は認識に立脚する。運動としての社会主義は、その最重要動機としての利害関心により導かれる。…認識は利害関心を呼び覚ましたり、導いたりすることができる。しかし、認識自身は、それがなんらかの利害関心と内的結びつきをもたず、またそれと融合しないかぎり、対外的には不活性である。他方、物質的ないしイデオロギー的利害関心は、認識作業を促し、認識の伝搬に役立つことはできるであろう。しかし、意識的かつ意図的にそれが行われるのはつねに、認識がこの種の利害関心の目的を支援するか、あるいは、少なくともそれを損なわないかぎりにおいてだけなのである。したがって、認識の主体としての科学と、各個の政治的、経済的、思弁的利害関心のあいだには、ひとつの対立関係がつねにありうるのである〉。

第一に、「実証的経験をもつもの」とその「彼岸にある」ものとの、存在と当為との対立的把握、第二に、理論（認識）と運動（実践）との対立的把握という二元論が、ベルンシュタインの議論の特

【補論】久松俊一のベルンシュタイン論

本稿冒頭に示したような現状認識がベルンシュタインの出発点であったと主張するのが、久松俊一「ベルンシュタイン社会経済思想の生成」（京大経済学会『経済論叢』第99巻第5号 1967.05）および「ベルンシュタインの社会観」（同第100巻第1号 1967.07）である。いわく、〈一方の側に、労働組合の日和見主義的な自己運動、他方の側に、SPDの教条理論の閉鎖的な自己運動——この両端の間であって、社会主義運動の担い手である党と階級は、その勇氣的統一を断たれている。そして、この統一を阻害しているのは、まさしく《待機主義》とそのものである。党の《組織生命の枯渇化》、これがベルンシュタインの痛切な危機意識を醸成したのであった〉。

この論文は気になっていたのであるが、このたび読むことができ、1967年の時点で以下のような論説を発表していたことに驚いた。⁴⁴

これまでのベルンシュタイン評価は、〈「戦争と革命」におけるSPDの裏切りと挫折から所謂「修正主義」を照らし出すという視角をとっているために、結局は、その源泉がベルンシュタインの理論にもとめられて、かれの政治的立場のためにかれの全思想が糾弾されてしまうということになる〉。このような方法を排して、〈ベルンシュタイン「修正主義」の生成過程に内在し、追思惟することによって、その後のベルンシュタイン「修正主義」の辿った運命に対する視座が開かれ、こうして、それをマルクス主義思想の大きな流れのなかに正しく——かれの理論的・政治的限界の指摘をふくめて——位置づけることができるのである。ここにはじめて、ベルンシュタイン「修正主義」思想の可能性を——そして、われわれに向かってつきつけられる問題性を、問うこともできよう〉。

鎮圧法下において議員団の日和見主義化が批判されたのであるが、指導部はその原因をアメとムチという「異常事態」に求めたのに対し、「一種の非合法的党内組織の形成を余儀なくされされていた都市の下部党员」は「議会主義そのもの」にその原因を求めた。後者が「若手組（ユンゲン）」を形成する。

ビスマルク体制崩壊は、SPDの急進的立場よりも、〈選挙において支持大衆の増大として現れたような、議会主義の成果という側面の方が大きかったといえよう。だが、党指導部においても、この後者の側面は決して自覚的には問題とされなかった。つまり、通常「理論と実践の分裂」あるいは「理論と政策の媒介論理の欠如」と批判される新綱領（エルフルト綱領 91年）の性格は、そして所謂

⁴³ ゲイは、〈ドイツ語のWissenschaftは一般に英語の同義語として使われるscienceよりはるかに意味の広い言葉である。ドイツ語の方は一定の明確な方法によって体系と一般性を樹立せんとするあらゆる分野を含んでいる。他方scienceの方は、帰納法及び経験的内容を強調する特殊な方法論を持つ物理学や化学などの自然科学に主として限定される〉（前掲書）と述べている。これが正しいとすれば（浅学にしてわからない）、ヴィッセンシャフト（単に「学」と訳せると思う）ではなくサイエンスがベルンシュタインのいう「科学」に近い。ちなみに西周は、「百科の学」であるフィロソフィー（哲学）に対し、「百科の学のうちの一科の学」という意味でサイエンスを「科学」と呼ぶことにしたという。

⁴⁴ 読者の一部の方は、久松俊一氏はよくご存知だろう。私（江口）の記憶では1970年以降、共産主義者同盟関西地方委員会の中央書記局員として活動されていたように思う。1969年までは関西大学の経済学部専任講師（あるいは助手）として教壇に立っていたようだ。どういう経緯かは不明だが、69年には排斥された、との回顧を関大名誉教授の山本繁紳氏（山本義隆氏の実兄）が書いておられたが、その文章は手元にない。（江口）

「急進的」な党指導部の性格は、例外法〔鎮圧法〕の刻印を受けた党内矛盾への無自覚の結果なのであった。したがって、新体制の面して現れた2つの潮流…「若手組（ユンゲン）と…フォルマールの改良主義とは、まさしくこの矛盾の直接的かつ無自覚的な現われに他ならなかった）一なるほど。

〈この両者の党指導部批判を自覚的に受けとめたのは、ほとんどベルンシュタイン以外になかった〉と述べ、久松は1893年の「2つの小論」に注目する。久松のまとめによれば、それは、①「若手組」をも含む無政府主義への教条主義との批判、②経済は曲の切迫を仮定した「待機主義」への批判、③「徹底的議会主義」を内容としていた。

この後に、連載論文「社会主義の諸問題」に即したベルンシュタインの主張の説明が続く。その基軸は「社会観」である。

ベルンシュタインは、「フェビアンの提起した社会と国家の問題」を受けとめ、〈あらゆる変化を貫く人間生活の総体としての《社会》を、そして、社会の経済的・政治的自己組織の在り方を、本質的問題として提起した〉。

「現在社会と将来社会を貫く社会存在の原理」は「《経済的自己責任》の原則」である。しかし今日社会では、〈社会が存立するための必要条件である行政体は、社会の規制から自立化・官僚化して、社会成員の眼には不可知のものとなりつつあり、〈自己責任性の希薄化〔ママ〕と連帯意識の低下をきたし〉ている。従って、〈運動は二つの課題を担わねばならない。一つは、経済過程の社会主義的組織化であり、他は、行政体に対する社会の自己決定権の回復、すなわち民主主義の貫徹である〉。

〈党活動のヴィヴィッドな展開を保証する条件は…党と大衆との有機的な統一である。つまり、党は大衆の直接的要求を政治的に組織すると同時に、彼らの直接性を使用するために自らその知的かつ道徳的な条件とならねばならない。…その方法と場となるのが、民主主義適所組織との《妥協戦術》煮立った《地方自治体民主主義》と《議会内闘争》の推進である。…ベルンシュタインは、まさしくこうした日常的改良闘争に基づいて、いわば《社会によって国家をくり抜く》ことを意図したのであった〉。

これが社会主義への展望となる（構造的と言えようか）。では、「労働者階級の階層化〔多様化〕と政治的権利の拡大」を析出したベルンシュタインは、「社会主義的変革の主体」をどのように設定したのか？ 久松によれば、それは、「社会主義運動における社会と個人の問題」の提起によって明らかにされた。

〈ベルンシュタインにとって、社会…は、いわば多様化原理といったものに貫かれて発展するのである。だが、この多様化原理とは、裏返せば個別化原理に外ならない。したがって、かれにとって労働者大衆は、生産関係によって規定された《階級》としての存在と、社会によって規定された《個人》としての存在という二重性をもつことになる〉。

〈すでに…見たように、近代社会は個人の経済的自己責任原則の上に成立っており、この原則によって初めて個人の権利と自由が基礎づけられる。つまり、社会の存立原理は個人にあると、と同時に、個人は社会に対して一定の義務を負った社会的個人である——ここに、ベルンシュタインの社会観の核心があ〉った。〈それは、社会のない個人はなく、個人のない社会はない、という確信である。

そして、この確信を根拠づけているものこそ、あらゆる変化のなかに持続し、またさせねばならない《人間の生活》が真の実体であるという、ベルンシュタインの人間観であり、人間と社会に対する倫理的態度ではなかったであろうか。

〈個人を社会から切り離す傾向をもった近代社会において、共同存在としての人間本質を、いいかえれば、社会的個人としての真の人間生活を回復するための担い手となりうるのも労働者である。なぜなら、被搾取階級という存在様式をもった労働者こそ、労働組合・協同組合という自己組織を通じて、社会存立の条件である相互の連帯意識と責任感を創出し、SPDの知的かつ道徳的な啓蒙によって、自ら社会発展の担い手であることを自覚していくからである。以上のように、ベルンシュタインは、労働者のもつ二重性こそが、資本主義体制下の経済的不平等の打倒と、近代社会のプラス価値——個人の自由と社会への義務、すなわち民主主義——を実現するための槓杆であると考えたのであった〉。

もっとも、久松は、ベルンシュタインの方法の限界を認識している。

〈ベルンシュタインが、社会を生活過程の総体としてとらえ、特殊資本主義的な生産関係にまで下向して分析しなかったという点は、かれの社会認識の方法の特徴をなしている。その欠落点をも含めて、いま一度、かれの思想的個性として取り挙げる予定である。ただここでは、経済的要因と政治的要因が相互に複雑に関係しあって抽象化した、19世紀末の社会関係のなかで、社会主義運動を推進するためには、社会を経済過程から一元的にとらえることは決して有効ではない、という認識をベルンシュタインがもっていたことだけを指摘するにとどめよう〉。

〈「事実によって理論を再検討し」、既成の現実の姿を確定するという方法的立場…は、生成しつつある現実に対して一定の認識上の限界を伴うものではあるが、この点についても稿をあらためて論じるつもりである〉。

以上の結論として、〈かれ [ベルンシュタイン] の思想は、事実を見すえ、現実的条件を検証することによって、未来への道をさぐるという方法的態度に貫かれており、そのことによって、マルクス主義をその教条化傾向から蘇生させようとしたのである〉という主張は、解釈としては成り立ちうる。しかし、それに続くくだりについては同意できない。

〈否、それだけにはとどまらない。マルクス主義が、その思想と運動のなかでこぼれ落とした契機——つまり「社会と個人」の契機——を導入することによって、マルクス主義の創造的展開が試みられたのである。…社会が国家によって完全に呑みこまれ、したがって個人が喪失されるという20世紀ドイツの歴史的経験において、マルクス主義の直面した問題は、ベルンシュタインによって思想的に先取されていたともいえよう。…かれの提起した問題は、現在においても、たえずわれわれに問われている課題でもあるのである〉。

この補論自体、脱線であるので詳しくは述べない。一言で言えば、久松の解釈に従ったとしても、ベルンシュタインは歴史貫通的な社会原理を案出したにすぎないからである。「自由」も「平等」も（従って「民主主義」も）超歴史的なものではない。

〈物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する〉（『経済学批判』序言）。

〈経済的な形態すなわち交換が、あらゆる面から見て諸主体の平等を措定するとすれば、交換を促す内容、すなわち個人的でもあれば物象的でもある素材は、自由を措定する。したがって平等と自由が、交換価値の基づく交換で重んじられるだけでなく、諸交換価値の交換が、あらゆる平等と自由の生産的で実在的な土台である。これらの平等と自由は、純粋な理念としてはこの交換の観念化された表現にすぎないし、法律的・政治的・社会的な諸連関において展開されたものとしては、この土台が別の位相で現れたものにすぎない〉（『グルントリッセ』）。

念のために記しておくが、いわゆる還元主義的方法論を是としているわけではない。ちなみに亀嶋庸一は、久松論文を「きわめて先駆的な研究」（前掲書）と評している。

(C) ユートピア社会主義とマルクス主義

ベルンシュタインは、〈社会主義が思弁的な理想主義という要素を内包しているということ、科学的に未証明なもの、あるいは科学的に確認不能なものを含んでいるということ〉を確認しようとして、以下のように述べている。

〈社会主義とは、ドクトリンとしてはこのような闘争〔階級闘争＝利害の闘争〕の理論なのであり、運動としては一つの特定期間――つまり、資本主義社会秩序を、集産的に規制される経済をもつ社会秩序へと変革すること――を旨とする闘争なのである。…ここにいう目標とは、…意欲された目標なのであり、その実現のためには、闘争が行われるのである。…ここで問題にする科学――社会科学（ゾツィオリギー）…は、予見的にはどのような条件下でこの〔議会主義が追求する〕社会秩序が登場するかという、その条件を開陳し、かつ、その確立度を近似的に述べることができるだけである〉。

〈厳密科学中でも最も厳密をきわめる科学でさえ、それが発展するためには仮説を欠くことができないのと同じように、社会の進歩をねらいとする応用社会科学も、推測される将来の発展の予示を欠くことができない。そしてこの種の予示は、つねにある程度までユートピアなのである。…私はここでこの語を、極端に夢想的な、実現不能の域にまで飛翔してしまうような空想（ファンタスティック）という意味で用いているのではない〉。

このような立場に基づいて、ベルンシュタインは、オーウェン、サン・シモン、フーリエを検討し、次のように結論づける。

〈この三人のいわゆるユートピア主義者の教説との関係でマルクス理論を眺めてみるならば、なるほど、後者では前者にみられるよりも科学的要素がいちじるしく強くねづき、かつ発展させられてはいるけれども、しかし、科学がすべてではないという点では両者に優劣をつけるのがむずかしい〉。

エンゲルスは、〈オーウェン、フーリエ、サン・シモンは、彼らの眼前にあった諸関係が未成熟であったことに対応して、本質的にはまだ社会主義的諸体系の案出者であった〉と特徴づけた。しかし、〈近代社会主義は案出をまぬがれてもいないし、また、まぬがれることもできない。マルクスとエンゲルスによって基礎づけられた社会主義がオーウェン、サン・シモン、フーリエの諸体系と区別されるのは、社会主義社会を導く諸勢力と手段との評価を異にしていることによってなのである。…彼ら〔マルクス、エンゲルス〕の社会主義においてもやはり、認識行為に加えてなおある種の案出が、つまり、手段そのものの案出ではないにしても、それらを適用する形態および方法についての案

出が見受けられるのである。…この点でのマルクスと先の三人の先駆者たちとの差というものが、完全に対立する見解の差というよりは、むしろ程度の差である）。

要するに、ユートピア的＝非科学的要素を不可避的に含む予示という点では、ユートピア社会主義とマルクス主義との違いは「程度の差」でしかない、というのがベルンシュタインの主張であった。しかしながら、予示にも科学的なものと同非科学的なものがある。例えば有名な話であるが、天王星の摂動（乱れ、ずれ）に注目したルベリエとアダムズが外側にもう一つの惑星を予示し、それに基づいてガレは海王星を発見した（1846年）。ベルンシュタインは、予示の科学的方法を否定するのだろうか。

また、ベルンシュタインは、「眼前にあった諸関係が未成熟であった」というエンゲルスの言葉を考慮していない。資本主義的諸関係が未成熟であったがために、オーウェン、サン・シモン、フーリエの予示は空想的たらざるをえなかった。これに対してマルクスは、イギリスの成熟した資本主義的諸関係を考察し、その将来を予示した。この認識（批判）対象および認識主体（批判方法）の成熟度の差は大きい。（社会主義社会を導く諸勢力と手段との評価を異にしている）のも、その差に照応しているのである。

そもそも、ベルンシュタインの議論には、論理的難点がある。仮に、社会主義思想には、ユートピア的要素と科学的要素とが含まれ、両社はゼロサム関係にあるとしよう。「程度の差」（「五十歩百歩」）というからには、ユートピア社会主義にはどの程度のユートピア的要素が含まれ、マルクス主義にはどの程度のユートピア的要素が含まれているのかを確定しなければならないはずである（前者が99%で後者が1%である場合、「程度の差」とは言えまい）。そんなことは不可能であろう。つまるところベルンシュタインは、未来を展望する社会主義思想にはユートピア的要素が含まれ流ということを主張しているにすぎないのだ。ベルンシュタインの科学概念把握に問題があるのだが、マルクス、エンゲルスが未来社会について語るのを抑制していたということの意味をもっと考えるべきであった。

(d) 科学と社会主義

〈闘争運動としての社会主義が、まったくなんの偏向ももたずに科学に接することはできない…。しかし、みずからの手段と方法の選択に当たって社会主義は、発展諸要因と発展諸法則についての科学的認識の価値を認めつつ、科学に依拠しようとし、各時期の社会主義の目的を科学のうえに立って測定しようとする。…問題はただ、政治的な闘争党派という性格よりして、社会主義には、純粋科学性の前提条件である理論的不偏性がそもそも許されるのか、また、いったいどの程度まで許されるのかという点にある〉。

かくしてベルンシュタインは、〈政党の領域と科学の領域とを峻別する必要があると考える〉。

〈科学とは、…体系的秩序をもつ知識であるにすぎない。知識とは、諸事物の真の性状やそれらの関係の認識をいう。そして、認識水準いかんによって、つねに唯一の真理があるのみであるから、どの知識領域においてもつねにただひとつの科学しかあり得ない〉。

〈社会及び政治に関する教義がそれに対応する科学から区別されるのは、とりわけ、後者が開いて

いるところで、まさに前者が閉ざされているということによってである。この種の教義は、特定の諸目的の命じるところに服する。そして、それら、特定の諸目的においては、認識ではなくて意欲が重要なのである [NB]。また、この種の教義がいくつかの点で新しい認識をうけ入れる場を開いている場合ですら、それら特定の諸目的がこの種の教義に、完成したもの、永続するものとしての性格を与えることになる。だが、科学的な社会科学は、その対象である社会がひとつの生ける有機体であるという理由からして、また、この有機体に妥当する法則について最終段階の究極的真理というものを知らないという理由からして、けっして閉鎖的に完結していることがない。…探求される現象や事象の究極の原因とか、確認された発展の最終結果とかに関しては、科学は不可知論に立つのである。科学はその理論体系の最終的完結をなんら認めない。そうではなく、科学は、その理論体系を新事実による絶えまなき拡大と修正に対して開放しておくのである。科学にとっては、認識以外のなんらの指導的目的も存在しない〉。

またベルンシュタインは、〈ブルードンは、社会主義に科学的基礎を与えたいとの誠実な願いを持っていて〉として、マルクス宛の書簡を引用しつつ、次のように言う。

〈いかなるイズムも科学ではない。われわれがイズムという名で呼ぶものは、直観法であり、傾向であり、思想や要求の体系であるが、しかし、科学ではない。どの純粋科学をとってみても、その基礎をなすのは経験である。それは、集積された知識のうえに築かれる。しかし、社会主義はきたるべき社会秩序についての教説である。だからこそ、まさに社会主義の特徴をなすものが、厳密に科学的な確認をまぬがれているのである〉。

〈科学は不偏的である。事実の認識として、科学はいかなる党派、あるいはいかなる階級にも属しはしない。これとは反対に、社会主義は傾向である〉。

もう少し補足しておこう。ベルンシュタイン講演に関して、『社会主義月報』誌上でちょっとした論争があったらしい。そのなかで、ベルンシュタインは批判に答えて次のように述べているという。

マルクス主義は階級闘争を科学的に解明するが、〈未来を問題にする叙述には、必然的に、推定しつつ評価するという契機、つまり仮説が介入してくる〉。〈この仮説は、たしかに著しい索出的な価値をもち、研究者に有益な研究の方向を示しうるものであるが、それ自体はもはや科学ではない〉。

〈社会主義がその科学性を、純粋科学であることのうちに求める場合には、ある階級の教義つまり労働者の階級的志向の表現であることを断念せざるをえない〉。〈社会主義学説は、まさに、その命題が、対立した利害によって影響されない偏見なき非社会主義者によっても、是認されうる限りで、科学である〉。

以上が、ベルンシュタインの科学概念把握に他ならない。それに立脚して、ベルンシュタインは、次のように結論づけた。

〈科学的社会主義という看板は、理論としての社会主義があたかも純粋科学であろうとしている、とか、そうであるべきだ、というような誤った理解を導きだす〉。だから、〈社会主義が科学的認識の基礎のうえに築かれていて、科学的認識を方向規定要素として承認するものだという考えを十分に表現する呼び名でありながら、しかも、社会主義というものが、われこそはもっぱら科学であるし、科学としてどこかの時点で完結してしまった存在である、というような要求を掲げたり認めたりする

ものであるかのような観念を排除してくれる呼び名…批判的社会主義という呼び名〉がよい。〈批判とは、カントのいう学としての批判主義という意味に理解されたそれである〉。

一応、次のような保留はついている。

〈社会主義のなかで科学的という概念がまさに批判的意味で、すなわち公準および綱領として理解されるのであれば、つまり、社会主義が自身に向けて課する要求、社会主義の意欲にとっては科学的な方法と認識とが方向規定力を持つものであるという意味の要求として理解されるのであれば、科学的社會主義という名称は、私にとってその完全な正当性をもっている〉。

以上のようなベルンシュタインの議論は、一般に、事実についての因果論的認識を目的とする科学と実践や政策を規定する価値判断とを区別する、新カント主義の方法論に則っているとされる。いうまでもなく、その淵源はカントである。

中世においては、創造主の目的こそが、この世界でおこるすべての事柄の原因であると説明された。人間は自然の一部であった。神だけが真理を知っているのであり、知性は神から恩寵を受けた人にしかない。これに対して経験は誰にでも可能であり、しかもバラバラなのであって、真理から遠いものとされていた。この構造打ち破ったのが、科学革命に他ならない。人間は自らを自然の外におき、そして、経験（観察と実験）から真理を引き出したのである。知性の主体と経験の主体が重なった。このことは、神学や神学の僕であった哲学（形而上学）の土台を揺るがさざるをえない。

ここで登場したのがカント（1724～1804）である。カントは、近代科学の有効性と限界性を批判的に画定しようとした。すなわち、因果連関に関わる理論理性と目的連関に関わる実践理性とを区別し、理論理性は現象を認識できるが、現象の背後には認識できない「物自体」がある。「物自体」は理論理性には認識できないが、実践理性が向かうべき目標を提示できるとカントは考えたのである。実践理性は理論理性よりも上位に措定される。では、現象界に自然法則（必然の法則）があるように、実践理性の対象である行為の世界にも普遍的法則があるのか？ 〈汝の意志の格率〔行動指針、行為基準〕が、常に同時に普遍的立法の原理と見なされるように行為せよ〉——これが「純粹実践理性の根本法則」である。また「わが内なる道德法則」とも呼んでいる。このような形式が、ベルンシュタインの考え方と類似していることは明らかであろう。ベルンシュタインにあっては、必然の世界（「認識」の世界）とは別に、自由意志と選択の世界（「意欲」の世界）が想定されていた。「意欲」の根拠は道德的なものとなる。

ヘーゲル（1770～1831年）によるカント批判は、その道德哲学への批判に始まり、さらに理論理性の批判まで進むのであるが、その要点を一言でいえば、歴史的コンテクストの欠如ということである。

〈カントとヘーゲルの対立は、方法論の領域では——簡単に言えば——カントが道德の社会的内容を詮索せず、歴史的批判ぬきでそれを受けとり、義務概念の形式的基準から、命法の内容の自己自身との一致から道德的要求を導出しようとするのに対して、ヘーゲルにとっては個々のすべての道德的要求は、生きて絶えず運動している社会的全体の一部、一契機をなすにすぎないということのうちにある〉（ルカーチ『若きヘーゲル』）。

カントにあっては、認識主体も対象世界も、ともに完成されたものとして措定されていた。認識の源泉を主体に求めたカントに対して、その主体を主体たらしめる関係や媒介を強調したのがヘーゲルであった。主体と客体との関係は発展するのである。ヘーゲルは言う、認識そのものについて予備的考察を行ってから認識するというのは、水泳を覚えてから水に入ろうというのと同じである、と。絶対知が、絶対知である所以は、相対知=現象知が自らに向かって必然的に自己展開し収斂してくるためである。個々の認識がいかなる有効性と限界性を備えたものであるかについての考察は、現象知の自己展開過程のなかでなされうる。かようにしてヘーゲルは、カント的二元論を突破した。

ベルンシュタインの科学概念把握も、歴史性を欠いている。つまり、近代科学主義的な科学観なのである。科学はしかし、連続的に発展するものではなく、社会の発展と同様に革命の時代をもつ。科学革命は、科学概念の変革をも含意する。また、科学的認識は、すでにある一定の社会的構造を前提として初めて成立しうる（クーン以降の常識）。

先に、ヴィッセンシャフトについてのゲイの主張を引用した。新たな知見を得たので紹介しておく。

〈われわれは今日、狭義に「科学」という言葉を「近代自然科学」、さらに強く数学的な精密物理科学をモデルにした実証科学の意味で用いる。実は、現代のこの「科学」概念は、マルクスが理論的活動を行っていたちょうど同時代に生成中の概念であった。英語の「科学」(science)は、19世紀初頭においては未だに、神学と区別されるギリシャ的知識形態である「哲学」(philosophy)と同義か、あるいは学問の特定分野を表し、ラテン語の「知識」(scientia)という玄義をとどめていた。

ある歴史家〔シドニー・ロス〕は、“science”が精密な実証科学と同義に用いられ始める時期を1850年を前後する数十年間に見ている。また『オックスフォード英語辞典』(OED)は、この教義の語法の初出を1867年(『資本論』初版刊行の年!)と報告している。すなわち、マルクスは実証主義的な「科学的」という語義がすでに定着した時代ではなく、生成中の時代に生きていたのであって、コント流の実証主義を批判していたマルクスがもっぱらそのような意味で「科学的」という述語を用いることは、科学史的に言ってありえないことなのである。もっとも、これはマルクスが亡命の日常生活を営んでいたイングランドを背景とする話であって、事実上の精神生活と、理論的著作執筆の言語であるドイツ語については、そのような誤解はなおさらありえないことであった。というのも、ドイツ語における「科学」(Wissenschaft)は、マルクスの生きた19世紀はもとより今日に至るまで、哲学的陰影のかなり濃い「学問」(体系的知識)という意味を決して失うことがなかったからである(佐々木力『科学革命の歴史構造』)。

〈マルクス主義の「科学的社会主義」は、より適切には「学問的社会主義」もしくは「批判的社会主義」と言うべき性格をもっている(同)。「批判的」とは、「政治経済学批判」に示されるようなヘーゲル的批判精神をふまえた用語である。

マルクスは、自然科学的唯物論を批判して、次のように述べている。

〈技術学は、自然にたいする人間の能動的態度を、人間の生活の直接的生産過程を、それとともにまた人間の社会的な生活諸関係およびそれからわきだす精神的諸表象の直接的生産過程を、あらわにす

る。およそ宗教史でも、この物質的基礎を捨象したものは一無批判的である。実際、分析によって宗教的幻像の地上的核心を見いだすことは、その逆に、その時々の実生活諸関係からその天上的諸形態を展開することよりも、はるかに容易である。後者が、唯一の唯物論的、したがって科学的〔学問的〕な方法である。歴史的過程を排除する抽象的・自然科学的な唯物論の欠陥は、その代弁者たちが自分の専門からとび出すやいなや、彼らの抽象的でイデオロギー的な諸表彰からも看取される）（『資本論』Bd.1,A.4,k.13,§1）。

これは、そのままベルンシュタインへの批判になっている。では、ベルンシュタインの「誤解」は何に起因するのか？ 本人が表明しているように、SPD内でマルクス主義の科学主義的理解が支配的であったことへの反発が第一であろう。この点については、これまで明らかにしてきた。ここでは「正統派」マルクス主義者とベルンシュタインとに共通する近代科学主義的な科学観の科学史的背景を探求する。それは、フランス革命を前後する「第二の科学革命」＝科学の制度化の考察に他ならない（佐々木力前掲書を参考にした）。

「第二科学革命」は、ナポレオン時代のフランスで幕を開けた。この革命の中心に位置するのが、エコール・ポリテクニク（理工科学校）である。この学校は、反革命同盟による包囲下で技術者を緊急に養成する必要から創設された。

制度面の意義は、能力による選抜が行われたこと、第一線の科学者が教壇に立ったことである。学問内容上でいえば、数学においては、モンジュが「解析幾何」を「解析幾何学」とした。またコーシーは、幾何学にのみ許されてきた厳密性を代数解析のなかにもちこんだ。18世紀には自己内に、あるいは仲間内にとどまっていた厳密性は、学生を説得するための教育的動機によって格段に深まった。さらに、それを基盤として、「ベーコン的科学」（実験物理学）が数学化され（熱についてのラプラス、フーリエ、カルノー、電気と磁気についてのポアソンとアンペール、光についてのフレネル）、専門的な競争者同士のみが理解できる専門学問分野となったのである。

学生サイドから見れば、二つのことが指摘しうる。①〈必須科目として解析的言語を自由に操ることを学んだ学生にとって、自然現象は文字どおり、リアルな解析的な微分方程式によって書かれているものとして立ち現れる。このような武器を備えたエコール・ポリテクニクの学生こそが、実験物理学の数学科に初めて取り組むことができた〉（佐々木前掲書）。②実験が強化過程のなかに組み込まれた。

以上のようなものとして、〈科学者がプロフェッサーになった〉（ギリスピー）。科学は、革命後のフランス国家体制の威光とフランス文化の自信を自己表明する役割を演じ、体制公認の思想となった。

「第二科学革命」の第二幕は、ナポレオン戦争を契機として教育改革を推進したドイツで始まる。改革は、初等教育、ギムナジウムから着手されたが、本丸は近代大学の建設であった（1810年にベルリン大学創設）。18世紀における科学研究の中心はアカデミーであり、大学はヴィッセンシャフトの場ではなかった。だから、例えばガウスは、数学においては独学であり、教壇に立ってからも18世紀的伝統に則り、初等的講義しかしなかったのである。近代大学は、このような学問基準を一変させ

た。

改革を主導したフンボルトは、研究と教育の統一をモットーとしており、研究は「若々しい頭の持ち主がひしめきあっている大学」において最もよく遂行できること、「大学教官の指名はもっぱら国家に留保されるべき」であることを主張した。

〈ここでは18世紀的なゲマインシャフト的判断基準と対照的な、国家的意思の貫徹したゲゼルシャフト的判断基準の採用が訴えられている〉（同前）。

ベルリン大学はフンボルトの理念に沿って、哲学部（数学や自然科学などを含む近代的学問の場）を中軸に組織された。そこでは、哲学・文献学が研究の中心となり、文献学研究はゼミナール形式で行われた。〈テキストの正しい確定のために、教師は、「自立した研究者」として、学生は「同伴研究者」としてゼミナールに参加した。学問内容はますます批判的になり、旧来の学問基準はすでに甘く無批判的なものとして打ち捨てられる〉（同）。文献学のゼミナールは、科学研究のモデルとなった。

フランスで学んだリービヒ（1803～1873）は、1824年に助教授としてギーセン大学に送り込まれ、近代的な化学実験室を作って化学教育を推進した。同大学は後に、「化学者製造工場」と呼ばれるようになる。ベルリン大学で文献学を学んだヤコービ（1804～1851）は、批判的手法を数学に持ち込み、ケーニヒスベルク大学で数学・物理学ゼミナールを開始した（1835年）。ケーニヒスベルク・モデルは他の大学へと波及する。フランス数学の実用性を批判するヤコービは、純粋数学の自律性を強調する認識論を体現していた。

〈科学研究が大学の中に制度化されることによって、数学者も専門職業になった。純粋数学はそれ自体で自己完結的価値を持つとされ、自律性をもった専門学問分野（ディシプリン）として確立された〉（同前）。

この事情は、他の科学分野でも同じである。

〈数学や自然科学は純粋学問として認識論的に「基礎づけられる」べきものとされた。ドイツ近代大学におけるカント主義の隆盛はこの歴史事情に負っている〉（同前）

このようなヴィッセンシャフト・イデオロギーが19世紀の科学研究の推進力となったのであった。激しい業績競争を伴って。ドイツは科学研究の中心となる。

以上、「厳密科学」「純粋科学」という概念がどのようにして形成されてきたかを見てきた。科学の普遍性、客観性（不偏性）、正確性、蓄積性、公益性、等というイデオロギーは、19世紀を通して支配的になった。しかし、ある時代で「科学的真理」であったことが、後の時代に否定されることもまれではない。「科学的真理」も歴史的なのである。認識対象は拡大し認識主体は進化することによって主客が発展するのだから。

資本主義と科学の関係というテーマについては意図的に避けてきたのであるが、一つだけ述べておきたい。資本主義は、より多くの有用な労働力を確保するために、「国民教育」を要請する。資本主義的生産が科学技術（科学と技術ではない！）への依存が高まれば高まるほど、「国民教育」は初等から、最低限の科学知識と科学イデオロギーを国民にたたき込む（グラムシのいう「ヘゲモ

ニー」)。こうして国民は、科学知識の細部を知らなくても（あるいは、忘れても）、科学・科学技術イデオロギーに縛られることになる。⁴⁵

ベルンシュタインの科学観は、「正統派」マルクス主義者のそれと同様、19世紀に興隆した科学イデオロギーに毒されたものでしかない。科学への歴史的=批判的観点が欠落しているのである。ついでに、ゲイの主張をつけ加えておこう。

〈カントが倫理学の著作で述べているのは、まさしく倫理学はヴィッセンシャフトである、即ち体系的合理的認識であ[り]…それ自身の法則と根拠と証拠とを持つというのであった。そうだとすれば、ベルンシュタインは結局カントを誤解したと結論しなければなるまい〉（前掲書）

ベルンシュタインがなそうとしたことは、科学（理論）と社会主義運動（実践）とを原理的に分離することであった。〈批判における自由こそは、科学的認識の基本条件のひとつなのである〉として、理論における「批判の自由」という要求を内包させる。それが、ヘーゲル（弁証法）の全否定と結びついていることは言うまでもない。

〈ベルンシュタインの批判哲学への逸脱は党からの夥しい反対攻撃に見舞われた〉（ゲイ前掲書）というが、史料がない。ゲイはベーベルの手紙を引用しているだけである。ベーベルは言う。ブルジョア新聞は、ベルンシュタイン講演を盛んに取り上げた。党中央は不快であり、批判文を掲載せざるをえない。〈最悪なのは、敵の攻撃を前に我々の総力を結集すべきときに、またもや内部で反目し合わなければならないことです。…仮にこうした発言があなたにとって不可避だったにせよ、なぜ直接反論を受け取ることのできる党内集会の席上でやらなかったのか〉。

ハノーファー決議が歯止めにならなかったことを証明する手紙であるが、講演を許す党内状況があったことも事実である。例えば、ハノーファー党大会の議事録には、以下の発言が収められている。

〈我々の扇動活動では、「弁証法」という言葉ではなく、はるかにもっと正確で、もっと内容の豊かな「発展」という概念を使うことにしよう。このほうが労働者にとっては、はるかにわかりやすい。ベーベルは、事実、偉大なるダーウィンの精神を引きあいにした。われわれは、ヘーゲルよりもダーウィンのほうと密接な関係にあります〉（ヴォルトマン）。

〈私が心を痛めてきたのは、ベーベルが同情や公正という道徳的理念を笑いものにしてきたことだ。しかし、諸君は、諸君の批判活動や宣伝活動では、一人残らず、道徳家なのだ！〉（同）

ここまで書き終わったところで、市野川容孝『社会』を読んだ。社会科学についても意図的に避けてきたのであるが、この著作の関連して少し述べておきたい。まず「社会科学」には、その誕生時から、この「進歩」という概念が深く埋め込まれている〉（同書）を確認する必要がある。「西洋=文明」というイデオロギーが前提となっているのだ。

市野川によれば、「社会（的）」という概念は、「自然」との対比、「個人」との対比、「国家」と対比して考察されるのが一般的であるが、もう一つの側面があるという。「社会的な連邦国家」（ドイツ憲法）、「社会的な共和国」（フランス憲法）と規定されている場合の「社会的」である。

⁴⁵ 日本は、西洋科学の成果だけでなく、その制度も輸入した。山本義隆『近代日本150年』は好著である。

「社会的な国家」にあてはまる日本語は、「福祉国家」らしい。「社会（的）」の意味のこの側面がなぜ忘却されてきたのか、というのが市野川の問題設定である。市野川は次のように言う。

〈社会学は「価値自由」という周知の原則を自らに課しつつ、自らが分析や記述のために用いる「社会的」という言葉から、その規範的要素を極力そぎ落とし、この言葉を人間関係や相互行為を漠然と刺し示すものへと抽象してきた〉。

例えばウェーバー（1864～1920年）によれば、「社会的な行為」は、〈単数或いは複数の高位者の考えている意味が他のひとびとの行動と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為〉（『社会学の根本概念』）と定義される（ナンノコッチャ）。いかにも「純粹科学」的ではあり、限りなく抽象的である。

またデュルケム（1858～1917年）は、次のように述べた。

〈物理学者、化学者、生物学者が、物理的、化学的、生物学的現象に対してなすのと同じように、社会についてたんにそれを認識し、理解するために研究する社会学者の目的は、これ〔プラトン、アリストテレス、ホッブス、ルソーらのあるべき社会を探求する社会思想〕とは全く別である〉（『モンテスキューとルソー』）。

存在と当為がみごとに分断されている。科学革命は、〈人間が自然を拷問にかけて自然に自白させる〉（ボイル）という方法を正統化した。それは、〈行動により自然を征服する〉（ベーコン）という目的と不可分の関係にある。そのような方法を社会の研究に適用できるのだろうか。結局デュルケムは、「愛他主義（集団本位主義）」や、それと対立する「自己本位主義」「個人主義」をも等しく「社会的事実」として扱わざるをえなくなるのである。

ウェーバーやデュルケムの社会学は、「歴史的過程を排除した抽象的科学」という他ない。では、「歴史的過程を排除しない社会科学」とはどういうものになるのか？ 研究対象を生成・発展・没落するとして分析し、その原動力を捉え、全体へと統合するヴィッセンシャフトである。以下に述べることはポレミックなテーマであり、詳述するには一つの論文が必要になるろう。ここでは誤解を恐れず、簡略的に説明する。

マルクスは、資本的生産の主体である資本の運動が、資本制的生産（従って資本主義社会）の生成・発展・没落をもたらす原動力をみいだした。資本とは、単なる物ではなく、一つの生産関係であり、人格的には資本家と賃労働者の関係である。資本家と賃労働者は本源的蓄積によって形成されたのであるが、両者が結合された（この生成機は叙述的に後になる）。資本家は賃労働者なくして資本家たりえず、賃労働者は資本家なくして賃労働者たりえない。そういうものとして資本は統一体である。その統一体である資本の運動の発展が、資本制的生産の否定（没落）をもたらす。このことを、現実の経済的諸関係の考察から明らかにしたのがマルクスであった。それは、資本制的なものに代わる新たな生産様式を組織する主体をプロレタリアートとすることの経済学的根拠であり、また、理論と実践とを分離することなくプロレタリアートの運動を把握する道を開いたと言えよう。⁴⁶

⁴⁶ マルクスは自らの方法を「弁証法的方法」呼び、次のように述べている。〈こうした弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の、その必然的な崩壊の理解をも含み、どの生成せる形態をも運動の流れにおいて、従ってまたその無常の側面から理解し、何ものによっても畏伏させられず、その本質上、批判的かつ革命的だ〉（『資本論』第二版への後書き）。

このような意味で、マルクスの学説は、批判的ヴィッセンシャフトと言ってよい。ついでに言えば、それは、進化論を否定する言説（およびそれを主張する人達）を単なる「社会的事実」として扱うのではなく、その社会的・生活過程、社会的・歴史的諸関係から把握する。

市野川の思想的立場は「（ローザ的？）社会民主主義」であるが、「社会的」および「社会科学」という概念の歴史についての叙述は参考になる。「経済」という用語はギリシア語（オイコス）本来の「家政」を意味しており、それを越えた国家や社会の規模での経済を「政治経済」と呼ぶようになった（『百科全書』でのルソーによる解説）、というのは初耳だった。

「科学に体制化」が言われて久しい。余談になるが、「帝大解体」を叫んだ我々は、（科）学者と呼ばれる人達がどういう連中なのかを肌で知った。〈大学焼けたり。子、大学より退きて曰く、資料施設を損なえりや。人を問わず〉。福島原発事故が科学者および科学制度の実態（“原発マフィア”）を暴いた。にもかかわらず、科学技術イデオロギーが依然として幅をきかせている（「血液型」「星座」などを信仰する人々を温存させつつ）。「教養ある俗物物」（ニーチェ）によるテクノクラシーとでもいおうか。

3月革命の最中に、コレラやチフスの犠牲者が貧困層を集中的に襲っている事実を前にして、細胞病理学の確立者として名高いフィルヒョウ（1821～1902年）は、次のように説いた。

〈医学は一つの社会科学（ゾツィアレー・ヴィッセンシャフト）であり、さらに政治とは広義の医学に他ならない〉。

ようやく、「優生学」への批判が大衆化しつつある（予断は許さないが）。「障がい者」への差別・抹殺を容認することは、自らの隷属の鎖を強めることだということを肝に銘じなければならない。

【補論】

マルクス主義については、論ずべき問題がさらに二つある。私見を述べておきたい。

第一は予示の問題、資本主義に代わる新たな経済の展望の問題、つまり、ベルンシュタインがユートピア的要素と呼んだ領域の問題である。

ホヤ（脊索動物）は、イカ・タコ・貝（軟体動物）よりも脊椎動物に近いという命題の真理性は、それぞれを概念的に認識することを基盤としている。〈人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である。ところが、下等な動物種類に見られる高等なものへの暗示は、この高等なもの自身がすでに知られている場合にだけ理解されうる〉（『経済学批判への序説』）。

資本主義と、これに代わる新しい経済との関係において、新しい社会は現実体ではないが故に、概念的に把握することはできない。従って、資本主義の内に伏在する「高等なものへの暗示」を抽出することは、相当な困難を伴う。それはただ、資本主義の概念的（歴史的=批判的）把握にかかっている。

上のような関係に不確定的要素が含まれることは否定できない。しかしながら、だからといって科学的要素とユートピア的要素とを区別することが科学的だともいえないのである。自然科学的唯物主義については繰り返さない。いわゆる「歴史的傾向」が、「資本の蓄積過程」の篇の「いわゆる本源

的蓄積」の章に含まれていることに留意しよう。資本蓄積と労働と所有の分離についてはすでに述べた。マルクスは、そのなかに「高等なものへの暗示」を読みとったのである（内容省略）。超歴史的な観念を契機から排除しているという意味において、ヴィッセンシャフトリッヒといえる。

第二に、マルクス主義もまた歴史的なのか、という問題である。然り、資本主義が永遠に続く場合を除いて。

①マルクス主義は発展するという意味で歴史的である。②プロレタリアートが勝利すれば、ブルジョアジーを打倒するための武器としての機能が消失するという意味で、歴史的である。しかし、勝利したプロレタリアートが指針を決定する際に、マルクス的方法（歴史的・批判的方法）は有効性を持つであろう。③マルクス主義の真理性が、究極的には、階級闘争の帰趨によって、その思想がどれだけ労働者大衆をつかむかによって、規定されているという意味で、歴史的である。

①でいう「発展」は、一般的な意味ではない。マルクス主義が本質的に持つ批判性、総体性、革命性に基づく発展、すなわち、ブルジョア社会を、その経済的土台、政治的上部構造、ブルジョア的イデオロギーの諸形態すべてを批判する思想であることからくる発展である。マルクス主義は観念論を排するが、科学主義的ドグマでもない（教条主義も観念論の一種であり、「客観主義」=主観主義）。マルクス主義は、プロレタリアートの解放運動と相互規定的にラセン的に発展するのであるから、「開かれている」のである。

iii) パルヴスの論文

〈カウツキーの知らないうちに――『ノイエ・ツァイト』の編集長カウツキーは夏休みででかけていた――パルヴスはカウツキーの雑誌に「実践における日和見主義」と題した連載論文を発表した〉（ゼーマン／シャルラウ前掲書）。

パルヴス論文は、ベルンシュタイン、フォルマールのみならず、アウアーを日和見主義として批判した点において画期的であった。アウアーは、いわばアンタタッチャブルな存在だったからである。⁴⁷

パルヴスはまず、日和見主義伸長の背景を分析した。

①〈資本の経済的、政治的発展と同様に、プロレタリアートの解放闘争においても攻勢的な発展の時期と発展の抑制された時期が存在する〉。1889年（第2インター結成）を「最高潮」にし、現在は「沈滞」期である。②SPDは、議会勢力として成長する一方、〈政治活動はたえずより多様に、より豊富となり、個人の分野に広汎に展開されている〉。〈社会民主党の運動がより強大となるにつれて、個別の分野では逸脱と混乱が生じやすくなり、この場合に運動の原則的性格を認識することがより困難となる〉。③〈プロレタリアートを監視し、その政治的権利を剥奪する時代が過去のものとなった〉。〈政治的反動の弛緩が政治意識を鎮静させ、社会改良主義的煙幕によって社会民主党の基盤がよりいっそう侵食されるにしたがって、頭の中で幻想がほしいままに形成されていく。このような幻想が進展するについては、近年の産業活況も部分的には寄与しているのである〉。

ついでパルヴスは、現情勢を次のように説明した。

〈すでにプロレタリアートの新たな社会革命的結集をもたらすにちがいない新たな発展の徴候も十

⁴⁷ パルヴス論文は、山本統敏編『第2インターの革命論争』に抄訳されているが、残念ながら3名を批判した部分は省かれている。

分明瞭に認められる。資本主義し世界市場では、商業上の重心の移動が準備されている〉。「重心」たるイギリスの自由貿易は、「帝国主義」に転化した。〈経済的、政治的なすさまじい流動化が生じるであろう〉。〈所有様式をめぐる問題は単純に次のように要約される。すなわち、統一した資本主義的独占か、集産主義か、と〉。

以上の作業を経て、パルヴスは日和見主義の批判に移った。

日和見主義者は「誤解されている」という苦情をやめたことがないが、〈誤解されるという能力が日和見主義のもっとも強力な精神的武器である〉。〈それ〔日和見主義〕がどんなに成長したとしても、…依然として無定型で、曖昧模糊としている。それにもかかわらずその精神の奥底では、…ある一定の「原則」、「教義」といったものを不快に思っていない。だから同時に、攻撃された時には何のためらいもなく、それは教義を信仰すると公言するのである。/それゆえ、日和見主義をある一つの決議の内に総括することは常に不可能なことであった〉。

〈日和見主義を一定の形式に総括することは断念されねばならない。日和見主義がこのような定式化に適さないのは、流砂が彫刻に適さないのと同様である。批判者に残された点は、日和見主義その起源、発展、その混乱において論じることしかない。/社会主義的労働運動の内部において、すべての日和見主義が本源的に有する欠陥にはある一つの共通な傾向が見出されうる。すなわち、党の当面の活動と社会革命的目標とを組織的に結合する能力が欠如しているということである。…かれらはせいぜい次のような〔社会革命への煽動と資本主義国家内部での活動〕対句法を知るのみである〉。

〈社会革命とその時々の議会的日常活動との結合を理解しない者にとっては、実践の上では、当面の活動が社会革命の煽動にとって桎梏となるか、あるいは後者が前者の桎梏となるかである。…いまや日和見主義的見解において、社会革命の時点が何故かくも重大な役割を演ずるのが理解されるであろう〉。

社会革命が近いとして当面の活動を放棄する「超革命主義」「純粹の革命主義」、社会革命が遠いとして当面の活動のみに専念する「純粹の改良主義」、両者はメダルの表裏の関係にある。

〈その最終的帰結に至らない間は、日和見主義は独自の発展という仮面をかぶる。…彼らは発展の推移に応じて出発点からより一層離反し、革命主義を愚弄する。まず社会主義が自由の科学の領域に属すると解釈し、次にはこれが科学から人間の認識上の相対性に帰すべきであると訴え、最後には社会主義を信仰上の問題、気質の問題に転化させてしまうのである〉。

最後のセンテンスは、ベルンシュタイン講演をも念頭においていると思われる。

パルヴスは、日和見主義の主要な形態として、フォルマルの議会取引主義、アウアーの実践主義、ベルンシュタインの修正主義をあげた（おもに田中良明前掲書による）。

まずパルヴスはフォルマルに対し、〈たえずより多くの自制をプロレタリアートに要求し、より多くの迎合をブルジョア政党に示す〉手法であり、社会革命運動を制止することになる、と批判した。

フォルマルには、①〈政府が反動的であれば、われわれは革命的であり、政府がまあまあであれば、われわれはものわかりがよい〉という基本姿勢、②政府の対SPD政策の変化は、SPDの政策を修

正するに足るという政治判断、という二点の誤りがある。①に対してパルヴスは、プロレタリアートは迫害されるから革命的になるのではなく、革命的だから迫害されるのであって、政府の態度変化にあわせてわれわれの態度を変化させる必要はない、と批判した。②については、鎮圧法撤廃後の政府の社会政策に対する熱意はすでに失せていることを指摘した。

パルヴスは、批判をしめくくるにあたって、次のように警告している。

〈社会民主党内の議会取引主義は、それ自身の固有の立場の帰結として、一連の知覚できない経過を経て、プロレタリアートによる政治権力の獲得が政治的ゴム人間による大臣取の詐取にすりかえられ、社会革命的発展過程が議会的発展過程に、ひよっとすれば宮廷陰謀にすりかえられる、という結果になる〉。

アウアーは一般に「理論軽視」とされており、それは間違いではないのであるが、同時代の証言によれば、彼は並の理論化よりもはるかにマルクスの学説を知っていたという。アウアーが嫌ったのは理論的論争であった。アウアー語録を見てみよう。

〈収奪者の収奪という大きな結末の理想像を伴う崩壊、それは、一つの数学的・ヘーゲル哲学的な華麗な花火です。だが、そんなふうにはなりません。——もちろん、暫くのあいだは、人々は、こういう異端的な見解を胸にしまっておくように、うまくふるまうでしょう。というのは、わが祭司長たちは、かれらからまたもや一人の支持者が泳ぎ去ったことに気づくたびごとに、ますます怒りっぽくなるからです。しかし、私たちは、党として、教条主義や派閥主義から離れる強力な一步を踏み出しているのです〉（1899年4月10日付、シュミット宛の手紙）。

〈理論的問題では、私はエーデ [ベルンシュタイン] の言っていることが大いに正しいと思います——崩壊というごまかしを、彼は徹底的にやっつけてしまいましたし、それにまた、中産階級の消滅に関するかれの説明も、ぜひ一読に値するものです——この本 [『諸前提』] の後半における彼の道徳心に駆られた興奮や彼の実践上の助言は、書かないでは済ませるほうがよかったです〉（1899年8月22日付、フォルマー宛の手紙）。

〈誰がマルクスとエンゲルスの伝記を書くかということは、私には、まったくどうでもよいことです〉（1899年9月23日付、ベーベル宛の手紙）。

〈弁証法的方法や、また、この方法の名称が何であろうと、それをもってしたのは、私は、これらの問題のすべてにおいて先へは進みません。つまり、その方法では、黒が白、白が黒とされ、次に、より高次の統一では灰色の混合物が発生し、この灰色の混合物になると誰かの目に涙があふれる、というのですから〉（ハノーファー党大会での発言）。

〈私は物書き病を病んではない〉（1902年ミュンヘン党大会での発言）。

シュタインベルクは、次のように評している。

〈パルヴスが次のように述べていることは、アウアーの意図の核心に触れていることであった。すなわち、この男は自分が理論には不案内であるという事実を文字通り誇示しているのだ、と。…ハノーファーの党大会で、彼 [アウアー] は満足気に、ベルンシュタイン問題全体について、自分は一行といえども公けにしたものを残していない、と声明することができたのである〉（前掲書）。

〈彼の見解によれば、教義をめぐる論争は、まったく余計なことであった。彼が望んでいたのは、

人々が「戦術」についてだけ論争すればよいように、党がカウツキーとベルンシュタインという「二人の教父…」を厄介払いする、ということであった（同）。

では、パルヴスはどのようにアウアーを批判したのか？

〈実践主義は政治的思弁にたいする反感から生じる。それは具体的諸関係とともにのみ動く。それは不確定量をきらう。…実践的頭脳は…直接的現実存在のみを知り、この領域をこえるものにはうんざりさせられ、思考をなやまされる。彼は明晰な単純な状況を欲する。そして、状況が単純でないなら、それを単純にする。すなわち、彼は問題の困難性を無視することによって問題を解決する。彼は理論の固有の敵ではないが、即座にそしてもれなく実践に吸収される理論を欲する。…理論がこの実践的頭脳のプロクルステスのベッドにむりやり押しこまれると、それは硬直してドグマになり、ここから実践家は決まり文句を切りだす。だが理論を決まり文句としてつかう実践家が自己発展する諸関係の矛盾にぶつかると、彼はおよそ理論をもちいる方法ではなく、理論そのものを疑う。彼が理論にもちこんだ硬直性が理論の固有の本質であるかのようにあらわれる。そして実践家はあらゆる理論形成を有害なドグマ化および決まり文句であるとののしる〉。

またパルヴスは、理論への「懐疑」から、〈彼は原則擁護のなかにただ不寛容と議論癖だけを見た〉。そして、〈日和見主義の保護者になった〉としている。

これは、アウアーの変節過程をいわば心理学的に分析したものであるが、批判としては弱い。シュタインベルクは、アウアー批判のむずかしさを次のように説明している。

〈アウアーは純粋な労働者政策以外の政策を推し進めることはけっしてなかったし、また、その点に彼の大きな強みがあった〉。〈晴れは、公けの場では自分の原則的な立場を確約しなかったので、自分の敵対者につけいるすきを与えなかった。高速的な教義をすべて拒否する彼の実践主義は、いつも、攻撃するわけにはいかないものであった。彼が右派の政治家を保護していることは、誰にも明らかであったが、しかし彼は、その政策と提携することを避けていた〉。だから、〈パルヴスの論難は、その手がかりが見つからな〉かったし、〈アウアーは「日和見主義の守護神」だという非難を重要な諸事実をもって証明することができな〉かった（前掲書）、と。

ベルンシュタインに対する批判は新規性がない。

さらにパルヴスは、日和見主義の現実政策を批判した。彼はまず、「これまでの社会民主党の革命的政策の集約点をなすプロレタリアート独裁の理念」を次のように特徴づけている。①プロレタリアートによる政治権力の占有と国家の政治的・軍事的再組織か、②産業部門の国家的所有への順次的移行、③国家の管理有機体への変化、④自治体所有、自治体的経営および協同組合の、国家による促進、⑤資本主義の社会主義への転化。

この観点からパルヴスは、資本主義的所有形態を変更しない公有化、自治体政治の重視は、ユートピア的梦想であると批判し、労働者政策も妥協的方策であると批判している。

最後にパルヴスは、植民地政策と軍国主義という国家政策に対し、日和見主義は親和的であると批判した。

最後の点は注目に値する。それが日和見主義のアキレス腱であり、ベルンシュタインに意義を認め

る人々が決して触れない点だからである。

先に、アウアーを批判した点において画期的である、と述べた。このことについて説明しておく。アウアーが死ぬまで党書記の地位にあったことはすでに述べた (P.10)。

〈彼 [アウアー] の自室は、党事務室のある部屋とつながっていた。地方の党組織や党出版部との通信の処理もまたアウアーの仕事だった。そのため、一方では、党執行部宛のあらゆる文書が彼の手を通ることになったし、他方では、彼は、執行部の通信文書を取り扱う人物として、こうした方法で自分の個人的な見解を広めることができたのであって、彼の個人的な見解は、手紙の受取人たちによって、多くの場合、執行部全体の見解として受け入れられたのであった。そのうえ、アウアーは、執行部と中央機関紙との連絡員だった。…執行部の中の二人の構成員…が完全に彼の影響を受けるようになったために、ベーベルとジンガーは、重要な諸問題のときの五頭委員会では、少数派に留った〉 (シュタインベルク前掲書)。

要するにアウアーは、スターリンのさきがけの人物だったとみて大過ないであろう。

〈『ゾツィアリスティッシュ・モーナツヘフテ [社会主義月報]』は、党の機関紙 [誌であろう] として認められず、マルクス・正統派から最も激しく攻撃され、しかも修正主義者と改良主義者との発表機関であったが、それにもかかわらず、アウアーは、この雑誌に協力した。…この雑誌は、どんな意見にも紙面を提供し過度に理論的にならないようにされたが、アウアーの協力というただそれだけの理由で、しだいに『ノイエ・ツァイト』をしのぐようになった〉。

このような組織上の地位を利用して、アウアーは自らの個性を発揮した。

〈 [アウアーが] 党の実践活動を理論的な鑄型に合わせようとする努力に抵抗することは、まず第一に、意識的な統合戦術の現れであった…。アウアーの実践主義が実際には統合戦術だったというのは、その実践主義が、攻撃できないものに基づいていて党内の諸対立の宥和をはかる可能性を、つまり、党内の諸対立を党にはもともとまったく関係のない理論上の口げんかだとして片づけてしまう可能性を、与えるものだったからである〉 (同)。

〈アウアーによって代表されていたような実践主義…は、もともとそれ自身が確かにまたしても一つのイデオロギーだったのであり、党内に多くの支持層を見いだした。逆説的に聞こえるが、しかし、実際に、頂点にまで推し進められた反イデオロギー感情から、一つの新しい行動決定のイデオロギー、すなわち実践主義が生まれたのである〉 (同)。

パルヴスは、唯一このイデオロギーを撃ったのであるが、そのイデオロギーが党内にどれほど浸透しているかを十分に知らなかったし、まして、そのイデオロギーを基層としてSPDの体質・構造が形づくられていくことを知るよしもなかった。

なお、アウアーが初めから第2インターを無用なものと考えていたことを付記しておく。労働運動が現実には力を持つのは、国民の枠内だけであるという判断からである。

iv) リューベック党大会

リューベック党大会 (1901年9月21～28日) について通商政策論争を除いては、議題も決議もわ

からない。

ベルンシュタイン講演問題についての資料は、ベルンシュタイン『一社会主義者の発展のあゆみ』しかみつけれなかった。引用しておく。

〈同大会では、またもやアウグスト・ベーベルが、カール・カウツキーの支持を受けて私を弾劾すべく登壇した。が、今回は私も、自分の事件を自分で扱うことができた。その弾劾は、私の懐疑に行き過ぎがあること、ブルジョア社会に対する批判を放擲して党を一面的に批判していること、私の用語が不明瞭であること、伝統的理論の叙述が不正確であることなどを指摘していた。これに答える発言のなかで、私はこれらの指摘のすべてが誤りであることを証明しえたものと信じている。また、ベーベルが提出した決議案で固執されたのも、私の叙述が一面的であるという非難だけであった。それは、自分の批判が一面的に過ぎるという認識に私が目を閉ざさないことを期待する、と述べていたのであった。そして、同決議は私の人格に対する不信任の表明ではないとベーベルが説明すると、それは党大会よりほぼ全員一致で採択されたのであった。

これに対して、私はつぎのように述べた。大会決議といえども、私の信念を惑わすことはできない。決議は誤れる前提から出発しており、客観的に見て私に不正を加えている。しかしながら、ベーベルの説明によれば同決議が不信任の表明ではないとのことであるから、私は党の過半数の同志たちの表決に対して、このような決議が受けるにふさわしい敬意と注意とを払うことであろう、と。党大会はこれで満足した。そしてまた、速記録が記しているように、党大会は「あらしのような拍手」をもって私の発言を受け入れたので、私も満足することができた〉。

何という妥協！ 何という茶番！！

大会前、ベーベルはカウツキーに、次のように書き送っている。

〈論説「パルヴス論文」は実際フォルマルやベルンシュタインに対する個人攻撃ではなく、すべて正しいとはいえないまでも客観的な批判です。しかし、いつも個人的なことにはなんでも反対し、またともかくパルヴスを魚の骨のように喉にひっかけている神経質なわが仲間たちは、きっと煽られてわれわれの立場を難しくするでしょう。党内の、パルヴスと、それからまたラ・ローザに対する悪意はあなたの想像を越えています。そして、われわれがそのような偏見によって左右されるべきだという意見を私はもちませんが、同時に、われわれはそれをまったく無視することもできません〉。

〈リュウベック大会でのできごとはベーベルがおそれていたよりもいっそう劇的だった。パルヴスとローザ…は、かれらの修正主義批判に対して激しい攻撃を受けなければならなかった〉（ゼーマン/シャルラウ前掲書）。

〈フィッシャーは「文字通りの乱暴者たち（ラウフポールデ）」という言い方をした。南ドイツの代議員のひとり「東方からの男と女の亡命者によって生みだされた、党機関紙上の不愉快な風潮」とのべた。また、パルヴスとローザの論説はドイツにおける反ユダヤ主義の高揚と積極的に関連していると最終結論を下して、大会議長から正式に譴責を受けるはめになったのはハイネであった〉（ネトル前掲書）。

〈ベーベルは、リューベックの党大会では、ベルンシュタインやフォルマルをも批判的に扱っていた連続論文のことで、だがとりわけアウアーを論難していたことで、遺憾の意を表明せざるを得ないと考えたし、またカウツキーは、休暇中だったし、危険を承知でアウアー攻撃を公表する気などはほとんどもたなかったはずであるが、それでも、彼が公表を認めなかった論文の件で弁解せざるを得なかったのである〉（シュタインベルク前掲書）。

〈1901年から1906年のあいだ、ドイツ社会民主党の主要機関紙はパルヴスの書いたものは一語ものせなかった〉（ゼーマン／シャルラウ前掲書）。しかしマルトフは、パルヴス論文をロシア語に翻訳し、『ザリヤー』に転載している。

大会後、アウアーは次のように述べた。

〈君と、メーリングと、ローザと、パルヴスと、アウグストとは、自分たちが究極の真理をもっているのだと思い込んでいます。しかし、このような人たちの前では、誰も黙って感嘆しながら立っていなくてはなりません。現在、われわれのうちの大部分の人は、沈黙しようという気もなければ、感嘆する気もありません。だから、こういう人たちは、ただ、君たちを避けているだけなのです〉（1901年12月9日付、カウツキー宛の手紙）。

〈アウアーは、一方では、ベーベルの中に、ベーベルがいなければ急速に重要性を失ってしまいそうなマルクス主義的理論家たちの支柱そのものを見いだしたが、他方では、党の平和を乱しているのは本質的にはただベーベルだけだ、と思い込んでいた〉（シュタインベルク前掲書）。

1901年は、エンゲルス『エルフルト綱領批判』が発表された年である。また、シェーンランクが死去した。

11) 修正主義論争の決着

i) ミュンヘン党大会

ミュンヘン党大会（1902年9月14～20日）については皆目分らない⁴⁸。議事録にある発言を引用する。

〈一人一人の党員があれこれと考える理屈が広範な大衆のあいだに反響板を見いだすことはありません。世界をゆり動かすほどの意義をもった論文を書きあげたという、現にそんなつもりでいる著者たちが、その論文のことを大衆がどう考えるかということを知ることができたとしたら、その著者たちは自分たちの論文の意義について、もはやそれほどしっかりとした確信をもたなくなるでしょう（大きな拍手）。…私たちは、理論家たちがお互いに食い尽くし合って滅びてしまうまで、理論家全

⁴⁸ 党大会の議題がわかったので紹介しておく。党指導部報告、会計報告、帝国議会議員団議会活動報告の三つは、各党大会に共通の議題である。また、メーデーもほとんどの大会の議題となっている。それ以外の主要な議題は、以下のようなものであった。ハノーファー大会（1899年）は、「党の基本的見解および戦術的立場への攻撃について」、綱領第3項（軍事問題）。マインツ大会（1900年）は、党組織、世界政策、邦国議会選挙における党の戦術。リューベック大会（1901年）は、関税と通商条約。ミュンヘン党大会（1902年）は、「来るべき帝国議会選挙について」、自治体政策、国際労働者会議。ドレスデン大会（1903年）は、党の戦術（帝国議会選挙、副議長問題、修正主義者のどうこう）、アムステルダム国際会議。イエナ大会（1905年）は、党組織、政治的大衆闘争と社会民主主義。マンハイム大会（1906年）は、政治的大衆闘争、1907年の国際会議。

員をいっしょに遠慮なく閉じ込めておくべきでしょう〉（ウルリヒ）。

〈ただ目立った存在でありたいために、マルクスを制してピラミッドの頂点に立ちたいと望んでいる人々の屁理屈や字句のせんさくは、社会主義をどっちみちいつか実現させなくてはならない一般大衆のあいだで理解を得られるというものではありません〉（マイスト）。

〈アウアーやその他の人たちがこの雑誌〔社会主義月報〕に書いている論説のほうが、理論的でありすぎる『ノイエ・ツァイト』誌の論説よりも、労働者にはよく理解されています〉（ライエンデッカー）。

〈そうなる〔党員が『ノイエ・ツァイト』だけにしか書くことを許されなくなる〕と人々は論文をただカウツキーあてにだけ送るようになり、彼は、それらの論文の主義や傾向を点検し、運動の統一を攪乱させたり見解が不十分であったりするのを突き止めて、最も幸運な場合でも、彼が追試験を課すことになるが、しかし、最も不運な場合ともなると、彼は、こう言うであろう。これはまったく学問的に考えられていない、私はこういうものをけっして公表しない、と〉（アウアー）。

先にも述べたように（P.61）、メーリングは1902年に、『マルクス、エンゲルス、ラサール遺稿集』を刊行した。このたび、植村邦彦氏のご教示により、より詳しい内容が判明したので紹介しておく。

〈1902年のメーリング編『遺稿集』は全3巻でした。/第1巻が、マルクスの学位論文から、「ヘーゲル法哲学批判」や「ユダヤ人問題」を含んで、エンゲルスの「イギリスの状態」（1844年）まで。ほぼ大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』の第1巻に相当します。

第2巻は、『聖家族』と、1844年から1847年までの新聞・雑誌論文で、ほぼ『マルエン全集』第2巻に相当します。

ただし、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』は収録されていません。

第3巻は、1848年から1850年までの『新ライン新聞』と『新ライン新聞・政治経済評論』の論説記事で、『マルエン全集』第4巻～第7巻のうち、単行本を除いた主要な論説記事だけが選択されて収録されています。

今はドイツの図書館でもデジタル化が進んでいるので、『遺稿集』もオンラインで見ることができます〉（植村）。

感謝！⁴⁹

同じ年にカウツキーが『社会革命』を刊行しているが、内容不明。また、ローザによるベルギーのゼネストについての論説は意義深いですが、割愛せざるをえない。

ところで、ベルンシュタインは、「政党と階級」と題する論文を『社会主義月報』に発表した。その内容を、亀嶋庸一前掲書から引用しておく。

⁴⁹ 『遺稿集』第3巻の序文で、メーリングはポーランド問題に言及した。それをレーニンが取り上げ、「ゆきすぎ」を指摘した（『我々の綱領における民族問題』）。これが、SDKPiL（ポーランド王国・リトヴァ社会民主党）がRSDRP（ロシア社会民主労働党）への参加を断念する原因となり、また、レーニンとローザの民族自決権論争の発端となる。

〈彼 [ベルンシュタイン] は…次のようにのべている。/「階級の構成員の中で階級的利害が弱まり不確かなものとなるほど、イデオロギーや気分がそれだけ一層大きな活動領域をもつようになるのはきわめて当然なことである。観察を階級から政党へと移してみるならば、この結果が確認できるであろう。/なぜなら、「今日ではその政治的立場を最初から首尾一貫して自らの階級帰属によって決定しているのは社会のごく一部の者」にすぎず、それゆえ「政党と階級との完全な一致はありえない」からである。したがって、「政党は、その概念と本質とにおいて階級よりも範囲の広いもの」とならざるをえない。しかも、経済的諸関係からの規定を必ずしも受けない「社会感情」と「階級感情」を純化させる諸力の増大は、この傾向を一層促進する。ベルンシュタインによれば、このように個人が自己の階級を超えていく状況こそ、まさに「近代政党組織の発展に属する」のである〉。

〈「近代政党のすべての活動は政党と階級との相乗作用の持続的過程であり、その場合、通常は政党が活動的要素となる」ために、「結果が、階級地平の狭隘をもたらすか、あるいはその拡大をもたらすかは、党とその指導の精神とにかかっている」〉。

ii) ドレスデン党大会

1903年6月の帝国議会選挙において、SPDは3分の1に近い300万票を集め、第二等となる躍進をかちとった。⁵⁰

ベルンシュタインは、この選挙結果を、自らの主張の正しさを証明するものとみた。すなわち、選挙の勝利は、SPDが純粋なプロレタリアートの政党であったからではなく、自由主義的ブルジョアジーによって支持されたからであり、今後も議会でブルジョアジーと協力すべきである、と述べたのである。さらにベルンシュタインは、以下のように主張した。

〈ドイツの社会主義者がその力を誇示しようとするなら、その議会政党にはその力にふさわしい威厳が具わらなければならない。特に帝国議会の副議長の一人は社会民主党であるべきである。社会主義者がそのような公的ポストを占有することは、党に議会内職務の運営の一端を担わせることになる。このことの重要性を示す一例は、然るべき徹底的な議論を経ずに採択された1902年の関税率である。合法的に与えられるポストを取って拒否するどんな理由が社会民主党にあるというのか。社会主義者がカイザーに対して敬意を払うことを、帝政に対する抵抗のしるしとして拒否せよと指令することなどは、単なる古臭い慣習に過ぎない。ドイツ皇帝への表敬訪問は帝国議会の議長の儀礼的慣例である。だがカイザーへの表敬訪問が社会主義的原則の放棄を意味することなのか。明らかに否である。勿論社会主義者は「帝政の原理の賛美につながる示威行為に参加しないであろう。しかしドイツ皇帝に対する訪問はそのような性格のものではない…」〉（ゲイ前掲書）。

ゲイは、〈仮にベルンシュタインの前記の提案とフォルマルその他の人々の行き過ぎた弁護がなかったら、ドレスデン党大会で修正主義的戦術問題はそもそも怒らなかつたであろう〉（同）と言うが、「行き過ぎた弁護」は見当たらない。

⁵⁰ SPDの躍進を分析したブランクは論文を発表し、SPDは今後一層「国民政党」化すると結論づけた。ブランク論文を批判したウェーバーやミルヘスらによって、いわゆる「政党社会学」が確立されていくことになる。ちなみに、ベーベルやベルンシュタインもブランク論文を批判している。

ベルンシュタインの主張に、アウアーは激怒した。自らの長年の努力を危うくしたからである。ベーベルが攻撃に出ることを予測したアウアーは、ベーベルに宛てて、「第一級のたわごとであり不見識な言動」だとする手紙（7月22日付）を送った。つまり、あのオッチョコチョイには困ったものだ、というような話で事態を収めようとしたのである。この試みは失敗した。

〈メーリングは『新時代』の社説にこう書いた。「同志ベルンシュタインは300万人の力と英雄的闘いを、帝政政府に対する儀礼的拝跪へ転化させたいというのだ」。ベルンシュタインの計画は反社会主義新聞を喜ばせるものであり、戦闘的運動に対する一撃であると。またベーベルは『新時代』第一面の論説で、「我が党の議員はブルジョア自由主義の敗北について悲嘆の涙にくれたり、ブルジョア政党に媚びを売るようなことよりもっとましなやるべき仕事の数多くある」という警鐘の声明の発表を、次回の党大会に求めるものであると述べた。さらにベーベルはこの大会前に論争の重大性を強調した論文を著したのである〉（同）。

アウアーは、以下のように書いている。

〈お祭り騒ぎは暴れるだけ暴ればおさまるにちがいません。実際、修正主義者たちにしても、確かに、向こう見ずな愚行をやっていないわけではありません。私が最も広範囲にわたって信頼しているのは、ベルンシュタイン、ブラウン博士、ハイネ、タンフィト等々です〉（8月17日付、シュミット宛の手紙）。

〈エーデの副議長騒動は造作もなく片づけることができたでしょうが、しかし、そのことから一つの主要な動きをひき起こしたのは、修正主義者たちではなく、君と『ノイエ・ツァイト』とだったのです〉（8月28日付、ベーベル宛の手紙）。

アドラーは、ドレスデン党大会の直前に、ベーベルに次のように警告していた。

〈[労働者そのものの中に] 革命的本能と並んで、いつか人並みに暮らすことができるように、既得物を平穩に享有したいという性向が潜んでおり、そしてそれがますます発達しております。これをわれわれは考慮しなくてはなりません〉（9月8日付）。

この手紙は、労働組合指導者の気分の一端を示している。SPD議員に占める組合出身議員の比率は、1893年の11.3%から1903年の23.5%というように増加していた。

〈組合指導者たちは組合が社会主義労働運動内において確固たる地歩を築くまで、「組合中立論」を掲げて、党内の理論闘争や、権力闘争に関与しようとはしなかったし、また理論的問題に関心もなかった…。彼らはベルンシュタインが修正主義理論を定式化する前に、労働者階級の生活の窮乏は既存社会の枠内で改良的経済闘争によって改善することができるということを経験的に知っていたので、ベルンシュタインの修正主義理論を、最初、新しいものとは感じなかった。またこれらの組合指導者たちがSPDに属していたのは、エルフルト綱領を信奉していたからではなく、SPDが一貫して労働者階級の利益を代表する帝政国家の唯一の政党であったからである〉（安世舟前掲書）。

〈しかし組合が、事実上、社会主義労働運動の主導権を掌握し始め、かつ社会政策的活動に専念するとともに、彼らの活動と主張を正当化し、かつマルクス主義に代わる「新しい理論」として修正主義理論の重要性を認識して来たのである〉（同）。

例えば、組合指導部のトップであるレギーン（1861～1920年）は、ゴータ党大会（1896年）において次のように主張していた。

〈労働者階級は単なる煽動によって8時間労働制を獲得することができる、と労働者に信じ込ませることを欲するとするならば、それは誤った考えである、と私は思っています。集会、煽動、抗議は何の役にも立ちません！ 組織がすべてです〉。

またレギーンは、1899年の組合大会で、次のように述べている。

〈われわれの労働組合組織において討議し要求していることを政治的に代表する政党は、ドイツにおいてはSPD以外にはない。しかし、もしどのようなことをやろうとする意思があり、またそれに必要な力を持っている他の政党が現れてきた時は、我々はそれと喜んで取引するだろう〉。

かくて組合指導部は、〈ドレスデン党大会では積極的に関与して、組合派とベルンシュタイン支持派との間に区別がつけられないほどであった〉（安世舟前掲書）。

9月13～20日に開かれたドレスデン党大会は、修正主義を正式議題として取り上げた。

〈討論は9月16日午後…開始され、ベーベルは「今こそはっきりさせ、決着をつけねばならない、お互いに可能な限り根本的に意見を出し合ってみなければならぬ」と述べ、3時間にわたる大演説をぶった。翌日には、ほとんど午前中いっぱいフォルマルが演説し、以下ベーベルの側からスチュクレン、マイスト、カウツキーが、反対の側からコルプ、ティム、アウアーそしてベルンシュタインが立った。カツェンシュタイン、モルケンブーアは中間的な意見を述べた。そして、実に4日目に決議にこぎつけたのである〉（西川正雄前掲論文）。ローザは発言しなかったという。

ベーベル側の主張は、以下の決議に示されているよう。

反修正主義決議（SPDドレスデン大会 1903年）

党大会は国会フラクシオンにたいして、国会の第一副議長と書記一名の地位をフラクシオン内部の候補者で占めるという要求を通すこと、ただし、彼らが国王に対する義務を負ったり、その他帝国憲法に根拠づけられていない諸条件に服することを拒否するよう求める。

党大会は、これまで試練に耐え勝利に輝いた、階級闘争に基づくわれわれの戦術を、的に打ち勝って政治権力を獲得するかわりに既存秩序に迎合する政策を採用するという意味で変更しようとする修正主義的企てには断固として反対する。

このような修正主義的戦術の結果は、既存のブルジョア的社会秩序を社会主義的社会秩序へできるかぎり急速に変革しようと努力する——したがって言葉の最上の意味での革命的な——政党が、ブルジョア社会の改良に満足する政党へと変化してしまうということであろう。

したがって党大会は、党内に存在する修正主義的傾向とは逆に、階級闘争は弱まっておらず、絶えず激化していると確信しており、以下のように声明する。

1. 党は、資本主義的生産様式に基づく政治的・経済的状态についての責任を拒否する。したがって党は、支配階級が政府にとどまることを許すような手段にはいかなる

承認も与えない。

2. 社会民主党は、1900年の国債社会主義者パリ大会のカウツキー決議に則り、ブルジョア社会において政府権力への参加を追求することはできない。

党大会はさらに、現に存在し絶えず増大しつつある階級間の矛盾に目をつむり、ブルジョア政党への依存を容易にしようとするあらゆる企てに対して断固反対する。

党大会は党の国会フラクションに対して次のように希望する。国会フラクションは、当院の増大およびその背後の選挙人大衆の圧倒的な増大によって獲得される巨大な力を、以前と同様に社会民主党の目標を啓蒙するために用いること。また我が党綱領の基本則に則って、その力を、労働者の利益への配慮、政治的自由およびすべての人間の平等な権利の維持・拡大への配慮のために強力かつ断固として利用すること。さらにまたその力を、軍国主義・海軍拡張主義に対する闘争、植民政策・世界支配政策に対する闘争、不正・抑圧・搾取に対する闘争を、それらがいかなる形態をとっていようともこれまで可能であった以上に精力的に遂行し、社会立法の拡大、労働者階級の政治的・文化的任務の遂行に役立てるべく精力的に利用すること。⁵¹

反対側の意見を紹介しておく。

〈彼 [ベルンシュタイン] の最大の欠陥の一つは、まさしく驚くべきほどの不器用さをもって、いつものはずれに切りかかることです。…もしもベルンシュタインが本当に修正主義者たちの救世主であり指導者であるならば、そのときには、諸君は安心して眠ることができるでしょう〉（アウアー）。

〈結局、目下の論争はカウツキーの崩壊理論とベルンシュタインの発展理論とのどちらを受入れようとするかという問題をめぐる論争である。実戦においてはそれは問題にならない。実戦では我々は常に発展理論の立場を取ってきた〉（コルプ）。

〈われわれはみな勝利することを望んでいるのであって、今、世界の転機に立っていると信じていないからといって、その理由で修正主義者と呼んではならない。本質的なことは、ただ我々が党の具体的要求の立場に立っているということだけなのだ〉（ティム）。

〈SPDの圧倒的多数は、あるがままの姿をあえて見せようとするのだ。つまり、わが党は社会の基礎を変革することを目指すところの、従って革命的な「理想と最終目的」を持った実際の改良の党なのであって、だから私はベルンシュタインの提案する党名変更には反対した。…私がこう言うのも、宙に浮いた非難に反対するためではなく、決議が反対している修正主義なるものは全く存在しないということを示すためなのだ〉（ハイネ）。

〈決議は一から十まで間違っているが、まさにその故に私には当てはまらない…。そして、今等の同志の大部分に安心を与えられるというのであれば…私は反対しようとは思わない〉（フォルマー

⁵¹ 決議中にある「カウツキー決議」とは、入閣は原則としてはダメだが、戦術としてはアリというもの。SPD内にも入閣主義はあったようである。〈1903年1月21日のビューローとフォルマルとの話し合いでは、フォルマルの入閣がありうることも話題にされたが、この話し合いは、フォルマルが基本的には君主制国家の閣僚職を引きうける気があったことを示している〉（シュタインベルク前掲書）。

ル)。

〈ベルンシュタインの発言の機会は一度だけであったが、それは自分は帝政との妥協を一度も主張したことはないという論旨を完全に明らかにするものであった。自分は未だかつて社会民主党に参内資格…の獲得を要求したことは一度もない。自分は議会戦術に関心を持っているだけである。即ち「私が示唆したものが副議長のポストの要求と引き換えに帝国議会の慣習の受入れを要求するというだけのことなら、私が我が党の政治原則を全て放棄してしまったなどと結論する者は全くないであろう」。それはなんら理論的な異端説ではなく、また「議会主義の無際限な過大評価」でもない。「我が党の運動方針は、これまでの経験が示すように、議会主義をますます重要視してきた。…党にとって副議長のポストが実際に有益かつ有効であるような状況が生まれれば、その…第一候補はベーベルその人であろう」〉(ゲイ前掲書)。

〈フォルマールはカウツキー独裁を非難し、ベルンシュタインも「党綱領に示されている政治的原則」の枠内では「完全な意見の自由」があるべきだと主張した〉(西川正雄前掲論文)。

カウツキーは、選挙での勝利は階級決戦に近づくものであるという立場から修正主義を批判したのであるが、決議反対派から、「党の理論的法王」「現にあわぬ公式で現実を割りきる人」「現実を知らぬ書齋人」などの非難が集中した。

なお、カウツキーは、修正主義を「闘争を避け、平和的、合法的な道をできるだけ進むことを求める潮流」と規定し、それを「実践上の修正主義」と「理論上の修正主義」に分けている。

決議は、288対11で採択された。修正主義論争に決着がついたかに見える。しかしながら、安世舟によれば、決議の最後の「社会立法の拡大」云々は、レギーンによって提案された「付帯決議」だという。〈それはベーベル、ジンガーの修正主義弾劾決議案を実質的に骨抜きにするものであった〉(前掲書)。

ドレスデン大会は、ベルンシュタイン理論の支持者(「理論上の修正主義」)は少なかったが、「革命的言辞より実際の改良闘争を」というベルンシュタインの主張の支持者(「実践上の修正主義」)は多かったということを示した。別の表現を用いれば、実践主義イデオロギーの浸透度合を示したのである。決議が修正主義を対象にしていることによって、改良主義者は逃げ果せたのであった。議事録は、アウアー、ハイネ、コルプ、レーベ、ポイス、ジュデグムの賛成投票を、「面白い事態」と記録しているという。

〈ドレスデンの党大会は、アウアーが積極的に介入することのできた最後の大会だった〉(シュタインベルク前掲書)。

ドレスデン決議は、翌年の第2インター・アムステルダム大会でも採択される。決議に反対したジョレス(1859~1914年)は改良主義者ではあったが、SPDの痛いところを突いた。ジョレスは言う、ドイツの戦術決議をすべての国に強制するのは誤りである、と。

〈ドイツの同志が気づいていないドレスデン決議の本質的な欠陥は、かれらがこの行動規範というよりはむしろ現在ドイツ社会民主党に強いられる待機の不可避性を、一般化しようと試みている点にある〉。〈ドレスデン決議は、反動と闘い改良を実現するために、社会内部で眠り込んでいるプ

ロレタリアート以外の数多くの民主的諸勢力すべてに呼びかけ、これらのブルジョア的民主主義者をプロレタリアートの利益に奉仕させることがプロレタリアの階級闘争自体の利益に適っている、という点を見誤っている）。

ここまでは、ベルンシュタインの論点に近い。しかしながら、次のジョレスの主張は、ベルンシュタインが無視ないし軽視した点である。

6月選挙は、SPDが「驚嘆すべき力を持っていること」を明らかにした。〈しかし、ドイツのプロレタリアートの伝統も、ドイツの憲法も、この300万票という見かけ上は巨大な力を、利用し現実化する行動へと、つまり政治的行動へと移しかえることを許さない、ということも明らかとなった。なぜなのか？ それは、君たちに二つの本質的な条件、つまりプロレタリア的行動の二つの本質的な手段が欠けているからだ〉。

一つは、〈プロレタリアートの革命的な伝統の欠如である〉。〈ドイツのプロレタリアートは、…普通選挙権をバリケードの上で獲得したのではない。かれらは上からもらい受けたのだ。…上から与えたものを上から再び取り上げるといふことは十分に考えられる。君たちは、そのための保障を与えることができない〉。

もう一つは、議会の欠如である。〈執行権や統治権を手中に収めていない議会、その決議が単なる願望にすぎず、帝国当局によって恣意的に破棄される議会、それはもはや議会ではない〉。

ジョレスへのベーベルの反論は、以下の諸点であった。①決議の提案をしたのは「フランスの同志の一部（ゲード）だったこと、つまり、フランスでも修正主義との闘争が存在すること、②君主制であれブルジョア共和制であれ「階級国家」に変わりはないこと、③フランスにおいても、普通選挙権の再建はナポレオン3世によって与えられ、新たな共和国にしてもビスマルクによって与えられたものであること。

決議は、25対5で採択された。帝国主義戦争が始まった時、SPDは雪崩をうって戦争に賛成したのに対して、ジョレスは戦争反対の態度を示し、愛国主義者の凶弾に倒れる。

12) その後のSPDとカウツキー

i) 集権的官僚制の確立

ドレスデン党大会を最後に、マルクス主義（マルクス、エンゲルスの理論）そのものをめぐる全党的論争はおこらなかった（『社会主義月報』は存続していたけれども）。いわゆる帝国主義論争等はマルクス主義の発展（史）に属するもので、マルクス主義の普及史をテーマとする本稿では扱いきれない。つまり、前章までで本稿の任務は終わっている。ここでは、付録的なものとして、SPDの変質過程を概説しておこう。

〈党の性格を決定していたのは、シッペル、ベルンシュタイン、ハイネ、カルヴァー、ヒンデンブラントというような人たちではなく、フォルマール、グリレンベルガー、アウアー、クロース、フォン・エルム、レギー、ライバルト、ユエ [フエ]、ジューデクム博士、エーベルト、シャイデマン、カイル、レーベというような人たちであった。すなわち、『ゾツィアリスティッシュ・モーナツヘフテ』の修正主義的な知識人たちではなく、労働組合書記や労働組合指導者、市町村政治家、邦議会議

員という連中だったのであり、この連中は、政治的日常生活の不可欠な担い手だったので、結局攻撃されることはありえなかったのである。党は、本質的にはすでに、いくつかの、真剣には受けとられていない革命的なきまり文句をもって、実践的な労働者政党に「脱皮して」いたのである（リッター『ディー・アルバイターベヴェーグング・イム・ヴィルヘルミニッシェン・ライヒ [ウィルヘルム帝政下の労働運動]』）。

SPDが改良主義政党に転化した原因は、修正主義者ではなく、既述した実践主義イデオロギーの体現者が台頭したことであった。それを可能にしたのが組織改革である。

〈建設の時代であるこの期間の前期 [1900～1905年] に、党の近代化はめざましく推進され、SPDの品質保証（ホール・マーク）である集権的官僚制のブルー・プリントが出来上がった。先ずトップ・レベルから選挙区レベルに至る迄の官僚機構が党内に縦貫して党務と政務との分離が行われ、議員政党からの脱皮が志向され、これらの機構を縦軸として有給官僚群が配置され、次第にその発言権を強化した。第二に在来の信任者制度に代わって近代的なオルグ制度が選挙区組織を基礎単位として強力な組織活動を開始し、SPDの組織政党化が大巾に進められた。第三に、この時期に規約の起草が行われ党員の義務が明確化するなど党の規律化が進行した。第四は党費の納入が明文化され、党財政が確立したことである〉（西尾孝明「ドイツ社会民主党の組織問題」、明治大学『政経論叢』第31巻第3号）。

以上を明確にしたのが、イエナ党大会（1905年）の規約改正であった。レーニンは、この改正の「基本的特徴」を、〈中央集権制をより一層、もっと完全に、もっと厳格に貫徹させ、もっと強固な組織をつくらうとする傾向〉（「ドイツ社会民主労働党イエナ大会」⁵²）と評している。なお、次のような主張からして、レーニンはSPDの実態を正確には把握していなかった。

〈ドイツ社会民主党は、その組織性、運動の全一性と結束性、マルクス主義文献の豊富さと内容の充実の点から見て、すべての社会民主党の先頭を切っている〉（同）。

イエナ党大会は、SPDの歴史を画するものとなった。一つは、上記したように、〈集権的官僚制のブルー・プリントが出来上がった〉ことである。その象徴的出来事が、エーベルト（1871～1925年）の中央の書記への選出であった。

馬具工だったエーベルトは、叔父の影響でSPDに入党し（1889年）、修行のため各地を渡り歩き、馬具工組合を作る。ブレーメンにおちついたエーベルトは、SPDの地方機関紙の通信員になった。また、ガストヴィルトシャフト（宿屋兼料理店）を経営する一方、私設労働者相談所を開く。1896年、エーベルトは市会議員に当選し、1900年、労働組合はエーベルトの私設労働者相談所を正式に労働者書記局として承認し、エーベルトを書記に任命した。⁵³

〈組合と密接な接触をもち、かつ組合の任務についての理解を広める勢力が政治的労働運動において活躍することが必要である〉（労働組合機関紙）と主張する労働組合にとって、エーベルトはうってつけの人物であり、組合の圧力によってSPD中央指導部の書記に選出されたのであった。

⁵² SPDを「ドイツ社会民主労働党」としている理由は不明。

⁵³ ガストヴィルトシャフトは、党員が生計をたてる手段として始められたものであり、非合法時代から活動拠点の役割をはたしており、その主人（ガストヴィルト）は地方組織の中核的存在である。

同じく1906年に中央の書記に選出されたミュラー（1876～1931年）は、1899年に地方機関紙の編集長となり、1904年、ゲルリッツ市会議員となる。ミュラーは『資本論』を読んだことがないことを自慢していたという。

エーベルトとミュラーは、ポスト鎮圧法世代であり、市会議員を経験した実務者であるという共通点をもつ。それはまた、SPDを牛耳っていく党務官僚の特徴でもあった。

党の中央集権化は、改良派も反改良派も要求していたことである。すなわち、改良主義者は、1903年の帝国議会選挙での躍進をバネに、党を投票獲得マシーンに改編しようとしていた。他方、反改良派は、改良主義・修正主義勢力を抑えるために、中央集権的統制を強めようとしていたのである。ローザら急進左派は、ベーベルらを味方だと思っていたこと、組織問題を軽視していたこと、という評価で多くの論者は一致している（後者については、レーニンとの対比によるバイアスがかかっていることは否めない）。しかも、規約改正は、マッセンストについての議論でヘトヘトになったあとで審議されたという。

病気のアウトアーに代わって実質上の第一書記となったエーベルトは、党の財政権、機関紙誌監督権を掌握するかたわら、全国支部組織の確立に邁進した。その軸となったのが、地区組織への上からの有給専従書記の任命に他ならない。これによって左派が排除されるとともに、フォルマールのような分権主義者の勢力も削がれていったのである。また、党大会は形骸化していった。最後には急進左派は完全に孤立し、「批判の自由」を口にせざるをえなくなってしまう。

ii) マッセンスト論争（その1）

イエナ党大会がSPDの歴史を画することになったもう一つの点は、マッセンスト論争の過程で顕現したSPDと労働組合の力関係の変化である。マッセンスト論争は、理論を問題とした修正主義論争とは違い、戦術が争点となったから、潮流の分岐のみならず、潮流のなかの色合いの相違をも露呈した。しかしながらここでは、既述した帝国主義論争についてと同じ理由により、論争の内容に深くは立ち入らない（各主張の紹介にとどめる）。

第2インターでは、創立以来、サンジカリストのゼネスト論をめぐる議論がなされてきた。またベルギーでは、1891、1893、1920年と普通選挙権を求めて大規模なゼネストが闘われている。先駆的なパルヴス論文（1896年）についてはすでに見た。1902年に発表した論文「三度ベルギーの実験を論ず」でローザは、労働者階級にとって〈ゲヴァルトがウルティマ・ラティオ〔最後の手段〕であり、…階級闘争の最上の規範であった〉と主張し、合法主義と日和見主義の関係を論じている。

ドレスデン党大会において、次期大会の議題としてゼネストを取り上げることが提案されたが、レギーンの反対によって否決された。1904年8月の第2インター・アムステルダム大会では、ゼネストが論議されている。同年9月のブレーメン党大会で、ツェトキン、K・リープクネヒト（1871～1919年、W・リープクネヒトの息子）の提案によって政治的マッセンストが翌年のイエナ党大会の議題となった。

カウツキーは、「革命のさまざまな可能性」と題する論文を発表している（1904年?）。この論文でカウツキーは、経済ストと政治ストの違い、ゼネストとマッセンストの違いを述べ、かつ、政治

的マッセストとバリケード戦を対比しながら、「結論」として次のように述べた。

〈政治的大衆ストライキは、事情によってはすぐれた貢献をなしうる武器である。しかしそれを勝利へむけて用いるにはまだ時期は熟していない。…政治的大衆ストライキは真に革命的な手段であり、このようなものとして革命の時期にのみ、つまり政治的権力全体の獲得闘争においてのみ適したものであって、選挙権、団結権、またその他類似のものといった個別的な処置の獲得をめざす闘争には適していないのである〉。

それにもかかわらず、政治的マッセストについて議論すべきだ、とカウツキーは言う。一つは、〈われわれの敵に取っても常に危険であり、場合によっては壊滅的となる武器をもつこと〉が、「資本主義から社会主義への平和的移行の可能性」が増大するからである。また、SPD内の議論は、〈われわれがこれまでの戦術を継続し成長し続けるならば、すぐにでも支配階級との決定的な戦闘に至るだろう、という意識から発している〉。しかし〈普通選挙権以外の政治的武器を用いえないとすれば、明らかにわれわれの将来の展望は暗い〉からである。

〈政治的ストライキの最終的な可能性と有効性についての意義を拡大することが、プロレタリアートのあいだに、自身の力と勝利の展望という、昂揚させ勇気づける感情を呼び起こさせる最も有効な手段の一つであると私には思える〉。

また註に言う、〈政治的ストライキの問題を研究しようと思う者はこの〔上記したパルヴスの〕論文を看過してはならない〉。⁵⁴

1905年はルール地方の鉱山労働者の大ストライキで明けた。争議は全国へと波及していく。さらに、ロシアで革命が勃発した。4月9日、ベーベルは、ポーランドやロシアに居住するドイツ人社会主義者に対し、みなその国の社会民主党に加入すべしという公開書簡を発表する。ローザはこれを利用した。

〈ドイツの諸事件の圧力やロシアの革命の影響力がそれ自体、ドイツ社会民主党をより活発な活動という望ましい方向につき動かすであろう—そしてその状態を保たせるであろう—という希望があった。その間、もっと急進的な方針を望む者の任務は、自分の戦術を指導部の戦術に対置させることではなく、ロシアのニュースを大衆にひろめドイツの現状との類推をせいいっぱいおこなうこと、執行部が公言している意図を現実に遂行させること、であった〉（ネトル前掲書）。

つまりローザは、公式の方針を自らの論理で解釈し、それを演説・論文で訴えたのである。ロシアでの蜂起は専制廃止を要求するものであったが、それに続く経済的ストライキでは「8時間労働」の要求が基調となった。〈健康な革命的大衆行動は、…形式的「ブルジョア」革命を意識的プロレタリア革命にみごとに転化させたのである〉。〈ロシアでの革命によってインターナショナルな階級闘争が急激にその速度をはやめ、「古い」ヨーロッパの諸国も遠からず革命的な状況のなかに投げ込まれるであろうということであり、われわれとしても、まもなく新しい戦術上の課題に当面する日がくるということをはっきり意識しておかねばならない〉（「革命の火照り」）。〈政治的闘争手段

⁵⁴ この論文でカウツキーは、来るべき革命のイニシアティブはドイツではなくロシアが取るであろうと予想し、発展段階の「短縮」・「飛び越え」に言及した。なお、「必然性」とは「発展段階の唯一の可能性の意味」だと述べている。

としてのマッセストは、まさに階級闘争の歴史的産物なのであり、…号令によって「遂行」されたり「拒絶」されたりしない）。〈ロシアにおいてこの闘争方法〔ゼネスト〕はかつてない壮大な実践をみだしたのであり、これは全世界の労働者にとって、教訓かつ模範となるだろう！〉（「ケルンの論争」）。

マッセストに徹底して反対したのは労働組合指導者である。かれらは、第2インター大会で決められたメーデーの示威行動についても及び腰であり、労働停止については、ロックアウトを誘発するとして否定していた。5月に開かれた労働組合大会は、次のような決議を採択している。

〈本大会は、政治的大衆ストライキの宣伝により特定の戦術を確定しようとする試みはすべて拒否すべきもの考える。したがって大会は、組織労働者がこのような試みにたいして勢力的に反対することを要請する。…大会は、労働者が日常の小活動から労働者組織の強化にいたるまで、このような〔ゼネストの〕理念の採用や普及を阻止するよう警告する〉。

決議案を提出したベーメルブルク（1862～1912年）は、こう語った。〈現在の組織の水準を達成するのに、非常に大きな犠牲を払った。この組織をより高い水準の勢力にまで高めるためには、もっと大きな犠牲を要するだろう。だが、われわれの組織を構築するためには、われわれは労働運動に平穩さを必要としている〉。

要するに、〈ゼネラルストライキはゼネラルナンセンスである〉というのが、組合指導者の基本理念であった。さらに、決議は、党の政策には口を出さない「組合中立論」から、党とは独自に労働者を組織するという「党・組合同権論」への移行を示している。

組合指導部の希望にもかかわらず、論争は激化した。組合指導部はターゲットをローザに絞った。ユエ（1868～1922年）は、次のように攻撃している。

〈われわれはいつも、わが「ゼネスト理論」の専門家たちが、実践的経験をつみ闘いに参加するためになぜ即刻ロシアに出かけて行かないのかいぶかってきた。…この理論家たちは、ポーランドやロシアからなんとかやってきて、…「革命的」論説を書きなぐっている…。いざ、ロシアの戦線に向かって出発せよ、君たち階級戦争の理論家たちよ〉。

これに唱和した自由主義者ナウマン（1860～1919年）は、〈なぜ彼女は、さっさとワルシャワに出発するほどには「国際的」でないのか、彼女に説明してもらおう〉と書いた。

他方、ローラント・ホルスト（1869～1952年、オランダの社会主義者）は、カウツキーの勧めで『ゼネストと社会民主党』を出版し、カウツキーが序文を寄せている。

イエナ党大会でベーベルは、〈政治的マッセストは理論上の問題であるのみならず、現在適用されるべきであるし、されねばならぬ闘争手段にかかわるきわめて実践的な政治問題である〉と述べた。だがまた、次のようにも述べている。

〈ロシアでは当たらない国家秩序をめぐる闘争がおこなわれているが、我々の方にはロシアでかちとらねばならぬ前提条件はすでに以前から獲得されている〉。〈ロシアの例はアブノーマルなので我々の参考にならない〉。

ローザは、ロシア革命を「対岸の火事」視する連中を非難し、〈ロシア革命から学ぼう〉と訴え

た。

〈強力な組織がつくられてからでなければ闘争ができないというのは、弁証法を知らぬ、まったくの機械論にすぎない。逆に、組織は、闘争そのものの中で、階級対立についての明確な認識とともにうまれてくる〉。

ローザの演説で注目すべきは、〈[労働組合] 幹部の一部の「修正主義的」な考えかたと労働者大衆の健康な革命的認識の間の分裂〉という図式を示し、労働者大衆を党に結びつけている点である。

マッセントを積極的に支持した発言者は、ローザの他に、ツェトキン、ディーツ、リープクネヒト等。

ベーメルブルクは、〈われわれはみな、自分らの知識が、若いころに立派な教育を受け空腹をけっして知らない人びとの知識にかなっこないことは判っています〉と皮肉を語り、ローザを「暴力革命主義」と批判した。

組合代表の反対だけで採択された（政治活動の活性化を求めるベルンシュタインらも賛成した）決議は、以下のようなものであった。

〈普通・平等・直接・秘密選挙権への攻撃、あるいは団結権への攻撃があった場合、適当な手段すべてを用いてこれを断固防衛することが全労働者階級の義務である。/労働者階級へのこのような政治的犯罪を防衛するための、また労働者階級の解放にとって重要な基本権を獲得するための、場合によって最も有効な闘争手段の一つとして、党大会は「大衆的労働停止 [マッセントアルバイツアインシュテルング] の包括的使用」を考えている。/この闘争手段の使用が可能となり、また可能な限り有効となるためには、労働者階級の政治的組織ならびに労働組合組織の最大限の拡大、また労働者新聞および演説や印刷物の煽動による大衆の普段の教化と啓蒙が絶対に必要である〉。

〈党のすべての同志は、その職業の労働組合組織が存在しているか、あるいは設立されう場合には、労働組合に加入し、労働組合の目標と目的を支える義務がある。しかしすべての階級意識ある労働組合員は、その階級の政治的組織——社会民主党——に加入し、社会民主党の新聞の拡大のために活動する義務もある〉。

ローザらの主張を条件つきで承認しつつ、マッセントではなく「大衆的労働停止」としているように、組合指導者に譲歩したものであることは明らかであろう。また、「党・組合同権論」にも譲歩している。ベーベルは結語で次ように述べていた。

〈必要の場合、特定の前提のもとに——勿論、その際ストライキの可能性もまた前提されるが——われわれが理論的に承認したことがらを実際に行うべきかどうかについて党指導部が組合指導者と協議することに関して、党大会は原則的に賛意を表明すべきである〉。

1905年9月21日付の『ル・タン』紙は、次のように報じている。

〈ドイツ社会主義者たちののどかな態度は、傍聴者として党大会に好奇心を抱いて大挙列席したロシア人に奇妙に印象を与えた。革命的興奮に燃え立っていた若い男女の学生たちは、ドイツ社会主義者のこのブルジョア的大会にいささか戸惑っているようだ。だがそれにしても、ドイツの社会主義者たちは革命ロシアに理論的教育を与えてきたのであり、戦いに苦闘しつつある人々を支援するために、国境を超えてちょうど10万フラン送ったところであった〉。

大会直後、ローザはヨギヘスに「我々の大勝利」と書き送ったが、まもなくして、ローラント・ホルスト宛に、次のように書いている。〈われわれはベーベルとの重要な相違にもかかわらず、…日和見主義者を排撃するために彼と協力せざるを得ませんでした。…ベーベルと連帯して討議を通じて決議案に革命的色彩を与えることが重要だったのです〉。この書簡でローザは、マッセストを「基本的な革命形態（エレメンターレ・レヴォルツィオンスフォルム）」と規定している。⁵⁵

ともあれ、以降、イエナ決議はローザがマッセストを主張する際の武器になった。カウツキーが欠席したため、組合指導者の攻撃に対してローザが『ノイエ・ツァイト』を擁護したのであったが、カウツキーはマッセストに対してどう考えていたのか。

労働者のマッセストへの関心の増大を、1903年選挙での勝利にもかかわらずSPDが変革を実現することができなかったことから議会外行動を求めているものと、カウツキーは見ていた。他方、すでに見たように、「ドイツ国家=強い」論（「ロシア国家=弱い」論と表裏の関係にある）に基づき、ドイツでは、マッセストの成功は革命的状況のなかでのみ考えることができると考えていた。

ローラント・ホルストの著書への序文でカウツキーは、将来への準備としてマッセストの議論と研究とを推進するように呼びかけていたが、それは、軽率なマッセスト実施を防止するためであった。カウツキーはイエナ決議を次のように評している。

〈我々はマッセストを政治闘争での可能な武器として認めたとき、我々は安心して今までの戦術を続けられる。イエナ決議はそれゆえ新たな戦術への移行ではなく、今までの戦術に確固としたささえをつくったのである〉。〈どのような方法でこの武器がとられるのかのべていないし、ベーベル報告でもふれていない。そしてこのことが欠陥だと非難されているが、私にはこの限定はきわめて目的に合ったもののようにみえる〉。

まさにSPD指導部の意向を忖度した解釈であった。⁵⁶

iii) マッセスト論争（その2）

ロシアではソヴェトが成立し、大規模なマッセストによって「10月宣言」（憲法制定・国会開設）がかちとられた。また、オーストリアにおいても10月に普通選挙権を求めるスト・デモが勃発し、選挙法改正が約束された。ドイツでも、10月から翌年1月にかけて、選挙法改正を要求する運動が強まる。『フォアヴェルツ』の編集委員である改良主義的なアイスナー（1867～1919年）やシュタンプファー（1874～1957年、オーストリア出身）も、待機主義を批判して実力行動を訴えた。

このような状況下、1906年2月、労働組合指導部とSPD指導部は秘密会議をもった。ベーベルは次のように提案したという。①党指導部は政治的マッセストを抑制する、②万一マッセストを勃発した場合は党が指導する、③④その場合、労働組合は反対しない、⑤スト参加者への支援とストの結果に対する費用の負担とは党の任務である、⑥ロックアウト等の場合には労働組合に援助を求める。両者の協定が成立したか否かは不明。この秘密会議は、組合機関紙『アイニヒカイト [団結]』6月23日号で暴露された。

⁵⁵ ちなみに、パルヴスは1904年の論文「ゼネラルストライキ」で、ストライキを「革命の方法」としていた。

⁵⁶ シュタンプファーの論文は、前掲『第2インターの革命論争』に収録されている、

ドイツに戻ったローザは、ただちに党大会にあわせて、『大衆ストライキ、党および労働組合』（フィンランドで執筆）を出版する（SPD指導部はその出版・配布を妨害した）。このパンフレットを簡単に紹介しておこう。

第一、マッセストは〈プロレタリア大衆の運動方式であり、革命のなかでのプロレタリアートの闘争の現象形態である〉。

〈歴史的必然の見地からマッセストの源泉に客観的な検討を加えることが必要なのである〉としたローザは、この10年間のロシアのマッセストを分析した。そこから次のような結論を得る。自然発生的に爆発したマッセストは拡大し、「論理的内的発展」を通して「極点」としての蜂起に「転化」してきた。このサイクルの増幅過程が革命なのである。革命は「たんなる流血」（市街戦・暴動）ではない。

〈政治的ストライキと経済的ストライキ、マッセストと部分的ストライキ、示威的ストライキと闘争的ストライキ、個々の産業部門のゼネストと個々の都市のゼネスト、しづかな賃金闘争と市街戦やバリケード戦——これらすべては、たがいに入りみだれ、併行し、交錯し、浸透しあっている〉。

〈経済的契機と政治的契機…の統一体こそ、マッセストにほかならない〉（「純政治的マッセスト」などない）。ただし、〈政治闘争と経済闘争のたえまない交互作用…が起こるのは、まさに革命の時代にかぎられている〉。〈マッセストが革命を生むのではなく、革命がマッセストを生み出すのである〉。〈ロシアのマッセストにおいて自然発生的要因が主要な役割を演じたのは、ロシアのプロレタリアートが「無教育」だったからではない。革命というものが教師づらをゆるさないからである〉。

第二、組織がマッセストを可能にするのではなく、マッセストが組織をつくる。

ローザは、1月の政治的な大ストライキが分散的な経済闘争へと移行したことを、肯定的に評価した。一つは、経済闘争が、プロレタリアートのみならず、すべての階級の意識の成熟を促進したことである。それは、絶対主義の社会的土台を掘り崩していく。次に、プロレタリアートの生活を向上させたことである。8時間労働、資本家的「家父長支配」の撤廃は、ある意味ドイツ以上に進んだ。最後に、〈それまでほとんど組織されていなかったプロレタリアートが、広汎な組織網をつくり出したのである〉。

またロシア革命は、〈ドイツでの討議の理論的図式のなかでは、マッセストの「指導」にあたって、もっとも大きな懸念があるとみなされている「食糧供給」や「資金準備」や「犠牲」といった難問を、すべてごく自然に解決してしまった〉。「革命的ロマン主義」によって。

ドイツの組合指導者は、ドイツではプロレタリアートは労働組合に組織されており、ロシアとは異なるという。しかし、ドイツでも、周縁の労働者、国営企業労働者、農業労働者などは組織されていない。マッセストこれらの歴大な労働者を覚醒させ、かれらが結集することによってマッセストは発展する、ということをロシア革命は明らかにした。

〈マッセストや政治的大衆闘争を組織労働者だけでおこなったり、そのさい党中央委員会による「正規」の指導を予定したりすることは、ドイツにおいても不可能である。…このばあい重要なのは、…かれらの気質と状況からみて当然革命的である未組織プロレタリア大衆をできるだけひろくつ

かみ、かれらをもまきこんでゆけるような、ほんとうに革命的な、断乎たる階級行動だけであるう〉。

第三、マッセストは〈資本主義の発展と階級関係の現段階から生じたプロレタリア階級闘争の一般的な形式である〉。

ロシア革命は、「形式的には」フランス革命、ドイツ3月革命と同じようなブルジョア革命である。ロシア革命では、プロレタリアートが指導的要素をなし、絶対主義に対して闘うと同時に資本主義の搾取に対しても闘った。マッセストがそれを適切に表現していた（「経済闘争と政治闘争の交互作用」）。それは、「ロシア特有の産物」ではない。

フランス革命、3月革命からロシア革命のあいだに、〈資本主義の発展の一周期が完全に経過している〉。資本主義の発展は「絶頂を過ぎ」、ブルジョア民主主義は「没落」し、〈ブルジョアジーは、…現在ではもはや革命の指導的要素ではない〉。〈そこ〔絶頂を過ぎた地点〕から、激しい社会闘争の長期にわたるあたらしい時代がくりひろげられる〉。

〈今日のロシア革命は、…絶対主義ロシアの特殊な問題のなかに、同時にインターナショナルな資本主義の発展から来た一般的な諸問題を実現しており、ふるいブルジョア革命の最後の継承者であるというよりは、むしろ、西ヨーロッパでこれからはじまる一連のあたらしいプロレタリア革命の先駆者であるというべきだろう〉。〈歴史的に見れば、ロシア革命は、インターナショナルな労働運動、とくにドイツの労働運動の実力と成熟度をはっきり映し出しているのである〉。

〈文明の恩恵に浴しているドイツの労働者のばあい、社会民主主義によって植えつけられた階級意識は、あくまでも理論的なものであり、潜在的なものである。ブルジョア議会主義が支配する時代には、この階級意識が直接的な大衆行動となって発現することは、原則的にありえない。…階級意識が実践的なものとなり、積極的なものとなるのは、大衆自身が政治の舞台に姿をあらわす革命のなかにおいてである〉。

党の任務は、〈広汎なプロレタリア層にたいし、この革命的な時代の到来の必然性や、この時代を用意する社会的要因とその政治的帰結などを明らかに〉すること、「革命的な時代」、「政治的大衆行動の時期」が始まったならば、〈闘争の政治的な基本線を解明し、確乎たる首尾一貫した戦術にまとめあげることである〉。

ドイツでは、一方での日常的・経済的闘争、他方での究極目標（プロ独）という「矛盾」があるが、それは、「資本主義の発展そのものの矛盾」である。

〈ロシア革命においては、発展の全段階とさまざまな労働者層の利益が社会民主党の革命綱領に結合され、無数の部分的闘争がプロレタリアートの大規模な階級行動に結合されたが、ドイツにおいても、状況が熟するならば、同様の結果がみられるだろう〉。

第四、〈労働組合の社会民主党にたいする関係は、…全体にたいする部分の関係である〉。

最後にローザは、SPDと労働組合の「分離」・「独立」について述べた。〈ブルジョア社会の平穏で「正常」な過程のなかでは、経済闘争のほうは…個別的な闘争に分散し、政治闘争のほうは…立法府の代表への圧力によって、代行される〉。しかし、ロシア革命が示したように、〈革命的な大衆行動のなかでは、政治闘争と経済闘争は一体であり、労働運動の形態を労働組合と社会民主党の二つに分

離し、それぞれ完全に独立させてしまうような、人為的な枠づけは、簡単に一掃されてしまうものなのだ。だが、革命的な大衆運動のなかではっきり表面化しようとした関係は、じつは、現在の議会主義の時代にもあてはまるはずである）（「革命の大衆行動」が「いわゆる政治的マッセスト」でないことに注意）。

〈労働組合の闘争は労働運動の現在の問題を包括し、社会民主党の闘争は未来の問題を包括している…。労働組合は、集団の利害と労働運動のひとつの発展段階とを代表し、社会民主党は、労働者階級とその解放への関心とを全体的に代表するのである〉。

〈議会闘争は、労働組合活動と同様、社会民主党の政策にたいして、全体にたいする部分の関係に立つ。社会民主主義そのものは、労働組合闘争と議会闘争を、ブルジョア社会秩序の廃絶をめざすひとつの階級闘争に結びつけるものである。/したがって、労働組合と社会民主党が「同権」をもつという理論は、…社会民主党内の日和見主義分子の周知の傾向のあらわれにほかならない〉。

しかしながら、ドイツにおいて日和見主義者の目論見は不可能である。なぜなら、①〈ドイツの労働組合は直接に社会民主党から生まれた〉からであり、②労働組合の〈「実践活動」の強み〉はその基礎を科学的社会主義においているからであり、③多数の労働者が労働組合に加入するのは、そのことによって〈自分が社会民主主義的に組織されていると感じている〉からである（〈まさしくこの点にドイツ労働組合独自の宣伝力の秘密がひそんでいる〉）。

〈労働組合の労働運動と社会民主党の労働運動の完全な統一は、…労働組合の基盤であると同時に社会民主党の基盤でもある広汎な大衆のあいだで実現されており、大衆の意識のなかでは、運動の両側面が融合して精神的な統一体となっているのである。社会民主党と労働組合のあいだの、いわゆる対立などは、このような状況のもとでは、組合職員の上層部と社会民主党のあいだのけちくさい対立にすぎない。しかし、これは同時に、労働組合の内部では、労働組合指導者の一部と組合に組織されたプロレタリア大衆の対立でもある〉。

〈ドイツの労働運動は二重ピラミッドという特殊な形態をとり、その底辺と主要部分は強固な一枚岩から成り立っているが、二つの頂点は、遠くはなればなれになっている〉。この「二つに頂点」、すなわちSPD指導部と組合指導部の交渉を通じて労働運動の統一を望むことは、〈一番はなれた一番困難な場所に橋をかけようとすることにひとしい〉。

〈社会民主党と労働組合のあいだの摩擦をとりのぞくためには、…両者の関係を、こうした〔両者は社会民主主義のプロレタリア解放闘争がことなった形態をとってあらわれたものにすぎないという〕プロレタリア大衆の意識に適合させる必要がある。言い換えれば、労働組合をもう一度社会民主主義に結びつけることが必要なのだ〉。

ローザは、「組合職員の上層部」をとりあげて、こう述べている。「労働組合専従職員層の出現」は「歴史的な必要悪」だったが、〈やがて組織が一定の大きさに達し、諸条件が一定の成熟段階に達すると、その後の生長を阻害するような正反対のものに、変質してしまう〉。「組織の過大評価」、「大衆蔑視」、「官僚主義」等々。

ここでは労働組合における専従制にとどまっているが、第2版（何年か不明）では、党における専

従制の危険についても言及している。⁵⁷

以上、このパンフレットは、『社会改良か革命か』での革命（過程）論を、ロシア革命の経験をもって豊富化したと言えよう。ロシア革命をもって新たな革命の時代が始まったという革新的認識を示し、マッセストを革命の時期の必然的闘争形態と規定した。ローザは、指導者の思惑とは関係なく、ドイツにも必ず革命の時代が来ることを訴え、マッセストの現実性を突きつけることによって、議会主義・組合主義一辺倒であるSPD・労働組合の路線からの脱却を目的として、論争に積極的に参加したのである。誤解の余地はないと思うが、無条件かつ即時のマッセスト実行を主張したわけではない（反対論者はそのように歪曲してローザを非難したが）。

マンハイム党大会（1906年9月）では、討議はベーベルとレギーンのダブル報告から始まった。大した議論もなかったので、決議から示す（323対62で採択）。決議は二つの部分からなり、第1部は次のようなものであった。

〈党大会は、イエナ党大会の政治的大衆ストライキ決議を確認する。またケルン労働組合大会決議はイエナ決議と矛盾するものではなく、ケルン決議の意味に関するすべての論争は解決されたことを確認する。…/党幹部は、政治的大衆ストライキが是非とも必要だと考えた場合には、即座に労働組合総委員会と連絡を保ち、成功裡に行動を遂行すべく必要な手段すべてをとらねばならない〉。

第2部は次の通り。

〈…労働組合は、政治的領域において労働者階級の向上のために闘い、労働者階級が他の社会階級と同じ権利を獲得するように闘っている社会民主党に、その重要性において決して劣るものではない。…/労働組合と党の利害が等しく関係している行動において統一的前進を果たすために、両組織の中央執行部は協調しようと努めるべきである。…〉。

カウツキーは、労働組合に対する等の優位性を明記し、かつ、〈労働組合は社会主義の精神で無条件に支配されることが、是非とも必要である〉とする修正案を提出した（ローザが支持）が、否決された。

ベーベル報告は、その大半が2月会議の弁明であり、普通選挙権を防衛するためにはあらゆる手段を用いて闘うと述べたが、基本的主張は次のようなものである。

〈わたしは、マッセストを、わが党の最後の手段、最後のしかも平和的な手段、われわれが全力を使用せざるを得ない闘争手段だとみなす。…だが、われわれは、現在の組織をもってしては、それを敢行する危険を冒すことができない〉。

レギーン報告のほとんどはイエナ決議批判であったが、最後にSPDと労働組合は一体であり、それを示すためにはケルン決議とイエナ決議とは同じであると言明すればいいと述べた（つまり、決議の冒頭部分はレギーンの修正案に基づく）。

⁵⁷ 指導—被指導の問題は、抽象的ではあれ、「裏切られた期待」（1903年？）で述べられていた。〈指導者がみずからの指導権を譲渡し、大衆を真の指導者とし、みずからは、自覚的な大衆行動の道具となり、実行機関となることがたいせつである〉。〈社会民主種主義運動を支配する傾向は、つねに、ブルジョア的な意味での「指導者」と「指導される」大衆、といった区分けを断乎として拒否し、こうしたすべての階級政治の歴史的な基盤をほり崩してしまうところにある〉。

マッセスト論争を終結し、これまで通りの活動を続けるという大会基調に、ローザはかなりいらだっていた。マッセストのダイナミズムを理解せず、「政治的マッセスト」という観念的図式だけが一人歩きしていたからである。既述したように、ローザにあってはマッセストは、自然発生性、政治闘争と経済闘争の交互作用（おそらくローザに「政治的マッセスト」という概念はない）、等の特徴としていた。自然発生的性格の強調は、「指令」による「政治的マッセスト」を批判し、「闘争の前に組織強化を」という運動論の土台を掘り崩すものだったといえよう。

ローザの発言は主にレギーン批判であったが、〈あなたには、ロシア革命から何ひとつ学ぶべきものがないのだ〉と述べたとき、レギーンは〈その通り！〉と野次をとばしている。またベーベルに対しては、〈彼は、きょうつねに右を向いて話していた〉と批判した。

なお、労働組合と党の関係についての討議のなかでローザの発言をみると、SPDは「無政府主義的社会主義者」の組合からの排除運動を提起したようである。これについてローザは、カウツキー修正案には〈組合が社会民主党にひきまわされているような印象を外部に与えるからといって、強引に反対した〉にもかかわらず、上記のようなSPDの運動には賛成するのはダブル・スタンダードではないかと批判した。ローザはいう、〈日和見主義こそ、すべてのアナキーなはねあがりの温床なのだ。極端な右よりの偏向者をだれも除名しなかったのなら、われわれには極左を排除する権利はない〉。

この問題はエノベルト体制における官僚主義のあらわれなのだろうが、決議は不明。

〈わたしたちがひとつの問題で意見が一致したときには、あなたの意志どおりにし、もし意見がぐいちがええば、わたしの考えで行動することに決めましょう〉という契約話にローザが例えているように、「あなた」（SPD）に対して「わたし」（労働組合）が主導権を握ったのである。ローザらは孤立状態に陥った。ローザはツェトキンに次のように書いている。

〈アウグスト [ベーベル] をはじめ他のものも完全に議会主義の虜になってしまったのです。ですから議会主義の枠を破るような転換がやっても、かれらはそれをまったく拒否するか、もっと悪いことには…その枠をこえていこうとするものを、すべて「人民の敵」として憎悪をもって攻撃することでしょう〉。

信じられないが、マンハイム党大会についてのカウツキーの評価は、以下のようなものであった。

〈マッセストのトーンがイエナとマンハイムではことなっているとすれば、それは外的要因によるのであって見解や情感の変化によるのではない。今日SPDは今までと同じ革命の炎、闘争心でみたらされており、マンハイム党大会は革命心にみちていた。…ドレスデンは理論的な修正主義の終わりを意味した。しかし敵は労働組合の「実践上の修正主義」に大きな期待をかけた。だがいまやマンハイムからの合図は労働組合の世界が左翼へ決定的に移行したという合図である〉。

10年間に及ぶ反修正主義キャンペーンは無為におわった、とする『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』紙の評価とは、まさに対照的である。

iv) SPDの右傾化

前に簡単にふれたマインツ党大会（1900年）で採択された世界政策に反対する決議は、〈党大会は、議会での質問と承認なしになされた中国への軍隊の派遣と、そのために必要な資金の支出を、行

政権力による憲法違反であり、したがって不法な行為だとみる」と批判していた。

1904年、ドイツの南西アフリカ植民地において、先住民による抵抗闘争が始まった。ドイツ帝国政府は直ちに遠征軍を派遣するとともに、「遠征軍軍費法案」を帝国議会に提出したが、SPD議員団はこれに反対せずに棄権する。同年のブレーメン党大会でこれが問題とされ、〈今後はすべての植民地に関する要求を否認するように〉との決議案が提出された（マインツ決議を踏襲すれば当然のもの）。レーデブーア（左派）は、これに対し次のように主張している。

〈同志の一部のものは、まるで、黒人が白人を虐殺する権利をもつかのように入った。われわれはそれを是認することはできない。…われわれ社会民主主義者は、当然、搾取をこととする植民地政策の敵である。だが、ドイツ帝国がひとたびこの地域を所有したのちには、帝国は一定の義務をひきうけたのであり、…政府は入植者の生命を救うという義務をもっている。それゆえ、政府がそのための手段を要求したときには、われわれは反対投票を投じるのではなく、棄権したのである。しかし、われわれは政府の提案に賛成はしなかった〉。

決議案は拒否される。1907年にかけて、先住民に対する大虐殺が繰り返りひろげられた。

マンハイム党大会では、ロシア革命に対する武力干渉の煽動に抗議し、マッセントを準備すべきであるとの提案がなされている。これに対するベーベルの回答は、第一に、革命フランスの干渉戦争があった1792年に比べてロシア革命に干渉する連合戦線が形成されていないこと、および、ヨーロッパで孤立していることから、ドイツは干渉を行わないであろう、第二に、戦争が起こり、軍が法と秩序を引き継いだ場合、いかなる抵抗も無駄であろう、愛国的排外主義が大衆を捉え、労働者は軍隊に召集されるので、党はまったく無力な状態に陥るだろう、それ故に、党は戦争阻止のためのマッセントを行う用意がない、というものであった。

ローザはこのベーベル発言を追及し、次のように述べている。

〈フランスでは、勇敢で大胆な同志たちを代表して、ヴァイヤン [1840～1915年] が、万一、ロシアにたいする戦争が起こるようなことがあれば、そのときには、じぶんたちはあくまで拒否権を行使する、と宣言したのである。「戦争よりは人民の蜂起を！」という昔からのスローガンが、いまわれわれの仲間によって、はっきりとかかげられている。…わたしは、ドイツのプロレタリアートも「われわれの意思に反しては、なにごとも起こらせはしない」というだけの勇気をもつことを期待する〉。

1906年12月、帝国政府は、植民地派遣軍のための新たな軍事債券を提案した（南西アフリカのみならず東アフリカ植民地でも先住民の反乱が始まっていた）が、SPDおよび中央党の反対によって否決された。政府は帝国議会を解散し、1907年1月、植民地戦争への追加経費の是非を争点とする選挙が行われる。「社会民主党撲滅帝国連盟」（1904年設立）を初めとして猛烈な反SPDプレス・キャンペーンが組織され、「国賊」「祖国なき」という排外主義的攻撃が集中し、SPDは惨敗を喫した。得票数は増えたが得票率は低下し、議席数は半減する。

カウツキーは、敗北が予想外であることを認めたが、その総括は楽観的であった。カウツキーは敗因として、SPD拡大へのブルジョアジーの恐怖の強まりと植民地キャンペーンの効果、中間層のSPD

からの離反をあげている。そこから、SPDの支持構造がますますプロレタリア的になっているし、また、敵の勝利は無理な植民地政策を促進し自滅を早めるのだという。

しかし、議会主義者からすれば、SPDの惨敗は驚天動地の出来事であった。カルヴァー（1864～1927年）は、次のように主張している。

〈ドイツ労働者階級の運命はドイツ資本主義の発展と密接に結合しているので、われわれは、まず第一に、ドイツ資本主義の最も急速で、力づよい、そして全面的な展開を願い、かつ促進しなくてはならない〉。

一貫して反軍国主義闘争（特に青年の）の強化を提案し、指導部に拒否されたリープクネヒトは、選挙後、『軍国主義と反軍国主義』というパンフレットを出版している。

1907年4月、帝国議会でノスケは、非難に応じて次のように演説した。〈我々は敵が侵入し、国を破壊することを望むほど非常識ではない〉。〈ドイツへの攻撃戦争を非難することで我々は一致している。…我々は他の政党に属しているもの以上に、決然として攻撃をしりぞけるであろう〉。同年の党大会でベーベルは、〈ノスケ演説については議員団内では批判がなかったどころかかなりのものに支持され、私もそれを全体として支持した〉と証言している。⁵⁸

プロイセン陸軍大臣フォン・アイネムはノスケ演説を逆手にとった。ノスケ演説が真実なら、『軍国主義と反軍国主義』を出版したリープクネヒトは追放すべきではないか、と迫ったのである。ベーベルは、〈院外の者によって表明された、あるいは書かれた意見は、決して党を代表するものでもないし、また代表し得るものではない〉と答えた。

8月、第2インター・シュツットガルト大会が開かれた。この大会は、ローザ、マルトフ（1873～1923年）、レーニンの修正案が入れられた反戦決議で有名であるが、植民地問題についても討議されている。ドイツの代表団は、半数が労働組合側であり、党側の代表は各支部が出すことになっていた。⁵⁹

ドイツ代表に重点を置いて論争を見ていく。植民地問題委員会で討議され、総会に提出された決議案は、次のように始まっていた。

〈本大会は、植民地の効用ないし必要性が、一般的に、またとりわけ労働者階級にとって、誇張されていることを確認する。だが、本大会は、植民地政策を、すべて、原則的に、何時でも、非難するものではない。それは、社会主義体制のもとでは文明的に作用するだろう〉。

委員会でも総会でも、この冒頭の一節が争点となった。委員会において、ダーフォスと次のように提案している。

〈社会主義は全地上の生産諸力を人類に役立て、人種の違い、言語の違いを問わず、すべての民族

⁵⁸ ノスケ（1868～1946年）は、地方機関紙編集者、地方自治体政治への参加、労働組合の地区委員長と、改良主義者の“本流”を歩いてきた。

⁵⁹ ローザはSDKPiLの代表として出席しており、SDKPiL、ポリシェヴィキ、メンシェヴィキは合同していたから、共同修正案はRSDPRPのものといえなくもない。ローザが〈SPDは実際には彼 [レーニン] の思っている程には反軍国主義反帝国主義の立場に立っていないと忠告した時には、レーニンは彼女を分派主義の妄想にとりつかれているとして無視した〉（サーヴィス『レーニン』）。

を最高の文化にまで高めようとするものである。このことを考慮して、本大会は、このような意味での植民地理想を、社会主義運動の普遍的文化目的の不可欠の要素だとみなす。とはいえ、今日の資本主義的な植民の方法は、外国人民の搾取以外の目的をもっていない。…〉。

総会には、レーデブーア、ヴルム（1857～1920年）、カルスキー（1866～1919年、SDKPiL）などが署名する委員会少数派案も提出された。それは、多数派案の〈第1節を削除すること〉に示されるように、植民地政策原則拒否を貫くものであった。代替文は次のようなものである。

〈本大会は、資本主義的植民地政策が、最も本質的にみて、植民地の原住民の奴隷化、強制労働、ないしは根絶をもたらさざるを得ない、という見解をとる。資本主義社会が引き合いにだす文明の使命なるものは、略奪欲、搾取欲のための口実として、役立つにすぎない。…〉。

総会において多数派案の趣旨説明を行ったファル・コル（1852～1925年、オランダ）は、「植民地のための最小限綱領、一種の社会主義的植民地政策」が必要だと述べた。少数派案への批判は、後述するダーフィットと同じ論点を除けば、ヨーロッパの発展のためには、工業製品の販路、過剰人口のはけ口、原料の供給地として植民地は必要だ、というものである。

ベルンシュタインはファル・コルを支持した。同じく支持したダーフィットは、先進国の後進国に対する「後見」の権利を主張した。また、〈植民地は、資本主義を通過しなければならない。…カール・マルクスの科学的見解によれば、この道が社会主義的経済制度の前提をなしている〉と述べている。

また、ドイツ代表団は、次のような修正案を提出した。

〈社会主義者が全世界の生産力を解放し、すべての民族をより高い文明へと導き高めることを望んでいることをふまえ、本大会はすべての植民地政策を原理的に否認するということはしない。というのも、社会主義体制のもとで行われる植民地政策は文明化の作用を果たしうるからである〉。

カルスキーは、ダーフィットらの主張を逐条的に批判した。①〈社会主義国家についてほとんど語りえないのと同じに、社会主義的植民地政策についても何も言えない〉。②「後見の権利」が何を意味するかは、我々ポーランド人はよく知っている。そこには「ユンカー的概念」が忍び込んでいる。③〈マルクスが述べたのは、資本主義の端初が存在する国々は、資本主義の発展を全面的に経験するにちがいないということについてであって、資本主義的発展を終わりまで経験することがすべての国々にとって無条件に前提されるなどと、彼はけっして言ったことはない〉。④我々は植民地政策に原理的な反対はしない、だから植民地改革を行えるのだ、とダーフィットは言った。しかし、我々は軍国主義に原則的に反対だが、二年兵役制等の内部改革には賛成する。⑤〈社会主義者にとっては資本主義的文明やヨーロッパ文明だけでないそれ以外の文明が存在する。放っておけば植民地は野蛮な未開状態に後退する、とダーフィットは言った。しかし、インドではいずれにせよヨーロッパ文明が有力になり、その影響下で全面的な発展がなされるだろう〉。

カウツキーはまず、「これまでに…耳にしたことがなかった」社会主義的植民地政策は、異質の二つの思想が結びつけられたものだと言った。一つは、「誰も異論がない」「われわれは植民地を単純に無視できないという思想」である。〈われわれが植民地において有する任務は、本国において有している任務と原則上全く同じである。すなわち、資本主義の搾取ならびに官僚制と軍国主義の抑圧から人民大衆を守ることであり、したがって社会政策と民主主義的政治を要求することである〉。もう

一つの思想は、これとは「まったく別の」植民地政策である。〈植民地政策とは海外領土の獲得とその暴力的保持を意味する〉。

また、文明化政策について述べた。〈われわれは、これらの未開民族がより高い段階に到達することに助力してさえいる。だがしかし、…植民地政策は文明化政策にとって根本的に有害である〉。

〈われわれは、植民地政策の存在するところではどこにでも、民族の高揚ではなく後退をみることになるのである。たとえ社会主義体制であってもこれを変えることはできない〉。

さらに、〈両者のうち一方は支配者に、他方は被支配者になることが決まっている〉という「民族の二つのグループに関する理論」を主張したベルンシュタインを批判した。〈ベルンシュタインはマルクスを不当に引用した〔内容不明〕。おそらくマルクスは、地球は人類のものであると言うだろう。しかし植民地政策をおしすすめているのは人間ではない。マルクスは、地球が資本主義国のものだと言ったことがない〉。

最後にカウツキーは、〈まず一度〔機関紙等において〕根本的に討論し、十分に熟考するための時間を与えるべきである。…その前にわれわれがこの社会主義的植民地主義という全く新しい思想に対して態度を決めることは不可能である〉として、少数派案に賛成するよう求めた。

採決の結果、少数派案が、賛成127、反対108、保留10でかるうじて採択された。慣例通り統一投票したドイツ代表団は全員反対、植民地保有国のフランス、イギリス、イタリアなどは分裂し、植民地をもたない国および植民地国がすべて賛成した。日本代表も賛成したというが、誰か不明。シュツットガルト決議は、第2インターの最後の植民地問題決議となった。

9月のエッセン党大会でも植民地問題について討議されたが、シュツットガルト決議とSPDの従来からの態度とは一致するものであることが確認される。

〈1906年デルンブルクが植民局長官に任命され、植民地経営の人道化と収益性増大が図られるようになると、原則的植民地政策拒否論者の立場は苦しくなり、積極的植民地政策論者（修正派）の攻勢がつよまった〉（前掲『帝国主義研究Ⅱ』）。

整理すれば、第一に、植民地政策は原則として拒否すべきか、あるいは改良可能かという問題、第二に、植民地政策は植民地に資本主義的發展ないし「文明化作用」をもたらすか否かという問題、それと関連して第三に、植民地における資本主義的發展がそこでの社会主義実現の前提条件であるか否かという問題が、論争点だったといえる。植民地における解放運動の評価の問題は俎上にのぼっていない。

これらを念頭におき、カウツキーは小冊子『社会主義と植民地政策』を出版した。エルフルと綱領の解説やベルンシュタイン論争で主張したように、資本主義的發展が限界に達しているとみていたカウツキーは、植民地政策を、労働生産性の制限と浪費の増大（軍拡）、競争の制限=独占の形成とならぶ資本主義の延命策と捉えている。従って、原則拒否となる。

「文明化作用」は、国内に置きかえれば、知識・教養を独占している支配階級と無教養の被支配階級との関係の問題と同じであり、前者による「保護・後見」を認めることは搾取関係と支配・隷属関係を認めることを意味する。また、被支配階級の文化的向上は、支配階級への反抗を通じて生まれて

きた。この論点ではカウツキーは、「プロレタリア的倫理」に依拠している。

市場の外延的拡大を重視するカウツキーにあっては、植民地問題は国内の工業地域と農業地域との関係に置換できる。工業地域の発展がストレートに農業地域を工業化するわけではない。また、確立した社会主義的生産様式は、資本主義化していない農業地域をも社会主義化する。

このカウツキーの小冊子について注目すべきは、付録としてエンゲルスの手紙がつけられていたことである。1882年5月、カウツキーはエンゲルス宛に、イギリス労働者は植民地に対してどのような態度をとったか尋ね、次のように書いた。

〈ヨーロッパのプロレタリアートの指導のもとでは、インドは、…資本主義という中間段階を経なければならないということなしに、まったくうまく現代社会主義に移行させられることが可能でしょう〉。

エンゲルスの回答は以下のようなものであった（9月12日付）。

〈労働者はイギリスの世界市場独占と植民地独占とのおすそわけに気楽にあずかっている。わたしの考えでは、…ヨーロッパ人の住民が占拠している国々、カナダ、ケープ・コロニー、オーストラリアは、みな独立するであろう。それに反して原住民がいる、支配されているだけの国々…は、一時プロレタリアートが引きついでできるだけはやく独立させるようにしなければならない。この過程がどうすすむかを言うことは困難である。インドはおそらく、革命をおこすだろう。…自分を解放するプロレタリアートは植民地戦争をおこなうことはできないから、成行きにまかせるほかはないであろう。…まずヨーロッパや北アメリカが改造されれば、それはすばらしい力をあたえ、すばらしい模範となるから、半ば開化した国民はまったくすすんでそのあとからついていくであろう。…だが、そのあとでこれらの国々が、同じように社会主義的組織に到達するまでに、どのような社会的および政治的段階をとらなければならないか、それについて、いま仮説を立てても、かなりむだなものにしかなるまいとおもう。ただつぎの一時だけはたしかである。それは勝利したプロレタリアートがどんな種類の幸福であれ他民族におしつけるなら、かならず自分自身の勝利をくつがえすことになるということである〉。

いわゆる「歴史の短縮論」については、エンゲルス「『ロシアの状態』へのあとがき」（1894年）参照。

ところで、シュツットガルト大会でフランス代表のエルヴェ（1871～1944年）は、こう述べた。〈私はここシュツットガルトの町でSPDにお目にかかりました。…ドイツ・プロレタリアートはすべて善良でそして十分に満ち足りたプチブル〔シュピースビュルガー〕でありました〉。

SPDの「小ブル化」は、ウェーバーにも感知されていた。マンハイム党大会を参観したこともあるウェーバーは、1907年10月、SPDへの恐怖感を和らげたいと欲するなら、SPDの党大会を観てみよう、と演説している。〈というのは、…そこの集まっている革命家の中に、満ち足りた宿屋の主人〔既述のように単なる比喩ではない〕の顔や、小ブルジョアジーの人相が圧倒的に多いことや、革命的感激の痕跡が全然見られないことに気づくからであります〉。

1907年10月、リープクネヒトに対する反逆罪での裁判が開かれた。証人として召喚されたベーベルは、リープクネヒトの考えに反対であると証言する。リープクネヒトは、1年半の禁固刑に処され

た。リークネヒトが獄中にいる間に、彼が組織した青年組織は解体されてしまった（1908年10月）。

〈彼女〔ローザ〕は3年のあいだドイツの諸事件から奇妙にも遠ざかることとなる〉（ネトル前掲書）。エッセン党大会にも出席しなかった。

1906年11月、SPDは党学校を設立する。講師は左派が多かった。1902年頃から『ノイエツァイト』に投稿していたヒルファーディング（1877～1941年、オーストリア社会民主党員）は、講師の一人としてベルリンに赴いた。しかし、今後も教壇に立つのなら国外追放にするとプロイセン警察が脅したため、代わりにローザが講師となる。党学校での授業のためにマルクスを読み直したらしい。それは『国民経済入門』『資本蓄積論』に結実した。また「ナロドヴォシチ問題と自治」を発表している（1908～1909年）。他方、ヒルファーディングは『ナツィオナリテーテン問題と社会民主主義』を出版した（1907年）。⁶⁰

〈1907年初頭から1909年初頭まで、カウツキーは、それまでの数年間よりも党内問題にかかわることが少なくなり、自らの歴史研究に専念することのほうが多くなった〉（スティーenson前掲書）。

この時期に、『キリスト教の起源』が出版されている（1908年）。また、マルクス『剰余価値学説史』の刊行は、1905～1910年にわたった。

反軍国主義問題、植民地問題についての論争の陰で、改良主義勢力が伸長していた。邦国政府予算の問題については、1894年のフランクフルト・アム・マイン党大会、1901年のリュベック党大会で「原則拒否」の立場が確認されていたのであるが、南ドイツ諸邦（バイエルン、バーデン、ヴェルテンベルク）のSPDによって、「全体予算」支持の行為が繰り返されてきたのである。この問題は1908年のニュルンベルク大会で議題化され、ベーベルは、〈これで3度目であり、今度こそは原則を徹底させてもらいたい〉と述べた。

南ドイツの代表たちは、積極的に自らの行為の正当性を主張している。それは、南ドイツの独自性や〈邦予算への態度決定を各邦の党組織にゆだねる〉という分権主義をこえて、「原則堅持」という基本路線そのものへの批判にまで進んだ。〈今回のすべてのあつれきは議会上の実践と世間ばなれした理論の矛盾である〉（ダーフィット）、〈理論的に教育された同志は大衆とあまりにも接触していなすぎる〉（ティム）、〈ベルリンの人々は組織や煽動において大きくかまえるが党が戦術や政策で常に前に進み出ようとするブレーキをかける保守的部分である〉（コルプ）等々。

本来は集権主義者である労働組合代表も、南ドイツ派を支持した。帝国議会議員団の半数近くも、これに同調した。

結局、「全体予算拒否原則」の確認と、南ドイツSPD邦国議員団を非難する決議が採択されたが、それは258対119であった。さらに南ドイツの代表66名が、決議不服従をほのめかす、〈邦国固有の

⁶⁰ ナツィオナリテート（ナツィオナリテーテンはこれの複数形）は、一般に、多民族国家内の民族を指す。ナロドヴォシチはそれにあたるポーランド語。当時、民族問題とは、多民族国家内の問題を意味した。帝国主義認識を確立する前のレーニンにあっても同じ。カウツキーによるヒルファーディングの著作への書評「ナツィオナリテートとインテルナツィオナリテート」のインテルナツィオナリテートは普通「国際性」と訳されているが、厳密には「民族際性」。

問題の決定は、邦国の党組織が決定する」という宣言書を出している。

v) カウツキー『権力への道』

1909年1月、カウツキーは『権力への道』を出版したが、上記のような改良主義勢力の伸長がその動機と思われる。〈初版の5000部が数週間のうちに売り切れた〉（スティーンソン前掲書）。しかし、再版に対し、党指導部から“待った”がかかった。スティーンソンはその理由を二つあげている。

一つは、新たな弾圧への恐れであった。〈1908年4月8日、ついに改悪された帝国結社法が帝国議会において成立し、最初の目的とは正反対に、プロイセン邦国の最も厳しい結社法が全国的に拡大されて適用される結果となった〉（安世舟前掲書）。ベーベルはアドラー宛の手紙で、カウツキーの著書が左派をますます過激化させる危険性を指摘し、次のように書いている。

〈カウツキーは、このような戦術問題に対する感受性がありません。彼はまるで催眠術にかかったかのように、目標だけを凝視し、それ以外のいっさいのことに関心も理解もまるで示そうとしません〉。

もう一つは、その内容が修正主義論争を継続し、「実践上の修正主義」すなわち、議会主義、改良主義、組合主義を批判するものだったことである。これが、〈党官僚層を怒らせた…。彼〔カウツキー〕は、ある友人に、次のように不満を漏らした。党指導者、それもベーベルまでもが、恐怖心から屈服している。「今日の状況は、世界最強の社会民主党が世界で最も卑屈な中央委員会をもっているということです」と〉（スティーンソン前掲書）。

カウツキーはこれを統制委員会に提訴した。統制委員会のイニシアティブを握っていたツェトキンがカウツキーを擁護し、執行部のとった処置を批判している。しかしカウツキーは、結局、執行部の条件（部分的修正と、個人の立場で出版すること）を受け入れ、フォアヴェルツ出版社から出された。ツェトキンは、カウツキーを次のように批判している。

〈あなたが執行部との秘密の申し合わせを「勝利」と呼んだとき、言葉と事実はあなたにとって、それ本来の意味を失ってしまうでしょう。この秘密の申し合わせは明らかな降伏です。事実上実行部は修正主義者のためにはたそうとしたずべてのものをはたしたのだから〉（1909年3月16日付カウツキー宛書簡）。

『権力への道』は、以下のような章編成からなっている（副題は「革命への成熟に関する政治的考察」）。

1. 政権の奪取
2. 革命の予言
3. 将来国家への熟成
4. 経済発展と意思
5. 是が非でも革命、是が非でも合法性を、というのではない
6. 革命的要素の増大
7. 階級対立の緩和
8. 階級対立の激化

9. 革命の新時代

『権力への道』は、〈1902年に公表された社会革命に関する私〔カウツキー〕の小冊子の補遺なのである〉（「序文」）。また、第5章の主要な部分は、『社会民主党教義問答書』（1893年）からの引用が占めている。

要するに、『権力への道』は、『エルフルト綱領解説』（1892年、その後版を重ねている）、ベルンシュタイン批判（『論駁』）、『社会革命論』（1902年、1907年に第2版）と発表されてきた、カウツキー革命論の一つの頂点をなす。それは、エルフルト党大会で確認された綱領・戦術の原則（「エルフルト原則」と呼ぼう）を再確認しつつ、その原則を新たな情勢に適用したものに他ならない。

従って、修正主義・改良主義への批判においても一つの頂点の位置を占めるものであり、まさに「正統派」マルクス主義の基本文献といえよう（戦後の邦訳があるのもいい）。なお、以下の邦訳文の底本は初版ではない。

カウツキーはまず、社会民主党はどういう意味で「革命的政党」なのかの説明から始めている。それは一つには、資本主義社会においては「満足のいく生存」が不可能な「nプロレタリアートの階級利益の擁護者」であるからである。もう一つは、〈国家権力が…階級支配の最も強力な道具となっていること、またプロレタリアートが志向する革命は、プロレタリアートが政権を奪取してしまわないかぎり、遂行されないということ、党がこのことを知っているからである〉。

これらの点で、社会民主党は、空想的社会主義やブルードン主義と異なる。また、「革命は随意になされうるものではな」と考える点でブランキ主義とは異なるとし、以下のように述べる。

〈資本主義的生産方法が高度に発達しているところに飲み、国家権力によって生産手段の資本家的所有を社会的所有に改変する経済上の可能性がある。しかし他方では、プロレタリアートが、経済的に不可欠な、大部分しっかりと固く組織されていてしかもその階級的地位についても国家や社会の本質についても啓蒙された、一大集団にまで成長しているところにはじめて、国家権力を奪取しこれを固める可能性が生まれてくる。／これらの条件は資本主義的生産方法の発展とそれから生ずる資本と労働との間の階級闘争とによって不断に作り出される。資本主義の不断の伸張が必然的にかつ制御しがたく遂行するように、この伸張の終局的反作用たるプロレタリア革命もまた不可避免的であり、制止することはできない〉。

〈社会民主党の任務は、搾取に対するプロレタリアートのあらゆる種類の反応を、政権奪取をめぐる大決戦を頂点とする目的を意識した統一行動へと、結集させることである〉。

続けてカウツキーは、革命を回避せんとする考えのなかでもブルジョア政党との「連立政府」論をとりあげ、それによっては「プロレタリアートの対資本闘争」を遂行することはできないと批判した。そして、「プロレタリアートが政治権力を行使しうるための唯一の形式としての、プロレタリアートの政治的単独支配」＝「プロレタリアートの独裁」を主張する。

以下、第1章は、政権奪取という観点からのエルフルト綱領の解説である。

第2章では戦争と革命について述べ、〈戦争の結果としての革命が多くの可能性のうちの一つにす

ぎないのに対し、階級闘争の結果としての革命は一の不可避的な事柄なのである」とされた。

第3章では、「社会主義への熟成」の「自然法則性」について、一方における資本の集中、とりわけ株式会社が取り上げられ、他方におけるプロレタリアートの「発達」と組織の成長（協同組合、労働組合、自治体への参加）が指摘される。改良主義者はこの傾向から社会主義への漸進的進化主張するが、この過程は「全く対立する二つの要素」の成長過程なのである。

〈社会主義の熟成とは、階級対立の不断の激化、決定的な大階級闘争——われわれはことを一括して社会革命と呼んでもよいが——の時代への熟成、これらを別の言葉でいい表したものに外ならない〉。

第4章は、修正主義者がいうところのマルクスにおける「理論と実践の矛盾」の問題から始まっている。

〈マルクスは決して意思の意義や、社会にとっての「人間の人格の巨大な役割」を認めなかったのではなく、意思の自由を否定したにすぎなかった〉。

以下、いわゆる経済決定論を批判するのだが、カウツキーの論理はやや異様な（今日の我々にとって）展開をみせる（初期の興味の残滓か？）。

〈すべての経済現象の原動力は人間の意思である〉、それは「すべての経済の基礎となっている生きんとする意思」である。

〈生活諸条件は有機体の意欲 [!] のあり方、行動の形態及び行動の効果を規定する。この認識は唯物史観の出発点となっている [!!] 〉。〈有機体の生活条件は二種類になる〉。一つは、「いつも繰返して同じ様式で続いている生活諸条件」であり、〈合目的な意欲はここでは習慣となり、…本能となり衝動となる〉。しかし〈まれにしかあらわれないか交互にあらわれてくる諸条件もある。…ここでは生活の維持は、本質的には、有機体が与えられた境遇を認識し、その行動を境遇に適應させるようにする有機体の認識能力に左右される。…一方ではより強い知力器官が要求されることにより、他方では弱い知力をもつ個体がより早く淘汰されることによって、その種の動物はその知力をますます発展させるであろう〉。

〈人類の場合には、知力は、…武器や道具の如き人工的な器官を創造することができるほどに大きくなる。…高度の知力の成果たる技術の発達は、それ自体の側で知力を一層発達させる推進力となる。/技術の発達も生きんとする意思の成果ではあるが、…生きんとする意思の重要な変化をひきおこす。…生きんとする意思がよりよく生きんとする意思になる〉。

〈[自然的器官とは異なり] 人工の道具や武器は個々人だけに所有されうるもので、…このような道具や武器を独占しているものは、それをもたぬものとは異なった生活諸条件の下で生活するわけである。かくして生きんとする同じ医師が各々異った形態をとるところのさまざまな階級が作られる〉。

〈一定の条件の下においては、個人または社会の、生きんとする意思は他の個々人の生存意思の征服によって保証されうるにすぎない〉。〈人間の場合でも、…生存をかちとる手段をめぐってこのような[肉食獣と同じような] 闘争が起こるのである。…[肉食獣の闘争結果は「一時的な現象にすぎ

ない」] ところが人間はその上に、継続的な搾取関係を発展させて、他人の意思の継続的な屈服を発展させるのである。/階級対立は意欲の対立である)。

〈意思と経済とを相互に独立している二つの要素とみる〉のは、「物神崇拜者」である。人間が原料は道具を支配するように、人間が自由意志で経済を支配する、また、原料や道具が意思・意識をもっていないように、経済は意思・意識なしに進む。

〈経済的必然性は無意思を意味しない。それは生存せんとする生きた実在の必然性から、そしてそれが見出す生活諸条件を利用せねばならぬ不可避性から、生まれてくる。それは一定の意欲の必然性なのである)。

〈意識はかの[生存]意思が一定の場合にとる形式を、また意思がかかる個々の形式に注ぐエネルギーを、規定する)。〈意識された人間の意欲は、人間に目的をあたえるが、力を浪費することなしに、最小の力を出して、その目的を合目的に達成する方法をも示してくれる)。〈社会的過程、その傾向と目的、を認識してはじめて、この[無意識的階級闘争における]浪費を終らせ、プロレタリアートの諸力を集中させ、それを大きな組織に集合させることができる)。

〈換言すれば、理論は、プロレタリアートの可能な力を最高度に高める要因である。これは、この要因によって、経済的發展により与えられたプロレタリアートの諸力を最もよく目的に合致することが教えられ、その浪費が阻止されるからである[この一文は、改良主義者・実践主義者の反発が必至だろう、理論を軽視する運動は“エネロス”だということのだから]。/だが理論はプロレタリアートの活動力を高めるだけでなく、その力の自覚をも高める)。

〈何十年も、いや何百年も、つねに繰返されている諸事情は、その物質的な土台がすでに消えてしまっても、なお後まで作用しつづける習慣や本能を生みだすものである)。〈プロレタリアートにおいても、自分が本来弱いのだという感覚と、資本は不敗であるという信仰とが長らく後まで作用しているのである)。

〈ドイツやイギリスの如く工業的に高度に発達した国家においては、プロレタリアートは今日すでに、社会的経営によって資本主義的経営を排除するために国家権力を利用する経済的諸条件をもっているであろう。/しかしプロレタリアートに欠けているのは己れの力の意識である)。

〈力の意識を形成する上に、あらゆる理論よりも一層効果的なのはつねに行動である。敵に対する闘争における行動の効果は力の意識であって、この闘争を通じて社会民主党はプロレタリアートに己れの力を明瞭に示し、その力感を最も効果的に高めていく。この効果はまた、しかしながら、社会民主党が理論によって指導されているという事情のおかげであって、この理論がプロレタリアートの意識ある組織された部分に、己れの与えられた諸力の最大限をあらゆるチャンスに尽すことをえさせるのである)。

〈われわれがわれわれの個々の闘争を全社会の発展との関連において考察しようとするほど、…われわれの全努力の最終目標が一層明瞭かつ力強くわれわれの眼前にあらわれ、生きんとする意思が間断なく必然的にプロレタリアートに強制するところのわれわれの小さな仕事も一層高尚になり、闘争の獲物の大きさによって、プロレタリアートの意思は、奇襲という正気を失った興奮ではなしに、一層透徹した認識の産物たる革命的情熱へと、いよいよ最高度に緊張させられる。/これが、

社会民主党がこれまでプロレタリアートの意欲に感化を与えてきた方法なのである。党はこれで大いに輝かしい収穫をおさめたのであるから、党にとっては、党の方法を別のものと代える理由は少しもないのである）。

有機体一般、例えば単細胞生物や植物に意思・意欲・意識はあるのか、などという突っ込みはやめておこう。ただ、階級闘争を生存闘争とする見方が、この時点でも残っている。

記述したように、第5章は1893年の著作からの引用が中心である。〈民主政治は種々なる政党や階級の力関係を明白にする〉。従って「上昇線と努力している階級」の早すぎる決起や、支配階級の衰えゆく力を省みない「拒否」を防止する作用をもつ。

〈プロレタリアートの革命闘争においては、…経済的立法及び道徳的圧力の方法が…軍事的方法に勝るであろう〉。ただし、支配階級が暴力（内乱）にうたえる可能性を忘れてはならない。

要するに、エルフルト党大会において、「青年派」の急進主義とフォルマルの改良主義とを排斥した原則の確認である。

以上、第5章までで「エルフルト原則」を堅持すべきことが示された。しかし、第5章の終りで、次のような見解が表明される。

〈諸事情は90年代の初め以来根本的に変わった、われわれは今や国家制度と国家権力をめぐる闘争の時期に入っている〉。

第6章は、この見解の根拠の説明である。

カウツキーは、〈政治生活は国民生活にまでなっている〉国において、「政治権力の大移動」が可能となる4条件を示した。①現政体が〈国民大衆に決定的に敵対して〉いること、②組織された大衆をもった「不倶戴天の一大反対党」が存在すること、③この政党が大多数の国民の利益を代表し、その信用をもっていること、④〈現政体への信用が、それ自身の道具たる官僚と軍隊とにおいて、その力も安定性も動揺させられて〉いること。

〈最近数十年間に少なくとも西ヨーロッパにおいては、これらの事情がすべて一致して生じたことはこれまでにはない〉。

しかし諸事情は、プロレタリアートに有利に変わりつつある。まず、プロレタリアートの組織の成長である。これは、〈ドイツで最も顕著にあらわれている〉。すなわち、SPDと労働組合の拡大に他ならない。そうはいつても、〈それは通常の、革命的ならざる時代においては、…国民大衆の上に立つに至った精英 [ママ] を、包含するにすぎないであろう。これに反して、如何に弱い者でも、闘争力と好戦欲を感じずる革命時代にあつては、階級組織の動員力は、その利益を代表している階級の広さ如何にかかってくる〉。

その広さが広がっていること、これが第二。〈賃金プロレタリアートが今日すでにドイツ帝国の人口の大多数だけでなく、有選挙権者の大多数にさえなっている〉。カウツキーは、職業統計などを利用して、これを論証した。〈経済発展は、今日の所有制度と国家制度とを除去することに利益をもつ国民中の革命的分子を保守的分子の犠牲によってますます増加させ、国家におけるこの分子の優越をいよいよ大きく形成するように、と作用している〉。

しかしながら、〈この革命的分子はさし当り可能性において革命的であるにすぎず、現実においてそうなのではない〉。〈大部分は小ブルジョア及び小農民階層からの出身であるから、多くのプロレタリアは長い間その卵の殻を身にまとっていた〉。また〈今日の社会の階級対立も全くわかっていない分子が、プロレタリアートのなかにますます数多くなってくる〉。

〈今日、われわれの新兵募集領域〔可能性としての革命的分子〕は人口の4分の3にも達する。…ところが、われわれに投じられた票数は総投票数の3分の1、総有権者数の4分の1もない〉。〈これらの人々〔可能性としての革命的分子〕を社会主義思想に賛成させることは一つの必要不可欠事である。しかしそれは、通常の事情の下では、…甚だ困難な課題である〉。

〈けれども前進のテンポは、革命的な不安時代やってくれば、一撃でもって急速なテンポになる〉。そのような情勢はあらわれつつあり、また「不倶戴天の一大反対党」=SPDが存在する。

〈それでは支配体制の道徳的崩壊を期待してよいのであろうか?〉——この問いをもって、この章は終わっている。

第7章は、19世紀終期以降、革命への期待が薄れていったことの分析である。

1880年代以来、「きわめて活発な経済的飛躍の時代」が始まった。それを牽引したのは「工業の急速な飛躍」であり（これが農業を救った）、それを可能としたのは「世界市場の急速な膨張」である。そのため〈外国市場を拡大する手段としての植民地政策のための利害が前面におし出されてきた〉。〈この植民地政策はブルジョアジー大衆によって経済上の飛躍と関連させられ、そしてヨーロッパ列強のブルジョアジーにとって、一つの新しい理想が発生した〉。この新理想が、帝国主義に他ならない。

先に『社会主義と植民地政策』を紹介した際、浪費の増大（軍国主義）、競争の制限=独占、植民地政策を資本主義の延命策として捉えていることを見た。カウツキーは、この延命策の包括的概念として帝国主義を規定したと思われる。

ブルジョアジーは、〈90年代に〔帝国主義を〕社会主義に対立させ始めた〉。〈所有階級は…いかに利害対立を通じて分裂させられていようとも、戦争準備に献身する点では、…みな一緒になる。天このようにして最近数十年間に諸政府は法外に強くなった〉。

〈1890年の最近の政治上の急変〔ビスマルク失脚=鎮圧法廃止〕以来、革命への衝動は消えた〉。

〈80年代以来の経済の飛躍が、労働力に対する需要の急激な上昇のおかげで、一連の労働者層に、立法の援助なしに、労働組合の「直接行動」によってかれらの状態を改善する可能性をあたえたのである〉。

〈ドイツの労働組合は社会民主党によって創設させられ指導された。そしてそれを効果あるマルクス主義の理論が援助したのである。マルクス主義のおかげでドイツの労働組合運動は非常によく目的に合致する形態をとることができた〉。「中央に集中された産業別大組合」等。

〈ドイツ労働組合のこの輝かしき発展は、議会で社会改良が停滞すればするほど、またこの期間に労働者階級が政治上の方法で得た実際の成功が少なければ少ないほど、プロレタリア大衆に一層深い感銘を与えた〉。労働組合は〈資本主義的専制支配の代りに「立憲工場」をおきかえ、そしてこの過渡段階を通じて、いかなる峻厳な破壊も破局もなしに、徐々に、「産業民主主義」に到達するための

ものであるかにみえた〉。

しかし、〈このように階級対立がますます和らいでいくようにみえていたとき、新たにこれを激化させる要因がすでに成長していたのである〉、と結び、次章へとつながる。

第8章は、国際情勢の分析が中心となっている。

カウツキーはまず、起業家連合をとりあげた。株式制度の説明は深められている。株式制度は、商業、銀行から工業をもとらえた。少数者の手中への企業の集中化が進んだ。〈株式制度は巨額の金融支配者を通じて、株式所有の投ぜられる小資産の収奪を促進する。彼らは…危険の多い近代経済生活の水路に精通しており、…その瀬と深淵とを人為的に作り出す…。株式制度によって、株式に投ぜられた小資産はまた、株式会社の支配者たる巨額の金融支配者に対して、無制限の指令権を委ねる権力手段となる。最後に株式制度は、…大銀行、巨額の金融支配者に、多数の企業が彼らの完全な所有になってしまう前に、…同種の多数の企業を彼らの支配に屈服させ、かくしてそれを一つの共同の組織のなかに統合することを許す〉。

〈起業家を、…カルテルやトラストに集めるよりも、労働者を抑圧するための組織に集める方が一層行われ易い。この後の分野ではかれらは競争を知らず、対立を知らず、そこでかれらはみな一体になっている〉。

次に、外国人労働者の増加。〈外国人の移入はプロレタリアートの地位をおし下げるしゅだんである。〈しかしそれは自然必然的に工業資本主義の発展に伴うものであ〉って、〈資本主義制度のもとにおいては、いかなる経済上の進歩もプロレタリアートにとっては呪詛と結びついている〉。

〈企業家連合と、寡欲な無組織な保護のない外国労働者の流入とによって、労働組合の闘争の困難さは、生活必需品の価格が上がるときには、倍加されて一層つらく感じられる〉。〈繁栄にもかかわらず、労働者の実質賃金は10年以上もこのかた、当時より低きに止まっている〉。

〈われわれは、労働組合が最近12年間に成功してきたように、純粹の組合的方法によってプロレタリアートをもう一度力強く前進させるなどと期待してはならない〉。

このような主張は、組合主義者をいたく刺激した。組合理論家シュミットは直ちに、『権力への道』を真向から批判する論文「幻への道——無駄骨仕事か、積極的成果か」を発表している。

カウツキーは言う、〈事情が変わってきても、組合の意義は減少するのではなくて、単にその闘争方法が変わるだけである〉、と。

〈企業家団体によって支配され、かつ全経済生活にとって重要な意義をもっている産業部門で起るストライキはますます政治的な性格をおびてくる。他方では例えば、選挙闘争のような、純粹の政治闘争の場合には大衆ストライキという武器が効果をもつようなチャンスが多くなってくる。/このようにして労働組合はますます多くの政治的任務を与えられる。…労働組合の「直接行動」というものは労働者政党の議会活動の代行ではなくて、補充として補強としてはじめて合目的的にその実を示しうるにすぎない…。/プロレタリア活動の重点は、最近20年間に、再びより一層政治に移されている〉。

〈われわれの「実際上の」「改良的な」行動こそ、プロレタリアートを力づけるだけでなく、わ

れわれの敵をもわれわれに対するいやまず精力的な抵抗へと誘発する…。そして社会改良のための闘争がさらに政治闘争になるにつれて、企業家団体もまた議会と政府とを反労働者的、反労働者組織的に「使噓」して、その政治上の諸権利を侵害せんと努めるのである。／このようにして、政治生活においては政治上の諸権利をめぐる闘争が前面にあらわれ、国家生活の根本に関する問題たる憲法問題が決定的な問題になってくる〉。

ここで一言述べておくと、カウツキーは、経済における資本主義的發展と政治における帝政（ユンカー支配）とを統一的に把握する理論を形成できていない。この弱点をカウツキーは、敵の攻撃の強まり→経済闘争の行きづまり→政治闘争への転化という状況の論理で補った。

ついでに、ドイツの帝国憲法体制を説明しておこう。帝国の権力構成要素は、皇帝、連邦参議院、帝国宰相、帝国議会であった。プロイセン王を兼ねる皇帝は、軍事・外交の体験や連邦参議院・帝国議会の招集・停会権、および宰相の任命・罷免権をもつ。

ドイツ帝国は連邦国家であり、連邦参議員は各邦政府の代表から成る。憲法上、主権は連邦参議員にあり、法案の承認・拒否権をもち、また大幅な行政権がゆだねられていた。表決数58票のうち、プロイセンが17票をもつ。

帝国宰相はプロイセン首相を兼任し、皇帝に対してのみ責任を負う。宰相は、皇帝の意思、各邦政府（とりわけプロイセン）の意向、帝国議会内の主要政党の動向、等々の複雑な対抗関係を調整する能力が要請された。

帝国議会は男子普通選挙性によって選出され、法律の発案・審議権を与えられていたが、その権限はかなり制限されていた。また、討論の公開性の原則や政府への質問権があった。

連邦参議院と帝国議会の議員との兼任は憲法で禁止されていたため、政権担当者は帝国議会には所属しなかったが、プロイセン邦議会議会に属することは認められていた。政権担当者に対して、プロイセン邦議会議会が帝国議会よりも影響力を持つ。さらに、帝国の軍最高機関は設置されずに、プロイセンの陸軍省や参謀本部が職務を代行した。

カウツキーは、帝国議会の問題点を以下のように説明している。

まず、一票の格差の拡大。〈帝国議会の選挙区は今日まだ1871年と同じである。…この選挙区は都市の犠牲でますます農村を優遇している〉。

この選挙区を是正したとしても、帝国議会は〈勢力も権力ももたない〉。〈帝国議会は、帝国政府が帝国議会から独立しているという点のみならず、帝国がまだ全く正当に統一のある国家でないという点で、少なからずなやんでいる〉。帝国議会は、ここの連邦の〈偏狭な割拠主義的利害と衝突している〉。統一国家への前進を阻んでいるのは、「プロイセンとその3級選挙制の国会」に他ならない。⁶¹

〈ドイツを民主主義国家にかえることに成功〉すれば、〈プロレタリアートは…立法のハンドルを手中におさめるが、もし国家が社会改良になくはならぬ豊富な資金を思うように使えないなら、そのハンドルはプロレタリアートにはあまり役立たない。/けれども今日あらゆる国家資金は陸海の軍国主義政治によって浪費されている〉。〈国家が重要な社会改良を遂行しえんがためには、常備軍の

⁶¹ 3級選挙制はやや複雑な関節選挙制度なのであるが、要するに、納税額に基づいて三つの階級に区分する差別選挙制度である。

廃止と軍備縮小とが不可欠である。これはブルジョア分子ですらだんだん認めてきている（最後の一文を記憶されたし！）

続いてカウツキーは、「倫理的社会主義的植民政策」論を批判して、次のように言う。

〈今日の軍備競争はなかんずく植民政策と帝国主義の一結果であって、この政策に協力する限り、平和を宣伝することは何の役にも立たない〉。〈軍備競争…を阻止しようと欲するものは国民に対して植民政策の…有害なることを説得しなければならない。/これは現今の情勢に下においては闘うプロレタリアートの最も緊要な任務であり、プロレタリアートがなすべき「現実的な」政策である〉。

〈帝国議会選挙制の改善、諸邦殊にザクセンとプロイセンの国会に対する平等秘密選挙制の獲得、諸邦政府並びに諸邦国会に対する帝国議会の支配的地位の獲得、これは特に、完全な民主政治と帝国の統一とをはじめて闘いとるべきドイツのプロレタリアートが立向かっている課題である。帝国主義と軍国主義とに対する闘争は全国際プロレタリアートの共同の課題である〉。

ここでカウツキーは、〈これらの課題を解決しても、われわれはまだ前進しえない〉のではないかという疑問——「完全な民主政治、民兵制度、植民政策の皆無が充たされている」スイスにおいても、〈社会政策は停滞し、プロレタリアートは…企業家によって搾取されている〉——に答えている。

カウツキーはまず、スイスにおいても軍事支出が増加していることを指摘するとともに、次のように述べた。スイスの民兵制や共和制は「昔から受け伝えられた」ものであるが、「近代の大国」では〈それを頑強な、犠牲に満ちた闘争のうちに獲得〉しなければならない。〈これらの変革〔民主主義の獲得と軍国主義の除去〕がもっぱらプロレタリアートによって闘いとられれば、それだけ作用の相違も大きい〉。

〈プロレタリアートがその経済上の向上をさらに遂行しうるためには、このような〔政治上の権力関係と諸制度との〕変革がプロレタリアートにとって緊急必要事であることが明らかになるや否や、同時に政治闘争、権力移動及び革命の不可避性もまた与えられている〉。

以下、カウツキーは、〈プロレタリアートは来るべき闘争においては忠実な同盟者をうる見込みは全くない〉という注目すべき主張を展開した。すなわち、中間層（小ブルジョア、農民）に期待することはできないということである。

まず手工業親方。カルテルや関税は物価をつり上げたが、労働組合は賃金を引き上げた。そこから手工業親方は、物価騰貴の原因を賃上げと捉え、労働組合に対立するカルテル等を自らの同盟者とみる。

次に小商人。かれらは、労働者と同じテンポで購買力を増加させることができない。しかも、労働者の組織する消費組合は、物価上昇の結果を軽減する。小商人の怨みは労働者に向かう。

最後に農民。〈物価騰貴は購買者と販売者との対立を不断に激化させる…。これが生活必需品の購買者としてのプロレタリアートと、販売者としての農民との間の対立をも増大させた〉。また、工業の発展と労働組合の成長は、「農村における労働力不足」をもたらした。

〈曾ては小ブルジョア民主主義の核心となっていて、革命の力強い擁護者であり、その場合、微温的ではあるが、少なくとも革命的プロレタリアートの同盟者になっていたところのかの国民階級のうちの増加しつつある階層が、今日ではいたる所でまさにプロレタリアートに最も憤怒の情を懐いてい

る敵に変わってしまった)。

さらに、次の事情が加わる。(大国においては中間階級のプロレタリアートに対する敵意は、帝国主義や植民政策の問題をはさんで敵対的地位にあるために、もっとはげしくなっている)。なぜなら、(植民政策は、資本主義がその擁護者にまだ与えてやれる唯一の希望)だからである。

第8章は、次の言葉をもって締めくくられた。

(かくしてこの政策 [帝国主義] は、プロレタリアートの孤立を完全にし、かくしてプロレタリアートが政治権力を拡張することが以前にもまして必要になってきたまさにその時期に、プロレタリアートの政治行動を不成功にしてしまう任務をもっているように見える。/しかしやはりこの帝国主義の政策こそが現存制度が根底から変更される出発点となりうる)。

第9章でカウツキーは、まず、軍国主義・軍拡競争のもたらす諸結果を列挙した。

第一。(資本主義的機械工学と自然科学の生産への導入を必然的に伴う技術の不断の変革は軍事にも侵入し、この領域においてもまた、新発明の絶えざる競争戦、既存のものの絶えざる価値低下、そして権力手段の絶えざる拡大とをもたらしたのであるが、それは生産方法におけるように労働生産性の不断の増大を結果するのではなく、戦時の荒廃の不断の増大と平時の非生産的浪費の絶えざる増大とを結果している)。

第二。(世界政策が続くかぎり、…軍拡競争は完全な疲弊に至るまで拡大してゆかざるを得ない。だが帝国主義は、…現在の社会にとって将来の唯一の希望であり、唯一の理念なのである)。それ以外には、社会主義の選択肢しかない。

第三。(軍拡競争が長く続けば続くほど、それが各人民に課する負担は重くなる。そしてまた、各階級がこの負担を他の階級に転嫁しようとするにつれて、軍拡競争は階級対立をますます激化させることになる)。

第四。(租税負担の増大によって単に労働者の収入が減少し、賃金の購買力が低下するだけではない。世界政策によって促進されると言われている産業の進歩自体もまた脅かされる)。アメリカは、安価の食料品と原料を自国で生産し、また、ヨーロッパ列強ほど陸軍を必要としない。(ヨーロッパで軍国主義が増大すればするほど、合衆国の興行上の優越性は強力に増大し、他方でヨーロッパの経済的進歩は緩慢となる。…そしてこの過程をもっと促進させるために非常な犠牲がヨーロッパの労働者層に要求されるのである)。(労働者階級がこのような負担によってもっともひどい打撃を受け抑圧されるならば、この負担は工業にもかかり、工業の競争戦は困難な状況に陥る。…労働者の負担には限界があり、これを越える負担は不可能である。だから軍拡競争は、最終的には工業の進歩自体を疲弊させざるをえない)。

最後。(軍拡競争はますます民族的 [国民的] 対立を激化させ、平和の維持に役立つと言われながらもかえって戦争の危険をかき立てている。すべての政府にとって…軍備の進行はますます耐え難くなっている。しかしいかなる支配階級も、その責任を彼らが遂行している世界政策の中には求めている。…なぜなら、世界政策は資本主義の最後の避難所だからである。したがって各々の支配階級はその責任を他 [国] の支配階級にのみ求めようとする。…このようにして全支配階級は一層神経質

に、一層猜疑的になってゆく。しかしこれはますます急速に軍備を続行させる新しい一つの刺激になるにすぎず、最終的には、結末なき恐怖よりもむしろ恐怖ある結末を、というところまでゆきつくのである）。

ここでカウツキーは、次のように言う。

〈もう一つの現象が同一〔戦争の〕方向に作用している。それは軍拡競争以上に世界政策を非合理に遂行し、現在の生産様式からその最後の発展の可能性を奪うにふさわしいものである〉。

「もう一つの現象」を、カウツキーは以下のように説明した。

〈植民政策または帝国主義は、ヨーロッパ文明の諸民族のみが自律的な発展の能力を備えている、という仮定に基づいている〉。しかし、〈ヨーロッパ文明の外部にあった諸民族…は単にヨーロッパの技術的な優越性によって圧迫された〉にすぎない。〈最近20年間に巨大な激変がもたらされた〉。すなわち、工業国は、単なる生産物だけでなく、「近代工業システムの生産手段および輸送手段」の輸出」を始めたのである。

〈前世紀の80年代後半以来の資本主義的工業の新たな繁栄は、この生産手段の輸出に基づいている。…生産手段の輸出が可能となりえたのは、この生産手段の輸出がヨーロッパ文明の外部にある諸国に資本主義的生産様式を育成し、そこでの伝統的な経済的諸関係を急速に破壊したからである〉。その結果、〈新たな諸国は古い諸国の競争者となった。しかし競争者とは敵なのである〉。

〈日本人が端緒を開くやいなや、…〔全東アジアと全イスラム世界は〕すべての外国支配に対する抵抗へと立ち上がった〉。帝国主義にとって最後の拡大領域である赤道アフリカでも反乱が広がっている。〈資本主義的搾取の移植は、この搾取に対する反逆の種を同時に蒔くことなしには不可能なのである〉。

東アジアとイスラム世界の諸国は、〈ヨーロッパのプロレタリアートが闘っているのと同じの敵と闘っている…。かれらが立ち上がっているのは、プロレタリアートを資本に対する勝利へと導くためではなく、外国の資本主義に国内的、民族的な資本主義を対置するためなのである。…したがってわれわれは、ヨーロッパ外部のヨーロッパ資本主義の敵に対して無批判であってはならない。/しかし、かれらによってヨーロッパの資本主義とその政府は弱体化しており、全世界に政治的不安の要因が持ち込まれる、ということには何らの変化もない〉。

〈東洋にも今や〔100年前の西洋と〕類似した性格の革命的時代が始まっている〉。〈世界政策のおかげで東洋——最も広い意味での〔イスラム世界、ロシアを含む〕——は、西洋と政治的・経済的に大変密接に結合されており、東洋の政治的不安は西洋の政治的不安をも引き起こす。大変な苦勞の結果得られた諸国家間の政治的均衡は、今やこれらの諸国家が全く影響を及ぼしえない予期せざる要因によって動揺し始めている。〔例えばバルカン半島〕…今や世界戦争はすぐそばにまで押し進められている。しかしこの10年間の経験が、戦争は最大の政治権力の移動を結果する革命を意味している、ということを実証している〉。

続いてカウツキーは、敵と味方の分析に移る。

戦争勃発による時期尚早の権力奪取を心配した1891年のエンゲルスの時代と異なり、〈今日ではプロレタリアートは、戦争を静かに待ち受けて良いほど十分に強くなっている。もしもプロレタリ

アートが所与の国家的基盤から引き出しうるだけの力を吸収しているのなら、そしてこの基盤の変革がプロレタリアートのさらなる上昇発展の条件となっているのなら、時期尚早の革命は問題とならない。

〈プロレタリアートは1891年以来数的に非常に増大し組織的に堅固となってきたばかりでなく、巨大な道徳的優越性を獲得した〉。それらは、SPDの伸長に反映されている。

〈これに対して敵側の陣営では、腐敗と無能力とがかれらの指導者を墮落させているという意識によって無気力とアパシーとがうえつけられている〉。「ちっぽけな陰謀家や臆病な無節操家」あるいは、「富と権力を自身のために獲得しようとする人間が「前面に出てくる」という「保守的階級におけるすべての権力所有者の道徳的かつ知的な墮落」に加え、資本主義社会では、資本家階級の手代にすぎない政治家の主要な致富手段は賄賂であること。

またカウツキーは、次の点を指摘している。

〈昔から戦争資材納入は多くの資本家の致富の手段であったが、…この同一の納入者が、今日では巨大な工業家つまりプロレタリアートの最大の搾取者なのである。彼らは外部の敵に対する戦争と同様に内部の敵に対する残虐な戦争にも最大の関心を持っており、ますます無節操な諸個人から成っている政府に対して最大の影響力を有しているのである。/すべての国家が隣国から挑発とか急襲の用意をしておかなければならないように、すべての国のプロレタリアートも、その支配者からの挑発や急襲の用意をしておかなければならない〉。

小ブルジョア層については略。

〈このような全般的不安定の中で、プロレタリアートの最も緊急の任務は明確に与えられている〉。すなわち、すでに見た、国内における民主主義の獲得と国際的な反世界政策・反軍国主義の闘争。

〈この任務と同様、その解決にさいしてわれわれがもちいる手段も明白となっている。これまでに用いられた手段以外に、まだ大衆ストライキがある。これはわれわれが既に90年代の初頭に理論的に承認したものであり [?]、…1905年の輝かしき日々以来若干後景に退いているとしても、それは、この大衆ストライキがいかなる状況のもとでも有効であるとは限らないこと、いかなる場合にもこれを用いようとするのは愚かなこと、を証明しているにすぎない [事後証明!]〉。

このように、プロレタリアートの状況は「明確である」。しかし、〈無数の他の完全には予測し難い諸要因がこの場合に共に影響を及ぼす〉。①政治家たちの無節操、②小ブルジョア大衆の動揺、③外交政策の混乱、④東洋諸国の変化。

〈確実なのは、われわれが全般的不安定の時代、不断の権力移動の時代に突入しているということである。この時代がどのような形態をとろうとも、またどれ位続こうとも、プロレタリアートが資本家階級を政治的に経済的に収奪し、かくして世界史の新時代を開始する力を獲得するまでは、時代が長期にわたる持続的な安定の状態になることはありえない〉。

〈このような全般的動揺の中であって社会民主党は、自身が動揺することが少なれば少ないほど、また自身に確固として忠実であればあるほど、それだけ自己の地位を維持するであろう。…社会民主党が支配階級の腐敗に対して非和協的な対立を堅持するばするほど、巨大な人民大衆はこのよう

な全般的腐敗の中で社会民主党にますます信頼を抱くであろう)。〈まさに「反動的大衆」という言葉が真理となってしまう現在の現在〉、ブルジョア政党とのブロック政策は、SPDの政治的・道徳的〈自殺を望むに等しい〉。⁶²

〈今日すべての発展は以前よりも急速である。しかし他方では、戦場も非常に拡大している。…今日では労働しかつ搾取されている人類の解放闘争の戦闘は、シュプレー川〔ベルリンを貫流している〕やセーヌ河の流域だけでなく、ハドソン河やミシシッピ河、ネヴァ河〔サンクト・ペテルブルクを貫流している〕やダーダネルス海峡、ガンジス河や黄河の流域でも闘われているのである。/そして戦場と同様に、この闘争から終局的に生じる任務もまた巨大である。つまり世界経済の社会的〔別のテキストでは「共同」〕組織化という任務が生じるのである〉。

以上のような内容をもつ『権力への道』までのカウツキーは、以後変節したというのが昔の痛切であった(レーニンによる評価への依存が大きい)。もとになったのが修正主義派マウレンズレツヘル(ムレンバッハ)を批判する『ノイエ・ツァイト』論文だったので、『権力への道』の目的が修正主義・改良主義の批判だったことは間違いない。『権力への道』は、エルフルト綱領に則って政権奪取の必要性を再確認した。さらに、理論の意義を強調するとともに、「組合的方法」によってはこれまでのような前進は望めないとし、政治闘争への転化を主張している。それゆえ、ベーベルらとも対立した。その意味では、「左派」(広義の)ということができよう。⁶³

しかし、いわゆる「マティアス・テーゼ」(カウツキー主義=統合イデオロギー)以降、カウツキーは一貫していたとする主張が優勢であるように思う。⁶⁴

『権力への道』の特徴は、主体をとりまく客観状況とSPDの課題・任務とを静観的に叙述している点にある。しかも、客観状況はすべて「不確実」であり(後で何とでも言い逃れができる)、唯一確実とされた主体の側では、数的増大・組織化と道徳的優越性が指摘されているにすぎない。だから、「自身に確固として忠実」であること、つまり「エルフルト原則」を堅持することをSPDに求める。

このような論理構造になる原因は、各階級(特にその意識)の性格の、いわゆる基底還元的(教条的)認識にある。プロレタリアートは、ア・プリオリに(天然に)革命的なのだ。従って、経済的条件が悪化し、敵の攻撃が強まれば、プロレタリアートの政治的意識は自動的に高まることになる(自然成長的階級闘争論)。だから、情勢分析は、主体をとりまく客観状況の考察が中心とならざるをえない。

カウツキーのいう「革命の新時代」とは、敵の最後の延命策たる帝国主義が登場したという認識を土台にし、必ずや現実化するであろう革命の可能性の増加という見通しなのである。

他方、カウツキーにとって、革命におけるSPDの存在は絶対である(エルフルト綱領だけが革命の見通しを示している)。SPDを何としても守り、強化しなければならない。上記の見通しとSPD保存

⁶² 「反動的大衆」とは、ラサールがプロレタリアート以外を指して用いた言葉、『ゴータ綱領批判』参照。

⁶³ 〈『権力への道』に対してローザ・ルクセンブルクがどういう反応を示したかについては証拠がない〉(ネット前掲書)。

⁶⁴ マティアス前掲書の訳者解説は、マティアスの方法を、「思想史のアプローチ」ではなく、「政治社会学的解明」としている。

とは、ともに待機主義の契機をなす。

しかも、革命の見通しとSPD保存という両契機がバランスをとりうるのは、ただ静観的認識（つまり頭の中）においてにすぎない。各局面における敵・味方の力量判断等は、常に主観的要素を含む。敵の攻撃が強まった場合、反撃を優先するのか、防衛を優先するのか。主体の行動によって状況を切り拓くという理論をもちあわせていないカウツキーは、敵の力量が強いと判断して後者の道を選ぶ（客観主義=主観主義）。

vi) 「中央派」の出現

本来、「革命の新時代」が到来したのであれば、綱領改正の必要性が生じるはずであるが、カウツキーがその方向に動いた形跡はない。

1905年のカウツキーは、帝国議会議員が優勢なspdしっこうぶを「官僚制と議会主義とに熱中している古い連中の団体」と捉え、「2～3人の労働組合主義者と1人の出版関係者」を加えるべきだと思っていた（実施、事態はその方向へ進んだのであったが）。なぜなら、一般党員は依然として急進的であり、それが執行部に「反作用」を及ぼすはずだからである。

しかし、『権力への道』出版に対する妨害に直面し、問題は人事ではすまないことをカウツキーは悟る。〈今や彼は、「下からのあらゆる自主性を抑圧する… [ママ] 官僚制の肥大化」を見た。点灯時カウツキーは、ドイツの党の展望についてほとんど絶望していた。彼は再びオーストリアにもどることを考えたが、物質的な必要と信頼すべき後継者の欠如とのために、またもや果たせなかった〉（スティーンソン前掲書）。

この時、情勢が動く。

帝国財政改革案をめぐる「ビューロー・ブロック」⁶⁵が崩壊し、ビューローは辞任した。1909年6月のことである。ウィルヘルム2世の私怨もからんでいた（デイリー・テレグラフ事件⁶⁶）が、それはどうでもよい。

直接税は各邦に委ねられていたから、帝国財政はもっぱら間接税に依存していた。増大する財政赤字と軍事費をカバーするため、ビューロー政府は5億マルクの増税決定する。そのうちの4億マルクを間接税、1億マルクを直接税（相続税の新設）に求めたのが財政改革案であった。この妥協的改革案に対し、もともと各邦の財政権を削り直接税を帝国財政の基礎とすべきことを要求していた自由主義諸党は反対する。他方、これまで通りの税制を守りたい保守党（ユンカー）も逆の立場から反対し、これに中央党とポーランド党が同調した。かくて、財政改革案は否決されたのであった。

新たに宰相の地位に就いたベートマン・ホルヴェークの政府は、保守党と中央党の連合政府であり、黒（カトリック僧侶）・青（新教徒ユンカー）ブロックといわれる。1910年初め、ベートマン・

⁶⁵ 「ビューロー・ブロック」とは、1907年帝国議会選挙後に形成された保守党から自由主義政党までのブロックで、反SPD・反中央党の帝国主義政策推進ブロック。

⁶⁶ 1908年、ウィルヘルム2世がイギリスに滞在中に行なったイギリス陸軍大佐ワートリーとの対談が、『デイリー・テレグラフ』紙に掲載され、英独両国の世論の怒りを招いたスキャンダル。問題とされた発言は、①ドイツで親英家は少数派で、自分はその少数派。②ポーア戦争勝利は自分の功績、といった思い上がり発言。③ドイツの戦艦建造はイギリスを敵国とするものではなく、極東の国々に対するもの。といった点らしい。（Wikipediaより）

ホルヴェーク政府は、プロイセン選挙法改革案を発表した。それはウィルヘルム2世が勅語で約束した（1908年10月）ものだったが、間接選挙を直接選挙に改めるものでしかなかった。

プロイセン議会内のやり取りは省略するが、改革は挫折する。帝国内のプロイセンの権力と、プロイセンでの自己の権力を保持したいユンカー、帝国主義政策に夢中で、国内改革には熱心でないブルジョアジー。これらの支配者の意識を規定したのは、SPDの増大に対する恐怖であった。当時、国内政策の中心は対SPD問題だったのである（それは、最大の課題たる帝国主義政策の遂行と結びついている）。

1910年1月のプロイセン法（王国）のSPD大会では、選挙権闘争が「プロレタリアートによる政治権力獲得と、プロイセン反動を倒すため」の闘いであり、選挙改革は議会的手段ではなく院外の大衆行動によってのみ達成できるとしていた。5つの地区からは街頭示威行動とマッセンストを要求する提案が出され、採択された決議は「取りうるすべての手段」の使用が予想されると述べている。

改革選挙法案が発表（2月4日）されるや、『フォアヴェルツ』紙もそれを非難する。しかし事態はSPD指導部の思惑を越えて進行した。2月7日、選挙制度の民主的改革を求める大衆デモが始まり、プロイセン各地に広がっていく。2月13日（日曜日）には、〈街路は単に往来するためののみある。国家権力に対して反抗するならば武器を使用する〉とのベルリン警視総監の警告をはねのけ、圧倒的なデモが実行された。以後、日曜日ごとにデモは繰り返され、警官隊との衝突にまで発展したところもあった。

このような闘争の高揚を背景に、野党になっていた自由主義諸党は合同し、「進歩人民党」が設立される（3月6日）。また、鉱山や建築の労働者を中心に、経済ストが実行された（1年間で37万人が参加）。

これらを機に、ローザは再びマッセンストについての論文を書く。しかしその掲載は、『フォアヴェルツ』紙にも『ノイエ・ツァイト』誌にも断られる。SPD指導部は、すでに闘争の鎮静化にカジを切っていた。そこでローザは、論文を二つに分けて発表する。それが、「次は何を」（『ドルトムンター・アルバイターツァイトゥング [ドルトムント労働者新聞]』3月14～15日）と、「種まきの時」（ブレスラウ『フォルクスヴァハト [人民の護り]』3月25日）である。⁶⁷

「次は何を」でローザは、以下のように論じている。

〈われわれの党は、すでに開始されている大衆運動を眼のまえにして、党によって点火されたこの大衆行動を今後どのように指導し前進させてゆくか、明確なプランをもたねばならぬ。…デモというものが有効な圧力となりうるのは、必要ならばさらに先鋭な闘争手段にうったえるぞという真剣な決意と用意とが、デモの背後にひかえているばあいに限られる〉。

⁶⁷ パンネクック（1873～1960年）の回想によれば、3月6日のデモに参加した彼は、カウツキー、ヒルファーディング、ローザらと出会った。話は選挙法闘争及び、カウツキーの家では激論になったという。現在の運動が指導者のコントロールを越え、大衆自身によって新たな形態へと発展させるべきだと主張するローザに対し、カウツキーは、運動を指導者の指導下におくことの必要性を説いた。ローザ側についたのは、パンネクックだけであった。パンネクックは次のように書いている。〈マッセンストを擁護するマルクス主義者の間に、ここに初めて私ははっきりと精神の分裂が始まるのをみてとることができた〉。

〈政治闘争における大衆の意思の表現は、機械的にいつまでも同一の水準に維持しておけるものではないし、いつまでも同一の形態にはめこんでおけるものでもない。それは高揚し、先鋭化し、あらたな、より有効な形態をとってゆくのでなければならぬ。ひとたび点火された大衆行動は、推進されねばならないのだ。指導的な党が、あたえられた瞬間において、必要なスローガンを大衆に手渡す決意に欠けるならば、大衆が一種の幻滅にとらわれることは避けがたい。そうなれば高揚は消え、行動は挫折する〉。

〈街頭デモは、すでにここ数週間にわたる第一波の高揚を経て、それ自身の内部の論理によって、より高次の高揚を期待する気分をよびおこし、同時により高次の行動を期待する客観状況を、たたかひの場に作りだしている〉。また〈街頭デモが民主主義的ブルジョアジーの必要物となりかれらの政治闘争の手段となっている、という事実自体をとってみれば、…街頭デモは左翼の最前線にある社会民主党の必要を十分にみたす闘争手段ではもはやありえない〉。

〈社会民主主義者は、つぎの闘争手段はなにかを、考慮すべきときである〉。その、「つぎの闘争手段」こそ、マッセンストに他ならない。

〈マッセンスト、ことに短期の一回かぎりの示威ストライキとしてのマッセンストは、たしかに、いま進行している政治的大衆行動の最後のことばではない。しかしそれが現段階における最初のことばであることは、まったく確実である〉。

続けてローザは、労働組合の見地からすれば、マッセンストが組合の組織・財政をあやうくするというのが最大の懸念であるが、〈健全な強力な組織は、先鋭な闘争のなかでのみ確立されるものであり、試練のたびごとにあらたな生命力を生みだして、生長してゆく〉と主張した。

また、政治的見地からすれば、〈ドイツがまだ経験したことがないほどの大規模な政治的大衆行動を、選挙に先行させることによって、…きたるべき [1912年の帝国議会] 選挙を支配体制にとつてのワーテルローたらしめ〉ることができるという。

さらに、〈ドイツ社会民主党は、これまで議会闘争・組織・党規律の分野で、インターナショナルの優れた模範だった。…これらの特性をだんこたる果敢な大衆行動にどう結びつけてゆくか、という点での範例にも、やがてはなりうるだろう〉と期待した。

最後にローザは、マッセンストが指導部の「指令」によるものではないことを重ねて強調し、〈広汎な党员層によってのみ決定されうる〉こと、組織労働者大衆が意見・意思を明瞭かつ率直に表現すれば、指導者たちも決断せざるをえないこと、を述べている。

この論文を読めば、街頭デモは「それ自身の内部の論理」「闘争そのものの冷徹な鉄の論理」によって、より高次の闘争手段へと発展するという運動論・戦術観に気づく。ローザ自身は、〈街頭でもぬきの集会から街頭デモをともなう集会にいたりさらになになにに至る、といったたぐいの、いわば教育課程を最初から順を追って念いりに卒業してゆくような図式〉の適用を否定しているのであるが。

論文「種まきの時」の意義は、民主共和制の要求を提出した点にある。それをローザは、次のように説明している。

〈あらゆる成人の、性別にかかわらない、普通・平等・直接選挙が、まず第一の目標である。… [しかし] われわれが、政府およびブルジョア諸党の破廉恥かつぶざまな選挙法改正案にたいする返答と

して、真に民主的な選挙方式をというスローガンを高唱するかぎりでは、われわれはまだ一政治状況の全般をみれば一守勢に立っているのだ。…強力な打撃こそ最良の防御、にしたがってわれわれは、ますますあつかましくなっている支配的反動の挑発にたいして答えるために、アジテーションの鋒先を転じて、全戦線にわたって激しい攻撃に移らねばならない。攻撃がもっとも明瞭な具体的なかたちで、簡潔で勇勁なかたちで展開されるには、われわれの政治的プログラムの第一段をなす要求、すなわち共和制の要求を、はっきりとアジテートしてゆくことが第一だろう。

〈ドイツにおいては共和派的ブルジョア的幻想の危険が、社会民主党の40年間の活動をつうじて、徹底的に予防されているからこそ、われわれはこんにちアジテーションの中に、われわれの政治的プログラムの第1則をもっと大きく、当然許されいいほどに大きく、やすんじておしだしてゆくことができる。社会民主主義の共和主義的性格を強調することによって、まず第一にわれわれは、プロレタリアートの階級政党であるわれわれと、全ブルジョア政党の統一陣営との敵対関係を、理解されやすいポピュラーなかたちで説明する機会をひとつ余分に手に入れることになる〉。

〈共和制のスローガンの効用は、それだけではない。…個人支配を行う半絶対君主制が、うたがひもなく4半世紀以来、そして現在ますます、ミリタリズムの支点となり建艦政策の動力となり、世界政策上の冒険の指導精神となっているし、同時にそれが、プロイセンのユンカー層のとりでとなり、ドイツ全域のなかでのプロイセンの政治的後進性の優位を維持する堡壘となっている。…だから共和制のスローガンは、…ドイツのミリタリズム・植民地政策・世界政策・ユンカーの優位・プロイセン化にたいする、事実上の挑戦状なのだ。つまりそれは、支配的反動のあらゆる部分的なあらわれにたいしてわれわれが日常に行なっている闘争の、論理的な帰結であり、徹底的な総括なのである〉。

ローザによれば、共和制のスローガンは、大衆を啓蒙するためのものであり、「社会主義の種子」をまくことなのであった。

3月初め、SPD執行部、プロイセン組織および編集部は、『フォアヴェルツ』紙上でマッセンスト問題は扱わないことを決めた。またカウツキーは、共和制の部分の削除をローザに求めた。〈政治的配慮ではなく司法的配慮から〉である。つまりカウツキーは、一年前の『権力への道』に対するSPD執行部と同じ態度をとったことになる。しかしローザは、一年前のカウツキーのように妥協せず、論文を発表した。そして、西部ドイツでの遊説に旅立った。このローザの不在中に、カウツキーは、ローザを批判した論文「今は何を」を発表する（4月8日、15日）。ローザはこれを、“背後からの攻撃”と受け取ったようである。5月7日付けの手紙にローザは、〈カウツキー家の人たちとは二度と会いません〉と書いている。

「今は何を」でカウツキーは、初めに、マッセンスト問題を議論することの有用性を吟味した。まず、マッセンストが我々の武器たりうるか否かは、イエナ党大会で決着がついている。次に、現時点においてマッセンストが成功するか否かを議論することは、敵に我々の弱点を知らせるに等しい。このような議論は「内密に」おこなわなければならない。

従って、議論のテーマとなりうるのは、今マッセンストを選択しなければ大衆行動が崩壊するというローザの主張が正しいか否かである。これを議論するためには、示威的ストライキと「強制ストラ

イキ」（要求の実行を敵に強制するストライキ）、経済的ストライキと政治的ストライキとを区別しねければならない。

示威的ストライキは、局部的な出来事に対する抗議であり、局部的な性格をもつ。〈これに対し、政府あるいは議会のような中央の政治組織に対する強制手段としての政治的マッセストは普遍的な性格を持っていなければならない〉。「今日状況のもとでは」、強制ストライキは「愚行」である。

〈強制ストライキとしてのマッセストはわれわれが投入すべき最後の武器だということを忘れてはならない〉。

経済闘争が広範な政治運動に合流すれば、敵は恐怖を抱き、譲歩によって労働者をなだめ、〈かれらを政治的津波から孤立させようと試みざるをえない〉とローザは言う。しかし、ローザ自身述べているように、これはこの労働者を「孤立化」させることになるのではないか。なぜ、経済ストと結合させることによって、政治的マッセストが強化されるのか。

「革命が支配していた」1905年のロシアでは、経済ストと政治ストは結合されたし、マッセストも有効であった。しかしプロイセンは、現在、そのような状況にない。〈われわれは、われわれの戦術をプロイセンにおける現在の諸条件そのものから発展させねばならない〉。

以上、第1章。

第2章でカウツキーは、「打倒戦略」と「消耗戦略」について説いている。〈パリ・コムンこそ、打倒戦略の時代がさしあたり過ぎ去ってしまったということを明瞭に示した〉。「エンゲルスの遺言」が提示した新たな戦略こそ、「消耗戦略」である。それは、〈以前においては革命的階級にとって不可能であった…。これが可能となるためには、まず最初に普通選挙権、団結権、出版の自由、結社の自由といった諸権利の確立によってその基盤が創出されねばならなかった〉。⁶⁸

〈消耗戦略は打倒戦略のように決定的闘争へ直接的に突進するのではなく、この決定的闘争を長期にわたって準備し、敵が十分に弱体化したことを見届けた上で初めてこのような闘争に入るという点で、両者は区別される〉。

流石に必要なと思ったのか、カウツキーは「消耗戦略」と修正主義の戦術との違いを述べた（「打倒戦略」の放棄ではないこと、階級対立の緩和ではなく恒常的激化を前提としていること）。

しかし、「エンゲルスの遺言」にも「欠陥」があった、とカウツキーは言う。それは、敵のクーデターに対してどのような闘争手段を用いるべきかについて何も述べていないことである。SPDは、すでにこれに回答を与えた（イエナ決議）。

〈マッセストは事情によっては、プロレタリアートの政治闘争において、消耗戦略が不十分あるいは不可能となったときそれを打倒戦略へと移行させるための一つの手段足り得る。この場合、マッセストという語は強制ストライキの意味に理解すべきである〉。

〈今日マッセストの勃発をめざすことがわれわれの任務であるかいなかという問題が提起されるとすれば、それは、わが党のこれまでの消耗戦略の継続が今日不可能となっているかいなか、あるいはわが党を極度の脅威に晒すにいたっているかいなかという問題を提起することに他ならない〉。

⁶⁸ カウツキーが記しているように、「消耗戦略」は、第2次ポエニ戦争でローマ軍を指揮した将軍ファビウス・マクシムスの「引き延ばし作戦」をもとにしている。ファビウス主義は漸進主義を意味するが、フェビアン協会はその名をフェビ薄に負っている。

従ってまず、現在、我々が〈マッセストか、大衆行動の崩壊か〉というジレンマに立たされているか否かが検討される必要がある。

第3章でカウツキーは、〈消耗戦略からの離脱を必要とする〉場合をあげた。①「消耗戦略」の基盤を敵が取り去る恐れがある場合、②〈敵の打倒か、不名誉な降伏かという二者択一しか残されていない袋小路に陥った場合〉、③〈敵が窮境にあり、…致命的な打撃を与えうような〉場合、である。

①の場合については、すでにイエナ決議が承認している。すなわち、〈いつかは[NB]消耗戦略から打倒戦略へ移行することが可能となると宣言した〉。〈現在の状況においては、このような場合はいまだ存在していない〉。本章の中心は②の場合である。

ローザによれば、〈このジレンマはあらゆる大衆運動の内的論理の帰結であるとされている〉。

〈大衆行動は常に先鋭化し、新たな、より有効な形態をとってゆくものでなければならない。そしてひとたび大衆行動が始められたならば、それは即座に前進し、街頭デモンストレーションから示威的ストライキから強制ストライキへと発展せねばならない。そしてその次には何がくるのだろうか。さらにどのような「先鋭化」がわれわれに残されているのだろうか〉。

〈マッセストへ前進するための唯一の根拠がすべての大衆行動の「内的論理」にしか存在しないならば、このような根拠づけは多少貧弱なものであろう〉。

確かにカウツキーは、先に見たローザの運動論・戦術間の難点を突いている。しかしカウツキーの頭には、蜂起=暴力革命がない。

〈社会民主党が最初から消耗戦略を採用し、それを完璧なまでに発展させたのは、…マルクスの階級闘争の理論が次のような保証を与えたからである。社会民主党は、大衆が成功や新たな状況によって昂揚しようとしまいと、プロレタリアートの階級的利害を精力的に遂行するかぎり、階級的に自覚したプロレタリアートを常にあてにすることができるという保証である〉。

〈自由選挙権獲得はユンカー層の打倒と同時である〉。SPDは、〈平等・秘密・直接選挙権が獲得されないかぎりプロイセンに平穏はない〉と約束してきた。〈このこと[約束の履行]が意味しているのは、われわれの同志が今日まで偉大な成果を獲得してきた手段、とりわけ街頭デモンストレーションはこれをさらに使用し、無気力になることなく、逆にこれをいっそう力強く形成していくことが大切であるということだけである〉。

第4章では、③の場合が考察された。②のような状況、すなわちローザが言うようなジレンマは、マッセストの宣伝によって創り出さないかぎり、存在しないからである。

では、今日の状況は③の場合にあてはまるだろうか？ 〈マッセストの宣伝が所与の時点において目的に適っているかどうかは、この問題への解答にかかっているのであって、大衆示威運動の内的論理にではない〉。

〈プロイセンの諸関係のもとで、街頭デモンストレーションの成功とその巨大な道徳的作用が初めて可能となったのは、社会民主党が巨大な大衆の政党となり、大衆が最大の昂揚へと引き入れられた後であった〉。つまり、街頭デモが昂揚を喚起したのではなく、SPDが昂揚を組織していたから街頭デモが成功した、という論理である。

「大衆のこの強力な憤激が生ずる根本的な原因」については、『権力への道』で明らかにした。〈こ

〈この間、わが党自体も成長している。…もしわが党が1911年 [ママ] の選挙において、…議席数の倍増に成功するならば——状況は有望である——、われわれの党は全投票数の絶対多数を獲得することができるだろう〉。〈このような勝利はそのまま統治支配体制全体の崩壊を意味している〉。選挙の勝利が③の状況をもたらす！

カウツキーは選挙後にありうる可能性を三つあげた。敵が譲歩する場合、敵が暴力に打って出る場合、敵が「アメ」と「ムチ」の間をジグザグする場合、である。

〈たとえ諸関係がどのようになろうとも、帝国議会選挙は、われわれの闘争にとってより新たなより広範な基盤をつくりだす状況をもたらすに違いない〉。〈ただ一つのこと、われわれから勝利を奪い取り、輝かしい状況を不発に終わらせる可能性がある。それはわれわれ自身の愚行である〉。

結論。

〈われわれは今日、われわれの煽動をマッセストへ向けてはならず、現在にいたってはきたるべき帝国議会選挙へと向けねばならない〉。

選挙権闘争は4月をピークに、後退局面に入る。政府は改革案を撤回し（5月27日）、SPD指導部もキャンペーンを中止させた。選挙権闘争がすみやかに鎮静化したことは、SPD中央集権化のある種の“成果”といえよう。〈その後の論争は、より当面の問題をはなれて過ぎ去ったことに立ち返り泥試合となった〉（ネトル前掲書）。

ローザはベルリンに帰ってから、カウツキーへの反論を試る。さすがにカウツキーも、それを『ノイエ・ツァイト』に掲載せざるをえなかった。かくてローザの論文「消耗か闘争か」が発表される（5月27日、6月3日）。

ローザが第一に主張し、最も強調したのは、マッセストについての公然たる討論である。

〈カウツキーは最初は公開論争に反対し、それが無駄と分かるやかれ自身急進派の理論家としてマッセストの思想と関心を次の帝国議会選挙にそらそうと公然とふるまった〉。

〈問題となっていた主要事は、大衆地震がマッセスト問題を理解し、それに対する立場をとることであった。マッセストは可能なのか、時宜を得たものなのか、必然なのかということは、それより先の状況や大衆の態度によって決まってくる〉。

〈マルクス主義の見解は、大衆とその意識が社会民主党のすべての政治的行動を規定する要因であるとみなすところにあるのだ。この見解の精神によれば、結局は政治的マッセストも——選挙権をめぐる全闘争と同様——プロレタリアートの最も広汎な階層を階級的に啓蒙し組織化するための一つの手段にすぎない〉。

将来マッセストを適用する可能性が存在することは、カウツキーも認めている。だとするならば、〈大衆に対してそうした蓋然性をはっきりと示し、プロレタリアートの最も広汎な階層にそうした行動への共感をよび起こすことがわれわれの義務となる〉。

カウツキーは、〈マッセストを「司令部」により企てられ指揮された奇襲計画の一つとする、機械的な見解〉に支配されている。それは、彼による示威的ストと強制スト、経済ストと政治ストの区別論においても同様である。

〈カウツキーは、現在ふたたび選挙権運動と巨大な経済的大衆闘争の厳密な分離を弁護することによって、党におけるあの〔失業問題と選挙権問題を分離した1908～9年の〕精神を理論的に支持しているのだ。その精神から明らかになるのは、示威行為をできるだけ組織化された部分によって実行しようとする党の指導的サークルの傾向であり、その精神は、全選挙権闘争を、上級者の厳密な指令のもとに詳細な計画と展望に基づいて遂行される演習行動として理解しており、その運動中に、プロレタリアートと支配階級間の今日の対立に決着をつけるすべてのものから養分を汲みとる巨大な歴史的大衆運動、巨大な階級闘争をみていない〉。〈かれら〔指導的サークル〕はもともとドイツにおける巨大で先鋭な政治的大衆行動をことごとく妨害しており、それにたいし今日の選挙運動の差し迫った利益は、かれらを克服することを要求している〉。

「消耗戦略」が〈日常的な階級闘争のために、プロレタリアの啓蒙、集合、組織化のために、ブルジョア国家の議会的手段を利用すること〉を意味するならば、それはパリ・コムューン以後初めて創造されたわけではない。そして、「打倒戦略」と対比しての「消耗戦略」というカウツキーの議論は、「エンゲルスの遺言」とは関係がない。

「エンゲルスの遺言」は、〈バリケード戦によって最終目的の実現をもたらそうと考えていた〔1848年〕3月以前のユートピア的社会主義〔?〕を明瞭に、具体的に批判しており、それにたいし、とりわけ議会政治を利用している現代の社会民主党の日常闘争を対置している〉。

マッセストによって社会主義を突然導入しようとか、「大規模な軍事的衝突」を狙うとか、議会政治の利用に熱心に反対するとか、そのように考えているものは誰もいない。カウツキーは、「マッセストのアナーキズム的亡霊」に対して戦いを挑んでいる。「エンゲルスの遺言」が奇襲戦術を批判している限り、それはマッセストを奇襲と理解しているカウツキーを鞭打っているのだ。

〈カウツキーは、…マッセストをわれわれの古くから確証済みの議会主義戦術に今や対立させることによって、実際には、前もって現在の状況にむけて、たんなる議会主義を説いているにすぎない〉。

帝国議会選挙は「まったく新しい状況」を作り出す、とカウツキーは言う。しかし、SPDが倍増を実現したとしても、〈政治的諸関係の変革は当面のところ全然ありえない〉。

ローザは、カウツキーの主張を次のように特徴づけている。〈ある将来的条件の組合せのうえに準備をととのえること〉、〈今日のための全「消耗戦略」を近い将来における「打倒戦略」という崇高な行為の予想によって根拠づけようとする〉こと。このような思考は、〈現在の自己の不決断と敗北を、次の機会には崇高な行為をするのだという希望によってつねに慰めてきた〉（『ブリュメール18日』）フランスの小ブル民主主義者のそれと類似している。

このローザの指摘は、カウツキー主義の核心を突いている。今回は「将来的事件」が帝国議会選挙という具体的なものであることによって、その特徴が鮮明になったのであるが、『権力への道』およびそれ以前の著作においても、同じ思考構造が貫かれていた。

「消耗戦略」に立脚したカウツキーのマッセスト批判は遅すぎではないか、とローザは問う。何故ならば、2月から始まっていた街頭デモこそ、軍事的衝突のリスクを伴うからである。しかも奇妙なことにカウツキーは、街頭デモを〈さらに使用し、…いっそう力強く形成していくことが大切であ

る」と述べている。

そのチャンスはあった。ドイツ革命とパリ・コミューンの記念日である3月18日。しかし指導者はこれを完全にスルーし、3月15日の集会を指令した。革命ではなく、プロイセン下院の第3読会（よみかい）と結びつけられたのである。また、選挙権闘争とメーデー（8時間労働）と結びつけうる5月1日、ベルリンでは街頭デモがまったく起こらなかった。カウツキーの主張は、これらの現実を顧慮しない「示威行動と大衆行動一般についての純理論的見解」でしかない。

〈カウツキーが登場した実際の効果は、彼が党と労働組合のある連中に理論的な衝立を提供したにすぎないということである〉。

結論としてローザは言う、〈マッセストを、示威運動の増大と反動の頑固な抵抗とから遅かれ早かれ生ぜざるをえない手段として公然と明確に討論することが、党の義務なのである〉。

この論文では、共和制の問題にはほとんど言及していない。

また、他国の例をプロイセンに適用することを拒否しつつ、古代ローマを手本にとるカウツキーを揶揄しながら、ファビウスの作戦をローザは批判し、それを巡ってやり取りがあったのであるが、これは省略する。

ローザとカウツキーの論争は8月まで続いた。邦訳テキストがないこともあり、ここでは、二つの論争点についてだけ書いておく。

一つ目は、ドイツとロシアの状況の相違について。下の比較表は、カウツキーが「新しい戦略」（6月10、17、24日）で論じた内容を山本佐門（1980）がまとめたものである（どれだけ正確かは検証不能）。

	統治機構	資本家の組織	政治活動の自由	生活条件	プロレタリアートの結束および組織力
ロシア	解体寸前	分散し弱体	ほとんどなし	きわめて低い	分散かつ組織弱体
ドイツ	きわめて強固	集中して強固	きわめてある	革命にゆくほど絶望的ではない	相当結束し、強固な組織あり

カウツキーは、ロシア革命の際にマッセストが行使された条件の一つとして、かつてはツァーリズムの支柱であった農民層が蜂起したことをあげた。また、〈ドイツでは、また概して西欧では――労働者は、それをおこなえば一定の成果が得られる見込みがある場合にのみ、闘争手段としてのストライキに着手する〉のに対し、ロシア労働者のストライキ行動は、「特定の成果」を伴わない「無定形で原始的ストライキ」だと述べている。

これに対してローザは「理論と実践」（6月22、29日）で、次のように反論した。ロシア農民の蜂起は1905年に始まったことではなく、1861年の農民解放以来、何度も起こった。また、革命期ロシアのストライキは、賃上げ・時短などの成果をあげている。さらに、〈「西欧の」労働組合組織も、かえって、一歩一歩と、「特定の成果」の見込みが少ないまま、闘争に入らざるをえなくなってきた〉と、ロシアと西欧（ドイツ）の事情は共通性を持ちつつあると主張した。

上（前頁）のような比較からドイツでのマッセストを否定するカウツキーは、いかにも状況還元
的であるが、上の比較表には国家形態の項目がない。国家形態に関する限り、ドイツも十分に“後進
的”である（これに触れないのはツァーリズム＝「アジア的野蛮」というオリエンタリズムによるもの
か）。

これは、二つ目の論点に関連する。すなわち、共和制の問題である。論争は、『エルフルト綱領批
判』の解釈という形で展開した。エンゲルスは次のように述べている。

〈草案の政治的諸要求には一つの大きな誤りがある。本来言わなければならないことが、そこには
書かれていない。たとえこれらの10条の要求の全部がいれられても、われわれには政治上の主要目標
を達成するための種々の手段はたしかにふえるだろうがその主要目標そのものはけっして達成されな
いだろう〉。

この「主要目標」こそ、民主共和制に他ならない。ローザは、エンゲルスのこの言葉に基づいて、
共和制の要求を提案したものと思われる。⁶⁹

他方、エンゲルスは次のようにも述べている。〈共和制の要求を直接綱領のなかにかかげるとい
うことは、…法律上さしさわりのあるあるように思われる〉。カウツキーはこの言葉に依拠して、共和
制の削除を求めた。しかしエンゲルスは、次のように付け加えている。

〈ぜひともいわなければならないし、また、いれることができると思われるのは、全政治権力を人
民代表機関の手に集中せよという要求である〉。

カウツキーはこの言葉を無視している。⁷⁰

「法律上さしさわりのある」という20年前のエンゲルスの言葉は1910年にも正しいとするカウツ
キーと、1910年にエンゲルスが蘇れば「本来言わなければならないこと」を言うはずだとするロー
ザとの対立は、知ってか知らずか、エルフルト綱領を旧守するのか否かの対立になっている。従って
ローザの全体の主張は、SPDの綱領、戦術、組織（指導部）の批判という性格をもつ。別の面から見
れば、エルフルト綱領がカウツキー的マルクス主義の具体的表現である限り、マルクス主義者ローザ
は、カウツキー的マルクス主義＝「正統派」マルクス主義に挑戦していることになる（マルクス主義
史における一つの画期）。

ローザは、論争を上記のようなものとしては捉えていなかったと思われる。なぜなら、次のように
述べているからである。〈[カウツキーは]西欧とドイツにおける階級闘争発展の一般的眺望を見
失ってしまった。かれ自身、最近数年間、たゆまず、それを描き出してきたのに〉（「理論と実
践」）。要するに、カウツキーは変節した、という認識なのであった。

後に急進左派と呼ばれる人たちも、必ずしもローザの主張に賛同したわけではない。メーリングは
カウツキーを擁護した。メーリングは3月末に次のように書いている。

〈手放しておいても事件は革命化の方向をとっており、人為的に干渉する必要はない。反動派の無

⁶⁹ カウツキーも『権力への道』（『社会民主党競技問答集』からの引用部分）で、〈社会主義の実現可能な特定
の国家形態とは…民主共和制である〉と述べていた。しかしこれは、将来の説明であって現在の要求ではない。

⁷⁰ 〈ドイツ第2帝国においては、民主主義的な共和国の要求やそのためのアジテーションは、大逆罪にあたる〉
（保住敏彦『ドイツ社会主義の政治経済思想』）ものだったらしいが、ウラがとれていない。

分別な政策が大衆を自然に革命化して、わが党の勝利を保証する。われわれは力を貯えて次の帝国議会選挙に勝利し、国政を社会民主党の方向へ導くことができる。この決戦のためには力を分散することが非常な損失である）。

また、論文「君主制に対する闘争」（7月29日）で、共和制の要求は階級闘争の目標をごまかすものだ、と論じた。

第2インター各党でも、カウツキー支持者が多かったようである。1910年の夏にトロツキーは、次のような書簡をカウツキーに送っている。

〈あなたと、ローザ・ルクセンブルクとの論争について一言しましょう。このことについても、ほかのすべての件と同じく、ロシアの党の見解は分裂しています。メンシェビキはみずからあなたと完全に一致していると宣言しています。…しかし、彼らはメンシェヴズムにたいする従来のあなたの戦術的非妥協性に「変化」があるという風にあなたの立場を解釈しようとしています。…カーメネフによりますと、ボリシェヴィキ、より正確にはレーニン…は、現在の政治情勢についての判断において、あなたは正しい、しかしルクスがやっているアジテーションの性格はドイツについて非常に有益かつ重要でありうる、という意見です。あなたの立場が無条件賛成を獲得するためには、つぎの党大会において、あなたが鋭いアジテーションを要求し、革命闘争の不可避的性格を指摘する動議を提出すればよいとレーニンは示唆しています。いずれにせよ、私はルクセンブルクを公然と支持するただひとりの同志も—ボリシェヴィキのなかにすら—見出せませんでした。私自身について言いますと、ルクセンブルクが夢中になっている戦術問題は彼女の高貴な焦慮の結果だと思えます。これは非常に立派なことですが、それを党の指導原則にまで高めようとするのはナンセンスでしょう。これは典型的なロシア的方法です〉。

カウツキーはほとんど無視したが、パンネクック（パネクークとも）もローザとシンクロするように、マッセントに関する一連の論文を発表し、カウツキーを批判した。

オランダ社会民主労働党は、キリスト教系労働者の運動と、年の熟練労働者を担い手とするドメラ・ニーウェンハイス（1846～1919年、アナーキスト）らの運動とに挟撃されながら活動せざるをえなかった。19世紀末、ホルテル（1864～1927年、詩人）、ローラント・ホルスト（1869～1952年）、パンネクック（天文学者）は、カウツキーを師と仰ぎ、『ニーウェ・テイト』グループを形成する（ニーウェ・テイトはノイエ・ツァイトのオランダ誤訳）。ディーツゲン哲学に依拠する彼らの思想は、「オランダ・マルクス主義」という歴史的呼称が与えられている。

第2インター・アムステルダム大会（1904年）をきっかけに、パンネクックはカウツキーと家族ぐるみの交際をもつようになった。1906年、カウツキーは『倫理と唯物史観』の原稿をパンネクックに送り、感想を求めている。同年、パンネクックはカウツキーの推挙によってSPD党学校の講師となったが、ヒルファーディングと同時に、当局の干渉によって辞めざるをえなかった。

カウツキー、メーリングの勧めに従い、パンネクックは各地の党機関紙誌に論説を送る仕事につく。これは当時の左派メンバーの一般的な活動スタイルであり、組織的实践と結びついていたツェトキン（女性運動）、リープクネヒト（青年運動）は例外に属する。

1909年、パンネクックは、改良主義者が牛耳ることになったオランダ社会民主労働党から除名された（社会民主党を結成）。まだ同年、『権力への道』と軌を一にする『労働運動における戦術上の相違』を出版する。世紀の交わりを境に労働運動は新しい時期を迎え、それまでの政治闘争と経済闘争の分離から結合へと向かわなければならないこと、マッセストが決定的な闘争手段となること、等においてカウツキーとパンネクックは一致していた。しかし、時期区分を状況の変化として捉えるカウツキーに対し、パンネクックは労働運動の発展段階の差と考えている（オランダの“後進性”への自覚が基盤になっていると思う）。この違いが、すぐに決定的意味をもつ。

〈パネクークは、議会主義といわれる時期を、何よりもブルジョアジーからの精神的自立を獲得することが中心となる対抗権力形成の一段階として把える。反面、この段階は、労働運動内部に官僚制を発生させ指導者と大衆の対立を必然化させるという矛盾をはらんでいると考える。したがって彼にとって、労働運動の新しい時期とは、党と大衆が新たな関係に入る段階として構想されていたのである〉（山本秀行「アントン・パネクークとカール・カウツキー」『思想』1977年3月号）。⁷¹

1910年春、パンネクックはブレーメン邦（自由ハンザ同盟都市）党組織の勧誘を受け、教育活動を担うことになる（組織的实践と結びつく）。後にKPD（ドイツ共産党）の創立者の一人となるピーク（1876～1960年）にオルグられたという。ラディクも加わり、後にブレーメン左派はツィンメルワルト左派の一翼をなす。

パンネクックによるカウツキー批判は、議論禁止に同調するカウツキーの態度に抗議する論文「マッセスト論争について」（1910年4月12日）から開始された（ローザも「消耗か闘争か」の中でこの論文から引用している）。以後展開されたパンネクックの論点は、ローザと重なるところが多いのであるが、次の点にユニークさがある。

〈パネクークは、カウツキーの大衆ストライキ観と今やはっきりと距離をとり、…大衆ストライキ〔以下マッセストとする〕の機能を二つの面から論じている。マッセストは第一にブルジョア組織、国家の解体の手段であると同時に、これまでの「議会」と「組合」の方法では組織することが困難であった未組織労働者を結集し、組織し、教育する手段であると。パネクークの考えによれば、…一連のマッセストを通じて、長期的闘争のうちでプロレタリアートの権力の建設とブルジョア権力の解体が、同時に遂行されるというものである〉（山本秀行前掲論文）。

ここには、後の「評議会（レーテ）共産主義」の萌芽があるのではないか。カウツキーにしてもローザにしても、ロシア革命におけるソヴェトの意義に注目していなかった。パンネクックも恐らくそうだったと思う。パンネクックは、オランダとブレーメンでの組織的实践の経験から、「ソヴェトの理念」に近いものに接近したのである。⁷²

7月半ば、バーデン邦（大公国）議会でSPD議員が、党の伝統的な予算拒否の立場に拘束されないと宣言し、邦予算に賛成投票した。ベーベルがカウツキーに対し、ローザとの争いを停止し、バーデ

⁷¹ 〈 [『労働運動における戦術上の相違』におけるパンネクックの] 結論はまったく正しいものであると認めないわけにはいかない〉（レーニン「ヨーロッパの労働運動における意見の相違」）。

⁷² 「ソヴェトの理念」とロシア（だけ）で生まれたヘゲモニー概念とは関連があるのではないかと密かに考えている。ヘゲモニー概念については、森田成也『ヘゲモニーと永続革命』参照。

ン組織を攻撃するよう要求したため、ローザとの論争は中断する。カウツキーもローザもバーデンを批判する論文を発表しているが、詳細不明。ベーベルはローザに腹を立てていたが、バーデンにはもっと腹を立てていた。

〈ローザは南ドイツの底なしの日和見主義と比較すれば、それほど怖ろしいものではない。浅ましい女の生意気さにもかかわらず、私は、党にとって彼女はなくてはならぬと思う〉（8月16日付、ベーベルからアドラーへの書簡）。

「バーデンとルクセンブルクとの間で」と題する論文（8月5日）で、カウツキーはシャレたことを書いている。

〈党は、バーデンとルクセンブルクの間を通過して、勝利に行き着くであろう。/バーデンとルクセンブルクの大公国を地図の上で見た時、その中間にマルクスの生まれたトリーアがあるのに気づく。そこから国境を越えて左へ行くと、ルクセンブルクへ行きつくであろう。またラインを越えてやや右の方へ行くと、バーデンへたどりつく。地図上のこの位置こそ、今日のSPDが置かれた状況を象徴している〉。

カウツキーが自らをマルクスになぞらえたことはともかく、彼は、SPDが三分裂していると捉えた。このカウツキーの把握を前提にして、左派が分裂した。その原因はカウツキーの変節である、というのが通説になっていると思う（日本では）。しかし、この通説には異議をとない。

それまでカウツキーは、「エルフルト原則」からの右への逸脱と闘ってきた。既述したように、『権力への道』ももともとは修正主義・改良主義の批判を目的としたものである。選挙権闘争をめぐる論争においては、ローザ、パンネクックの主張をカウツキーは、「エルフルト原則」からの左への逸脱と考へた。当然カウツキーの論調の重点は変わる。が、基本線は変わっていない。

カウツキーのつまずきのもとには、1912年選挙を「破局」と結びつけたことにあった（理由不明）。そのことが、右派批判においては隠されていた、大衆行動にブレーキをかける待機主義を表面化させたのである。ローザ、パンネクックはそれを見のがさなかった。

ロシア革命の経験によって得た既述のマッセスト論に基づき、生じた大衆行動をそれまでの指導者一大衆の枠内に押し込めるのではなく、その先鋭化が指導者の任務であること、そうすることによってこれまでの指導者一大衆の関係を変革しうること、を「無慈悲な率直さ」（友人への手紙）を持って主張したのである。パンネクックもまた、マッセストを妨げる障害物は、「伝統の精神的・物質的な力」、すなわち、伝統的な理論・戦術観・組織形態・官僚的指導者であるという結論に至っていた。1910年マッセスト論争は、大衆が党を乗り越えた状況下で、大衆を旧来の党構造に押し戻すのか、大衆を目的意識的に指導できるよう党構造を変革するのか、という対立として捉え返さなければならない。だから、「変わった」というなら、カウツキーではなく、ローザ、パンネクックの方なのである。

以上が私の主張であるが、この問題については後にもう一度立ち返りたい。

カウツキーは後に、次のように述べている。

〈1910年のマグデブルク党大会で初めて「マルクス主義中央派」と呼ばれる現象が現れた。1899

年のハノーファー党大会以来、党大会の多数派はいつも政治家の焦燥感に対して反対してきた。1910年以来、あらゆる党大会の多数派は、反逆者的焦燥感、つまり極左派に対して反対するようになっている。これが、今や通常の状態になっている）（『政治的マッセスト』1914年）。

マグデブルク党大会（1910年9月18～24日）でまず争点となったのは、バーデン問題であった。この問題についてすでにローザは、次のように述べていた。

〈かれら〔バーデンの党組織〕が邦議会フラクシオンの予算案投票に無条件で同意したということは、「規律違反」以上に悲しむべきことを物語っている。つまりそれは、中間階級的な改良政策を社会民主主義的な階級闘争と混同する考え方のあらわれなのだ）（議員団を除名すればすむ問題ではないということ）。〈北ドイツにおいて、われわれは、帝国議会選挙への熱中にとらわれて全党内生活を犠牲にしており、小ブル的南部の土壌からはこの同じ議会主義崇拜が芽ばえて見事に歪曲されたカリカチュアになっている）（「バーデンの予算投票」）。

ローザは、党大会で次のように述べた。バーデンの指導部が労働者から信任を得ているのは、党の議会活動全体を一括信任投票的に問うているからであって、予算投票だけで信任を問うならば、バーデンの労働者も他の地方の労働者と同じ回答をするだろう、と。つまり、暗に主張しているのは、こういうことである。帝国議会選挙でSPDに投票せよと呼びかける一括信任投票的やり方ではなく、具体的なマッセストについて労働者大衆の信を問え。

原則をあいまいにした「統一維持」を批判する発言（ツェトキンなど）もあったが、議論はもっぱら規律問題として行われた。バーデン支持者は完全に開き直っている。〈決議案の導入が実践活動にとって非常な損失をもたらす場合、決議案を無視することが義務となりうる〉（フランク）、等々。⁷³

「党の統一維持」の見地からバーデンの議員団の行動を非難する決議が、289対80で採択された。また、〈この決議にそむく行動をした党员はただちに党籍を失う〉という補足案が211名の代議員から出され、受け入れられたという（ベーベルは反対したらしい）。

もう一つの争点は、選挙権闘争の総括であった。報告者ボルクマンは、次のように述べた。闘争は満足できるものであった、〈選挙権運動は労働者階級の中に深い根をはり、再び大衆を街頭に出させるには、一つの印がありさえすればよい〉。ローザが批判してやまない運動論である。

指導部は、「完全な政治的平等が達成されるまでは選挙権闘争に可能な一切の手段」を使用し、「選挙権闘争を一層進める」旨の決議案を提出した。これに対してローザら62名は、次のような対案を出している。

〈…選挙権闘争は、労働する人民の偉大な決然たる大衆行動によってはじめて勝利しうるものであり、必要な場合には、政治的〔別のテキストではこの語はない〕マッセストも含め、あらゆる手段がとられなければならない。/…選挙権活動が将来ふたたび始められることを顧慮し、党機関紙と集会においてマッセストの討議と宣伝を準備することが必要であり、さらに、状況がそれを必要とするならば、大衆が偉大な任務に目覚めるために、プロレタリアートの最も広汎な層において自己権力

⁷³ 信念への忠誠か党への忠誠か、というジレンマは、後に左派をも捉える。

〔別のテキストでは「自らの力」〕の感覚ならびに政治意識を先鋭化することが必要である〕。74

大安の第2パラグラフ（引用の第2センテンス）は拒否され、第1パラグラフを含む決議が受け入れられた（採択なしで）。これは、マッセンストを「最後の手段」=決して抜かれることはない“伝家の宝刀”と確認すること以上ではない。

80名は右派であろう。しかし、「統一維持」の立場にある右派（集権派）がいた可能性は大きい。また、62名が左派かという、そうでもないらしい。ネトル前掲書は「流動的」としている。だとすれば、「中央派」も流動的だったことになる。要するにこの時点では、「中央派」とは「統一維持」の立場にある者の傾向を指しているにすぎない（これが「マルクス主義」なのか？）。

1911年が明けてすぐに、議長の人ジンガー（反右派）が死ぬ。もう一人の議長ベーベルは、1908年以降、党大会への出席を除いて、病氣療養のためほとんどチューリヒに居た。SPDの実権は、ほぼエーベルトが握ったとあってよい。

2月、モロッコ人民の反乱が起こる。4月、フランスが居留民保護の名目で出兵、7月、ドイツも同じ名目で砲艦をアガディール港に派遣した。いわゆる第2次モロッコ事件（アガディール事件）である。

前年のマグデブルク党大会直前、第2インター・コペンハーゲン大会が開かれ、反戦決議が採択されていた。それは、各国社会主義政党の議会代表者に対し、次の諸点を要望している。①国際仲裁裁判所が拘束力をもつ判決を下すよう要求すること、②全般的軍縮を目指す協定の締結を要求すること、③秘密外交の廃止。そして、シュツットガルト決議が再確認された。75

SDKPiL代表として出席していたラデック（1885～1939年）は、軍縮協定など愚の骨頂だと主張している。また、議会内行動への限定にあきたりないフランス、イギリスの代表は、反戦闘争の手段としてゼネストと大衆行動が有効である、とする修正案を提出した（ロシア、ポーランド代表は賛成）が、否決された。

1911年メーデーを前に、カウツキーは論文「戦争と平和」を発表する。カウツキーは、世界平和を守ることが第2インターの最も重要な課題となっていること、ヨーロッパ戦争は必然的に社会革命に終わらぬにはおかないこと、従って今肝心なことは小市民層ブルジョアジーの反戦・反軍拡競争の運動を支持・強化することであるかと、を述べ、「ヨーロッパ合衆国の創設」によって「永遠平和の時代が確実にうちたてられるだろう」と主張している。レーデブーアも、帝国議会での討論において、カウツキーと同様の主張を行なった。

ローザは、これらの主張を批判する論文「平和のユートピア」を、二つに分けて発表した（5月6日、8日）。第1部では、まずSPDにとっての原則が強調されている。

〈ブルジョア陣営の平和の友は、世界平和と軍縮が今日の社会秩序の枠内で実現されうると信じているのに対し、われわれは唯物論的な歴史把握および科学的社会主義の基盤に立って、軍国主義は資本主義的階級国家と組み合わせさせて初めて創出され得たという確信を抱いている〉。

74 「自己権力」という用語は、パンネクックの影響であろうか？

75 4点目の要望は、ドイツ語版テキストでは「民族自決権」の擁護、フランス語版テキストでは「民族自治」の用語。第2インターでは、「自治」「自決」「自決権」の区別があいまいであり、テキスト間で異同がある。

〈社会民主党の見解の核…とは、軍国主義はその二つの形態——戦争としての、また武装平和としての——において資本主義の正統の嫡子であり論理的な帰結であって、資本主義と合わせて以外には克服不可能であること、したがって、誠実に世界平和と軍備によるおそるべき負担からの解放とを望むものは、社会主義をも望まねばならないということである〉。

この見地からすれば、「部分的軍縮に熱烈に賛成する」レーデブーアは、「ブルジョア的は平和の使徒の立場と社会民主党の立場との間に中間の立場を設定」する「妥協的立場」に他ならない。

第2部は、「ヨーロッパ合衆国」という「ユートピア的方策」に対する批判である。

経済的には、〈世界市場および世界経済の今日の発展段階にあっては、一つの区別された経済的全体としてのヨーロッパという概念は生気を失った妄想にすぎない〉。

政治的には、〈ヨーロッパの政治的連合という理念は基本的には、動的な中心点また政治的宇宙の中心にある太陽として運命を決定するヨーロッパ列強の協調という理念の民主的に飾り立てられた単なる模写にすぎない〉。〈ヨーロッパの諸問題や利害は今や偏狭なヨーロッパの中でではなく世界の大洋の上で戦われているが故に、ここ10年間ヨーロッパで戦争がなかったのだ〉。

〈したがって「ヨーロッパ合衆国」とは、経済的にもまた政治的に発展の経過と直接に矛盾し、ここ25年間の発展に全く注意を払っていない理念である〉。

さらにローザは、別の角度からもヨーロッパ中心主義を批判している。

〈ブルジョア政治家がヨーロッパ人という理念、またヨーロッパ諸国家の連合という理念を掲げる場合には常に、それは「黄色の危険」に対する「黒色の地域」に対する、あるいは「劣等な人種」に対する公然のまた沈黙の反対を伴っていた〉。それは常に帝国主義が産んだ異物だった。

〈ヨーロッパの連合というスローガンは、資本主義的社会の内部にあっては客観的には、経済的にはアメリカとの関税戦争を、政治的には植民地獲得の愛国主義的人種戦争を意味しうるにすぎない〉。

〈ヨーロッパの連隊ではなく、全世界、全人種、全民族を包括した国際的連帯が、マルクスが用いた意味での社会主義の支柱である〉。

7月、フランス社会党は事態を憂慮し、インター事務局（BSI）に独仏西英の代表者会議の招集を要請した。BSIは各党に賛成か否かを問い合わせたが、SPDのモルケンブーア（1851～1927年）の回答は「時期尚早」であった。会議は流れる。SDKPiLの代表としてBSIの一員であったローザは、モルケンブーアの手紙を知った。アガディール事件はドイツ政府が対仏ナショナリズムを煽る目的で起こされたものであること、しかし、独仏の資本提携が進んでおり決定的対立には至らないであろうこと、というのが手紙の内容であった。この手紙を暴露した論文「モロッコをめぐる」（7月24日）を皮切りに、ローザは、SPD指導部の態度を批判した一連の論文を発表する。⁷⁶

ローザによれば、SPD指導部の態度は次のことを意味していた。

〈モロッコにおけるドイツの行動にたいし、時期を見て停止をを命ずるのは鉄鋼連盟のおえらがたにまかせ、われわれとしてはこんなことはできるだけほっておき、ほかの要件に、つまり帝国議会選

⁷⁶ 『ローザ・ルクセンブルク選集第2巻』は、「モロッコをめぐる」の日付を「6月24日」と誤記している。

拳にとりくむことにしよう)。

このような指導部の姿勢を批判して、ローザは次のように述べた。

〈帝国議会選挙にあたって、われわれはなによりも社会主義の啓蒙活動をくりひろげなければならないが、もしわれわれがもっぱらドイツの内政状態を批判の対象にして、大きな国際的な関連、世界各地で進行する資本の支配、いたるところにおける歴然たる無政府状態、植民地政策ないし世界政策のあきらかな役割を、活動のプロセスであきらかにしなければ、われわれの啓蒙活動はけっして目的を達することはできない〉。

SPDのパフレット『世界政策、世界戦争と社会民主主義』（執筆者カウツキー）が発行された。ローザはただちにこれを批判する論文「モロッコ問題のパフレット」を書く（発表は8月26日）。ローザは以下のように批判した。

第一に、〈冒頭で世界政策の本質をときあかし、しかも今日の資本主義の爛熟と世界政策との関連を分析する必要があった〉のに、〈いきなりドイツとイギリスの対立からはじまり、問題全体をもっぱらこの対立におきかえている〉。

第二に、〈一般的には世界政策が、個別的にはモロッコの紛争がドイツの内的発展、軍国主義、大海軍主義、財政・税務政策、社会政策面における停滞と反動、国内のあらゆる状況の不安定性などどのように関連しているかについて、…これにふれたことばは一言もみあたらない〉。

その当然の結果として、第三に、〈資本主義社会の立場からもこの世界政策は無意味〉だとみせかけようとしている。〈プロレタリアートと「有産階級の大衆」とのいわゆる利害の一致を旗じるしにして、資本主義的な世界政策や軍国主義とたたかう役目をもひきうけている〉。

第四に、〈世界政策の全盛時代はすぎてしまった〉、もはや植民地支配はもうからない、と大衆に説くことになり、〈ブルジョア社会のうちのわずかひとにぎりの艦船供給業者が世界政策をささえているものとみなされる〉。

第五に、〈植民地の民族や土着民、かれらの権利や利害、世界政策によるかれらの労苦について、一言ものべていないし〉、帝国議会や君主制の役割、そして〈社会主義とその目標について、一言ものべてはいない〉。

ローザの指導部批判に激怒したベーベルは、ローザを告発する回状を全代議員に送付した。モルケンブーア書簡の公表は「秘密漏洩」であり、「規律違反」だというのである。イエナ党大会（9月10～16日）においてもベーベルは（最後に出席した党大会となったのであるが）、ローザ攻撃を繰り返した。

1910年マッセスト論争を通じて、党指導部が組合指導部と手を組み、大衆行動にブレーキをかける役割をはたしていることを認識したローザも一歩も退かない。〈われわれから委任されているだけであり、われわれにかわって、われわれのために行動するはず〉の党執行部が、モロッコ事件に対して抗議行動をおこさなかったのは、「背任の罪」を犯したことになる、逆に執行部を弾劾した。

モロッコ問題についての決議案を提出したベーベルの報告では、次の3点に注目すべきである。

第一に、〈我々は、ドイツの商業ならびに工業発展はモロッコにおいて他のいかなる国とも同じ条

件の下で行われるべき、という当然の要求をもっている〉。と語ったこと。第二に、戦争の危険を否定する理由として、〈世界平和の最大の保証は国際的資本輸出にある〉としたこと。第三に、SPDに対する「祖国なき輩」という非難、あるいは戦争勃発に際してマッセストを企てているという流言に答えて、戦争がもたらす飢餓を描きつつ、〈そうなれば大衆はマッセストを叫びはしない。仕事とパンを求めて叫ぶのだ〉と語ったこと。

また、第2インターのシュツットガルト反戦決議に言及し、「全般的マッセスト」の要求を拒否したことに触れ、〈それぞれの国民に、かれらがよいと見なす方法ないしは可能な方法で行動することが、まかされている〉との解釈を示した。決議案には、例によって「あらゆる可能な手段を使用する」との文言が含まれている。

ローザらは付帯決議案を提出した。ローザの提案理由演説によれば、それは5点にわたっている。①文明国間の戦争に反対するだけでなく、非文明国に対する戦争にも反対であると宣言すべきこと、②植民地主義に反対するのは労働者階級にとって有害であるだけでなく、〈植民地諸国の原住民の死活にかかわることがらだからだ〉ということ、③戦争の危険の原因は、「若干の資本家一味の投機的傾向」だけではなく、軍拡競争それ自体が戦争の危険を高めること、④「資本家一味」だけでなく、「ミリタリズムを支持している政党」（ユンカー政党、中央党、自由主義政党）をも批判すべきこと、⑤戦争の危険だけでなく、「平太的な方法…外交上の…利権と結びついたドイツ植民地所有の拡大」にも反対であること。この付帯決議案は否決された。⁷⁷

執行部は、〈他党との共闘をよびかけた〉帝国議会選挙にむけての戦術提案を〈ひそかに提出していた〉が、〈事実上、反対もなく通過した〉（ネトル前掲書）。

ジンガーの後任はハーゼ（1863～1919年）に決まった（対抗馬のエーベルトは102票を獲得）。ハーゼは熱烈的な「統一維持」派であったが、弁護士であり、党務よりも公判を優先する。

カウツキーは、イエナ党大会を総括して次のように述べている。

〈修正主義との闘争の時期に思想的に成熟した我々の若いマルクス主義者の一部は、我々の中で生じる意見の相違は必ずしも同じ性格のものとはいえないということを忘れていたようだ。我々は前世紀に根本的な相違から生じる不一致点をきわめて多く処理してきたゆえに、若きマルクス主義者たちはすべての相違はそのような性格をもたざるをえないとして、どのような意見の相違からも深い原則上の対立を引き出すことを、自らのマルクス主義や自らの学問的深さのせいにして〉。

〈[ベーベルの立場を修正主義者も含めて多数が支持していたことは] 党の考え方が右へ移ったということを示したのではなく、党の慎重な戦術が党大会の多数派から、我党の極左を追い出したことを示したのだ〉（「イエナでの二度目の党大会について」）。⁷⁸

⁷⁷ ベーベル決議案および付帯決議案は、前掲『帝国主義研究Ⅱ』に引用されている。

⁷⁸ 1913年党大会について述べたローザの論文「イエナでの党大会を終えて」が、『ローザ・ルクセンブルク選集』第3巻では、1911年党大会についてのもののように収録されている。不思議なのは、これをそのまま受け取って論じる人達がいることである。

党大会直後に伊土戦争が勃発したが、これに対してもSPDは冷淡であった（詳細略）。⁷⁹

1911年にパルヴスは、『プロレタリアートの階級闘争』を出版している。その中で彼は、次のように主張しているという。

〈個々の政治闘争を即座に一大革命闘争に転化しようとする革命製造主義…ではなく、すなわち闘争の社会的先鋭化ではなく、闘争の社会的拡張が必要である。そこでは長期持続的闘争の堅持が勝利をもたらす。いわば、白兵戦ではなく、機動的な騎馬戦の時代である。他方、理論上の勝利で満足する純粹革命主義は非革命的時期におけるプロレタリア党形成の宣伝手段としては有効だが、プロレタリア階級組織の力の活用に重点がおかれねばならないこの時期においては有害である。純粹革命主義が主張する（力を温存して待つべき）「最後の闘争」なるものはありえず、それへの固執は現実の闘争の軽視を意味する〉（田中良明前掲書）。

vii) SPDの体制党化

1912年1月の帝国議会選挙で、SPDは大躍進をとげた。その結果、SPD指導部はこれまでの政治指導の正しさを確信し、バラ色の未来を描く。カウツキーも例外ではなかった。100万票を上乗せするという得票数の増加をみた第1次選挙後、カウツキーは論文「勝利の根」において、1907年の敗北と対比する形で今回の勝因を提示している。

第一に、排外主義キャンペーンが吸引力を持たなかったこと。〈1907年にはヘレロ人〔ドイツ植民地の住民〕に対する戦争と、それにとまなう犠牲だけが問題となっていた。しかしこのたびは我々は選挙の直前、植民地政策によって、もう少しで世界戦争につき進むところであった。…今日世界平和をおびやかす対立はドイツとイギリスの間の対立であり、それはドイツを守るためではなく、熱帯の荒地を獲得するための海上での争いである。そして費用は以前より膨大であるのに、勝利の値は、少なくとも人民大衆にとってきわめて小さいものだ。そんなわけで、1887年や1907年にはなお、強い効果をもたらした殺人愛国主義は、このたびはまったく失敗に終わった〉。

第二に、物価上昇に対する「非プロレタリア層の認識が変わったこと。1907年にはかれらは、物価上昇の原因を賃金上昇にみていた。しかし、〈1907年以来の恐慌は賃金上昇をおしとどめ、…今やかれらにとって、賃金上昇が物価上昇をもたらすのではなく、大搾取者の経済的、政治的支配が原因なのだということをはっきり知った〉。

〈物価上昇、農業関税に反対すること、団結権をめぐる闘争、新たな関税、世界政策、軍拡に反対し、世界平和のためにたたかったこと、これらが今回の我々の飛躍をもたらした根である〉。これがカウツキーの総括であった。そして展望を次のように描く。

〈[決選投票後] たとえどのような帝国議会多数派ができようとも、400万の党は支配体制によって無視されえない。政府はそれらに譲歩するか、決戦を宣言するかであらざるをえない。我々はいずれの場合も勝利者である。…闘争は長くはつづかないだろう。そして大多数のものが、我々を支持す

⁷⁹ レーニン『帝国主義論ノート』には、カウツキー「ギャング政策」についてこんな記述がある。〈「それ（我々の選挙闘争）は、一夜のうちに権力のための闘争に変わることもある」…という言葉で結ばれる、トリポリ戦争〔伊土戦争〕についてのカウツキーの論文〉。

るようになるう)。

SPDは、決選投票に向けて進歩党との選挙協定を結んでいた。しかし、進歩党の投票者は同党指導部に従わなかった(その責任をめぐる論争は略)。にもかかわらず、SPDは110議席を獲得し、第一党となる。決選投票後、カウツキーは、「(新しい)自由主義と新しい中間階級」と題する論文を発表した。次の二点が重要である。

第一。職員層(アンゲシュテルテ)を中心とする「新中間階級」は増加しかつプロレタリア化して、「ラジカル化」している。それは、「自由主義のラジカル化」をもたらした。「新中間階級のラジカル化」の進行は、それを基盤とする自由主義諸党が〈SPDと共に社会民主主義的改良をおし進めるか〉、ラジカル化した新中間階級が自由主義諸党を離れ〈SPDに流れ込んでくる〉以外にない。さしあたって、自由主義諸党の左傾化を追求すべきである。

第二。〈このたびの選挙戦の結果が生み出したとはいえないが、その結果として明らかになった様々な政党、様々な階級の力関係は、これまでのドイツの歴史上に例がないような政治情勢を生み出した。我々の政治的前進の重点は今後も帝国議会にあること、この議会での闘争は現在の政治情勢では我々の歩みを大幅に進めうるものであること、は明白である)。

これらには、「破局」の可能性など微塵もない。「決定的闘争」は限りなく先送りにされた。ローザはこの論調を批判し、例え帝国議会の全議席が社会主義者によって占められたとしても、現実には何の変化ももたらさないだろうと主張した。実際、政府は、重要な政治的決定をプロイセン邦議会で行っていく。選挙の結果として確実なのは、SPD議員団の重要性が増したことである。

選挙協定に対する批判は、ローザに思いがけない成果をもたらした。メーリングとの関係が復活したのである。二人は後に、『ゾツィアールデモクラティッシェ・コレスポンデント [社会民主主義通信]』を創刊することになる。

1912年4月、当たらない国防法案が帝国議会に提出された。海軍増強のみならず陸軍増強をも含むものである。すなわち、仏露との戦争を射程に入れ、その際にイギリスの中立化をあてこむものであった。法案に反対したのはSPDだけであり、その反対が、いわゆる軍縮論争をもたらす。

少し時間を遡り、クロニクル風に歴史を確認しておく。ここではドイツを中心とした限られたものになるし、また、外交史的記述にとどめる。しかしながら、〈「分割」の意味を問わない「世界分割」史は歴史認識として積極的なものたりえない〉(「世界分割と植民地支配」『岩波講座 世界歴史』旧版第22巻)という板垣雄三の主張に賛同するということは、ことわっておきたい。

〈「世界分割」は、それをうち続いた植民地獲得競争の帰結あるいはその激化・拡大…としてだけみることを許さないような、植民地体制の質的転換を意味している。…ここで問題の時期において、植民地の地域・社会の国家的独占が目標とされるにいたって、その要求の錯綜のゆえに「独占」を保障するものとして、領域を「列強」が相互の明白な合意により、あるいは暗黙に、もしくは敵対的にさえ「認めあう」国際的体制が生じた。ある地域がある国の植民地(従属国)だということは、この場合、ただちに「分割」という複合的な国際秩序のもとに服することを意味し、また同時に「再分割」のための戦場となる可能性を担わしめられることを意味した) (同)。

「問題の時期」の始まりは、ベルリンで開かれたアフリカ会議（1884年11月～85年2月）出会った（コンゴ分割問題が中心）。ドイツは、ベルリン会議の直前に西南アフリカ（現ナミビア）およびトーゴ、カメルーンを、会議直後に東アフリカ（現タンザニア）を「保護領」化している。またドイツは、北東ニューギニアおよび南洋諸島を獲得した（1884年）。

ビスマルクの失脚（1890年）に伴って打ち出されたドイツの「新航路」政策は、いわゆる「ビスマルク体制」を解体せしめる。「ビスマルク体制」とは、フランスの孤立化を狙うドイツを要とした同盟・協商網であった。それは、諸列強の合従連衡の中で、ドイツが「誠実な仲介者」の地位を占めることによって可能となったのである（ベルリンでの国際会議がやたらに多い）。〈イギリスが成功したのは植民地を持っていたからである〉との俗受けする世論が形成されていたが、ビスマルクは植民地の獲得経営をドイツの国家政策として採用しなかった。ヨーロッパ外の出来事を切り離すことによって、ヨーロッパ内の対立を内包する均衡体制（＝「平和」）をもたらしたのである。

19世紀のヨーロッパ外交を理解する場合、両端に位置する英露両国の役割を考慮しなければならない。イギリスはどことも同盟せず（「名誉ある孤立」）、圧倒的な海軍力をもつ植民地帝国として世界に君臨していた。他方、強力な陸軍力をもつツァーリ体制は「反動の砦」出会ったが、それにとどまらず、アジアにまたがる大陸的勢力であった。ロシアの膨張に対抗しうるのは、ただ海洋帝国イギリスだけだったのである。英露両国ともにヨーロッパを超越した存在であり、ここが重要なのだが、両国ともに、大陸ヨーロッパに一つの覇権国が生まれるのを望んでいなかった。

また、衰えたとはいえ、オスマン帝国がヨーロッパに対峙していた。さらに、新たな大陸的勢力として米国が台頭してきていたが、米国がヨーロッパ政治に介入するのは第一次大戦以降なので捨象する。

1890年、ドイツはロシアとの「再保障条約」の延長を拒否した。「再保障条約」とは、共和主義フランスに対抗する3帝同盟・協商（独墺露）がバルカンをめぐる墺露の対立激化のため継続できなくなった時（1887年）、ドイツが単独でロシアと結んだ条約（墺露と二股をかけていたため「二重保障条約」ともいう）。「再保障条約」の延長拒否は、ドイツが一方をパートナーとして選択したこと、すなわち、「誠実な仲介者」の地位を自ら降りたことを意味する。

この意味を理解できなかったドイツの指導者は、ビスマルクの手法をまねようとしたが、それはドイツ個別の利害の追求としか見られなかった。3国同盟（独墺伊）内部の始動性においても、イギリスの友誼獲得においても、ロシアを手放したドイツの立場は弱まる。逆に、ヨーロッパ政治におけるイギリスの地位が高まった。

孤立を恐れるロシアとフランスが接近し、露仏同盟が成立する（1894年）。この同盟は、3国同盟に対抗するものであることを明記していた（同時の同盟はすべて秘密条約）。ドイツは、両面に敵をもつことになったのである。これこそ、ビスマルクが最も避けなければならないと考えていた事態であった。

露仏同盟は列強の強国政策を表面化し、ヨーロッパ外の利害とヨーロッパ内の利害とが切り離せない時代、「世界政策」の時代に入っていることを明らかにする。ドイツの場合、3国同盟の維持はオーストリアのバルカン政策に引きずられ、イギリスに接近すればその中東・アフリカ政策にまきこまれ

た。ドイツが公然と「世界政策」を実行したのが、かの「3国干渉」であった（説明は不要である）。それは、ロシアの極東政策を支持することであり、イギリスとの対立は必至である。

オスマン帝国内のアルメニア人虐殺に対する英仏露の講義と独の共同干渉拒否（1895年）、ドイツ皇帝がボア人共和国トランスヴァール大統領クリューガーに対し「ローデシア」の侵犯を排除した事を慶賀したクリューガー電報事件（1896年）、バルカン・海峡問題についての露英協定（1897年）、ファショダ事件（同）。

1898年、ドイツが第一次艦隊法制定（建艦予算を一般会計から独立）。イギリスは、露英海軍と同時に戦っても負けない「2国標準主義」をとっていた。ドイツも、イギリス海軍との正面对決を目指したわけではない。海相ティルピッツは、英艦隊が独艦隊を攻撃した場合、それに多大な損害を与えうる規模を考えていた。それによって英海軍は他列強に対する優位性を失うことになるから、独海軍への攻撃を「抑止」できるであろう。またそれは、ドイツが仏露に接近することを恐れるイギリスが、ドイツに接近することに役立つはずであった。1898～1901年の英独同盟交渉は失敗（ドイツが、3国同盟へのイギリスの参加を要求）。

1899年の第1回ハーグ平和会議では、軍備制限はドイツの反対で成果を見なかったが、国際司法裁判所の設置が決定される（1901年に常設の仲裁裁判所設置）。

1900年、義和団事件に対する8列強の“十字軍”。

〈「分割」はまず何よりも民族的抵抗に対する軍事的抑圧体制だった…。そしてそれぞれの社会における従属の性格や形態をきめた基本的ファクタは、結局そこでの民族的抵抗の力量であったといわなければならない。/1900年、「列強」のすべてに日本を加えた「連合軍」の共同干渉下におかれた義和団運動の中国の問題は、複合的秩序としての、また民族的抵抗に対する軍事的抑圧体制としての「世界分割」をもっとも集中的かつ完結的に示すものであった。…象徴的にここで「世界分割」は完成したといえることができる〉（板垣雄三前掲論文）。

「満州」を占領したロシアに対し、英独日はそれぞれに二元外交を進めた（そもそも、「対立しながら提携する」というのが列強の外交）。その過程で生まれたのが日英同盟である（1902年）。添えは、イギリスにとっては「名誉ある孤立」の放棄であり、その政策は第2次ボア戦争（1899～1902年）で行きづまりがはっきりしていた。

1902年には、モロッコにおけるフランスの、トリポリ（リビア）におけるイタリアの優位を相互に承認する協定が成立（3国同盟からイタリアが事実上離脱）。また同年、独アナトリア鉄道がバグダード鉄道の敷設権を獲得。

1904～05年の日露戦争（「第0次世界大戦」）が英米対仏独の代理戦争的一面をもっていたのは周知の通り。日露戦争とその結果は、諸列強に様々な影響をもたらした。

まず日露開戦直後に、対立の波及を危惧した英仏の協商が成立。エジプト（スーダンを含む）におけるイギリスの優位とモロッコにおけるフランスの優位を相互承認するものであった。スーダンにおいてはマクディー運動・国家を壊滅させた（1898年）後のスーダン人の抵抗の圧殺が必要であり、他方、モロッコにおいては強まる反スルタン闘争によってスルタン権力倒壊の危険を想定しその際の

仏西間の分割が考慮されていた。同年、モロッコについての勢力圏を確定する仏西条約締結。英仏協商によりイギリスは、地中海艦隊を北海方面に移動させる。

1905年3月、タンジール事件（第1次モロッコ事件）発生。それは、オスマン領内で激しくなっていた独仏独占間の競争を軌を一にしたものであり、また、ドイツによる英仏協商への挑発でもある。ドイツはフランスに圧力をかけ、国際会議による解決を要求した。

同年7月、独露皇帝が独露同盟に同意した（ビョルケ密約）が、両国外務省の反対によって破産。10月、イギリスが新型戦艦ドレッドノートを起工。イギリスは、武装解除されたロシア戦艦群を中国で詳細に検分していた。以降、建艦競争が過熱する。同年12月、敗戦によってロシアの軍力が低下とみたドイツは、「シュリーフェン・プラン」（仏露二正面作戦）を立案。

1906年、モロッコ問題解決のためのアルヘシラス会議が開かれたが、ドイツの目論見ははずれた。第2次ボア戦争と日露戦争で疲弊しているとドイツが予測した英露両国は、強くフランスを支持する。オーストリアさえドイツを積極的に支持しなかった。ドイツの完敗である。会議では、「治安」対策を主眼とする国際管理体制が合意され、フランスの優位が認められた。フランスは、対独復讐と植民地獲得との二路線を統合していく。ドイツでは「包囲」されているという意識が強まった。

同年、ドイツが艦隊法改訂。1895年にティルピッツは、「一つの目的、一つの愛国的結集のスローガンを求める国民の一種の要求」が現れたと述べている。それへの答えが建艦計画であった。ティルピッツは、「新たな偉大な国民的課題ならびにそれと結びついた経済的利益が」、「社会民主主義者に対する強力な緩和剤」となることを期待したのである。艦隊協会などは、建艦予算の獲得のために演出された英仏の脅威を煽った。プロイセン陸軍とは異なって海軍は帝国に直属しているという擬似民主主義的性格も手伝って、自由主義者は、建艦計画一「世界政策」を支持していた。こうして、経済的利益とSPDを除く市民の艦隊熱とが融合していく。艦隊は、ドイツの世界強国を目指す「使命」を象徴的に体現し、愛国主義・排外主義のエネルギーを自己に結びつけていった。⁸⁰

1904～06年、ドイツの南西アフリカ植民地においてヘレロ人の大反乱が発生した。現地政府は、これに対し、勝利ではなく「絶滅」を目的にするに至った。1907年の帝国議会選挙（いわゆる「ホッテントット選挙」）は、この反乱を鎮圧するための軍事予算を争点としていた。敗北したSPDは、〈非愛国的とレッテルをはられた政治家は破滅する〉との教訓を導き出す。

同年、第2回バグ平和会議が開かれたが、軍備制限については合意できず。韓国特使が日韓協約の無効を訴えている。⁸¹

第2インター・シュツットガルト大会は、バグ会議の開催中にもたれた。かの反戦決議についてレーニンが、1918年『流れに抗して』に次のような文章を発表している（全文）。

〈この修正の最終案文ができるまえに、我々とベールとの長い直接の折衝が行われたことを、私ははっきりと覚えている。最初の文案は、革命的煽動と革命的行動について、はるかに率直に語って

⁸⁰ 「帝国主義」という言葉は、ディズレーリが社会的危機からの抜け道として、植民地を「帝国」として合理的に組織するという発想から生まれたものである。ディズレーリは、植民地主義と並行して社会政策を遂行し、労働者階級をも帝国主義的に統合しようとした（「買収」）。この点が、SPD・労働組合を「隔離」しようとしたドイツと異なる。

⁸¹ 日本では、この特使を「密使」と呼んでいるが、不適當。

いた。我々はそれをベールに示した。彼はこう答えた――私は受諾できない。というのは、そうになると、検事局は我々の党諸組織を解散させるであろうが、まだなに一つ重大なことがおこらない限り、我々はそういうことはやらないからである、と。同じ考えを合法的に表現するため、法律専門家と協議し、原案にいくども手を加えた結果、最終案ができあがり、これを受諾することをベールは承知したのである（レーニン全集36巻）。⁸²

大会直後に英露協商締結（3国協商成立）。イラン、アフガニスタン、チベットにおける両国の勢力圏を調整したもののだが、中心は、ロシア革命の影響を受けたイラン立憲革命に対する共同反革命。ロシアは東方・南方がふさがれ、出口はバルカンだけになる。

この時点で、同盟側と協商側が決定的対立関係に入ったわけではない。それぞれの陣営内に利害の対立があり、各国とも二元政策をとっていた。

1908年4月、バルト海のオーランド諸島の再武装に関する独露協定（クリミア戦争後に非武装化されていた）。同年7月、青年トルコ革命。オスマンの政治情勢流動化に伴い、ロシアの海峡自由通航権が各国の同意を得られず。そのような情勢を見たオーストリアが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ2州を併合（10月）。2州の住民、セルビアおよびロシアは怒り、ドイツは驚いた。ドイツは、オスマン領の切り取りではなくその保全を政策の前提としていたが、オスマンへの「陸橋」たるオーストリアを手放すことはできず、オーストリアを強く支持する。1905年の痛手から回復していなかったロシアはドイツの恫喝（1909年3月）に屈し、後ろ盾を失ったセルビアも併合を甘受せざるをえなかった。

ロシアが屈服せざるをえなかった理由には、独仏のモロッコ協定（1909年2月）もあげることができる。この協定は、モロッコにおける独仏シンジケートを追認するものであったが、ドイツ国内では他の独占グループからフランスの政治的支配権を容認している点を攻撃された。

1910年、独露のポツダム協定。ロシアがバクダート鉄道のバグダートまでの建設を認める一方、その支線としての北イランでの鉄道独占権を獲得。

モロッコではスルタン支配に対する反乱が拡大し、1911年2月にはスルタンのいるフェスが包囲されるに至った。フランスはスルタン救援のために群は派遣し、これにドイツが介入して第2次モロッコ事件が発生したことはすでに述べた。ドイツはフランスに対し、モロッコの分割かコンゴの譲渡を要求したが、イギリスが戦争をも辞さない姿勢でフランスを支持する。英仏独の愛国主義・排外主義は沸騰した。ドイツ外務省はフランスの抱き込みを目的としていたが、結果はまったく逆になる。ド

⁸² 大会でハーグ会議を「盗人の晩餐」と呼んだイギリス代表は国外退去の処分を受けたという。

イツはコンゴから「2本の地条」⁸³を得ただけだったのに対して、フランスでは対独強硬のポアンカレ政府が成立し、英仏協商の軍事同盟としての性格を明らかにした。

1912年、既述したように、新国防法案が帝国議会で提出された。ベートマンは〈戦争は革命に結果する〉との考えの持主だったらしく、海軍のみならず陸軍の大増強をも案に含めることによって、財政負担の過重を理由に議会で葬り去られることを狙ったという。だが成立してしまった。確かにドイツ政府にとって、軍拡のための財政負担は過重であった。犠牲を転嫁される層の不満は強まらざるをえない。ベートマンは、非常事態に際しての戒厳令の施行、SPD指導者の逮捕というプランもねっていた。⁸⁴

皇帝や軟弱な政治家の権威は失墜し、軍部が主導性をもつ。軍国主義イデオロギーは、ドイツ社会のすべての領域に浸透していた。〈ドイツは世界的大強国になるかさもなければ没落するか、のどちらかだ〉というスローガンによって国民統合が図られたのである。

ドイツ統一戦争（デンマーク戦争、普墺戦争、普仏戦争）を指揮した大モルトケ（1800～1891年）は、パリ包囲後もフランス市民がレジスタンス化して戦うのを見て、戦争は国王、貴族や官僚たちが戦う官房戦争から国民の戦争へ変化しつつあると感じ、今後の戦争は長期化が必至だと考えていた。また言う、〈戦争へと諸国を導くのは消極的な政府の願望ではなく、好戦的になった人民の圧力である〉、と。

（以上については、『岩波講座 世界歴史』旧版22巻・23巻および板谷俊彦「日本人のための第1次世界大戦史」（『エコノミスト』に2015～16年に連載）を参照した。）

83 開放耕地制度 open field system（小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)より）

中世から近世にかけて、ヨーロッパの平野部集村地方で支配的であった農地制度。村の共同耕地（耕圃(こうほ)）を構成するいくつかの耕区は、それぞれ各農民の持ち分に属する耕地片の集合体で、共同耕地全体としては保有地は複雑に混在している（混在地制）が、同一耕区内の保有地の間には生け垣、柵(さく)などの仕切りがなく、一続きで開放されていた。耕区の形状には、南フランスやイタリアに普及していたようなパズル状の不規則開放耕地もあったが、典型的にはロアール川とドナウ川の北方、およびイングランドの大部分の地方にみられたような、**細長い帯状の地条**が規則的に並ぶ長形開放耕地であった。このような耕地の型の相違は、犁(すき)の型の相違にも対応する。三圃農法と強固な共同体慣行が発展した北方では、重く湿った土壌に適合した、何頭もの家畜によって牽引(けんいん)される大型の有輪犁が出現するが、この犁の隊列は簡単に方向転換できないところから、極端に細長い長形の耕地が要求された。これに対し、伝統的に二圃制が維持され、軽量の無輪犁で土地を浅く耕していた地中海地方では、耕地は正方形に近づき、畦(あぜ)の方向を変えたり、交差させることもできた。三圃制であれ二圃制であれ、休作中の耕圃や収穫後の耕圃は、村の伝統的慣行に従って、農民の家畜（その割当て頭数は保有地面積が基準）の共同放牧にゆだねられ、家畜の糞尿(ふんにょう)によって自然に地味(ぢみ)が回復された。このように、開放耕地制度は、家畜を利用して穀物生産を行うヨーロッパ特有の混合農業ないし有畜農業の伝統に適合したものであった。しかし家畜の放牧には共同耕地だけでは不十分なところから、森林、原野などの共同地内の牧草地も放牧にあてられた。

農業の共同化については、領主を含めて、村の全共同体成員の間で恒常的な取決めが必要とされた。それというのも、領主の直営地も地条として、農民が保有する地条の間に混在するが多かったからである。農業共同体としての村の慣行（掟(おきて)）は、共同放牧以外にも、耕圃や耕区の境界設定、作物の種類や収穫の時期の統制（いわゆる「耕作強制」）、あるいは共同地におけるさまざまな用益権など、広い範囲に及んだ。〔井上泰男〕『M・M・ポスタン著、保坂栄一・佐藤伊久男訳『中世の経済と社会』（1983・未来社）▽マルク・ブロック著、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』（1959・創文社）▽ゲオルグ・フォン・ベロウ著、堀米庸三訳『ドイツ中世農業史』（1955・創文社）〕

⁸⁴ 帝国議会と社会政策とを結合したイギリスでは、いわゆる「人民予算」（地代の自然増加による不労所得を建艦の一部とする）によって、労働者階級の帝国主義的統合を図っている。

第1次バルカン戦争（1912年）以降の歴史は追わない。ここでは、「バルカン」とオスマン帝国について考える。

オスマン帝国は、ローマの正当な継承国家たる「ビザンツ帝国」（この呼称は19世紀にできたもの）を継承した（他方でモンゴル帝国の継承国家でもある）。オスマン領は「ルーム（ローマ）」と呼ばれていたし、正教を束ねる総主教座はイスタンブール（コンスタンチノープル）にあった。ギリシア語を母語とする正教徒は、自らを「ローマ人（ロメイ）」と意識していた（異教時代の古代ギリシア人との連続性の意識などあるはずもない）。

西欧諸国は、宗主国—植民地という構図をあてはめて、オスマン帝国を「トルコ人」による異民族支配と捉え、オスマン帝国を「トルコ」と呼ぶ。かくて、オスマン帝国は「ヨーロッパ・トルコ」と「アジア・トルコ」とに分割される。この過程は、「ヨーロッパ」（西欧）がギリシア・ローマの後継者であるという歴史観の形成と併行していた。

「ヨーロッパ・トルコ」が「バルカン」と呼ばれるようになるのは、19世紀末である。「バルカン」には「辺境」「未開」という意味が込められており（「東欧」も多分に同じニュアンスをもつ）、「対立・紛争」という更なる負のイメージが加わった。

既述したように、ヨーロッパ列強はヨーロッパ内部の矛盾・対立を外部に転嫁することによって、ヨーロッパの「協調・平和」を維持してきた。その転嫁先の一つがオスマン領、なかでもバルカンだったのである。

〈「ヨーロッパの協調」を実現するための取引材料として、いつでも切り売り可能な「分銅」としてオスマン領を用いるためには、あくまで西欧列強相互の対立が一定の閾値を超えた際にのみ、徐々にそれを解体することが必要とされた。そしてそれはまた、オスマン帝国を完全に「ヨーロッパの協調」の外部に追いやるのではなく、あくまでその内部で、西欧列強の統制下で、その解体が行われることも必要とした。こうした必要を満たすべく創出されたのが、「東方問題」なる枠組みであった〉（藤波伸嘉「オスマン帝国の解体とヨーロッパ」『アスティオン』第80号）。

第1次バルカン戦争の結果、オスマン帝国が「ヨーロッパ」で駆逐されたことで、上記のシステムは臨界に達する。オーストリアとセルビアの戦争は、「第3次バルカン戦争」（「バルカン」の再分割）にとどまることはできず、列強間の直接の戦争へと拡大したのであった。

オスマン帝国滅亡後、「アジア・トルコ」は「中東」と呼ばれるようになる。〈オスマン領は文明論的にも空間的にも、「ローマ」から「トルコ」へと矮小化され、更にそれが、「ヨーロッパ」と「イスラーム世界」との間で分断された〉（同）。

〈西欧から他称として生み出された、「バルカン」と「中東」という二つの地域は、オスマン帝国解体後も、一貫して西欧中心主義的な国際秩序の「弱い環」として機能する。…とりわけ後者には、第2次大戦後、その過程で表面化した「ヨーロッパ」の古くからの矛盾、即ち反ユダヤ主義の転嫁先として、異質な国家が埋め込まれた。冷戦の終結後も、「中東」ないし「イスラーム世界」は、超大国の世界支配の中で蓄積する矛盾の転嫁先として機能し続けている〉（同）。

閑話休題。

1909年3月、SPDの帝国議会議員団は軍縮提案を試みた。同年、レーデブーアは、論文「海軍軍備の制限」を發表している。これらが、SPDの軍縮論の始まりをなした。記述した第2インター・コペンハーゲン大会（1910年）の反戦・軍縮決議を主導したのもレーデブーアである。レーデブーアの提案は、〈英独の軍艦建造競争が世界平和をおびやかしており、イギリス政府には軍縮の意欲があるという認識にたっていた〉（大野節夫「カール・カウツキーと急進左派」、同志社大学『経済学論叢』第20巻第3号）。

バンデルヴェルデ（1866～1938年、ベルギー代表）は、〈私の印象ではレーデブーアはシュツツトガルト決議を弱める方向で解釈した〉と発言している。コペンハーゲン大会では、植民地問題は討議されなかった。同大会についての論評のなかで、カウツキーが次のように述べていることは記憶にとどめておいてほしい。

〈ブルジョア的平和主義や諸外国の政府との平和同盟の追求によって、戦争を葬り、軍縮と国際司法裁判所への服従をみちびくことができると思うのは、ユートピアである〉。⁸⁵

1911年3月、SPD議員団は、帝国議会で再び軍縮提案を行った。レンシュらがこれを批判する。資本主義を前提としては、賃金制度が廃止され得ないのと同様に、軍拡も廃止されない、資本主義は世界戦争に向かっており、社会主義が対置されるだけである、と。

カウツキーが反論に立った。〈政府みずからが8時間労働を導入すると期待するのはユートピア主義であり、小ブル的幻想であろう〉。しかし〈それがゆえに、我々は8時間労働を要求してはならないのか。…8時間労働に正しいことは軍縮にもあてはまる〉（「実践的選挙運動」）。

続けて、カウツキーは、軍拡はブルジョア社会内部に利害対立を生み出し、英仏国民は軍縮負担から自国政府に反逆的になっていると述べている。

この論文の次に發表されたのが、先に見たメーデー論文「戦争と平和」であった。

8月、『フォアヴェルツ』に、ベルンシュタインの論文「ドイツ帝国の対外政策と社会民主主義」が掲載される。それは次のように述べていた。

〈そこ《モロッコ》では、問題になりうるのはただ、アフリカ人が労働者として雇用されるヨーロッパの資本主義企業の活動だけである。…アルヘシラス条約はドイツの企業に、イギリスやフランスの企業と同じ権利をモロッコで保障している。すべての利害関係国によって署名されたこの条約を厳格に履行するよう要求することは、ドイツ人がモロッコの商業と産業においてビジネスを行うのを助ける最も名誉ある人間的な方法であるだけでなく、最も安上がりな方法である。かれらはアルヘシラス条約を名誉と理性をもって要求することができる〉。

これを批判して、ローザは以下のように主張した（「小ブルジョア世界政策か、プロレタリア世界

⁸⁵ 既述したように、コペンハーゲン大会においてラディク（SDKPiL代表）は軍縮論を批判したが、レーニンはそのような書簡をラディクに送っている（1910年9月30日付）。〈『ライプツィガー・フォルクスツァイトウング』の君の主張論文については、問題は極めて興味のあるものだが、私はこの問題をあまり研究していないと言わなければならない。理論的に君は必ずしも完全に正しくないような気がする。「資本主義の枠内で実現できないもの」の基準を、ブルジョアジーが許さないだろうとか、それを実行することができないとか、等々というふうに解してはならない。そういう意味では、我々の最小限綱領の極めて多くの要求は「実現できないものである」が、それにもかかわらず、それらは必須のものだ〉。この時点でレーニンは、帝国主義認識を確立していないが、両者は後に、民族自決権の実現可能性をめぐる論争するであろう。

政策か」)。

〈資本主義的帝国主義諸国の政策の最深部の本質、核心、その全意味と内実、資本主義が少しずつむさぼり食って消化できるようすべての諸国および諸国民を絶え間なくばらばらにしていくことである。…それは最初から、法の絶えざる蹂躪であり、原則にまでなった絶え間ない暴力行為である。外国の諸国および諸国民の残骸をめぐる闘争こそが、軍事的衝突であろうが、公然ないし秘密の諸条約であろうが、その唯一の内容であり目的である〉。

〈彼 [ベルンシュタイン] が気づかなかったのは、アルヘシラス条約が、モロッコのスルタンの主権を保障することによって、現地住民の諸権利を踏みにじり、かれらの背中に卑劣で殺人的なヒルを張りつけ、ヨーロッパの取引諸国がモロッコ諸民族の生き血を吸えるようにしたことである〉。

この後に、先に見たSPDパンフ『世界政策、世界戦争と社会民主主義』の発刊と、それへのローザの批判が続く。

1911年の論争においてカウツキーは、帝国主義問題とは切り離して軍縮を論じていた。先に示したコペンハーゲン大会についての主張は、ブルジョアジーによる軍縮はユートピアであるとしながら、プロレタリアート (SPD) の軍縮への態度は保留していたと考えられよう。本論は、カウツキーは「変節した」との立場をとらない。

SPDの選挙煽動は専ら内政問題に偏っており、1911年秋、カウツキーは「新中間層」を「発見」する (「党大会に向けて」)。しかし、「新中間層」は反ユンカーであっても、反帝国主義ではない。自由主義諸党は、内政では自由主義、外政では帝国主義を主張していた。

既述したように、1912年4月に政府は新国防法案を提出する。1912年の軍縮論争の口火を切ったのは、レンシュの論文「新たな国防法案」であった。軍縮論を批判したのはレンシュの他に、ラディク、パンネクックがいるが、ここではレンシュに代表させる。

「新たな国防法案」でレンシュは、次のように主張した。ドイツ資本主義が発展し、〈帝国主義の時代に入った〉。

〈我々は、戦争の危険を否定するということで軍国主義と闘うのではない。反対に、この戦争の危険を世界政策の恒常的現象にしてきたものと闘うのである〉。

〈帝国主義とともに社会主義は遠い理想であることをやめ、現実的政治の不可欠の目標になった。我々は、資本家階級の帝国主義の叫びには、社会主義の呼びかけしか対置しえない。軍国主義と海軍主義との闘争においても、民兵制度の綱領要求以外に煽動すべきことはない〉。

カウツキーは、論文「メーデーと軍国主義に対する闘争」でレンシュを批判した。カウツキーはまず、「世界平和」の獲得ということでは党内に異論はないが、それを「いかに」遂行するかについて異なった見解—民兵制と軍縮とのスローガン—がある、と問題を立てる。そして、二つのスローガンを抽象的に分類し、どちらが現実に適合的かと考えた (マッセスト論争の時と同じように)。民兵制は政治的な要求であるが、軍縮の利益は経済的なものである、云々と。ここには、戦争一般を「野蛮」として忌避する姿勢が表現されている。そしてカウツキーは言う、〈資本家の搾取欲に対する抵抗は非常にしばしばブルジョア社会自身の永続的利益のなかにある〉、と。

〈我々がプロレタリアートの利益において味方する際、同時にまた支配階級の大部分の先見の明のない瞬間的利益に対抗して、よく理解された発展した産業資本主義段階にあるブルジョア社会の利益を擁護するのである〉。なぜか。ブルジョア社会のなかでこそプロレタリアートは労働能力を高めることができ、それが、「より高い社会形態の出発点」となるからである。

次にカウツキーは、帝国主義の問題を扱う。「資本主義的生産過程の生存要素」と「資本主義的生産過程の産物である現象」との区別の必要性を説いた上で、カウツキーは次のように述べた。

〈資本主義にとって市場の絶えざる拡大は、生存条件のひとつである。その発展の一定の高さでは、植民地と勢力圏の獲得を達成することは有利な方法として現れ、そしてそれは軍備競争にまで導く。しかし、この方法が阻まれたにしても、それは資本主義の崩壊ではなく、その拡大に別の方法を採用することの必要性だけを意味する。軍備拡大競争は経済的原因に基づいているけれども、経済的必然性には基づいてはいない。この軍備拡大競争を廃止することは少なくとも不可能ではないのである〉。

ここまで、カウツキーは、「平和な」資本主義の方がプロレタリアートにとってもブルジョア社会にとっても有益であるということ、軍縮論の根拠とした。カウツキーの主張ささらに進む。資本主義自身が軍縮による平和を実現する契機をもっているというのである。

〈競争戦の継続が全参加者を破滅させることが明らかになればなるほど、諸国家の競争戦はカルテル関係によって排除される段階にますます近づく〉。〈ドイツ・イギリスの資本家も、外交政策についての取決めを行い、その軍拡を制限しようとしても、自ら最小限の損失すら受けないだろう。むしろ両国が、一致して少なくともヨーロッパのすべての国家に外交についての取決め、軍縮を行わせること、そして今までより強力に、少なくとも東半球の領域を利用することを可能にするであろう〉。

〈この〔軍縮〕協定は、国際性すなわち恒久平和の勝利を意味する。企業者連合が競争を永久に排除しうることがいかに少ないにしても、資本家政府の間で、紛争の材料をあらゆる時期にわたって取り除いてしまう協定は可能であろう。…世界戦争をしかも近い時期に不可避にしている現在の段階からぬけだすことに成功するならば、そして戦争を確実に永遠に排除しないまでも、それを少なくとも延期する状態を代置するならば、直ちに無限に多くものを獲得するであろう。これは、それでもってヨーロッパ諸大国同士の戦争を永遠に終わりにすることさえ意味しうるのである。なぜなら、その〔延期された〕年月をもってすれば、このような戦争に対抗して重きをなすヨーロッパのプロレタリアートの力は上昇するからである〉。

以上が軍縮論争の第一幕。

レンシュは、論文「一つの即興詩」で反論を試みた。カウツキーは従来の考えを変え、主張しているのは「ひからびた抽象」でしかないこと、国家カルテルは産業カルテルと異なり審判者はいないし、イギリスの軍縮は帝国主義的手段であること、今や資本主義は自業自得（後述）に陥りたくないが故に生産力の浪費を必要としており、その意味で軍備増強は資本主義に不可欠となっていること。

カウツキーは、論文「即興の崩壊」で再批判する。

軍備増強は資本主義的生産様式に、〈経済関係に深く、自然必然的に根拠づけられている〉が、そ

れに反対の傾向をも必然的に生み出す。〈この二つの自然必然的傾向が資本主義から生ずるといふことは、資本主義的生産様式が続く限り、その闘争は終了しないといふこと以外の何物をも意味しない〉。

だから、〈資本主義的傾向が必然的であり、資本主義的生産様式の内部では克服しえないが故に、資本主義にその完全な止揚への志向を対置することを唯一の道とみなすこと、すなわち、改良でなく革命を、すべてかあるいは無か、を認めるならば、まったくの誤りである〉。

〈社会主義自身は、今日の社会での資本主義の自然必然的傾向に対する闘争によって初めて可能となる。この闘争においてのみ、プロレタリア的要素は強くなりうるのであるが故に、それは結局、資本主義的要素を克服することが可能なのだ〉。

従来の考えを変えたという非難には、次のように応えている。

〈変化したのは私の観点ではなく、歴史的状況であり、私に今や社会発展の他の側面をもっと強調するようにそそのかしているのである〉。

前に指摘したカウツキーの理論構造を、カウツキーは自覚していたのだ。

以上が軍縮論争の第二幕。

レーニンが『帝国主義論ノート』でメモをとった（レーニン全集39巻 P.350）、エクシュタイン（当時カウツキーが「中央派」に属していると認めた人物）とパンネクックの論争を紹介しておく。

エクシュタインは次のように主張した。

〈今日ではブルジョア民主主義は高度資本主義国において内的に不可能…なのである。というのは、ここでは、それはプロレタリアートの支配にのみ進みえ、それでもって資本主義的経済体制の否定に行くからである。我々のすべての民主主義的要求は、それゆえ資本主義の内部では貫徹されえない。…しかし、このことは、我々にとって、ブルジョア民主主義にとっても、我々の要求を放棄する理由ではなく、まさに反対に資本主義的範囲を破壊する我々の民主主義綱領の目的である〉（「現在の要求」）。

このような主張から、エクシュタインは軍縮要求を支持した。つまり彼は、軍縮を民主主義的＝政治的要求と見ていたのである。

これに対してパンネクックは、「経済的に不可能なこと」と「政治的にありえないこと」とを区別し、後者はプロレタリアートの闘争目標になるが、〈帝国主義政策のブルジョアジーに対してもつ力と内的必然性において、軍備の抑制は展望をもちえず、不可能である〉（「我々の現在の要求の本質」）と結論づけた。つまり、軍縮を「経済的に不可能な」要求と見たのである。

レンシュ「民兵と軍縮」によって軍縮論争第三幕が始まるのであるが、レンシュは同論文で自らの帝国主義認識を明らかにした。彼は、過剰資本の投下が〈資本主義的発展の流れのなかで地球のまだ資本に従属していない地域をひきよせる〉過程の極限として帝国主義を捉え、次のように述べている。

〈帝国主義は、社会主義へ必然的に通過する資本主義発展の最後の段階である〉。

〈一方で労働の生産性がますます増大し、他方で植民地自身が資本主義的地域となり、それが再び

海外資本にとっての投資可能性を追求するものであるが、ますますこの資本を増殖する可能性を尽くしてしまう。資本主義は自業自得になる〉。

この段階に到って、どの強国にとっても「生存問題」が生じ、「地球の独占化」がもたらされ、〈隠して帝国主義国家の傾向は、単に外国での資本を保護するだけでなく、外国の国家権力を、本国の国家権力に完全にあるいは可能な限り従属させるものである。…従って、地球の残余の細切れをめぐっての帝国主義強大国の闘争は強大国同士の闘争となる〉。

〈帝国主義は事実上の革命の時代を意味し、それは資本主義の最後の言葉である〉。

カウツキーは、論文「軍縮再論」において、レンシュを三たび批判した。その内容は、「超帝国主義論」に著しく接近したものであった。

〈イギリスとフランスの政府は、…軍備増強が資本主義の生存条件であるという意見はもっていない。かれらは反対に、軍縮において資本主義が一層前進すると考えている。そしてそれが完全に正しい。というのは、イギリスもフランスも、軍備の一層の増大が資本主義にはもはや不可能な点に急速に近づいているからである〉。

〈戦争か軍縮か、これが問題だ。…この問題ではドイツの態度が鍵をにぎるゆえに、SPDは指導的な役割を演じることになる〉。

〈帝国主義の精神は、産業の発展の必要性や、資本の拡大の必要から生じたものではなく、軍隊、官僚、高度金融がこの発展のなかでより強固になり、全社会生活を支配し、外政や内政において暴力的活動を求める精神を強め、産業資本家や小ブルジョアを一層従属させることから生じている〉。

〈帝国主義は、資本の拡大の自然必然的要求、資本の新たな市場と投資可能性の自然必然的要求と同義ではなくて、このような要求を実現するための特別な一方法、すなわちその暴力的方法にすぎない。その精神は、まったくのところ経済的発展から必然的に成長するが、暴力それ自体は、決して経済的進歩の必要条件を意味しない〉。

世界の分割は、中国の「門戸開放」をもって終了した。〈イギリスとドイツの対立の…すべての要素は今日ではもはや存在しない。帝国主義の精神と名前——閉鎖的な領域国家…という出発点は、数年来完全に背後に退き、実際には放棄されたとみられるべきである〉。⁸⁶

問題は、ロシアの帝国主義とそれを助長させているドイツの軍備増強にある。〈[SPDが] ドイツ、イギリス、フランスとの間での相互理解を、軍備の廃止にまで要求するならば、そしてロシアに対して、中国、ペルシア、トルコの統一の保護を要求するならば、経済的発展の利益と同様にプロレタリアートの国際的団結の利益になるであろう〉。

〈西欧列強の資本主義にとって、この種の協調を基礎とした軍縮は、その一層の拡大を断念するどころではない。…西欧で軍事負担が少なければ、それだけ中国やペルシャやトルコや南米などでの鉄道建設にゆだねられる手段は大きくなり、そしてこの建設は、ドレッドノートの建造よりも、産業の発展を要求する一層現実的な手段である〉。

まさに、〈万国の資本家よ、団結せよ！〉（1914年「帝国主義」）という主張ではないか。

⁸⁶ ちなみにレーニンは、指標の一つとしているように、世界分割の完了をもって帝国主義時代に入ったとみた。

カウツキーについては、「超帝国主義論」および、政治と経済を切り離し帝国主義を政策として捉えた点への批判は一般化しており、それらが軍縮論の理論的根拠となったことは間違いない。しかし、政治と経済を切り離したことについては、もう少し考察が必要だと思う。というのは、カウツキーのドイツ資本主義観=第2帝政観は、経済過程=成熟した資本主義と政治過程=プロイセン的ユンカー支配との「乖離」という認識を基礎としており、その展開としてカウツキーの帝国主義認識があると考えられるからである。それ故、その時々においてどちらを前面に出すかによって、ブレが生じた（ように見える）。『権力への道』で提示された二つの任務（民主化と反帝国主義）も、統一的なものではなく二元的なのである。第2帝政観については、相田慎一前掲書第5章を参照されたし。⁸⁷

また、カウツキーが軍縮論を唱えた理由について、スティーンソン前掲書は、〈論理的分析と道徳的信念の激突において、悲惨な戦争に対する人道主義的憎悪が勝利を収めた〉と説明している。確かに、カウツキーは帝国主義=「暴力的方法」と規定しているし、「文明国」同士の戦争は「野蛮への没落」であるとの認識が第2インターでは一般的であった。しかし、帝国主義=「暴力的方法」という規定は、産業資本主義=「平和的方法」という規定と対になって初めて意味をもつ。産業資本主義=民主主義、帝国主義=反動という図式も、批判的に捉え返さなければならない。

マックス・アドラー（1873～1937年、ヴィクトル・アドラーの息子）が後に面白いことを言っている。

〈ローザ・ルクセンブルクは党内はほんの少しの支持者を数えるだけであった。…ヒルファディングの『金融資本論』は党内で多くの喝采をあげた。なぜなら、なるほどそれはカルテル内での資本の自己組織化と、その国際的紛糾によって強力な政治的反抗に導いていたが、永遠の蓄積の原理的可能性を明らかにした〉（「外政問題に関するSPDの態度（1869—1914）」）。

カウツキーが軍縮を主張した理由は、もう一つあると思う。

〈軍拡を終わらせる力のないプロレタリアートにどうして戦争を阻止する試みが成功するのか〉（「軍縮再論」）。

カウツキーは、「戦争を阻止する試み」がSPDを崩壊の危険に導くと考えていたはずである。これこそ、軍縮を主張した最大の理由ではなからうか。つまり、軍縮は「消耗戦略」の一つなのであった。ベーベルも似たような考えをもっていた。

〈[ベーベルは] 1912年にさえ「現下の状態ではわが党には帝国議会で国外における災いを防止する力はない」と述べている…。プロイセン・ユンカーの支配を打破しない限り永続平和は期待できないと考える彼は、むしろイギリスが海上支配権を取り戻すことに期待をかける。イギリスが本気になってくれれば、ドイツは財政的に追いつけなくなるだろうから〉（西川正雄前掲書）。

いずれにせよカウツキーは、反帝国主義闘争を軍縮に矮小化した。社会主義を遠い先のこととして考え、議会至上主義をとるカウツキーにあっては、議会内での軍縮煽動せいっぱいであったし、また、帝国主義的諸現象の必然性を認めつつそれに反対するカウツキーにとって、帝国主義=政策論に

⁸⁷ 「共和制」を提示したにも関わらず、ローザに第2帝政を分析した著作はない（と思う）。彼女の運動論・戦術観からすれば、不要なのである。しかしながら、〈権力問題と取り組むのを首尾一貫して拒否したこと、また行動それ自身が解決するまでこれらの問題をひきのぼしたこと〉（ネトル前掲書）と無関係ではなからう。ローザが軍縮論争に関与しなかったのは、SDKPiLの分裂問題と『資本蓄積論』執筆のせいかな。

基づく軍縮は苦肉の策だったのかもしれない。

さらに、エルフルト綱領との整合性を考えれば、合理的＝「平和な」資本主義発展が望ましいのであり、帝国主義が非合理的な「方法」であることをブルジョアジーに知らしめ、帝国主義の推進主体たる「軍隊、官僚」＝ユンカーおよび「高度金融」に対するブルジョアジーとの統一戦線を期待したのが、軍縮論であった。ブルジョア民主主義への屈服に他ならない。⁸⁸

「帝国主義」は、ケムニッツ党大会（1912年9月15～21日）の議題となった（カウツキーとローザは欠席。カウツキーの欠席理由は不明だが、ローザは代議員資格をとれなかった）。報告者ハーゼはまず帝国主義を概観した後、軍備費負担の軽減は一握りの大資本家を除いた広汎な有産階級の望むところであることを力説した。続いて帝国主義と戦争の問題について、次のように述べている。

〈マルクス、エンゲルスは正当にも、宿命論的歴史観を信奉しないように繰り返し警告した。確かに我々は、帝国主義が暴力的な性格を持つことを見間違っってはならないが、侵略に飢えた国家を互いに戦争にかりたてる傾向は、別の傾向によって相殺されるのである〉。

「別の傾向」とは、「国際的な経済的依存関係」であり、「国際的に結合したプロレタリアートの連帯」であった。ハーゼは報告を、次のように結んでいる。

〈帝国主義は資本主義体制を最高段階まで推し進めた。資本主義は社会主義にとってかわられるまで成熟している。プロレタリアートはその遺産相続人としての使命を持っており、成熟し上昇しつつあるプロレタリアートの旗のもとに、すべての国民の平和、自由、独立および福祉が栄えるだろうという確信をもって、遺産を相続するであろう〉。

ハーゼが採択を要請した決議案の実践的要求は、国際協定による軍拡競争の停止と、自由貿易・保護関税制度除去であった（ハーゼ決議案は前掲『帝国主義研究Ⅱ』に引用されている）。また、次の一文がある。

〈このこと〔軍拡競争〕によって生じた破滅的な世界戦争の危険性は、資本貴族と、軍需物資の供給、官僚機構の増大、陸海軍における指導的地位の増大に特別関心をもっているユンカーとの、恥知らずな挑発によって激化する〉。

決議案に補足要求ないし批判を加えたのは、以下の面々であった。

レンシュ、パンネクックが軍縮協定要求に反対した。反対理由は既述した帝国主義認識にあったのであるが、レンシュは、軍拡競争が民兵制というSPDの要求の前提条件を生み出す、というようなことを主張している。

決議案を支持しつつ、補足要求したのが、ベルンシュタインとリープクネヒトであった。

ベルンシュタインは、〈今日、文化国家にとって平和以上に重大な死活の利益は存在しない〉の述べ、国際仲裁裁判所による紛争解決と軍縮とを要求した。

リープクネヒトは、パンネクック、レンシュは問題を最後まで考え抜かず、〈社会とその発展に関して機械的な把握に陥った〉と述べ、次のように主張している。

⁸⁸ 「高度金融 hohe Finanz」というカウツキーの概念は、初期にあつては宮廷との結びつきが強調され、その後微妙に変化したか、工業資本とは対立するものである。カウツキーは、全資本主義的な高利貸資本と資本主義的な銀行資本とを、明確には区別していない。

〈帝国主義に対抗する傾向のなかで最も重要なものは、プロレタリアートによって担われるすべての国民の団結、階級闘争のそれである〉。

そして、〈軍縮と民兵との間には原理的矛盾はない〉とし、〈平和を欲するならば、戦争を準備せよ〉と述べた。⁸⁹

決議案を右から批判したのが、『社会主義月報』の論客クエッセル（1872～1931年）であった。クエッセル（クヴェッセルとも）は、イエナ党大会（1911年）でのベーベル報告を抛り所としながら、ドイツ工業のために世界市場における平等を要求すべきことを主張した。そして言う。

〈ドイツ政府がわが工業の他国との同等の権利の効果的実現に賛成するところではどこでも、我々は工業をバック・アップしなければならない。それはプロレタリアートの関心である〉。〈我々は文明的な植民地政策を必要とする立場に立っている〉。

明確な社会帝国主義に他ならない。強硬な社会帝国主義者ヒルデブラント（1878～？）は除名されているが、詳細不明。

ところで、軍縮論争と並行して、パンネクックはカウツキーに対して、全面的な論争を挑んでいる。この論争はもっと重視されてしかるべきであるが、いかんせん邦訳テキストがない。以下は、主に山本秀行前掲論文に基づく。

発端は、1911年秋にカウツキーが「大衆の行動」と題する論文を発表したことであった。「大衆行動主義者」の批判を意図したものである。内容は以下のようなものであった。

〈ドイツで大衆行動に参加しうる者のうちわずか10分の1が組織されているにすぎない。その他の未組織大衆は依然農民やプチブルの影響下にあるカルンペンプロレタリアートであって、そこには「統一的な階級性格」を認めることはできない。彼らの行動は予測不可能であり、反動的にも進歩的にもなりうる。したがって社会民主党は、このような大衆の街頭行動を戦術に組み込むことはできないとして、従来の方の戦術を変更する必要性を認めず、「組織の建設・戦略拠点の確保・国家と社会についての研究と大衆の啓蒙」こそが党の戦術であると宣言した〉（山本秀行前掲論文）。

この論文を読んだパンネクックは、カウツキーに対し、『ノイエ・ツァイト』誌上での論戦を申し込む。大衆行動をどう把握するかが、第一の論争点である。

先に見たように、『労働運動における戦術上の相違』においてパンネクックは、労働運動の発展に段階区分を設けていた。そこでは述べなかったが、1848～71年までを第1期、1871年～世紀の変わり目を第2期（議会主義の時代）、以降が第3期である。パンネクックは1912年以後、第3期を「帝国主義」の概念で明示的に把握した。パンネクックは、この第3期を前提とした大衆行動を論じたのである。

帝国主義の諸現象は労働者を圧迫し、労働組合運動は困難となる。また、軍部や官僚が政治決定の中枢を握ることによって、議会の効力を減少させる。その結果、「大衆自身」による議会や組合の枠を超えた自発的政治行動が生じるというのである。

⁸⁹ 第2インターで〈戦争に対する戦争を〉というスローガンが掲げられたのは、ブリュッセル大会（1914年）であった。〈二人のL [ルクセンブルクとリープクネヒト] の協力が、もともととか、[1891年] 8月4日にすぐに始まったとかいうのは、二人が1919年に共に虐殺されてからの神話である〉（西川正雄前掲書）。

他方、第2期を経ることによって組織労働者は必要な規律と政治的社会的意識を獲得しており、組織労働者の大衆行動は見組織労働者を巻き込み、第3期を主導する要素となる。

上記の主張から、パンネクックは組織・党の概念の再検討へと進む。これが第二の論争点であった。

カウツキーが大衆行動に器具をもつのは組織を機械的に捉えているからである。カウツキーにとって組織は規約によって結ばれた外的形態でしかない、とパンネクックは批判する。〈彼 [パンネクック] によれば、組織の本質は組織精神とも云うべき構成員の自発的な規律と連帯感である。それは同一の工場で同一の搾取を受けることで、同一の行動をとるような教育された結果であるとともに、彼らの階級闘争の結果でもある。…カウツキーはこれに対して、…彼 [パンネクック] の組織論を「社会錬金術の傑作」と呼び、「何ら労働組合に影響力を及ぼせない」がゆえに「全く無害なもの」として問題にしなかった〉（同前）。

〈パンネクックによれば、組織された大衆は党の規律にみずから服することで、彼らの革命的意志の一部を党に移行する。いわば党と大衆のエネルギー交換論から彼は、党が率先して大衆行動に表現を与え、これを革命に向けて組織すべきであると論じた〉（同）。この主張が、SPD内の官僚主義への批判を土台にしていることは明らかであろう。

第三の論争点は、社会革命の問題である。パンネクックは、1910年のマッセスト論を発展させた革命論を展開した。国家機構の破壊をめぐる論争については、レーニン『国家と革命』第6章及び『国家論ノート』を参照されたし。

〈彼 [パンネクック] は革命過程を、プロレタリアートの権力の下からの形成と大衆諸個人の変化の進展に応じてブルジョア国家が掘り崩されていく過程と考え、したがって、その過程の終局において、「自己の運命を明確な意識をもって規定する、統治能力を有する、高度に組織された大衆」が生産組織を掌握するに至るといふ。彼のこのような革命構想の中では、プロレタリアートの意識の変革、階級の意識化は、社会革命の単なる必要条件の一つとしてではなく、むしろこの革命過程そのものとして把握されたのである〉（針谷寛「アントン・パンネクックとディーツゲン哲学」、『一橋論叢』第91巻第5号）。

第四の論争点は、カウツキーの生命線ともいふべき「史的唯物論」であった（カウツキーは「唯物史観」と呼んではず）。パンネクックは次のように言う。

〈人間は、その行動を完全に経済的諸関係によって規定されている。しかし人間はみずからの行動によって歴史を創らねばならない。この二つの文章を統一的に理解してこそ、はじめてマルクス主義となるのである〉。

パンネクックによれば、この両契機は〈発展過程の中で異なる強調を受け取る〉。議会主義の時代（第2期）には、前者が強調された。カウツキーの「史的唯物論」はそれである。

〈カウツキーの理論は、「大規模な大衆行動が、自然法則のようにやってくるのをただ待つだけ」の「受身の急進主義」であり、それは「カタストロフ理論」以外の何ものでもない〉（山本秀行前掲論文）。

しかしながら、「支配を争う闘争」の時期（第3期）には後者が、すなわち「マルクス主義の能動

的側面」が強調されなければならない。こうして、マルクス主義は「プロレタリアートの行動の理論」となる。パンネクックは、階級の意識化の問題を伝統（イデオロギー）の克服の問題そのものとして把握した。ここで伝統とは、前近代的意識のみならずブルジョア・イデオロギー、さらには第2期に形成された戦術（観）、党組織観までも含む。

カウツキーはSPDの歴史を振り返り、次のように述べた。

〈くずれつつある鎮圧法をめぐる興奮は、1889年から1893年まで急進的俗流マルクス主義を生み出した。1895年以来の繁栄の時期は俗流マルクス主義の修正のための道をつくり出し、1907年以降の階級闘争の激化は、マルクス主義を、厳格化そして絶対化・単純化した方法で語る大衆本能を再びよびおこした〉。

そして、パンネクックを「未熟なラジカリスト」と呼んだのであった。

パンネクックは最後に、カウツキーの護教的立場を批判している。

〈マルクスとエンゲルスの教義を完全に自分のものにした者にとっては、いつもいつもかれらの著作を引用することで、かれらの足跡をたどっていることを証明する必要はない〉。〈このようにマルクスを引用することは、マルクス主義的に考えることとは、まったく別物である〉。

以上、あえてコメントはつけない。

1912年10月、第1次バルカン戦争勃発。11月、バーゼルで第2インター臨時大会（バーゼル宣言）。

帝国議会選挙での勝利の興奮がさめるとともに、「イニシアティブの欠如」という指導部批判がおこった。これにカウツキーは、次のように応えている。

〈我々は日々に自らを強めているプロセスを自己のイニシアティブで打ちこわすどんな理由もない。我々は現在の条件下で、我々の敵よりも速く進んでいるゆえに、我々はイニシアティブをとり、敵に決定的な闘争を求めるべきではない〉。

しかし、1912年末から、SPDは停滞現象に陥る。SPD党员・労働組合員の増加は伸び悩み、SPD機関紙誌は減少さえした。ケルンの党指導者メーアフェルト（詳細不明）が『ノイエ・ツァイト』に寄稿した論文「思索的諸観察」は、〈激しい議論をひき起こしたが、その議論は、メーアフェルトによって挑発的な形で表明された不快感が党の広範囲に渡る人々の心をとらえていた、ということをも明らかにしている〉（シュタインベルク前掲書）。その論文は、こう述べていた。

〈我々の運動は、すでにあまりにも細分化したというだけでなく、ブルジョア的な生存諸条件にあまりにも強く結びすぎたために、今日ではもはやゼネストの形態でブルジョア社会に宣戦を布告するわけにはいかないであろう。まず第一に、今日ではすでに労働者層のかなりの部分は、自分たちの鎖よりももっと多くのものを失わなければならない、というのが事実である——そして、その事実こそプロレタリアの階級闘争に負っているものなのである——〉。

1913年5月、SPDはプロイセン下院選挙で惨敗を喫する（3級選挙制で勝てるはずはないのだが、期待が広がっていた）。おりしも4月、隣国ベルギーでは普通選挙を要求する示威的ゼネストが行われた。バーデンの指導者フランク（1874～1914年）は、マッセンストを訴え始める。バーデンでの

「ブロック政策」をプロイセンにも拡張せんとするものであった。ローザはこの構想を、〈大ブロック政策と結びつけられたマッセストは敗北しかもたらさない〉（7月22日、ベルリン大4選挙区の党員大会での演説）と批判している。

しかしフランクは、とにもかくにも、プロレタリアートが権力の座に到達するような現実的政策を追求した。南ドイツのいわゆる右派は、〈権力への関係においては、実際にはもはや社会主義となんのかかわりも内緒原則の防衛にびくびくしながら気を使っている党中央よりも現実的だったのである〉（シュタインベルク前掲書）。⁹⁰

1913年6月、SPD帝国議会議員団が国防法案に賛成投票。軍事費調達方式が従来と異なり、エルフルト綱領に明記してある直接税である、というのがその理由であった（議員団内の票決は資料によって異なる）。これはローザが批判したように、〈この体制に1兵も1グロスも与えるな〉というSPDの原則との訣別に他ならない。一説によれば、この時、ベートマンはSPDをだき込めると思ったという。

ローザはカウツキーとの論争を繰り返していた。ローザは、先述したベルギーのゼネストについて何度か論評したようである。論争の総括とおぼしきローザの論文「理論の御用化」（9月5日）によれば、カウツキーの主張はおおよそ以下のようなものであった。

第一に、マッセストを「ロシア型」「オーストリア型」「ベルギー型」に分類し、これに対して「ドイツ型」を対置している。カウツキーが描く「ドイツ型」の特徴は、未組織大衆を決定的因子と認めることの排斥であった（先に見た未組織大衆観を想起されたし）。他方、カウツキーは次のように言う。

〈一般にマッセストの成功の前提は…もっとも先鋭な行動手段を労働者階級のすべての層が——党員層のみならず自由労働組合も、それどころか敵側に組織されている大衆や未組織の大衆さえも——一致して要求せずにはいられなくなるほどの激動期の情勢である〉。

しかも、〈現在の緊張した状況下にあっては、もっとも先鋭な武器をとることを我々に強いるような情勢が一夜にして到来しないとも限らない〉とも言うのだ。

だとするならば、未組織労働者への影響力を強め、大規模な大衆行動に備えるために党の組織構造を改善すべきではないのか。しかしカウツキーは、そのような主張者を、「ロシア人」「一揆主義者」とののしるだけであった。

第二に、「ドイツ型マッセスト」に到達するためには、議会主義に徹するしかない。カウツキーの論理は次のようなものである。まず、プロイセン選挙法問題でマッセストが可能となるためには、プロイセン大衆が普通選挙権の利益を理解するための実地教育が必要であり、その実地教育は、普通平等選挙法によって選出された帝国議会が「ポジティブな仕事」をはたすことによってのみ、ほどこしうる。だから、もっと多くのSPD党員を議会に送り込み、〈議会をして社会改良に踏み切らせる〉ことができれば、プロイセン大衆も普通選挙権の意義に覚醒するであろう。

しかも、「ポジティブな成果」は政府をして帝国議会選挙法の廃止に向かわせるであろうから、一

⁹⁰ フランクは、ブルジョア政党とも協力して反戦運動を進めようとする平和主義者で、独仏両国の議員が集まった協調会議（1913年5月）のためにイニシアティブをとっている。1914年8月5日に兵役に志願し、1カ月後にロートリンゲン（ロレーヌ）で戦死。

拳に二つの「ドイツ型マッセスト」（帝国議会選挙権防衛とプロイセン選挙権獲得）のチャンスをつかむことになる。

このカウツキーの主張を、ローザは、〈議会主義プラスゼロ〉と切って捨てた。

第三に、党活動の停滞を合理化している。カウツキーはこう述べた。

〈右翼と左翼という古い区別によってはもはや片がつかない新たな問題が起きてきた。それは、混乱したような外見を生み出しているが、それは理論的リーダーの間であって、大衆は少ししか動揺させられていない。大きな歴史的事件が起きない限り、大衆は今までのやり方で、今までの道をゆくだろう。新聞の社説は大衆行動を生み出すことはできない。意見の次元の混乱状態は決して実践上の混乱ではない。逆に、実践においては近年わが党は以前よりまとまっている。重要問題での北と南、党と労組の間の統一は、帝国議会議員団でのそれと同様、今日ほかに強まっている〉。

また、次のように言う、〈党活動には目下ある種の停滞が認められる。…しかしこれを憂うべき現象だというのは全々あたらない〉。なぜなら、〈[人々は]組織の中にいないを問わず、我々の運動目標に対して同じ関心をいただくことができる〉から。未組織大衆の意義を認めないカウツキーが、こう主張するのだ。

ローザはこれを「御用理論」と断じ、カウツキーを批判した。

〈かれの理論が、党内のある小心翼翼さを糊塗し、現状について手前ミソを並べるのを助ける御用理論となりおえていると同様に、かれの戦術も、すでに行きづまった古くさい議会主義一本槍の路線を動くばかりで、運動にブレーキをかける役割を演じている〉。⁹¹

イエナでの三度目の党大会（1913年9月14～20日）では、マッセスト問題と軍拡のための増税案への評価が論争点となった。執行部報告を行ったシャイデマンは、次のように述べた。

〈ベルギー及びスウェーデンの同志はマッセストを行うにあたって「国境の彼方にはもっと大きな兄弟が住んでいて、いざとなれば助けに来てくれるだろう」と考えて安心できるが、我々は国境の彼方にもっと大きな兄弟をもっていない〉。〈わが党の誇りは組織である〉、それがブレーキになるかのごとく言うとは何事か。〈我々は万一の際にはマッセストを行うつもりであるが、しかしこの際ベーベルの言葉「マッセストは最後の手段である」を銘記したいと思う〉。

あらかじめ労働組合指導部の諒承をえ、9月4日の党協議会で採択されていた幹部会決議案の、マッセストに関する部分は以下のようなものであった。

〈党大会はマッセストを、アナーキズム的見解の意味での、社会の害悪を除去するための決定的で常に使用しうる手段としては否認するとともに、労働者階級は政治的平等権を獲得するためにその全力をつくさなければならぬという確信を表明する。政治的マッセストは、労働運動の全組織の完全な合意がある場合にのみ、階級意識をもち、社会主義という究極目標のために鼓舞され、犠牲を恐れぬ大衆によって遂行される。党大会はそれ故、政治的組織と労働組合組織の構築のためにたえ

⁹¹ レーニン、シャリプニコフへの手紙（1914年10月27日付）に次のように書いている。〈カウツキーには「理論家の忠勤ぶり[プリスルーヴニチェストヴォ・テオレーチカ]」——…党の大多数、日和見主義に対する下僕勤めがあると、ずっと前にR・ルクセンブルクが言ったのは正しかった〉。

ず働くことを党同志の義務とみなす)。⁹²

ローザの修正案は次の通り。

〈政治的マッセストを有効に遂行するための前提条件は、政治的、経済的関連の中でプロレタリアートを可能なかぎり完全に組織化することであり、こうした組織を犠牲を恐れぬ革命的意思で満たすことである。党大会はそれゆえ、政治的組織と労働組合組織の構築および党新聞と労働組合新聞の拡張のためにたえず働くことを党同志の義務とみなす。しかしながら、マッセストは党および労働組合の幹部の指令によって人工的に作りだされるわけではない。それはただ、すでに流動している大衆行動の上昇として経済的、政治的状況の先鋭化から生じる〉。

また、「党の攻勢的で断固たる首尾一貫した戦術」、「闘争の重点を大衆行動に移す…戦術」を強調していた。ニーダーバルニム地区（ベルリン第4選挙区に属する）も、ほぼ同様の決議案を提出している。

ローザ案は142対333で否決、幹部会案が反対2票で可決された。

軍拡のための増税案について報告したヴルムは、以下のように述べた。

〈帝国の財政の10分の9は軍事目的であり、使用目的は我々が変えることのできない固定した事実であり、我々としてやれることは、このコストを誰がいかなる方法で支払うかということを変えることだけである〉。〈コストを所有階級に負わせようと努力することは〉「より小さい悪の選択」であって、原則拒否の立場は〈結果として体制内改良の意義を否定してしまっている〉。

これに対してローザら81名は対案を提出し、軍国主義との闘争において「使用目的」と「負担者」の問題は切り離しえないと主張した。〈我々が議団多数派決議に乗った場合、もし戦争が起こり、しかもその事態を変ええず、そして間接税あるいは直接税によって戦費がみたされるという問題が起きた時、我々は一貫して、戦費支持の側に立つという結果に陥るだろう〉（ローザ）。

336対140でヴルム案が採択。

8月に死去したベーベルの後任には、圧倒的支持でエーベルトが選ばれた。

党大会を評してカウツキーは、〈[マッセストについてのローザ]決議案がかなり著名な同志の支持を見出したのには驚く〉と述べた。また、軍事目的のために増税一切拒否の立場を批判している。第一に、議会での改良闘争の意義を過小評価していること。第二に、租税は「国家の支配手段の維持のための手段」という性格と「この手段を支配階級は出来るだけ被支配者から調達しようとする」性格とをもちているが、後者の性格を無視していること。

ローザは論文「イエナでの党大会を終えて」で、幹部会決議が「労働組合幹部の保守的抵抗に対する譲歩」であり、ヴルム決議が「議会主義的日和見主義」への譲歩であることを指摘した。そして、「中央派」を「泥沼派」と呼んでいる。⁹³

「泥沼派」はかつては、「昔からの定評ある戦術」を守るため、ジンガー、W・リープクネヒト、ベーベルの側に立って修正主義者と闘った。今大会では情勢が変わったとして、ローザは次のように言う。

⁹² 党協議会は前年に設置された地区・邦の代表からなる機関。幹部会は執行部のうち統制委員会を除く議長・書記・会計からなる。

⁹³ 「泥沼派」とは、フランス革命の際の国民議会における中間派（「平原派」）への批判的呼称。

〈党幹部会と議員団多数派は、イエナ党大会では泥沼派に支えられ、右派と提携して決定的な諸問題で勝利を取めた。カウツキーは、「昔からの定評ある戦術」が勝利を取めたと凱歌をあげているが、今度は、ジューデクム（1871～1944年）、ダーフィット、ノスケ、リヒャルト・フィッシャー〔1855～1926年〕といったチャンピオンが彼の側に登場したという奇妙な状態について、よく考えてみることを忘れていてのではないか。カウツキーは、この連中を向こうにまわして、10年間も党の戦術を擁護しなければならなかったはずだか〉。

イエナ党大会は、「中央派」が改良主義者・修正主義者に融合・溶解したことを示している。メダルの両面である労働組合主義と議会主義が党内の覇権を握り、カウツキーの平和革命路線（「カストロフィ」論）は解体した。隠してSPDは、「安定的秩序」を求め、その土台の上での単なる圧力団体となったのであり、体制政党と化したのであった（対内的にも対外的にも平和主義）。

1913年には、ローザ『資本蓄積論』と『マルクス・エンゲルス書簡集』が出版された。同12月に、ローザ、メーリングらが『ゾツィアルデモクラティッシェ・コレスポンテンツ（社会民主主義通信）』を創刊（150部ぐらいだという）。

体制政党と化したSPDにおいて、マルクス主義の普及を考察することは無意味であろう。それでも帝国政府は、SPDの動向を注視していた。サラエヴォ事件（1914年6月28日）の翌日にSPD幹部会は会議を開き、同年8月に開催が予定されていた第2インター・ウィーン大会をどうするか討議している。とりあえずBSIを招集することが決まった。⁹⁴

フランス代表がゼネストを提案しないようにハーゼが頼むなどして、BSIが開かれたのは、オーストリアがセルビアに宣戦布告した翌日（7月29日）からである。アドラーはオーストリアの状況が悲観的であることを述べた。ハーゼは、ベルリンで反戦集会が始まったとの電報を読み上げ、〈支配階級と大工業は戦争に反対であり、軍も〈戦争に対してどんな興味も持たないと言明している〉と述べる。しかし、ロシアが介入すればドイツも介入するだろう、SPDはこれを防ぐ力はない、と付け加えた。ジョレスは、ドイツ政府への不信を示しつつ、〈フランス政府は平和を望んでいる〉と語り、ドイツの反戦行動に感謝している。

BSIは、パリで大会を開くことを決定し、次のような決議を採択した。〈オーストリア・セルビア紛争の調停による解決を求めて、示威運動を…強化すること〉、独仏プロレタリアートは、自国政府に対し、〈ドイツがオーストリアに適切な行動をとり、フランスがロシアから紛争に介入しないという言質をとることを求めて…圧力をかけなければならない〉、等。

しかしこの時、SPD幹部はすでに帝国政府との折衝を始めていた（キーパーソンはジューデクム）。結局、SPD・労働組合指導部は「城内平和」を制約するに至る。それを公然化したのが、8月4日の戦時公債支持であった。⁹⁵

⁹⁴ この会議の内容はベルリン警視庁の記録によるという。〈こうした会議にまで警察官が臨席し記録を取っていた〉（西川正雄前掲書）。二重にビックリ！

⁹⁵ 8月3日の議員団総会で、「支持」派は78名、「反対」派は14名。議員ではなく理論家として出席していたカウツキー（表決権なし）は、〈政府に征服は行わないという確約を求め、容れられたら公債賛成、さもなければ反対、ではどうかと述べたが支持者は殆ど無〉（西川正雄前掲書）だった。

帝国政府は、戒厳令（＝SPD幹部の逮捕）の準備を停止し、社会改良を約束する「ノイオリエンティールング（新措置）」をもってSPDを遇する。政府は、それを通して労働者を包摂する支配政党の一つとしてSPDを認知したのであった。SPDは、文字通り、第2帝政の社会的支柱と化したのである。SPD幹部は、自らの地位の保全とひきかえに、労働者を、従順な賃金奴隷あるいは侵略のための兵士として売り渡したということに他ならない。

大戦中のカウツキーは、いわゆる帝国主義必然論争もあったが、SPDの分裂回避にもっぱらエネルギーを注いでいる。大戦後の情勢に備えるためであった。実際にドイツ革命は起こったが、後にカウツキーは、〈私は革命を違ったふうと考えてきました〉（1920年3月7日付、フォルマル宛の手紙）と述懐している。そしてカウツキーは、ボリシェヴィキ革命批判に没頭していく。

革命に際して政権を掌握したSPDは、カウツキーの主張通り、国家機構を破壊せず軍部と官僚を温存した。そして、軍部と結託して、「秩序維持」を口実に革命派を圧殺したのである。先頭に立ったのは、エーベルト、シャイデマン、ノスケらであった。⁹⁶

13) SPDはいかなる意味でマルクス主義政党だったのか

i) マルクス主義の受容

〈「マルクス主義」自体が1890年代の産物であった…。このことばが、とにかく雑誌論文の表題のなかに出現するのは、ようやくその10年間のなかばごろである。…「マルクス主義」という用語が流通するようになるのは、その正確な本質が、マルクス主義者のさまざまな傾向と学派の間で、論争されるようになったときからでしかない〉（ホブズボーム「マルクス主義の普及」、『思想』611号）。

〈階級的にいえば、マルクス主義の普及は、社会主義がもっとも支持をえそうな二つの社会集団、すなわちプロレタリアート（肉体労働者）と知識人たちのなかで、それがどれだけアピールするかに依存する。政治的にいえば、マルクス主義の普及は、左翼への潜在的な支持者たちにアピールしそうな、他のイデオロギー、たとえば、マルクス主義と両立しえないと信じられたかぎりでの無政府主義や民族主義の、つよさに依存する。数的にいえば、それはかなりの程度、ブルジョア民主主義の諸制度の利用可能性（そのみが社会主義文献の自由な配布を許容した）、労働諸団体の活動、そして何よりも、労働階級の選挙権をみとめる諸選挙に依存する。たしかに、社会主義者と無政府主義者との実際的な境界線は、かれらがそれぞれ「国家」にたいしてどういう態度をとるかによってよりも、選挙による政治にどういう態度をとるか応じて、引かれるようになったので、マルクス主義の普及は、ある程度、選挙改革のための闘争の成功に依存するようになった。…選挙についての諸活動とマルクス主義の影響とのあいだに、そのようなつながりがあったとはいえ、逆に、労働運動の非選挙的な諸活動（すなわち、主として労働組合とその闘争）とマルクス主義の影響とのあいだには、つよいつながりが無いのがふつうである〉（同）

⁹⁶ レヴォルツィオネーレ・オプロイテを、村瀬興雄『ドイツ現代史』は「革命の頭目連中」と訳している。カウツキーの著作が戦前にはかなり邦訳されている。カウツキーの大著『唯物史観』の邦訳（全6巻）には、どんな需要があったのだろうか。

〈資本主義が安定しているか、拡張にあきらかに成功している国ぐにでは、社会民主主義は、公然とマルクス主義的であるかどうかにかわりなく、革命的ではなかった。しかし…、これらの国においてさえ、それは、つぎのばあいにも、つよくマルクス主義的であった。すなわち、過去において自由主義ブルジョアジーの諸部分が、反貴族闘争共同戦線のなかに政治的に自覚した労働者の重要な部分をひきいれて後楯とした、小ブルジョアジーの急進民主主義運動の、頂点にたつことに成功しなかったばあいである〉（同）。ドイツでは、自由主義ブルジョアジーは〈ブルジョア革命のための一貫した闘争から、撤退した〉（同）。

このような事情により、ドイツにおいては「社会民主主義」という呼称が、急進的・革命的意味を持ったのである。「講談社会主義」「国家社会主義」はもとより、社会主義全般において民主主義的意義を強調していたのは、マルクス主義以外になかった（『共産党宣言』）。なかでもアイゼナッハ派は、政治的民主主義の実現をどの政党よりも強く主張した。このことは、アイゼナッハ派が最も反プロイセン的・反帝制的であったということでもある。⁹⁷

このようなドイツ社会民主主義にあっては、ブルジョア自由主義的要素の混入・残存は避けられなかったし、また、帝国議会に関する領域だけに政治闘争が制限されたことが、基本路線形成を規定したことについては既に述べた。

ドイツにおけるマルクス主義普及にとって一つの節目となったのが、普仏戦争の勝利＝ドイツ統一である。第一に、ドイツ統一の方法をめぐるラサール派とアイゼナッハ派との対立の根拠が喪失し、両派統合の条件が生まれた。第二に、パリ・コミューンを支持したW・リープクネヒト、ベーベルらを、ビスマルクが反逆罪をもって弾圧したことである。ビスマルクは、パリ・コミューンにドイツ労働運動の未来像を見た。また、『フランスにおける内乱』を発表したマルクスは、パリ・コミューンの“頭目”とみられていた。検察が起訴状に『共産党宣言』を引用したため、社会民主主義者は、裁判記録の一部として、『共産党宣言』を合法的に大量出版するチャンスを得たのであった。

SPD（前身を含む）内へのマルクス主義の浸透を考える際には、次のことが前提的に確認されねばならない。〈第3インターナショナル…の大衆政党は、党員のすべてに対してマルクス主義の理論を理解すること、少なくともいくらかの知識を示すことを求めた〉（ホブズボーム『いかに世界を変革するか』）が、第2インターの大衆政党はそうではなかった、ということである。SPDにおいては、〈本を書くことに関心がない有能な政治的指導者たちと、カール・カウツキーのように「理論家」として名をなし尊敬されていたが、実際の政策決定者としてはそうでなかった人々〉（同）とが並存していた。

当時、マルクス、エンゲルスの著作の多くは、公刊されていない。エンゲルスが、自らの新しい序文を付してマルクスの著作を復刊していたが、広く読まれたとはいえないであろう。こうした事情により、マルクス主義を体系的に習得するためには、解説書に頼るしかなかった。その代表的な例が、

⁹⁷ ドイツの支配層にとって民主主義が“脅威”であったわけだが、日本でも似たような状況があった。1901年、日本で社会民主党が結成と同時に禁止されたが、その禁止理由は、社会主義的要求（土地と資本の公有化、富の公平な分配）ではなく、民主主義的要求（軍備縮小、選挙権の平等化、貴族院の廃止）だったという。

エンゲルスの『空想より科学へ』であり、カウツキー『マルクスの経済学説』である。⁹⁸

事情を変えたのは、SPDによるエルフルト綱領の採択であった（1891年）。その理論的部分は、作成した側においても受け取る側においても『資本論』第1巻の結論を要約したものと理解されていた。SPDはマルクス主義政党とみなされることになる。

〈『エルフルト綱領』が12万部発行されたのに対して、『[共産党]宣言』は1895年から1905年までの11年間に1万6000部にも達しなかった〉（同）。

カウツキー、シェーンランク共著の『社会民主党の諸原則と諸要求——エルフルト綱領解説』が増刷を重ね、学習会のテキストとして用いられ、カウツキー『エルフルト綱領（解説）』も版を重ねている。つまり、エルフルト綱領の理解が、マルクス主義習得の柱となった。また、エルフルト綱領=SPDは、他国のマルクス主義政党のモデルとなる。

SPDは、労働者の利益を代表する唯一の政党であった。従って、労働者がSPDの基盤であったことは、ある意味当然である。この労働者党員がマルクス主義をどのように受容したか、——これは、SPDの性格を知る上で重要なテーマであるが、さほど資料があるわけではない。

普通取り上げられるのは、読書傾向である。「社会科学」の分野では、ベーベル『女性と社会主義』（『婦人論』）がダントツの人気であった（出版部数も146刷を数える）。しかしこの著作は、女性論や社会主義論としてではなく、来るべき未来国家論として受け取られたのである。

〈未来国家に関するベーベルのロマンは、「ブルジョア経済に対するマルクスの辛辣な批判が可能としたよりも大きな社会主義にたいする確信を、民衆のあいだに生みだし…」〉（シュタインベルク前掲書）た。

〈マルクス主義的な社会主義理論からは、ただ、ある種の印象的な公式だけが、あるいは擬似マルクス主義的な終末論的な期待だけが、受容されたにすぎなかった。…社会主義的な大衆の観念のなかでは、社会民主党は、文化と文明との進歩の担い手であったが、他方、教会、貴族および大半のブルジョア層といった伝統的な諸勢力は、進歩に敵対するものと考えられていた〉（同）。

SPDに対する労働者の期待という意味では、SPDが社会的勢力でもあったことを忘れるわけにはいかない。すなわちSPDは、多様な文化・スポーツのクラブから「労働者飲み屋」まで組織していたのであり、いわば一種の「国家内国家」「社会内社会」を形成していた。それらは、文化の大衆化・平準化を促進し、「対抗文化」としての要素を含んではいたが、結局は支配的価値観・文化に適合していく傾向を強めていく。

SPDを支えた労働者の中心は、工場労働者ではなく職人労働者であったといわれる。この問題にカウツキー『エルフルト綱領解説』がどう対処したかについて、相田慎一前掲書は以下のように述べている。

⁹⁸ 〈マルクスを、現代の学問的専門化に従い細分してはならないことは十分に分かったとしても、かれの思考の統合性を把握することにはまだ困難が残る。それは、ひとつにはその体系的で明確な説明を試みるさいに、その異なる諸側面を同時的なものより継起的なものとして論ずることになりがちであり、またひとつには科学的研究と検証の課題はある段階ではそうせざるをえないためである。これがひとつの理由となって、明快な説明を目的としているエンゲルスの著作のあるものは、マルクスの濃密な思考をいくぶん過度に単純化し希釈しているという印象を与えることがある〉（ホブズボーム前掲書）。参考まで。

まずカウツキーは、「手工業職人」を、〈親方の家族の一員であり、またいつかは親方になれる見込みもあった〉（第2章の「1.プロレタリアと手工業職人」）というように、「古典的形態」だけに狭く規定した。つまり、「通い職人」や「親方になる見込みのない職人」は、〈「将来の工場労働者」たる「近代プロレタリア」として理解されることになる〉。それを解説しているのが第5章の「5.賃金プロレタリアートの上昇」であって、相田は次のようにまとめている。

〈近代的大工業の機械制度の普及→「労働条件の平等化」＝労働の単純化と不熟練化→手工業職人の徒弟修業や職人遍歴などの職業教育の無意味化→「手工業職人が固くもった職業障壁」の破壊とその「職業身分意識」の稀薄化→「手工業職人」の「プロレタリア意識」の獲得→「手工業職人」の「将来の工場労働者」としての意識（「本来のプロレタリア」である「工場労働者」との「連帯意識」）→「手工業職人」の「本来のプロレタリア」への「合流」という論理〉。

なるほど。〈「近代的大工業の平等化作用」への絶対的信頼に基づいた、職人労働者の自然成長論といえよう。相田は、職人労働者がマルクス主義を受容した理由についての「仮説」も提出している（割愛）。次がその結論である。

〈第2帝制期のSPDを構成した手工業的性格の強い「職人労働者」は、ドイツ資本主義の急速な発展とともに生じたドラスティックな「手工業の構造変化」に直面し、その職種の型に応じて異なった対応策を必要としたけれども、SPDに結集した「職人労働者」のいずれの型の場合にも、「古いギルド組織を復活させる」…方向にではなく、SPDとマルクス主義思想を媒介にして自らを「近代化」に順応させる方向にその活路を求めていた〉（前掲書）。

また相田は、SPDのマルクス主義受容に関して次のように主張している。

〈第2帝制期のSPDがマルクス主義を必要としたのは、「社会主義のイデオロギー」として以上に、そこに孕まれた「集権化のイデオロギー」の側面としてであった〉（同）。

どういうことか？ 相田は、第2帝制期のSPD内には、次のような派閥諸潮流が存在していたという。①ローザ、パルヴスなどの「オスト・ロイテ」、②カウツキーに代表される狭義のドイツ・マルクス主義派（「マルクス主義中央派」）、③ベルンシュタインに代表される「修正主義」派ないし「非マルクス主義的知識人グループ」などの少数のインテリゲンチヤのイデオロギー的諸集団、④アウアーに代表される党中央＝ベルリン派の右派（「実践主義」派）、⑤ベーベルに代表される党中央＝ベルリン派の左派（「形式的急進主義」派）、⑥レギーンに代表される自由労働組合総務委員会派（「組合主義的改良主義」派）、⑦フォルマールに代表される南ドイツ派（「民主主義的改良主義」派）、⑧シェーンランクらのドイツ・マルクス主義内の「民主的ドイツ」派。⁹⁹

〈こうした多種多様な派閥諸潮流がSPDの内部に「共存」することができたのは…、「社会主義革命」についての立場の点では対立する態度を取りながらも、当面するドイツ変革の課題については「反プロイセン（反ユンカー）＝民主化」の立場とそのための「労働者と市民層の提携」戦術を取る点で基本的に一致していた〉（同）からであった（この説明は一面的だと思う）。

上記の派閥諸潮流の対立は二重であって、第一は、「民主化」を「目的」と見るか「手段」と見る

⁹⁹ 第2帝制期のSPD内に、以上の派閥諸潮流が一貫して固定的に存在していたとするのは無理であろう。概して相田の説明は図式的である。

かの対立である(③④⑥⑦vs.①②⑤⑧)。これは、「イデオロギー的党内対立を形成した。第二は、「民主化」の道筋論をめぐる対立、すなわち「小ドイツ主義的集権主義と大ドイツ主義的分権主義」の対立である(①②④⑤⑥vs.⑦⑧)。これは、「政策的・実践的な党内対立軸」を形成した。

相田が焦点をあてるのは、第二の対立軸である。〈マルクス主義の「生産の社会化」論が、党内になお根強く残る南ドイツ派を中心とした「分権主義」派の抵抗を理論的に「圧殺」するための「集権主義」派の「集権化のためのイデオロギー」として利用され、そのように機能した〉(同)。

この主張の一番の問題点は、「生産の社会化」(「資本の集中」)＝経済的「集権主義」と政治的「集権主義」との関連をベーベルらがどう捉え、後者を正当化したのかということが説明されていないことである。後にSPD内には、小国を小経営になぞらえ、大国による小国の併合を「進歩的」とする主張(レーニンはこのことを「ストルーヴェ主義」と呼んだ)が生まれたが、ベーベルもそのような考えをもっていてというのだろうか。

ii) 理論と実践

改めて「エルフルと減速」を確認しておこう。

エルフルと綱領の理論的部分は、一言でいうならば、社会主義の必然性をマルクス主義的に説明したものである。それは、恐慌＝「破局」の到来という希望や、得票数の増加・組織の拡大による統治転換という期待と結びついていた。しかし、社会主義の内容や、その実現方法・形態については明確でなく、「解説」等に委ねられていたのであった。

他方、綱領の実践的部分においては、エンゲルスが主張した〈全政治権力を人民代表機関の手に集中せよという要求〉は取り入れられず、もっぱら〈他の文化国ではブルジョアジー自身によってすでに実現済みとなっている諸要求〉(エンゲルス)、すなわち、民主的・改良的諸要求が列記されている。

党活動もまた、選挙に向けた煽動と帝国議会内での宣伝が中心であり、それを、いわゆる日常的活動が補完していた。

これら諸要求・諸活動がマルクス主義的「究極目標」によって正当化される構造、これが「エルフルト原則」に他ならない。前者が後者に到達する過程の探究をおこたるならば、SPDは二元的・二重人格の性格を避けられないであろう。すなわち、言葉上の社会主義、行動上の改良主義として骨格化される。

そればかりではない。しばしば忘れられることであるが、「エルフルト原則」は、マルクス主義よりも「左」を自認するアナキズム・ブランキ主義等と自らを区別するものであった(実際に、エルフルト党大会では「青年派」が除名された)。アナキストはマルクス主義を「宿命論」と批判していたし、戦術的には議会主義を否定してゼネストによる決起を至上のものと主張していたから、この面では、「エルフルト原則」(マルクス主義)は、合法主義・待機主義を正当化する機能をはたすことになる。

このようにして綱領の原則的部分は理論一般(言葉上)の問題に解消され、戦術上の統一が党の統合の基礎となったことが、「エルフルト原則」の特徴である。

SPDの二元的性格（理論と実践の乖離）を右から正そうとしたのがベルンシュタイン出会った。ベルンシュタイン論争に際してベーベルら党主流がマルクス主義（「エルフルト原則」）を防衛した理由については、第2帝制の構造、すなわち、SPDが「国家の敵」として「隔離」されていたことの指摘が多い。

確かに、民主的制度が整備されている国や、逆に民主的制度がまったく存在しない国では、「エルフルト原則」は生まれなかったであろう。それらの国々では、マルクス主義はドイツとは異なる形で受容された。「エルフルト原則」は、第2帝制における経済と政治との二重構造への対応物ともいえる。

支持者は増加しても政治的無力性は変わらない存在としてのSPDが大衆政党たらしめたとき、その結束を維持するために確固たるイデオロギー（マルクス主義）を必要としたことは想像に難くない。何よりもマルクス主義は、プロレタリアートのための思想・理論であり、ブルジョア自由主義とはっきり一線を画するものであった。

SPDの対自由主義関係は二重である。SPDは党外においてはブルジョアしよとうを徹底して批判し、また、最大の宣伝・煽動の場である帝国議会では「原則的拒否」の態度を継続した。この態度を支えたのが「階級対立激化」論と深く結びついたマルクス主義的「階級国家」論であり、この理論は、残存したラサールの国家間を一掃する役割をはたす。しかしながら、ゴータ綱領に示された「自由な（人民）国家」論は未克服だったと思われる（エルフルト綱領にはいわゆる権力問題に関する記述がない）。¹⁰⁰

党内的には、「エルフルト原則」は、流入する自由主義的要素を包摂する機能をはたした。原則を逸脱する政府との露骨な妥協やブルジョア諸党との合同等の主張をしない限り、それは許容されたからである。その際、綱領に社会主義を実現する方法・形態についての記述がないことは、好都合であった。「統合イデオロギー」（マティアス）というならば、まさしく「エルフルト原則」こそそうだったと思う。

また、議会における急進的・反国家的活動歴が、ベーベルらの権威の源だったことを忘れてはならない。マルクス主義の「修正」を認めるならば、SPDと国家との緊張関係は解体し、みずからの権威・地位は保持できなくなる、とベーベルは判断した。「エルフルト原則」の人格化がベーベルである、といっても過言ではない。「[ベーベルの] 教条的な思考様式」は〈彼の見事な実践とは…まったく矛盾して〉いる（アドラー宛のベルンシュタインの手紙）。ベーベルの政治的手腕によって、SPDの統一は保たれた。

なぜベルンシュタインはSPDから出ていかなかったのか？ SPD以外に民主的改良的活動を行う場がなかったからである。社会民主主義者が「隔離」された存在であった、とは、このような環境を指す。この事情は、アカデミズムの世界も例外ではなかった。社会民主主義者は、大学内での地位を得

¹⁰⁰ ラサールは次のように述べていた。〈国家は、個人を一つの倫理的全体に統一したものであり、…国家は人類を自由へと教化し、たかめるものである〉（1862年『労働者綱領』）。また、1863年『公開答状』では次のように説いている。「賃金鉄則」の下では労働者の賃上げは不可能である、だから労働者は自らが「企業家」になることによって解放されるのであり、そのためには国家の援助が必要である、と。

ることはできなかったのである。この環境が、SPDがヘーゲルに弱かったこと、カウツキー、パルヴス、ローザ、ヒルファードィング等の理論家をいわば“輸入”したことなどと無関係とは言えないであろう。

〈見かけだけ急進的なイデオロギーに執着することは、帝国（カイザーライヒ）の憲法秩序や国家権力並びに指導的社会層の党〔SPD〕にたいする態度が原因となって、どうしても免れることができないものとして引き起こされたのであるが、他方、それとは逆に、革命的きまり文句の方は、抑圧的な措置やブルジョア層の非妥協性を外見的に正当化させることになった〉（シュタインベルク前掲書）。

〈1890年から1914年までの社会民主党の歴史は、理論一般からの解放の歴史である〉（同）。

このような結果をもたらした最大の要因は、SPDないにおける労働組合勢力の伸張であった。例えば、帝国議会の党議員団に占める労働組合出身者の割合は、1893年に11.6%、1898年に21.4%、1903年に23.5%、1907年に29.5%で、1912年には3分の1に達している。

「組合中立」論は、はじめは鎮圧法の適用を回避する擬態であったが、鎮圧法廃止後に組合指導者となった連中（レギーンら）は、「中立」を実際にあるべき状態と信じ、SPDに対抗して労働運動の主導権を握るべき存在として労働組合を位置づけていた。かれらは、労働組合員は「大変動」を期待せず平穏な発展を望んでいると主張し、ストはもとより、集会・煽動・デモは無力で組織だけが力であると説く。さらには、労働組合の利益を代表するせいとうがSPD以外にも誕生すれば、乗り換えてもいいとまで公言するに至った。

このような指導下で活動する組合員に、理論への関心が生まれるはずもない。貸出図書についての資料は、大衆文学の占める割合が漸次的に増加したことを示している。しかも、図書館を利用した労働者は、ほんのわずかにすぎなかった。ほとんどの組合員は、改良主義的な日常活動に強く馴化されていたといえよう。

一般党員が理論に無関心であったことについては、SPDの指導者にも責任がある。指導者たちはマルクス、エンゲルスの著作を読むように奨励しなかったし、また、読むような条件も作らなかった（主要な文献が文庫化されている現在とは大違い）。

さらに指導者たちは、マルクス主義（社会主義）は「科学」と教えた。しかしながら、科学を学ぶための知的訓練を受けた党員は少なかったはずである。指導者たちの教えは一般党員を理論から遠ざけ、社会主義についての観念を一層あいまいにする役割をはたしたと思う。それ故、一般党員にとってベルンシュタイン論争は一種の科学論争、例えば、量子論の確率論的性格をめぐるハイゼンベルクとアインシュタインの論争のようなものだったのかもしれない。どちらの主張が正しいにしても、現実の生活世界に変化はない。

ヴォルトマン（1871～1907年、修正主義者）はカウツキー宛の手紙（1899年9月27日付）で、ある大衆集会のついて次のように伝えている。

〈[ベルンシュタインに対する] 一反対者が、集会の大半の賛同を得ながら、これまでにいつも「教え込まれ説教され」できた社会主義の機械的な自動的建設や機械的な必然性を説明していました。こ

の学説がだめになれば、人々はもうどうにもならないでしょう)。

党内大衆の結集軸のこのような理論水準を知っていたが故に、ベーベルらは、ベルンシュタインの「修正」が党内に理論的カオスをもたらすことを恐れたのであった。ベルンシュタインの試みが失敗した理由、ベルンシュタイン主義が党内で確たる地歩を固めえなかった原因は、「エルフルト原則」が第2帝制にいわば強制されたものであることを、ベルンシュタインが見抜けなかった点にある。労働者の地位を「市民」に引き上げ、民主主義の拡大から社会主義へという理論的展望も、自由主義者との連合という実践展望もリアリティがなかった。

理論を軽視するもう一つの勢力、すなわち実践主義者・官僚の増加についてはすべに述べた。かれらは理論と実践を分離し、後者の成果にのみ価値を認めたのであった。

フランクは、カウツキー宛の手紙(1904年10月22日付)の中で、次のように書いている。

〈社会主義的な科学と活動との分裂は非常に深刻になってきていますし、また、数年もたたないうちにマルクス主義理論は、労働運動のなかにではなく、労働運動と並行して存在しているのが見られるようになる危険性があります〉。

フランクの危惧は、1906年以降、現実のものとなった。

理論の地位がどれほど低下したかは、1910年発行の『ヴァーレ [本当の] ・ヤコブ』紙のなかの「理論と実践」というタイトルのついた3コマ・マンガが示している。[次ページ]

〈最初の絵では、巨大な怪獣の形をした資本主義が、マルクス主義や修正主義の理論家たちによって攻撃されている。ローザ・ルクセンブルク、カウツキー、メーリングといった急進派は、巨大な羽ペンで怪獣ののどもとに突きたてようとしているが、他方、ベルンシュタインのほうは、その支持者たちといっしょに、用心深く背後から怪獣に近づいている。うしろのほうでは労働者が見物している。その絵には次のような題目がかかっている。「修正主義者——あわてるな、ゆっくり行こうぜ！ 俺たちはまず、あいつのしっぽをほんの少しちょんぎってやろう。それから、だんだんとあいつのはらわたを全部引っ張り出してやろう——あいつがそれにちっとも気づかないように。急進主義者——俺たちは、大胆に、団結した力で、俺たちの必殺の槍をあいつののどもとに突きたてよう——そうすりゃ、あいつは自然必然的に、すぐにくたばってしまうさ」。二番目の絵では、怪獣が突然に向きを変え、急進主義者の槍はこなごなに飛び散り、修正主義者はぎょっとしてあとずさりしている。三番目の絵では、労働者が現場に近づいていて、ありとあらゆる道具を使って怪獣を殺してしまっているが、他方、理論家たちは、うしろのほうに立っている。こうした風刺漫画に含まれている内容は、理論を党の実践のための基準とすることにたいする拒絶にほかならない〉(シュタインベルク前掲書)。¹⁰¹

このような状況に陥ったSPDを、はたしてマルクス主義政党と呼べるであろうか？

¹⁰¹ 『ヴァーレ・ヤコブ』(「隔週刊」とする文献と「旬刊」とする文献がある)は1884年の発刊以来、SPDの機関紙紙のなかで最大の発行部数を誇っていた。鎮圧法末期において、『ゾツィアルデモクラート』が1万1000、『ノイエ・ツァイト』が2500に対し10万超。1910年には、『フォルヴェルツ』が12万2000、『ノイエ・ツァイト』が9800に対し28万6000。



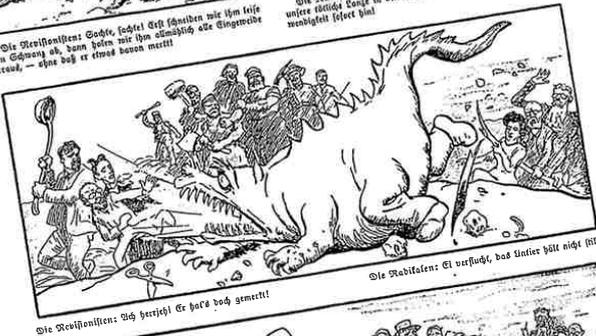
e

⊗ Theorie und Praxis. ⊗



Die Revolutionären: Wacht! Seht! Schauten wir ihm leise den Schwanz ab, dann wären wir ihm schließlich alle Eingetrocknet, — ohne daß er etwas davon merkt!

Die Sozialisten: Stochen wir ihm ruhig und mit breiter Front unsere ständige Lauge in den Rücken — dann ist er mit Naturkost versorgt!



Die Sozialisten: Er versucht, das Hintere nicht zu tun!

Die Revolutionären: Ich harisch! Er hara doch gemerkt!



Die Arbeiter: So ein Stein muß man eben von allen Seiten zugleich packen! Das ist die alte richtige Methode.

→ Vergebliche Mühe. ←

iii) カウツキーとローザ

SPDがマルクス主義政党と見られたことにおいて、カウツキーの役割が大きかったことに異論はあるまい。カウツキーは、「社会民主主義の党著作執筆者」（『自伝』）であった。彼のその地位は、理論機関誌『ノイエ・ツァイト』（1883年）と不可分である。カウツキーは、新雑誌への抱負を次のように述べていた。

〈我々は、あらゆる科学や芸術、さらに大衆に関心のあるすべてのことを扱いたいと考えています。ただ日常的政治のことは除外するつもりです。…我々は知識を広め、労働者を啓蒙したいと考えています〉（1882年11月、エンゲルス宛の手紙）。

晩年（1935年）のカウツキーは、次のように述懐している。

〈私の終生の仕事が1883年に確定した。すなわち、マルクスの研究と思考とが生んだ科学的成果を宣伝し、解説し、また私の力の及ぶ限りでは、それを敷衍するという仕事である〉（『マルクス主義の黎明期から』）。

『ノイエ・ツァイト』の影響力（特に鎮圧法廃止後）は、ドイツ国内以上に国外（第2インター）で大きかったと思われる。例えば、ヒルファーディングは1902年に経済論文を同誌に送り、自分に経済学研究に携わる能力があるかどうかをカウツキーに問うている。以後ヒルファーディングは、同誌への寄稿者となった。また、〈東南ヨーロッパ各党・各派の人々はカウツキーの『ディ・ノイエ・ツァイト』に自分達の主張が掲載されることに大きな意義を見いだしていた〉（西川正雄前掲書）。レーニンも同誌に目を通していたことは周知の通り。¹⁰²

「党著作執筆者」としてのカウツキーの地位は、ベーベルのバック・アップに依存している。エルフルト綱領がカウツキー案で採択されたのも（エンゲルスおよび）ベーベルの支持があったからであり、ベーベルの指令に基づきその『解説』を出版した。これは、カウツキーの理論が党リーダーに承認されたことを意味する。以後カウツキーは、「ベーベルの理論的運転手」としての役割をはたす。ベーベルの権威が失墜してからは、「御用理論家」になった。

もしSPDが「啓蒙の党」「宣伝の党」とどまっていたならば、カウツキーは「背教者」と呼ばれることもなかったかもしれない。しかし、SPDは大衆政党として発展した。カウツキーも、SPDの性格変化を認識していた。1897年のプロイセン邦議会選挙参加をめぐる論争において、カウツキーは、それまでの「アジテーターの見地」とは異なる〈政治家の見地から選挙戦術をとなえる論議が生じてきた〉と述べ、選挙に参加すべしとの論陣をはっている。このようにSPDの性格が変化したにもかかわらず、カウツキーは自らの活動を理論家に限定した。カウツキーが理論家であったという事実一般を言っているのではない。カウツキーは、1919年までドイツ国家の市民権を取得しなかった。つまり、積極的な政治活動を自ら拒否していたのである。1893年にドイツ国民になるよう提案された際にカウツキーは、議会では「自らの学問的能力」を失うだけだと拒否理由を述べた。もちろんカウツキーは、正式に党指導部にも属さなかった。彼は理論家（「知識人」）として、いわば外在的に党活動に関与したのである。このような立ち位置がカウツキー理論を規定したというのが、私の考えである。¹⁰³

〈カウツキーの『ノイエ・ツァイト』の役割についての考え方と、大衆運動への個人的・積極的関与に対する嫌悪感とはともに、マルクス主義の根本問題の一つ、すなわち理論と実践との関係に対する彼の態度を、ある程度明らかにしている。『ノイエ・ツァイト』の役割についての彼の考え方は、

¹⁰² 『ノイエ・ツァイト』の編集者としての報酬は、カウツキーの収入源であった。また、同誌への寄稿は、党内の文筆家にとっても“メシの種”だった。

¹⁰³ カウツキーの理論（「科学」）と実践（党）との関係の理解は、宇野弘蔵に近い。

理論と実践との緊密な結合を前提していた。しかし、他方では、実践への主体的参加に対する彼の態度は、彼がこの二つを密接不可分なものとは考えていなかったことを示している（スティーンソン前掲書）。

ベルンシュタインを批判した『駁論』の出版直後、カウツキーは論文「アカデミーカー [大学教育を受けた人間] とプロレタリア」で、社会主義的知識人の役割を論じた。その要旨は次の二点である。①〈プロレタリアートであるという階級的條件は、社会主義的心情を生みだすことはあっても、社会主義的知識を生みだすことはない〉。②理論がなければイギリス風の労働組合主義に陥る。社会主義的知識人の役割は、プロレタリアに理論を与えることである。¹⁰⁴

ベルンシュタインの理論は労働者を間違った方向に導くと判断したが故に、カウツキーはベルンシュタインを批判した。〈カウツキーは、自分が唐のために苦勞して築いてきた理論的枠組みを擁護することが運動の存続のためにきわめて重要である、と確信していたのである〉（スティーンソン前掲書）。

〈党の公式の理論は、…労働者に自信と勝利の確実性とを与えるものだった。こうして、理論は、カウツキーにとっては、実践となったのである。すなわち、プロレタリアートの独自性を強調することによって、労働者にドイツの状況の現実を教え込むことが、党の戦術の一つとされたのである〉（同）。

以上のようなカウツキーの姿勢は、イデオロギー的には、理論家＝指導者、労働者（大衆）＝被指導者という構図の固定化であり、現実的には、理論（論争）を理論形の世界に閉じ込めることになった。その一例が、『権力への道』第2版の出版をめぐるトラブルである。カウツキーは、党指導部との密室の交渉で“解決”したのであった。「社会主義的な科学と活動との分裂」（フランク）に、カウツキーは多くの責任を負っている。¹⁰⁵

これに対してローザは、理論を大衆のものとする熱望を貫いた。ローザは、『社会改良か、革命か?』で次のように書いている。

〈理論的認識がたんに党内のひとにぎりの「学者」の特権であるかぎり、それは常に誤りをおかす危険にさらされている。後半な労働者大衆自身が科学的社会主義という、鋭利な信頼しうる武器を手にしたときはじめて、すべてのプチブル的気まぐれ、すべての日和見主義的潮流は砂に吸われて消失してしまうであろう。かくて運動もまた確固たる基盤の上にきずかれる。「大衆がそれをする」〉。¹⁰⁶

ローザもまた、「共和制」を主張した論文の発表を妨害された。しかも、妨害したのはカウツキーであった。しかしローザは、以前のカウツキーのような密室での“解決”を望まず、場をかえて論文を発表する。大衆の前での議論を重視したからに他ならない。

¹⁰⁴ 同様の主張は、レーニンが『何をなすべきか』K2,§2で引用したカウツキー論文（タイトル不明）でも繰り返されている。

¹⁰⁵ 〈SPDを大きく強くしたのは、政治家よりもアジテーターである〉というカウツキーの主張にも、政治に対する理論の優位が感じられる。

¹⁰⁶ このくだりは第2版（1908年）で削除されている。日和見主義が予想外に根強かったことが理由か？

ローザは、「カール・マルクス」と題する論文を二度発表している——『フォアヴェルツ』1903年3月14日号と『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』1913年3月14日号。これらは、マルクスの死後20年と30年を記念したものであり、マルクスの功績を明らかにしたものであった。他方ローザは、上の『フォアヴェルツ』同号に、「マルクス主義における停滞と前進」と題する論文も寄稿している。そこでローザは、次のように述べた。

〈『資本論』の最終巻とエンゲルスの晩年の著作が刊行されて以来、たしかにマルクスの理論の見事な普及と解説は行われているが、しかし基本的に見て、私たちは理論的にはこの二人の科学的社会主義の創始者が残したものとまったく同じ所にとどまっている〉。

〈マルクスの場合に、多少とも完成された学説の体系として語ることは、経済学の分野だけだ。一方、彼の学説の中で最も貴重なものである唯物弁証法的歴史観に関して言えば、それは研究方法としてしかあらわされていないが、まったく新しい世界への展望をゆるし、自律的活動への限らない見通しを開いて、未開拓の領域への大胆な飛躍に向けて精神を活気づける指導的で天才的な思想である。ところがこの領域でも、ごく僅かのいくつかの業績を除けば、マルクスの遺産、この素晴らしい武器は利用されずに放置され、史的唯物論の理論でさえもが、その創始者の手から渡されたままで、今日磨きをかけることなく図式化されている〉。

要するにローザは、マルクスの思想的遺産を普及・解説するだけでは「マルクス主義の停滞」をもたらすと主張しており、これは内容的にカウツキーを批判するものとなっている。

ローザも、カウツキーと理由は違ったとはいえ、文筆家であることを余儀なくされた。その客観的要因は、すでに述べたように、SPDから疎外され公的な地位につけなかったことである。主観的要因については、ネトル前掲書の記述が参考になると思う。すなわち、SDKP（リトヴァと合同する前のポーランド王国社会民主党）は他の社会主義政党と性格を異にする「ピア・グループ」（仲間集団）であり、組織化ではなく、第2インター世界における思想的・理論的影響力の拡大に重きをおいた。

〈ある段階で、彼女〔ローザ〕には組織上の事務にかかわらせない、また正式の会議とか大会にはなんでもあれ関与させない、という公式の党の決定がなされた〉。

このような環境で活動するローザに、“党派的囲い込み”という発想はない。スパルタクス・ブントもそうであったとし、ネトルは次のように言う。

〈その基本的な性格づけは圧力団体（プレッシャー・グループ）としてのものであって、一つないし複数のもっと大きい政党の存在を前提しなければ機能をもちえず、組織上は寄生物にすぎないが知性では卓越しているというものであった〉。

〈彼〔カウツキー〕は90年代に特定の教条主義的立場を放棄するつもりになっていたことを確認できるが、その覚悟は、ベルンシュタインを起源とする徹底的な修正主義に直面して消滅し、彼は、世紀の変わり月以後マルクス主義の予言者〔ママ〕の立場から擁護者の立場へ追いやられ、教義の不可侵性のために戦うようになった〉（シュタインベルク前掲書）。

またシュタインベルクは、カウツキーの教条主義の原因の一つとして、〈マルクス主義をその俗流マルクス主義的な姿を越えていっそう発展させる能力がカウツキーには哲学的にも経済学的にも欠け

ていた) (同) をあげている。

これが首肯できると思われる例を一つあげておく。カウツキーはマルクスの1857~58年草稿(いわゆる『グルントリッセ』)を通読したが、公表したのは「序説」と「バスティア」だけであった。カウツキーは、草稿の意義を理解できなかったのであろう。

カウツキーが擁護せんとした教義は、「マルクス主義の二大原則」——すなわち、①唯物史観、②プロレタリアートがきたるべき社会発展の推進力であるという確信であった。カウツキーは、①のみを主張するいわゆる経済決定論に対しては②を強調したが、それとて、〈プロレタリアートの根本的な経済勢力とは、経済的發展によって自動的に生み出されるものなのである〉(『駁論』)という内容でしかない。また、②の強調も相対的である。後にカウツキーは、ロシアの経済発展段階では社会主義は不可能であるという観点からポリシェヴィキを批判する。

カウツキーは革命を「ひとつの不可抗的な出来事」(『自伝』)と考えていた。革命(社会主義)の自然的必然性——これが「正統派」マルクス主義の真髄であるであるといつてよい。それはたしかに、労働者の獲得に威力を発揮した(労働者の信仰箇条となったのだから)。

〈ずっと前からマルクス主義の理論が私をひどくひきつけてきただけに、それだけ社会政策は私にはどうでもいいものだったのであって、私は、ただ義務として、それにかかわりをもってきただけなのです〉(1897年8月21日付、ベルンシュタイン宛のカウツキーの手紙)。

こう述べていたカウツキーも、SPDの大衆政党化に伴い、自らの理論に状況的要素を加えていく。その際カウツキーは、「正統派」マルクス主義の理論家であったがために、どのように未来を切り拓いていくのかという観点ではなく、将来はどうなっていくのかという観点から現状を分析することになる。

先に(脚注104)、『何をなすべきか』でのカウツキー引用に言及した。レーニンは、どんな自然発生性への拝跪もブルジョア・イデオロギーに行き着くという文脈でカウツキーを引用したのであったが、カウツキーは、自然発生性への拝跪を正当化する理論を作りだしていったのである。その典型が、「消耗戦略」論であった。

カウツキーは、「消耗戦略」と「打倒戦略」とを形而上学的に区別し、現状では後者を議論すべきではないとして、それまでの活動・戦術を継続すべきだと説いた。この理論は、「消耗戦略」から「打倒戦略」への転換点を客観的・科学的に認識しようという立場を前提としている。だがこれは、社会から遊離した立場、いうなれば“神”の立場ではないのか。このような歴史観を、ローザやパンネクックは批判したのである。事実、実際にドイツで革命が勃発した時、カウツキーは何の対応もとれなかった。

カウツキーは、左右の「焦燥」を排して「中央派」を自称した。しかしこれは、「隔離」された静的なSPD世界のなかでの自己弁護でしかない。〈組織された孤立なくしては、理論家としてのカウツキーの重要性はおしまいだっただろう〉(ネトル前掲書)。

ベルンシュタインがブルジョア社会に同調することで「隔離」の壁の消失を目論んだとすれば、ローザはその壁をマッセンストで爆破しようとした。

マルクス主義をプロレタリアート解放の思想と定義するなら、ローザは真のマルクス主義者であった。また、既存のマルクス主義を内側から絶えず破りながら思想を形成した稀有なマルクス主義者であった。なかでも特筆すべきは、第1次ロシア革命の意義の普遍化である。それによってローザは、マルクス、エンゲルスとは異なる20世紀の（「西方」での）革命の問題をマルクス主義の課題として提出した（パルヴスの先駆的業績があったとしても）。

さらにローザは、マルクス主義者に相応しく、徹底したインターナショナリストであった（だからして、ロシア革命の意義の普遍化も可能になったと思う）。『資本蓄積論』（党内ではほとんど反響がなかった）の内容に触れることはできないが、植民地人民の闘争の重要性を指摘した最初のマルクス主義者であったといっても過言ではない。ポーランド（人）の解放を国際的諸関係のなかで追求していたことと無関係ではなからう。

ローザの限界について繰り返すのはやめておく。労働者大衆の自然発生性に対するローザの期待は、指導部を批判するなかでいっそう強められた。それらの論文を読むと、時として、権威・権力に対する嫌悪さえ感じる。組織された労働者は、ローザの期待に応えなかった。あまりにも強く改良闘争と合体しており、あまりにも深く上からの指令にならされていたからである。

ローザが最も期待した「広範な周辺部の革命的プロレタリア層」（『マッセスト、党および労働組合』）は、ドイツ革命に際しどう動いたか？ この時、ローザのマルクス主義者としての成長は、暴力的に断たれた。それは、労働者大衆の自然発生性と政党との関係を探求する道も断たれたことを意味する。

かくて、ドイツにおけるマルクス主義の普及というテーマに則していえば、ローザは、修正主義および「正統派」マルクス主義を根底から批判し、それに代わるマルクス主義を創り出す途上で倒れた人物として記録される。

【おわりに】

本稿を執筆中、かつての我々の主張を思い起こすことがあった。カウツキー主義とスターリン主義の類似性が原因であろう。スターリン主義は、第2インター（メンシェヴィキ）への回帰という側面がある。

マルクス主義を総括するのはいいが、理論（家）を、そのおかれた環境を抜きにして、異端審問官のごとく裁くやり方は、得るところが少ないことを付記しておきたい。

マルクスとエンゲルスとの差異を強調する人々は、しばしば、エンゲルス→レーニン→スターリンという系譜を説く。しかし、エンゲルス→レーニンという関係には、プレハーノフ、カウツキーという媒介項があるというのが私の考えである。

プレハーノフ、カウツキー→レーニンを扱うのがマルクス主義普及史のロシア篇であるとすれば、本稿はその準備作業としての位置をもつ。